

キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書 1

— 普天間古集落遺跡 —

平成 27 (2015) 年 3 月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、沖縄県立埋蔵文化財センターが平成20年度に実施した普天間古集落遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

本遺跡は、宜野湾市字普天間に所在し、普天満宮、普天満山神宮寺の西側に広がる遺跡です。旧普天間集落は第二次世界大戦前には北部と南部を結ぶ交通の要所であるとともに多くの公共施設が置かれ、また、各地から普天満宮及び普天満山神宮寺への参拝者が訪れることから賑わいを見せていました。

現在は、第二次世界大戦中に米軍に接収され、戦後はキャンプ瑞慶覧内の米軍住宅として使用されていました。

今回の調査は、米軍の海軍病院建設に伴う記録保存調査として実施しました。

調査では、縄文時代、グスク時代、近世～近代の3時期に及ぶことがわかり、グスク時代の掘立柱建物跡、近世～近代の建物跡、溝、道跡等の遺構や沖縄産陶器を中心とした様々な遺物も確認しました。

本報告書が、学術研究、地域の文化・歴史学習、文化財保護の普及等の一助になれば幸いです。

最後となりましたが、現地調査及び資料整理にあたり、多大な御協力を賜りました宜野湾市教育委員会をはじめとした関係機関並びに関係各位の皆様に対し、厚く御礼申し上げます。

平成27（2015）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 下地 英輝



卷頭図版1 遺構完掘状況(I地区)



卷頭図版2 遺構完掘状況(Ⅱ地区)



巻頭図版3 I地区調査状況 上:区画7 SE5断割り(西から) 下:区画7 SY1床面半裁状況(北西から)



巻頭図版4 II地区調査状況 上:SI1完掘状況(南から) 下:区画13 石敷遺構1・2検出状況(東から)



巻頭図版5 I地区出土遺物 上:縄文時代の遺構出土遺物 下:近世～近代の遺構出土遺物



巻頭図版6 II地区出土遺物 上:縄文時代の遺構出土遺物 下:近世～近代の遺構出土遺物

例 言

- 1 本報告書は、沖縄県宜野湾市字普天間（キャンプ瑞慶覧内）に所在する普天間古集落遺跡における米軍の海軍病院建設に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2 本調査は、沖縄防衛局からの委託を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが平成20年度に現地調査、平成20～26年度に資料整理を実施した。
- 3 本報告は平成20年度調査分の約12,500㎡について行う。
- 4 地図データは、国土地理院の電子国土Webシステムから配信されたものを使用している。
- 5 航空写真は、宜野湾市教育委員会から提供を受けたものに加筆し、使用している。
- 6 本報告で使用している座標は、世界測地系の第XV系である。
- 7 土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修「新版標準土色帖」を使用した。
- 8 本書の編集は、当センター職員の協力を得て、金城貴子、具志堅清大が行った。執筆は次の通りである。
知念隆博 第1章、第2章第2節、第3章第1～3節、第4章第1節・同第2節第1～2項（Ⅱ地区）・同第3節第1～2項（Ⅱ地区）
金城貴子 第2章第1節、第3章第2～3節、第4章第2節第3項・同第3節第1～2項（Ⅰ地区）・同第3項、同第4節、第6章
具志堅清大 第4章第2節第1～2項（Ⅰ地区）・同第5節、第6章
パリノ・サーヴェイ(株) 第5章
- 9 本書に掲載された写真撮影は、現地調査状況を西銘章、新垣力、知念隆博が行い、遺物を矢舟章浩、伊佐えりなが行った。
- 10 現地調査で得られた遺物、実測図及び写真等の記録は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

目次

序

巻頭図版

例言

第1章 調査に至る経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 遺跡の立地と地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査経過	7
第1節 調査の方法	7
第2節 発掘調査	9
第3節 資料整理	10
第4章 調査の成果	11
第1節 基本層序	11
第2節 縄文時代・グスク時代	21
第1項 縄文時代の遺構及び遺構内出土遺物	21
第2項 グスク時代の遺構及び遺構内出土遺物	36
第3項 包含層出土遺物	41
第3節 近世～近代	48
第1項 遺構	48
第2項 遺構内出土遺物	85
第3項 包含層出土遺物	180
第4節 表土・攪乱層出土遺物	199
第5節 自然遺物	215
第5章 自然科学分析	228
第6章 総括	293

引用・参考文献

報告書抄録

目 次

第1図	沖縄本島の位置	5	第44図	区画11の遺構1(Ⅱ地区)	71
第2図	周辺の遺跡	6	第45図	区画11の遺構2(Ⅱ地区)	72
第3図	グリッド配置図	8	第46図	区画13の遺構1(Ⅱ地区)	74
第4図	試掘箇所及び試掘柱状図	12	第47図	区画13の遺構2(Ⅱ地区)	75
第5図	グリッド設定及びセクション図化箇所1	13	第48図	区画15の遺構1(Ⅱ地区)	77
第6図	北・東壁(Ⅰ地区)	14	第49図	区画15の遺構2(Ⅱ地区)	78
第7図	グリッド設定及びセクション図化箇所2	17	第50図	区画16の遺構1(Ⅱ地区)	78
第8図	西・北壁(Ⅱ地区)	18	第51図	区画16の遺構2(Ⅱ地区)	79
第9図	縄文時代の遺構位置図(Ⅰ地区)	21	第52図	区画17の遺構1(Ⅱ地区)	79
第10図	縄文時代の遺構1(Ⅰ地区)	22	第53図	区画17の遺構2(Ⅱ地区)	80
第11図	縄文時代の遺構2(Ⅰ地区)	23	第54図	道1の遺構1(Ⅰ地区)	81
第12図	縄文時代の遺構3(Ⅰ地区)	24	第55図	道1の遺構2(Ⅰ地区)	82
第13図	縄文時代の遺構4(Ⅰ地区)	25	第56図	道1の遺構(Ⅱ地区)	83
第14図	縄文 出土遺物1(Ⅰ地区)	27	第57図	道2の遺構(Ⅱ地区)	84
第15図	縄文 出土遺物2(Ⅰ地区)	28	第58図	区画1 出土遺物1(Ⅰ地区)	87
第16図	縄文時代の遺構位置図(Ⅱ地区)	30	第59図	区画1 出土遺物2(Ⅰ地区)	88
第17図	縄文時代の遺構(Ⅱ地区)	31	第60図	区画1 出土遺物3(Ⅰ地区)	89
第18図	縄文 出土遺物(Ⅱ地区)	35	第61図	区画2 出土遺物1(Ⅰ地区)	97
第19図	グスク時代の遺構位置図(Ⅰ地区)	36	第62図	区画2 出土遺物2(Ⅰ地区)	98
第20図	グスク時代の遺構1(Ⅰ地区)	38	第63図	区画2 出土遺物3(Ⅰ地区)	99
第21図	グスク時代の遺構2(Ⅰ地区)	39	第64図	区画2 出土遺物4(Ⅰ地区)	100
第22図	包含層(Ⅲ層)出土遺物(Ⅰ地区)	43	第65図	区画2 出土遺物5(Ⅰ地区)	101
第23図	包含層(Ⅲ層)出土遺物(Ⅱ地区)	46	第66図	区画3 出土遺物1(Ⅰ地区)	111
第24図	区画配置図	48	第67図	区画3 出土遺物2(Ⅰ地区)	112
第25図	区画1の遺構1(Ⅰ地区)	49	第68図	区画4 出土遺物1(Ⅰ地区)	121
第26図	区画1の遺構2(Ⅰ地区)	50	第69図	区画4 出土遺物2(Ⅰ地区)	122
第27図	区画2の遺構1(Ⅰ地区)	51	第70図	区画4 出土遺物3(Ⅰ地区)	123
第28図	区画2の遺構2(Ⅰ地区)	52	第71図	区画4 出土遺物4(Ⅰ地区)	124
第29図	区画2の遺構3(Ⅰ地区)	53	第72図	区画4 出土遺物5(Ⅰ地区)	125
第30図	区画2の遺構4(Ⅰ地区)	55	第73図	区画4 出土遺物6(Ⅰ地区)	126
第31図	区画3の遺構(Ⅰ地区)	56	第74図	区画5 出土遺物(Ⅰ地区)	136
第32図	区画4の遺構1(Ⅰ地区)	57	第75図	区画6 出土遺物1(Ⅰ地区)	140
第33図	区画4の遺構2(Ⅰ地区)	58	第76図	区画6 出土遺物2(Ⅰ地区)	141
第34図	区画5の遺構(Ⅰ地区)	59	第77図	区画7 出土遺物1(Ⅰ地区)	145
第35図	区画6の遺構1(Ⅰ地区)	60	第78図	区画7 出土遺物2(Ⅰ地区)	146
第36図	区画6の遺構2(Ⅰ地区)	61	第79図	区画8 出土遺物(Ⅰ地区)	150
第37図	区画7の遺構1(Ⅰ地区)	63	第80図	区画9 出土遺物(Ⅰ地区)	152
第38図	区画7の遺構2(Ⅰ地区)	64	第81図	区画10 出土遺物(Ⅱ地区)	155
第39図	区画7の遺構3(Ⅰ地区)	65	第82図	区画11 出土遺物(Ⅱ地区)	158
第40図	区画8の遺構(Ⅰ地区)	67	第83図	区画12 出土遺物(Ⅱ地区)	160
第41図	区画9の遺構(Ⅰ地区)	68	第84図	区画13 出土遺物(Ⅱ地区)	162
第42図	区画10の遺構1(Ⅱ地区)	69	第85図	区画15 出土遺物(Ⅱ地区)	166
第43図	区画10の遺構2(Ⅱ地区)	70	第86図	区画16 出土遺物(Ⅱ地区)	168
			第87図	区画17 出土遺物(Ⅱ地区)	170
			第88図	道1 出土遺物(Ⅰ地区)	173

第89図	道1 出土遺物1(Ⅱ地区)……………	176	第111図	焼土試料の交流磁場消磁前後の 残留磁化方向……………	249
第90図	道1 出土遺物2(Ⅱ地区)……………	177	第112図	計16焼土試料の交流磁場消磁後の平均 残留磁化方向(補正後:●)と近畿地方に おける標準古地磁気曲線との比較……………	250
第91図	道2 出土遺物(Ⅱ地区)……………	179	第113図	加熱実験による各種土壌の帯磁率および 残留磁化強度の変化……………	250
第92図	包含層(Ⅱ層)出土遺物1(Ⅰ地区)……	183	第114図	パイロット試料(1、11)の等温残留磁化 (IRM)獲得曲線……………	251
第93図	包含層(Ⅱ層)出土遺物2(Ⅰ地区)……	184	第115図	胎土の各粒度階における鉱物・ 岩石出現頻度(%) (1)……………	262
第94図	包含層(Ⅱ層)出土遺物1(Ⅱ地区)……	190	第116図	胎土の各粒度階における鉱物・ 岩石出現頻度(%) (2)……………	263
第95図	包含層(Ⅱ層)出土遺物2(Ⅱ地区)……	191	第117図	胎土の各粒度階における鉱物・ 岩石出現頻度(%) (3)……………	264
第96図	包含層(Ⅱ層)出土遺物3(Ⅱ地区)……	192	第118図	胎土の各粒度階における鉱物・ 岩石出現頻度(%) (4)……………	265
第97図	包含層(Ⅱ層)出土遺物4(Ⅱ地区)……	193	第119図	胎土の各粒度階における鉱物・ 岩石出現頻度(%) (5)……………	266
第98図	表土・攪乱 出土遺物(Ⅰ地区)……………	200	第120図	胎土の碎屑物・基質・孔隙の割合……………	267
第99図	表土・攪乱 出土遺物1(Ⅱ地区)……………	206	第121図	胎土中の砂の粒径組成(1)……………	268
第100図	表土・攪乱 出土遺物2(Ⅱ地区)……	207	第122図	胎土中の砂の粒径組成(2)……………	269
第101図	表土・攪乱 出土遺物3(Ⅱ地区)……	208	第123図	胎土化学組成散布図……………	271
第102図	表土・攪乱 出土遺物4(Ⅱ地区)……	209			
第103図	主要珪藻化石群集の層位分布……………	236			
第104図	花粉化石群集の層位分布……………	239			
第105図	植物珪酸体含量……………	240			
第106図	土壌試料の各粒度階における 鉱物・岩石出現頻度(1)……………	245			
第107図	土壌試料の各粒度階における 鉱物・岩石出現頻度(2)……………	246			
第108図	土壌試料の碎屑物・基質・ 孔隙の割合……………	246			
第109図	土壌試料中の砂の粒径組成……………	247			
第110図	パイロット試料(1、6、11、16)の段階交流 磁場消磁の結果(直交プロット)……………	249			

図版目次

巻頭図版1	遺構完掘状況(Ⅰ地区)
巻頭図版2	遺構完掘状況(Ⅱ地区)
巻頭図版3	Ⅰ地区調査状況 上:区画7 SE5断割り(西から) 下:区画7 SY1床面半裁状況(北西から)
巻頭図版4	Ⅱ地区調査状況 上:SI1完掘状況(南から) 下:区画13 石敷遺構1・2検出状況(東から)
巻頭図版5	Ⅰ地区出土遺物 上:縄文時代の遺構出土遺物 下:近世～近代の遺構出土遺物
巻頭図版6	Ⅱ地区出土遺物 上:縄文時代の遺構出土遺物 下:近世～近代の遺構出土遺物

図版1	縄文 出土遺物(Ⅰ地区)……………	29	図版12	区画8の遺構(Ⅰ地区)……………	66
図版2	縄文時代の遺構1(Ⅱ地区)……………	32	図版13	区画11の遺構(Ⅱ地区)……………	73
図版3	縄文時代の遺構2(Ⅱ地区)……………	33	図版14	区画13の遺構(Ⅱ地区)……………	76
図版4	縄文 出土遺物(Ⅱ地区)……………	35	図版15	区画17の遺構(Ⅱ地区)……………	81
図版5	グスク時代の遺構(Ⅰ地区)……………	37	図版16	道1の遺構(Ⅱ地区)……………	84
図版6	包含層(Ⅲ層)出土遺物(Ⅰ地区)……	44	図版17	区画1 出土遺物1(Ⅰ地区)……………	89
図版7	包含層(Ⅲ層)出土遺物(Ⅱ地区)……	47	図版18	区画1 出土遺物2(Ⅰ地区)……………	90
図版8	区画4の遺構(Ⅰ地区)……………	59	図版19	区画1 出土遺物3(Ⅰ地区)……………	91
図版9	区画5の遺構(Ⅰ地区)……………	60	図版20	区画2 出土遺物1(Ⅰ地区)……………	102
図版10	区画6の遺構(Ⅰ地区)……………	62	図版21	区画2 出土遺物2(Ⅰ地区)……………	103
図版11	区画7の遺構(Ⅰ地区)……………	66	図版22	区画2 出土遺物3(Ⅰ地区)……………	104

図版23	区画2 出土遺物4(I地区)……………	105	図版70	表土・攪乱 出土遺物1(I地区)……………	201
図版24	区画2 出土遺物5(I地区)……………	106	図版71	表土・攪乱 出土遺物2(I地区)……………	202
図版25	区画2 出土遺物6(I地区)……………	107	図版72	表土・攪乱 出土遺物1(II地区)……………	210
図版26	区画2 出土遺物7(I地区)……………	108	図版73	表土・攪乱 出土遺物2(II地区)……………	211
図版27	区画3 出土遺物1(I地区)……………	112	図版74	表土・攪乱 出土遺物3(II地区)……………	212
図版28	区画3 出土遺物2(I地区)……………	113	図版75	表土・攪乱 出土遺物4(II地区)……………	213
図版29	区画3 出土遺物3(I地区)……………	114	図版76	表土・攪乱 出土遺物5(II地区)……………	214
図版30	区画4 出土遺物1(I地区)……………	127	図版77	貝類遺体1(巻貝)……………	216
図版31	区画4 出土遺物2(I地区)……………	128	図版78	貝類遺体2(二枚貝)……………	217
図版32	区画4 出土遺物3(I地区)……………	129	図版79	脊椎動物遺体1……………	218
図版33	区画4 出土遺物4(I地区)……………	130	図版80	脊椎動物遺体2……………	219
図版34	区画4 出土遺物5(I地区)……………	131	図版81	脊椎動物遺体3……………	220
図版35	区画4 出土遺物6(I地区)……………	132	図版82	脊椎動物遺体4……………	221
図版36	区画4 出土遺物7(I地区)……………	133	図版83	脊椎動物遺体5……………	222
図版37	区画4 出土遺物8(I地区)……………	134	図版84	脊椎動物遺体6……………	223
図版38	区画5 出土遺物(I地区)……………	137	図版85	脊椎動物遺体7……………	224
図版39	区画6 出土遺物1(I地区)……………	141	図版86	脊椎動物遺体8……………	225
図版40	区画6 出土遺物2(I地区)……………	142	図版87	脊椎動物遺体9……………	226
図版41	区画6 出土遺物3(I地区)……………	143	図版88	脊椎動物遺体10……………	227
図版42	区画7 出土遺物1(I地区)……………	146	図版89	珪藻化石……………	275
図版43	区画7 出土遺物2(I地区)……………	147	図版90	花粉化石・寄生虫卵……………	276
図版44	区画7 出土遺物3 位牌(I地区)……………	148	図版91	植物珪酸体・種実遺体……………	277
図版45	区画8 出土遺物(I地区)……………	151	図版92	土壤薄片(1)……………	278
図版46	区画9 出土遺物1(I地区)……………	152	図版93	土壤薄片(2)……………	279
図版47	区画9 出土遺物2(I地区)……………	153	図版94	焼土薄片……………	280
図版48	区画10 出土遺物1(II地区)……………	156	図版95	胎土薄片(1)……………	281
図版49	区画10 出土遺物2(II地区)……………	157	図版96	胎土薄片(2)……………	282
図版50	区画11 出土遺物1(II地区)……………	159	図版97	胎土電子顕微鏡写真(1)試料番号2……………	283
図版51	区画11 出土遺物2(II地区)……………	160	図版98	胎土電子顕微鏡写真(2)試料番号4……………	284
図版52	区画12 出土遺物(II地区)……………	160	図版99	胎土電子顕微鏡写真(3)試料番号6……………	285
図版53	区画13 出土遺物1(II地区)……………	163	図版100	胎土電子顕微鏡写真(4)試料番号8……………	286
図版54	区画13 出土遺物2(II地区)……………	164	図版101	胎土電子顕微鏡写真(5)試料番号11……………	287
図版55	区画15 出土遺物(II地区)……………	167	図版102	胎土電子顕微鏡写真(6)試料番号13……………	288
図版56	区画16 出土遺物(II地区)……………	169	図版103	胎土電子顕微鏡写真(7)試料番号17……………	289
図版57	区画17 出土遺物(II地区)……………	171	図版104	胎土電子顕微鏡写真(8)試料番号19……………	290
図版58	道1 出土遺物(I地区)……………	174	図版105	胎土電子顕微鏡写真(9)試料番号20……………	291
図版59	道1 出土遺物1(II地区)……………	177	図版106	胎土電子顕微鏡写真(10)試料番号21……………	292
図版60	道1 出土遺物2(II地区)……………	178	図版107	昭和20年撮影航空写真調査箇所重ね図……………	297
図版61	道2 出土遺物(II地区)……………	180			
図版62	包含層(II層)出土遺物1(I地区)……………	185			
図版63	包含層(II層)出土遺物2(I地区)……………	186			
図版64	包含層(II層)出土遺物1(II地区)……………	193			
図版65	包含層(II層)出土遺物2(II地区)……………	194			
図版66	包含層(II層)出土遺物3(II地区)……………	195			
図版67	包含層(II層)出土遺物4(II地区)……………	196			
図版68	包含層(II層)出土遺物5(II地区)……………	197			
図版69	包含層(II層)出土遺物6(II地区)……………	198			

表 目 次

第1表 縄文遺構出土遺物観察一覧(Ⅰ地区)……26	第25表 包含層(Ⅱ層)出土遺物観察一覧(Ⅰ地区) ……………181
第2表 縄文遺構出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)……34	第26表 包含層(Ⅱ層)出土遺物観察一覧(Ⅱ地区) ……………187
第3表 包含層(Ⅲ層)遺物出土状況(Ⅰ地区)……41	第27表 表土・攪乱層出土遺物観察一覧(Ⅰ地区) ……………199
第4表 包含層(Ⅲ層)出土遺物観察一覧(Ⅰ地区) ……………41	第28表 表土・攪乱層出土遺物観察一覧(Ⅱ地区) ……………203
第5表 包含層(Ⅲ層)遺物出土状況(Ⅱ地区)……45	第29表 遺構および堆積物試料一覧と分析項目 ……………229
第6表 包含層(Ⅲ層)出土遺物観察一覧(Ⅱ地区) ……………45	第30表 放射性炭素年代測定結果……235
第7表 区画1出土遺物観察一覧(Ⅰ地区)……85	第31表 暦年較正結果……235
第8表 区画2出土遺物観察一覧(Ⅰ地区)……92	第32表 珪藻分析結果……237
第9表 区画3出土遺物観察一覧(Ⅰ地区)……109	第33表 花粉・寄生虫卵分析結果……238
第10表 区画4出土遺物観察一覧(Ⅰ地区)……114	第34表 植物珪酸体含量……239
第11表 区画5出土遺物観察一覧(Ⅰ地区)……135	第35表 微細物洗い出し分析結果……240
第12表 区画6出土遺物観察一覧(Ⅰ地区)……138	第36表 土壌理化学分析結果……242
第13表 区画7出土遺物観察一覧(Ⅰ地区)……143	第37表 全分析(蛍光X線分析)結果……242
第14表 区画8出土遺物観察一覧(Ⅰ地区)……149	第38表 脂肪酸分析結果……243
第15表 区画9出土遺物観察一覧(Ⅰ地区)……153	第39表 土壌薄片観察結果(1)～(3)……244
第16表 区画10出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)……154	第40表 焼土試料の交流磁場消磁前後の残留磁化 と帯磁率の測定結果……248
第17表 区画11出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)……157	第41表 胎土分析試料一覧……255
第18表 区画13出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)……160	第42表 胎土薄片観察結果(1)……258
第19表 区画15出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)……165	第43表 胎土蛍光X線分析結果……270
第20表 区画16出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)……168	第44表 遺物出土状況……298
第21表 区画17出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)……169	
第22表 道1出土遺物観察一覧(Ⅰ地区)……172	
第23表 道1出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)……175	
第24表 道2出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)……178	

< 付属CD所収データ一覧 >

第45表 縄文遺構 遺物出土状況(Ⅰ地区)
第46表 縄文遺構 遺物出土状況(Ⅱ地区)
第47表 グスク時代の遺構 遺物出土状況(Ⅰ地区)
第48表 グスク時代の遺構 遺物出土状況(Ⅱ地区)
第49表～第65表 区画1～17 遺物出土状況(Ⅰ・Ⅱ地区)
第66表～第68表 道1・道2 遺物出土状況(Ⅰ・Ⅱ地区)
第69表 包含層(Ⅱ層)遺物出土状況(Ⅰ地区)
第70表 包含層(Ⅱ層)遺物出土状況(Ⅱ地区)
第71表～第97表 表土・攪乱層遺物出土状況(Ⅰ・Ⅱ地区)
第98表～第122表 自然遺物出土状況(Ⅰ・Ⅱ地区)

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

平成8年12月の沖縄に関する特別行動委員会（SACO）の最終報告にて、キャンプ桑江内の海軍病院をキャンプ瑞慶覧内に移設することが合意され、加えてキャンプ桑江内及びキャンプ瑞慶覧内の米軍住宅を統合し、住宅用地の一部を返還されることも合意された。

海軍病院の移設候補地として、普天満宮西側の米軍住宅地域が挙げられた。当地は普天間フィールー丘陵古墓群、普天間グスクンニー遺跡等の遺跡が確認されていたが、住宅地域については、試掘調査等はなされておらず、未確認の状況であった。そのため、平成10年に沖縄県教育委員会（以下、県教委）により、18箇所試掘調査を行った結果、広く普天間古集落遺跡、普天間石川原遺跡等が広がることが確認された。

それから暫くの間、海軍病院建設に関する調整等はなされず、平成16年に入り沖縄防衛局（当時は那覇防衛施設局、平成19年9月より沖縄防衛局）より平成16年5月12日付けで宜野湾市教育委員会（以下、市教委）へ埋蔵文化財の有無の照会が行われた。市教委から、市の事務規模を超える事案であることから、県教委に依頼したいとの報告があり、県教委は承諾し、その後の調整は県教委と市教委が同席して行うこととなった。平成16年7月27日付けで沖縄防衛局より県教委へ「埋蔵文化財の取扱い等の協議」が届き、平成16年7月30日付けで県教委より試掘調査を実施していくことの回答を行っている。これより試掘調査が開始され、平成16年度は病院本体部分を中心に89箇所調査を行い、平成17年度からは市教委も試掘調査に加わり、県教委が48箇所、市教委が43箇所実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地に加え、新たな埋蔵文化財包蔵地も確認した。

しかし、平成16・17年度に実施した試掘調査は病院本体及び関連施設に限定したものであり、その他の施設、造成、給排水施設等の工事による影響を把握できない状況であることが確認された。そのため、平成18年度に海軍病院建設予定地全体の状況を把握するための試掘調査箇所の見直しを行い、その結果、新たに約480箇所の試掘調査が必要となった。平成18年度は県教委が157箇所、市教委が199箇所実施し、全域で周知の埋蔵文化財包蔵地を確認するとともに、新たな埋蔵文化財包蔵地も確認した。

平成19年度の県教委が68箇所試掘調査を実施し、広範囲で周知の埋蔵文化財包蔵地と古墓を確認し、海軍病院建設予定地全域の試掘調査を完了した。

試掘調査により新たに確認された埋蔵文化財包蔵地については、沖縄防衛局が市教委を經由して県教委へ平成19年3月28日付けで遺跡発見通知を提出し、平成19年4月4日付けで、新たに普天間後原第二遺跡、普天間下原第二遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として取り扱われることとなった。

一方、試掘調査により周知の埋蔵文化財包蔵地が確認されてきたことから、試掘調査完了前に沖縄防衛局、県教委、市教委は病院建設予定地の変更について調整を行った。しかし、変更できないとの沖縄防衛局の見解から、記録保存調査についての調整も行うこととなった。

沖縄防衛局から県教委及び市教委へ、病院本体範囲の記録保存調査について平成18年度及び平成19年度の実施要望があったが、県教委及び市教委は、試掘調査が終了していない段階で記録保存調査の期間及び経費の算出はできないこと、工事設計図と試掘調査結果の調整ができていないこと、広い面積の調査を実施するための体制が整っていないことから平成20年度以降実施する方向で調整を行った。

平成19年度に経費、期間、県教委と市教委の調査範囲分担等を行い、平成20年度に調査実施できるように進めていき、平成19年11月20日付けで沖縄防衛局より市教委を経て埋蔵文化財発掘の通知が県教委に届き、平成19年11月29日付けで県教委より市教委を経て沖縄防衛局へ回答を行い、正式に記録保存調査を実施することとなった。

平成20年3月28日付けで、沖縄防衛局、県教委、市教委の3者で「キャンプ瑞慶覧内海軍病院建設予定地区 埋蔵文化財に関する協定書」を交わし、平成20年4月11日付けで沖縄防衛局と沖縄県は発

掘調査に関する契約を締結し、平成20年度の調査を実施した。なお、現地における発掘調査にて確認した遺物は、終了後に平成21年4月6日付けで沖縄県立埋蔵文化財センターから県教育庁文化課あて報告し、平成21年4月13日付けで県教育長より宜野湾警察署長へ埋蔵文化財発見の通知を行っている。

その後、平成22年度以降の調査について定められていなかったことから、平成22年3月31日付けで、沖縄防衛局、県教委、市教委の3者で協定書に係る「覚書」を交わし、発掘調査が平成25年度末まで、資料整理が平成27年末まで期間が延長となる。さらに平成26年11月21日付け「覚書」により資料整理が平成28年末まで期間が延長となった。

第2節 調査体制

本報告の普天間古集落遺跡の発掘調査は、平成20年度に現地での発掘作業、平成20～26年度にかけて資料整理及び報告書作成を行った。実施体制は以下のとおりである。

事業主体	沖縄県教育委員会
教育長	仲村守和(平成20年度)、金武正八郎(平成21～22年度)、大城 浩(平成23～24年度)、諸見里 明(平成25～26年度)
事業所管	沖縄県教育庁文化課(平成20～22年度)、文化財課(平成23～26年度)
課長	千木良芳範(平成20年度)、大城 慧(平成21～22年度)、長堂嘉一郎(平成23・24年度)、新垣悦男(平成25年度)、嘉数 卓(参事兼課長:平成26年度)
副参事	島袋 洋(平成23～24年度)
記念物班長	島袋 洋(平成20～22年度)、盛本 勲(平成23～25年度)、金城亀信(平成26年度)
担当	久高 健(指導主事:平成20～22年度)、瀬戸哲也(主任:平成20～21年度)、上地 博(主任専門員:平成22年度)、田場直樹(指導主事:平成23年度)長嶺 均(主任専門員:平成23～26年度)、知念隆博(主任専門員:平成26年度)
事業実施	沖縄県立埋蔵文化財センター
所長	名嘉政修(参事兼所長:平成20年度)、玉栄 直(参事兼所長:平成21年度)、守内泰三(平成22年度)、大城 慧(平成23年度)、崎濱文秀(平成24年度)、下地英輝(平成25～26年度)
副参事	島袋 洋(平成25～26年度)
総務班長	嘉手苺 勤(平成20～22年度)、荻堂治邦(平成23～24年度)、新垣勝弘(平成25～26年度)
担当	山田恵美子(主査:平成20年度)、村吉由美子(主事:平成20年度、主任:平成21年度)本永 恵(主査:平成21～22年度)、玉寄秀人(主査:平成22年度)、恩河朝子(主査:平成22～23年度)、西島康二(主査:平成23～25年度)、比嘉 睦(主任:平成26年度)
調査班長	岸本義彦(平成20年度)、金城亀信(主幹:平成20年度、調査班長:平成21～25年度)、盛本 勲(平成26年度)
担当	知念隆博(主任:平成20～23年度、主任専門員:平成24～25年度)、新垣 力(専門員:平成20年度、主任:平成21～26年度)、上地 博(主任:平成20年度)、西銘 章(指導主事:平成20年度)、上原欣信(指導主事:平成21年度)、片桐千亜紀(主任:平成21年度)、金城貴子(専門員:平成22～23年度、主任:平成24～26年度)、具志堅清大(専門員(臨任):平成24年度、専門員:平成25～26年度)

文化財調査嘱託員(平成20～26年度)

新垣有一郎、伊藝由希、池原悠貴、井上奈々、伊波直樹、岩元さつき、内間真吾、大城 歩、大屋匡史、翁長圭乃子、具志堅清大、小橋川 剛、新屋敷小春、菅原沙香、菅原広史、瑞慶覧長順、玉城 綾、當山奈央、徳嶺里江、仲程勝哉、仲嶺真太、長嶺 優、仲村 毅、波木基真、比嘉優子、又吉幸嗣、宮城明恵、宮里知恵、本村麻里衣、山田浩久、山口こずえ、山城 勝

埋蔵文化財資料整理嘱託員(平成20～26年度)

赤嶺恵子、赤嶺雅子、安里綾子、新垣裕子、新垣利津代、伊藝由希、池原直美、石嶺敏子、市井里恵、伊藤恵美利、伊禮若菜、殷 兪平、上地由紀子、上原作美、上原園子、上原美穂子、小渡直子、荻堂さやか、喜屋武朋子、金城政史、久貝裕子、具志みどり、久田慎子、久保田有美、幸地麻美、崎原美智子、後田多昌代、城間千鶴子、平良貴子、高橋弘治、高良三千代、田中章子、玉城照美、玉城実子、玉寄智恵子、知念 愛、津多 恵、津波古彩乃、當山哲也、仲宗根めぐみ、中山まり、永玉栄美香、西原健二、比嘉孝子、比嘉登美子、比嘉なおみ、東仲千夏、譜久村泰子、又吉志麻子、又吉純子、又吉利文、宮城友香、目島直美、屋我尚子、矢舟章浩、山城美奈、山城由紀子、與儀みなみ、吉村綾子

資料整理作業員

玉城実子、玉那覇美由紀、宮里宗彦、新垣みどり、上地由紀子、具志良子、津田 恵、桃原りずむ、照屋葉史、屋我尚子、赤嶺恵子、島袋久美子、謝花恵子

事務補助員 安里綾子、新垣佳子、酒井若葉、下地麻利恵、城間裕子、杉山弘美、砂川美樹、嵩原美千代、立津尚美、仲村綾乃、名幸さと子、花城咲子、普天間しげ美、松元珠理、弓削典子、安井美和

業務委託 発掘調査支援業務 (株)イーエーシー、(株)アーキジオ
地形測量・磁気探査業務 (株)アジア技研
自然科学分析 パリノ・サーヴェイ(株)
漆器保存処理 (株)文化財サービス

調査指導及び協力者(所属等は当時のもの)

禰亘田佳男(文化庁文化財部記念物課)、和田敬悟・呉屋義勝・豊里友哉・仲村 健・城間肇・森田直哉・伊藤 圭(宜野湾市教育委員会)、仲宗根 求(読谷村教育委員会)、縄田雅重(沖縄市教育委員会)、崎原恒寿(恩納村教育委員会)、新垣義夫(普天満宮)、堀内秀樹・追川吉生(東京大学埋蔵文化調査室)、樋泉岳二(早稲田大学)、野上建紀(有田町歴史民俗資料館)、渡久地 真(中城村教育委員会)、神谷厚昭(金城町石畳研究所)、小林達雄(國學院大學)、成田涼子(豊島区教育委員会)、渡辺芳郎(鹿児島大学)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の立地と地理的環境

海軍病院建設予定地である宜野湾市は、沖縄本島の中部西海岸にあり、北は北谷町、北東は北中城村、東は中城村、東南は西原町、南は浦添市に隣接し、西は東シナ海に面している。総面積は、19.37 km²で、東西に約6.1km、南北に約5.2kmとやや長方形をなしている。地形をみると、海岸から内陸部に向かって雛壇状を呈しており、標高3～30mの海岸低地、標高30～40mの石灰岩段丘、標高50～90mの石灰岩段丘、標高90m以上の高位段丘の4つの海岸段丘から形成されている。海軍病院建設予定地は第3面に当たる標高50～90mの段丘上に位置し、大半が琉球石灰岩層から成る。この琉球石灰岩の段丘縁には洞穴と湧泉が点在している。本市を流れる河川は、浦添市・西原町との境界に比屋良川、北谷町・北中城村・中城村との境界に普天間川がある。

宜野湾市普天間に位置する海軍病院建設予定地内の標高は約50～90mで、今調査範囲には、普天間古集落遺跡が広がり、またその周辺には、普天満宮洞穴遺跡、普天間後原第二遺跡、普天間下原第二遺跡、普天間石川原遺跡、普天間グスクニー遺跡、普天間フィールー丘陵古墓群、普天間稲嶺屋取古集落、普天間グスクニー古墓群など、多くの遺跡が確認されている。

第2節 歴史的環境

普天間には、琉球八社の一つである普天満宮及び神宮寺が所在しており、『絵図郷村帳』等に「寺ふてま村」とあり、古くから集落の中心であり、村の名前の由来になっていたことが分かる。琉球王国時代には国王も普天満宮を参詣する行事があり、その際に参道として利用された宜野湾並松は、1932年に一部が国の天然記念物に指定された。

普天間古集落遺跡が所在する字普天間は、当初は中城間切であったが、1671年（康熙10年）に中城間切、北谷間切、浦添間切から13村の分割及び新設した1村を併せて宜野湾間切を新設する際に宜野湾間切に編入された。

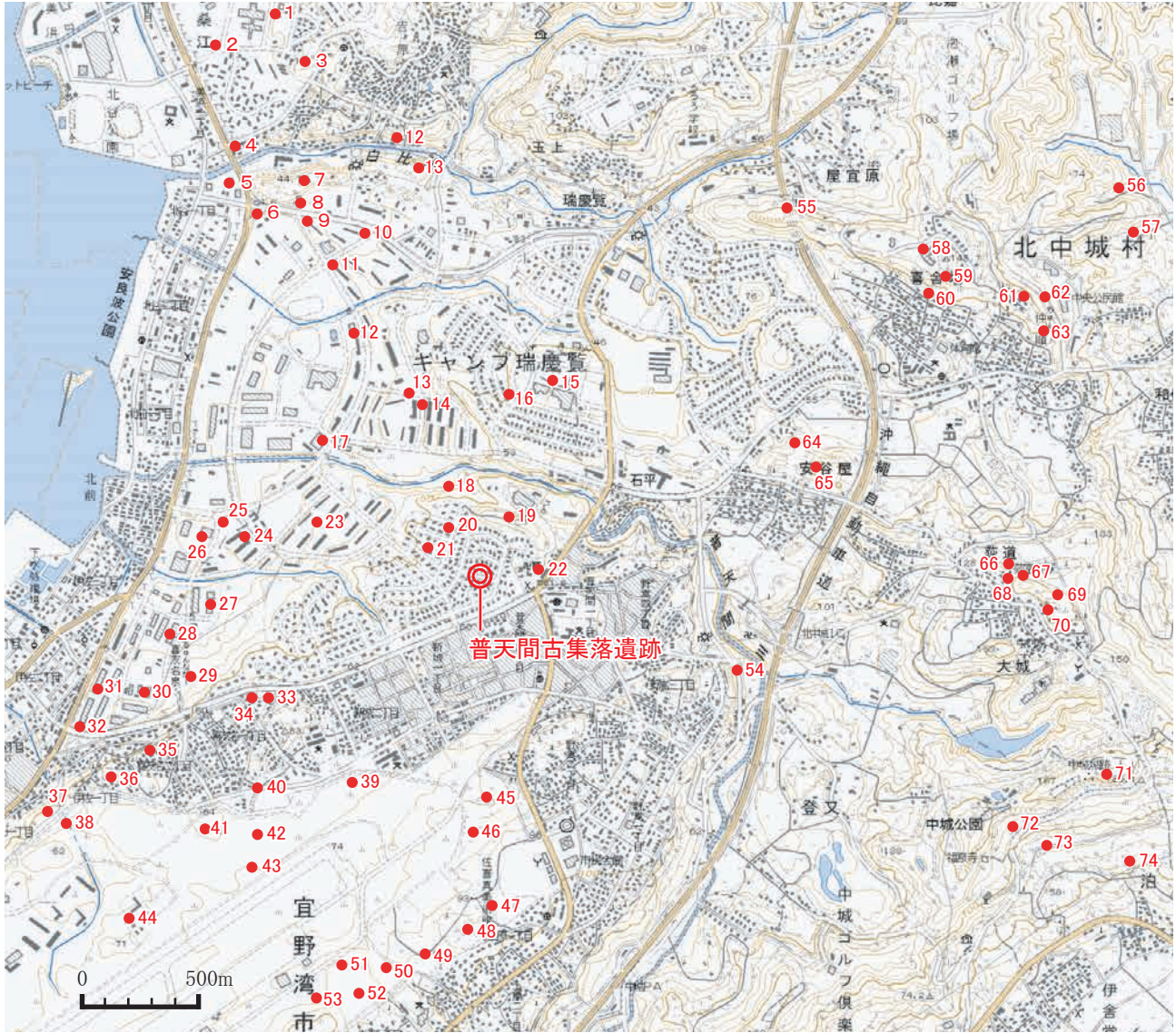
第二次世界大戦前の普天間には、中頭地方事務所、中頭教育会館、農事試験場、郵便局等の官公庁が設置され、また、宜野湾並松は首里・那覇方面と中北部を結ぶ交通の要所地であったため、街道沿いに商店、旅館、飲食店、写真店等が並び本島中部の政治経済の中心地となっていた。

しかし、第二次世界大戦にて集落は灰塵に帰し、さらに米軍に接収され、現在はキャンプ瑞慶覧として使用され、旧集落の面影は僅かに普天満宮と神宮寺が残っているだけである。

遺跡は普天間古集落遺跡に隣接して、普天間フィールー古墓群、普天間下原第二遺跡、普天間後原第二遺跡、普天間宮洞穴遺跡、普天間グスクニー遺跡、普天間石川原遺跡がある。米軍基地内ということから、調査を円滑に行うことは難しいが、これまでの調査で、縄文時代から近代までの遺構、遺物が得られている。そのことから、長い間、人々が生活してきたことが明らかとなっている。

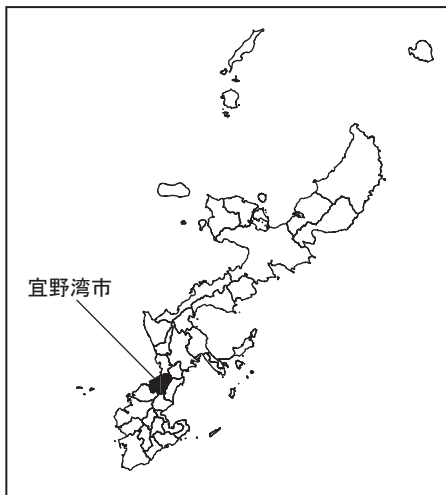


第1図 沖縄本島の位置



この背景地図データは、国土地理院の電子国土 Web システムから配信されたものである。

〈 周辺遺跡の凡例 〉



- | | | |
|-------------------|-----------------|----------------|
| 1. 伊地差久原古墓 | 27. 喜友名下原第三遺跡 | 53. 赤道渡呂寒原洞穴遺跡 |
| 2. 前原古島 B 遺跡 | 28. 伊佐後原第二遺跡 | 54. 野嵩ウガンヌカタ遺跡 |
| 3. 前原古墓群 | 29. 喜友名下原第一遺跡 | 55. ヒニグスク |
| 4. 池グスク | 30. 伊佐後原第一遺跡 | 56. 前田原 B 遺跡 |
| 5. 白比川河口遺物散布地 | 31. 伊佐前原第二遺跡 | 57. 前田原 A 遺跡 |
| 6. 北谷番所址 | 32. 伊佐前原第一遺跡 | 58. 甲斐川原遺跡 |
| 7. 北谷城遺跡群 | 33. 喜友名貝塚 | 59. 喜舎場上原遺物散布地 |
| 8. 北谷城第7遺跡 | 34. 喜友名グスク遺跡 | 60. 喜舎場御嶽遺物散布地 |
| 9. 塩川原遺跡 | 35. 喜友名前原第一遺跡 | 61. 仲順原貝塚 |
| 10. 玉代勢原遺跡 | 36. 伊佐上原遺跡 E 地点 | 62. 仲順原遺跡 |
| 11. 長老山遺物散布地 | 37. 大山岳之佐久原第三遺跡 | 63. 仲順原遺物散布地 |
| 12. 東表原遺跡 | 38. 大山岳之佐久原第一遺跡 | 64. 若松遺跡 |
| 13. 大道原 A 遺跡 | 39. 上原濡原遺跡 | 65. 安谷屋グスク |
| 14. 大道原 B 遺跡 | 40. 喜友名東原ヌバタキ遺跡 | 66. 荻堂貝塚 |
| 15. 伊波川原遺跡 | 41. 喜友名前原第三遺跡 | 67. 大城グスク |
| 16. 横高原遺跡 | 42. 喜友名東原第三遺跡 | 68. 荻道遺跡 |
| 17. 稲千原遺跡 | 43. 喜友名東原第二遺跡 | 69. ミーグスク |
| 18. 普天間グスクニール遺跡 | 44. 神山黒敷原古墓群 | 70. 大城遺跡 |
| 19. 普天間フィールー丘陵古墓群 | 45. 野嵩タマタ原遺跡 | 71. 中城城跡 |
| 20. 普天間下原第二遺跡 | 46. 新城東原遺跡 | 72. 古島原遺跡 |
| 21. 普天間石川原遺跡 | 47. 上原同原遺跡 | 73. 古島原散布地 |
| 22. 普天満宮洞穴遺跡 | 48. 上原仲毛原遺跡 | 74. 泊原散布地 |
| 23. 安仁屋トゥンヤマ遺跡 | 49. 仲原同原遺跡 | |
| 24. 新城下原遺跡 | 50. 赤道シキロー流域古墓群 | |
| 25. 新城下原第二遺跡 | 51. 赤道渡呂寒原古墓群 | |
| 26. 安仁屋原遺跡 | 52. 赤道渡呂寒原屋取古集落 | |

第2図 周辺の遺跡

第3章 調査経過

第1節 調査の方法

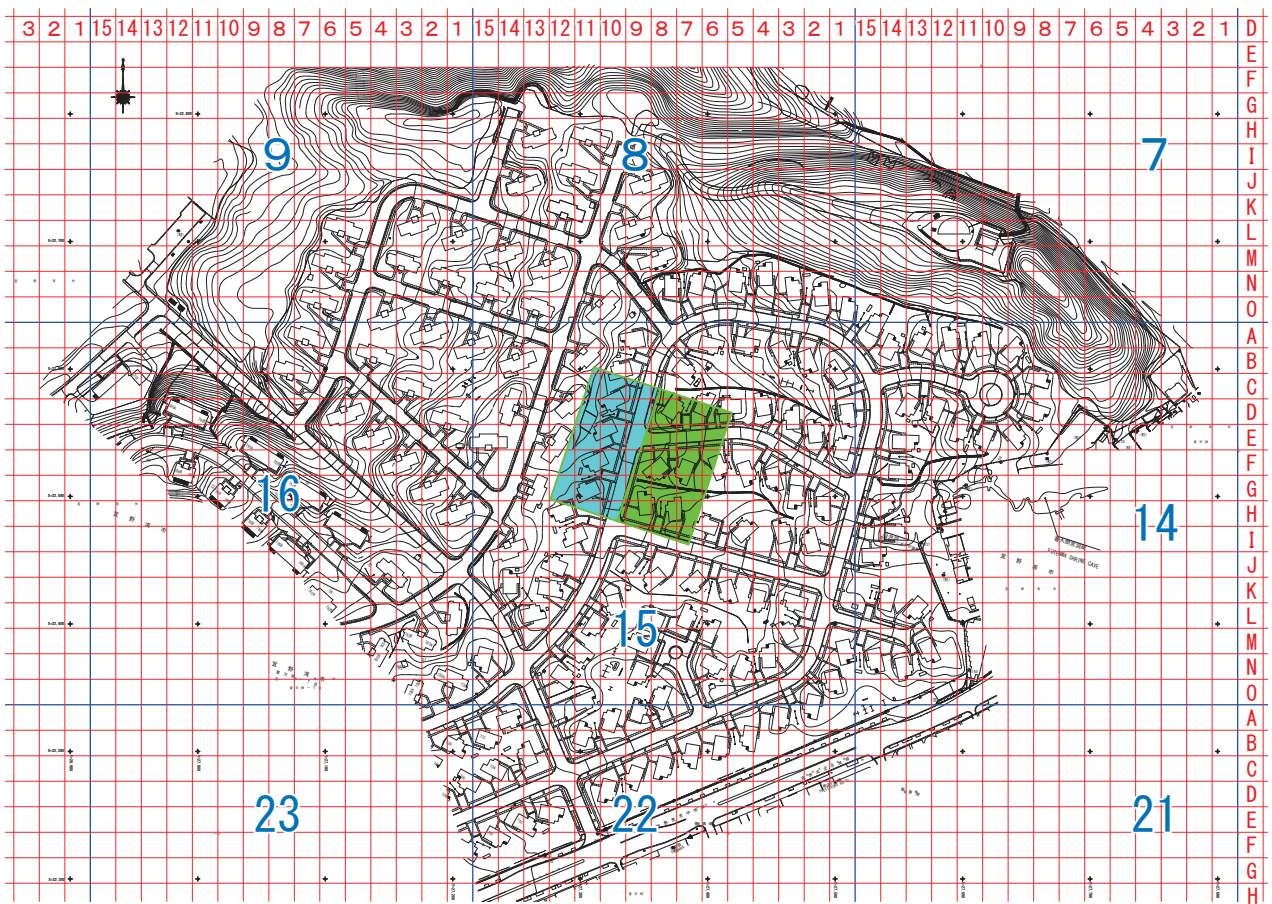
今回の調査範囲は、沖縄防衛局から提示された病院本体部分の工事範囲に合わせ、北東から南西方向へ109m、北西から南東方向へ114mの広さを設定し、さらに中央から東側をⅠ地区、西側をⅡ地区とした。

グリッドは、試掘調査時に当てはめたものを本調査でも使用した。設定方法は、普天間飛行場内の調査で設定されているグリッドを延長し、新たにグリッド番号を追加した。基本となる座標（X：31,000、Y：26,500 日本測地系）は世界測地系への移行前に設定されたため、日本測地系となっている。グリッドは第Ⅰ区画、第Ⅱ区画の2段階に分けており、第Ⅰ区画を300mメッシュ、第Ⅱ区画を20mメッシュで区切っている。第Ⅰ区画はキャンプ瑞慶覧の宜野湾市区域を1～33に分割設定し、第Ⅱ区画はさらに細かく東から西へ1～15、北から南へA～0を設定している。グリッドの名称は、第Ⅰ区画、第Ⅱ区画を組合せ、15-A1、16-F14等としており、今回調査の第Ⅰ区画は15となっている。

調査は初めに、磁気探査と表土掘削を行った。磁気探査は、水平探査を実施した結果、調査範囲全域に異常点が確認され、確認探査は800点以上となった。確認探査時の掘削により、米軍住宅建設時の埋設管等が地下に縦横に広がるのが分かり、埋設管等設置時の掘削による攪乱が広がることを確認した。表土掘削は、重機により行い、攪乱土、造成土及び近世～近代の遺物包含層までを掘削した。

表土掘削後は、作業員の手作業による包含層掘削と遺構検出に移り、高所作業車からの遺構検出写真撮影後に遺構別の調査を行った。調査面積が広いことから、Ⅰ地区及びⅡ地区ともに便宜的に3つの地点に分割し、調査を行った。Ⅰ地区は、北側を北工区、中央を中央工区、南側を南工区とし、Ⅱ地区は調査順序に合わせ、北側を3地点、中央を1地点、南側を2地点とした。遺構個々の調査は規模や時期に合わせ、半裁や4分割による調査を行った。遺構数が多かったため、検出時及び完掘状況の平面図作成は測量機器を用いて行い、断面図作成は基本的に人手により行った。人手による実測より効率が良いと考えられる場合は、写真測量も実施した。

写真撮影は遺構個々の検出状況及び完掘状況を白黒フィルム、カラーリバーサルフィルム、デジタルカメラを用いて行い、高所作業車を使用しての遺構検出状況及び完掘状況を撮影した。また、調査の最終段階において、ラジコンヘリを使用して調査区全体を撮影し、モザイク加工にて一枚にまとめ、調査範囲の遺構全体が把握できる写真を作成した。



第3図 グリッド配置図

第2節 発掘調査

I 地区及びII地区の発掘調査経過について、地区別にまとめる。

(I地区)

発掘作業は平成20年7月22日から平成21年3月31日まで行った。調査は作業工程を管理するため、北工区：C7・8、D5～9、E6～9、中央工区：F6～9、G6～9、南工区：H7～10、I7～9の3地点に分け行った。調査面積は6,400㎡である。経過については以下に概略を記す。

平成20年

- 7月：地中の不発弾有無確認のため、磁気探査を行い、危険物がないと判断できた箇所より重機を使用して表土掘削を行った。地中に米軍の給水管、ケーブル等が埋設されており、それらを除去する前に米軍へ確認しながらの作業となった。
- 8月：磁気探査及び表土掘削を行い、8月14日で表土掘削を完了し、作業員の米軍基地立入りに必要なパスを取得した8月25日から壁面掘削の作業を行った。また、水道及び仮設事務所設置を行う等の現場環境整備を進めた。
- 9月：台風の影響により、作業を行えない日もあったが、中央工区の地山が広く確認できている中央部から遺構検出作業を行い、その他箇所は攪乱及びII層の掘削を進めた。G6・7グリッドでIII層を確認した。また、米軍の埋設管が設置されていた箇所を利用して層序確認を行った。
- 10月：G8・9、H8・9グリッドを中心に遺構検出を行い、検出した遺構の配置図を作成した。攪乱及びII層が厚く残っている箇所は重機を使用し掘下げを行った。米軍に申請していた高所作業車からの写真撮影の許可を得る。
- 11月：G8・9、H7～9を中心に遺構検出を行い、検出完了後の11月14日に高所作業車を使用して南工区の写真撮影を行った。その後、検出した遺構の掘下げに着手し、溝、土坑等を中心に進め、作業に慣れてきた下旬からピットの調査にも取り掛かった。北工区は引き続き遺構検出を行った。
- 12月：北工区及び中央工区のF6～9グリッドは遺構検出を行い、南工区は遺構の掘下げを進めた。12月26日に高所作業車を使用し、中央工区の遺構検出状況、南工区は近世～近代遺構の一部完掘状況の写真撮影を行い、年内の作業を終了した。

平成21年

- 1月：中央工区は遺構調査を開始し、南工区は遺構の掘下げを進め、地山を確認するためのトレンチ調査も行った。1月29日に高所作業車を使用して南工区の遺構完掘状況を撮影した。
- 2月：北工区は攪乱及びII層の掘削及び遺構検出作業を行い、2月27日に高所作業車を使用して遺構検出状況を撮影した。中央工区は遺構の調査を進め、III層が広がる箇所では掘下げを行った。
- 3月：北工区、中央工区ともに遺構掘削を進め、III層が広がる箇所は掘下げを進めた。3月26日にはラジコンヘリを使用し、写真撮影を行い、モザイク写真を作成した。3月30日には高所作業車を使用し、全体の遺構完掘写真を撮影した。

(II地区)

発掘作業は平成20年9月9日から平成21年3月31日まで行った。調査は作業工程を管理するため、1地点：D10・11、E9～12、F9～12、2地点：G10～12、H10～12、3地点：B10・11、C8～11、D9～11に分け行った。調査面積は6,100㎡である。経過については下に概略を記す。

平成20年

- 8月：磁気探査及び表土掘削を行い、8月26日で表土掘削を完了した。また、作業員の米軍基地立入

りに必要なパスの取得、水道及び仮設事務所設置等の現場環境整備を進めた。

- 9月：9月9日から人力による残存表土の掘削及び壁面掘削の作業を行った。米軍の埋設管が設置されていた箇所を利用して壁面を清掃し、調査区内の層序確認を行った。
- 10月：1地点及び3地点にてⅡ層の掘削を中心に進めた。攪乱及びⅡ層が厚く残っている箇所は重機を使用し掘下げを行った。掘削が終わった箇所より遺構検出作業を行った。10月30日に高所作業車を使用して3地点C9・10グリッドにおける遺構検出状況の写真撮影を行った。
- 11月：E～G10・11を中心に遺構検出を進め、溝跡、土坑、ピットと思われる遺構が多数検出された。検出完了後の11月5日に高所作業車を使用して1地点の遺構検出状況の写真撮影を行った。その後、検出した遺構の掘削に着手した。また、3地点ではⅢ層の広がり確認された箇所での掘下げも行った。
- 12月：引き続き1地点及び3地点の遺構掘削を進めた。1地点においても、Ⅲ層の広がり確認された箇所での掘下げを行い、1地点の一部（南側）では遺構調査が完了した。また、2地点では遺構検出作業に着手して年内の作業を終了した。

平成21年

- 1月：引き続き1地点及び3地点の遺構掘削を進めた。2地点は遺構検出作業が終わった後、1月16日に高所作業車を使用して遺構検出状況を撮影した。
- 2月：1地点は道跡以外の遺構調査が完了した後、道跡の調査に取り掛かった。2地点はⅡ層埋土遺構とⅢ層埋土遺構が確認され、Ⅱ層埋土遺構の調査は2月下旬に完了した。3地点は引き続き遺構掘削を進めた。
- 3月：2地点ではⅢ層埋土遺構の調査を進め、調査終了後は1地点北側及び2地点にてⅢ層の広がり確認された箇所において掘下げを行った。3地点も引き続き遺構掘削を進め、3月18日に高所作業車を使用して遺構完掘写真を撮影した。その後、調査区の壁面の記録作業を行い、調査完了となった。

第3節 資料整理

資料整理は平成20年度後半から実施した。まず出土遺物の洗浄から始め、注記等を中心に進めた。続いて平成22年度後半より、遺物の分類、接合作業、実測用遺物の抜出しを行い、平成23年度に実測図の作成、トレース、写真撮影等を行った。

これらの作業と並行して、遺構図等のトレースを進めた後、発掘現場で撮影した写真と併せて報告書全体のレイアウト作成を行った。遺構については、その数が多く、また密な箇所も多かったため、他の遺構との関連に注意しながら検討する必要がある、整理には多くの時間を要した。

平成24～25年度は、原稿執筆を行い、報告書全体のレイアウトを見直しするとともに、報告書刊行に向けてのまとめの作業を行った。

平成26年度は、報告書の最終校正を行い、指名競争入札により落札した印刷業者と契約を行い、本調査報告書を刊行した。

第4章 調査の成果

第1節 基本層序

I 地区及びII 地区は隣接していることもあり、それぞれ共通する層が多い。そこで、両地区の成果を合わせたものを基本層序として報告する。

層序

I 層：表土・造成土。沖縄戦中に米軍に接収され、造成されたときの層であり調査区全体に広がる。層中に土器、石器、中国産陶磁器、沖縄産陶器等の多種多様な遺物を含む。このことから、普天間ハウジング建築の際に敷地内から土砂が集められ造成されたものと考えられる。また、一部の溝では、米軍の接収前後に大雨等により、一時的に大量の水が流れたと考えられる砂の堆積も確認できた。層厚は20～90cmと様々である。

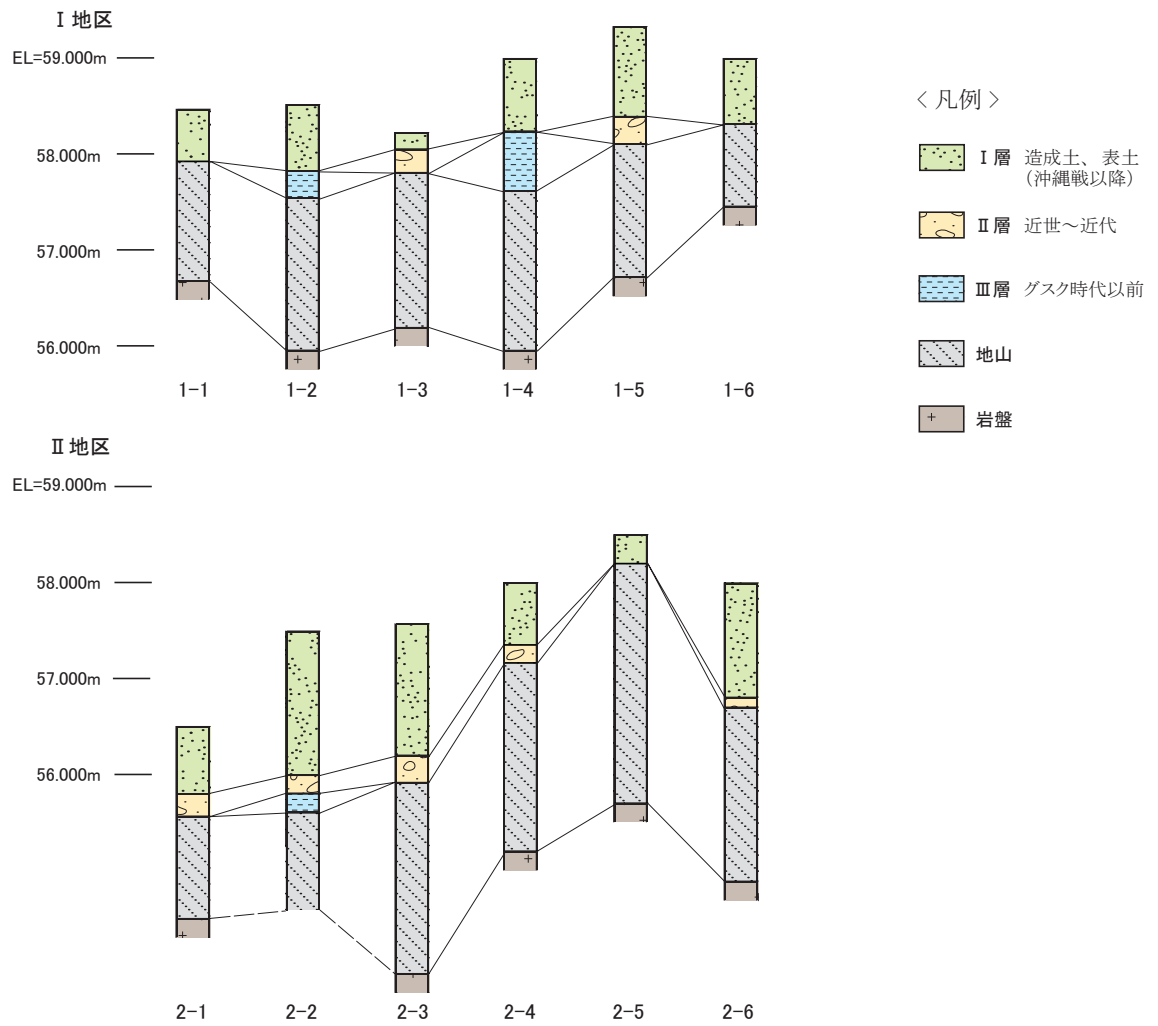
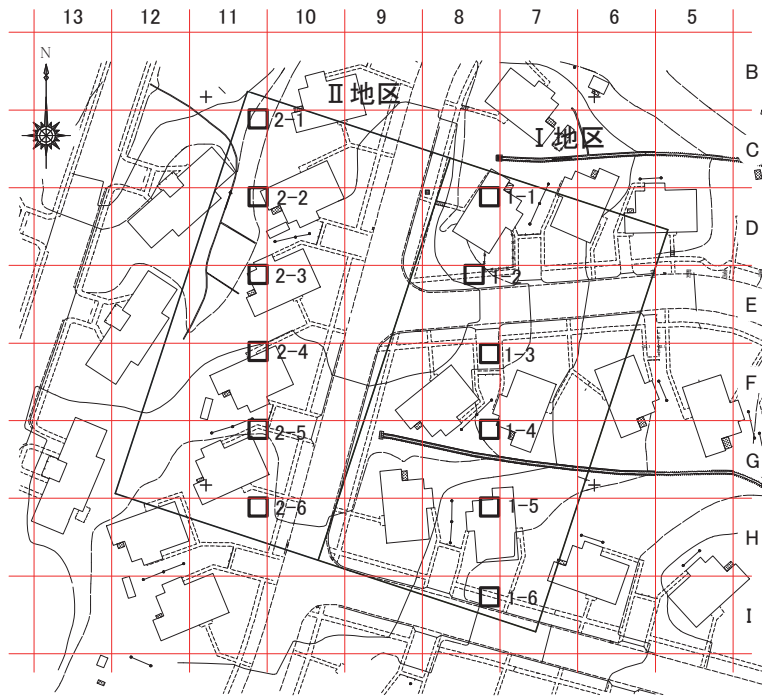
II 層：暗褐色砂質土(10YR3/4)で、米軍接収以前の耕作土及び地表面と思われる。近世～近代の遺物を包含し、調査区全体に広がる。数層に細分可能である。層中に沖縄産陶器を中心として、本土産陶磁器、中国産陶磁器等を含む。この層の中、又は地山(島尻マージ)及びIII層との境に近世～近代の遺構が確認できる。層厚は10～30cmであり、土色が灰オリーブ色及び暗オリーブ色の箇所もある。

III a層：黒褐色砂質シルト(10YR3/2)で、調査区の中央及び南側の迫地地形に該当する箇所に部分的に分布する。数層に細分可能で、上方から下方へと粘りが強くなり、中に3～5mmの炭化物、焼土、黄褐色土粒を含む。一部では水分、マンガン及び鉄分の影響により色調が変化している。全体的に根跡若しくは貫入があり、その中には褐灰色の土が入る。層の中位で、ピット、遺物ではグスク土器、石器を確認している。層厚は5～40cm。

III b層：黒褐色砂質シルト(10YR2/3)で、III a層とIII c層より明るく、区別ができる。III a層と同様の分布であり、中に3～5mmの炭化物、焼土、黄褐色土粒を含む。III a層より粘性が強い。

III c層：暗褐色砂質シルト(10YR3/4)で、III a層と同様の分布である。上方から下方へと粘りが強くなると共に砂質も強くなる。層中にマンガンを含む。根跡若しくは貫入に入っている土は、上方は褐灰色と黄褐色が混ざるが、下方にいくに従い黄褐色が強くなり、最後は黄褐色土のみとなる。

IV層：地山。褐色シルト(10YR4/4)又は暗褐色シルト(10YR3/4)で、粘質が強い層と砂質が強い層に分けることができる。全体的にマンガンを含む。基盤の琉球石灰岩に接する箇所は、他の部分より黒味が強く、暗褐色を呈する。多くの遺構は、I～III層とこの層の境で確認されている。



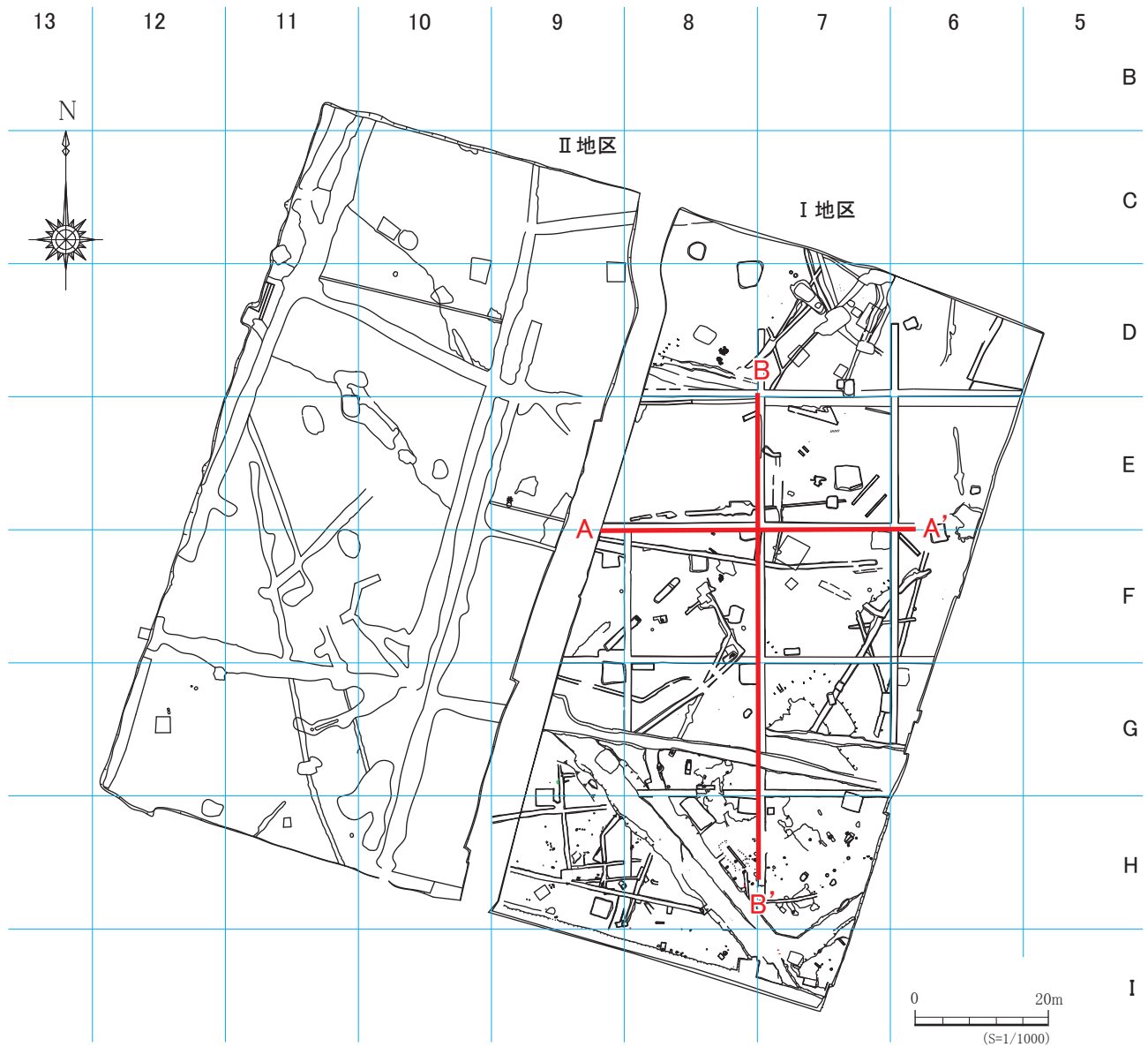
第4図 試掘箇所及び試掘柱状図

縦断及び横断層序

ここでは、I地区及びII地区の南北、東西の層序について示す。

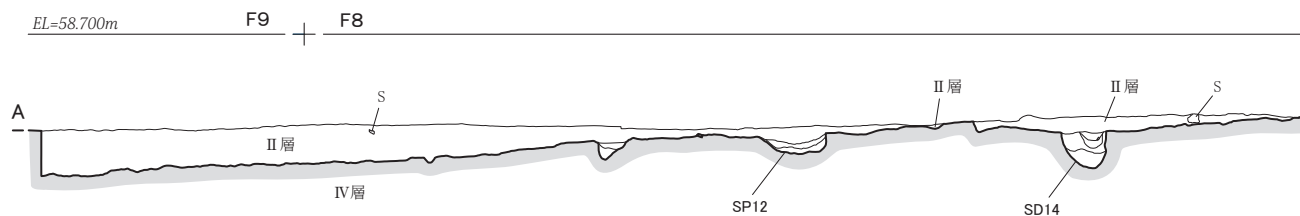
I地区の北壁(A-A')の層序は東壁と同様であるが、III層は確認されていない。

東壁(B-B')の層序は、I層及びII層を主としている。高低差は小さく、平坦であり、地山が凹んでいる箇所II層は遺構であることが多い。また、僅かではあるが、北側及び中央でIII層を確認している。



第5図 グリッド設定及びセクション図化箇所1

北 壁



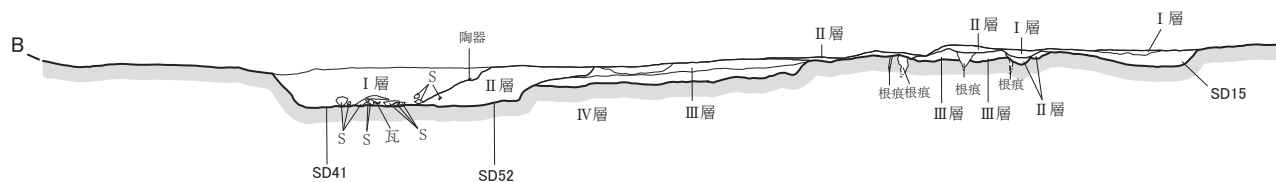
I 地区 Aライン 北壁 F9～F8グリッド(南から)



I 地区 Aライン 北壁 F8グリッド(南から)

東 壁

EL=59.300m E7ライン



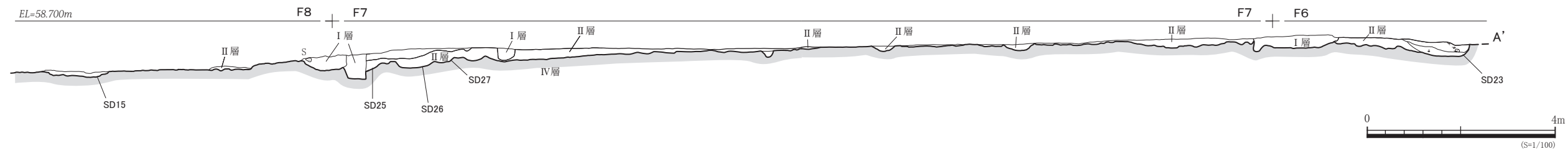
I 地区 Bライン 東壁 E7グリッド(西から)



I 地区 Bライン 東壁 F7グリッド(西から)

第6図 北・東壁 (I地区)

北壁



I 地区 Aライン 北壁 F8グリッド(南から)

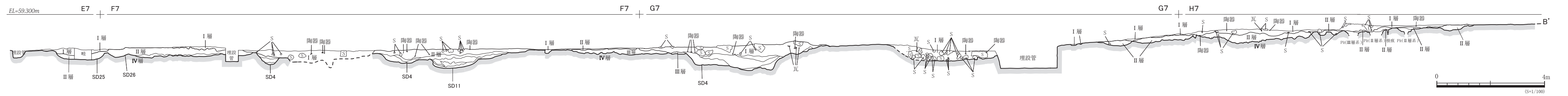


I 地区 Aライン 北壁 F7グリッド(南から)



I 地区 Aライン 北壁 F7～F6グリッド(南から)

東壁



I 地区 Bライン 東壁 F7グリッド(西から)



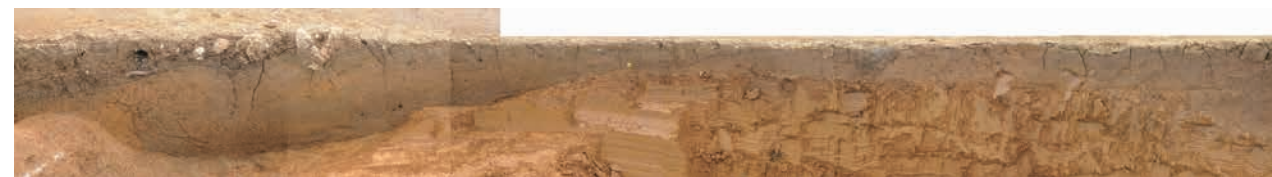
I 地区 Bライン 東壁 F7グリッド(西から)



I 地区 Bライン 東壁 G7グリッド(西から)



I 地区 Bライン 東壁 G7グリッド(西から)



I 地区 Bライン 東壁 F7グリッド(西から)



I 地区 Bライン 東壁 G7グリッド(西から)



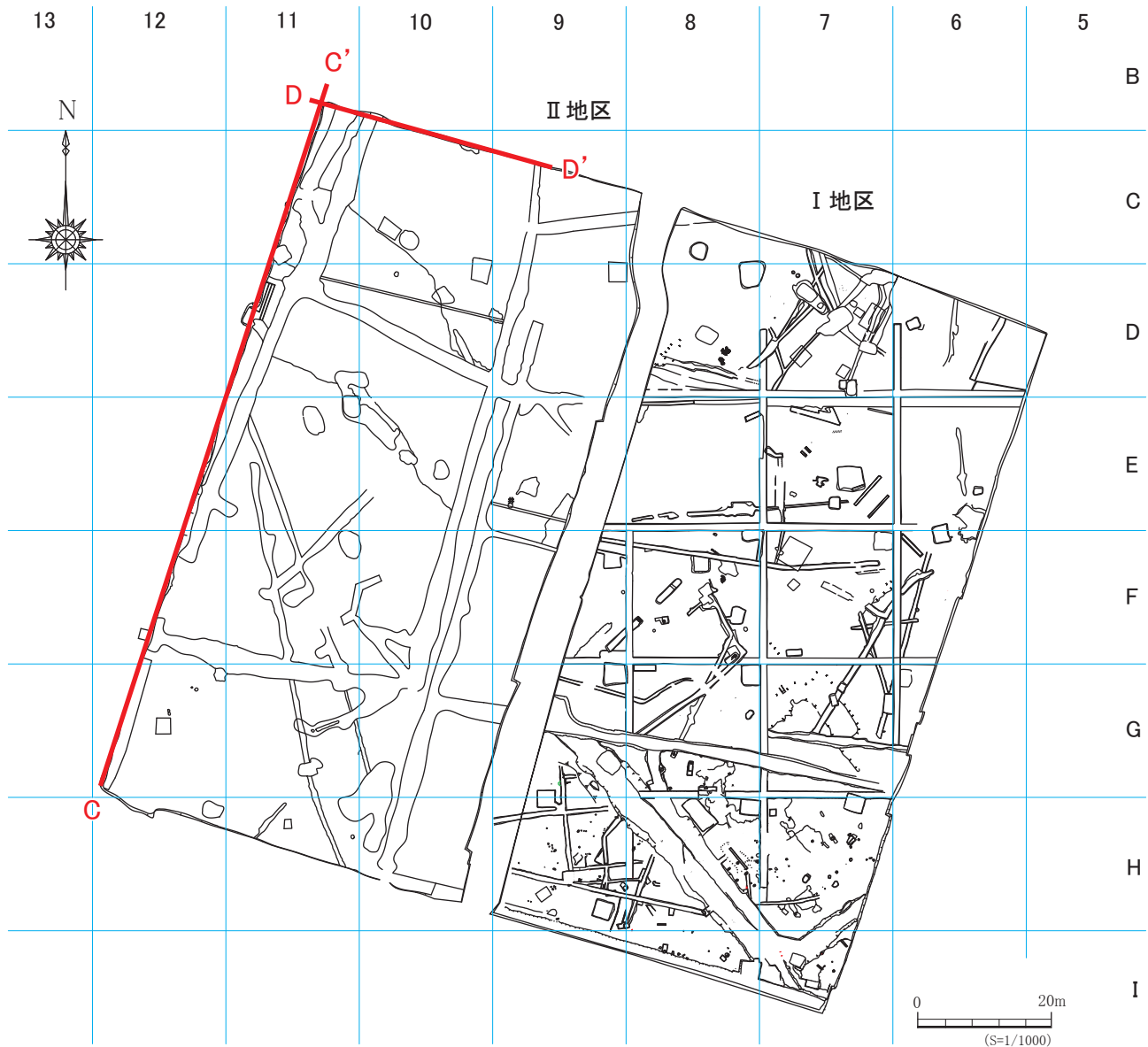
I 地区 Bライン 東壁 H7グリッド(西から)

II地区の西壁（C-C'）の層序は、厚いI層の下にII層があり、中央と南側に部分的に厚いIII層が確認されている。III層は、小さい谷又は窪みに集まって形成された層の可能性もある。

北壁（D-D'）の層序は、厚いI層の下に薄いII層が均一にみられる。

今回の調査範囲では、本来は地形の高低差があったと考えられるが、高い箇所は沖縄戦時及び戦後の米軍住宅建築の際に削られ、低いところは盛土された可能性がある。

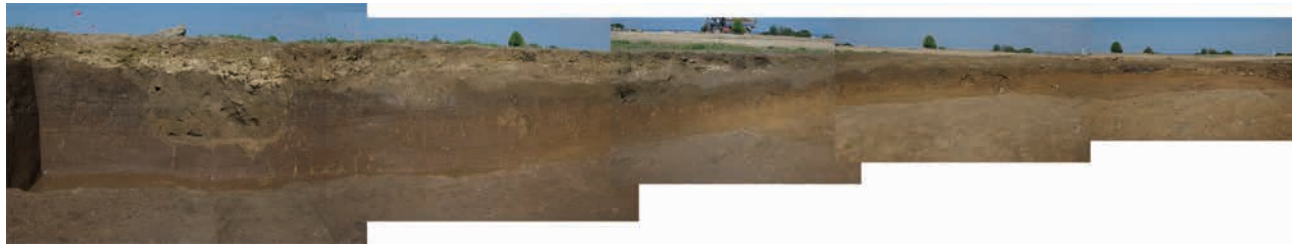
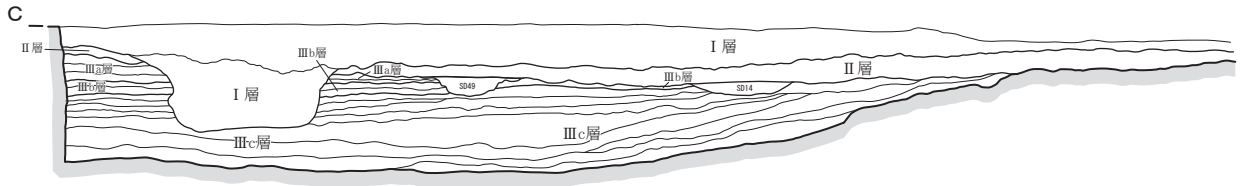
なお、今回の報告では、初めに造成土及びII層を重機にて取り除いたため、第6図にI層が作図されていない箇所があるが、本来は全箇所I層は確認されている。



第7図 グリッド設定及びセクション図化箇所2

西 壁

EL=58.600m G12 ライン



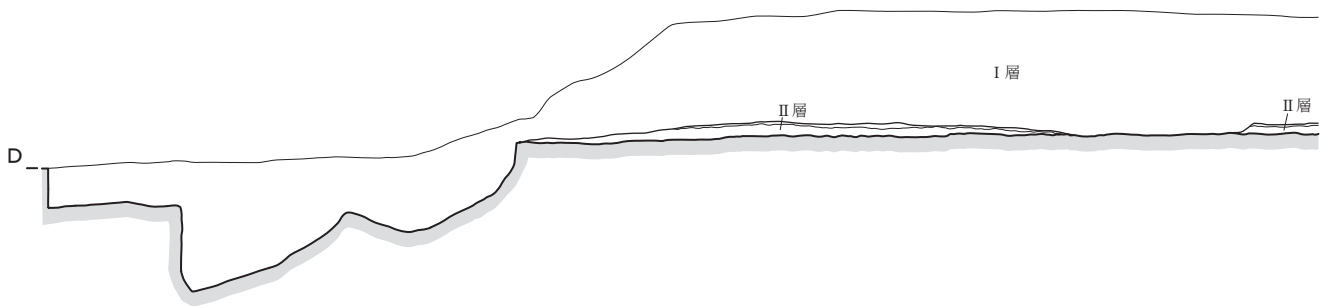
II地区 Cライン 西壁 G12グリッド (東から)

北 壁

EL=59.000m

B11 + B10

B10 + C10



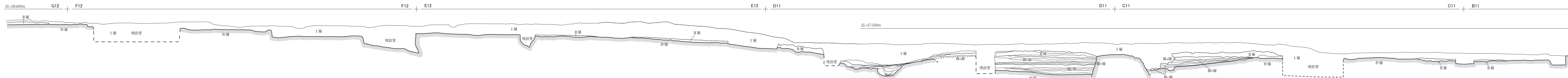
II地区 Dライン 北壁 B11 ~ C10グリッド (南から)

第8図 西・北壁(II地区)

西壁

西壁

西壁



II地区 Cライン 西壁 G12グリッド (東から)



II地区 Cライン 西壁 D11グリッド (東から)



II地区 Cライン 西壁 D11グリッド (東から)

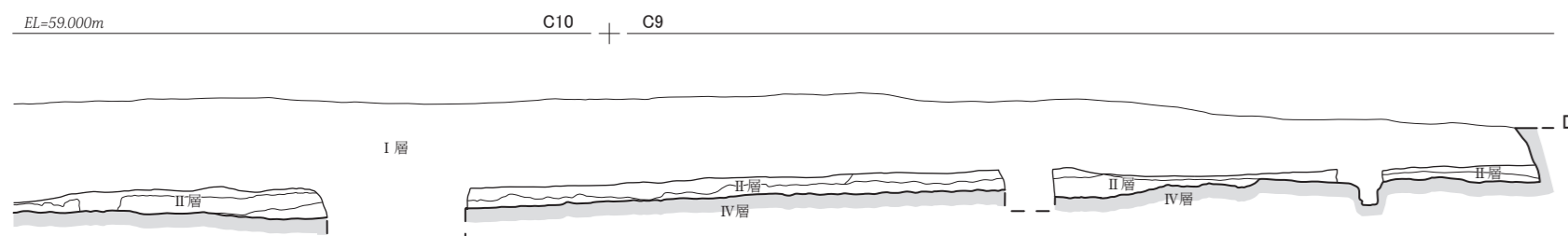


II地区 Cライン 西壁 D11グリッド (東から)



II地区 Cライン 西壁 C11～B11グリッド (東から)

北壁



II地区 Dライン 北壁 C10～C9グリッド (南から)

第2節 縄文時代・グスク時代

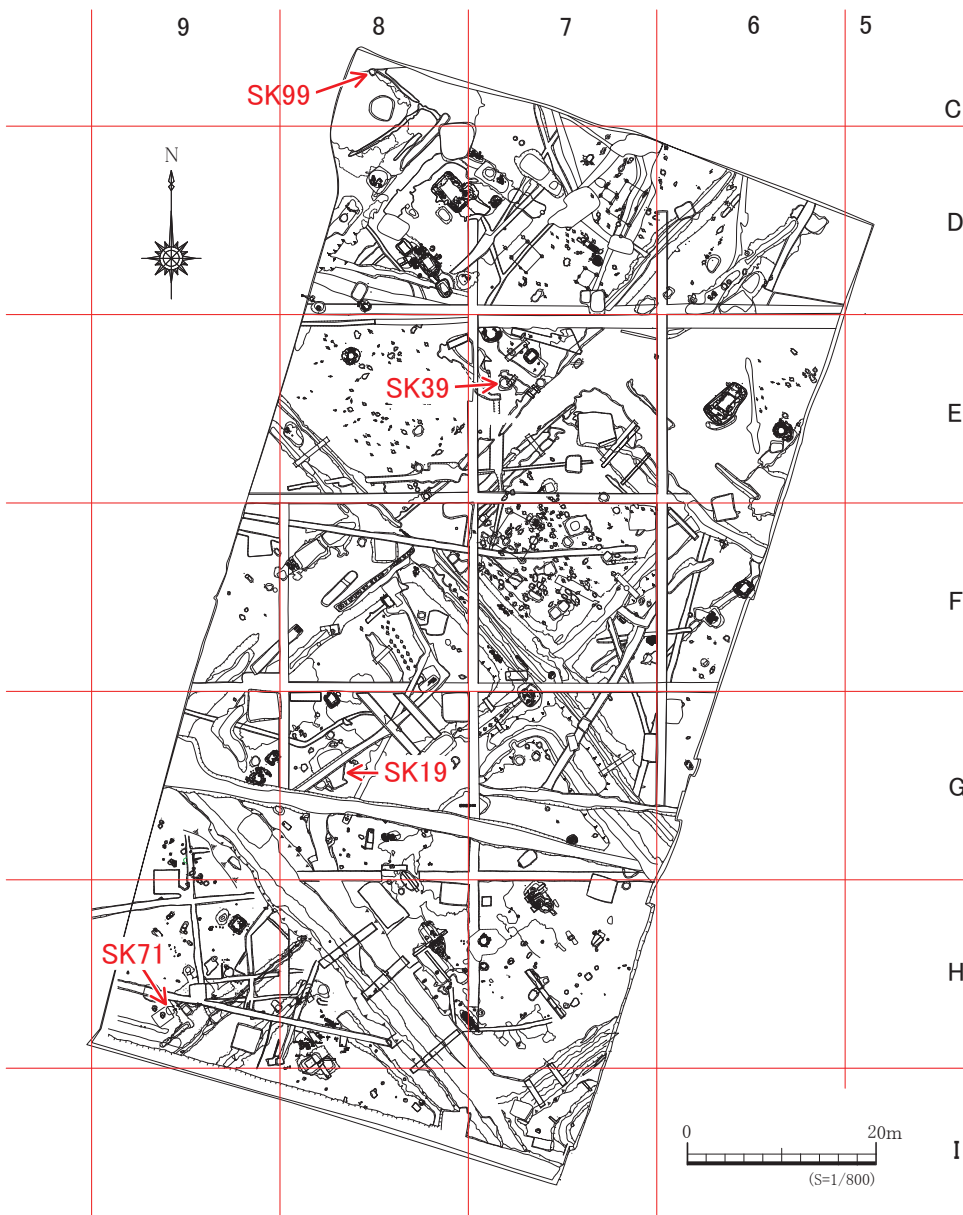
第1項 縄文時代の遺構及び遺構内出土遺物

a 遺構 (I地区)

縄文時代の遺構は、土坑が確認されている。不整な楕円形状のSK19と深く落ち込む形状のSK39、SK71、SK99がある。

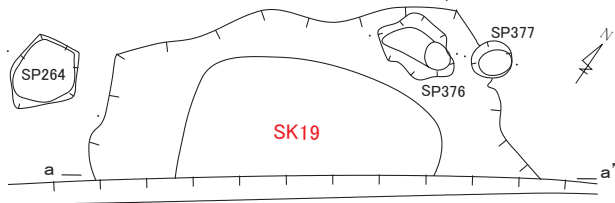
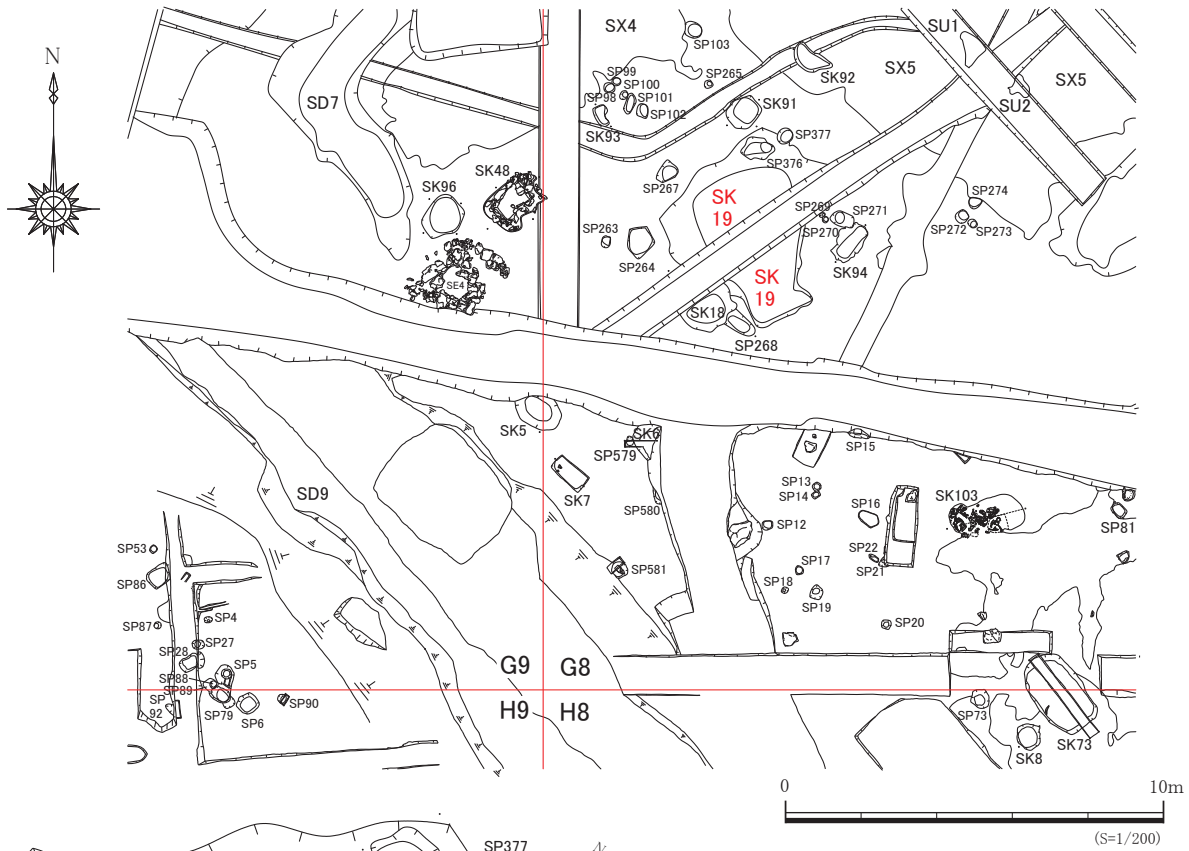
SK19は平面形4.7m×4.5mの不整な楕円形状のプランで、深さは57cmである。深さについては、中央は北東から南西方向にのびる配管による攪乱を受けているため本来の深さは不明である。また上面は近世のピットや土坑による攪乱を受けている。埋土は暗褐色粘質シルトで床面は長方形形状である。土器や石器が出土するが焼土の集中もなく性格については不明である。

SK39、SK71、SK99はともに深く落ち込む形状の土坑である。SK39は深さ2.2mで岩盤まで掘り込まれている。埋土は土器や石器などの遺物や炭粒を含む暗褐色砂質シルト層とマーヅブロックを含む層が交互に堆積している。SK71は深さ1.8mでマーヅを掘り込む。埋土は炭粒や焼土粒を含む暗褐色砂質シルトで土器・石器が出土している。SK99は深さ1.3mでマーヅを掘り込む。埋土はSK39・SK71と同様に

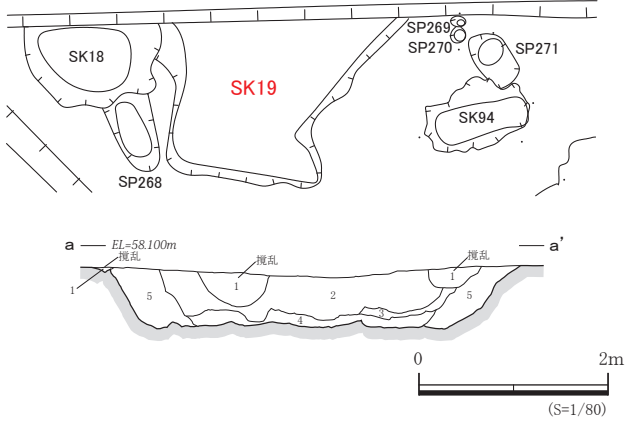


暗褐色砂質シルトであるが、遺物は出土していない。これらの土坑について、出土する遺物から縄文時代の遺構として位置付けられ、落とし穴としての性格も考えられるが詳細は不明である。

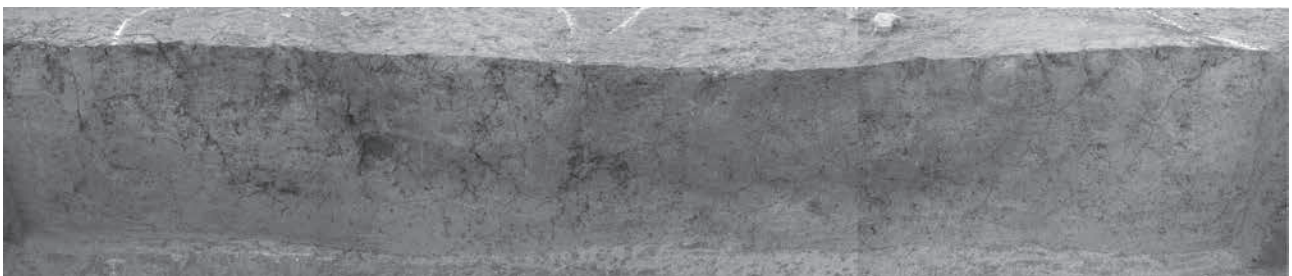
第9図 縄文時代の遺構位置図 (I地区)



SK19
 暗褐色土 粘質シルト。赤土ブロック、炭を含む。
 縄文後期～晩期相当の土器が出土。

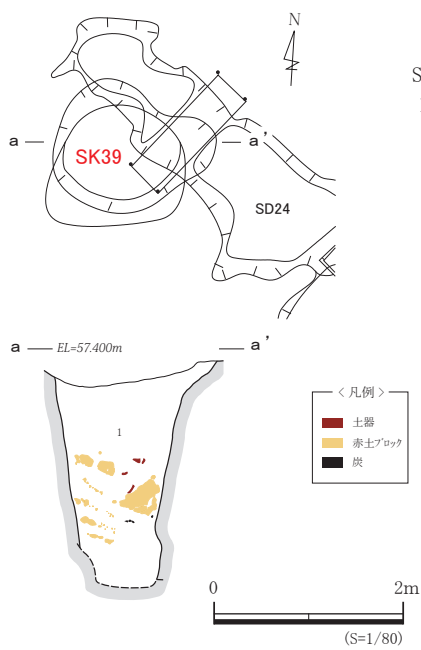
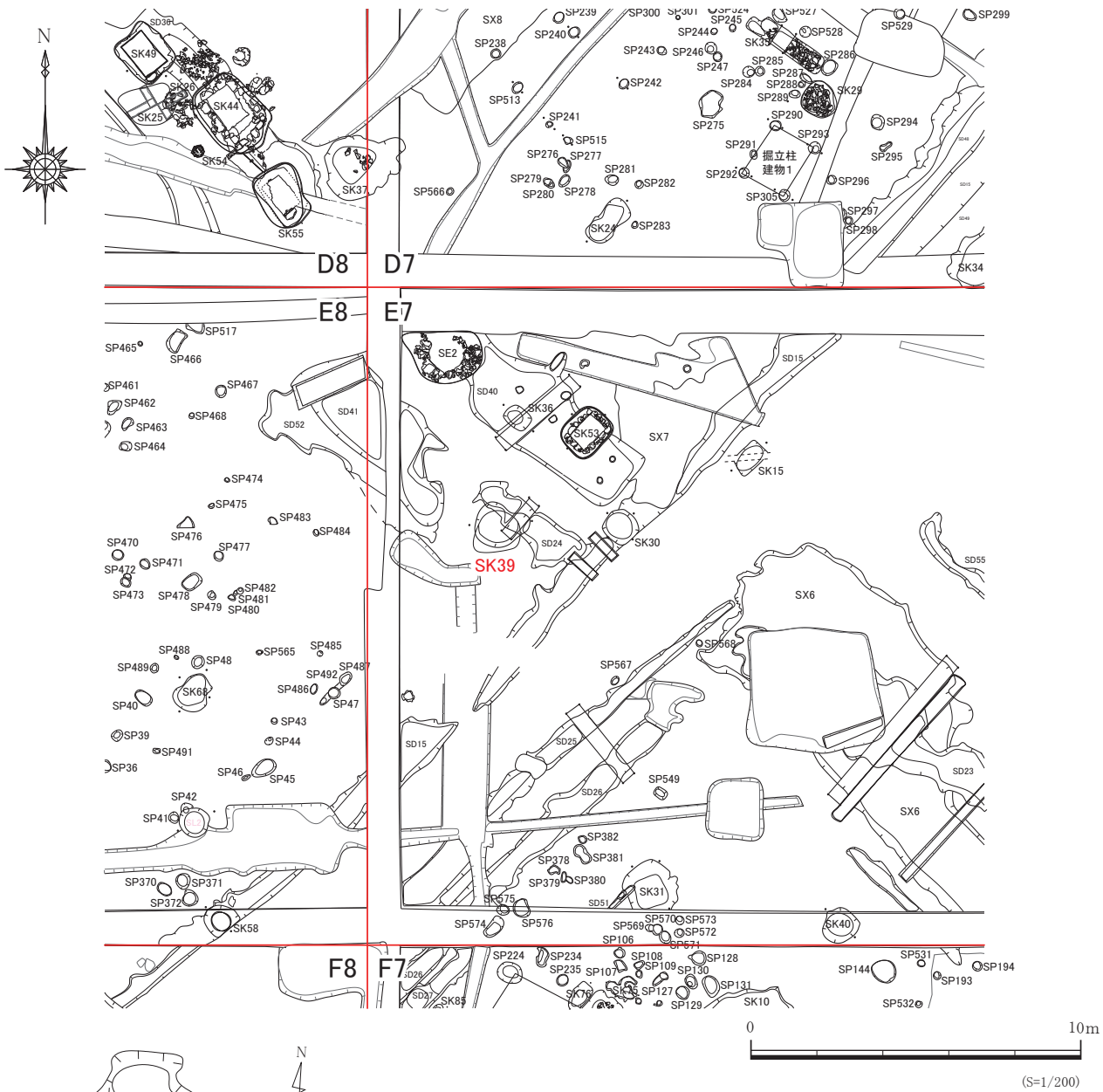


SK19 検出状況 (南西から)



SK19 半裁断面 (南東から)

第 10 図 縄文時代の遺構1 (I 地区)

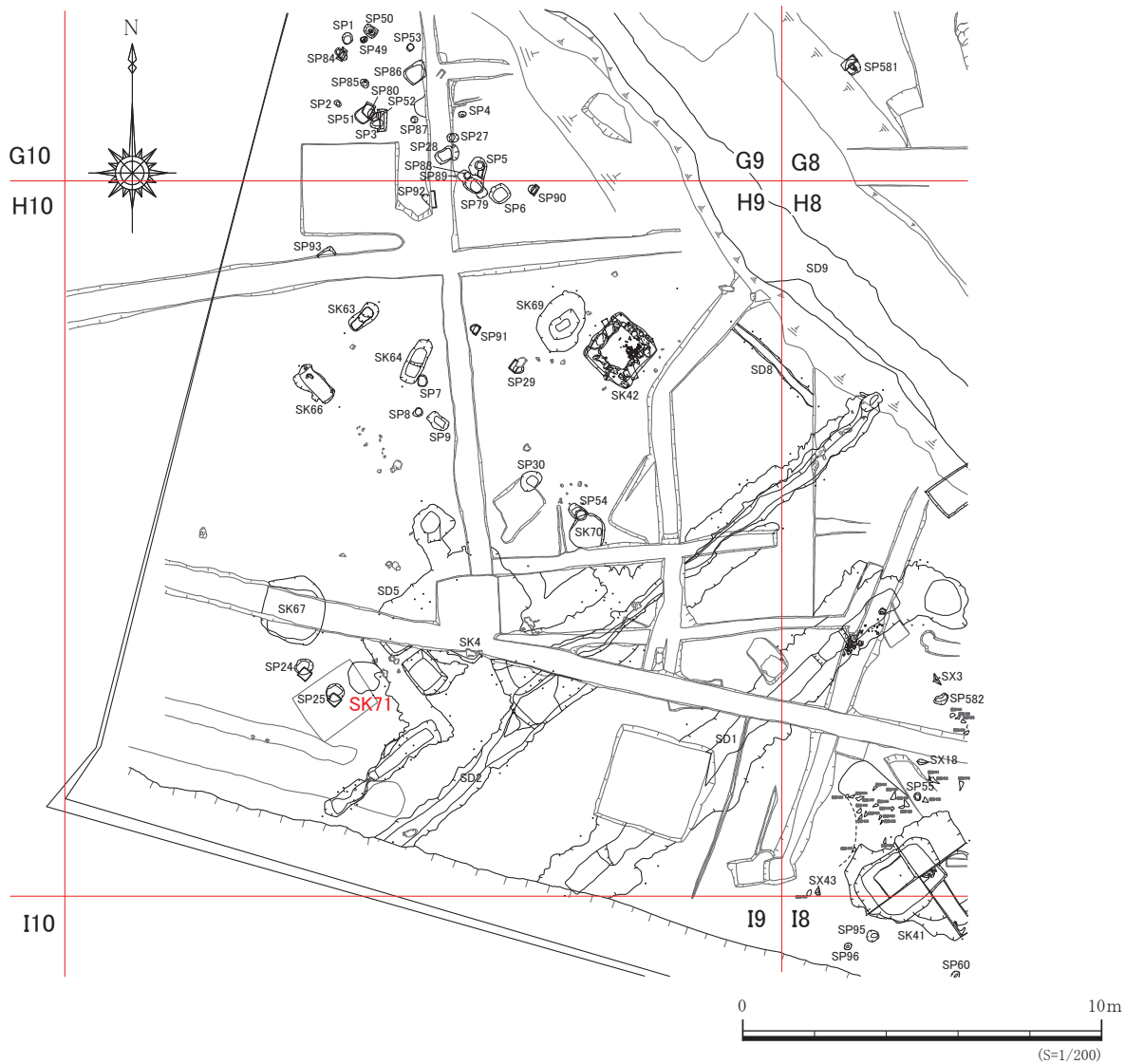


SK39
 1層 暗褐色土 砂質シルト。赤土ブロック、焼土、炭を含む。
 土器が出土。



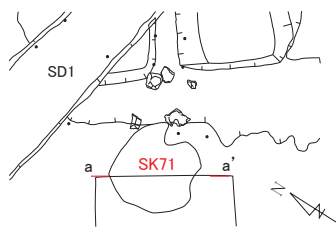
SK39 半裁断面 (南から)

第11図 縄文時代の遺構2(I地区)

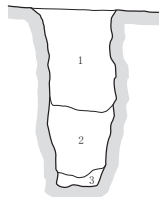


SK71

- 1層 暗褐色土 砂質シルト。炭、マンガンを含む。土器が出土。
- 2層 褐色土 粘質シルト。赤土ブロック、炭、マンガンを含む。1層より粘質が強い。
- 3層 褐色土 粘質シルト。2層より灰色を帯びる。



a — EL=59.000m — a'

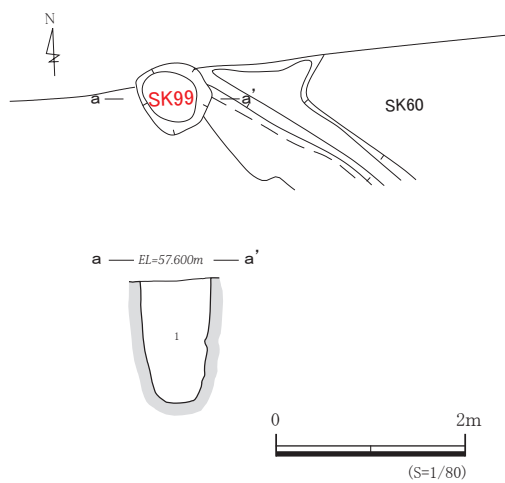
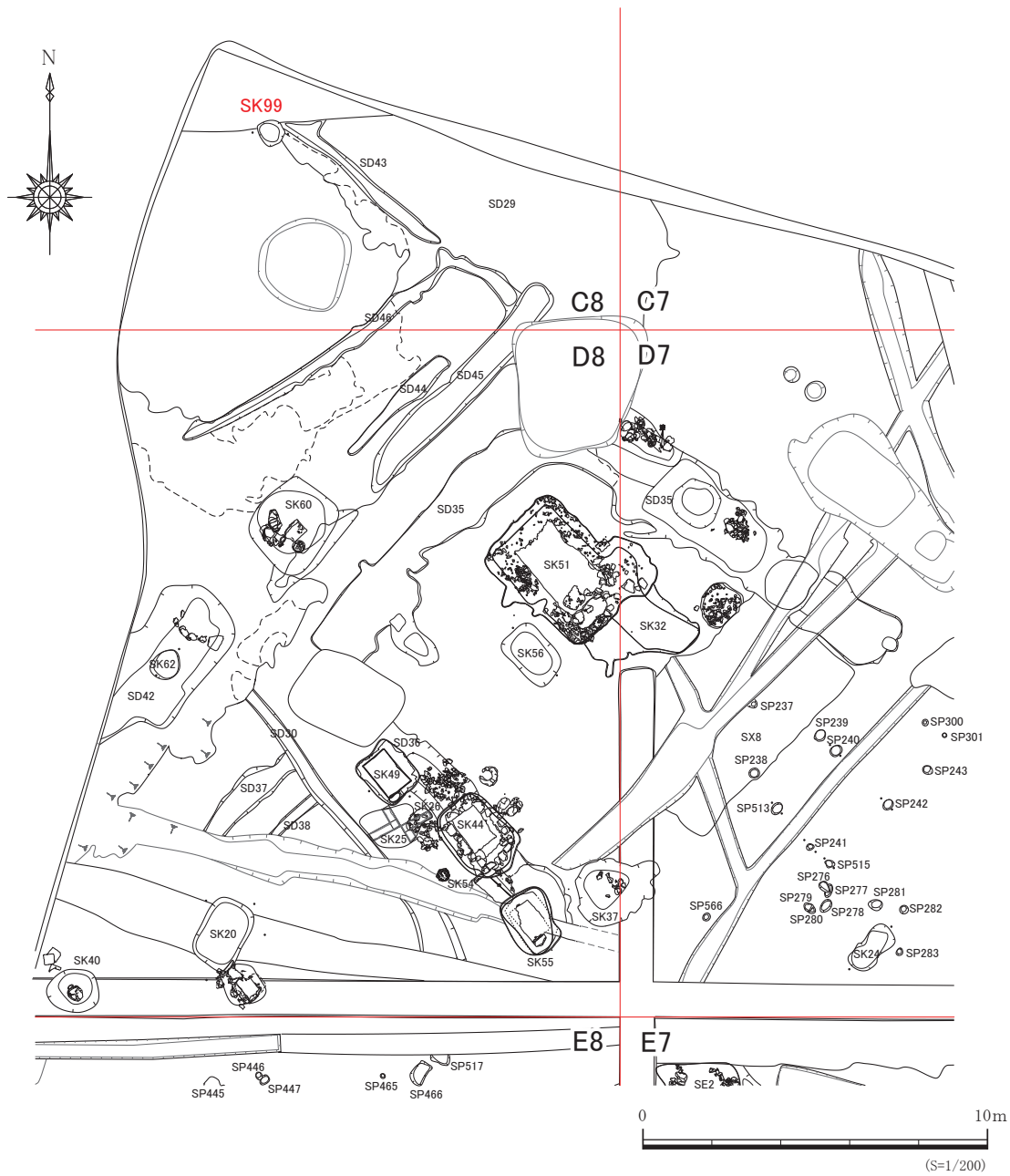


0 2m
(S=1/80)



SK71 半裁断面 (南西から)

第 12 図 縄文時代の遺構3(I 地区)



SK99 半裁断面 (北から)

第 13 図 縄文時代の遺構4(I 地区)

b 遺物 (I 地区)

縄文時代の遺構からは、土器、石器を中心に202点を検出した。土器は縄文時代後期～晩期のものが出土している。SK19は縄文時代晩期の宇佐浜式～仲原式、SK39では縄文時代後期の点刻線文系の土器が出土している。以下に個々の所見を第1表の観察表にまとめ、遺物点数等については第45表に示す。

第1表 縄文遺構出土遺物観察一覧(I地区)a

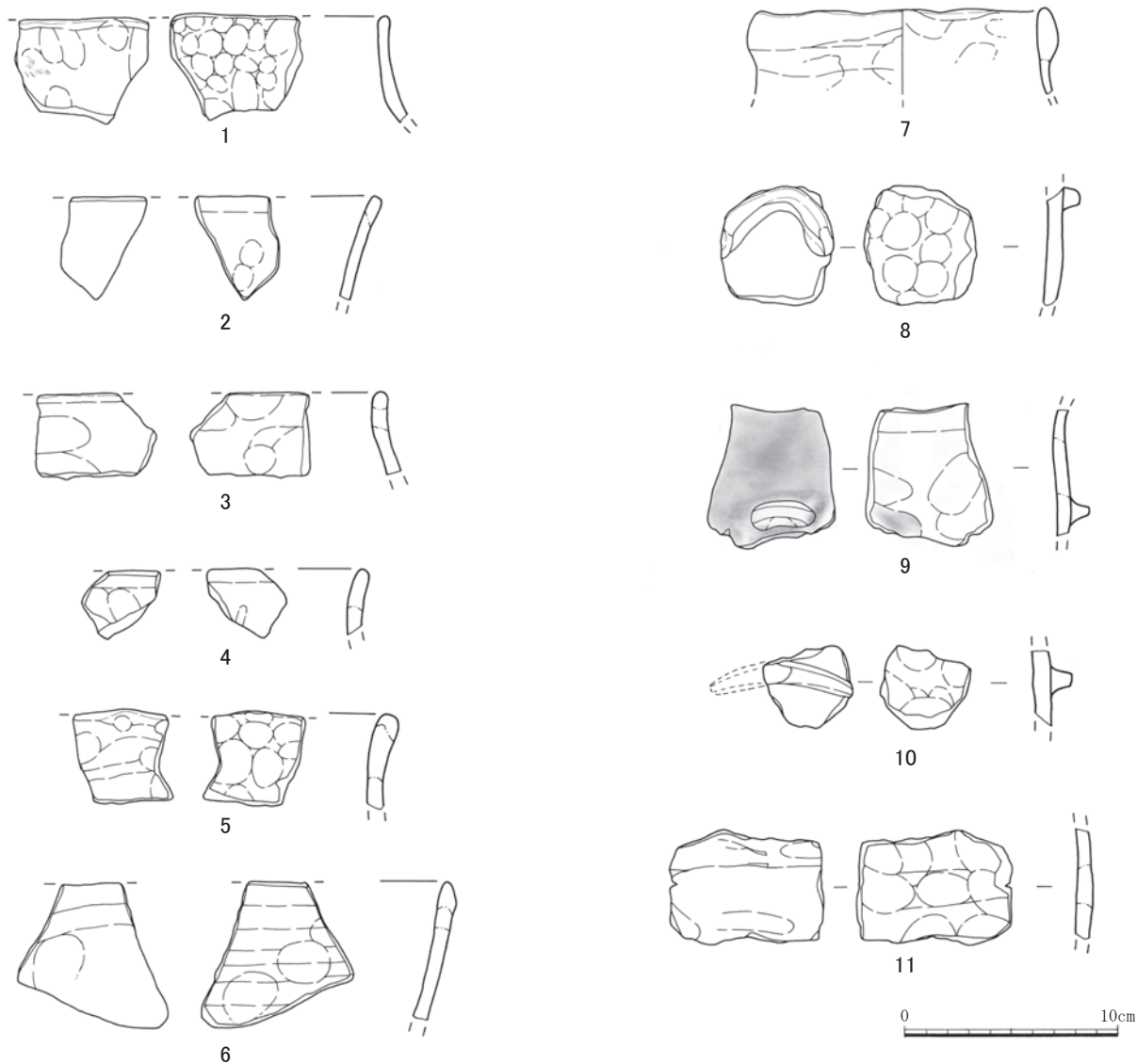
単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第14図 図版1	1	土器	鉢	口縁部	—	—	—	内外面ナデ調整で内面は指頭痕明瞭。胎土は黒褐色で泥質。混入物に赤色土粒、砂粒を含む。器面あばた状。	G-8 SK19 4層
	2	土器	鉢	口縁部	—	—	—	口唇部平坦。内外面ナデ調整。胎土は橙色で砂質。混入物に粗砂粒を多く含む。	G-8 SK19 2層
	3	土器	鉢	口縁部	—	—	—	口唇部平坦。内外面ナデ調整。胎土は鈍橙色で泥質。混入物に粗砂粒を多く含む。	G-8 SK19 4層
	4	土器	鉢	口縁部	—	—	—	内外面ナデ調整。胎土は橙色で砂質。混入物に粗砂粒を多く含む。	G-8 SK19 2層
	5	土器	鉢	口縁部	—	—	—	肥厚口縁。内外面ナデ調整で一部指頭痕明瞭。胎土は黄褐色で砂質。混入物に粗砂粒を多く含む。	G-8 SK19 4層
	6	土器	鉢	口縁部	—	—	—	肥厚口縁。内外面ナデ調整。胎土は明赤褐色で砂質。混入物に粗砂粒を多く含む。	G-8 SK19 2層
	7	土器	鉢	口縁部	14.5	—	—	肥厚口縁。内外面ナデ調整で一部指頭痕明瞭。胎土は橙色で泥質。混入物に粗砂粒を多く含む。	G-8 SK19 4層
	8	土器	鉢	胴部	—	—	—	外耳貼り付け。内外面ナデ調整。胎土は鈍橙色で泥質。混入物に粗砂粒を多く含む。内面は黒色。	G-8 SK19 4層
	9	土器	鉢	胴部	—	—	—	外耳貼り付け。内外面ナデ調整。胎土は黒褐色で泥質。混入物に赤色土粒を含む。器面あばた状。	G-8 SK19 2層
	10	土器	鉢	胴部	—	—	—	外耳貼り付け。内外面ナデ調整。胎土は橙色で砂質。混入物に粗砂粒を多く含む。内面は黒色。	G-8 SK19 2層
	11	土器	鉢	胴部	—	—	—	内外面ナデ調整。胎土は鈍黄褐色で砂質。混入物に粗砂粒を多く含む。	G-8 SK19 2層
第15図 図版1	12	石器	敲石	—	—	—	—	表面に一部滑面が残る。側面は平坦で縁辺に敲打調整痕。重量123.6g。砂岩。転用品か。	G-8 SK19 2層
	13	石器	敲石	—	—	—	—	表裏側面に研磨調整による滑面。刃部縁辺に敲打痕。重量230.6g。緑色岩。転用品か。	G-8 SK19 4層
	14	石器	磨石	—	—	—	—	表面に滑面。重量199.2g。緑色岩。	G-8 SK19 4層
	15	石器	石皿	—	—	—	—	板状の石皿片か。表裏平坦面に敲打痕。重量45.7g。砂岩。	G-8 SK19 2層
	16	土器	鉢	口縁部	—	—	—	山形口縁。叉状工具による横位・縦位区画文。胎土は褐色で砂質。混入物に粗砂粒を多く含む。	E-9 SK39 1層
	17	土器	鉢	口縁部	—	—	—	押捺刻文。胎土は褐色で泥質。脆弱で器面あばた状。	E-7 SK39 1層
	18	土器	鉢	口縁部	—	—	—	押捺刻文。胎土は橙色で泥質。脆弱で器面あばた状。	E-7 SK39 1層
	19	土器	鉢	口縁部	—	—	—	肥厚口縁部に押引文を二条施文後、重複鋸歯文。内面はへら状工具による調整痕明瞭。胎土は褐色で泥質。混入物に粗砂粒を多く含む。	E-7 SK39 1層
	20	土器	鉢	口縁部	—	—	—	肥厚口縁で口唇部平坦。胎土は褐色で泥質。脆弱で器面あばた状。	E-7 SK39 1層
	21	土器	鉢	底部	—	—	5.0	平底。胎土は褐色で泥質。器面あばた状。	E-7 SK39 1層

第1表 縄文遺構出土遺物観察一覧(I地区)b

単位:cm

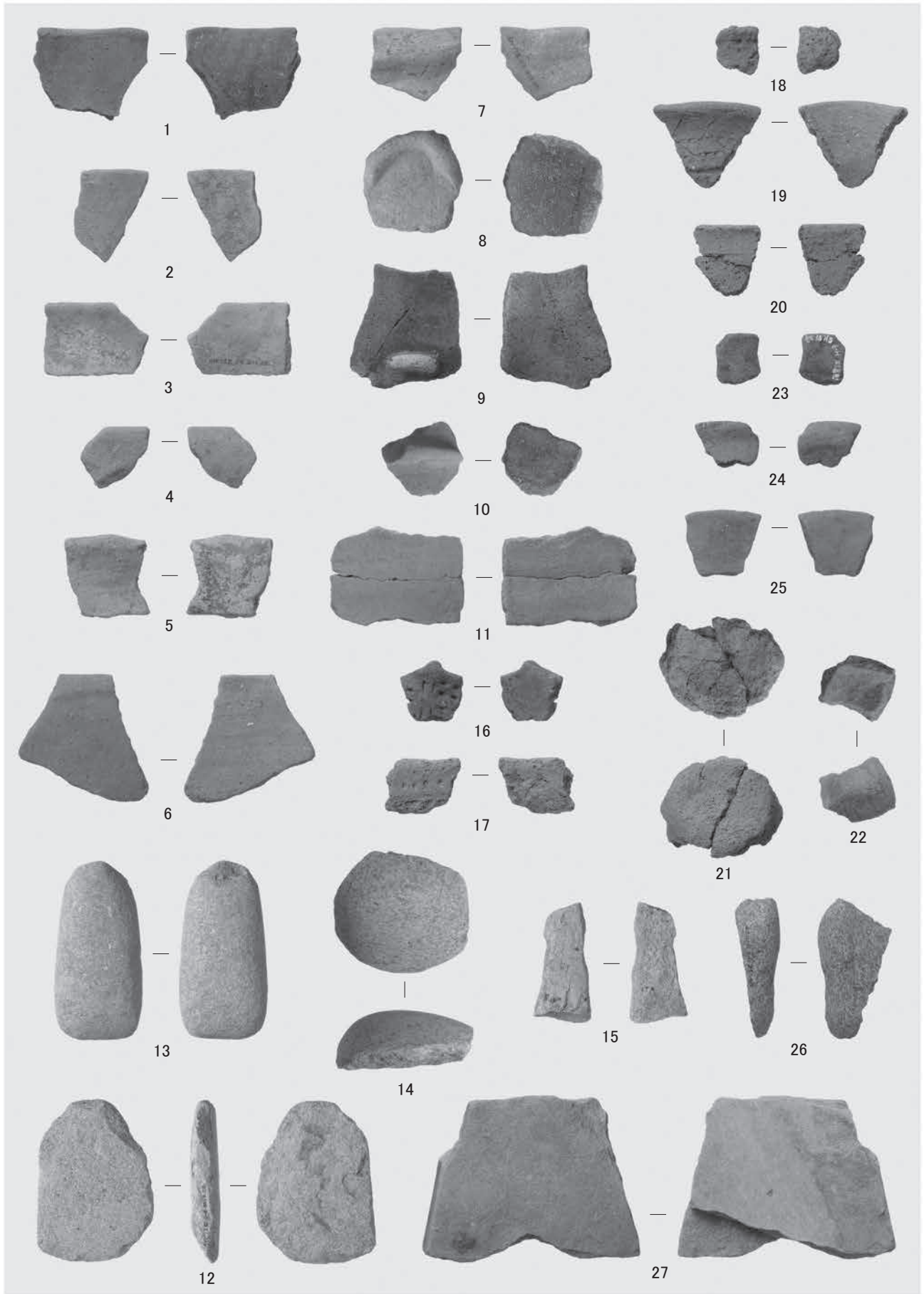
挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第15図 図版1	22	土器	鉢	底部	口径 —	器高 —	底径 4.8	平底。胎土は褐色で泥質。器面あばた状。	E-7 SK39 1層
	23	土器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	口唇部平坦。内外面ナデ調整。胎土は橙色で砂質。混入物に細砂粒を多く含む。	H-9 SK71 3層
	24	土器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	逆L字状口縁。内外面ナデ調整。胎土は黄褐色で砂質。混入物に粗砂粒を多く含む。	H-9 SK71 1層
	25	土器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	口唇部舌状。内外面に指頭痕。胎土は赤褐色で砂質。混入物に細砂粒を多く含む。	H-9 SK71 2層
	26	石器	磨石	—	口径 —	器高 —	底径 —	表面に滑面。重量69.4g。緑色岩。	H-9 SK71 2層
図版1	27	石器	石皿	—	口径 —	器高 —	底径 —	板状の石皿片か。表裏平坦面に敲打痕と滑面。重量321.8g。砂岩。	G-8 SK19 4層



第14図 縄文 出土遺物1(I地区)



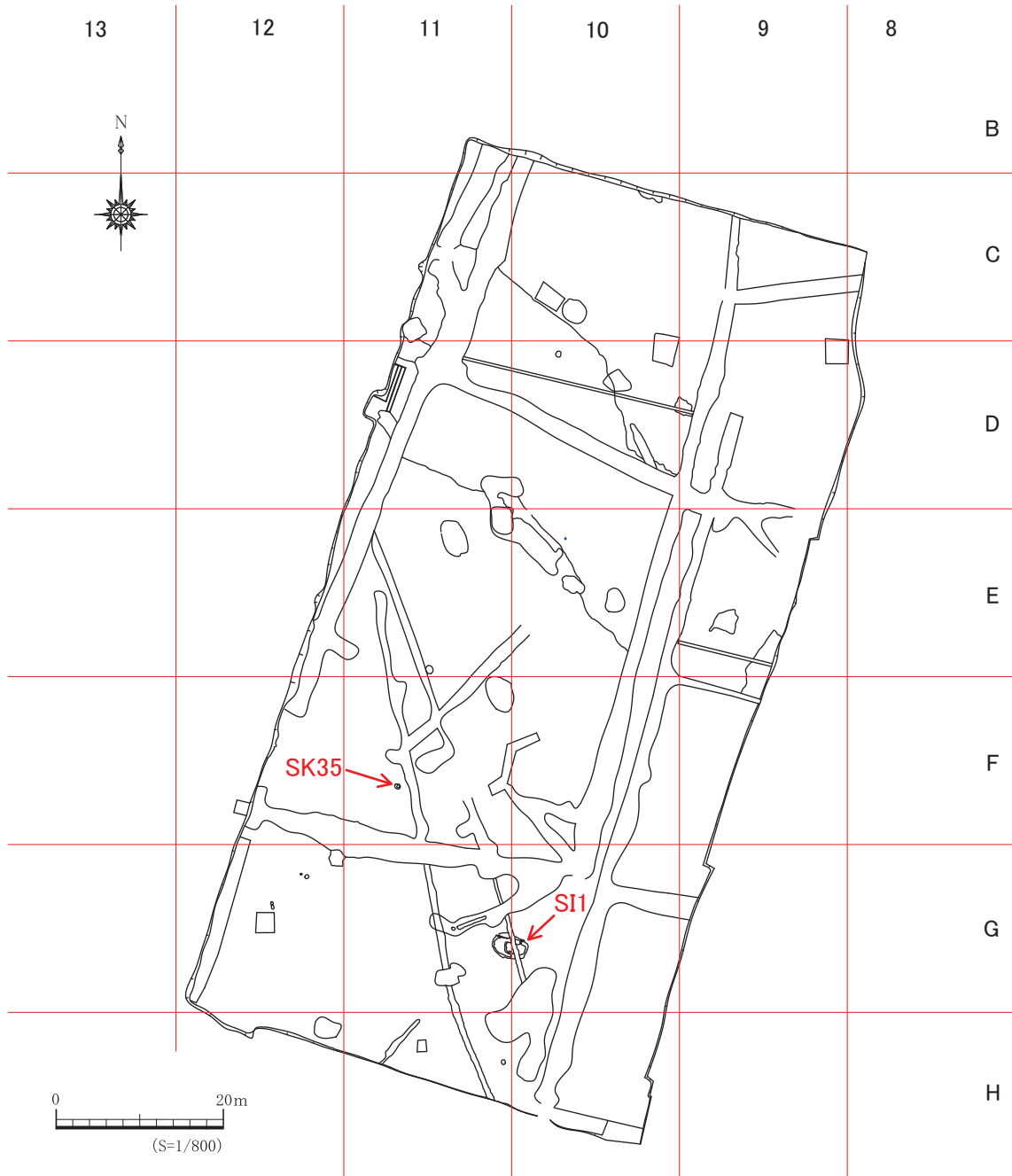
第15図 縄文 出土遺物2 (I地区)



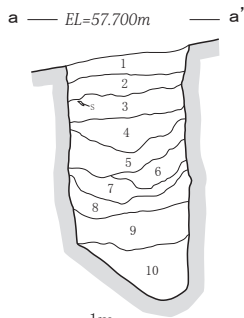
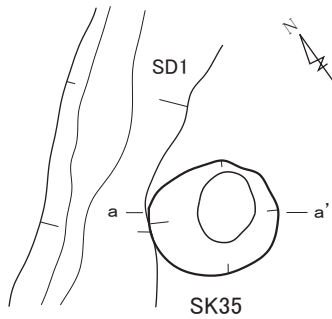
図版1 縄文 出土遺物 (I地区)

c 遺構 (Ⅱ地区)

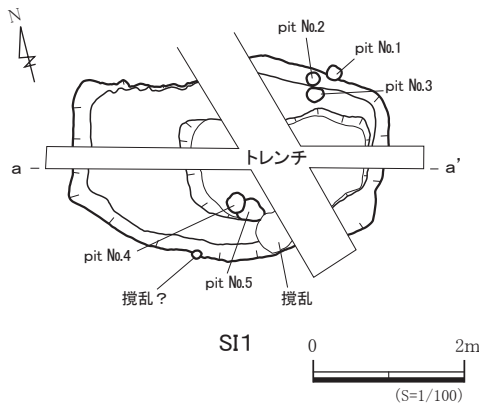
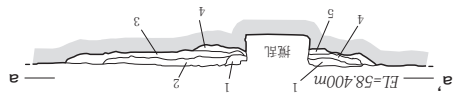
縄文時代の遺構と考えられるものは、土坑があり、SK35をあげることができる。近世～近代のピット、土坑に比べると平面形は大きく、深いという特徴があり、内部に土器等の遺物を含んでいる。SI1は中心に土器を多く含み、平面形が4.2m×2.5mの楕円形を呈し、内部及び外部にピットを配している。上面は造成等により削られていたことから、本来の深さは不明である。



第 16 図 縄文時代の遺構位置図 (Ⅱ地区)



0 1m
(S=1/40)



SK35 半裁断面 (南から)

SK35

- 1層 オリーブ色土 粘質シルト。炭を多く含む。
- 2層 オリーブ色土 粘質シルト。炭を多く含む。
- 3層 オリーブ色土 粘質シルト。炭を多く含む。
- 4層 オリーブ色土 粘質シルト。炭を多く含む。土器が出土。
- 5層 暗オリーブ色土 粘質シルト。炭を含む。土器が出土。
- 6層 暗オリーブ色土 粘質シルト。炭を含む。
- 7層 暗オリーブ色土 粘質シルト。炭を含む。
- 8層 オリーブ黒色土 粘質シルト。炭を含む。
- 9層 暗褐色土 粘質シルト。
- 10層 暗褐色土 粘質シルト。

Pit No.1

- 1層 黒褐色土 粘質シルト。焼土を含む。
- 2層 黒褐色土 粘質シルト。炭、焼土を含む。
- 3層 黒褐色土 粘質シルト。

Pit No.4

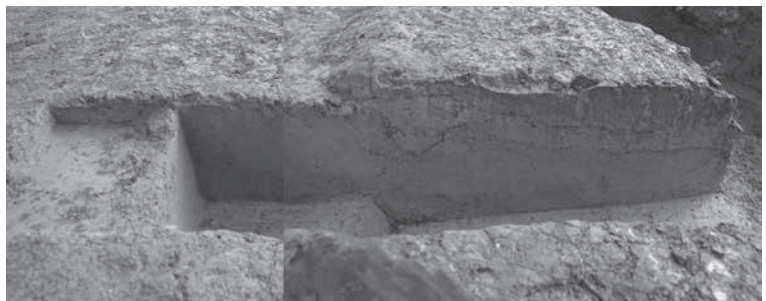
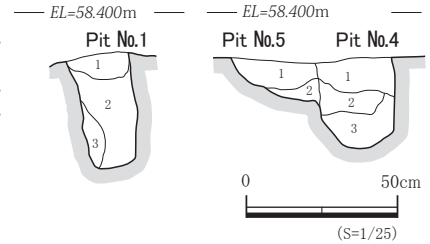
- 1層 黒褐色土 粘質シルト。炭、焼土を含む。
- 2層 黒褐色土 粘質シルト。炭を含む。
- 3層 黒褐色土 粘質シルト。

Pit No.5

- 1層 黒褐色土 粘質シルト。焼土を含む。
- 2層 黒褐色土 粘質シルト。

SI1

- 1層 黒褐色土 粘質シルト。炭、焼土を含む。土器片が出土。
- 2層 黒褐色土 粘質シルト。炭、焼土を含む。
- 3層 黒褐色土 粘質シルト。炭、焼土を含む。
- 4層 黄褐色土 粘質シルト。焼土を含む。
- 5層 黄褐色土 粘質シルト。



SI1 トレンチ断面 (北から)



SI1 トレンチ断面 (北から)

第17図 縄文時代の遺構 (II地区)



S11検出状況（南から）

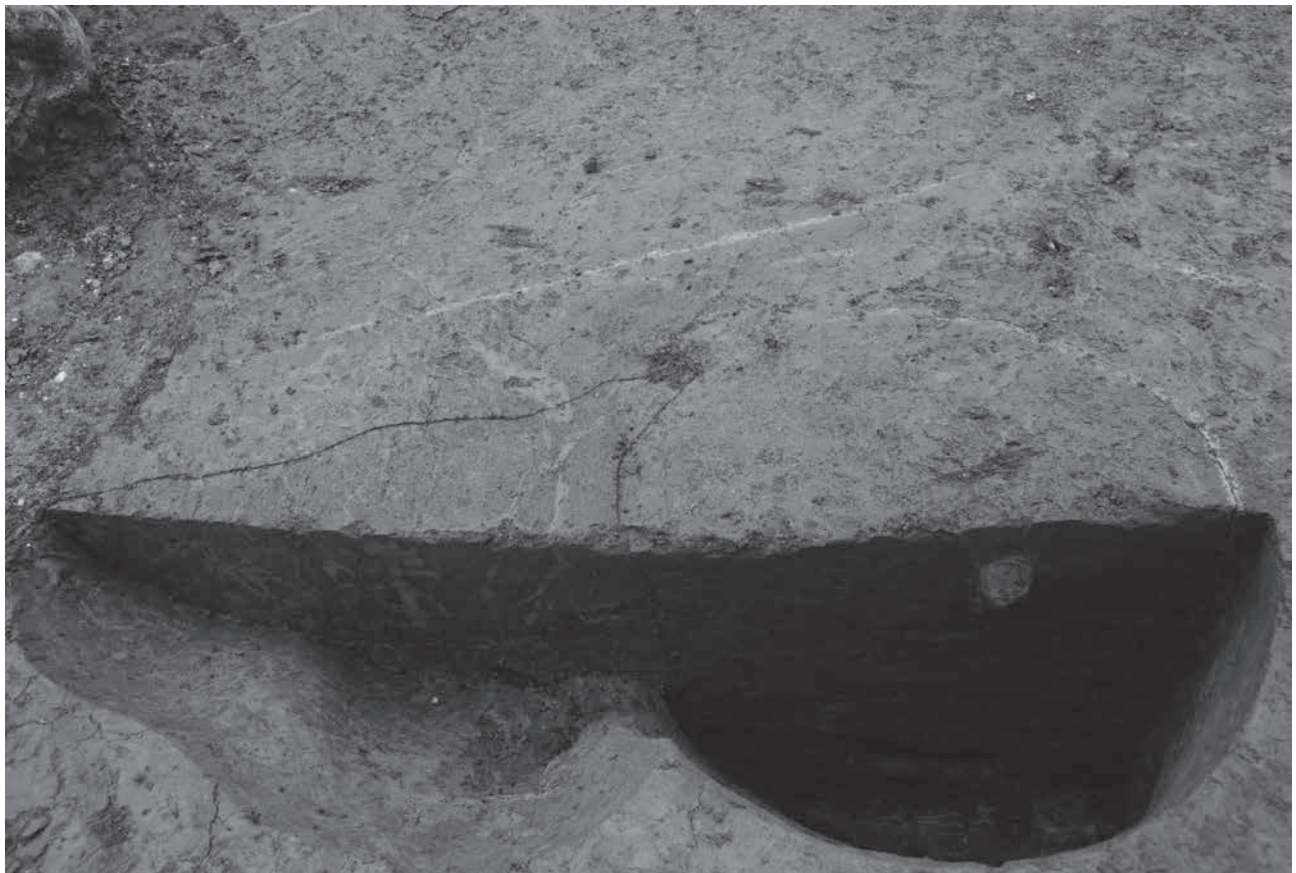


S11完掘状況（南から）

図版2 縄文時代の遺構1（Ⅱ地区）



S11 PitNo.1 半裁断面（東から）



S11 PitNo.4・5 半裁断面（東から）

図版3 縄文時代の遺構2(Ⅱ地区)

d 遺物 (II 地区)

縄文時代の遺構からは、土器、石器を主として442点を検出した。土器は縄文晩期のものが出土している。鉢の胴部が多く、底部は検出されていない。SI 1 からは仲原式が出土しており、山形口縁や外耳を持つものもある。以下に個々の所見を第2表の観察表にまとめ、遺物点数等については第46表に示す。

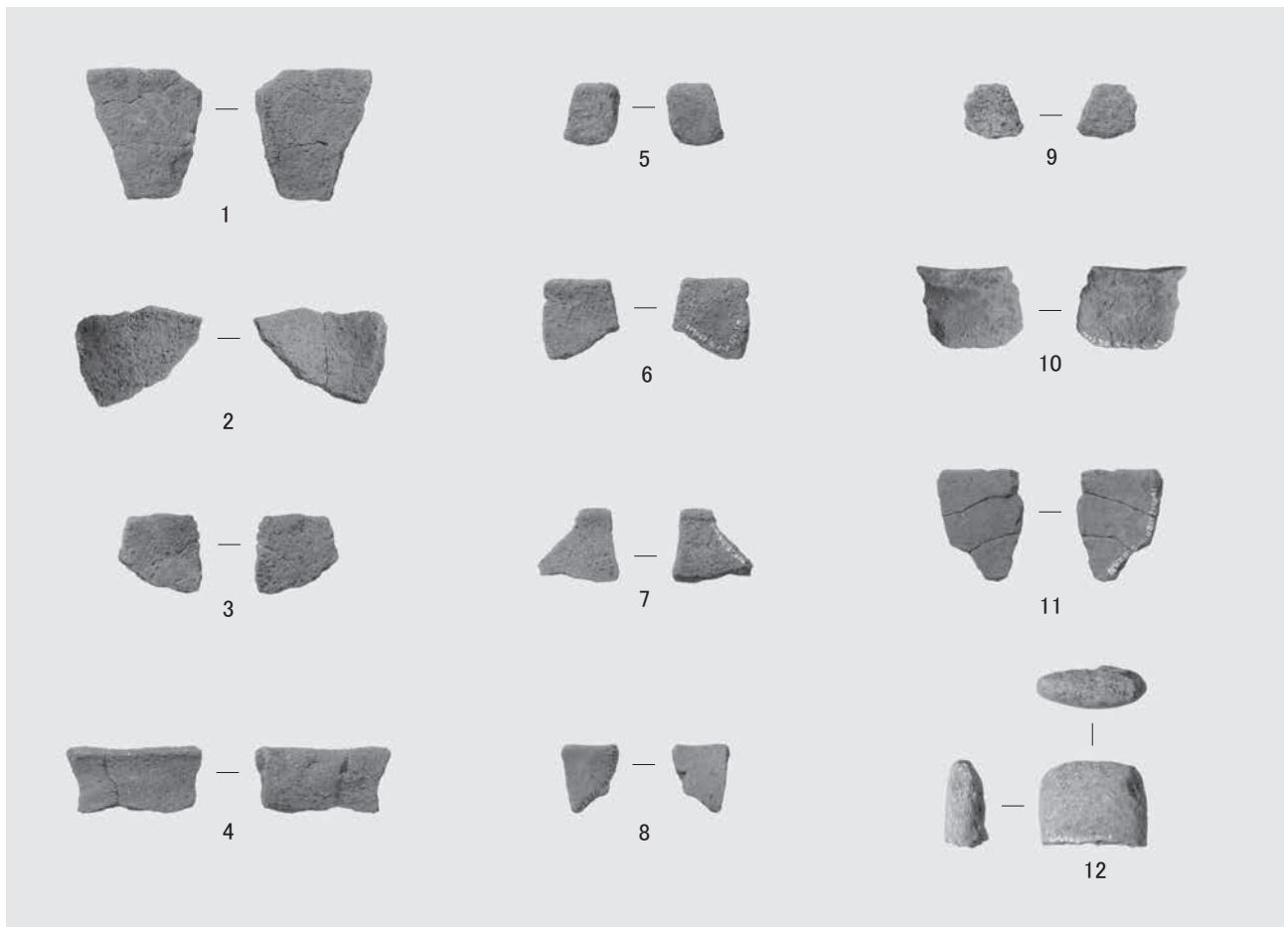
第2表 縄文遺構出土遺物観察一覧(II地区)

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第18図 図版4	1	土器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	内外面に指頭跡。細かい白色粒を僅かに含む。内外面共に橙7.5YR6/8。	G-10・11 SI1 トレンチ内1
	2	土器	壺	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	口縁は山形となる。内外面に指頭跡。黒色粒、白色粒を含む。内外面共に橙5YR6/8。	G-10・11 SI1 3層
	3	土器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	内外面に指頭跡。細かい白色粒を僅かに含む。内外面共に橙5YR4/8。	G-10・11 SI1内
	4	土器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	口縁部は僅かに肥厚する。内外面に指頭跡。白色粒、ガラス質粒、橙色粒を多く含む。内外面共に明褐7.5YR5/8。	G-10・11 SI1 2層
	5	土器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	口縁部は僅かに肥厚し、外反する。内面に指頭跡。白色粒、ガラス質粒を多く含む。内外面共に明赤褐5YR5/6。	G-10・11 SI1 遺構内 1層
	6	土器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	口縁は外反する。内外面に指頭跡。細かい白色粒を僅かに含む。外面:橙7.5YR6/8、内面:橙5YR5/8。	G-10・11 SI1 1層
	7	土器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	口縁部内側に沈線を巡らす。外面に指頭跡。白色粒を含む。外面:明赤褐5YR5/8、内面:褐7.5YR4/6。	G-10・11 SI1 1層
	8	土器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	外面は滑らか。白色粒、赤色粒を含む。内外面共に明褐7.5YR5/8。	G-10・11 SI1 ピット4
	9	土器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	口縁部は僅かに肥厚し外反する。黒色粒、白色粒を含む。内外面共に橙7.5YR7/6。	G-10・11 SI1 2層
	10	土器	鉢	耳	口径 —	器高 —	底径 —	口縁内外へ肥厚させ、口唇を平坦に作る。外面に指頭跡。白色粒、黒色粒、橙色粒を含む。外面:橙5YR6/8、内面:橙7.5YR6/8。	G-10・11 SI1 1層
	11	土器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	胴部から口縁部へ直行する。内外面に指頭跡。白色粒、赤色粒を含む。外面:褐10YR4/4、内面:明褐7.5YR5/6。	G-10・11 SI1 トレンチ内1
	12	石器	石斧	—	口径 —	器高 —	底径 —	表面、側面は研磨されるが、裏面は研磨されない。重量39.0g。	G-10・11 SI1 1層



第 18 図 縄文 出土遺物 (Ⅱ地区)

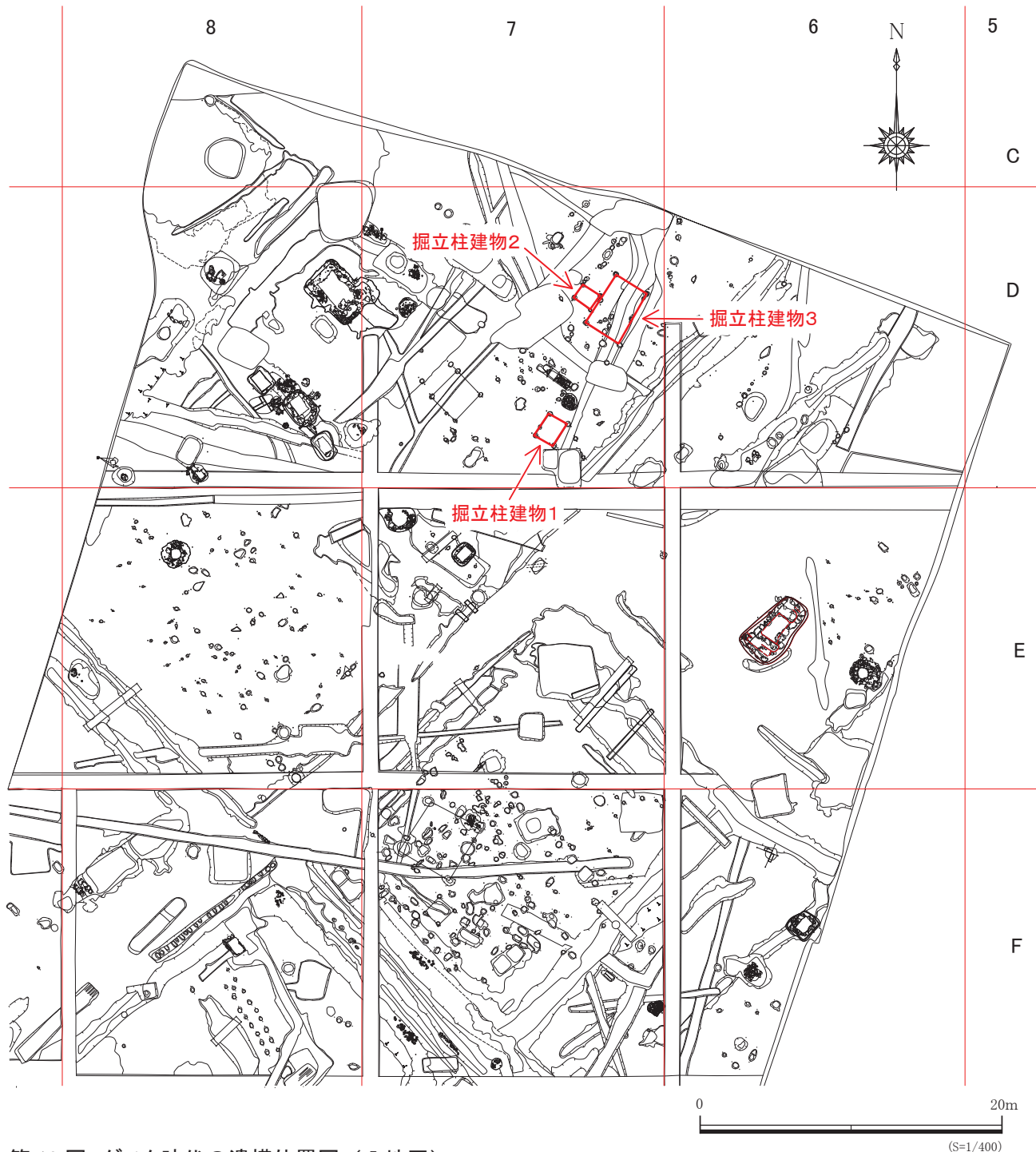


図版4 縄文 出土遺物 (Ⅱ地区)

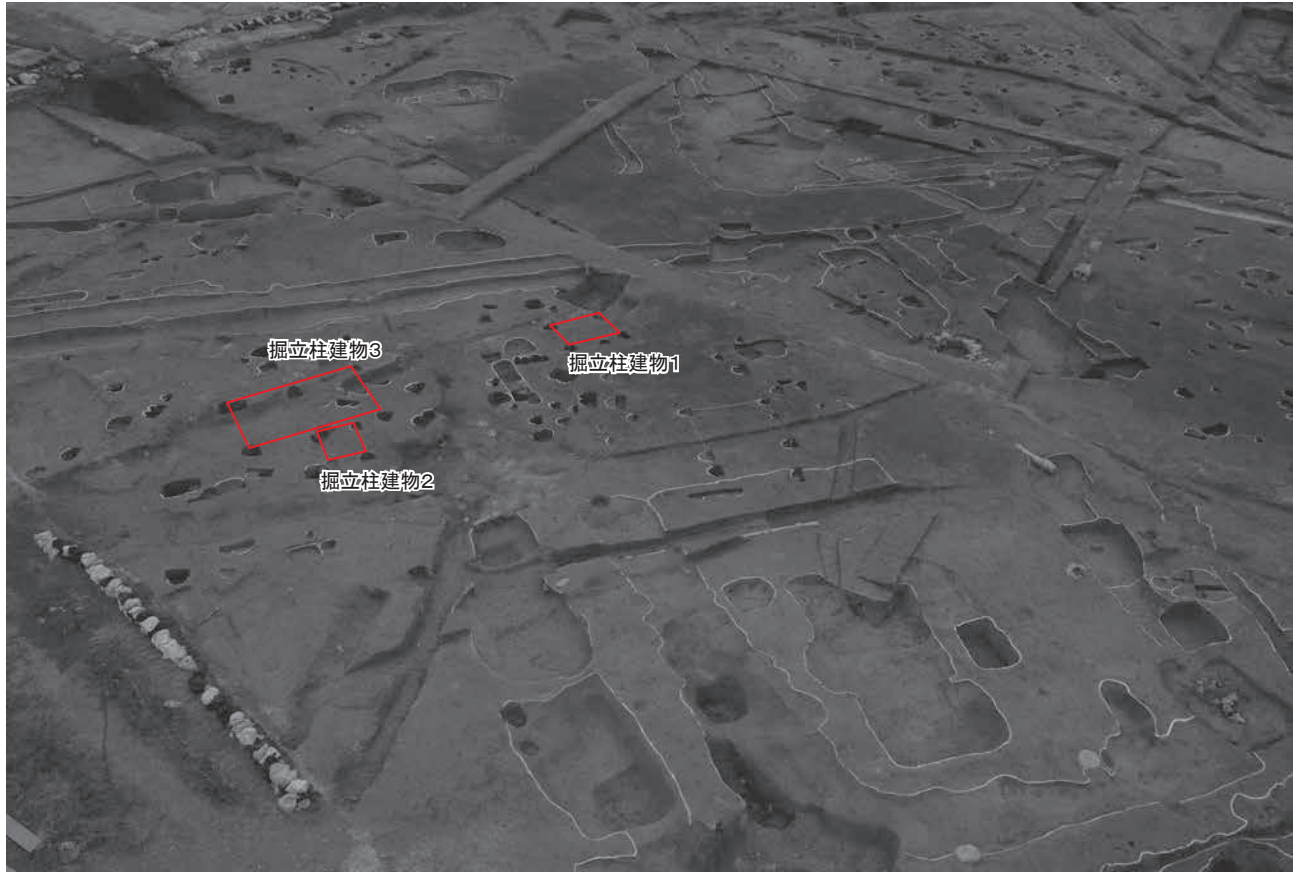
第2項 グスク時代の遺構及び遺構内出土遺物

a 遺構 (I地区)

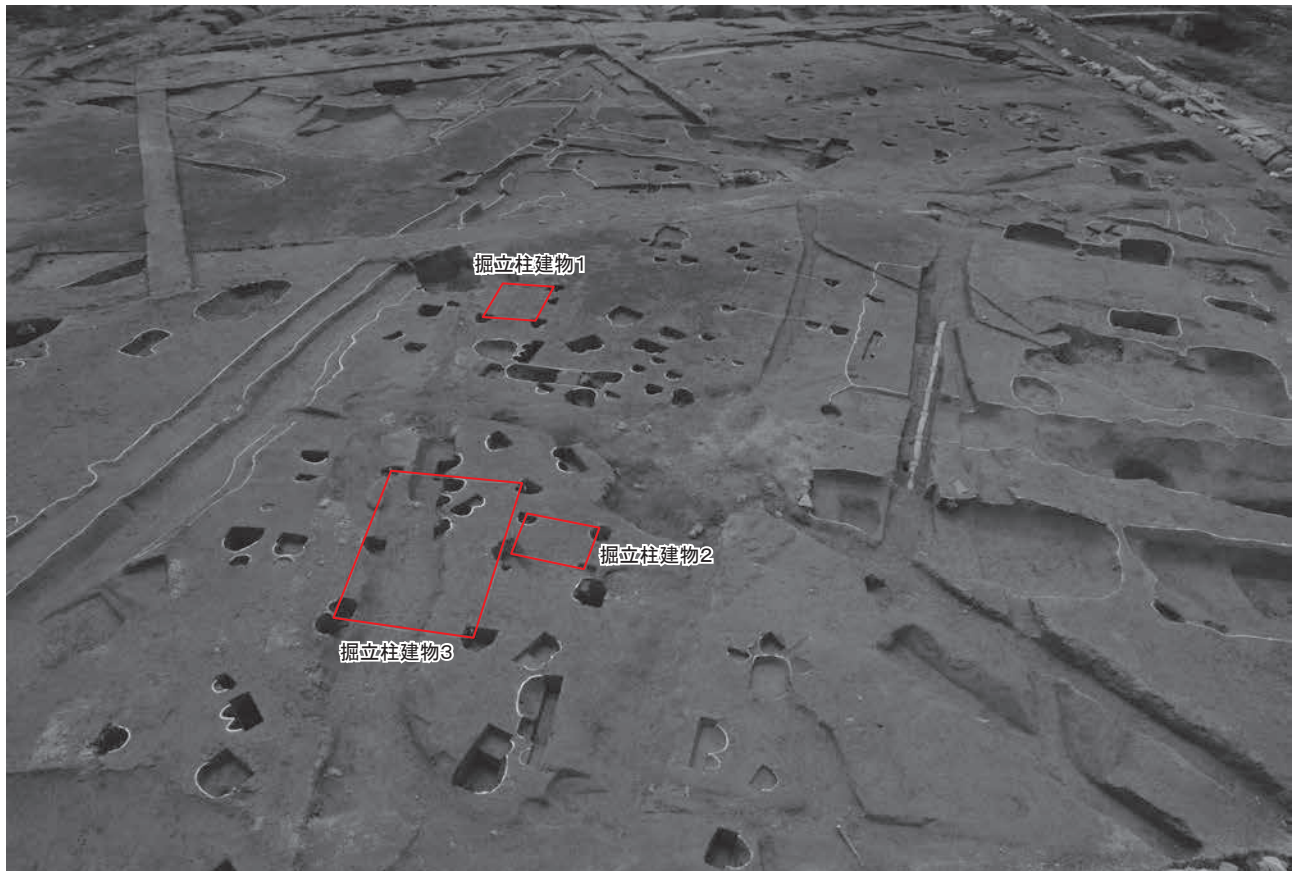
グスク時代の遺構は、D-7～E-8グリッドにおいてピット群が確認されており、I地区北側にピット群のまとまりが認められる。ピットは暗褐色砂質シルトの埋土で平面形が円形・楕円形や不定形のものが確認されており、柱痕があり掘方が方形状となるものから、柱痕がないもの、掘方が楕円形となるものなどバリエーションがある。深さも40～50cmのものから、10cm前後の浅いものまである。浅いものについては、後世に削平され底部のみが残っている可能性がある。この中でD-7グリッドのピットの位置関係や埋土から、以下の3棟の掘立柱建物プランを確認できた。



第19図 グスク時代の遺構位置図 (I地区)



掘立柱建物1～3(西から)



掘立柱建物1～3(北から)

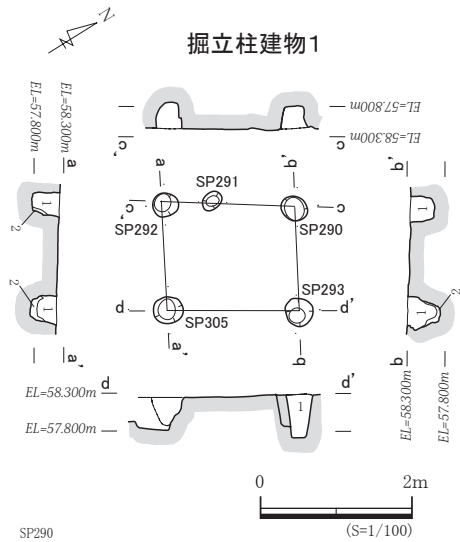
図版5 グスク時代の遺構(I地区)

掘立柱建物 1

4本柱の建物。長軸1.7m、短軸1.4mで方形を呈する。柱穴の長径32~40cm、短径32~36cm、深さ32~56cmである。

掘立柱建物 2

4本柱の建物。長軸1.4m、短軸1.0mで方形を呈する。柱穴の長径36~47cm、短径31~44cm、深さ10~36cmである。



SP290

1層 暗褐色土 砂質シルト。赤土ブロックを含む。

SP291

1層 褐色土 砂質シルト。赤土ブロック、焼土、炭を含む。

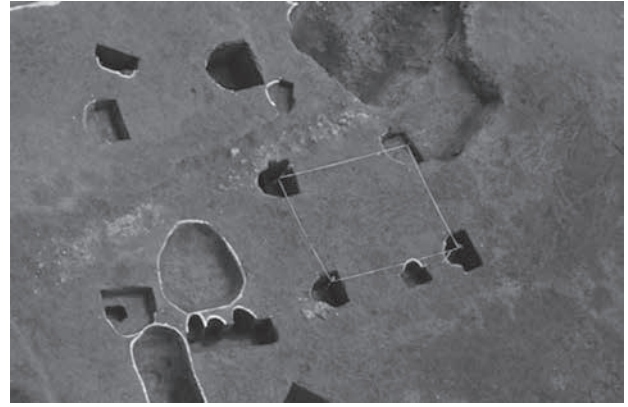
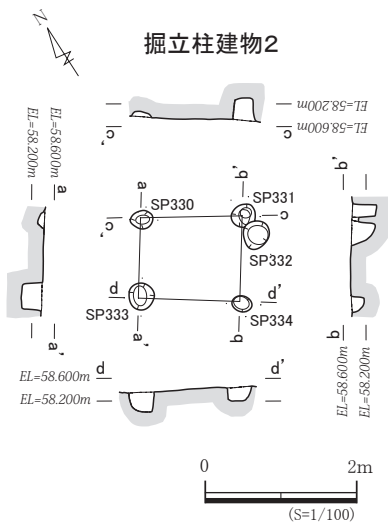
SP292

1層 暗褐色土 砂質シルト。赤土ブロック、焼土、炭を含む。

2層 暗褐色土 砂質シルト。

SP293

1層 暗褐色土 粘質シルト。赤土ブロック、焼土、炭を含む。



掘立柱建物1 完掘状況（東から）



掘立柱建物1 SP292 半裁断面（南西から）

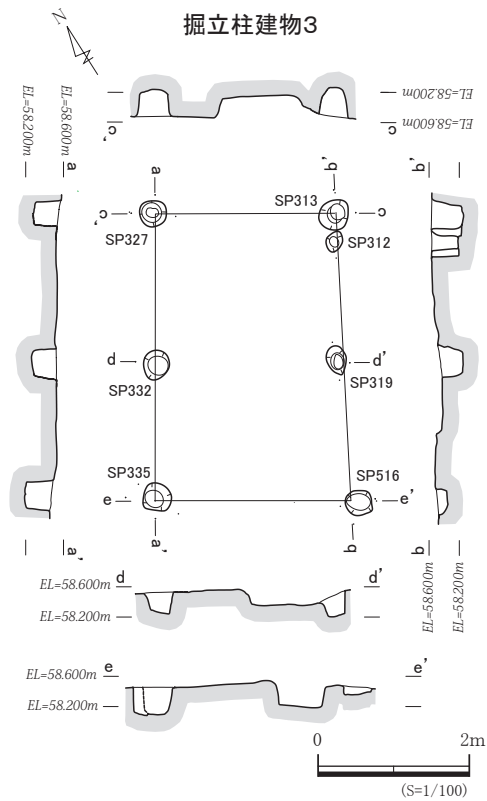


掘立柱建物2 検出状況（北東から）



掘立柱建物2 SP333 半裁断面（北西から）

第20図 グスク時代の遺構1 (I地区)



掘立柱建物3 検出状況（南東から）

掘立柱建物3

6本柱の建物。長軸3.8m、短軸2.4mで長方形を呈する。長軸は北東-南西方向である。柱間隔は1.8~2.0m。柱穴の長径35~40cm、短径35~40cm、深さ12~42cmである。

第 21 図 グスク時代の遺構2（I地区）



掘立柱建物3 SP319 半裁断面（北東から）



掘立柱建物3 SP313 半裁断面（北東から）

b 遺物（I地区）

グスク時代の遺構からの遺物の出土は無く、近世~近代のD-6グリッドSK28から土器が4点確認されているのみである。いずれも胴部小破片のため、今回は図化せず、集計のみ行った（第47表）。

c 遺構 (II地区)

グスク時代の遺構は、C-11、D-11、F-9グリッドから検出したピット群がある。周りの土と僅かに硬さ及び色調が異なっており、深さは5～10cmのものが多い。遺物、柱跡等がないことから植栽痕と考えられる。



D11 グリッド 遺構検出状況 (東から)



D11 グリッド 遺構検出状況 (西から)

d 遺構 (II地区)

I地区と同様に、本地区においてもグスク時代の遺構からの遺物の出土は僅かであり、G-12グリッドSP169から土器の鉢が1点確認されているのみである。この土器についても胴部小破片のため、今回は図化せず、集計のみ行った (第48表)。

第3項 包含層出土遺物

a I地区(Ⅲ層)

Ⅲ層より出土した遺物は総数149点である。遺物の種類としては、青磁、白磁、染付、土器、カムイヤキ、石器、石製品、石材などである。他の層に比べ、土器が多く出土している。図示および写真撮影した遺物の特徴については、観察表(第4表)に記す。

第3表 包含層(Ⅲ層)遺物出土状況(I地区)

出土地			E-7	E-7・8	E-8	F-8	F-8・9	F-9	G-8	合計
種類/器種/部位										
青磁	皿	底部						1		1
白磁	碗	口縁部			1		1			2
染付	碗	胴部		1						1
		口縁部		1						1
土器	鉢	口縁部			2		4			6
		胴部	32	30	9	1	18		4	94
		底部					1			1
	鍋	耳					1			1
		底部					1			1
	器種不明		胴部		1					
胴部					5		5			10
カムイヤキ	壺	口縁部					1			1
		胴部		2		1	1			4
		底部		1						1
石器	不明						4			4
石製品	石皿						4			4
石製品	磨石				1	1	4	1		7
石材			1				2			3
産地不明	器種不明	胴部				2	3			5
		底部		1						1
合計			33	37	18	5	51	1	4	149

第4表 包含層(Ⅲ層)出土遺物観察一覧(I地区) a

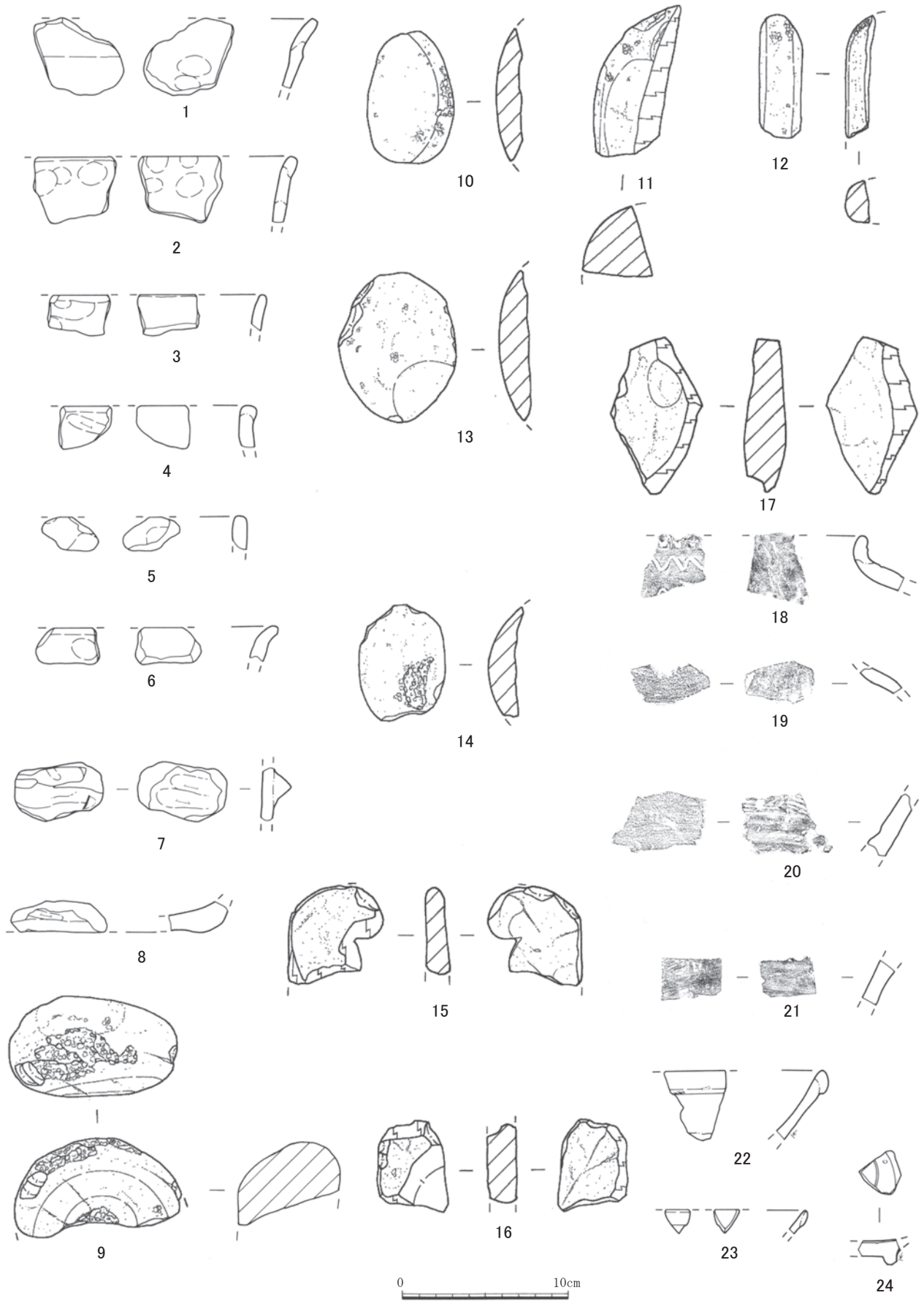
単位: cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第22図 図版6	1	土器	鉢	口縁部	—	—	—	指頭による調整の後にナデ調整(指オサエの後にナデ調整)。石英などの粗砂粒を多く混入する。口縁部は粘土を貼り付けた突帯状の稜(有段肥厚?)を有する。縄文時代後期～晩期相当の土器と考えられる。	F-8・9 Ⅲ層
	2	土器	鉢	口縁部	—	—	—	指頭による調整の後にナデ調整。口唇部は平坦。石英などの粗砂粒を多く混入する。ややアバタ状を呈する。縄文時代晩期相当の土器と考えられる。	F-8・9 Ⅲ層
	3	土器	鉢	口縁部	—	—	—	石英と思われる白色粗砂粒を多く混入する。縄文時代晩期相当の土器と考えられる。	F-8 Ⅲ層
	4	土器	鉢	口縁部	—	—	—	指頭による調整の後にナデ調整。口唇部に粘土を貼り付けて肥厚させる。口唇部は平坦。石英やチャートなどの粗砂粒を多く混入する。縄文時代晩期相当の土器と考えられる。	F-8・9 Ⅲ層
	5	土器	鉢	口縁部	—	—	—	口唇部は平坦。石英と思われる白色細砂粒を多く混入する。縄文時代晩期相当の土器と考えられる。	E-8 Ⅲ層
	6	土器	鉢	口縁部	—	—	—	指頭による調整の後にナデ調整(指オサエの後にナデ調整)。石英などの粗砂粒を多く混入する。ややアバタ状を呈する。縄文時代晩期相当の土器と考えられる。	F-8・9 Ⅲ層
	7	土器	鍋	耳	口径	器高	底径	外耳部分か。内面はナデ調整。外面に粘土を貼り付けて耳部を形成。砂粒を混入する。8と胎土が類似する。	F-8・9 Ⅲ層
	8	土器	鍋	底部	口径	器高	底径	砂粒を混入する。7と胎土が類似する。	F-8・9 Ⅲ層

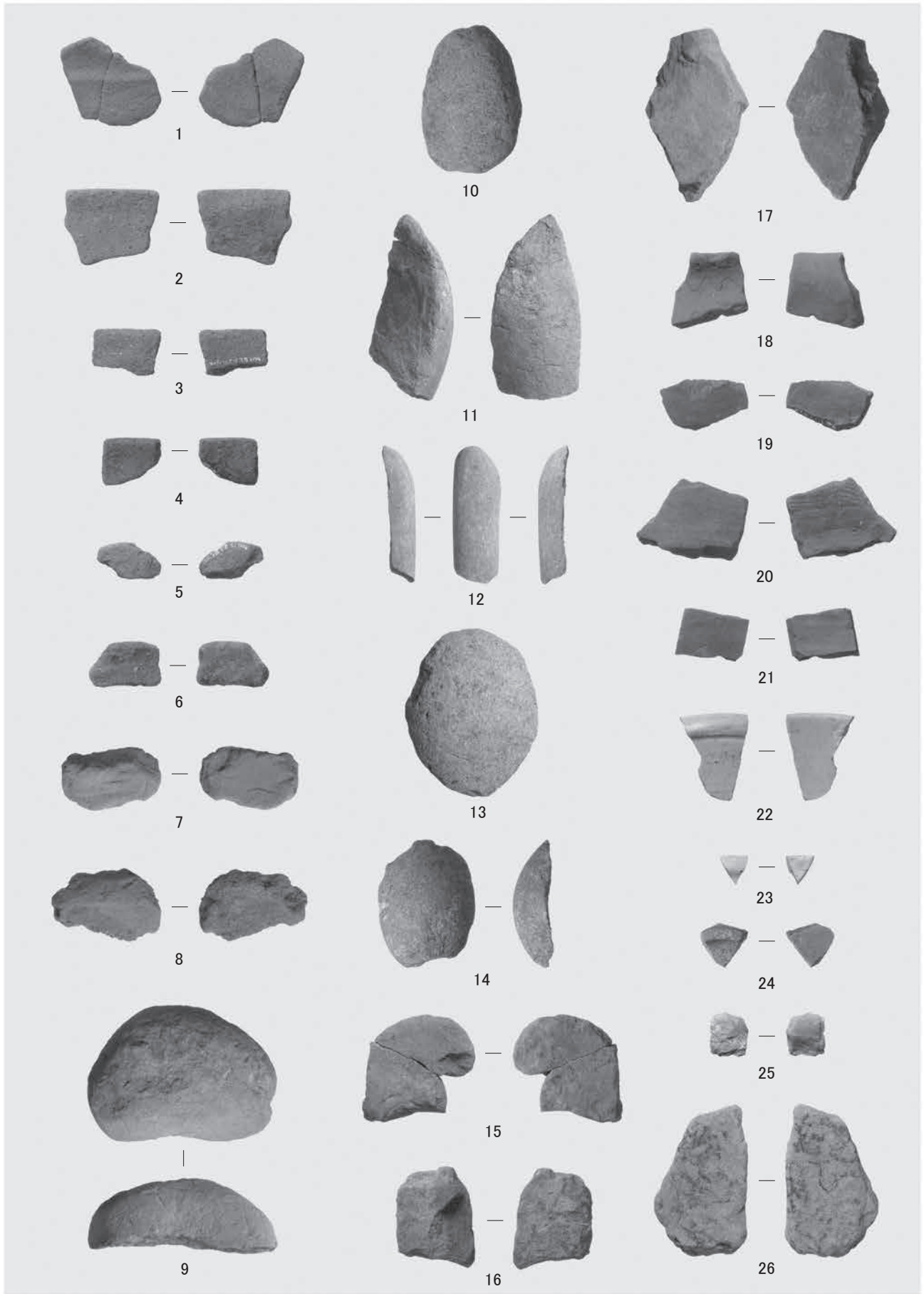
第4表 包含層(Ⅲ層)出土遺物観察一覧(I地区) b

単位: cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第22図 図版6	9	石器	磨石	—	—	—	表面に敲打痕・磨面。側面に敲打痕。緑色岩。重量430g。	F-8・9 Ⅲ層	
	10	石器	磨石	—	—	—	表面に磨面。砂岩。重量76.9g。	F-8・9 Ⅲ層	
	11	石器	磨石	—	—	—	表面及び側面に磨面。砂岩。重量197.6g。	F-8 Ⅲ層	
	12	石器	磨石	—	—	—	表裏面及び側面に磨面。緑色岩。重量51.1g。	F-8・9 Ⅲ層	
	13	石器	磨石	—	—	—	表面及び側面に磨面。砂岩。重量144.5g。	F-8・9 Ⅲ層	
	14	石器	磨石	—	—	—	表裏面及び側面に磨面。砂岩。重量78.4g。	F-9 Ⅲ層	
	15	石器	石皿	—	—	—	砂岩。重量61.6g。	F-8・9 Ⅲ層	
	16	石器	石皿	—	—	—	砂岩。重量60.7g。	F-8・9 Ⅲ層	
	17	石器	石皿	—	—	—	砂岩。重量143.1g。	F-8・9 Ⅲ層	
	18	カムイヤキ	壺	口縁部	—	—	—	外面に波状の沈線が3本めぐる。胎土は明褐色を呈し、白色粒を含む。	F-8・9 Ⅲ層
	19	カムイヤキ	壺	胴部	—	—	—	内外面ともに回転擦痕あり。胎土は暗褐色を呈し、白色粒を含む。	E-7・8 Ⅲ層
	20	カムイヤキ	壺	胴部	—	—	—	内面は当て具痕とナデ調整、外面には回転擦痕とナデ調整が施される。胎土は暗褐色を呈し、白色粒子を多く含む。	E-7・8 Ⅲ層
	21	カムイヤキ	壺	胴部	—	—	—	外面には叩き目痕が僅かにみられ、内外面ともに回転擦痕とナデ調整が施される。胎土は暗褐色を呈し、白色粒を多く含む。	F-8・9 Ⅲ層
	22	白磁	碗	口縁部	—	—	—	玉縁口縁。玉縁下端の削りが明瞭。素地は白灰色で細かい。黒色粒を含む。	F-8・9 Ⅲ層
23	白磁	碗	口縁部	—	—	—	玉縁口縁。素地は白灰色で緻密。黒色粒を含む。	E-8 Ⅲ層	
24	青磁	皿	底部	—	—	—	内外面施釉。外面は畳付まで施釉。内底に1本の圈線あり。素地は橙色で粗粒子。黒色粒、白色粒を含む。	F-8・9 Ⅲ層	
図版6	25	石器	不明	—	—	—	チャート。重量4.2g。	F-8・9 Ⅲ層	
	26	石器	石皿	—	—	—	砂岩。重量75.1g。	F-8・9 Ⅲ層	



第22图 包含層(Ⅲ層) 出土遺物(I 地区)



图版6 包含層(Ⅲ層) 出土遺物(I 地区)

b II地区(Ⅲ層)

Ⅲ層より出土した遺物は総数252点である。遺物の種類としては、青磁、白磁、染付、土器、カムイヤキ、石器、石製品、石材などである。I地区同様に土器が最も多い。図示および写真撮影した遺物の特徴については、観察表(第6表)に記す。

第5表 包含層(Ⅲ層)遺物出土状況(Ⅱ地区)

種類/器種/部位			出土地											合計	
			C-11	D-10	D-11	E-9	E-11	E-12	G-10	G-10・11	G-11	G-12	H-11		グリッド不明
青磁	碗	底部										1			1
白磁	碗	口縁部										1			1
		胴部			1							2			3
染付	碗	底部										1			1
	器種不明	胴部						1							1
瑠璃釉	小杯	口縁部										1			1
褐釉陶器	壺	口縁部													1
土器	鉢	口縁部			1										12
		胴部	36		45	1			10	10	14	28	1	17	161
		底部			2							1			3
	鍋	口縁部			1							2			3
		器種不明	胴部			3	1	4	1			24	2	9	44
	器種不明	底部	1											1	
カムイヤキ	壺	胴部									2				2
石器	石斧				1										1
石器	不明				1										1
石材			2		7	1	2				2				14
産地不明	器種不明	胴部									1				1
合計			39	0	67	3	6	2	10	10	14	67	3	31	252

第6表 包含層(Ⅲ層)出土遺物観察一覧(Ⅱ地区) a

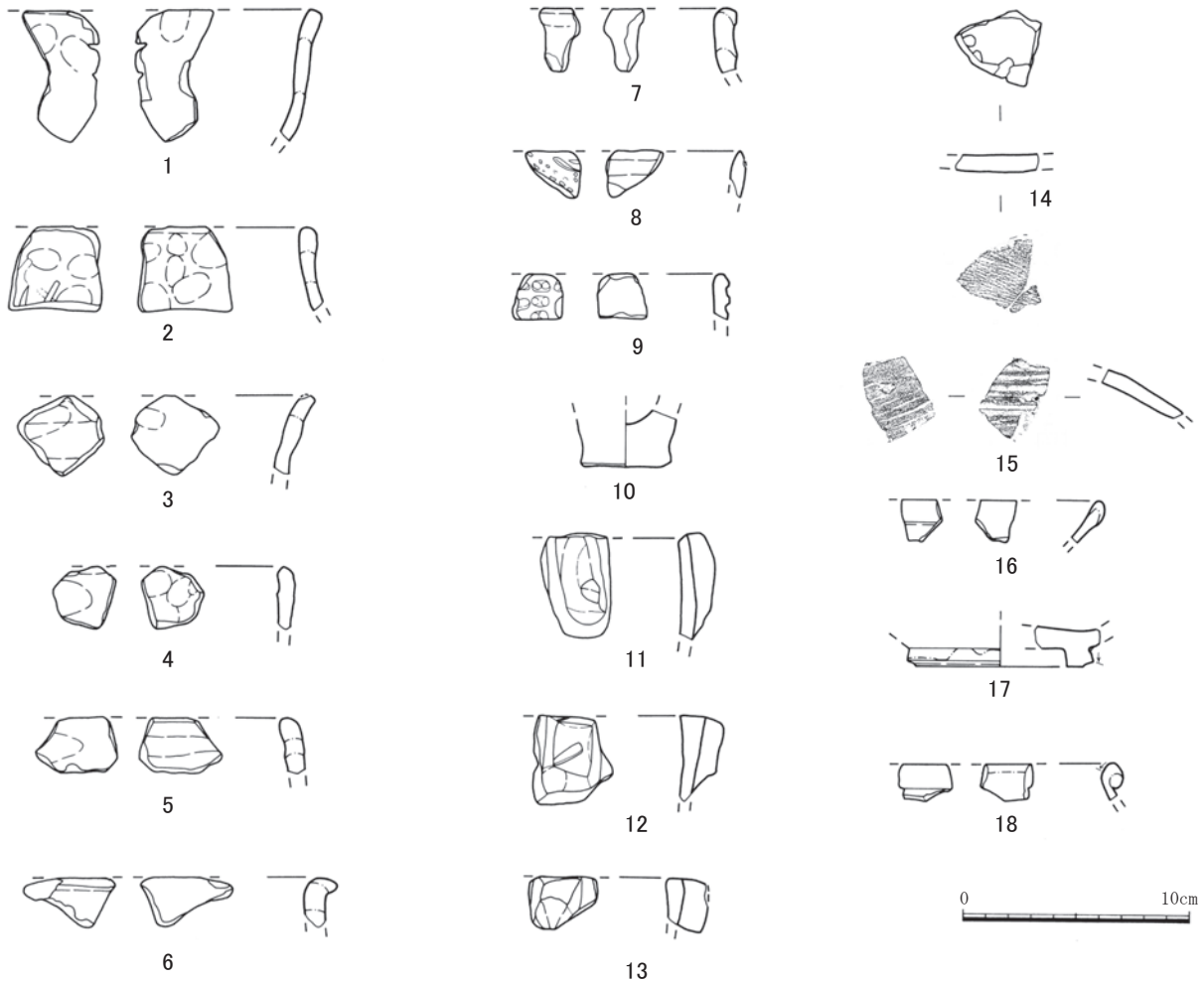
単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第23図 図版7	1	土器	鉢	口縁部	口径	器高	底径	石英の粗砂粒は確認できるが、混入物は少ない。	E-9 Ⅲ層
	2	土器	鉢	口縁部	口径	器高	底径	指頭による調整の後にナデ調整。石英などの粗砂粒を多く混入する。	グリッド不明 Ⅲ層
	3	土器	鉢	口縁部	口径	器高	底径	石英などの粗砂粒を多く混入する。	D-11 Ⅲ層
	4	土器	鉢	口縁部	口径	器高	底径	石英などの粗砂粒を多く混入する。	D-11 Ⅲ層
	5	土器	鉢	口縁部	口径	器高	底径	石英などの粗砂粒を多く混入する。	D-11 Ⅲ層
	6	土器	鉢	口縁部	口径	器高	底径	口唇部に粘土を貼り付け、口縁部の断面形状は三角形をなす。石英などの粗砂粒を多く混入する。	グリッド不明 Ⅲ層
	7	土器	鉢	口縁部	口径	器高	底径	口唇部に粘土を貼り付けて僅かに肥厚させる。口唇部は平坦。石英などの粗砂粒を混入する。	グリッド不明 Ⅲ層
	8	土器	鉢	口縁部	口径	器高	底径	口唇部に粘土を貼り付けて僅かに肥厚させる。石英などの粗砂粒を多く混入する。	D-11 Ⅲ層
	9	土器	鉢	口縁部	口径	器高	底径	横位の横捺刻文が2条確認できる。石英などの粗砂粒を多く混入する。ややアバタ状を呈する。	D-11 Ⅲ層
	10	土器	鉢	底部	口径	器高	底径	平底を呈する。目立った混入物はないが、褐色粒が僅かにみられる。乳房状尖底か?	D-11 Ⅲ層
	11	土器	鍋	口縁部	口径	器高	底径	石鍋模倣土器。縦耳の部分。石英などの粗砂粒や褐色粒混入する。	D-11 Ⅲ層
	12	土器	鍋	口縁部	口径	器高	底径	石鍋模倣土器。縦耳の部分。口唇部は平坦。石英などの粗砂粒を混入する。13と胎土の質感などが類似することより、同一個体の可能性がある。	G-12 Ⅲ層
	13	土器	鍋	口縁部	口径	器高	底径	石鍋模倣土器。縦耳の部分。口唇部は平坦。石英などの粗砂粒を混入する。12と胎土の質感などが類似することより、同一個体の可能性がある。	G-12 Ⅲ層

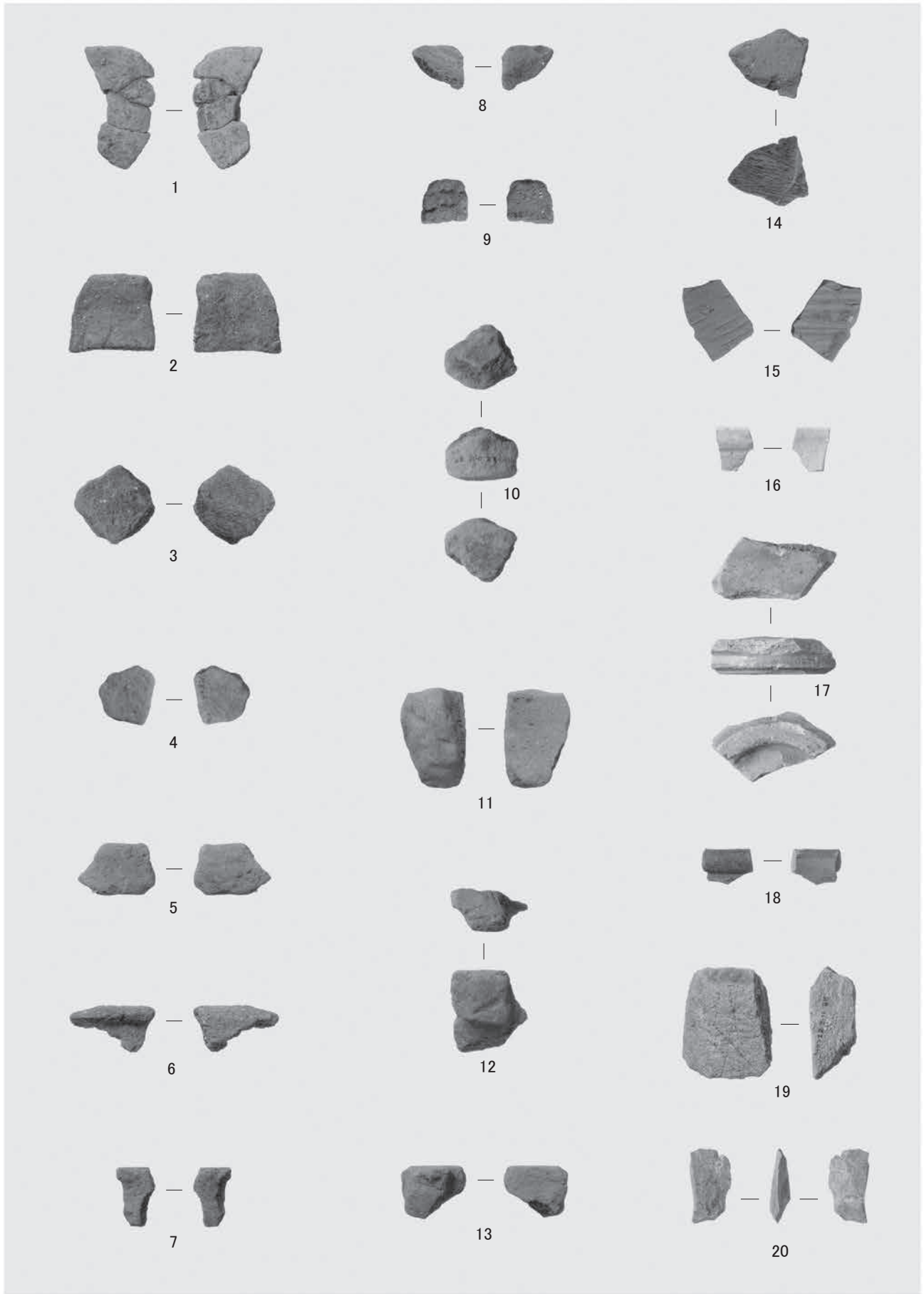
第6表 包含層(Ⅲ層)出土遺物観察一覧(Ⅱ地区) b

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
第23図 図版7	14	土器	鍋	底部	口径	器高	底径	滑石を多く混入する。内面は刷毛目調整を密に施す。	D-11 Ⅲ層
	15	カムイヤキ	壺	胴部	口径	器高	底径		
					口径	器高	底径		
					口径	器高	底径		
					口径	器高	底径		
16	白磁	碗	口縁部	口径	器高	底径	玉縁口縁。玉縁下端の削りが明瞭。素地は白色でやや緻密。	G-12 Ⅲ層	
				口径	器高	底径			
				口径	器高	底径			
17	青磁	碗	底部	口径	器高	底径	内外面施釉。見込み及び畳付から外底にかけて露胎。素地は灰白色でやや緻密。黒色粒を含む。	G-12 Ⅲ層	
				口径	器高	底径			
18	褐釉陶器	壺	口縁部	口径	器高	底径	内面口縁部以下は露胎。素地は橙色でやや粗い。白色粒、透明粒を僅かに含む。	D-11 Ⅲ層	
				口径	器高	底径			
図版7	19	石器	石斧	—	口径	器高	底径	表面に磨面?砂岩。重量62.9g。	D-11 Ⅲ層
	20	石器	不明	—	口径	器高	底径		



第23図 包含層(Ⅲ層)出土遺物(Ⅱ地区)

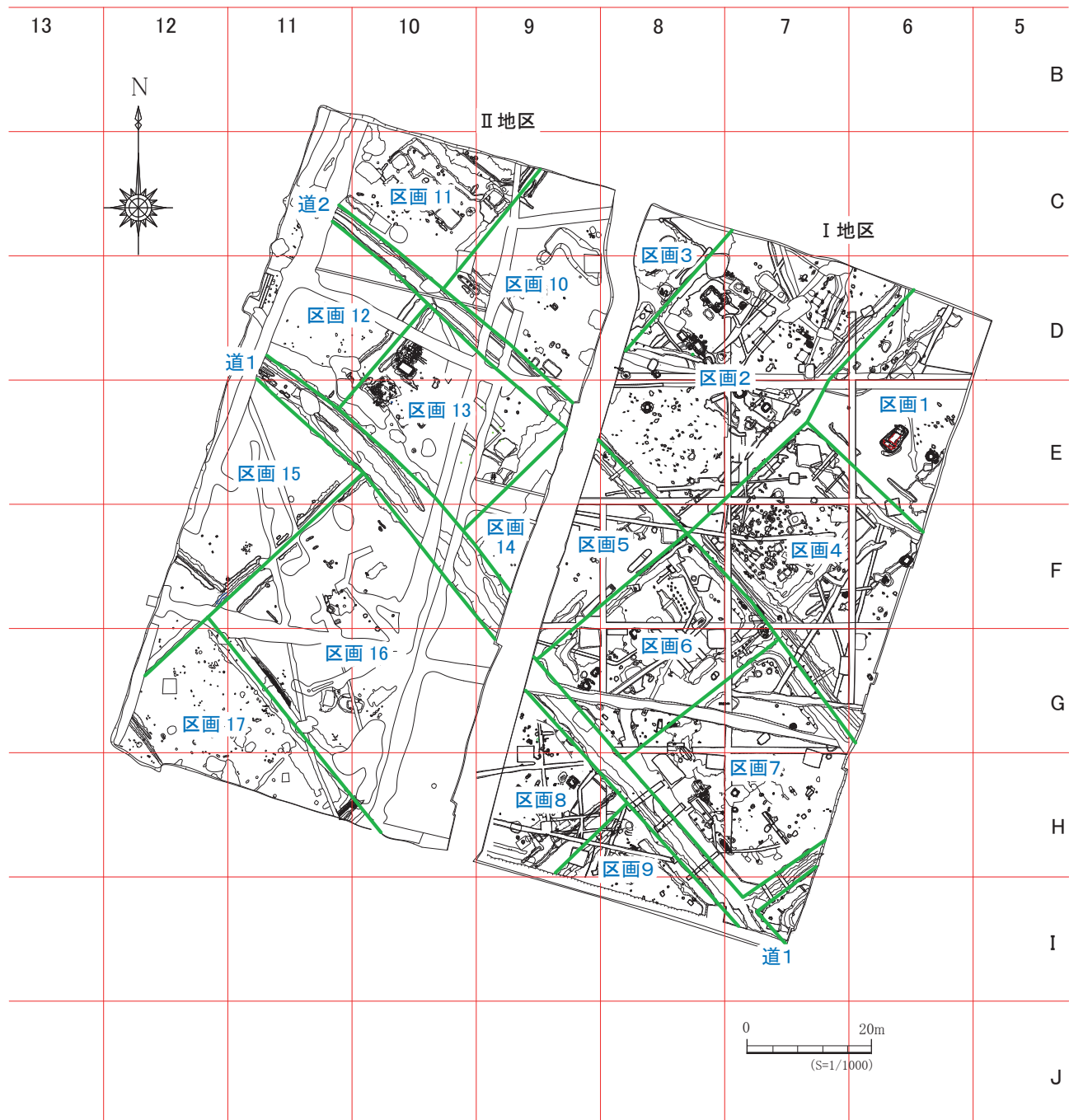


图版7 包含层(Ⅲ层)出土遗物(Ⅱ地区)

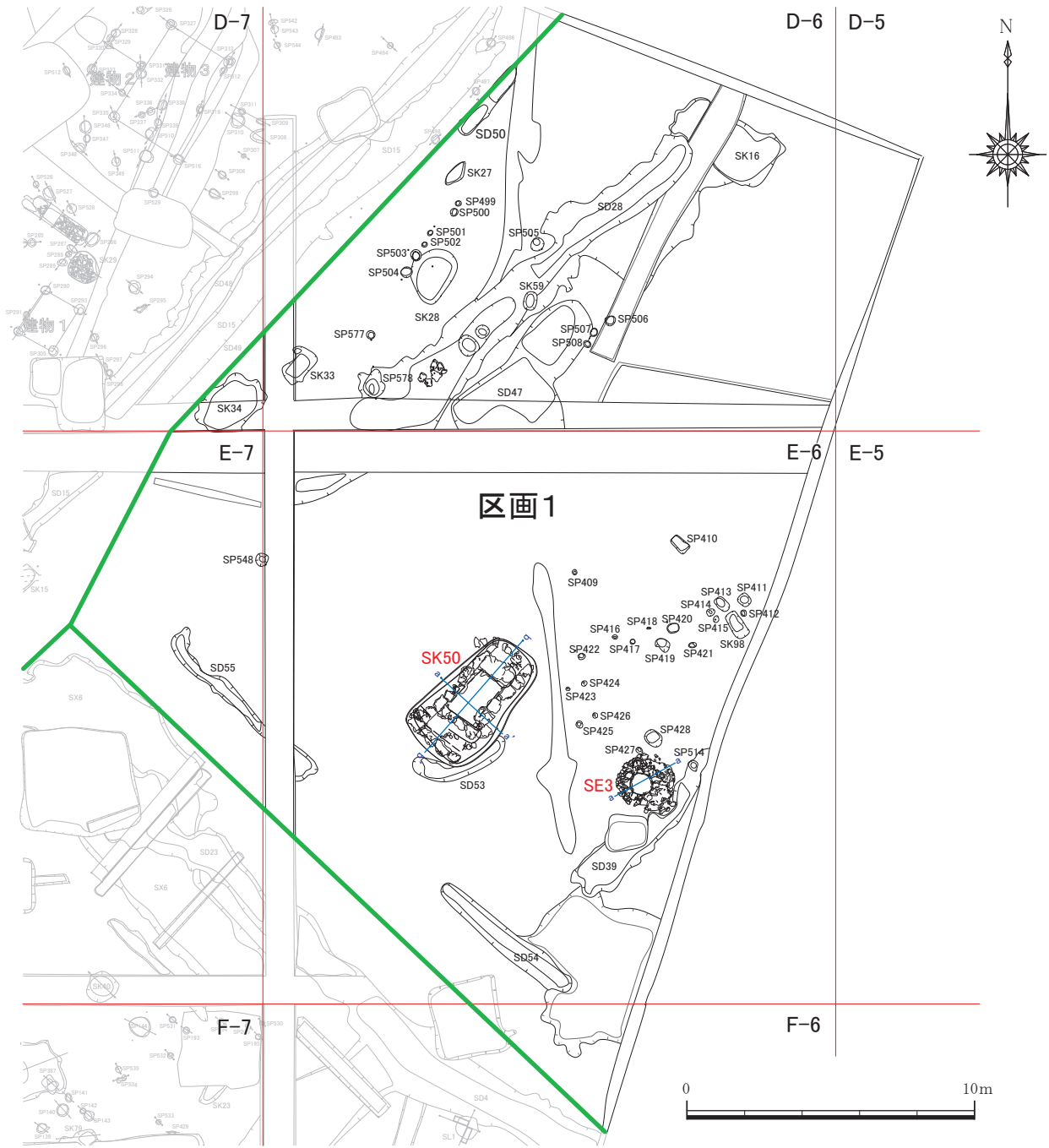
第3節 近世～近代

第1項 遺構

今回の調査で検出された遺構は、当該時期の遺構が主体を占める。主な遺構として、ピット、土坑、方形石組遺構、水場遺構、石敷遺構、井戸、溝跡、道跡、窯跡、炉跡などの古集落に関連する遺構の他、古集落に付随していたと考えられる畑跡（耕作地）などがある。中でも溝跡は、軸が一定方向に伸びる状況で検出されており、また道路跡と交差するように伸びるものもあることから、屋敷など、空間の区画を示すものと考えられるものもある。今調査においては、I地区及びII地区を合わせた調査区全体を17の区画に分けられると想定した（第24図）。以下に区画ごとに詳細を報告する。



第24図 区画配置図



第 25 図 区画1の遺構1(I 地区)

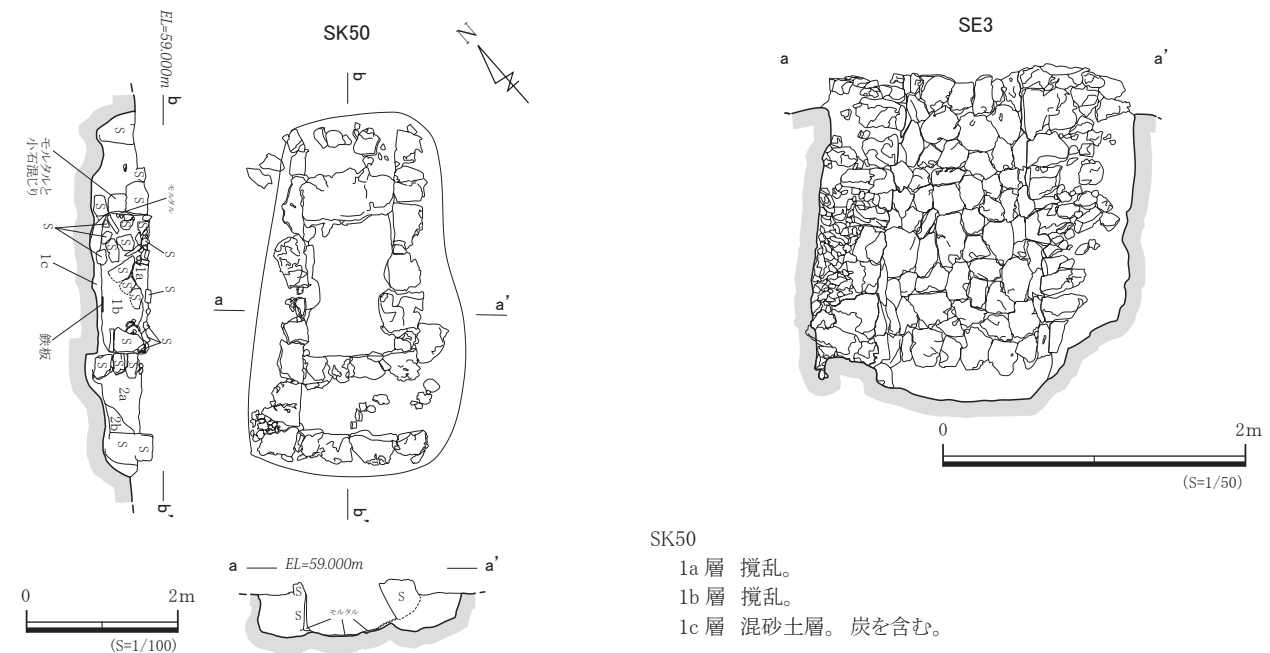
(I地区)

区画1

西側に区画2、南側を区画4と隣接する。明確な建物プランは確認できないが、屋敷跡に関連すると考えられるピット、土坑、方形石組遺構、井戸、溝跡等を確認している。

方形石組遺構（SK50）は、地山を方形状に掘り込み、約30cm大の石灰岩の切石を、南東部の一部を除き、四方に配置している。壁面の表面には、目張りとなるモルタル（又はセメント）が塗布されている。内部には一列の石列があり、二重構造を呈する。内側の方形遺構内の床面のみモルタル（又はセメント）で仕上げ、その外側にあたる方形石組内の床面は地山である。石の置かれ方を観察すると、当初は約460cm×270cm大で使用されていたが、後に内部に石を配置し、規模を小さくして再度使用したものと考えられる。どのくらいの時期差があるかは不明である。壁面の表面に目張りが施されることより、水を溜めて使用する機能が想定される。

井戸（SE3）は地山をほぼ垂直に掘り込み、20～30cm大の石灰岩を岩盤直上よりややハの字状に積み上げていく。岩盤からの掘り込み深度については未確認である。面は丁寧に整形され、積み方も相方積みで丁寧な造りである。10～20cm大の石灰岩を裏込め石として密に使用している。井戸はSK50と隣接していることより、水溜め遺構と考えられるSK50とセット関係をなすものと考えられる。



第26図 区画1の遺構2（I地区）



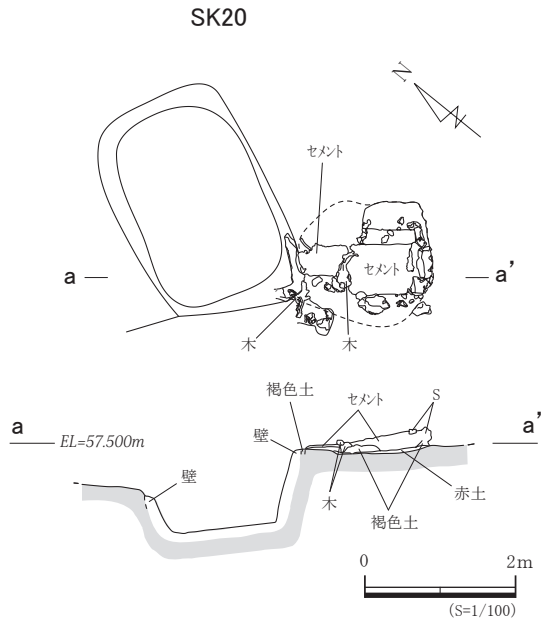
SK50 床面検出状況（北西から）



SE3 断割り状況（南東から）

区画2

東側に区画1と4、西側に区画3と隣接する。遺構は多く、ピット、土坑、方形石組遺構、井戸、溝跡等を確認している。



SK20 遺構内完掘状況 (南東から)



SK20 完掘状況 (北西から)

第27図 区画2の遺構1 (I地区)

土坑SK20は、300cm×210cm、深さは65cmあり、地山を方形状に掘り込み、海浜のサンゴ砂利と樹液を混ぜ固めて造ったため池と考えられる。読谷村のウガンヒラー北方遺跡で同様の遺構が報告されており、同報告書によると、この技法はサントウ技法と呼ばれ、セメントが普及する以前の技法とされる。土坑はSK56など、地山を方形状に掘り込んだものも多くみられる。

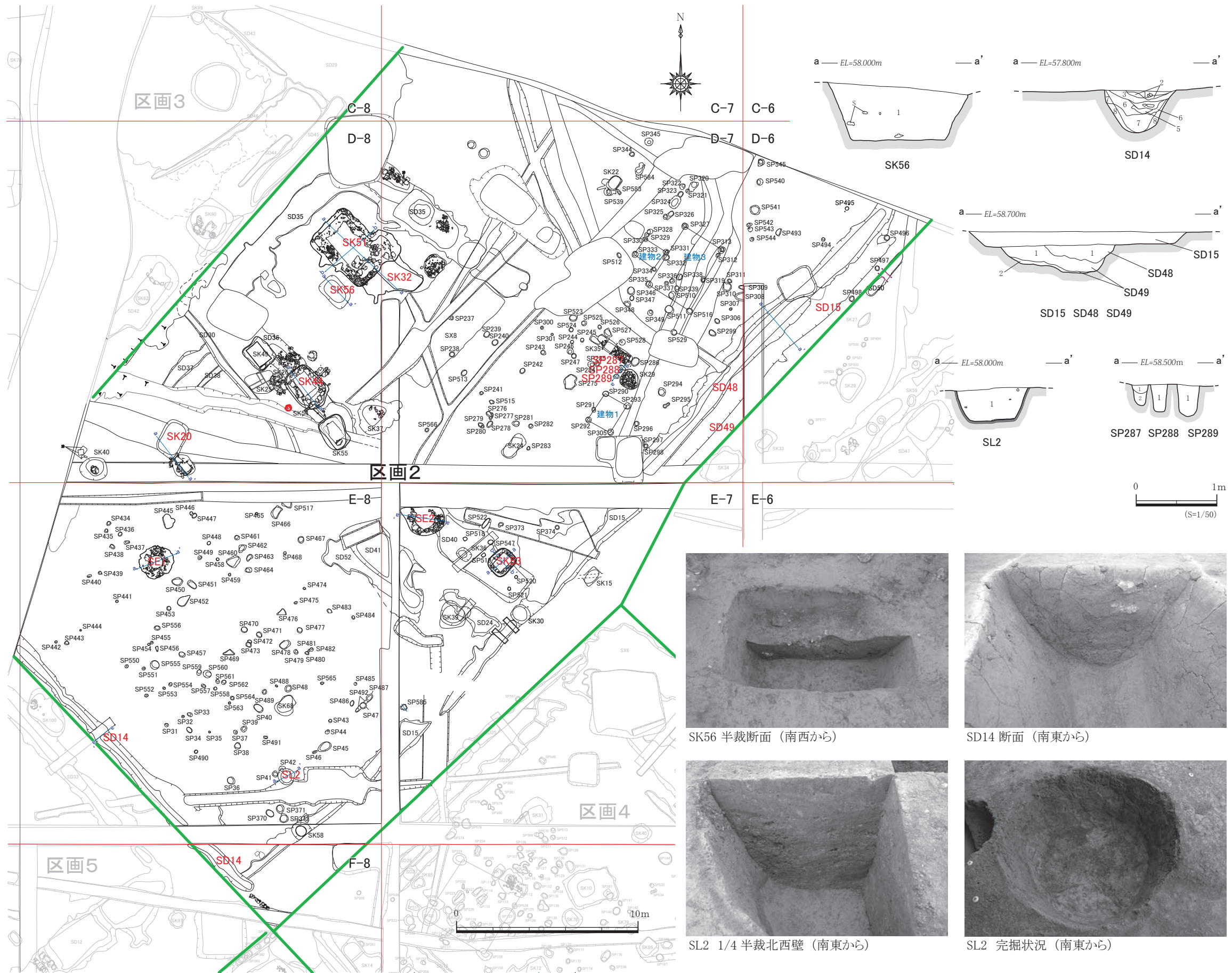
方形石組遺構は、複数検出された。そのほとんどが床面及び壁面にはモルタル (又はセメント) が塗布されている。SK44は315cm×190cmあり、40~80cm大の石灰岩の切石を四方に配置している。床面は地山直上に10cm大の小礫を敷き、その上にモルタル (又はセメント) で床を構築している。SK51は400cm×300cmあり、SK32に切られている。SK53は135cm×110cmあり、15~20cm大の石灰岩の切石を四方に配置している。造りは丁寧である。中の埋土には炭が薄く水平に堆積し、互層をなしている状況が確認された。



SK44 床面検出状況 (南西から)



SK44 モルタル除去状況 (南西から)



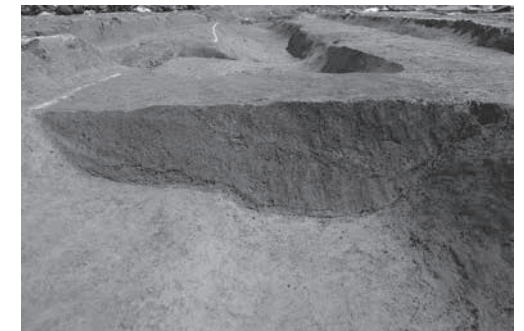
- SK44
 1層 褐色土 砂質シルト。赤土ブロックを含む。
 2層 褐色土 砂質シルト。赤土ブロックを含む。
- SK51
 1層 黄褐色土 砂質シルト。瓦が多く出土。
 2層 褐色土 粘質シルト。
- SK53
 1層 黄褐色土 粘質シルト。赤土ブロック、焼土、炭を含む。
 2層 黄褐色土 粘質シルト。赤土ブロック、焼土、炭を含む。
 3層 黄褐色土 粘質シルト。赤土ブロック、焼土を含む。
- SK56
 1層 明褐色土 粘質シルト。瓦、磁器、甕が出土
- SD14
 1層 攪乱。
 2層 攪乱。
 3層 褐色土 砂質シルト。
 4層 褐色土 混砂土層。炭、礫を含む。
 5層 褐色土 砂質シルト。
 6層 褐色土 粘質シルト。焼土、炭を含む。
 7層 褐色土 粘質シルト。焼土を含む。
 8層 褐色土 粘質シルト。赤土ブロックを含む。
- SD15 SD48 SD49
 1層 褐色土 粘質シルト。赤土ブロック、炭、石灰岩を含む。
- SL2
 1層 にぶい黄褐色土 砂質シルト。赤土ブロックを含む。
 2層 にぶい黄褐色土 粘質シルト。赤土ブロックを多く含む。
- SP287
 1層 暗褐色土 砂質シルト。赤土ブロック、炭、焼土を含む。
- SP288
 1層 暗褐色土 砂質シルト。赤土ブロック、炭、焼土を含む。
- SP289
 1層 暗褐色土 砂質シルト。赤土ブロックを含む。



SK56 半裁断面 (南西から)



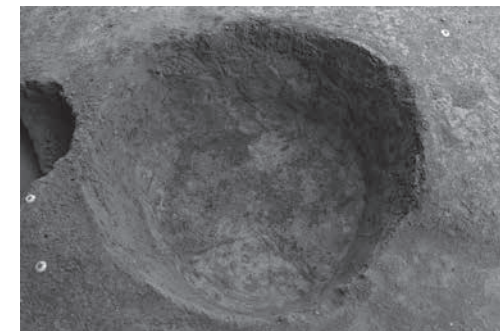
SD14 断面 (南東から)



SD15・48・49 断面 (南西から)



SL2 1/4 半裁北西壁 (南東から)

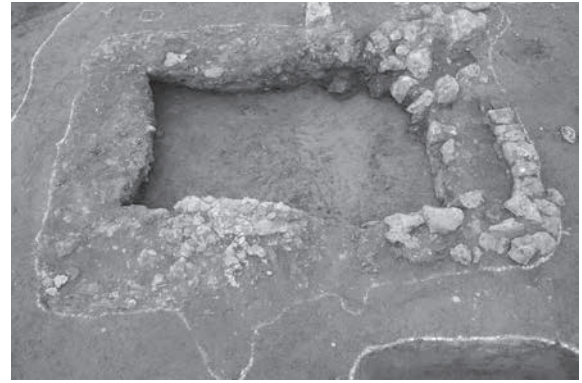
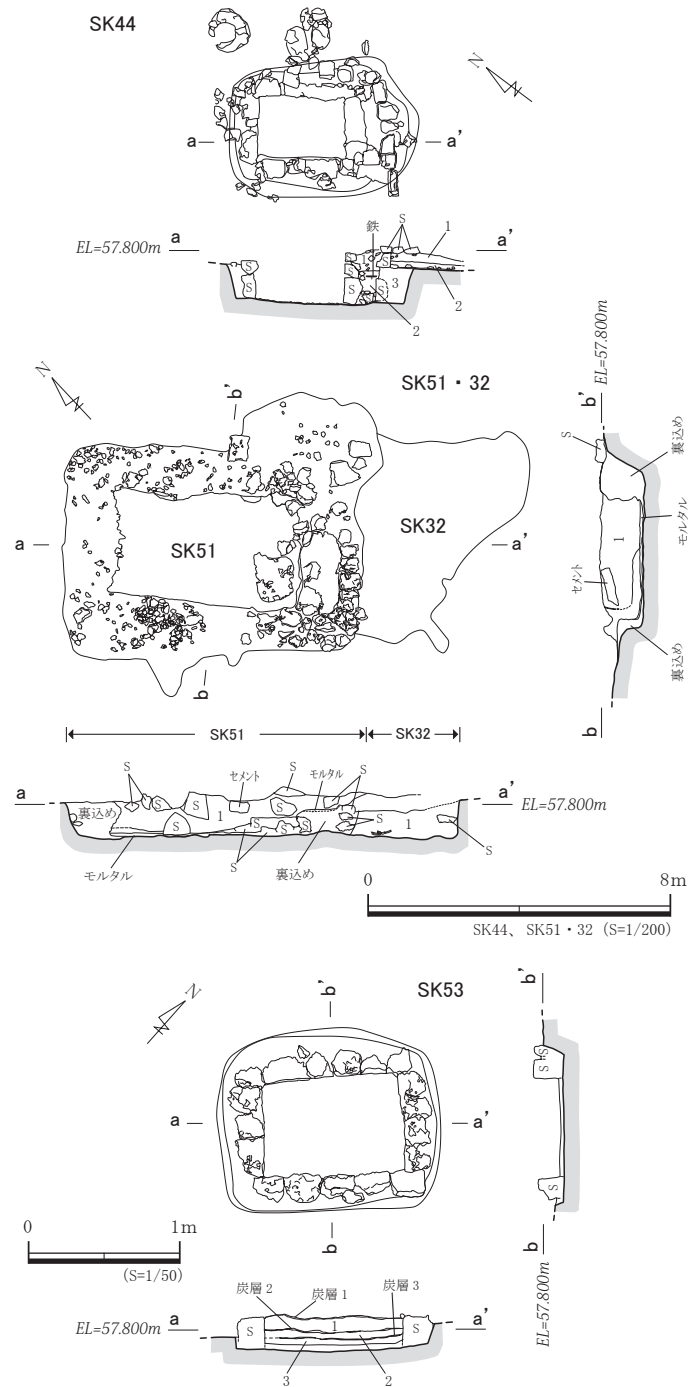


SL2 完掘状況 (南東から)

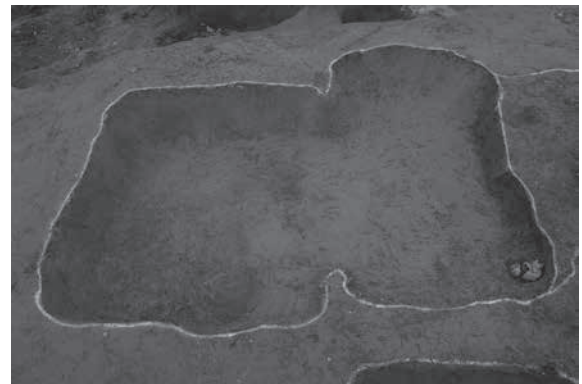


SP287・288・289 半裁断面 (北西から)

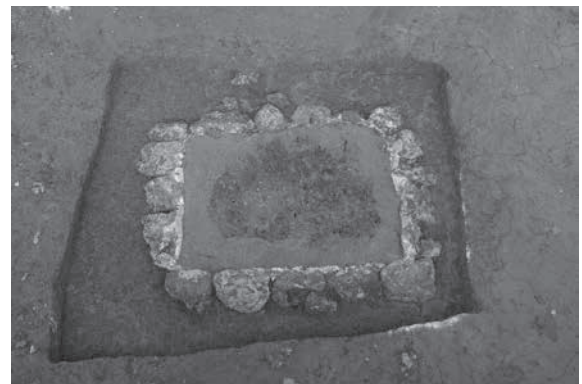
第29図 区画2の遺構3 (I地区)



SK51・32 床面検出状況 (南西から)

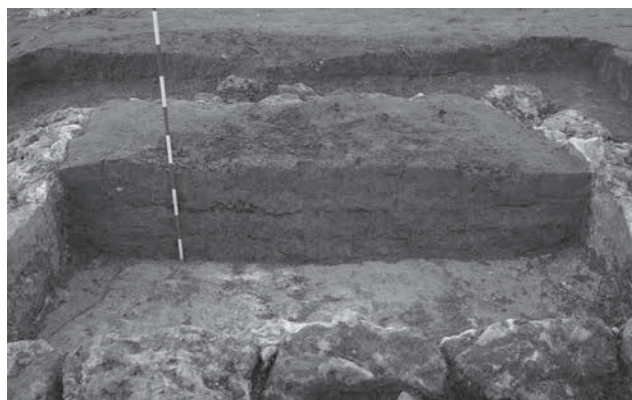


SK51・32 完掘状況 (南西から)



SK53 検出状況 (南東から)

第28図 区画2の遺構2 (I地区)



SK53 遺構内半裁断面 (南東から)



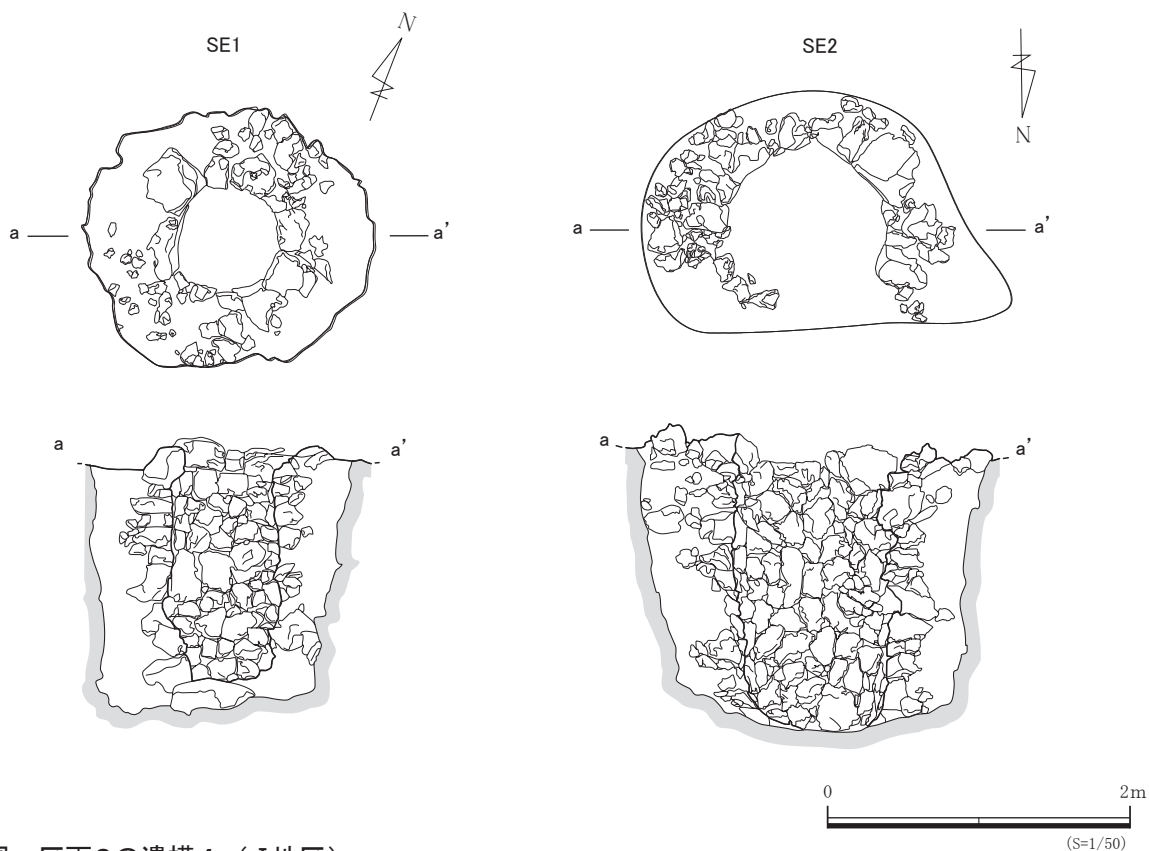
SK53 床面検出状況 (南東から)

井戸はSE1とSE2の二基が確認された。SE1は、20～40cm大の石灰岩を岩盤直上より積み上げている。岩盤からの掘り込み深度については未確認である。積み方は相方積みで、20cm大の石灰岩を裏込め石として密に使用している。SE2は、20～30cm大の石灰岩をSE1と同様、岩盤直上より積み上げている。岩盤からの掘り込み深度については未確認である。積み方は相方積みで、10～20cm大の石灰岩を裏込め石として密に使用している。

溝跡についても複数検出され、中でもSD14はII地区で確認された道跡と一連のものと考えられる。

SL2は、焼土が円を描いて検出され、半裁すると壁面全体が赤く焼けており、床面には炭が薄く堆積していた。これらのことより、炉跡と考えられる。直径は90cm、深さは35cmある。

その他、沖縄産無釉陶器の壺の内部に、獣骨が多数入っているものも見つかった。詳細については不明である。また、ピットについては、数多く確認され、屋敷跡に関連すると考えられるものもあるが、明確なプランを把握することができなかった。



第30図 区画2の遺構4（I地区）



SE1 断割り状況（南西から）

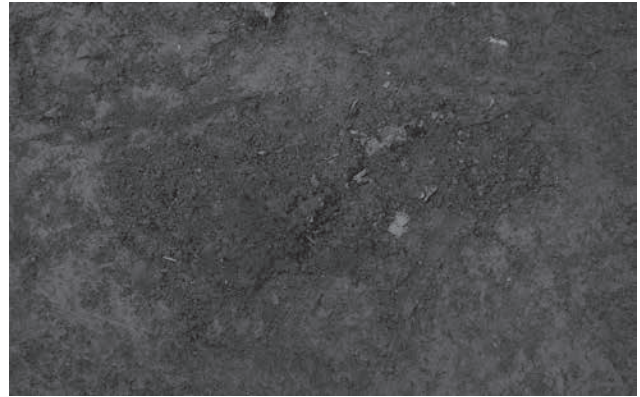
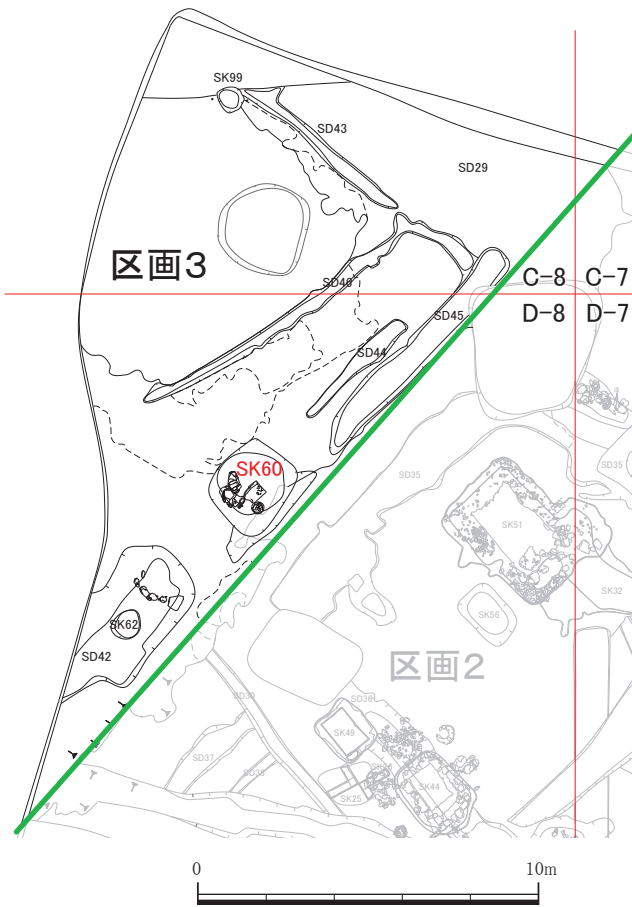


SE2 断割り状況（北から）

区画3

東側に区画2と隣接する。Ⅱ地区の区画10を合わせて一つの区画をなすと考えられる。遺構は少なく、ピット、土坑、溝跡等を確認している。

SK60からは沖縄産無釉陶器の壺が3個出土した他、僅かに漆片も検出された。



SK60 漆片検出状況 (南から)



SK60 遺物出土状況 (北東から)

第31図 区画3の遺構 (Ⅰ地区)

区画4

北東側に区画1、北西側に区画2、南東側に区画6、7と隣接する。区画の中で最も多くの遺構が確認されており、主な遺構にはピット、土坑、方形石組遺構、溝跡、炉跡等がある。

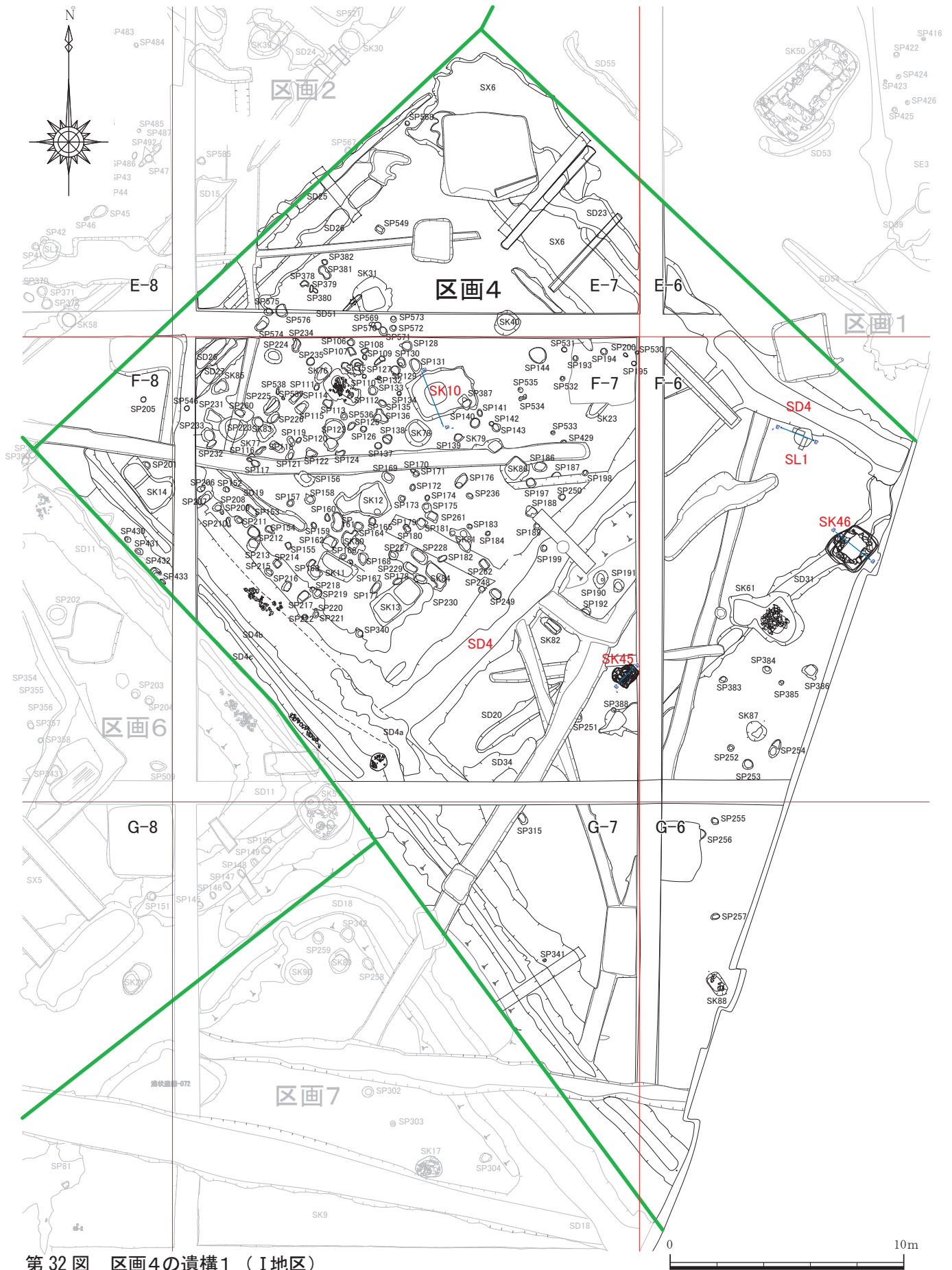
溝跡は複数検出され、そのうちSD4、23、26については、これらを一連のものとして俯瞰すると、空間を囲うように方形状を呈し、その内側の空間には、数多くのピットや土坑などが確認される。これらのことより、SD4、23、26は屋敷の区画としての機能が考えられる。

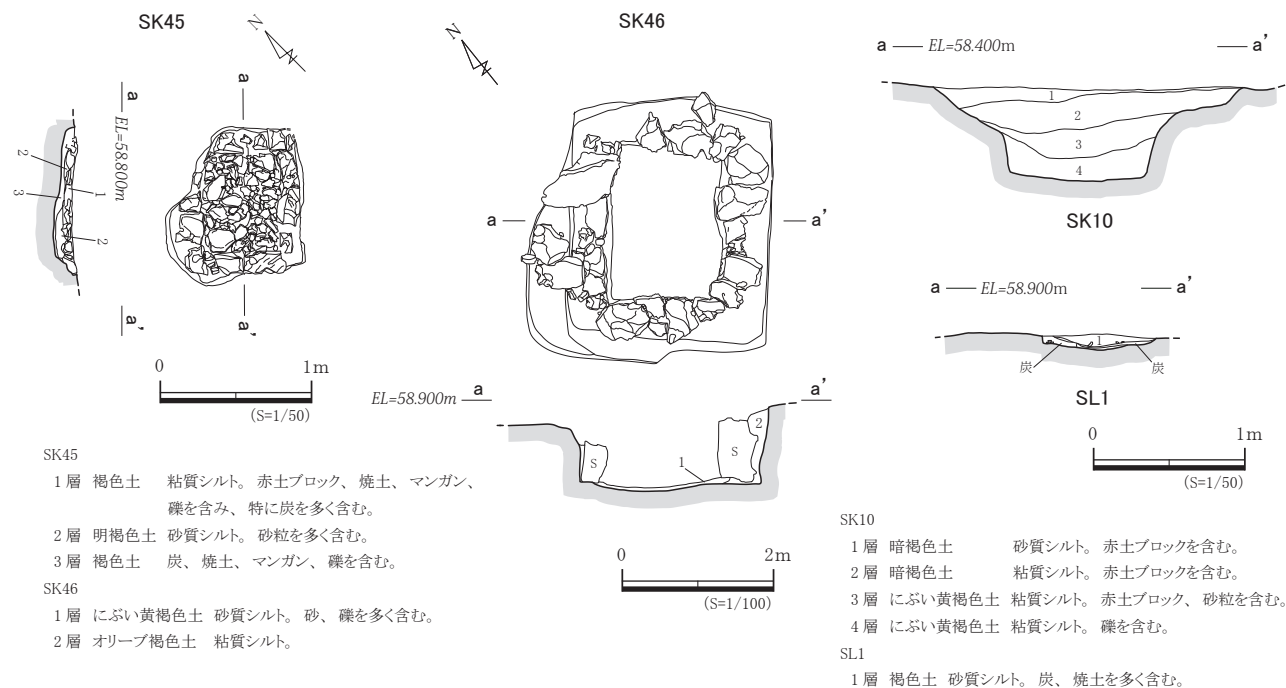
ピットは多数検出された。その多くは屋敷跡に関連するものと考えられたが、明確な建物プランを確認することはできなかった。

土坑はピットに次いで多く検出され、断面形状が方形状を呈するものや、断面形状が半円状を呈するもの、断面形状が段を持つもの (SK10) 等が確認された。

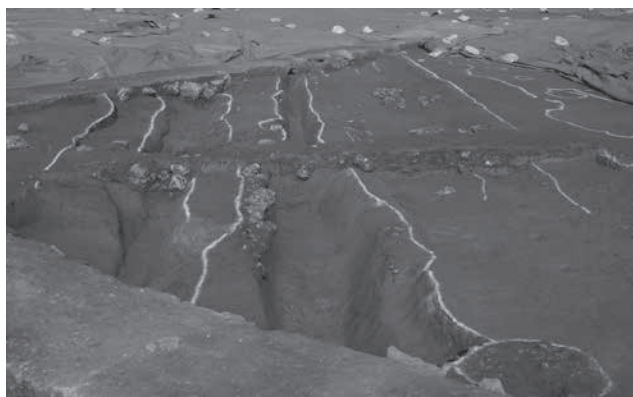
方形石組遺構はSK45、46の2つが検出され、SK45はほぼ床面部分のみの残存であった。双方ともに、地山に石灰岩礫を敷き、その上にモルタル (又はセメント) を施して床面を構築していた。

SL1はトレンチを設定して断面を確認した結果、焼土及び炭の層がレンズ状にみられたことより、炉跡と考えられる。

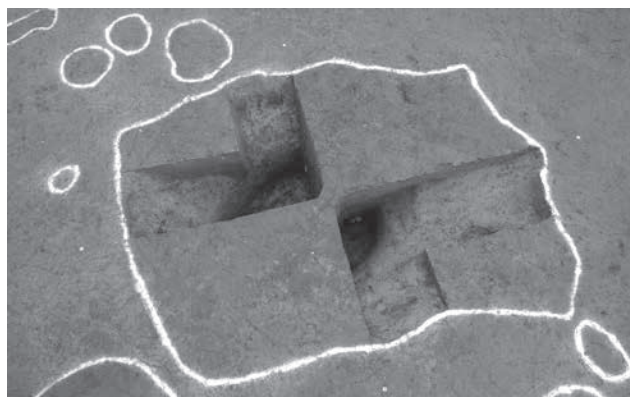




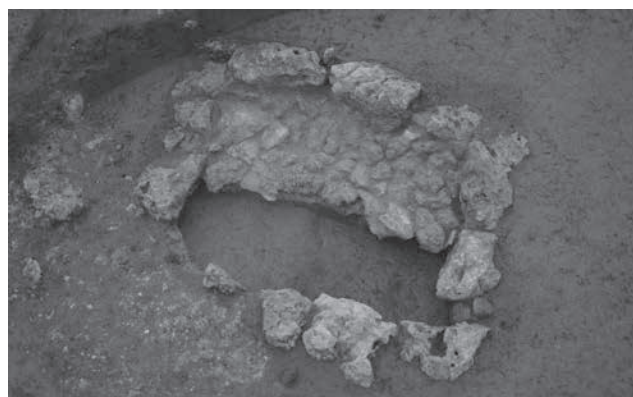
第 33 図 区画4の遺構2 (I 地区)



SD4 断面 (南東から)



SK10 1/4 半裁状況 (南東から)



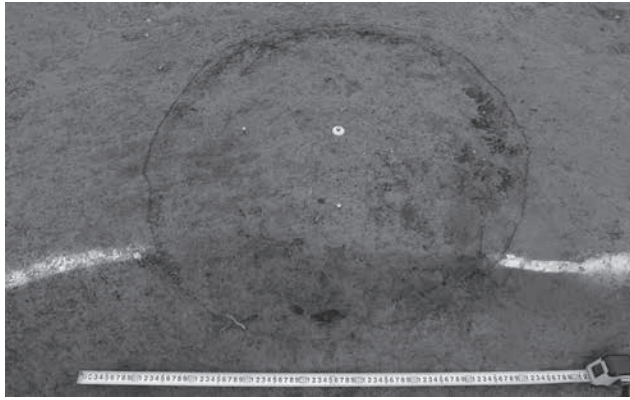
SK45 半裁状況 (北西から)



SK46 床面検出状況 (南西から)

区画5

北側に区画2、南東側に区画6と隣接する。II地区の区画14を合わせて一つの区画をなすと考えられる。遺構は少なく、ピット、土坑、溝跡等を確認している。

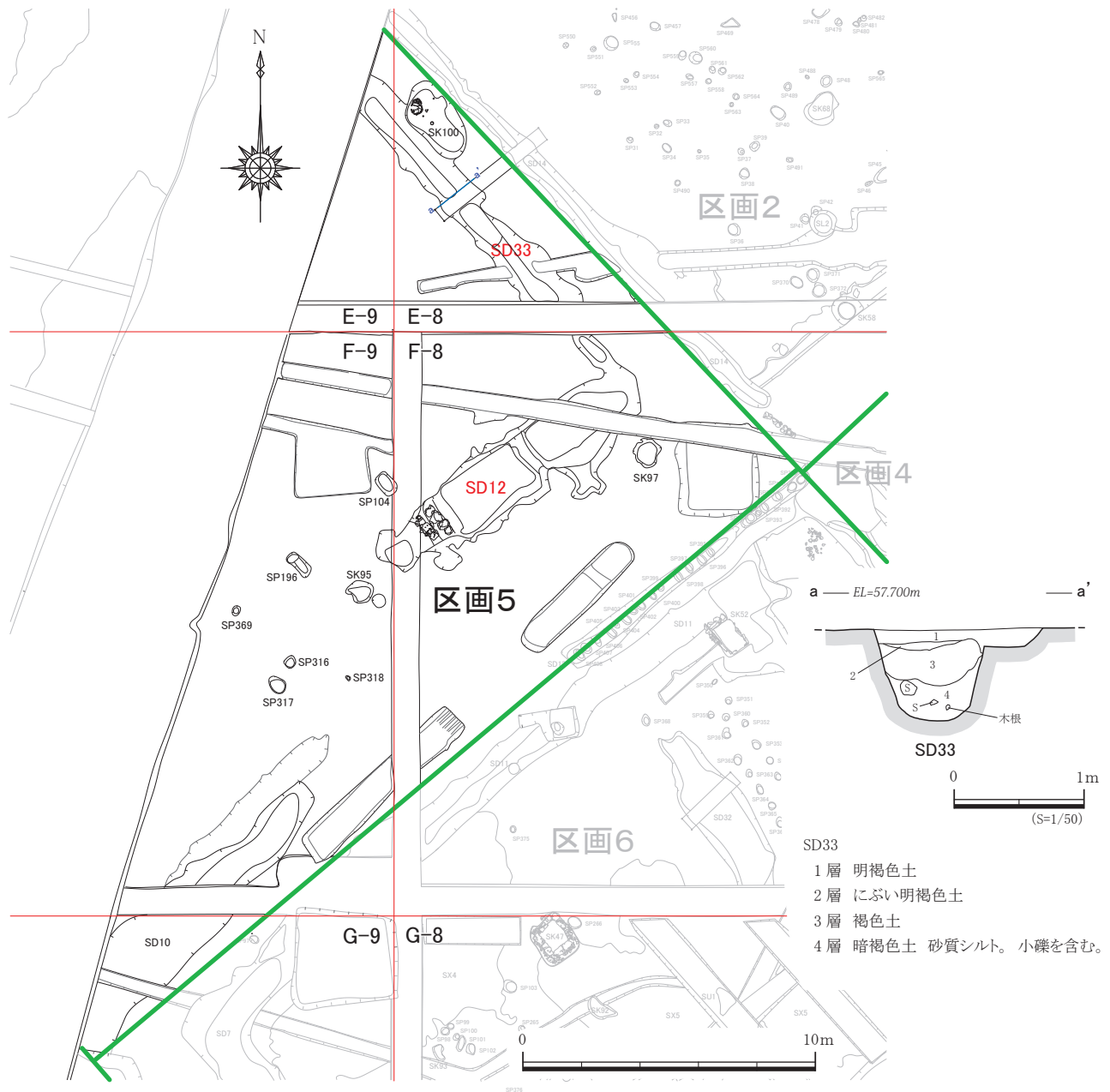


SL1 検出状況 (南西から)



SL1 北西壁 (南東から)

図版8 区画4の遺構 (I地区)



第 34 図 区画5の遺構1 (I地区)



SD12 階段検出状況 (南東から)



SD33 断面 (南東から)

図版9 区画5の遺構 (I地区)

区画6

北東側に区画4、北西側に区画5、南側に道1が延びる。区画の中で最も多くの遺構が確認されており、主な遺構にはピット、土坑、方形石組遺構、井戸、溝跡、貝だまり等がある。

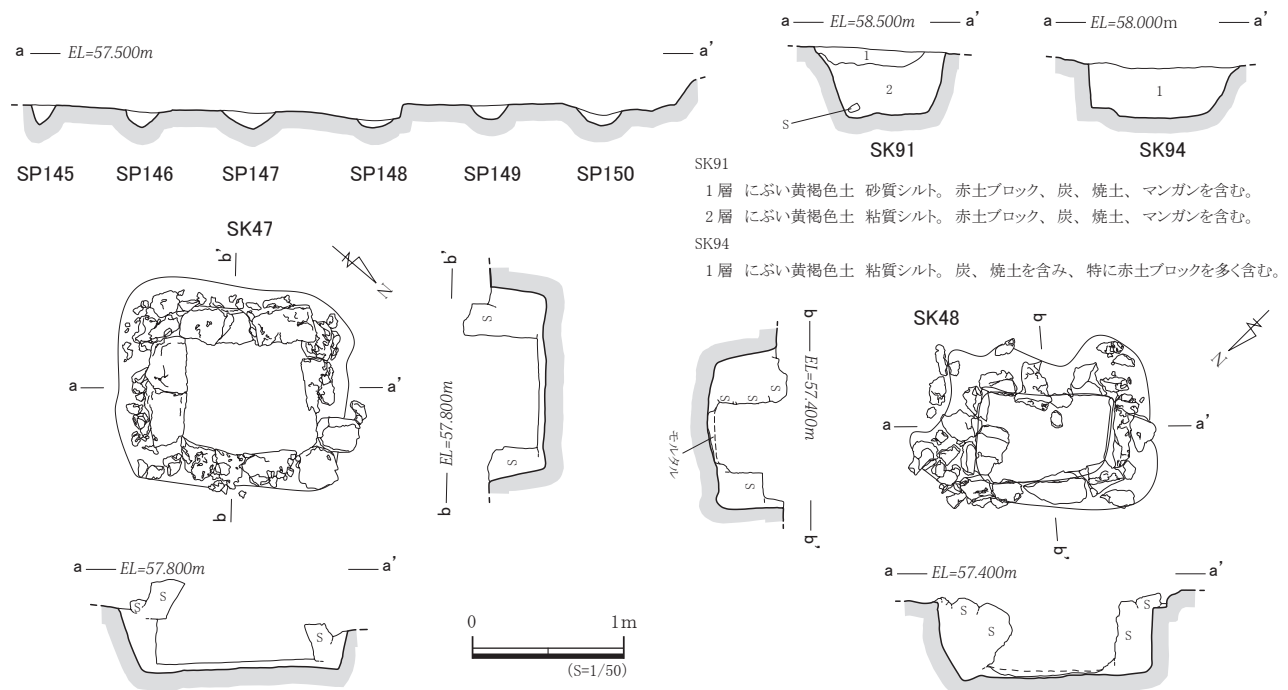
溝跡は複数検出され、そのうちSD7及び11については区画としての機能が考えられる。

ピットは多数検出された。中でもSD11内から検出されたSP145～150及びSP389～408、そしてSP350～367については、等間隔で並んでいる状況で検出された。

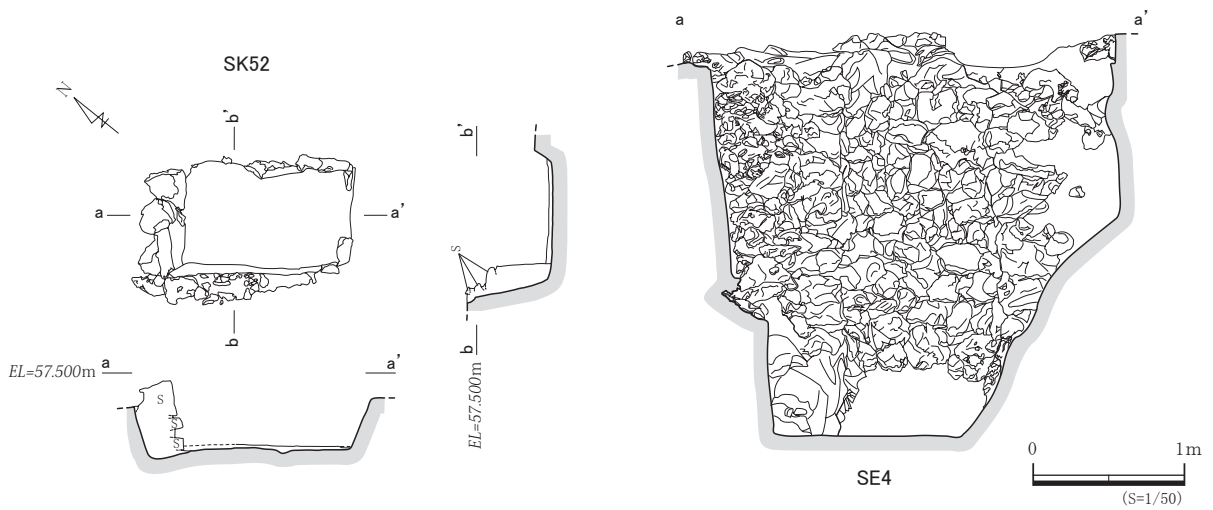
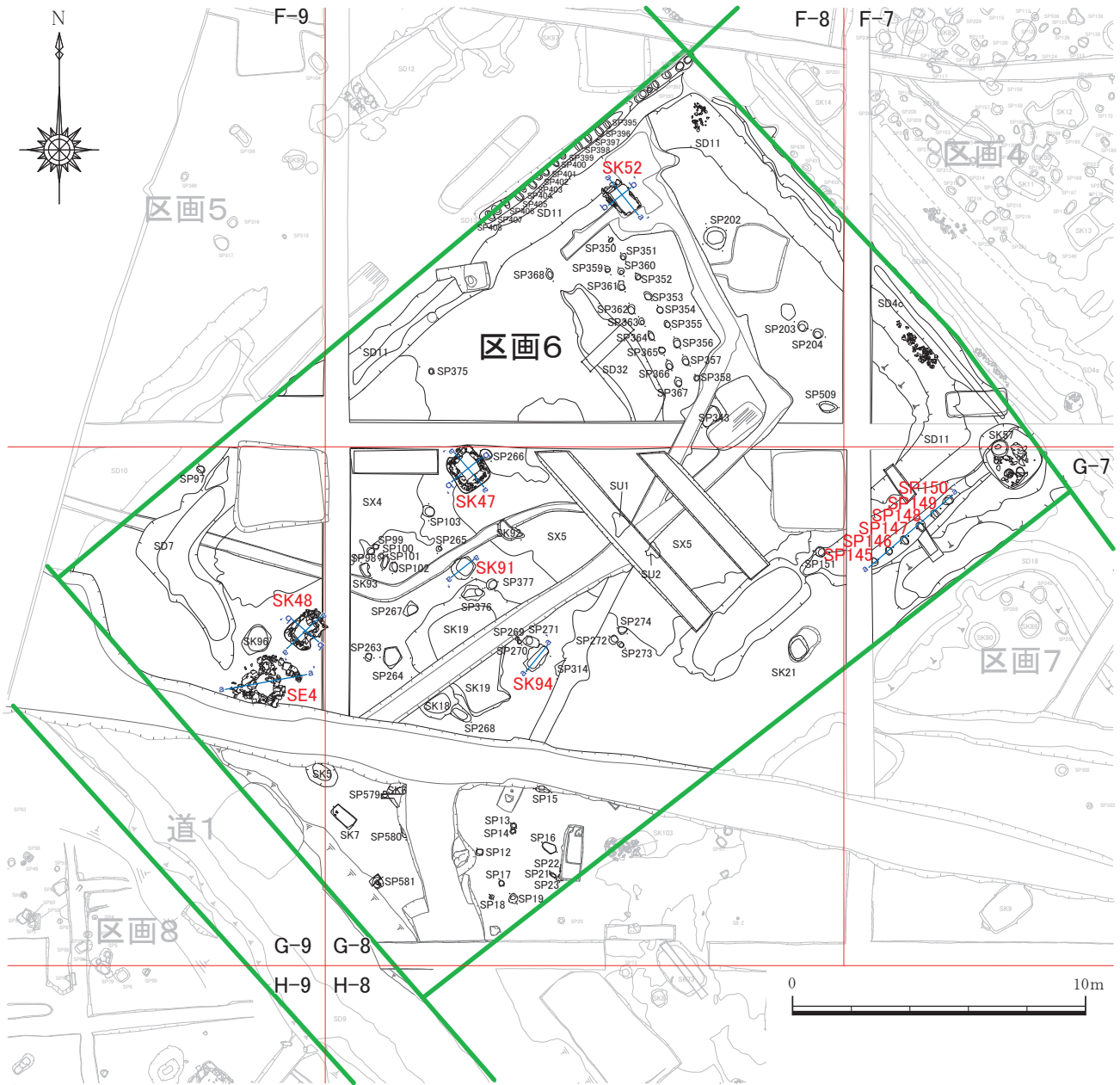
土坑はピットに次いで多く検出され、断面形状が方形状を呈するもの (SK91) や半円状を呈するもの等が確認された。

方形石組遺構はSK47、48、52が確認された。いずれも石灰岩の切石を四方に配置し、床面及び壁面はモルタル (又はセメント) を施している。

井戸 (SE4) は1基検出され、30cm大の石灰岩を岩盤直上より積み上げている。岩盤からさらに不透水層であるクチャ層まで掘り込んでいる。積み方は相方積みで、15cm大の石灰岩を裏込め石として密に使用している。



第35図 区画6の遺構1 (I地区)



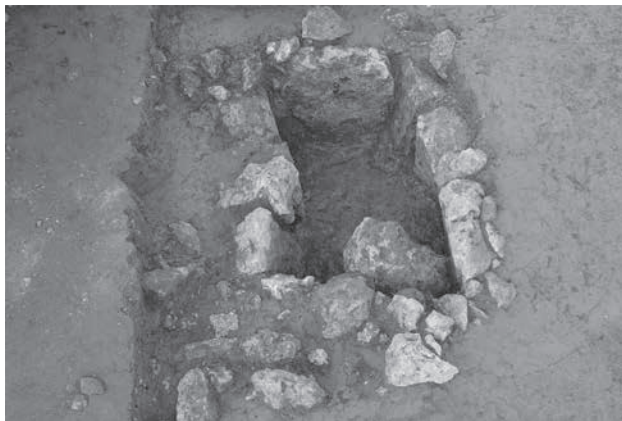
第 36 図 区画6の遺構2 (I 地区)



SP146 ~ 150 半裁状況（北西から）



SK47 床面検出状況（南西から）



SK48 床面検出状況（北東から）



SK52 床面半裁状況（北東から）

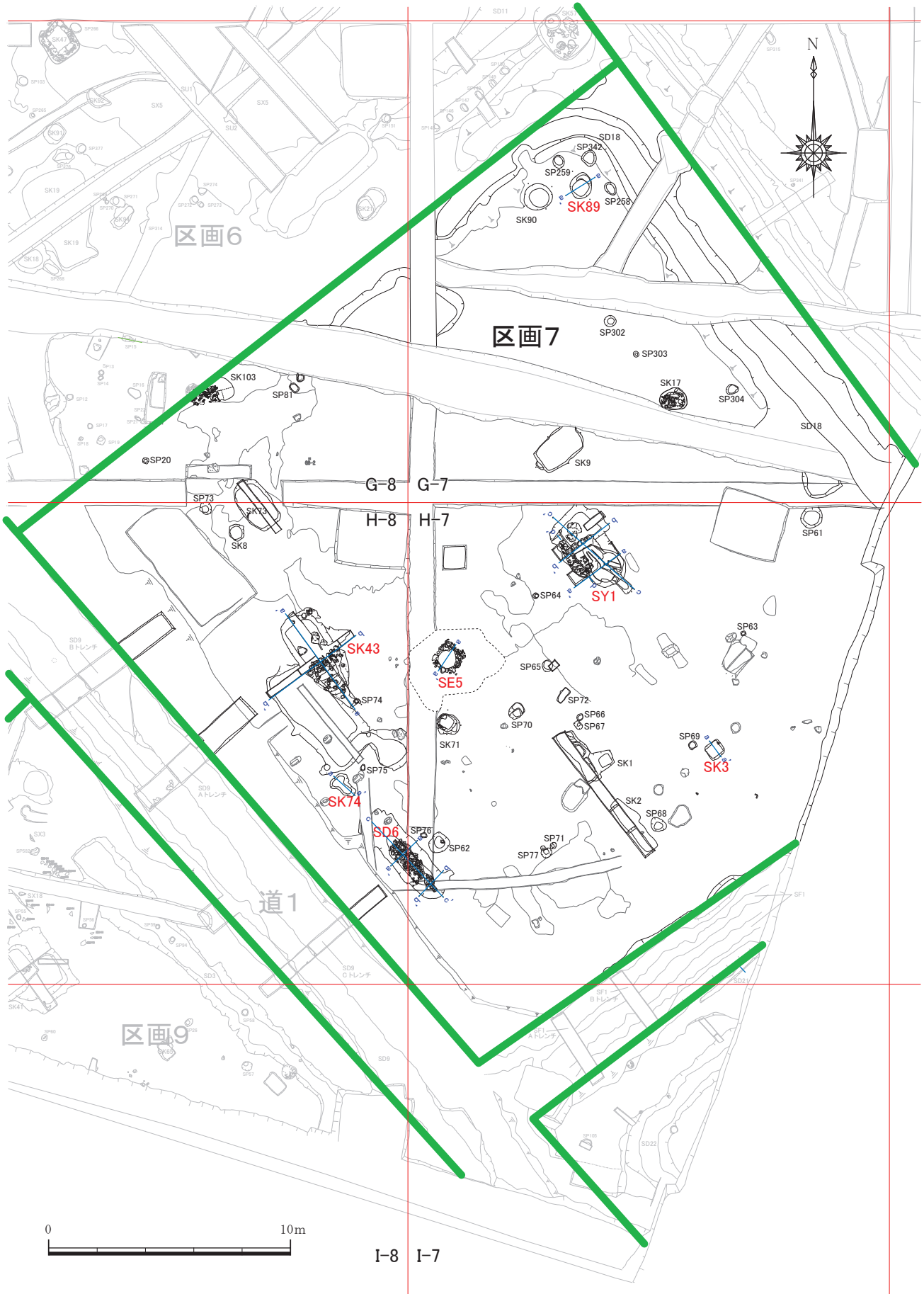


SK91 1/4 半裁北西壁（西から）



SE4 断割り状況（南から）

図版 10 区画6の遺構（I地区）



第 37 図 区画7の遺構1 (I 地区)

区画7

北側に区画4、北西側に区画6、南側に道1が延びる。主な遺構にはピット、土坑、井戸、溝跡、窯跡がある。

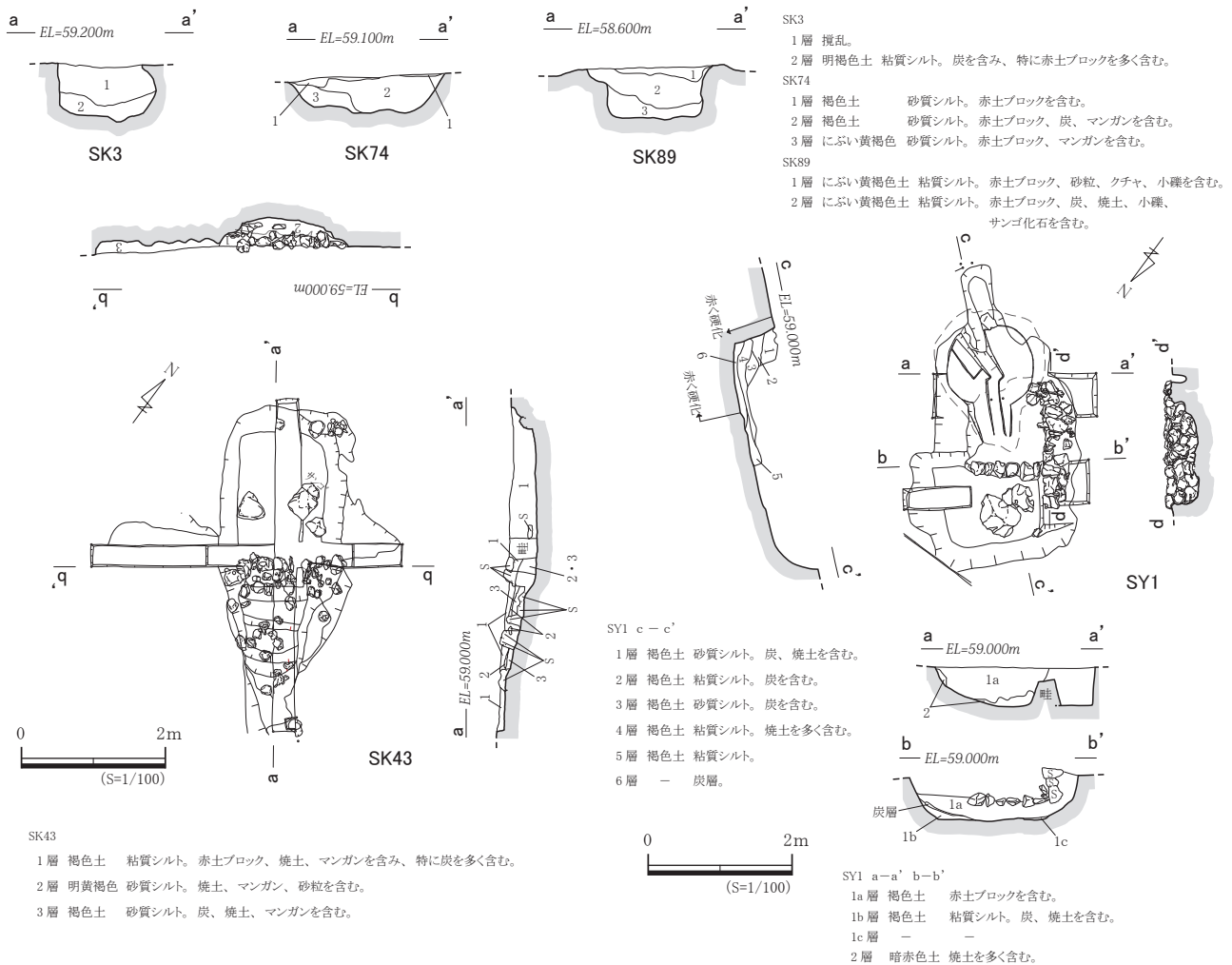
溝跡は複数検出され、そのうちSD18は区画としての機能が考えられる。SD6は床面上に石灰岩礫がまよまっている状況で検出され、意図的に置かれたものと考えられる。

ピットは複数検出されたが、明確な建物プランは確認できていない。土坑も複数検出され、様々な形状の土坑が確認されている。SK43は10~20cm大の石灰岩が集中した状況で見つかったが、性格については不明である。

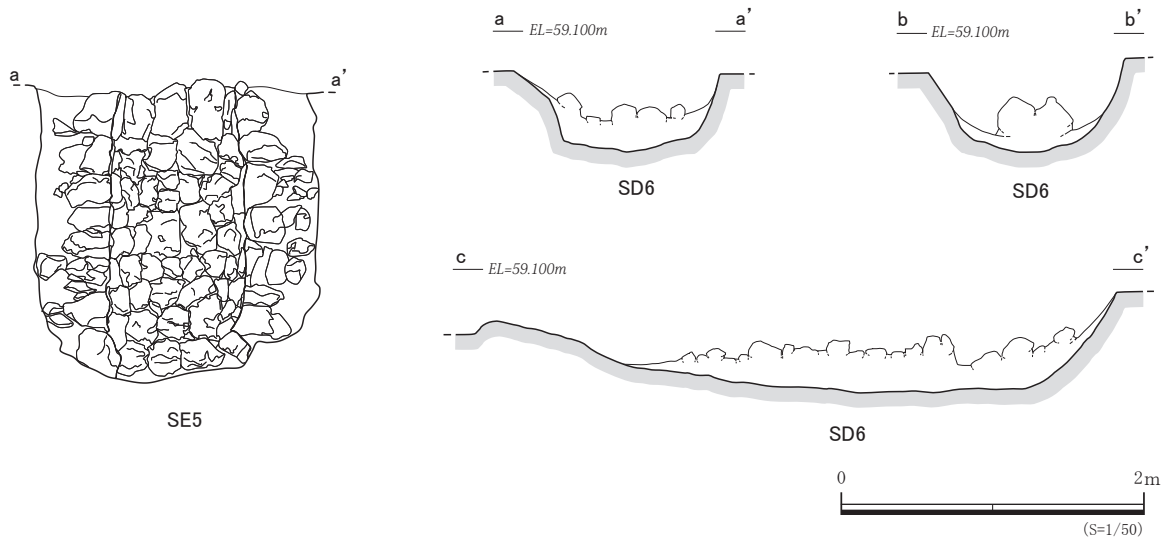
SK103からは沖縄産無釉陶器の壺とともに位牌が検出された。詳細については遺物の頁で報告する。

井戸 (SE5)は地山をほぼ垂直に掘り込み、30cm大の石灰岩を岩盤直上よりハの字状に積み上げている。岩盤からさらに不透水層であるクチャ層まで掘り込んでいる。面は丁寧に整形され、積み方も相方積みで丁寧な造りである。10~20cm大の石灰岩礫を裏込め石として密に使用している。

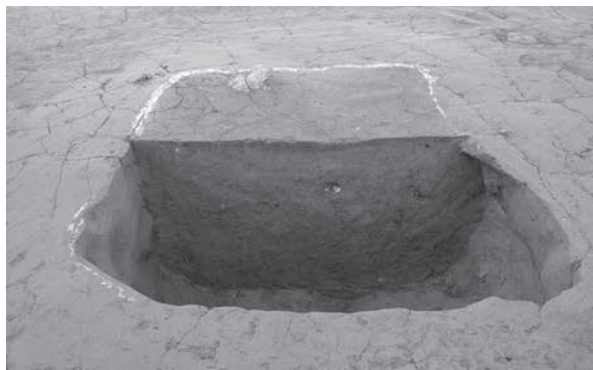
その他、窯跡 (SY1)は、地山を燃焼部は円形、灰原部分は方形状に掘り込んで構築されている。燃焼部の壁面は火熱を受けて赤みを帯び、硬化している。床面には炭が壁面から焚口方向に傾斜して堆積している。灰原は燃焼部に溜まった燃えカスを焚口から掻き出す等の作業を行う場と考えられる。SY1については、放射性炭素年代測定や、熱残留磁気分析等をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。その詳細については第5章自然科学分析の頁にて報告する。



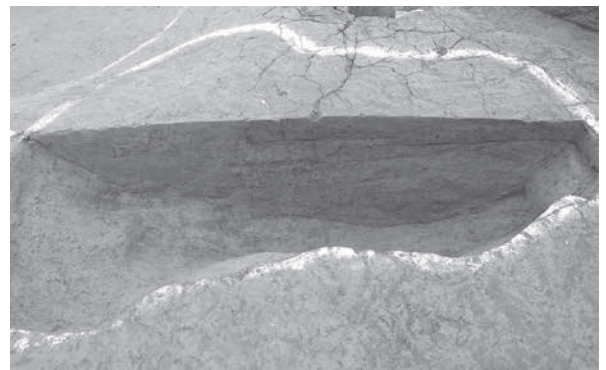
第38図 区画7の遺構2 (I地区)



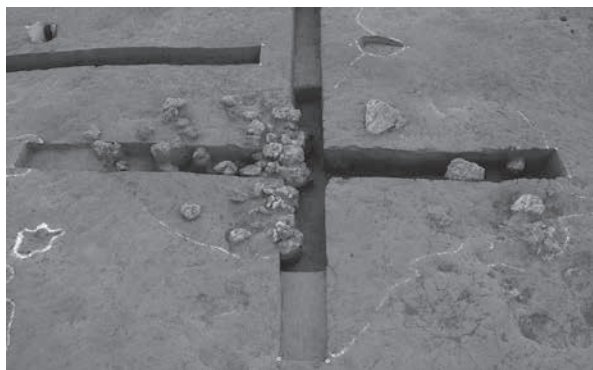
第 39 図 区画7の遺構3 (I 地区)



SK3 半裁断面 (南西から)



SK74 半裁断面 (南西から)



SK43 礫検出状況 (東から)



SK43 礫検出状況 (北から)



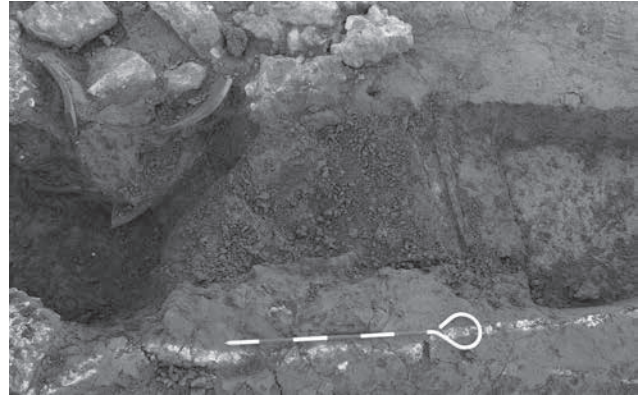
SY1 焼土面半裁状況 (西から)



SY1 完掘状況 (北西から)



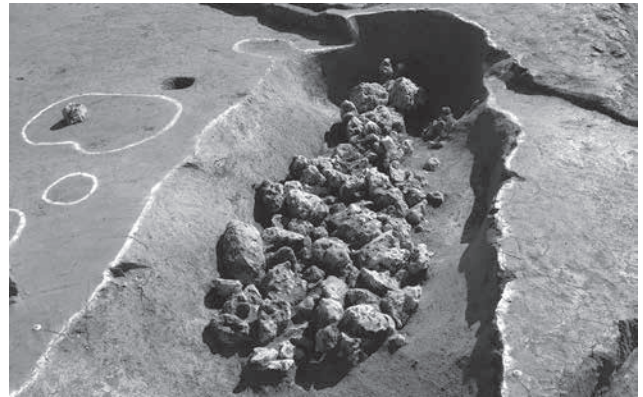
SK103 位牌検出状況1 (南から)



SK103 位牌検出状況2 (南から)



SE5 断割り状況 (西から)



SD6 礫検出状況 (南西から)

図版 11 区画7の遺構 (I 地区)

区画8

北東側に道1、南東側に区画9と隣接する。ピット、土坑、方形石組遺構、溝跡等を確認している。ピットは複数検出されたが、明確な建物プランは確認できていない。土坑も複数検出された。

方形石組遺構はSK42が検出され、石灰岩の切石を四方に配置し、床面及び壁面にモルタル(又はセメント)を施している。床面は地山の上に小礫を敷き、その上にモルタル(又はセメント)で仕上げている。SK42内の埋土中より、獣骨が検出された。

溝跡は複数検出され、中でもSD2は区画としての機能が考えられる。

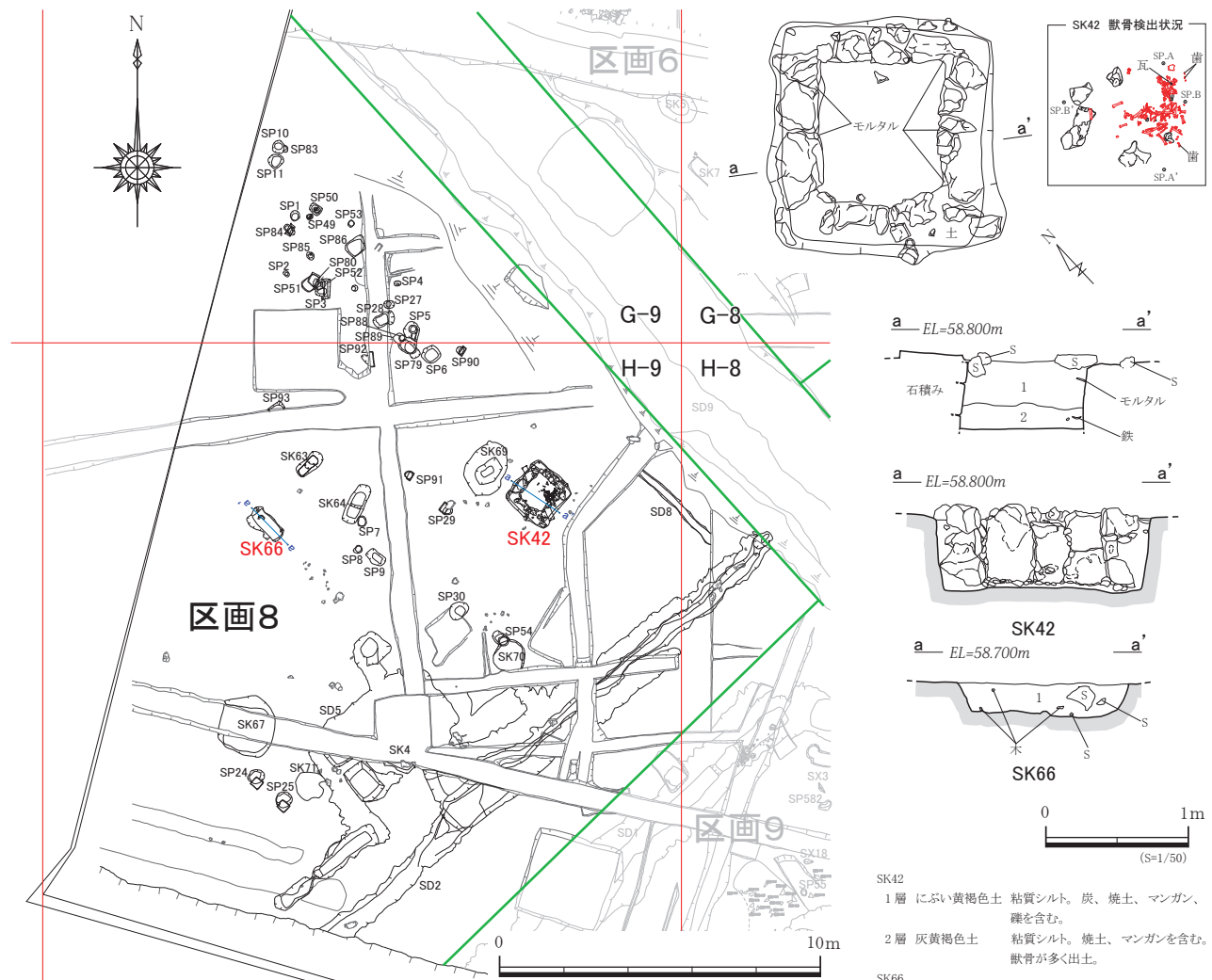


SK66 半裁断面 (南西から)



SK42 床面半裁状況 (南西から)

図版 12 区画8の遺構 (I 地区)



第40図 区画8の遺構（I地区）



SK42 獣骨検出状況（南西から）



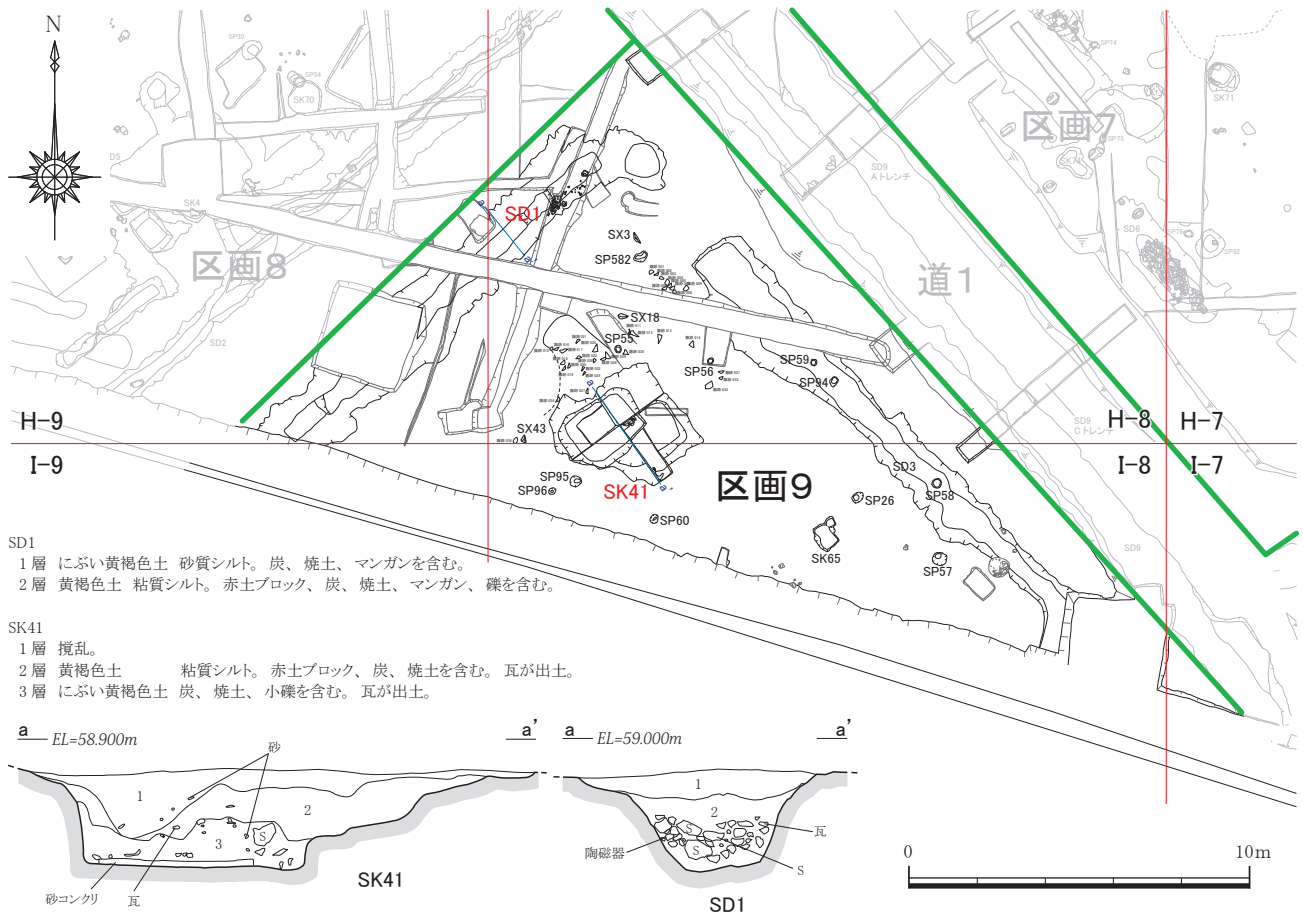
SK42 床面検出状況（南西から）

区画9

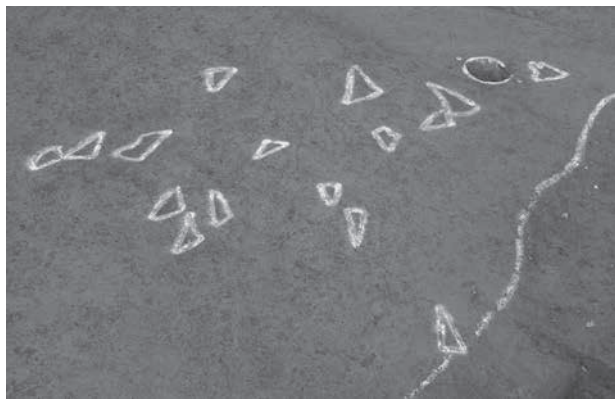
北東側に道1、北西側に区画8と隣接する。ピット、土坑、溝跡の他、鋏跡等を確認している。

ピットや土坑は少ない。SK41は床面のみモルタル（又はセメント）が施されている。

その他、鋏跡は平面が三角形を呈し、深さは10cm程である。数多く検出されたことより、畑として利用されていたことが考えられる。



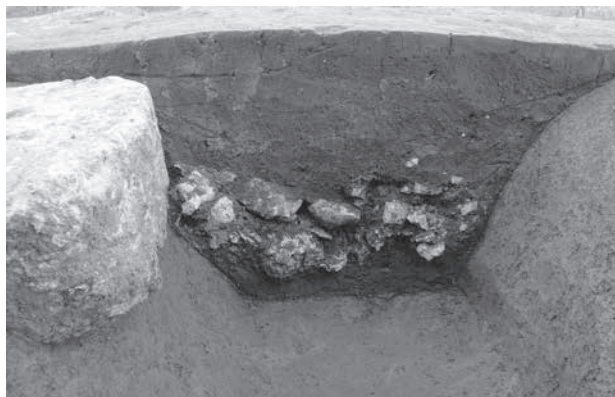
第 41 図 区画9の遺構（I 地区）



鋤跡検出状況（南から）



SK41 1/4半裁状況（西から）



SD1 断面（北から）



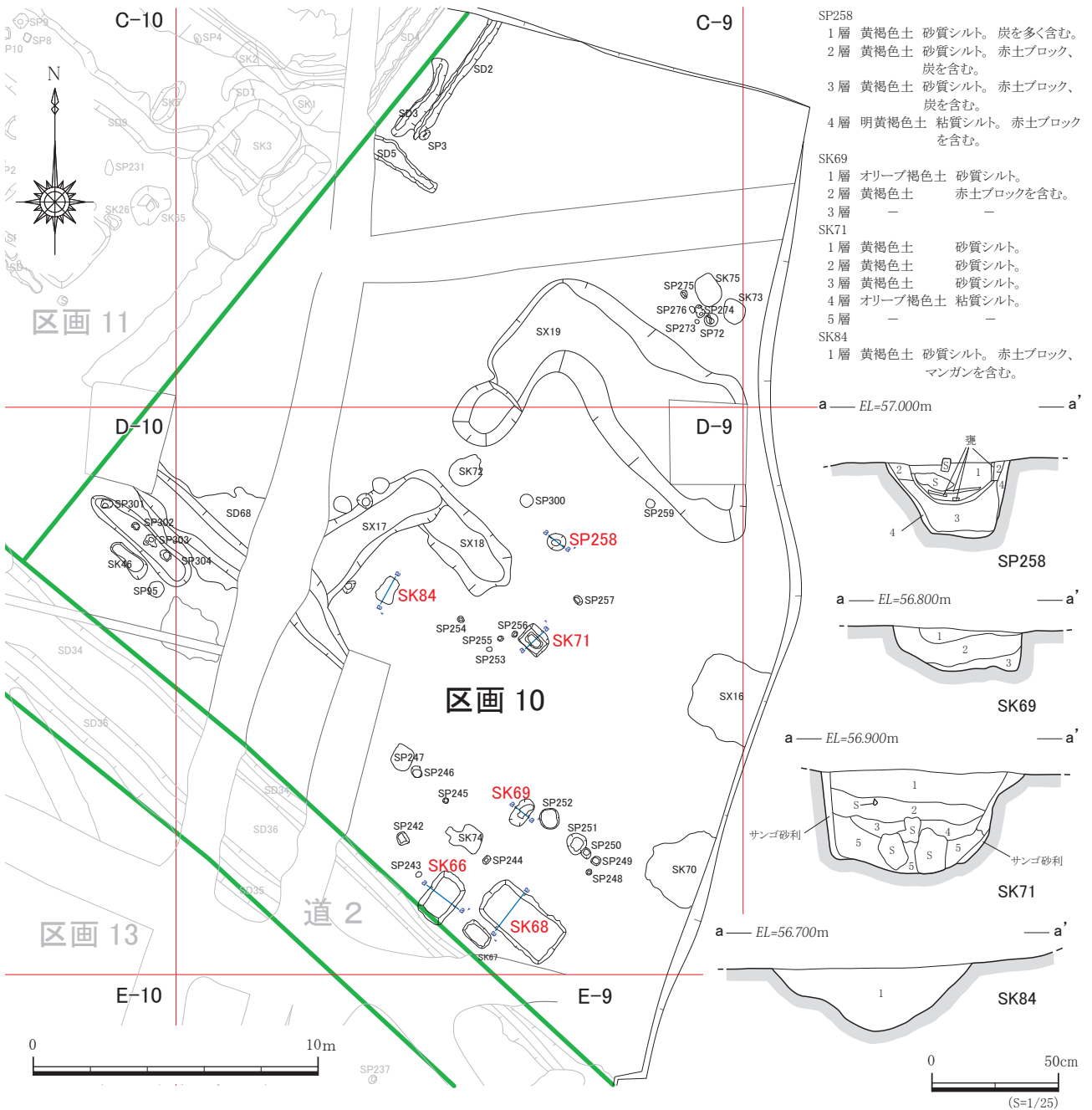
SD1 完掘状況（北から）

(II地区)

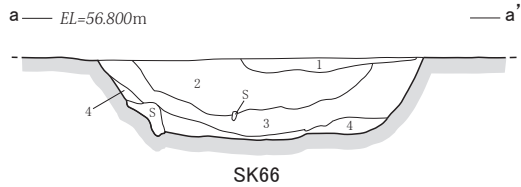
I地区に比べると、遺構は非常に少なくなり、特に中央より南側、西側では、溝が主となり、屋敷に関連する遺構が少なくなる。溝の軸は一定方向となっており、屋敷の境として機能していたと考えられる。

区画10

西側を溝跡、南側を道跡にて区切られており、明確なプランは確認できないが、屋敷跡に関連すると考えられるピット、土坑、溝等を確認している。溝の中からピットを検出したものもあり(SD40)、植栽痕と考えられる。また、SX17~19のような不定型な溝状の遺構もあるが、性格は不明である。



第42図 区画10の遺構1 (II地区)

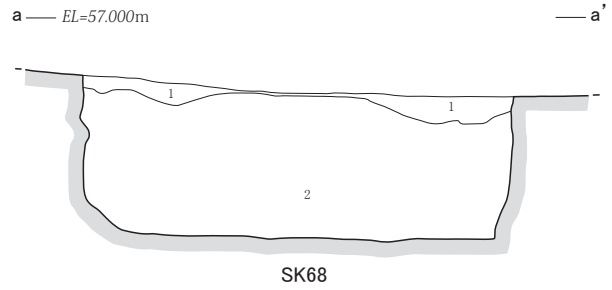


SK66

- 1層 — 赤土ブロックを含む。
- 2層 褐色～オリーブ褐色土 砂質シルト。赤土ブロックを含む。
- 3層 灰黄褐色～にぶい黄褐色土 粘質シルト。
- 4層 灰黄褐色～にぶい黄褐色土 粘質シルト。

SK68

- 1層 オリーブ褐色土 赤土ブロックを含む。
- 2層 — 石灰岩が多く入る。



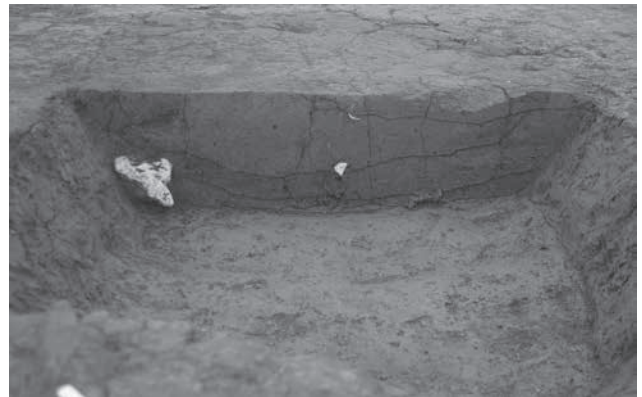
SK68



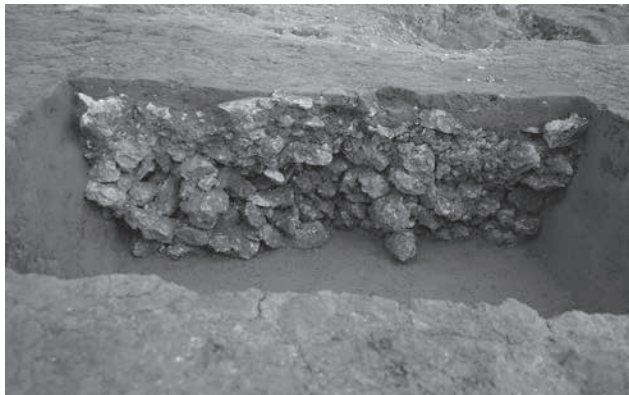
第43図 区画10の遺構2（Ⅱ地区）



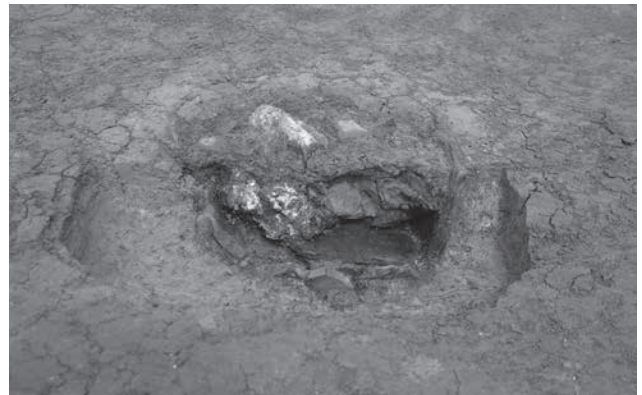
SK66 遺物検出状況（東から）



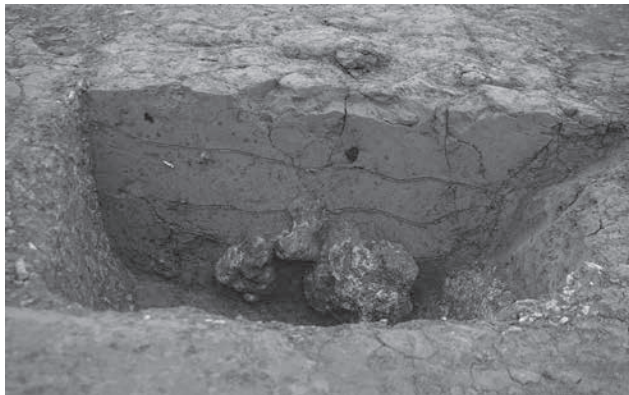
SK66 半裁断面（南から）



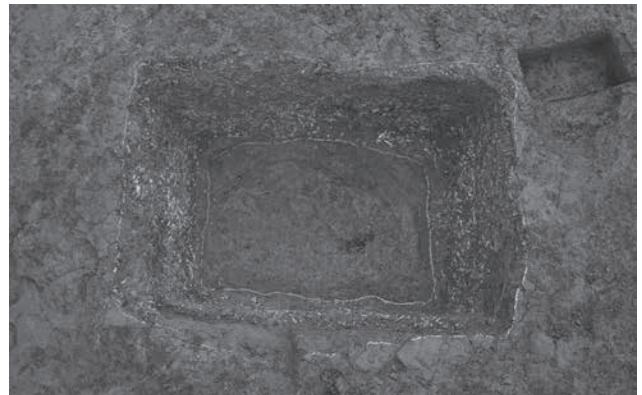
SK68 半裁断面（西から）



SP258 半裁断面（南から）



SK71 半裁断面（東から）



SK71 遺構内完掘状況（北から）

区画11

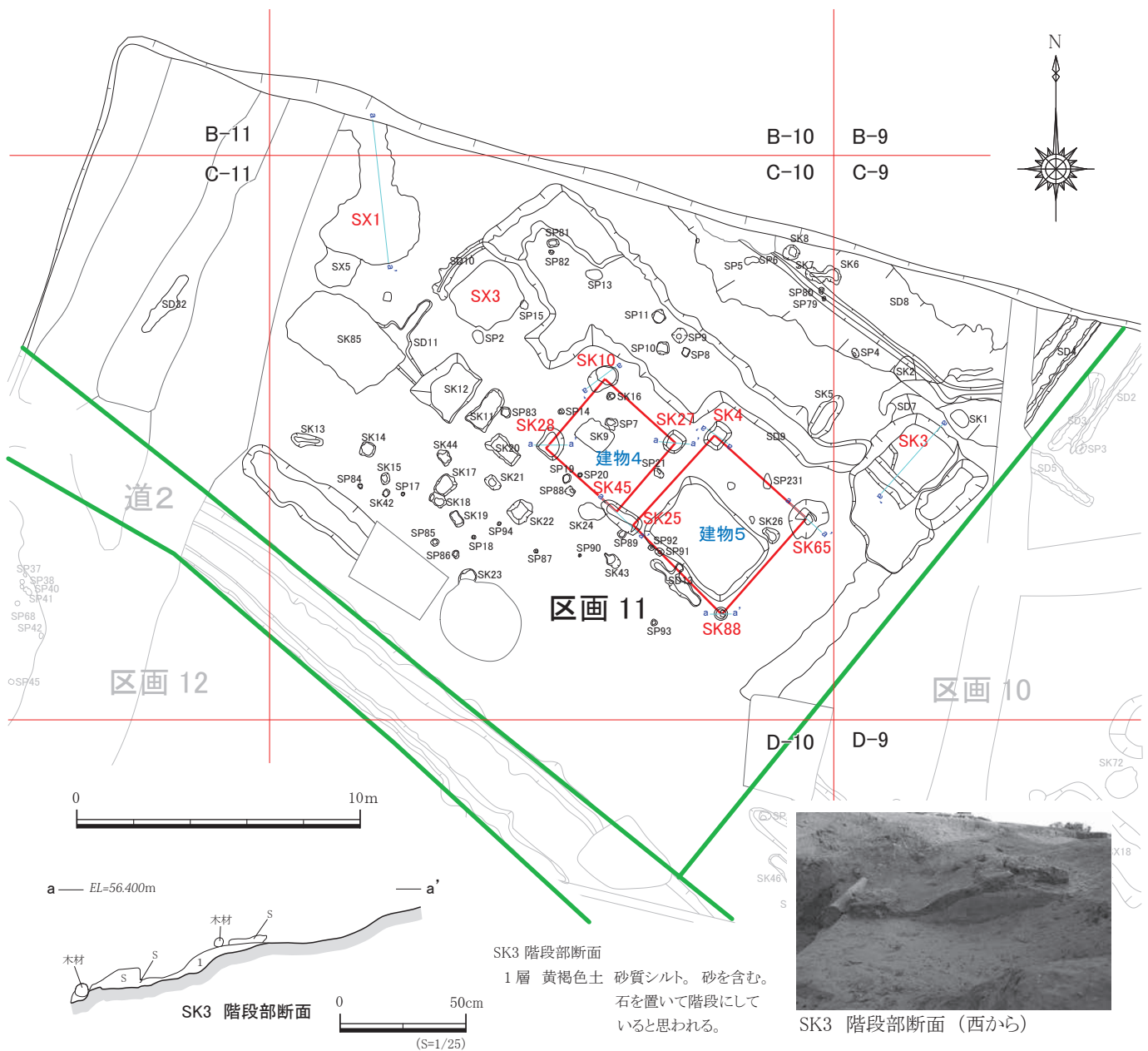
東側に区画10、南側を道跡にて区切られ、屋敷跡に関連するピット、土坑、溝跡、溜池跡、炉跡等を確認している。建物跡と考えられるものは2棟確認できた。

建物4は4本柱の建物と考えられ、中心に約30cm×35cmの石灰岩柱を添えるものである。規模は1間×1間（3.4m×3.4m）で方形を呈する。柱穴の直径は約45～65cmである。

建物5は石灰岩の石柱からなる4本柱の建物と考えられる。規模は1間×1間（4.3m×4.3m）で、方形を呈し、前者より規模が大きい。柱穴の直径は約45～65cmである。

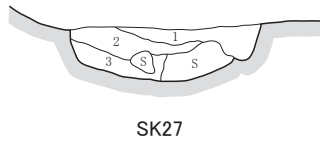
溜池跡（SK3）は、水面に至る箇所に2段の石を敷詰めた階段を設けており、敷詰めた石が動くのを防ぐための木杭も確認できた。SX3については、放射性炭素年代測定をはじめとした諸分析をパリーノ・サーヴェイ株式会社に委託した。その詳細については第5章自然科学分析の頁にて報告する。

なお、西側は米軍住宅建設時に地山まで掘り起こされている部分が広く、遺構の広がり是不明であった。

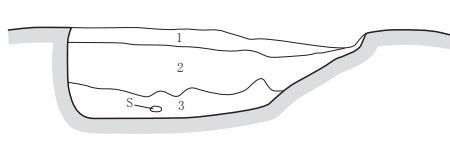


第44図 区画11の遺構1（Ⅱ地区）

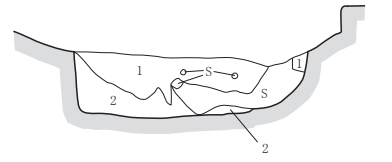
建物4 a— EL=56.400m —a' a— EL=56.600m 建物4 —a' a— EL=56.400m —a'



- SK27
- 1層 オリーブ褐色土 砂質シルト。赤土ブロック、炭を含む。
 - 2層 黄褐色土 粘質シルト。赤土ブロック、3層の土を含む。
 - 3層 オリーブ褐色土 砂質シルト。炭を含む。

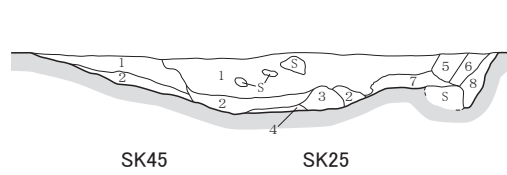


- SK10
- 1層 オリーブ褐色土 粘質シルト。赤土ブロック、炭を含む。
 - 2層 オリーブ褐色土 砂質シルト。赤土ブロック、炭を含む。
 - 3層 黄褐色土 砂質シルト。赤土ブロック、炭を含む。

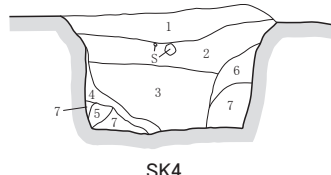


- SK28
- 1層 暗灰黄色～オリーブ褐色土 粘質シルト。赤土ブロックを含む。
 - 2層 赤土ブロックを多く含む。

建物4・5 a— EL=56.600m 建物5 —a' a— EL=56.600m —a'



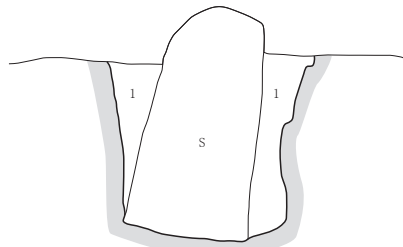
SK45 SK25



SK4

- SK45
- 1層 オリーブ褐色土 砂質シルト。
 - 2層 オリーブ褐色土 砂質シルト。
- SK25
- 1層 暗灰黄色～オリーブ褐色土 砂質シルト。赤土ブロック、炭、礫を含む。
 - 2層 オリーブ褐色土 赤土ブロックを含む。
 - 3層 オリーブ褐色土 赤土ブロックを含む。
 - 4層 オリーブ褐色土 砂質シルト。
 - 5層 暗褐色土 赤土ブロックを含む。
 - 6層 黄褐色土 砂質シルト。
 - 7層 オリーブ褐色土
 - 8層 黄褐色土 砂質シルト。

建物5 a— EL=56.700m —a' 建物5 a— EL=56.800m —a'

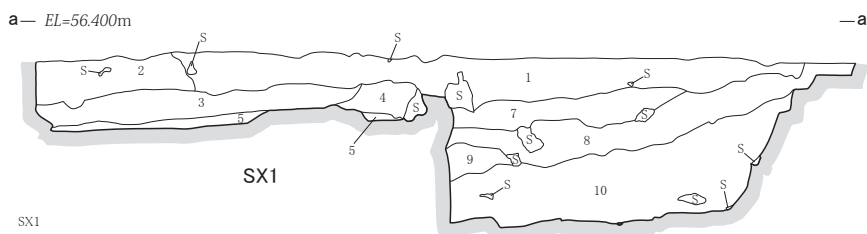


SK88

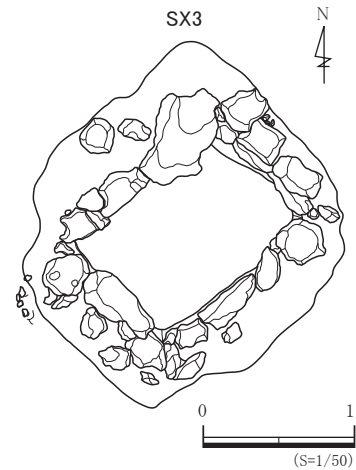
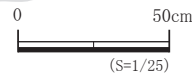


SK65

- SK4
- 1層 黄褐色土 砂質シルト。赤土ブロック、礫、炭を含む。
 - 2層 オリーブ褐色土 砂質シルト。赤土ブロック、礫を含む。
 - 3層 オリーブ褐色土 砂質シルト。赤土ブロックを含む。
 - 4層 オリーブ褐色土 砂質シルト。赤土ブロックを多く含む。
 - 5層 暗褐色土 粘質シルト。
 - 6層 オリーブ褐色土 砂質シルト。赤土ブロックを含む。
 - 7層 オリーブ褐色土 粘質シルト。赤土ブロック、炭を含む。
- SK88
- 1層 黄褐色土 砂質シルト。赤土ブロックを含む。
- SK65
- 1層 黄褐色土 砂質シルト。赤土ブロックを多く含む。



- SX1
- 1層 オリーブ褐色土 砂質シルト。礫、炭を含む。瓦が出土。
 - 2層 オリーブ褐色土 砂質シルト。礫、炭を含む。瓦が出土。
 - 3層 褐色土 砂質シルト。礫、炭を含む。
 - 4層 褐色土 砂質シルト。礫、炭を含む。
 - 5層 にぶい黄褐色土 砂質シルト。赤土ブロック、炭を含む。
 - 6層 黄褐色土 砂質シルト。赤土ブロック、礫、炭を含む。
 - 7層 — —
 - 8層 オリーブ褐色土 砂質シルト。
 - 9層 オリーブ褐色土 砂質シルト。赤土ブロックを含む。
 - 10層 オリーブ褐色土 砂質シルト。赤土ブロックを多く含む。
 - 11層 オリーブ褐色土 砂質シルト。



第45図 区画11の遺構2 (II地区)



SK27 半裁断面 (南から)



SK10 半裁断面 (南から)



SK28 礫検出状況（北から）



SK28 半裁断面（東から）



SK25・45 半裁断面（南から）



SK88 半裁断面（南から）



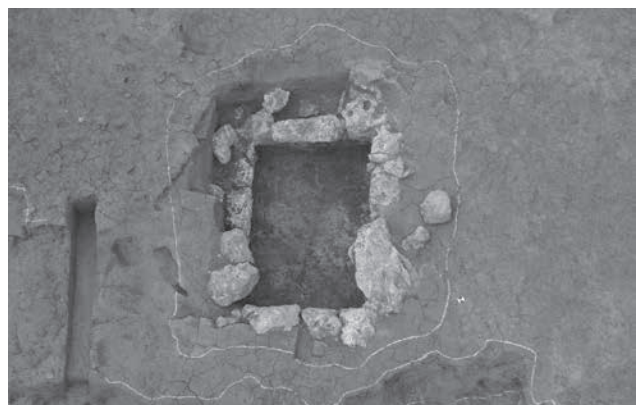
SK65 半裁断面（北から）



SK4 半裁断面（南から）



SX3 南北断面（北東から）



SX3 完掘状況（北東から）

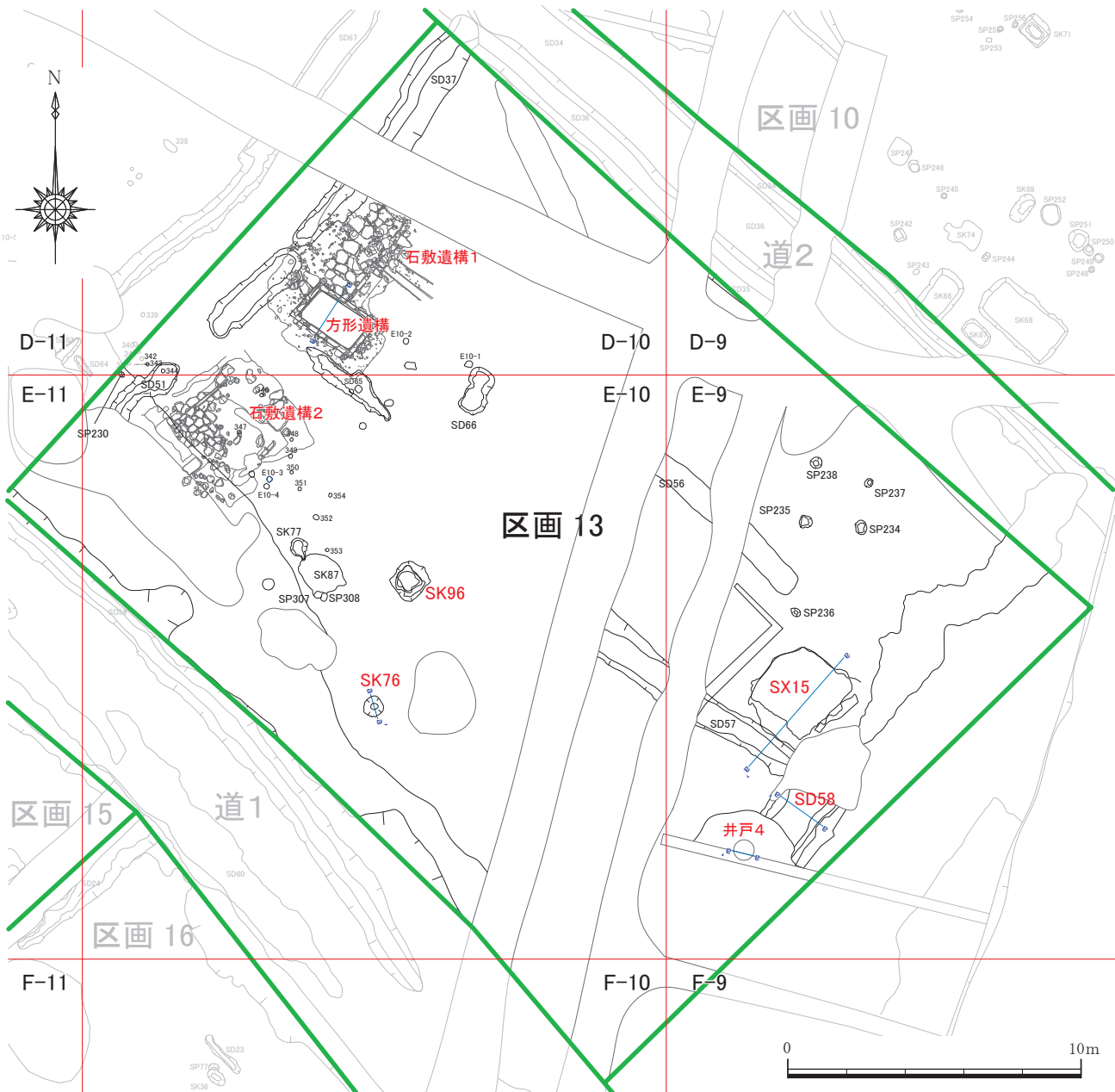
図版 13 区画 11 の遺構（Ⅱ地区）

区画12

南北側を道跡、東側を溝に区切られているが、ピット及び土坑といった遺構は確認できなかったため、ここでは遺構図は省略した。

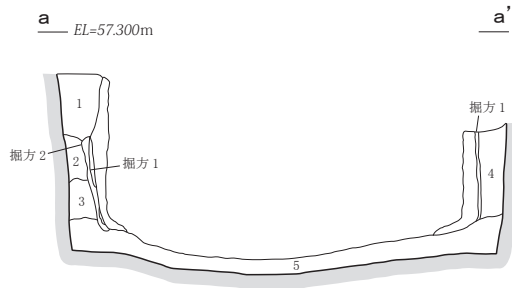
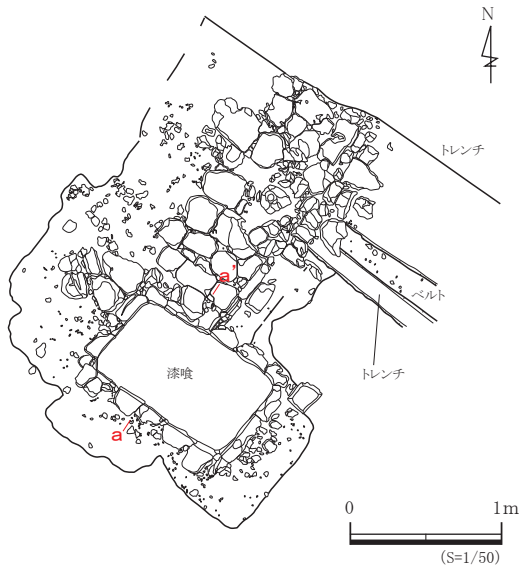
区画13

石敷遺構、溝、井戸、ピット、土坑等が確認された。石敷遺構1、2はⅡ層の上にマージとⅡ層の土を混ぜた土で整地し、その上に平らな石灰岩を敷詰めている。石敷に接して約1m×2mの方形遺構もあり、石灰岩を積上げ、表面に漆喰を貼り、水の浸透を防ぐように作られていた。内部には瓦や焼けた木材が詰まっていた。井戸は、不透水層であるクチャに到達するために岩盤をくり抜いており、岩盤から上部は土砂の混入、崩落を防ぐために石灰岩をハ字状に積み上げている。残存する石積みみの高さは約4.5m、推定直径は0.7m。土坑は、小さいサンゴと細粒砂を混ぜたものを壁及び底面に4cm程貼付け、水溜又は塵溜めに使用したものがある。全体は残っていないが、約1.25cm×1.25cmである。溝は石敷きの下にあり、後世の造成等により、部分的な確認となった。

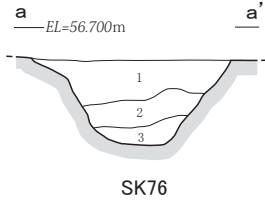


第46図 区画13の遺構1（Ⅱ地区）

石敷遺構1・方形遺構



方形遺構

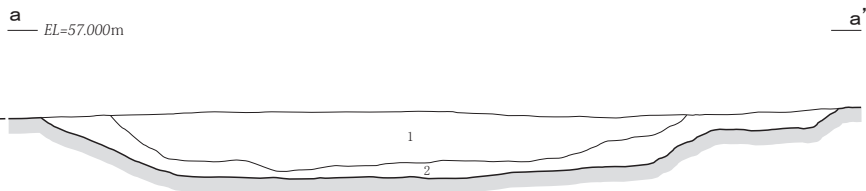


SK76

石敷遺構2



井戸4



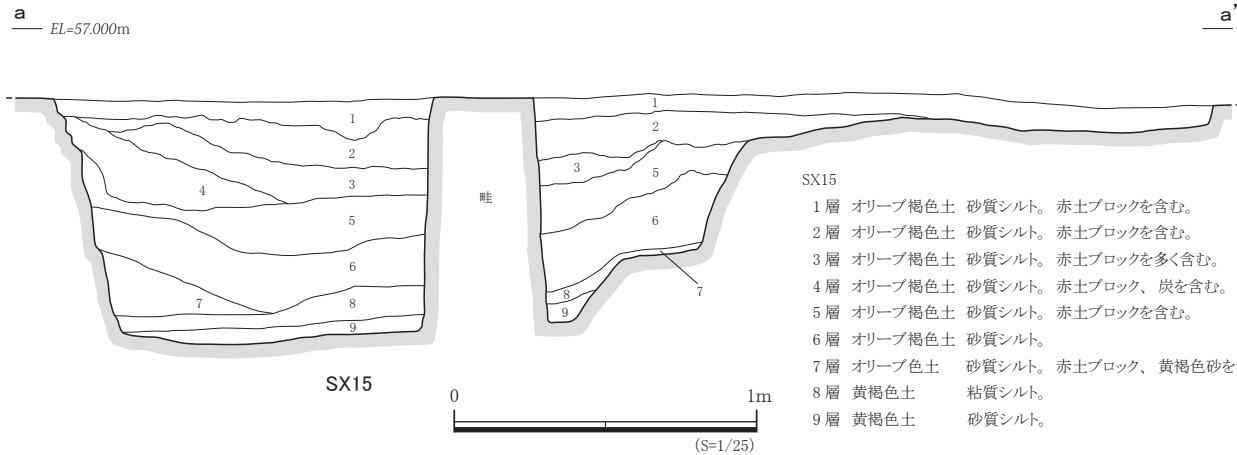
SD58

SK76

- 1層 オリーブ褐色土 砂質シルト。
礫、炭を含む。
- 2層 褐色土 砂質シルト。
- 3層 褐色土 砂質シルト。
赤土ブロックを含む。

SD58

- 1層 オリーブ褐色土 砂質シルト。
赤土ブロックを含む。
- 2層 オリーブ褐色土 砂質シルト。



SX15

SX15

- 1層 オリーブ褐色土 砂質シルト。赤土ブロックを含む。
- 2層 オリーブ褐色土 砂質シルト。赤土ブロックを含む。
- 3層 オリーブ褐色土 砂質シルト。赤土ブロックを多く含む。
- 4層 オリーブ褐色土 砂質シルト。赤土ブロック、炭を含む。
- 5層 オリーブ褐色土 砂質シルト。赤土ブロックを含む。
- 6層 オリーブ褐色土 砂質シルト。
- 7層 オリーブ色土 砂質シルト。赤土ブロック、黄褐色砂を含む。
- 8層 黄褐色土 粘質シルト。
- 9層 黄褐色土 砂質シルト。

第47図 区画13の遺構2 (Ⅱ地区)



SK96 半裁断面 (西から)



石敷遺構1・2 検出状況 (東から)



石敷遺構1及び方形遺構 (西から)



方形遺構 漆喰除去状況 (東から)



石敷遺構2 検出状況 (東から)



SD58 断面 (北から)



SK76 半裁断面 (南から)



井戸4 断割り状況 (北から)

図版 14 区画 13 の遺構 (Ⅱ地区)



SX15 1/4 半裁 北西壁 (東から)



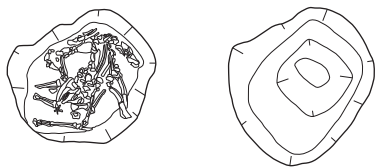
SX15 1/4 半裁 南東壁 (西から)

区画14

区画として分けることはできるが、遺構はみられなかったため、ここでは遺構図は省略する。

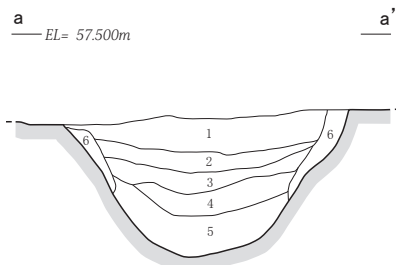
区画15

溝、ピット、鋤跡が確認されており、SP1内からヤギ1個体を検出した。鋤跡は複数が集中して検出された。平面が三角形で深さは10cm程である。屋敷に関連する遺構が少ないことから、畑として利用されていたことが考えられる。



SP1 獣骨検出状況

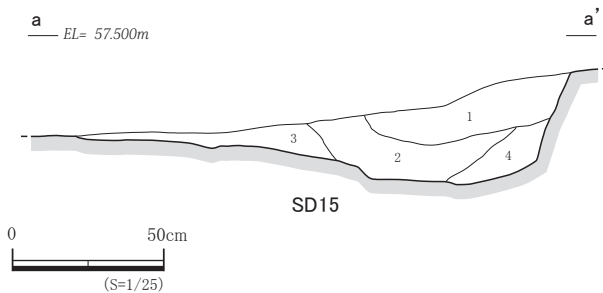
SP1 完掘状況



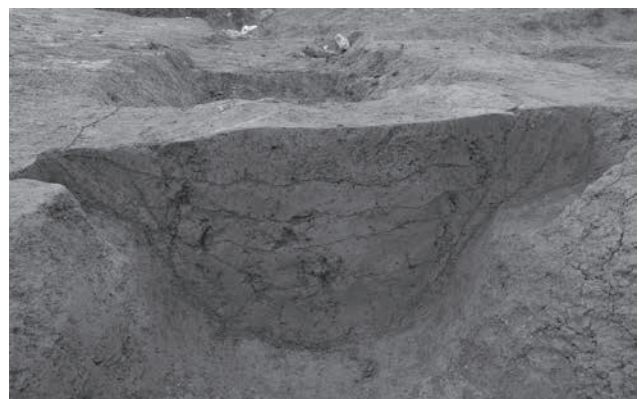
SD14



SP1 獣骨検出状況 (南から)

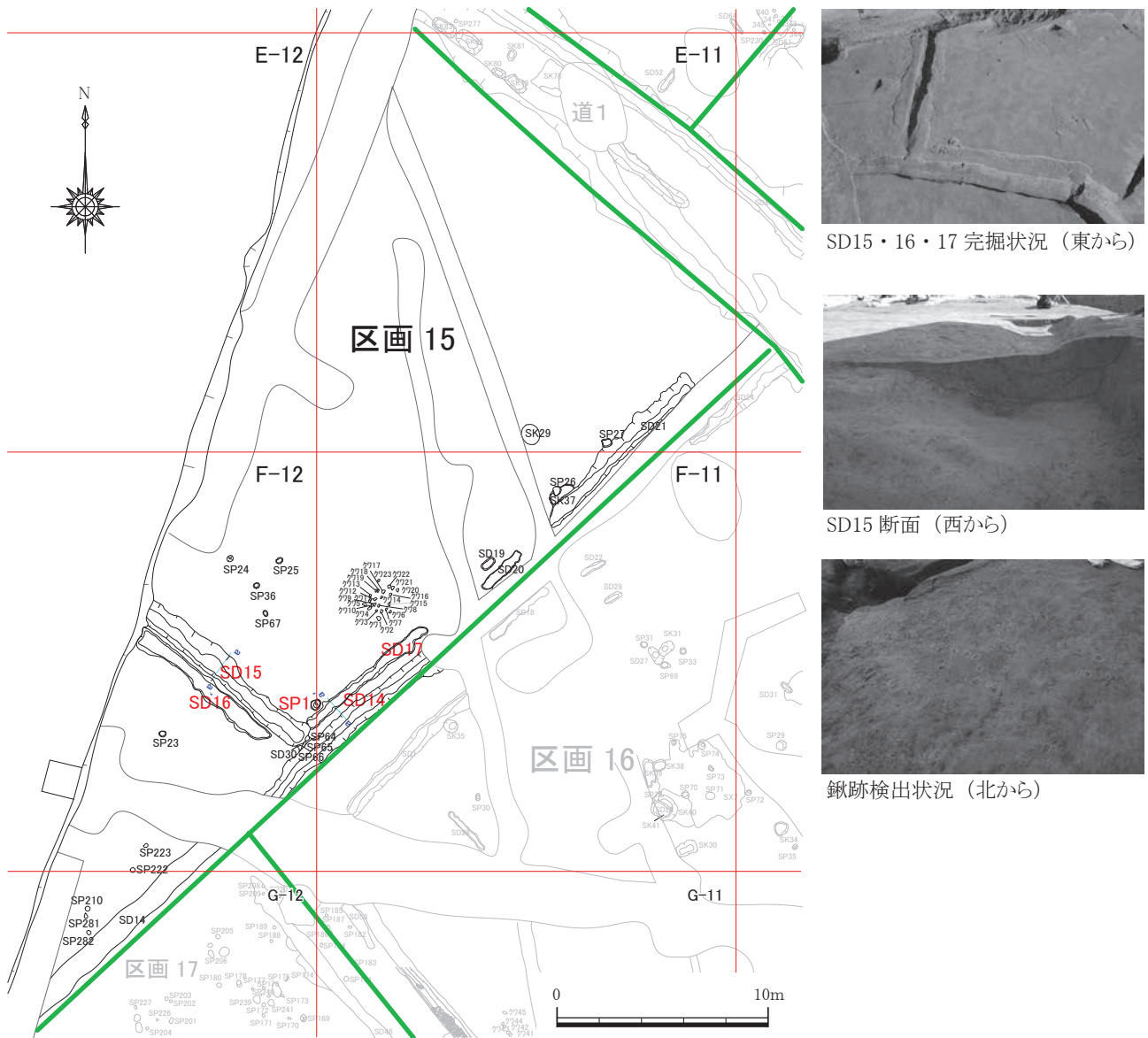


SD15



SD14 断面 (南から)

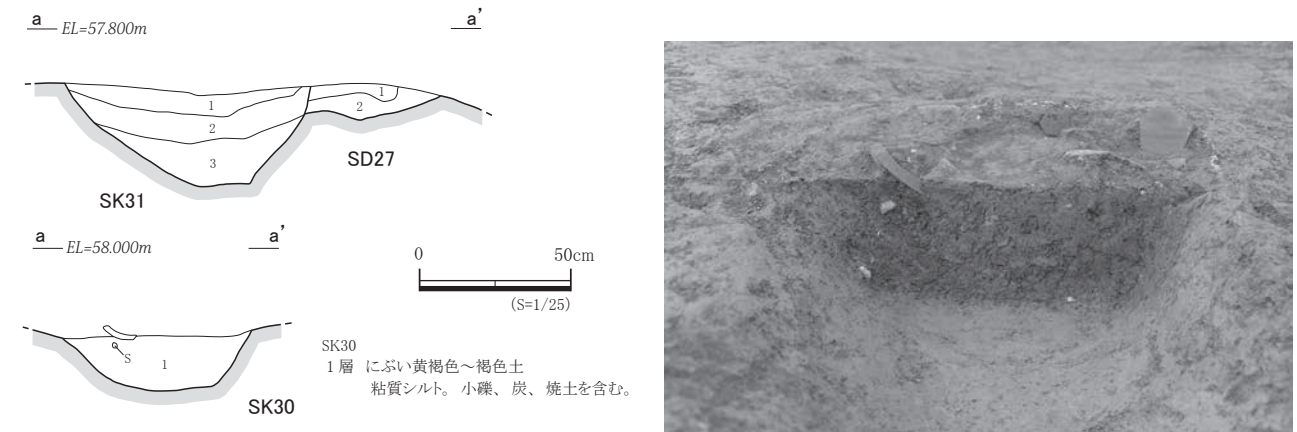
第 48 図 区画 15 の遺構 1 (Ⅱ地区)



第 49 図 区画 15 の遺構 2 (Ⅱ地区)

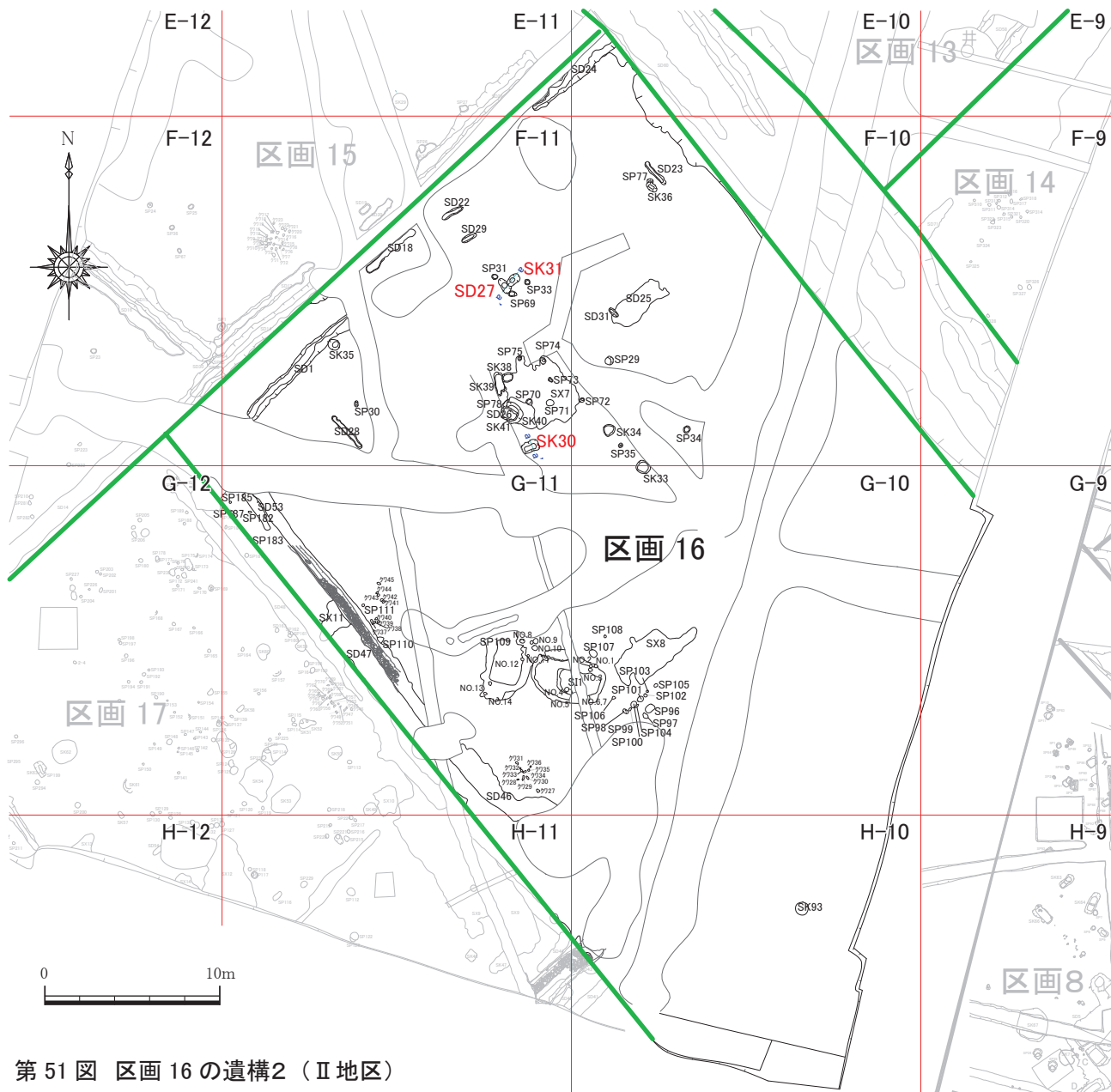
区画 16

溝、ピット、土坑が確認されている。土坑の埋土はⅡ層と赤土が混ざっており、耕作の際に攪拌されたものと考えられる。



第 50 図 区画 16 の遺構 1 (Ⅱ地区)

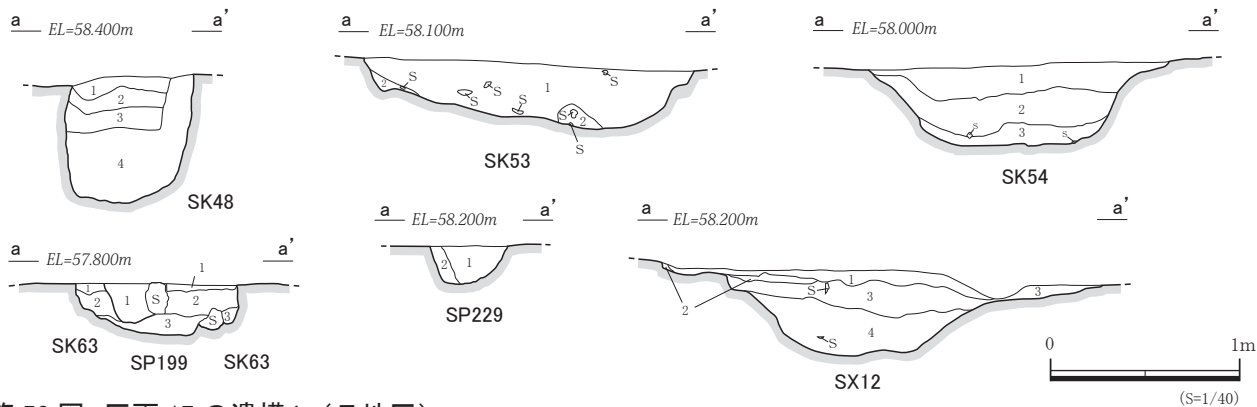
SK30 半裁断面 (西から)



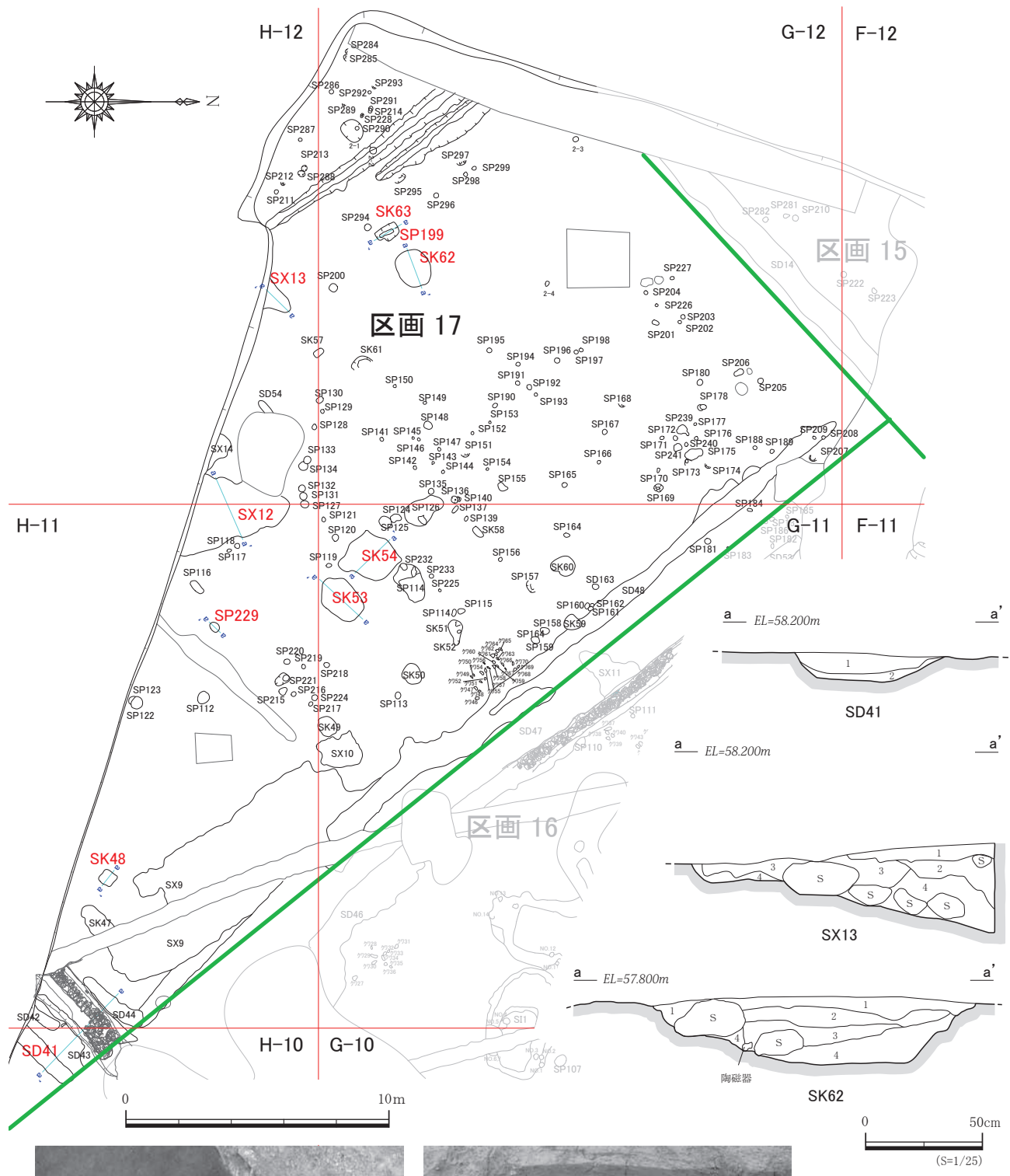
第 51 図 区画 16 の遺構 2 (Ⅱ地区)

区画 17

溝、ピット、土坑が確認されている。溝の中に拳大～頭大の大きさの石灰岩を詰めているものもあり、水はけを良くするために詰められた可能性もある。



第 52 図 区画 17 の遺構 1 (Ⅱ地区)



SX13 礫検出状況 (西から)

SK48 半裁断面 (南から)

第 53 図 区画 17 の遺構 2 (Ⅱ地区)



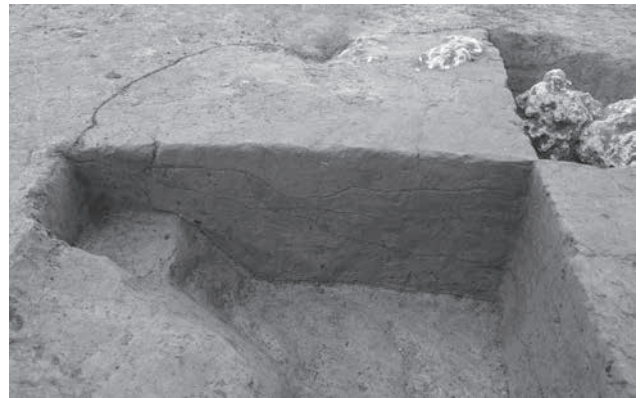
SK54 1/4半裁北壁（南から）



SK54 1/4半裁南壁（北から）



SP229 半裁断面（西から）

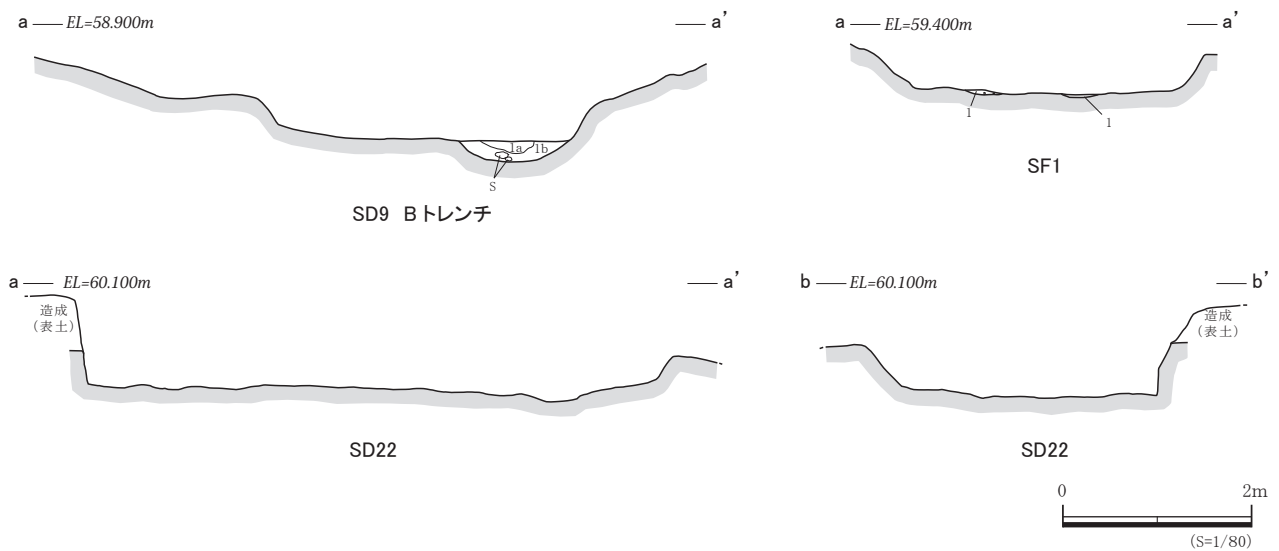


SK62 1/4半裁東壁（西から）

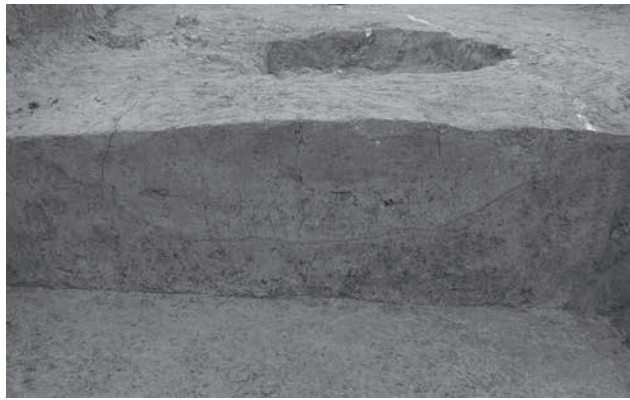
図版 15 区画 17 の遺構（Ⅱ地区）

道 1（Ⅰ地区）

SD 9、21、22は道跡と考えられ、幅が約3.3m、北西－南東方向に延びており、Ⅱ地区の道 1につながる。SF 1は轍（馬車の車輪の跡か）と考えられる。



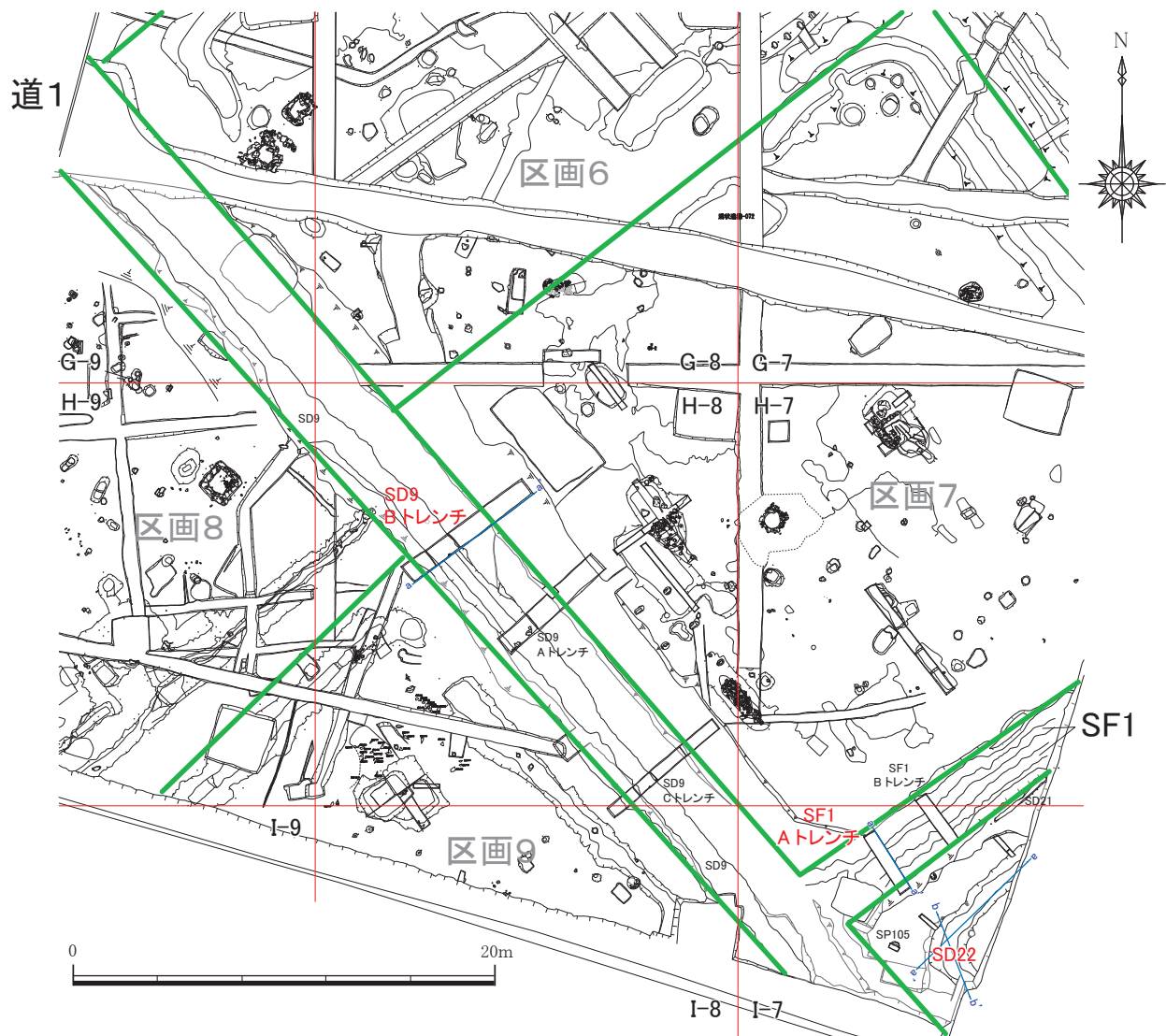
第 54 図 道1の遺構1（Ⅰ地区）



SD9 断面 (南東から)



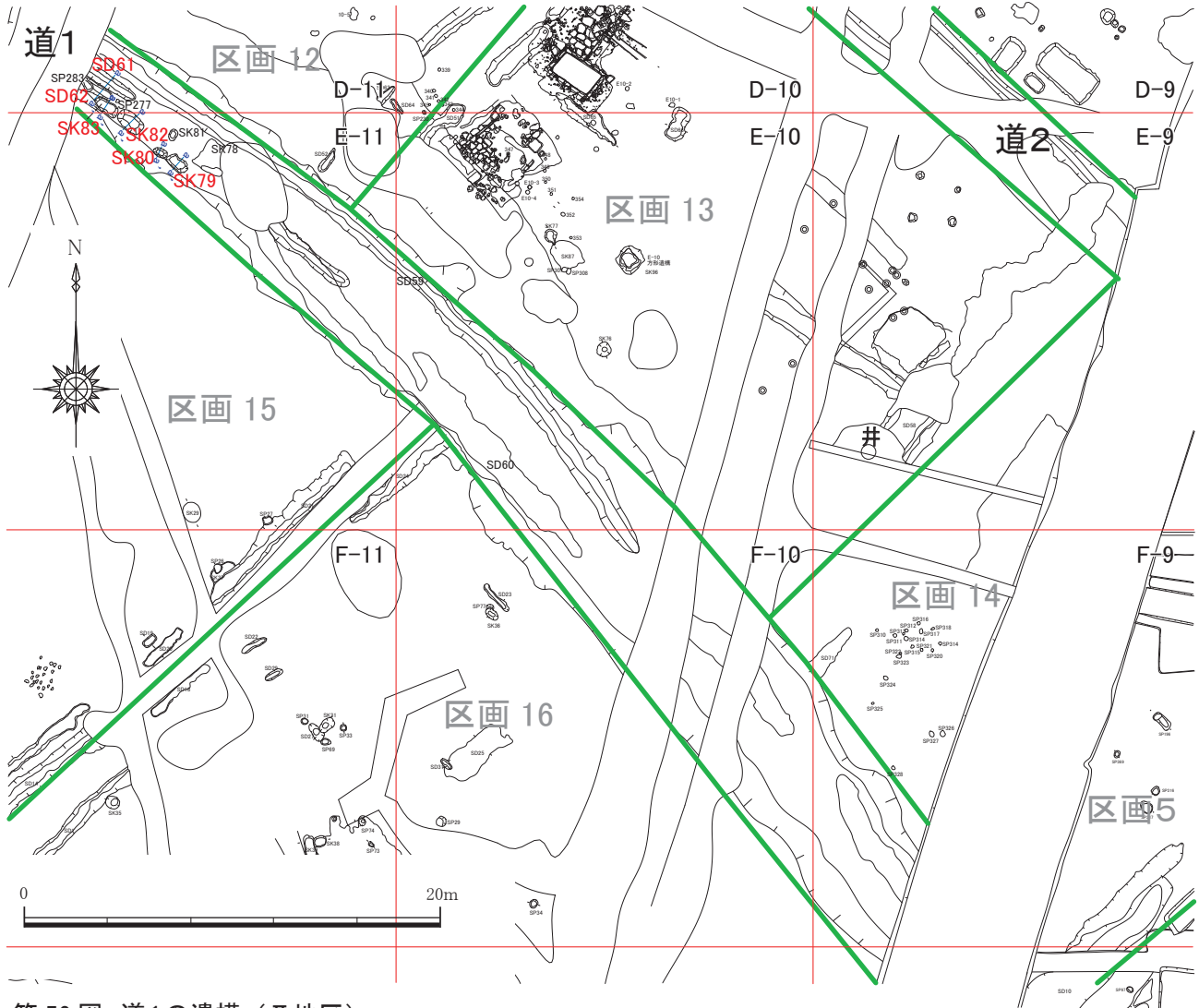
SF1 検出状況 (北東から)



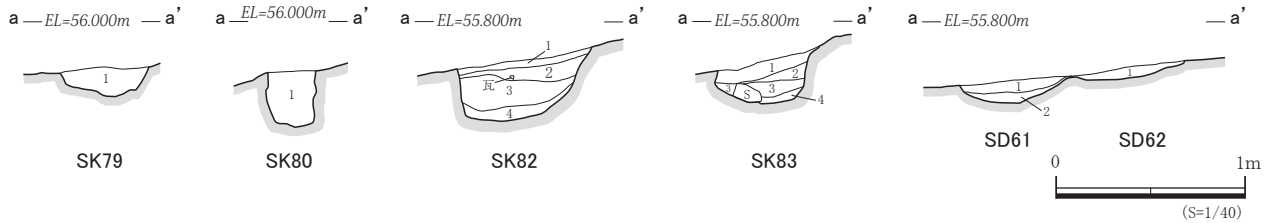
第55図 道1の遺構2 (I地区)

道1 (II地区)

北西方向から南東方向へと続く道跡で、幅は約3.3mで、南北縁には排水溝と考えられる溝を設けている。北西側は遺構の深度が浅くなることから、雨水等は北西から南東へと流れていたと考えられる。



第56図 道1の遺構（Ⅱ地区）



SK79
1層 黄褐色土 砂質シルト。炭を含む。
SK80
1層 黄褐色～オリーブ褐色土 砂質シルト。

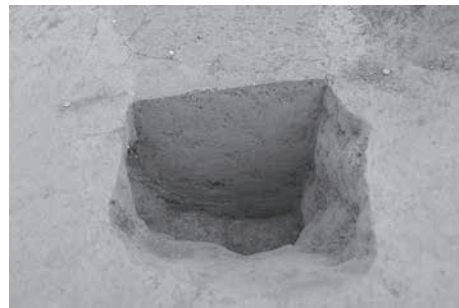
SK82
1層 オリーブ褐色土 砂質シルト。
2層 黄褐色土 砂質シルト。
瓦が出土。
3層 黄褐色土 砂質シルト。
4層 黄褐色土 砂質シルト。

SK83
1層 オリーブ褐色土 砂質シルト。
2層 黄褐色土 砂質シルト。
3層 黄褐色土 砂質シルト。
4層 黄褐色土 砂質シルト。

SD61
1層 黄褐色土 砂質シルト。炭を含む。
SD62
2層 黄褐色土 砂質シルト。炭を含む。
1層 黄褐色土 砂質シルト。



SK79 半裁断面（西から）



SK80 半裁断面（西から）



SK82 半裁断面 (西から)

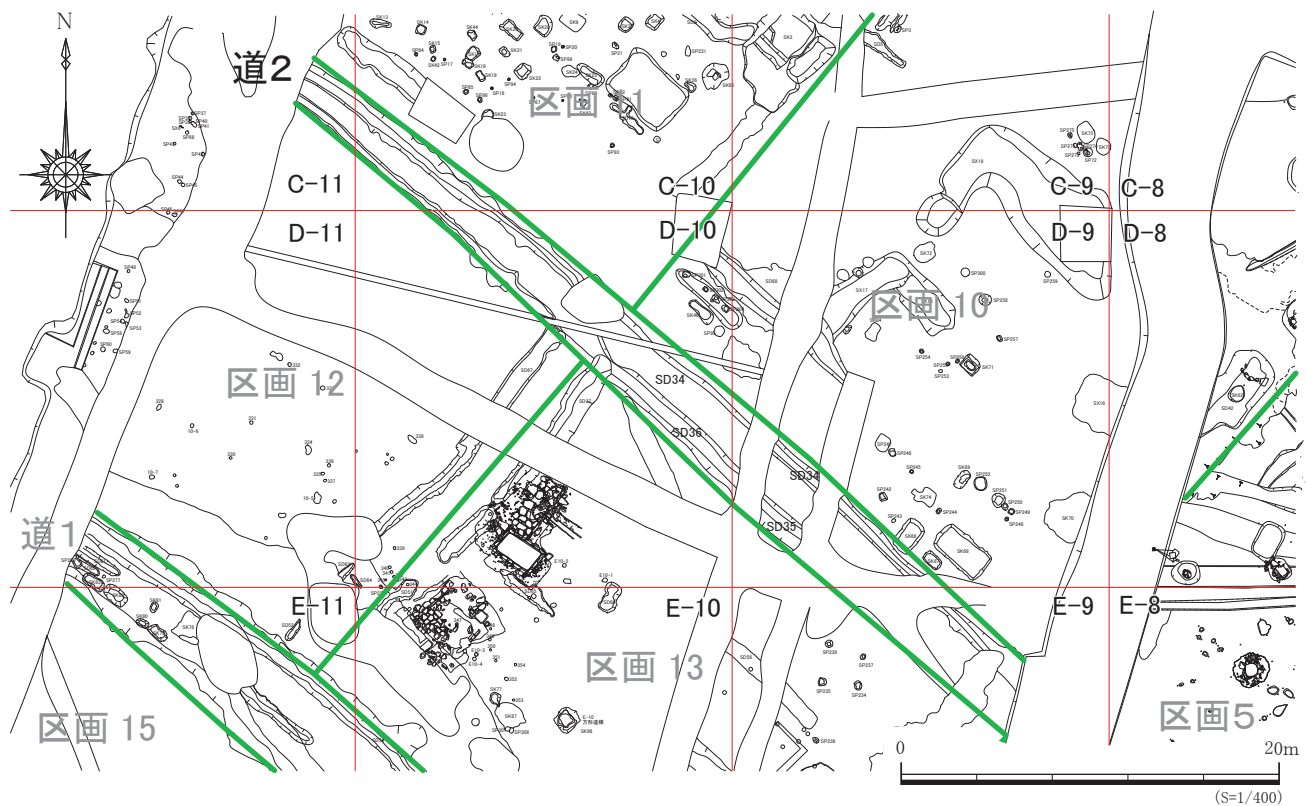


SK83 半裁断面 (西から)

図版 16 道 1 の遺構 (Ⅱ地区)

道 2 (Ⅱ地区)

北西方向から南東方向へと続く道跡で、幅は5.5m~8.8mと箇所により差がある。埋土は造成土であり、Ⅱ層は確認できていない。使用されたのは地山 (マージ) と考えられ、轍と考えられる細い溝状跡も確認した。北縁に排水溝がある。南縁にも排水溝はあったと考えられるが、北西側でのみ確認できる。北西側で起伏があり、大きく窪む。



第 57 図 道 2 の遺構 (Ⅱ地区)

第2項 遺構内出土遺物

(I地区)

区画1

瓦、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器を主とし、青磁、白磁、染付、色絵、タイ産褐釉陶器、本土産陶磁器、陶質土器、カムイヤキ、石製品、円盤状製品、金属製品等、合計887点が出土した。第7表に特徴的な遺物の観察事項、第49表に遺物毎の出土状況を示す。

第7表 区画1出土遺物観察一覧(I地区)a

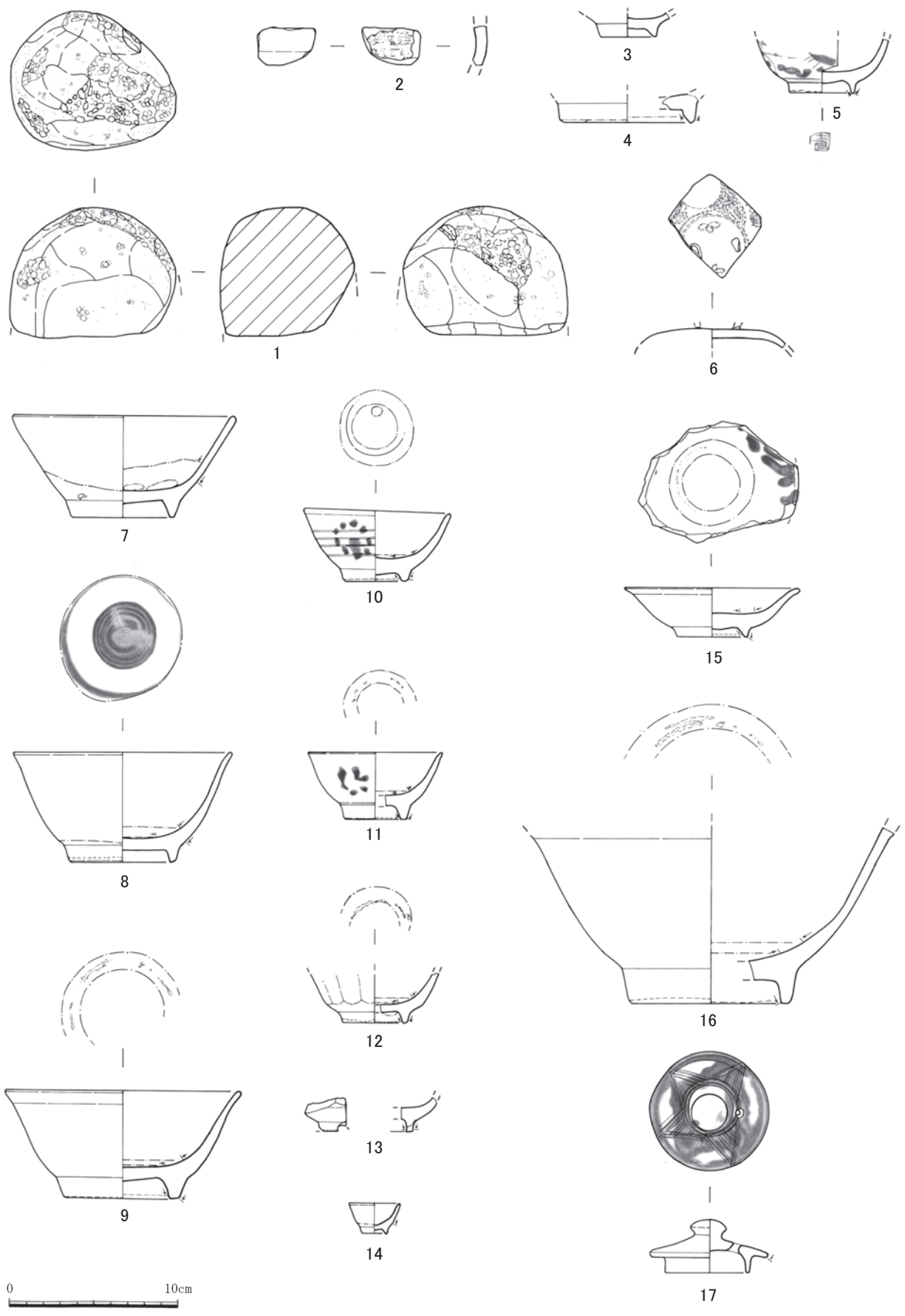
単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地				
				口径	器高	底径						
第58図 図版17	1	石器	磨石	—	—	—	表面・側面に磨面。側面上部に敲打痕。変質安山岩。	D-6 SD28 1層				
	2	カムイヤキ	壺	胴部	—	—	内面に当て具痕がみられる。胎土は暗褐色、白色粒を含む。	D-6 SD28 1層				
	3	白磁	小碗	底部	口径	器高	底径	型成形。素地は白色で緻密。徳化窯産。	D-6 SD28 2層			
	4	染付	碗	底部	口径	器高	底径	—	—	—	墨付から高台内まで露胎。素地は白灰色で細かい。黒色粒を含む。福建・広東系。	D-6 SD28 1層
	5	本土産磁器	染付 小碗	底部	口径	器高	底径	墨付は露胎。素地は白色で緻密。胴部に雲文、丸文。高台に2条の圏線。外底に銘あり。薩摩。	D-6 SD28 2層			
	6	本土産磁器	色絵 蓋	—	口径	器高	底径	—	—	—	素地は白色で緻密。外面に松や花びらの文様。目跡が残る。	D-6 SD28 2層
	7	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径	器高	底径	13.2	6.05	6.2	内外面に上半部に灰釉を単掛け。フィガキヤ手法。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は灰黄色。	D-6 SD28 2層
	8	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径	器高	底径	13.0	6.5	6.3	内外面上半部まで黒釉を単掛け。外面下半部から外底まで露胎。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。墨付にアルミナを塗布。素地は浅黄色。	D-6 SD28 3層
	9	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径	器高	底径	14.0	6.4	6.8	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。墨付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は橙色を含む。	D-6 SD28 1層
	10	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	8.8	4.3	4.0	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。墨付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は灰白色。外面に呉須と褐釉で花文4つ。	D-6 SD28 1層
	11	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	8.0	4.0	3.6	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。墨付にアルミナを塗布。素地は淡灰色。外面に呉須で花文4つ。	D-6 SD28 1層
	12	沖縄産 施釉陶器	小碗	底部	口径	器高	底径	—	—	3.9	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。墨付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は浅黄色。外面面取り。	D-6 SD28 2層
	13	沖縄産 施釉陶器	小碗	底部	口径	器高	底径	—	—	—	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。墨付にアルミナを塗布。素地は淡灰色。	D-6 SD28 2層
	14	沖縄産 施釉陶器	小杯	口～底部	口径	器高	底径	3.0	1.8	1.6	内外面に透明釉。外面胴部下半は露胎。素地は淡灰色。	D-6 SD28 2層
	15	沖縄産 施釉陶器	皿	口～底部	口径	器高	底径	10.4	2.9	4.2	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。墨付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は浅黄色。内面に呉須で菊花文か。	D-6 SD28 1層
第58図 図版18	16	沖縄産 施釉陶器	鉢	底部	口径	器高	底径	—	—	9.8	外面に黒釉、内面に白化粧+透明釉。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。墨付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は黄白色。	D-6 SD28 2層
	17	沖縄産 施釉陶器	急須 蓋	—	口径	器高	底径	7.1	3.2	4.9	外面に呉須と褐釉による文様。素地は浅黄色。黒色粒を含む。18とセットと考えられる。	D-6 SD28 1層
第59図 図版18	18	沖縄産 施釉陶器	急須	口～底部	口径	器高	底径	6.8	9.9	8.5	外面に呉須と褐釉による文様。素地は浅黄色。黒色粒を含む。17とセットと考えられる。	D-6 SD28 1層
	19	沖縄産 施釉陶器	酒器	底部	口径	器高	底径	—	—	7.0	外面に白化粧+透明釉。墨付及び内面は露胎。墨付に目跡あり(アルミナ付着)。素地は暗灰白色。	D-6 SD28 2層
	20	沖縄産 施釉陶器	火炉	口縁部	口径	器高	底径	15.0	—	—	外面及び内面口縁部下まで褐釉を施釉。口唇部を釉剥ぎ。	D-6 SD28 2層
	21	沖縄産 施釉陶器	瓶	底部	口径	器高	底径	—	—	6.3	外面に褐釉を施釉。墨付は露胎。頸部に数条の圏線を巡らす。	D-6 SD28 1層
	22	沖縄産 無釉陶器	播鉢	口縁部	口径	器高	底径	—	—	—	内面口縁部下より櫛目を施す。素地は暗赤褐色。内外面ともに轆轤痕が明瞭。	D-6 SD28 2層
	23	沖縄産 無釉陶器	播鉢	胴部	口径	器高	底径	—	—	—	口縁外側に広げ口唇部を平坦にする。素地は明赤褐色。内面に櫛目を施す。	D-6 SD28 2層
	24	沖縄産 無釉陶器	壺	口縁部	口径	器高	底径	12.6	—	—	口縁部は逆「L」字状を呈する。素地は暗赤褐色。	D-6 SD28 2層
	25	沖縄産 無釉陶器	壺	底部	口径	器高	底径	—	—	10.0	外面から外底まで自然釉?がかかっている。素地は暗赤褐色～明赤褐色。	D-6 SD28 1層

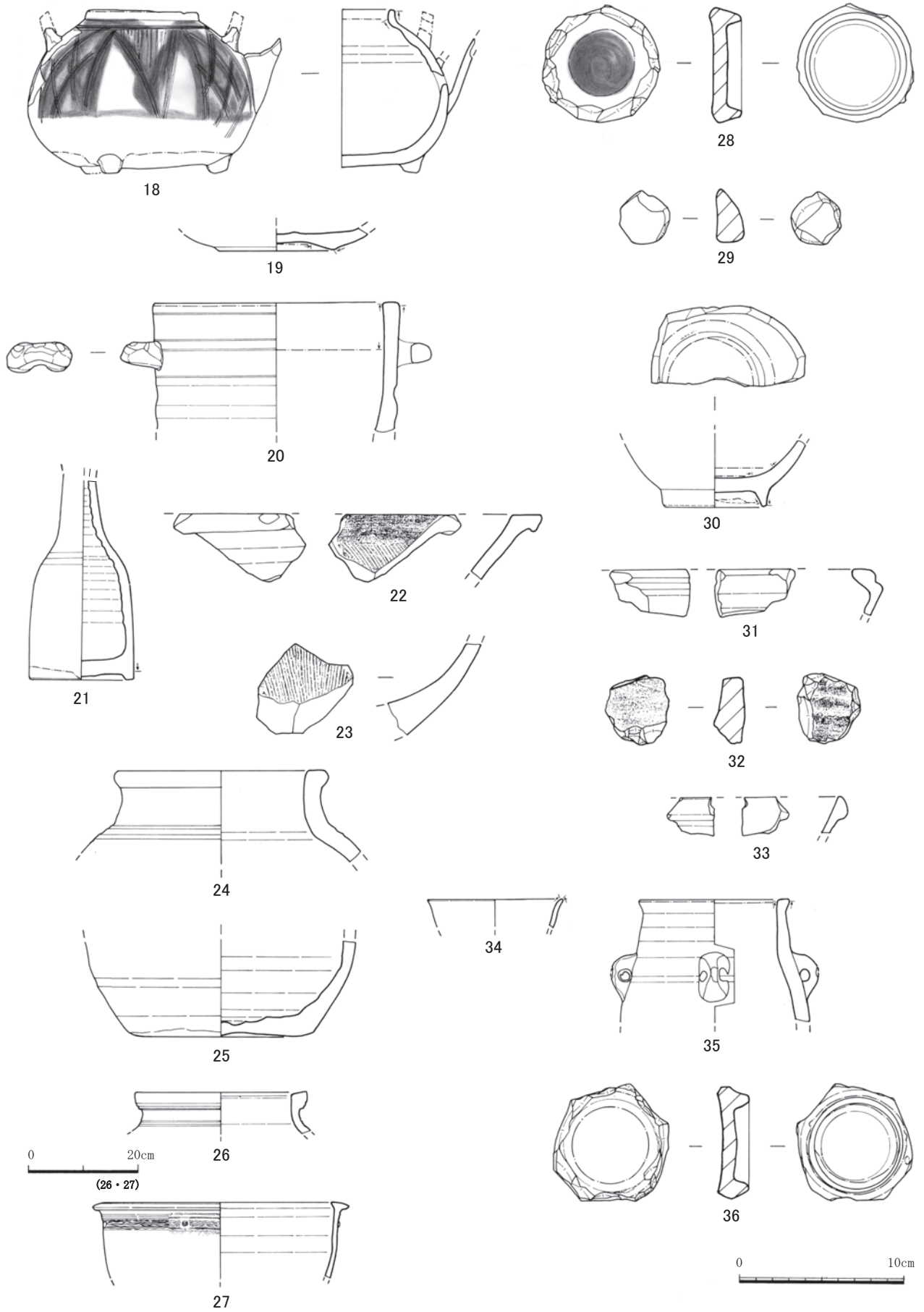
第7表 区画1出土遺物観察一覧 (I地区) b

単位:cm

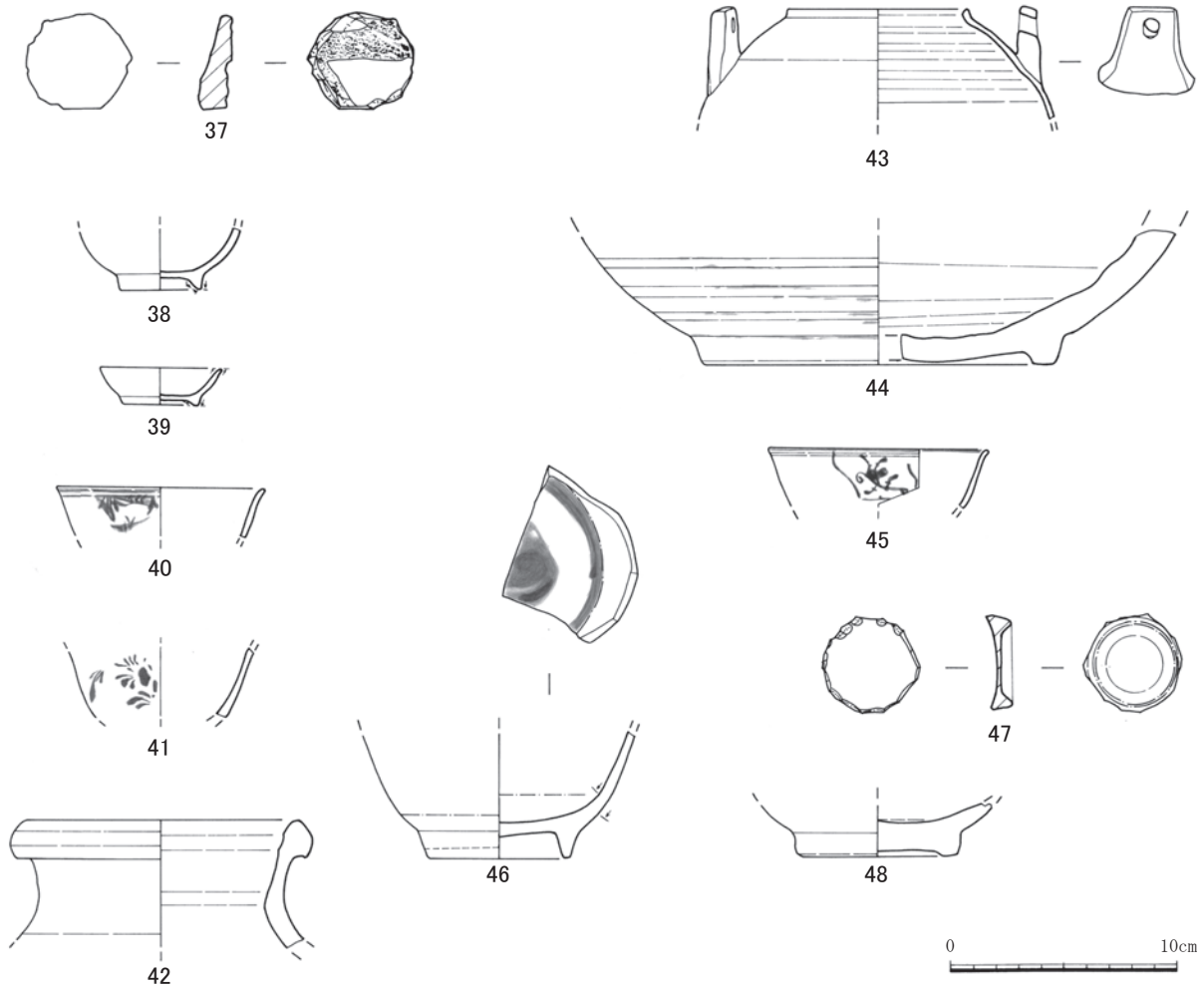
挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
第59図 図版18	26	沖縄産 無釉陶器	甕	口縁部	口径	器高	底径	素地は暗赤褐色。口唇外端部に2条の圏線。	D-6 SD28 2層
	27	沖縄産 無釉陶器	甕	口縁部	口径	器高	底径	素地は暗赤褐色。内外面ともに轆轤痕が明瞭。外面口縁部下部に沈線の波状文と貼付した丸文。	D-6 SD28 2層
	28	円盤状製品	—	—	長径	厚さ	最大径	沖縄産施釉陶器を素材としている。重量71.3g。	D-6 SD28 1層
	29	円盤状製品	—	—	長径	厚さ	最大径	明朝系瓦を素材としている。重量13.8g。	D-6 SD28 1層
	30	沖縄産 施釉陶器	碗	底部	口径	器高	底径	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は黄白色。	D-6 SD28-47畦 1層
	31	沖縄産 無釉陶器	火炉	口縁部	口径	器高	底径	口唇部は平坦。素地は明赤褐色。	D-6 SD28-47畦 1層
	32	円盤状製品	—	—	長径	厚さ	最大径	沖縄産無釉陶器を素材としている。重量33.8g。	D-6 SD28-47畦 1層
	33	白磁	碗	口縁部	口径	器高	底径	玉縁口縁。玉縁下端の削りが明瞭。素地は灰白色。	D-6 SD47 2層
	34	白磁	小碗	口縁部	口径	器高	底径	型成形。口唇部を釉剥ぎ。素地は白色で緻密。徳化窯産。	D-6 SD47 1層
	35	沖縄産 施釉陶器	壺	口縁部	口径	器高	底径	内外面に黒釉を施釉。口唇部を釉剥ぎ。	D-6 SD47 1層
36	円盤状製品	—	—	長径	厚さ	最大径	沖縄産施釉陶器を素材としている。重量88.4g。	D-6 SD47 1層	
第60図 図版18	37	円盤状製品	—	—	長径	厚さ	最大径	沖縄産無釉陶器を素材としている。重量21.9g。	D-6 SD47 1層
	38	白磁	小碗	底部	口径	器高	底径	型成形。外底及び畳付は露胎。素地は白色で緻密。徳化窯産。	D-6 SK16 2層
	39	白磁	皿	口~底部	口径	器高	底径	型成形。口唇部は釉剥ぎ。畳付に砂粒付着。素地は白色で緻密。徳化窯産。	D-6 SK16 2層
	40	染付	小碗	口縁部	口径	器高	底径	口縁は僅かに外反。素地は白色で緻密。	D-6 SK16 1層
	41	色絵	小碗	胴部	口径	器高	底径	型成形。素地は白色で緻密。外面胴部に花文。徳化窯産。	D-6 SK16畦 2層
	42	沖縄産 無釉陶器	壺	口縁部	口径	器高	底径	素地はにぶい赤褐色。内外面ともに轆轤痕が明瞭。	D-6 SK16 1層
第60図 図版19	43	陶質土器	土瓶	口縁部	口径	器高	底径	素地は橙色。内外面クロコナデ。	D-6 SK16 1層
	44	陶質土器	火炉	底部	口径	器高	底径	素地は橙色。内外面クロコナデ。	D-6 SK16 1層
	45	染付	小碗	口縁部	口径	器高	底径	素地は白色で緻密。外面に仙芝祝寿文。徳化窯産。	E-6 SK50内 2層
	46	沖縄産 施釉陶器	碗	底部	口径	器高	底径	内外面上半部まで黒釉を単掛け。外面下半部から外底まで露胎。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗布。素地は浅黄色。	E-6 SK50内 2層
図版19	47	円盤状製品	—	—	長径	厚さ	最大径	白磁を素材としている。重量15.7g。	E-6 SK50内 1層
	48	白磁	碗	底部	口径	器高	底径	内面に灰白色を施釉。高台の削りは浅い。素地は白灰色で緻密。黒色粒を含む。	E-6 SE3 1層
	49	本土産 近現代磁器	小碗	口~底部	口径	器高	底径	素地は白色で緻密。外面に文様。	D-6 SD28 1層
	50	本土産 近現代磁器	皿	口~底部	口径	器高	底径	素地は白色で緻密。内面に菊花文。銅版転写。	D-6 SD28 1層
	51	本土産 近現代磁器	蓋	—	口径	器高	底径	素地は白色で緻密。	D-6 SD28 1層
	52	本土産 近現代磁器	急須	口縁部	口径	器高	底径	素地は白色で緻密。外面に植物の文様。銅版転写。	D-6 SD28 2層
	53	石製品	—	—	口径	器高	底径	表裏面に磨面が確認される。	D-6 SD28 1層
	54	青銅製品	蝶番	—	長さa	長さb	—	表面に線彫りの文様。	D-6 SD47 2層
	55	本土産 近現代磁器	瓶	底部	口径	器高	底径	外面に暗褐色釉を施釉。内面及び外底は露胎。素地は褐色。	D-6 SD47 1層
	56	瓦	明朝系 平瓦	—	口径	器高	底径	広端~狭端部。凸面の狭端側に横方向の撫でによる浅い凹線がみられる。赤色。	D-6 SD47 1層
57	ガラス製品	瓶	口~底部	口径	器高	底径	ガラス自体に小さな気泡がみられる。瓶底には「AJINOMOTO」、「20」というエンボス。色調は透明。	D-6 SD47 1層	
58	本土産 近代陶器	播鉢	底部	口径	器高	底径	外面に褐釉を施釉。胴部下半は露胎。素地はにぶい黄褐色。丹波。	D-6 SK16畦 2層	
59	本土産 近現代磁器	小碗	口~底部	口径	器高	底径	両面に透明釉を施釉。畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面口縁部に緑色の2条の圏線。外底に「岐286」という銘あり。統制磁器。銅版転写。	E-6 SK50内 1層	
60	瓦	明朝系 丸瓦	—	口径	器高	底径	筒部凸面の玉縁側に横方向のナデによる凹線、端部に横方向の線状痕がみられる。筒部凸面の端部から側面にかけて漆喰が付着。色調は赤色。	E-6 SK50 3層	
61	鉄製品	カマ	—	長さa	長さb	—	刃こぼれがみられる。重量41.8g。	E-6 SK50内 1層	
62	石製品	礎石	—	口径	器高	底径	砂岩。	E-6 SK50 3層	



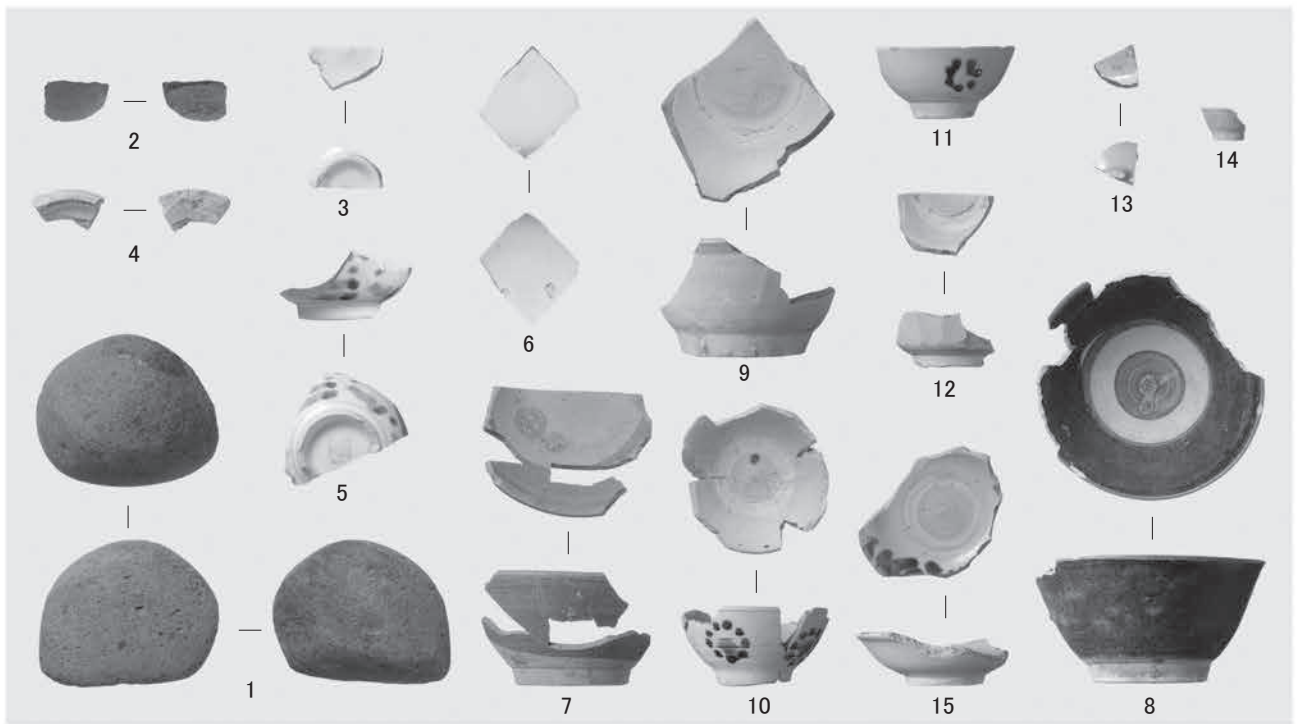
第 58 图 区画1 出土遺物1(I 地区)



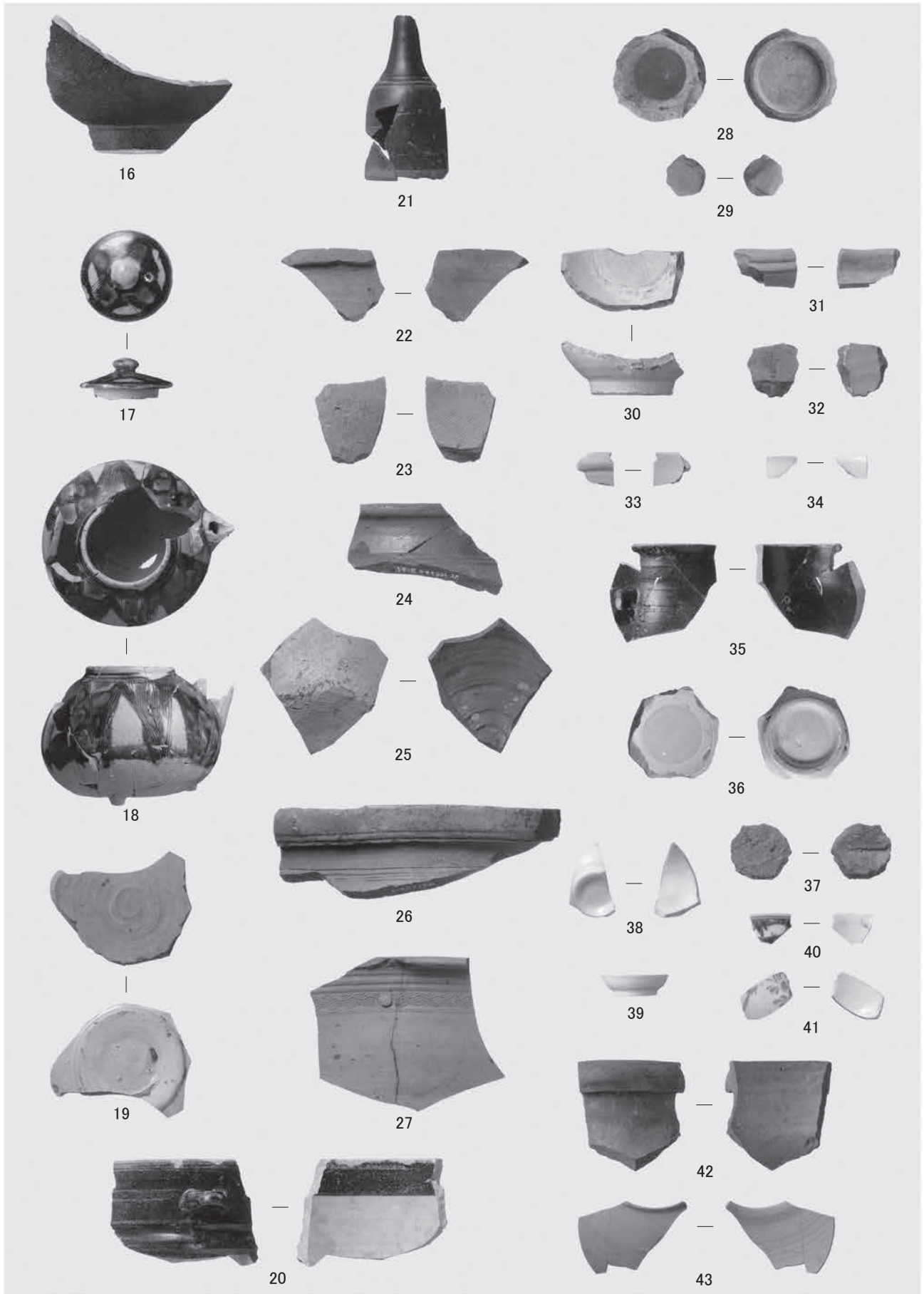
第 59 图 区画 1 出土遺物 2 (I 地区)



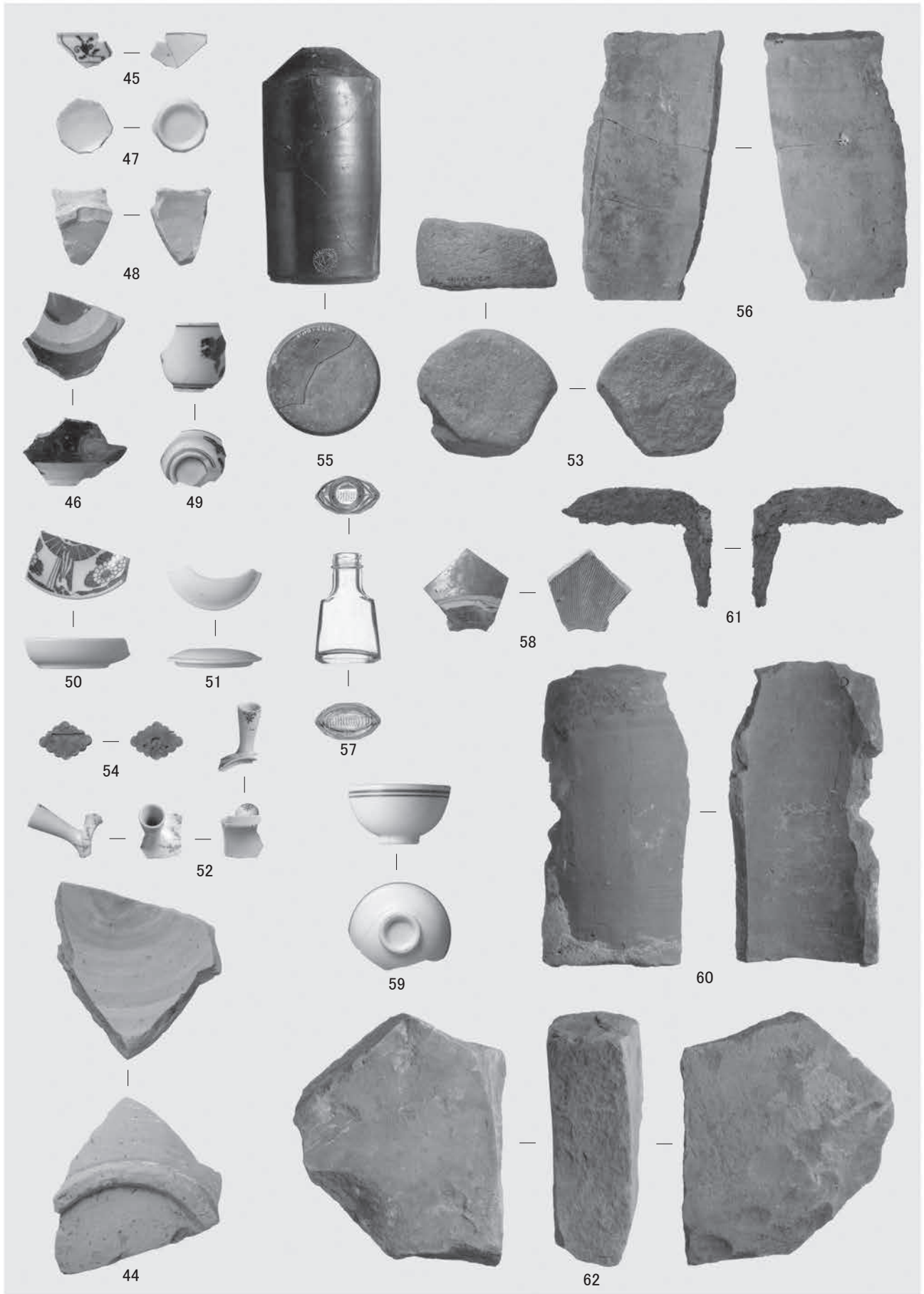
第 60 图 区画 1 出土遺物 3 (I 地区)



图版 17 区画 1 出土遺物 1 (I 地区)



图版 18 区画1 出土遺物2 (I地区)



图版 19 区画1 出土遺物 3 (I 地区)

区画 2

瓦、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器を主とし、青磁、白磁、染付、瑠璃釉、褐釉陶器、本土産陶磁器、陶質土器、カムイヤキ、石製品、キセル、金属製品等、合計2726点が出土した。第8表に特徴的な遺物の観察事項、第50表に遺物毎の出土状況を示す。

第8表 区画2出土遺物観察一覧(I地区)a

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第61図 図版20	1	カムイヤキ	壺	胴部	口径 —	器高 —	底径 —	内面は当て具痕、外面には叩き目痕がみられ、内外面ともに回転擦痕とナデ調整が施される。胎土にはぶい赤褐色を呈する。	E-8 SD14 2層
	2	本土産磁器	染付 小碗	口～底部	口径 8.6	器高 5.0	底径 3.6	畳付は露胎。素地は白色で緻密。圏線で囲われた枠内に雲文、丸文。高台に2条の圏線。薩摩。	E-8 SD14 2層
	3	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底部	口径 5.8	器高 4.7	底径 3.8	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。畳付にアルミナを塗布。素地は淡黄色。外面に呉須で竹葉文。	E-8 SD14 1層
	4	沖縄産 施釉陶器	蓋	—	口径 12.4	器高 3.7	底径 8.0	外面に褐釉を施釉した後、蛇の目状に釉剥ぎ。内底は露胎。素地は淡黄色。	E-8 SD14 2層
	5	沖縄産 施釉陶器	鍋	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	内外面に褐釉を施釉。口唇部は釉剥ぎ。素地にはぶい橙色。	E-8 SD14 2層
	6	円盤状製品	—	—	長径 6.6	厚さ 1.2	最大幅 6.6	沖縄産施釉陶器を素材としている。重量88.6g。	F-8 SD14 2層
	7	石器	敲石	—	口径 —	器高 —	底径 —	表面に磨面。表面中央部に敲打による凹み。側面に敲打痕。側面の一部に凹みがあり、その凹み部分も研磨されている。緑色岩。	D-7 SD15 1層
	8	白磁	皿	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	型成形。口唇部を釉剥ぎ。素地は白色で緻密。徳化窯産。	F-8 SD15 1層
	9	本土産 近現代磁器	染付 小碗	口縁部	口径 7.8	器高 —	底径 —	素地は白色で緻密。胴部に雲文、丸文を施す。薩摩。	E-8 SD15 1層
	10	沖縄産 無釉陶器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	素地は赤褐色。内外面は轆轤痕が明瞭。	E-8 SD15 1層
	11	沖縄産 無釉陶器	播鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	素地は明赤褐色。口縁外側に広げ口唇部を平坦にする。口唇部に1条の沈線。内外面は轆轤痕が明瞭。内面に櫛目を施す。	D-7 SD15 1層
	12	沖縄産 無釉陶器	壺	口縁部	口径 16.0	器高 —	底径 —	素地は暗赤褐色。内外面は轆轤痕が明瞭。	D-7 SD15 1層
	13	円盤状製品	—	—	長径 4.3	厚さ 1.1	最大幅 3.8	沖縄産無釉陶器を素材としている。	D-7 SD15 1層
	14	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 14.0	器高 6.7	底径 6.1	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり。素地は淡黄色。外面に呉須と褐釉で花文。	F-9 SD17 1層
	15	青磁	碗	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	外反口縁。オリーブ黄色の釉を内外面に施釉。素地は灰白色で緻密。	D-8 SD35 2層
	16	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.5	器高 6.7	底径 6.0	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は灰白色。外面に呉須と褐釉で花文3つ。	D-8 SD35 2層
	17	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 14.2	器高 6.6	底径 6.2	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は淡黄色。外面に呉須と褐釉で花文3つ。	D-7 SD35 1層
	18	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底部	口径 8.8	器高 4.5	底径 3.8	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地はにぶい黄褐色。内面に呉須による文様。	D-7 SD35 1層
	19	沖縄産 施釉陶器	小碗	底部	口径 —	器高 —	底径 4.0	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は淡黄色。外面に呉須による文様。	D-8 SD35 2層
第62図 図版20	20	沖縄産 施釉陶器	急須	口～底部	口径 8.4	器高 12.5	底径 10.4	内外面施釉。外面胴部下半から外底及び口唇部から内面口縁部下まで釉剥ぎ。外底にアルミナ付着。内底に目跡あり。素地は明黄褐色。外面に呉須と褐釉による文様。	D-7 SD35 2層
	21	沖縄産 施釉陶器	急須	口～底部	口径 5.3	器高 9.1	底径 7.0	白化粧を施した後、外面は呉須、内面は透明釉を施釉。外面胴部下半から外底及び口唇部から内面口縁部下まで釉剥ぎ。外底にアルミナ付着。素地は淡黄色。	D-7 SD35 1層
	22	沖縄産 施釉陶器	壺	口～底部	口径 11.9	器高 17.5	底径 10.8	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。口唇部及び胴部下半から畳付にかけて釉剥ぎ。内底も釉剥ぎ。	D-7 SD35 1層+2層
	23	沖縄産 無釉陶器	壺	底部	口径 —	器高 —	底径 15.3	素地は暗赤褐色。外面胴上部に2条の沈線。表面はアバタ状を呈する。	D-7 SD35 1層
	24	沖縄産 無釉陶器	壺	口縁部	口径 13.0	器高 —	底径 —	素地は明赤褐色。外面頸部及び胴上部に沈線。頸部に漆喰が付着する。	D-7 SD35 1層

第8表 区画2出土遺物観察一覧(I地区)b

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第62図 図版20	25	沖縄産 無釉陶器	瓶	底部	口径 —	器高 —	底径 12.1	素地はにぶい赤褐色。外面頸部及び胴上部に沈線。垂直方向に並行する2本の線刻あり。	D-7 SD35 1層
	26	本土産 近現代磁器	染付 小碗	口～底部	口径 9.1	器高 4.9	底径 3.8	墨付は露胎。素地は白色で緻密。圏線で囲われた枠内に雲文、丸文。高台に2条の圏線。薩摩。	D-8 SD36畦 2層
	27	沖縄産 施釉陶器	鉢	口縁部	口径 27.5	器高 —	底径 —	内面に白化粧+透明釉、外面に褐釉を掛け分け。口唇部を釉剥ぎ。素地は浅黄色。	D-8 SD36畦 2層
	28	沖縄産 無釉陶器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	素地は褐色。	E-7 SD40 1層
	29	沖縄産 無釉陶器	壺	口縁部	口径 18.2	器高 —	底径 —	口縁部は粘土紐を巻き込んだ玉縁状。素地は褐色。	E-8 SD41 1層
	30	本土産陶器	皿	底部	口径 —	器高 —	底径 4.6	外面に灰釉、内面に銅緑釉を掛け分け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。墨付から外底にかけて露胎。高台脇に砂粒が付着。素地は灰白色。肥前・内野山産。	D-7 SD48 1層
第62図 図版21	31	沖縄産 施釉陶器	碗	底部	口径 —	器高 —	底径 6.5	内外面の上半部に灰釉を単掛け。フィガキー手法。内底に目跡あり(アルミナ付着)。高台内側に砂粒が付着。素地は灰黄色。	D-6 SD48 1層
	32	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.0	器高 6.4	底径 6.1	内外面上半部まで黒釉を単掛け。外面下半部から外底まで露胎。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。墨付にアルミナを塗布。素地は浅黄褐色。	D-6 SD48 1層
	33	沖縄産 無釉陶器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	素地は褐色。外面口縁部に沈線による波状文。	D-6 SD48 1層
	34	陶質土器	火炉	口縁部	口径 15.0	器高 —	底径 —	素地は褐色。口縁内側に突起を貼り付ける。突起及び口唇部に煤が付着。内外面クロコナデ。	D-7 SD48 1層
第63図 図版21	35	円盤状製品	—	—	長径 5.7	厚さ 2.5	最大幅 5.3	沖縄産無釉陶器を素材としている。重量80.2g。	D-6 SD48 1層
	36	白磁	小碗	底部	口径 —	器高 —	底径 3.6	型成形。墨付を釉剥ぎ。墨付に砂粒が付着。素地は白色で緻密。徳化窯産。	D-6 SD49 2層
	37	染付	碗	底部	口径 —	器高 —	底径 5.7	内外面に灰白色の釉を施釉。墨付は露胎。素地は灰白色で緻密。外面に文様あり。	D-6 SD49 1層
	38	沖縄産 施釉陶器	碗	底部	口径 —	器高 —	底径 6.2	内外面上半部まで黒釉を単掛け。外面下半部から外底まで露胎。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。墨付にアルミナを塗布。素地は浅黄褐色。	D-6 SD49 2層
	39	沖縄産 施釉陶器	小碗	口縁部	口径 9.6	器高 —	底径 —	内外面に灰釉を単掛け。素地は淡黄色。	D-6 SD49 2層
	40	沖縄産 施釉陶器	小碗	底部	口径 —	器高 —	底径 4.0	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。墨付にアルミナを塗布。素地は灰白色。	D-6 SD49畦 1層
	41	沖縄産 施釉陶器	大皿	口縁部	口径 20.0	器高 —	底径 —	内面に白化粧+透明釉、口唇部から外面にかけて餡釉を掛け分け。素地は黄褐色。	D-6 SD49 2層
	42	陶質土器	鉢	口縁部	口径 17.4	器高 —	底径 —	素地は褐色。外面口縁部に沈線による波状文。内外面クロコナデ。	D-7 SD49 2層
	43	沖縄産 無釉陶器	壺	口縁部	口径 14.6	器高 —	底径 —	素地は赤褐色。	D-6 SD49 2層
	44	沖縄産 無釉陶器	火炉	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	素地は暗赤褐色。外面口縁部下はナデによる凹みがみられる。	D-7 SD49 2層
	45	陶質土器	火炉	底部	口径 —	器高 —	底径 9.2	素地は褐色。	D-6 SD49 2層
	46	円盤状製品	—	—	長径 5.3	厚さ 0.8	最大幅 5.6	沖縄産無釉陶器を素材としている。重量44.5g。	D-6 SD49 2層
	47	沖縄産 無釉陶器	播鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	素地は明赤褐色。口縁外側に広げ口唇部を平坦にし、口縁部下に稜をなす。内外面は轆轤痕が明瞭。内面に櫛目を施す。	D-6 SD50 1層
	48	陶質土器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	素地は明赤褐色。外面口縁部に沈線による波状文。内外面クロコナデ。	D-6 SD50 1層
	49	陶質土器	土瓶	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	素地は褐色。内外面クロコナデ。	D-6 SD50 1層
	50	陶質土器	蓋	—	口径 —	器高 —	底径 —	素地は褐色。	D-6 SD50 1層
	51	沖縄産 無釉陶器	瓶	胴部	口径 —	器高 —	底径 —	素地は褐色。内外面ともに轆轤痕が明瞭。頸部に5条の沈線。	E-7 SD52 2層
	52	沖縄産 施釉陶器	鉢	底部	口径 —	器高 —	底径 8.8	内面に白化粧+透明釉、外面に黒釉を掛け分け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。内底に目跡あり(アルミナ付着)。墨付にアルミナを塗布。素地は灰白色。	D-8 SK20 2層
	53	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.3	器高 6.8	底径 6.1	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。内底に目跡あり(アルミナ付着)。墨付にアルミナを塗布。素地は淡灰色。外面に呉須と褐釉で花文3つ。	D-7 SK35 1層
	54	石製品	硯	—	口径 —	器高 —	底径 —	表面には長軸方向への線状痕が残る。側面にも線状痕。また背面には「三男信敏」、「ノブトシ」、側面に「百信」とみられる刻字あり。頁岩か。重量398.6g。	D-7 SK35 1層
55	白磁	小杯	口～底部	口径 3.6	器高 1.8	底径 1.8	型成形。素地は白色で緻密。徳化窯産。	D-8 SK37 1層	
56	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底部	口径 8.8	器高 4.5	底径 4.0	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。墨付にアルミナを塗布。素地は灰黄色。	D-8 SK37 1層	

第8表 区画2出土遺物観察一覧(I地区)c

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第63図 図版21	57	沖縄産 無釉陶器	蓋	—	口径	器高	底径	素地は赤褐色。上面はナデが徹底しておらず、器面はやや粗い。	D-8 SK38 1層
					14.5	4.1	—		
第64図 図版22	58	沖縄産 無釉陶器	壺	口～底部	口径	器高	底径	素地はにぶい赤褐色。外面胴上部に沈線。横耳を3つ貼付。「×」の線刻あり。	D-8 SK38 1層
					18.0	45.5	20.9		
	59	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径	器高	底径	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。内底に目跡あり(アルミナ付着)。畳付にアルミナを塗布。素地は明黄褐色。	D-8 SK44内 1層
					6.2	6.6	14.2		
	60	本土産陶器	壺	底部	口径	器高	底径	外面に黒色釉、内面にオリーブ色の釉を施釉。外底は露胎。素地は灰オリーブ色。内底に半円状の目跡が3か所残る。薩摩。	D-8 SK49内 2層
					—	—	18.3		
	61	沖縄産 施釉陶器	壺	口～底部	口径	器高	底径	内外面に黒釉を施釉。口唇部及び胴部下半から畳付にかけて釉剥ぎ。高台や外底に砂粒が多量に付着。素地は淡黄色。	D-8 SK49内 2層
					11.1	21.5	10.6		
	62	沖縄産 無釉陶器	鉢	口～底部	口径	器高	底径	素地は赤褐色。外面口縁部下に稜をもち、その下に沈線による波状文。内外面は轆轤痕が明瞭。	D-8 SK49内 2層
					32.4	15.2	14.0		
	63	沖縄産 無釉陶器	壺	口～底部	口径	器高	底径	素地はにぶい赤褐色。外面頭部及び胴上部に沈線。左上から右下方向への斜めの2本の線刻あり。	D-8 SK49内 2層
					12.6	39.2	17.0		
64	本土産陶器	壺	口縁部	口径	器高	底径	内外面にオリーブ黒色釉を施釉。口唇部は釉剥ぎ。素地は灰色。口唇部に胎土目が2か所確認される。薩摩。	D-8 SK51内 1層	
				10.4	—	—			
65	沖縄産 施釉陶器	壺	口～底部	口径	器高	底径	内外面に黒釉を施釉。口唇部及び胴部下半から畳付にかけて釉剥ぎ。内底も釉剥ぎする。外底に砂粒が付着。素地は淡黄色。	D-8 SK51内 1層	
				10.4	21.4	11.6			
66	沖縄産 施釉陶器	香炉	口～底部	口径	器高	底径	内外面に化粧土を施した後、内面口縁部下部から外面にかけて銅緑釉を施釉。外底にアルミナ付着。素地は淡黄色。	D-8 SK51内 1層	
				18.2	—	8.8			
67	沖縄産 無釉陶器	壺	口縁部	口径	器高	底径	素地はにぶい赤褐色。内面口縁部下に稜をもち、内外面は轆轤痕が明瞭。	D-8 SK51内 1層	
				16.5	—	—			
68	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径	器高	底径	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。内底に目跡あり(アルミナ付着)。畳付にアルミナを塗布。素地は灰白色。外面に呉須と褐釉で花文。	D-8 SK55内 2層	
				13.8	6.4	6.7			
69	沖縄産 施釉陶器	鉢	口～底部	口径	器高	底径	内面に白化粧+透明釉、外面に褐釉を掛け分け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。内底に目跡あり(アルミナ付着)。畳付は幅が広く、アルミナを塗布。素地は灰オリーブ色。	D-8 SK55内 2層	
				25.0	11.8	9.6			
第65図 図版22	70	染付	皿	口～底部	口径	器高	底径	素地は灰白色で緻密。内面に花文、内底に草花文。外面にも文様あり。徳化窯産。	D-8 SK56 1層
					15.6	2.9	7.8		
	71	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径	器高	底径	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。内底に目跡あり(アルミナ付着)。畳付にアルミナを塗布。素地は浅黄色。外面に呉須と褐釉で花文3つ。	D-8 SK56 1層
					14.4	7.0	6.2		
72	沖縄産 施釉陶器	蓋	—	口径	器高	底径	外面に褐釉を施釉した後、蛇の目状に釉剥ぎ。内底は露胎。素地は浅黄色。	D-8 SK56 1層	
				12.1	3.8	6.2			
73	沖縄産 無釉陶器	壺	口～底部	口径	器高	底径	素地は明赤褐色。外面頭部及び胴上部に沈線。	D-8 SK56 1層	
				13.7	47.1	19.3			
第65図 図版23	74	石器	石斧	—	口径	器高	底径	緑色千枚岩。	E-8 SD58 1層
					—	—	—		
	75	沖縄産 施釉陶器	壺	口～底部	口径	器高	底径	内外面に黒釉を施釉。口唇部及び畳付を釉剥ぎ。素地は灰白色。	D-7 SK101 1層
					10.0	17.2	9.8		
	76	沖縄産 施釉陶器	壺	口縁部	口径	器高	底径	内外面に褐釉を施釉。口唇部にアルミナを塗布。素地は暗赤褐色。	D-7 SK101 1層
12.9					—	—			
77	沖縄産 施釉陶器	壺	底部	口径	器高	底径	内外面に褐釉を施釉。畳付を釉剥ぎ。高台や外底に砂粒が多量に付着。素地は暗赤褐色。	D-8 SK101 1層	
				—	—	12.1			
78	瑠璃釉	小杯	口縁部	口径	器高	底径	外面に瑠璃釉、内面に透明釉を掛け分け。素地は白色で緻密。	E-8 SP460 1層	
				—	—	—			
図版23	79	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径	器高	底径	素地は白色で緻密。畳付に砂粒が付着。外面に梅文。	E-8 SD14 1層
					—	5.3	3.5		
	80	本土産 近現代磁器	小碗	底部	口径	器高	底径	素地は白色で緻密。型紙絵付け。	E-8 SD14 2層
					—	—	2.8		
	81	ガラス製品	瓶	口～底部	口径	器高	底径	色調は茶色。	D-7 SD15 1層
					1.1	2.9	1.3		
	82	瓦	明朝系 平瓦	広端～ 狭端部	口径	器高	底径	凸面の両端側には横方向のナデによる凹線が明瞭。また、縦方向のナデもみられる。凹面の広端部に桶板綴り紐圧痕あり。色調は赤色。	D-8 SD35 1層
					—	—	—		
	83	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に松竹梅文。型紙絵付け。	D-8 SD35 1層
					7.4	4.5	3.1		
	84	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に花文。銅版転写。	D-7 SD35 1層
7.8					4.8	3.8			
85	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に花文。銅版転写。	D-7 SD35 2層	
				8.3	4.1	3.9			
86	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面口縁部に緑色の2条の圈線。銅版転写。	D-7 SD35 2層	
				7.9	4.6	3.2			
87	本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径	器高	底径	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に日章旗が描かれている。軍杯。外底に「◎」の銘あり。	D-8 SD35 2層	
				7.0	2.8	2.6			
88	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径	器高	底径	畳付は露胎。外底に「岐038」という銘あり。	D-7 SD35 1層	
				18.9	6.1	9.2			
89	本土産 近現代磁器	蓋	—	口径	器高	底径	外面に植物の文様。吹き絵。	D-7 SD35 2層	
				8.3	2.7	6.4			

第8表 区画2出土遺物観察一覧(I地区)d

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
図版23	90	本土産 近現代磁器	蓋	—	口径 8.0	器高 2.2	底径 6.3	外面に文様がみられるが不明瞭。	D-7 SD35 2層
	91	本土産 近現代磁器	急須	口～底部	口径 7.5	器高 9.5	底径 7.5	外面に雷文。	D-7 SD35 1層+2層
	92	鉄製品	へら	—	長さa 20.7	長さb 3.3	—	重量215.7g。	D-7 SD35 2層
	93	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 2.0	器高 6.8	底径 5.0	頸部に「サハラ香油」、瓶底に「2」というエンボス。色調は透明。	D-7 SD35 2層
	94	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 3.0	器高 6.5	底径 5.0	頸部に「WATERMAN'S INK」、瓶底に「THIS CONTAINER MADE IN USA 17」というエンボス。色調は透明。	D-8 SD35 2層
	95	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 2.5	器高 7.0	底径 5.9	頸部に「白樺」、胴部に「小倉油」、瓶底に白樺の葉のエンボス。色調は透明。	D-7 SD35 1層
	96	本土産 近現代磁器	小碗	底部	口径 —	器高 —	底径 —	畳付は露胎。外底に「大日本北山製」という銘あり。	E-7 SD40 1層
	97	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 8.6	器高 3.8	底径 3.1	畳付は露胎。素地は白色で緻密。クロム青磁。	E-8 SD41 3層
	98	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 8.1	器高 4.8	底径 3.6	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に植物や鳥の文様。銅版転写。	E-7 SD41 1層
	99	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径 13.8	器高 2.4	底径 7.6	畳付は露胎で砂粒が付着する。素地は白色で緻密。内面に文様。銅版転写。	E-7 SD41 1層
	100	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 1.7	器高 9.0	底径 a-4.4 b-3.3	胴部に目盛がついている。色調は透明。	E-7 SD41 1層
101	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 1.5	器高 1.9	底径 4.5	瓶底に星印の中に「H」というエンボス。色調は透明。	E-7 SD41 1層	
図版24	102	鉄製品	カマ	—	長さa 1.3	長さb 3.8	—	刃こぼれがみられる。重量40.7g。	E-7 SD41 1層
	103	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径 13.8	器高 6.4	底径 5.1	畳付は露胎。素地は白色で細かい。内底に5つの胎土目。型紙絵付け。	D-7 SD49 2層
	104	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径 13.4	器高 6.1	底径 4.7	畳付は露胎。素地は白色で細かい。型紙絵付け。	D-7 SD49 2層
	105	本土産 近現代磁器	小碗	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	素地は白色で細かい。外面に花文、格子文。型紙絵付け。	F-7 SD4 1層
	106	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径 12.8	器高 2.6	底径 7.4	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に文様。銅版転写。	D-7 SD49 2層
	107	本土産 近現代磁器	蓋	—	口径 8.2	器高 2.5	底径 —	外面に文様。	D-7 SD49 2層
	108	本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径 5.7	器高 2.9	底径 2.5	畳付は露胎。素地は白色で緻密。高台形状が桜の花びらを呈する。	D-8 SK20 1層
	109	プラスチック 製品	歯ブラシ	—	長さ 13.4	幅 1.1	—	植毛孔3列31孔。	D-8 SK20 2層
	110	鉄製品	クワ	—	長さa 29.6	長さb 13.1	—	重量1740g。	D-8 SK32 1層
	111	瓦	明朝系 平瓦	—	口径 —	器高 —	底径 —	広端部～狭端部。凸面の両端側には横方向のナデによる凹線が明瞭。また、縦方向のナデもみられる。凹面の広端部に桶板綴り紐圧痕あり。色調は赤色。	D-7 SK35 1層
	112	瓦	明朝系 丸瓦	—	口径 —	器高 —	底径 —	筒部凸面の玉縁側に横方向のナデによる凹線、端部に横方向の線状痕がみられる。色調は赤色。	D-7 SK35 1層
	113	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 7.9	器高 4.7	底径 3.5	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に菊花文。銅版転写。	D-7 SK35 1層
	114	本土産 近現代磁器	蓋	—	口径 6.6	器高 —	底径 —	外面に文様。	D-7 SK35 1層
	115	本土産 近現代磁器	急須	口～底部	口径 7.3	器高 9.8	底径 7.8	外面下半部から外底にかけて露胎。素地は白色で緻密。外面に文様。	D-7 SK33 1層
	116	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 2.2	器高 9.6	底径 4.9	色調は透明。	D-7 SK35 1層
	117	ガラス製品	瓶	底部	口径 —	器高 —	底径 —	側面に「レート○」、瓶底に何かのマークのエンボス。色調は透明。	D-7 SK35 1層
	118	瓦	明朝系 平瓦	—	口径 —	器高 —	底径 —	広端部～狭端部。凸面の両端側には横方向のナデによる凹線が明瞭。凹面の広端部に桶板綴り紐圧痕あり。色調は赤色。	D-8 SK44内 2層
	119	瓦	明朝系 丸瓦	—	口径 —	器高 —	底径 —	筒部凸面の玉縁側に横方向のナデによる凹線、端部から側面にかけて漆喰が付着。色調は赤色。	D-8 SK44内 2層
	図版25	120	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径 11.0	器高 6.1	底径 4.1	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に吹き絵による文様あり。
121		本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径 12.5	器高 2.6	底径 6.5	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に小槌、小判、菱形文か。吹き絵。	D-8 SK44内 1層
122		銭貨	一銭	—	外径 2.3	孔径 —	厚さ 0.1	昭和十二年発行の一銭青銅貨。表に桐の文様。重量3.8g。	D-8 SK44内 2層
123		鉄製品	へら	—	長さa 11.9	長さb 5.3	—	重量73.6g。	D-8 SK44 1層
124		鉄製品	皿	口～底部	口径 24.5	器高 2.6	底径 15.8	厚さ約1mm。口縁部は折縁を呈する。	D-8 SK44内 2層

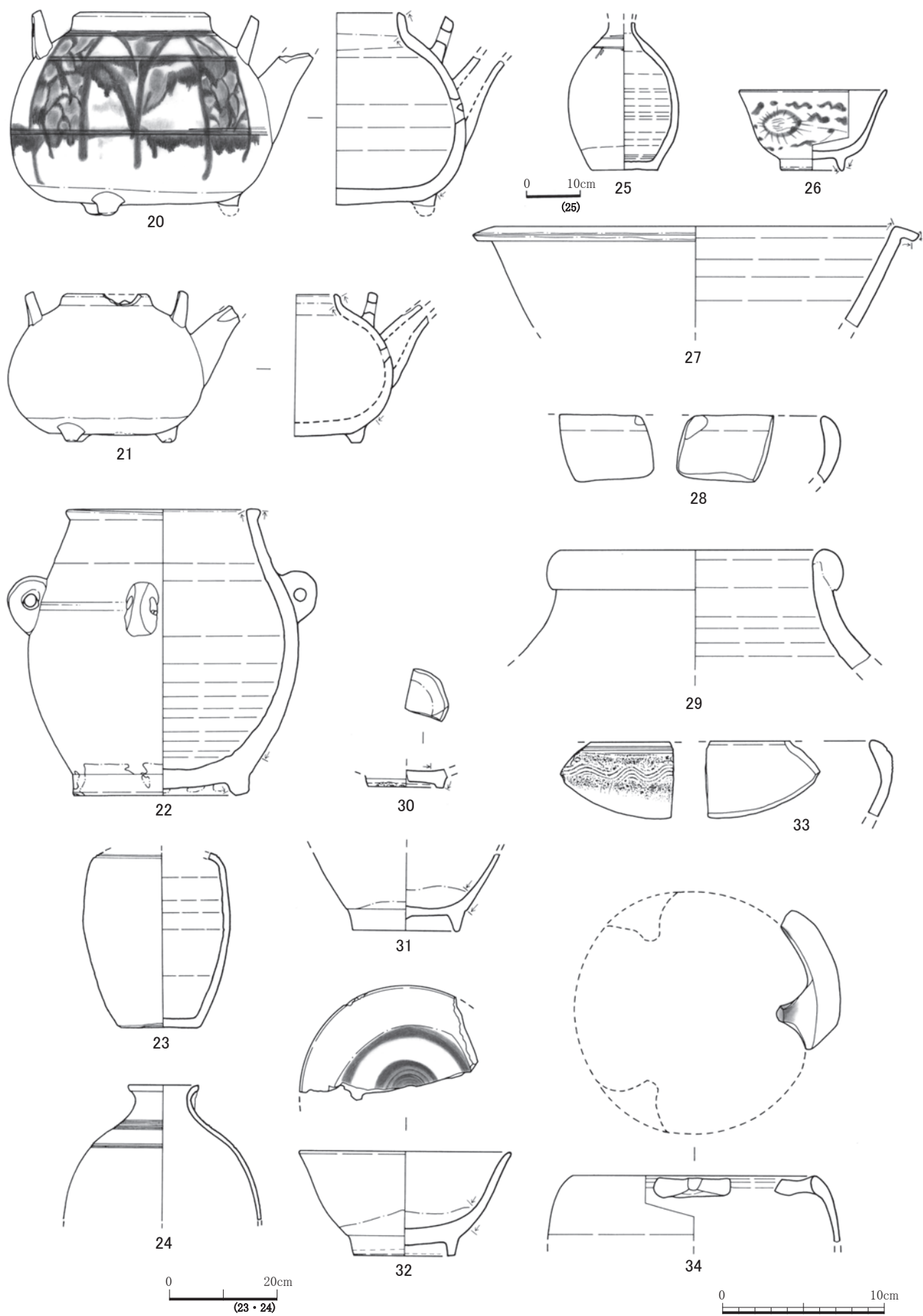
第8表 区画2出土遺物観察一覧(I地区)e

単位:cm

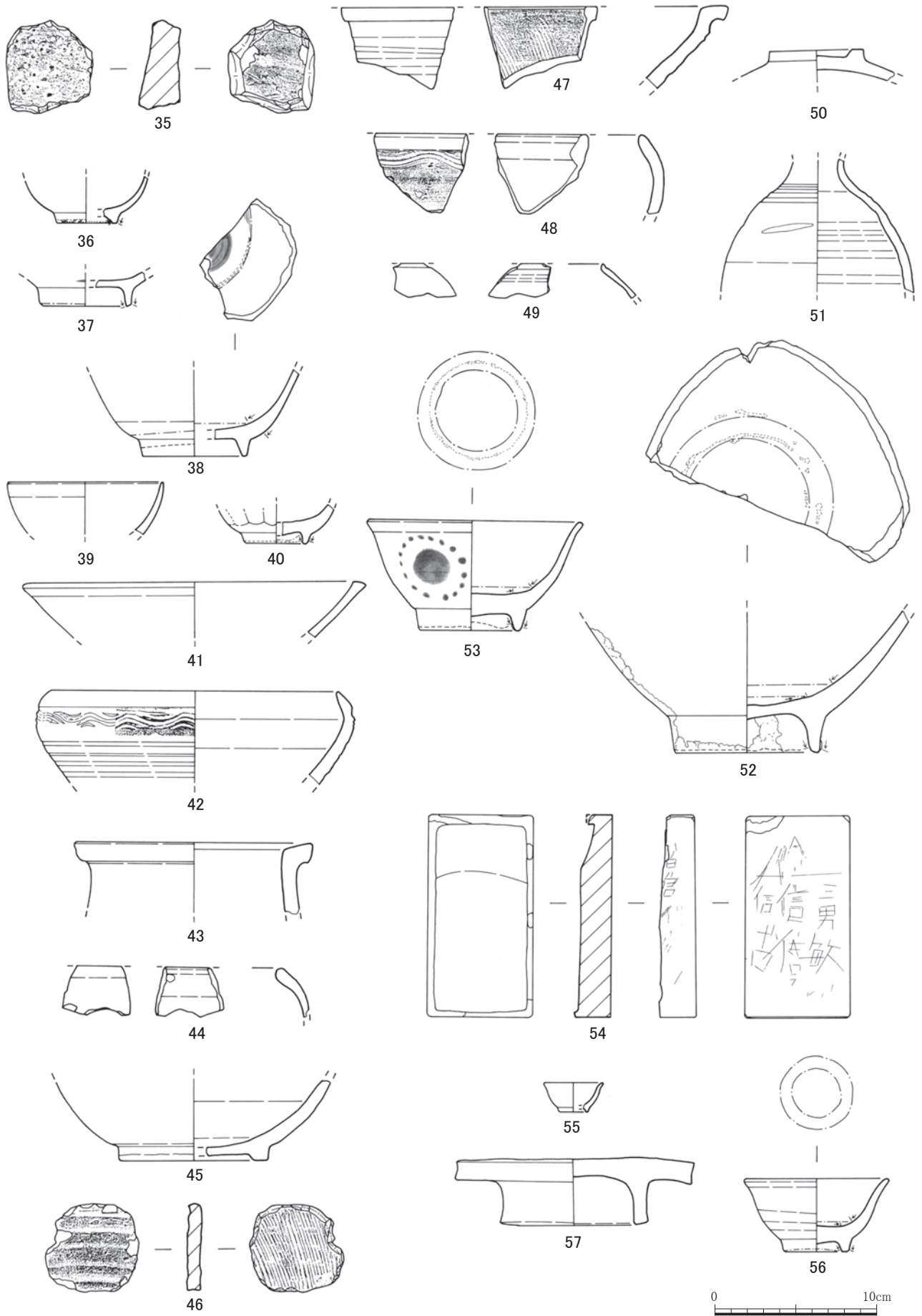
挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
図版25	125	鉄製品	皿	口～底部	口径 22.5	器高 3.3	底径 16.0	厚さ約1mm。口縁部は玉縁状を呈する。	D-8 SK44内 2層
	126	鉄製品	皿	口～底部	口径 33.6	器高 3.3	底径 25.0	厚さ約1mmで非常に薄い。内面に花文。	D-8 SK44内 2層
	127	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径 12.6	器高 6.1	底径 4.9	畳付は露胎。素地は白色で細かい。内底に5つの胎土目。外底に銘が確認されるが不明瞭。型紙絵付け。	D-8 SK49内 2層
	128	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径 12.8	器高 5.6	底径 4.7	畳付は露胎。素地は白色で細かい。型紙絵付け。	D-8 SK49内 2層
	129	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径 11.6	器高 5.0	底径 4.0	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面口縁部に緑色の2条の圏線。外底に「岐1047」という銘あり。統制磁器。銅版転写。	D-8 SK49内 2層
	130	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 7.8	器高 3.0	底径 3.0	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面口縁部に緑色の2条の圏線。銅版転写。	D-8 SK49内 2層
	131	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径 13.0	器高 2.6	底径 7.2	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に文様。銅版転写。	D-8 SK49内 2層
	132	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径 13.0	器高 2.4	底径 7.4	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に文様。銅版転写。	D-8 SK49内 2層
	133	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径 15.9	器高 3.1	底径 8.2	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に梅花文。	D-8 SK49内 2層
図版26	134	本土産 近代陶器	皿	口～底部	口径 21.3	器高 3.4	底径 10.1	素地は白色で緻密。やや軟質。口縁部は折縁を呈する。外底に王冠と2つの剣を交差させたマークが確認される。	D-8 SK49内 2層
	135	本土産 近代陶器	皿	口～底部	口径 17.9	器高 1.8	底径 10.0	素地は白色で緻密。やや軟質。口縁部は折縁を呈する。内面及び外底にマークが確認される。「日本硬質陶器会社」製。	D-8 SK49内 2層
	136	銭貨	十銭	—	外径 2.2	孔径 0.6	厚さ 0.1	昭和九年発行の十銭。表に菊と桐の文様。重量3.0g。	D-8 SK49内 2層
	137	ガラス製品	瓶	底部	口径 —	器高 —	底径 —	厚さは1mmと非常に薄い。色調は透明。	D-8 SK101 1層
	138	鉄製品	蹄鉄	—	長さ 11.1	厚さ 0.5	—	上面接蹄部に留め部。重量145.7g。	D-8 SK49内 2層
	139	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 8.2	器高 4.6	底径 3.0	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に竹文。型紙絵付け。	D-8 SK51内 1層
	140	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径 14.6	器高 3.1	底径 7.9	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に文様。銅版転写。	D-8 SK51内 1層
	141	本土産 近現代磁器	蓋	—	口径 7.9	器高 2.2	底径 6.5	外面に文様。	D-8 SK51内 1層
	142	本土産 近代陶器	小碗	口～底部	口径 8.0	器高 4.6	底径 3.9	内外面に浅黄色釉を施すが、畳付は釉剥ぎ。素地は淡黄色で細かい。	D-8 SK51内 1層
	143	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 1.6	器高 —	底径 —	両口点眼式の目薬。色調は緑色。	D-8 SK51内 1層
	144	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径 6.8	器高 2.4	底径 3.8	畳付に多量の砂粒が付着。素地は白色で緻密。内面に文様。銅版転写。	D-8 SK55内 2層
	145	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径 11.8	器高 5.1	底径 4.2	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に文様。銅版転写。	D-8 SK56 1層
	146	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 8.0	器高 4.7	底径 3.5	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に文様。外底に銘あり。	D-8 SK56 1層
	147	本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径 6.7	器高 2.7	底径 2.6	素地は白色で緻密。内面に吹き絵による桜の文様。	D-8 SK56 1層
	148	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径 13.0	器高 2.3	底径 7.5	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に文様。銅版転写。	D-8 SK56 1層
	149	銭貨	一銭	—	外径 2.3	孔径 —	厚さ 0.1	昭和九年発行の一銭青銅貨。表に桐の文様。重量3.7g。	D-8 SK56 1層
	150	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 3.6	器高 6.4	底径 4.0	瓶底に「平尾」、「パール」のエンボスが交差する。色調は透明。	D-8 SK56 1層
	151	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 1.6	器高 7.7	底径 a-3.8, b-2.7	胴部に「30」の目盛がつく。瓶底に「北」のエンボス。色調は透明。	D-8 SK56 1層
	152	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 1.4	器高 8.2	底径 a-3.4, b-1.2	ガラス自体に多くの気泡がみられる。色調は透明。	D-8 SK56 1層
153	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 8.1	器高 4.6	底径 3.1	畳付は砂粒が付着する。素地は白色で緻密。外面口縁部に緑色の2条の圏線。銅版転写。	D-7 SK101 1層	
154	本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径 5.0	器高 2.8	底径 1.8	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に鶴や「祝」の旧漢字。	D-8 SK101 1層	
155	本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径 5.6	器高 2.7	底径 2.3	畳付から外底にかけて露胎。素地は白色で緻密。高台形状が花びらを呈する。	D-8 SK101 1層	
156	本土産 近代陶器	蓋	—	口径 9.2	器高 3.1	底径 7.4	内外面に灰白色釉を施すが、接地面は釉剥ぎ。素地も灰白色で細かい。外面に梅文。157とセット。	D-7 SK101 1層	
157	本土産 近代陶器	小碗	口～底部	口径 8.4	器高 5.8	底径 4.0	内外面に灰白色釉を施すが、畳付は露胎。素地も灰白色で細かい。外面に梅の木。外底に錨とSTのマーク。156とセット。	D-7 SK101 1層	
158	鉄製品	鉄鍋	口～底部	口径 68.0	器高 20.0	底径 42.0	大型鍋。口縁部若干くの状に屈曲。底部は底が抜ける。錆による剥離顕著。	E-7 SD41畦 1層	



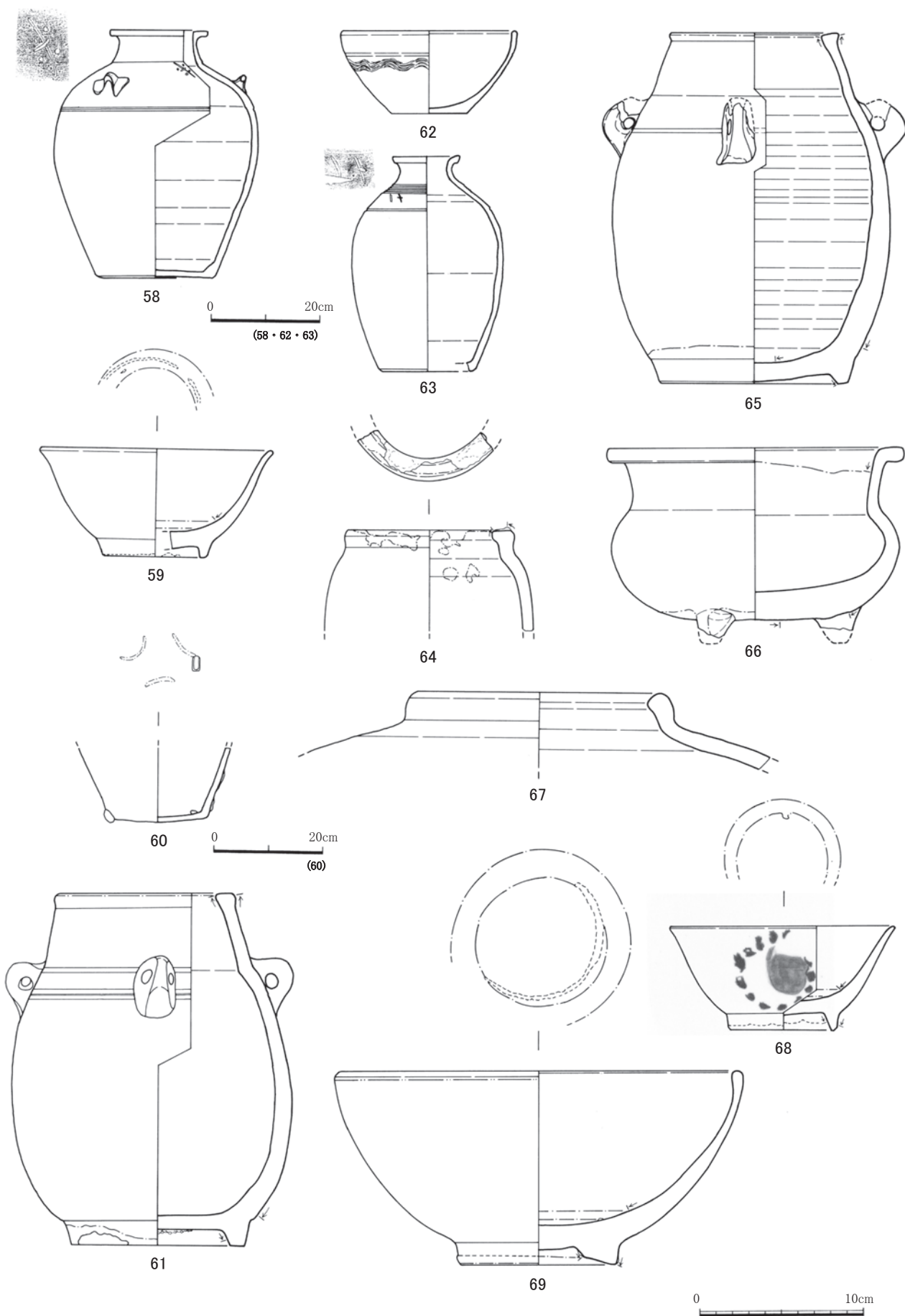
第 61 图 区画2 出土遺物1(I 地区)



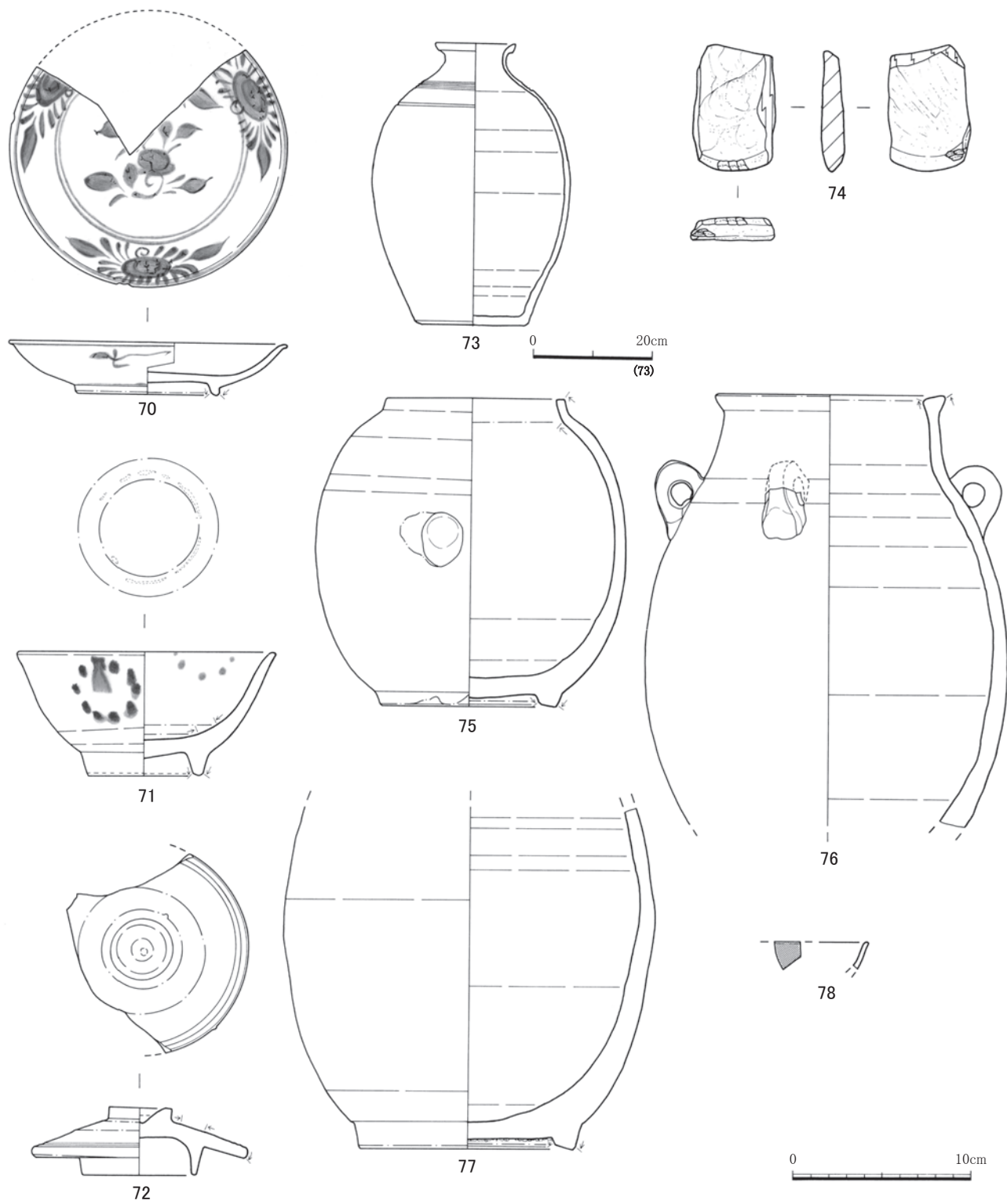
第 62 图 区画 2 出土遗物 2 (I 地区)



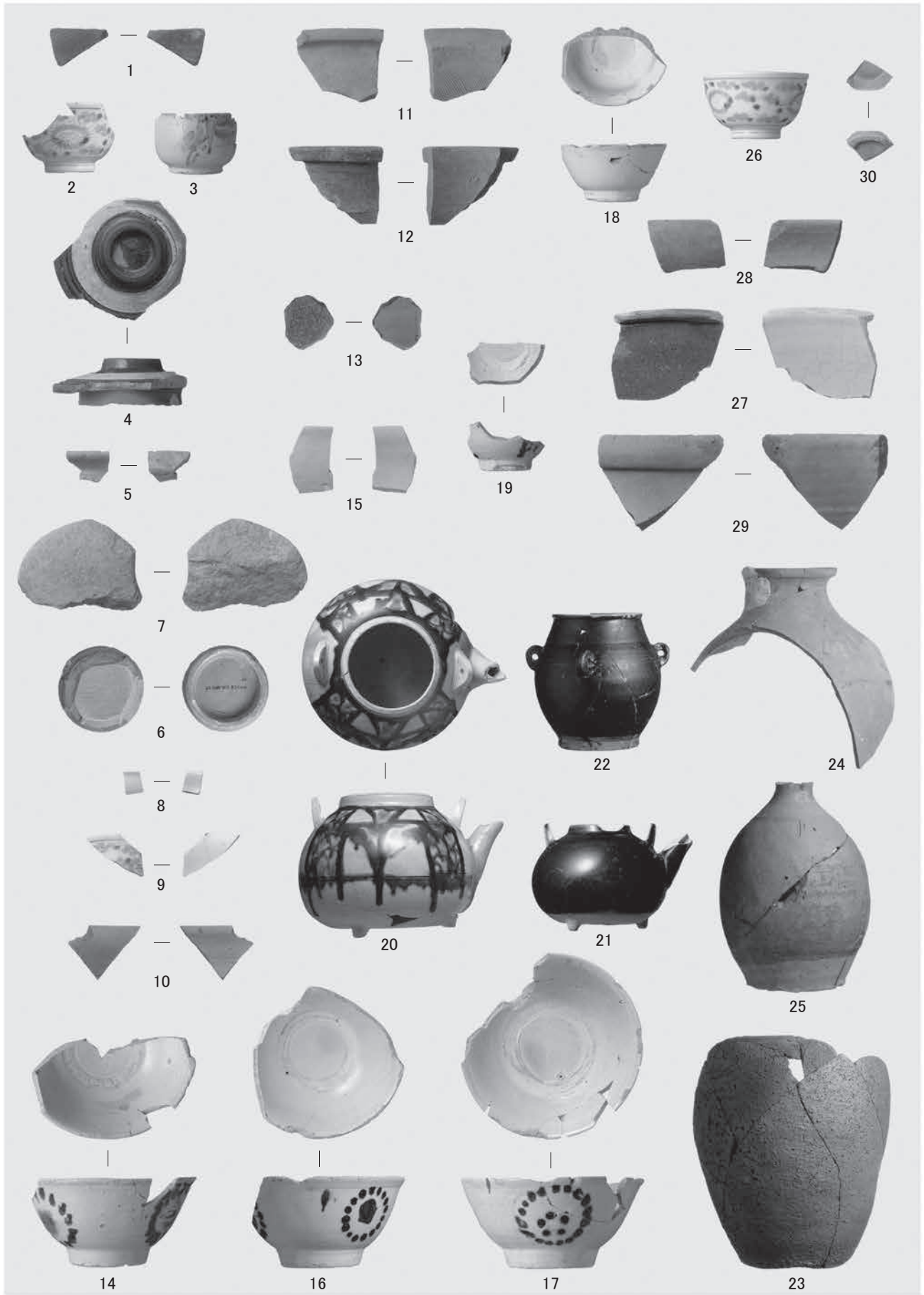
第 63 图 区画2 出土遺物3(I 地区)



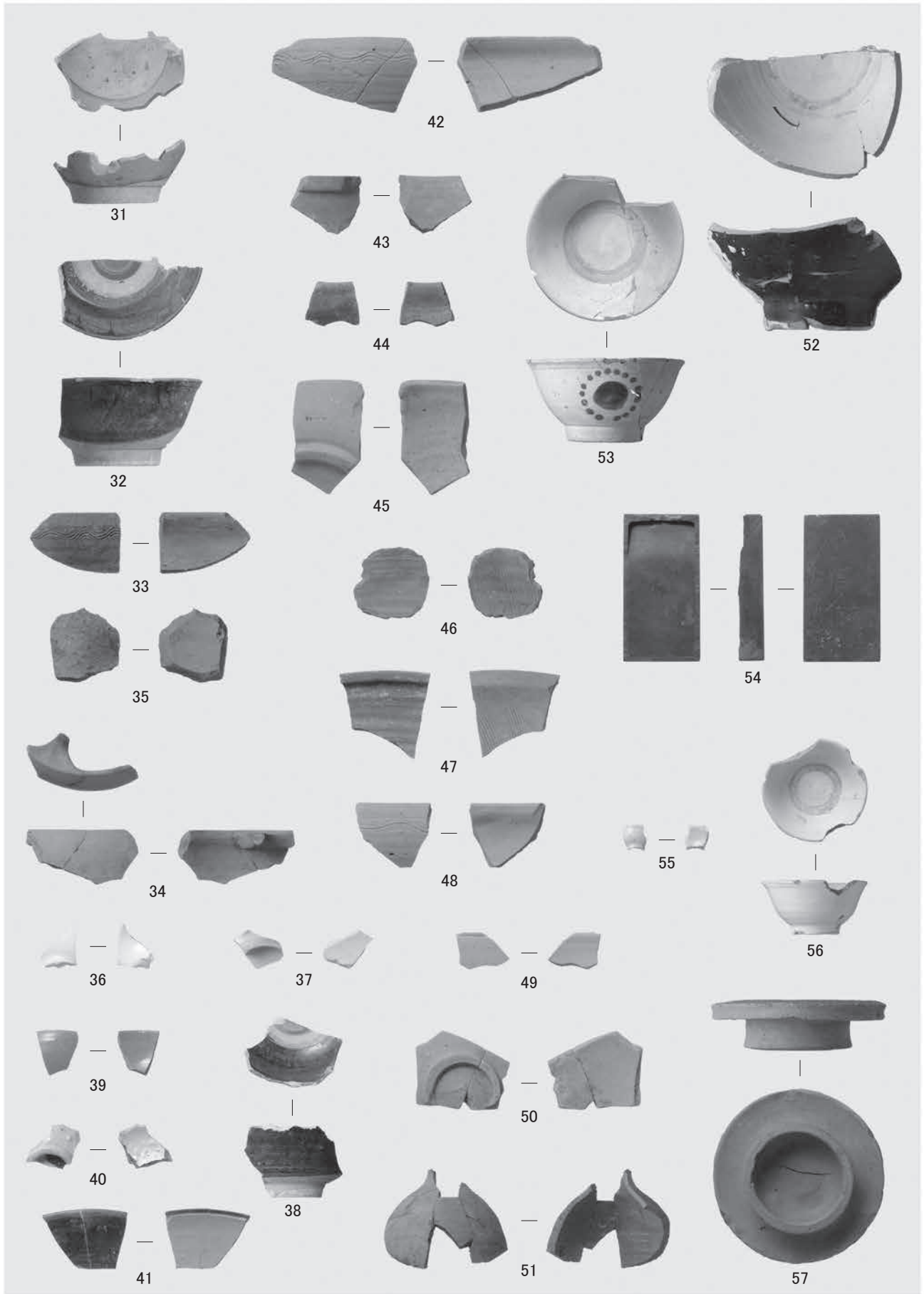
第 64 图 区画2 出土遺物4(I 地区)



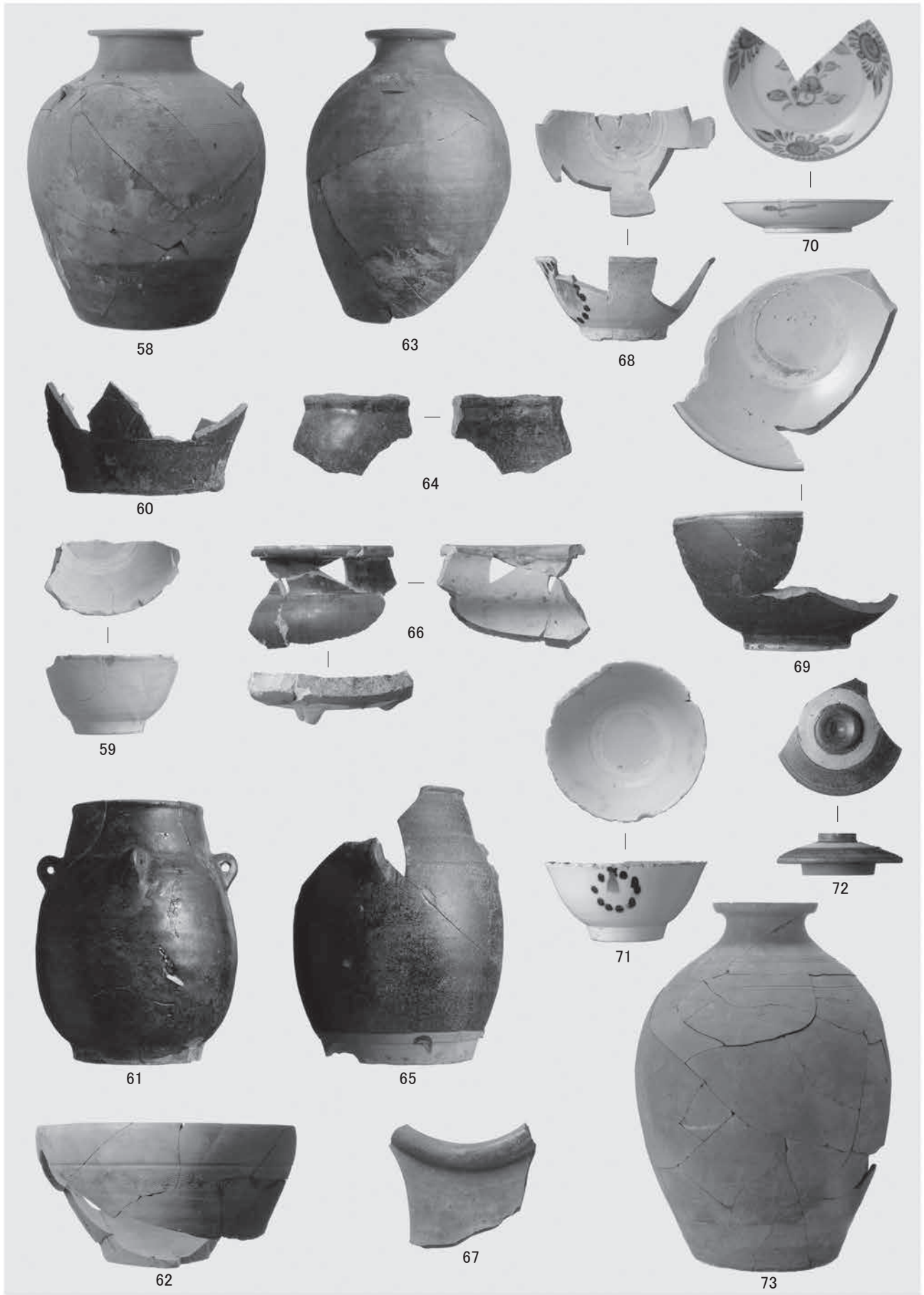
第 65 图 区画2 出土遺物5(I 地区)



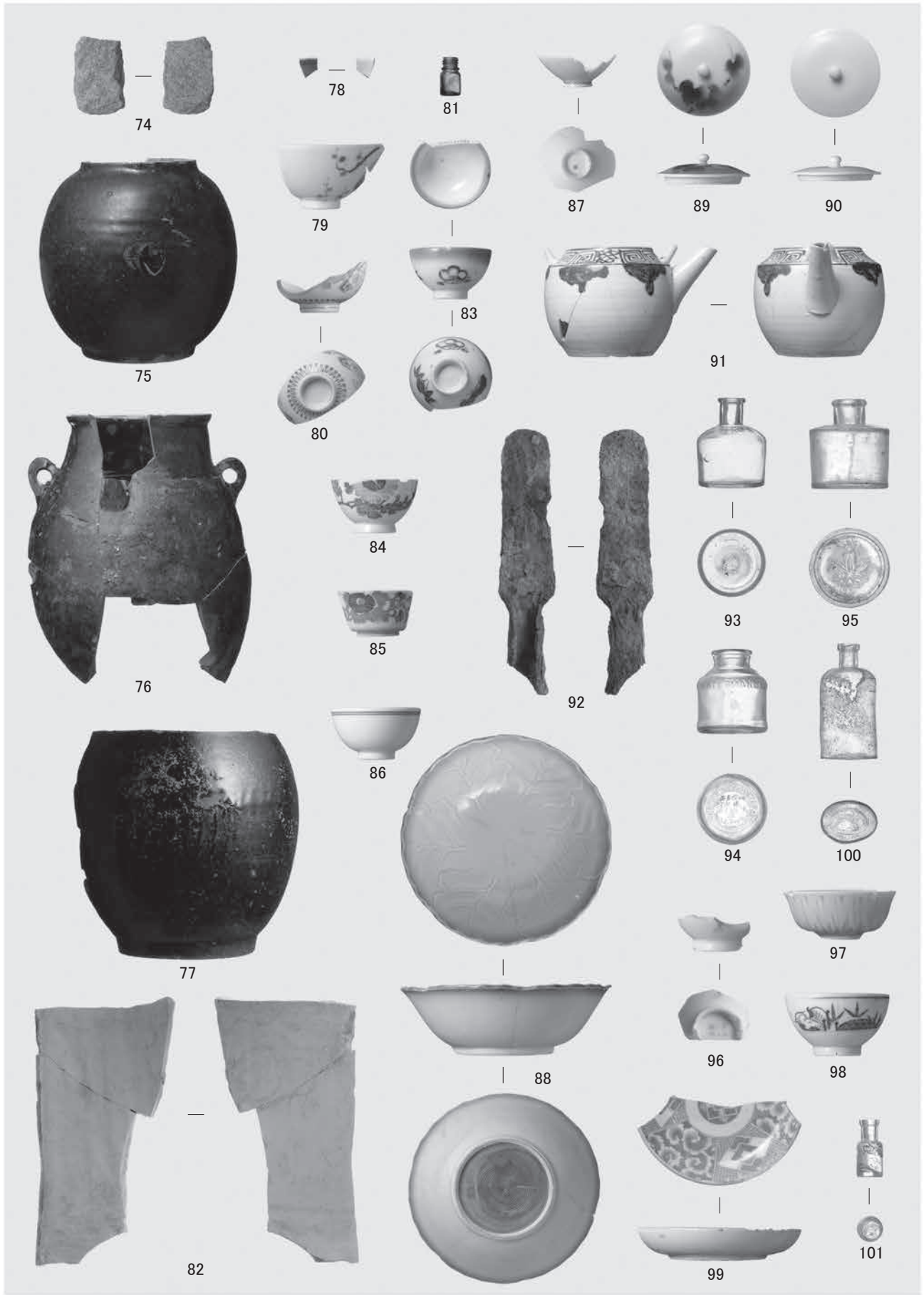
图版 20 区画2 出土遺物1 (I地区)



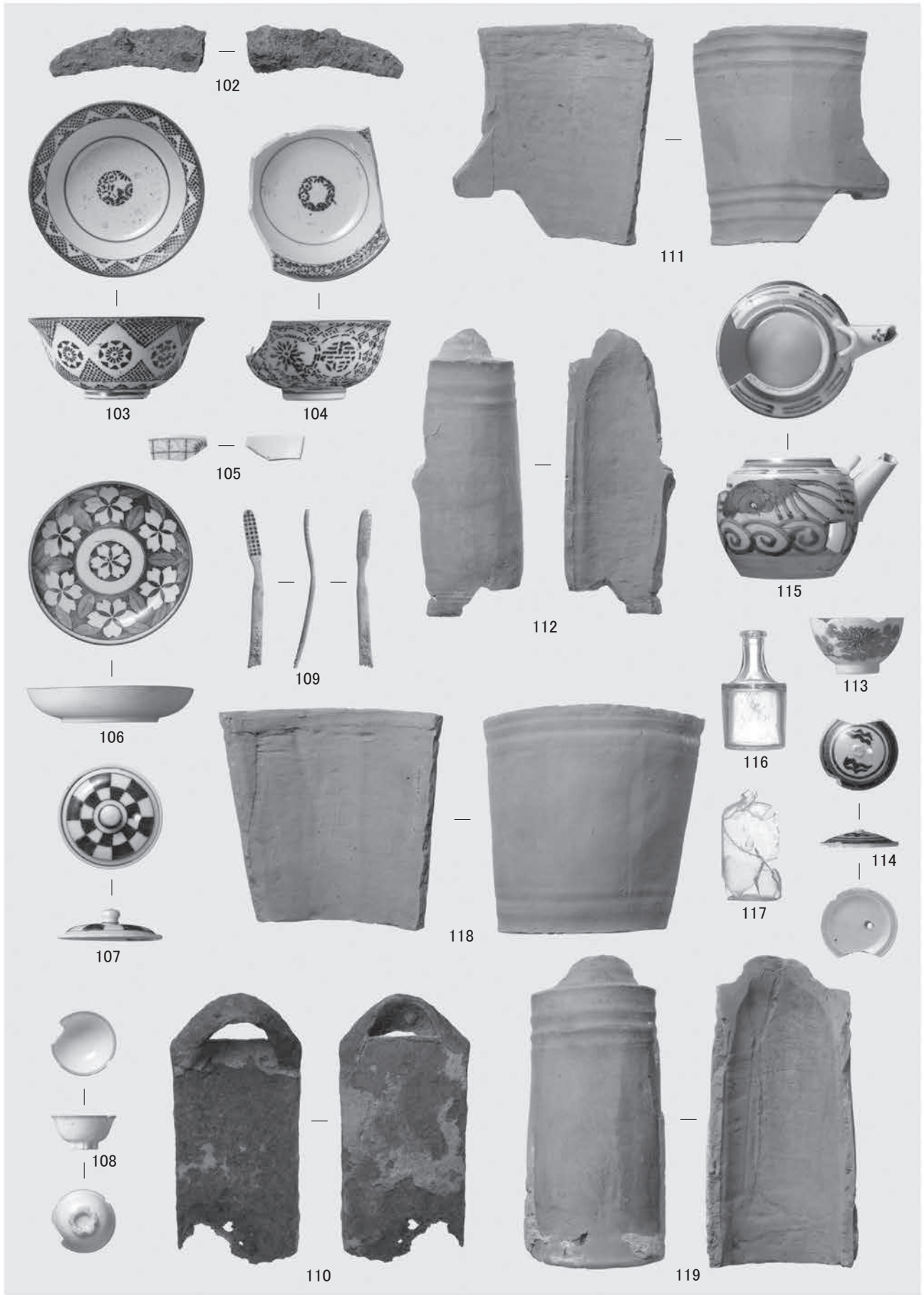
图版 21 区画2 出土遺物2 (I地区)



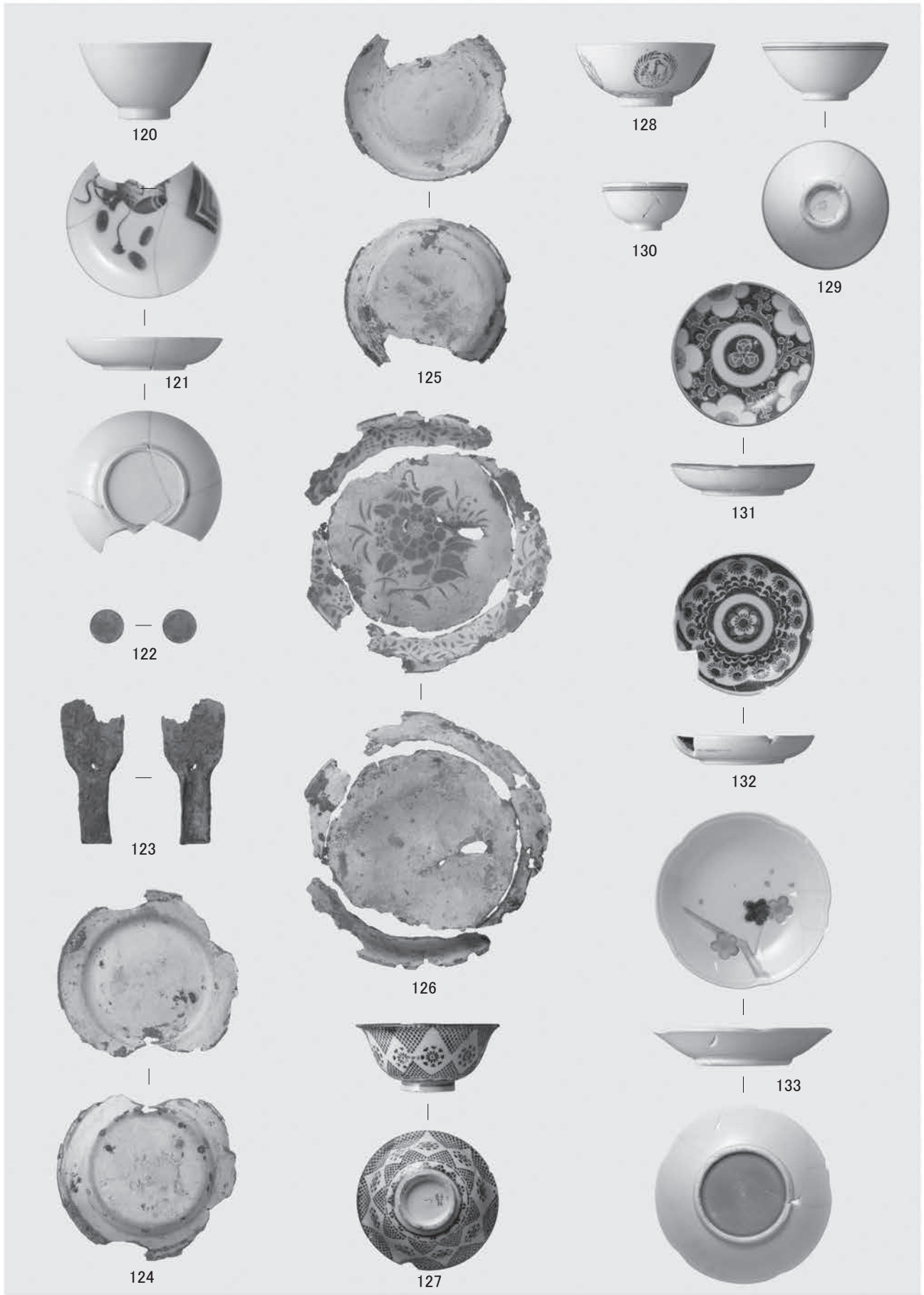
图版 22 区画2 出土遺物3 (I地区)



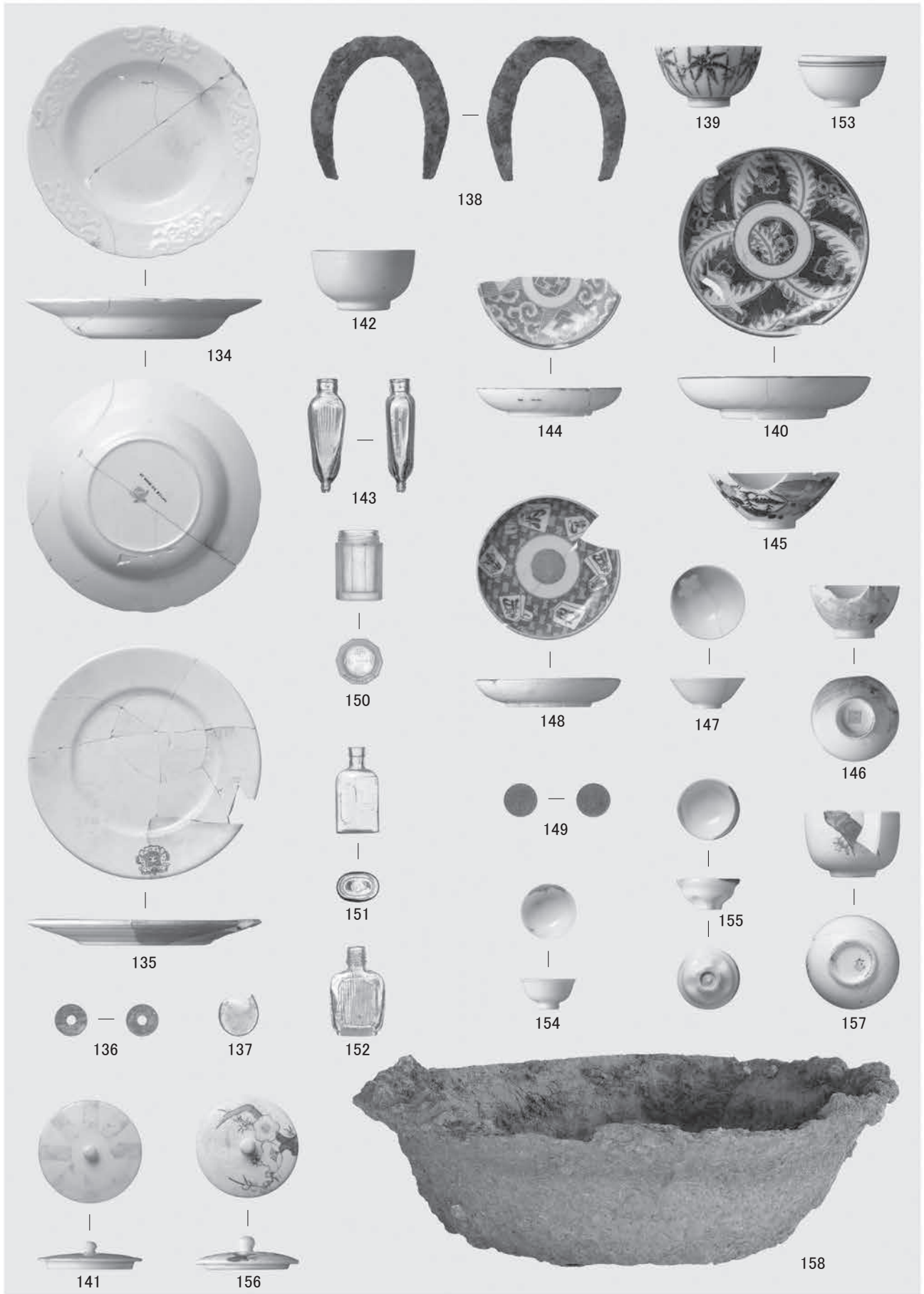
图版 23 区画2 出土遺物4 (I地区)



图版 24 区画2 出土遺物5 (I地区)



图版 25 区画2 出土遺物6 (I地区)



图版 26 区画2 出土遺物7 (I地区)

区画 3

瓦、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器を主とし、白磁、染付、瑠璃釉、本土産陶磁器、陶質土器、石製品、円盤状製品、金属製品等、合計483点が出土した。第9表に特徴的な遺物の観察事項、第51表に遺物毎の出土状況を示す。

第9表 区画3出土遺物観察一覧(I地区)a

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
第66図 図版27	1	石器	敲石	—	口径 —	器高 —	底径 —	表裏面及び側面に敲打痕。表面一部に磨面。砂岩。	D-8 SD29 1層
	2	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.2	器高 6.2	底径 6.0	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は浅黄色。外面に呉須で文様。	D-8 SD29 1層
	3	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底部	口径 8.4	器高 4.1	底径 3.6	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は灰黄色。	D-8 SD29 1層
	4	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底部	口径 7.8	器高 5.0	底径 3.8	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。畳付は露胎。畳付にアルミナを塗布。素地は灰白色。外面に呉須で文様。	D-8 SD29 1層
	5	沖縄産 施釉陶器	蓋	—	口径 9.5	器高 3.9	底径 6.9	素地はにぶい黄橙色。外面に呉須と褐釉による文様。	D-8 SD29 1層
	6	石器	不明	—	口径 —	器高 —	底径 —	表面に磨面が確認されるが、破損が著しいため詳細不明。緑色岩。	D-8 SD42 2層
	7	白磁	小碗	底部	口径 —	器高 —	底径 5.2	型成形。畳付を釉剥ぎ。畳付に砂粒が付着。素地は白色で緻密。徳化窯産。	D-8 SD42 2層
	8	瑠璃釉	小杯	口縁部	口径 3.6	器高 —	底径 —	外面に瑠璃釉、内面に透明釉を掛け分け。口唇部は釉剥ぎ。素地は白色で緻密。徳化窯産。	D-8 SD42 2層
	9	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 14.7	器高 6.8	底径 6.4	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗布。素地はにぶい黄橙色。外面に呉須と褐釉で花文3つ。	D-8 SD42哇 2層
	10	沖縄産 無釉陶器	鉢	口～底部	口径 49.2	器高 25.9	底径 22.4	素地は明赤褐色。外面に沈線による波状文と貼付した丸文。	D-8 SD42 1層
第66図 図版28	11	沖縄産 無釉陶器	壺	口縁部	口径 9.8	器高 —	底径 —	素地は褐色。頸部はほぼ直立する。内外面は轆轤痕が明瞭。	D-8 SD42 2層
	12	沖縄産 無釉陶器	壺	口～底部	口径 20.0	器高 65.0	底径 24.6	素地はにぶい赤褐色。横耳を4つ貼付。円の中に垂直方向の1本線の線刻あり。	D-8 SD42 1層+2層
	13	銭貨	十銭	—	外径 2.2	孔径 0.5	厚さ 0.1	大正十二年発行の十銭。表に菊と桐の文様。重量3.5g。	D-8 SD29 1層
	14	円盤状製品	—	—	長径 5.7	厚さ 1.3	最大幅 6.0	明朝系赤瓦を素材としている。重量46.0g。	D-8 SD42 2層
第67図 図版28	15	石製品	硯	—	口径 —	器高 —	底径 —	裏面は縁から7mm～1cm幅を残して一段下がる。全体的に風化が著しい。砂岩製か。	D-8 SD42 1層
	16	沖縄産 施釉陶器	瓶	底部	口径 —	器高 —	底径 6.4	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は浅黄色。	D-8 SD45 1層
	17	沖縄産 施釉陶器	香炉	口～底部	口径 19.4	器高 11.2	底径 10.5	内面口縁部下から外面胴部下半まで呉須を施す。畳付は幅が広く、中心に向かって斜めを呈し、僅かに砂粒が付着する。内底に目跡あり。素地は灰白色。外面下部にみられる突起は、三足の名残と考えられる。	D-8 SK60 2層
	18	沖縄産 施釉陶器	瓶	口～底部	口径 5.6	器高 14.1	底径 6.2	畳付にアルミナを塗布。畳付は幅が広く、中心に向かって斜めを呈する。外面は呉須と褐釉による文様。素地は浅黄色。	D-8 SK60 2層
	19	沖縄産 無釉陶器	壺	口～底部	口径 16.2	器高 48.0	底径 18.2	素地は明赤褐色。外面頸部及び胴上部に沈線。内外面ともに轆轤痕が明瞭。	D-8 SD29 1層+ D-8 SK60 2層

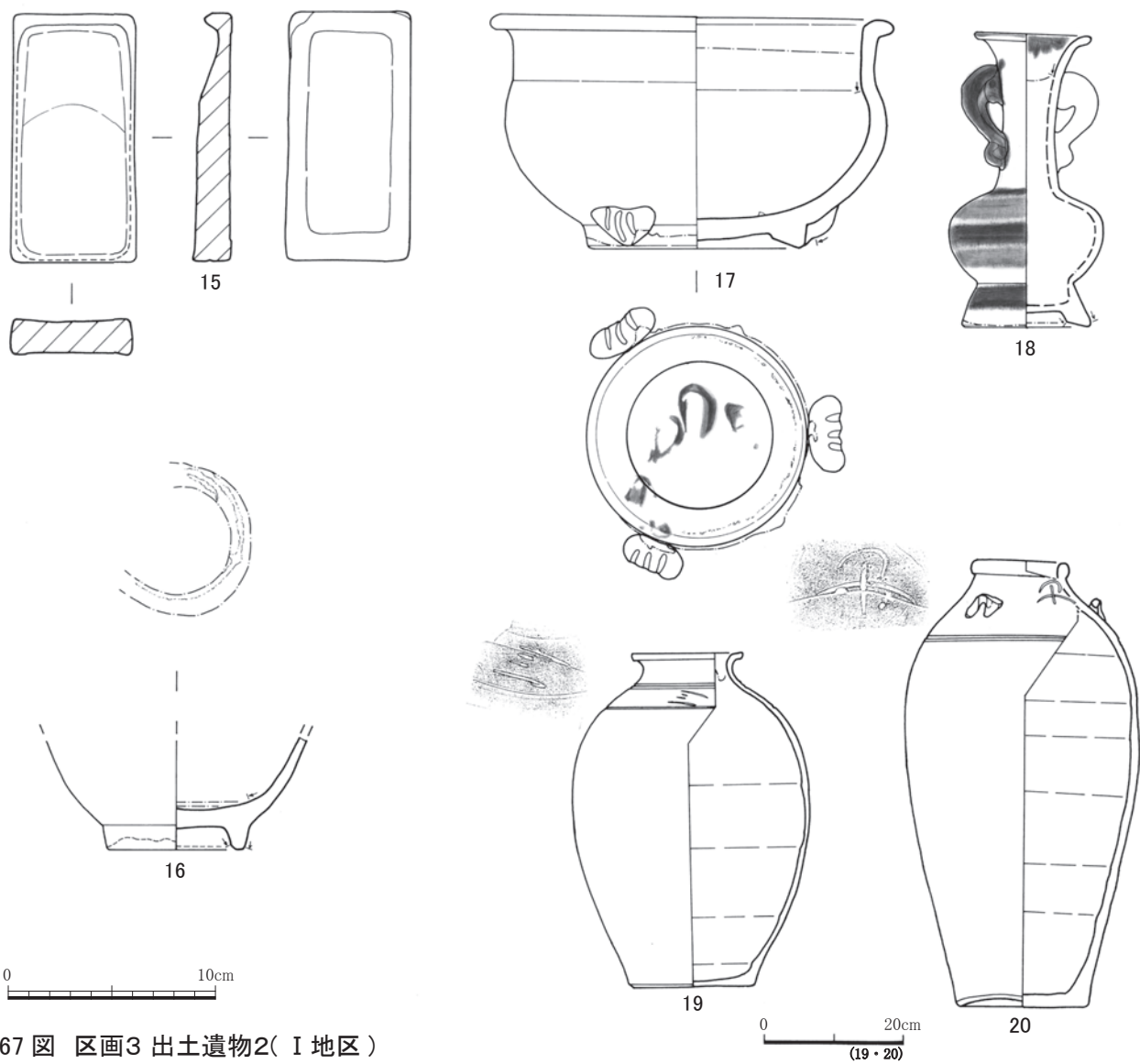
第9表 区画3出土遺物観察一覧(I地区)b

単位:cm

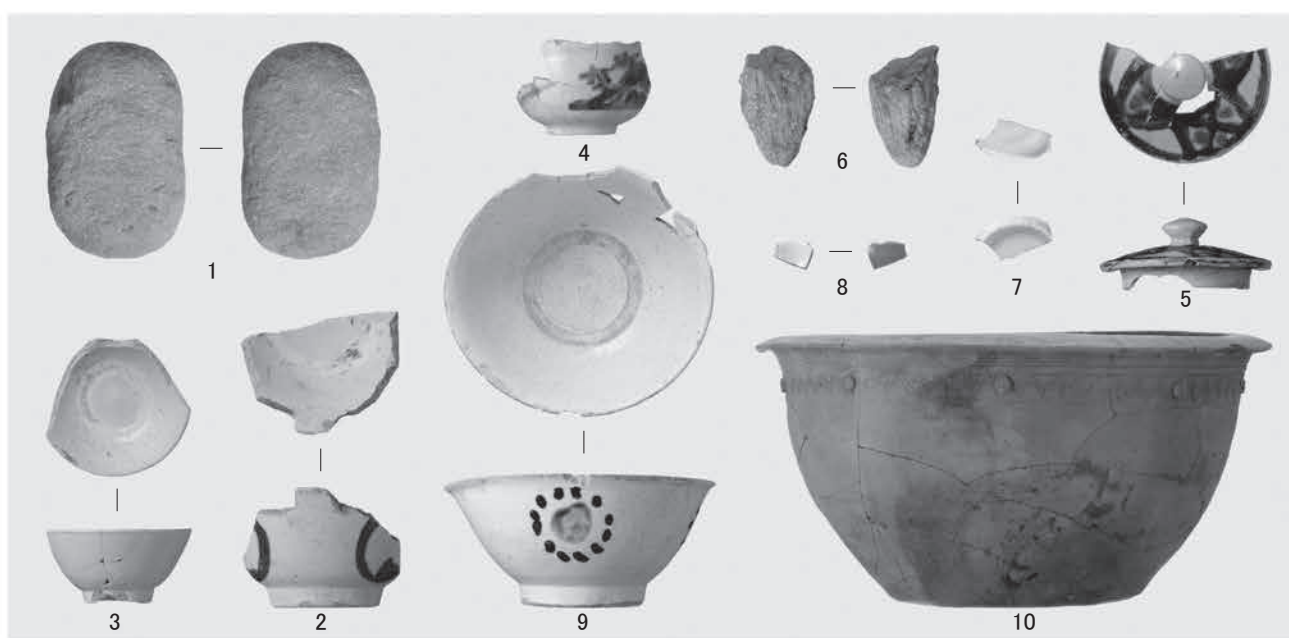
挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第67図 図版28	20	沖縄産 無釉陶器	壺	口～底部	口径	器高	底径	素地は明赤褐色。外面胴上部に沈線。横耳を3つ貼付。	D-8 SK60 1層+2層
					14.1	64.2	19.3		
図版28	21	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径	器高	底径	畳付は露胎。素地は白色で細かい。内底に5つの胎土目。型紙絵付け。	D-8 SD29 1層
					13.2	4.8	5.9		
	22	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に文様。外底に「白山」銘あり。	D-8 SD29 1層
					8.1	4.6	3.3		
	23	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径	器高	底径	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に文様。口唇部に銹釉。銅版転写。	D-8 SD29 1層
					12.7	2.7	7.5		
24	本土産 近現代磁器	小鉢	口～底部	口径	器高	底径	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内外面に文様。輪花鉢。ゴム判絵付け。	D-8 SD29 1層	
				9.8	4.8	4.0			
25	本土産 近現代磁器	小鉢	口～底部	口径	器高	底径	畳付及び口唇部を釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外面に刻みによる文様。	D-8 SD29 1層	
				11.6	5.2	6.0			
26	本土産 近現代磁器	卸金	—	—	高さ	—	全面に透明釉。素地は白色で緻密。	D-8 SD29 1層	
				—	1.2	—			
27	銭貨	一銭	—	外径	孔径	厚さ	昭和九年発行の一銭青銅貨。表に桐の文様。重量3.1g。	D-8 SD29 1層	
				2.3	—	0.1			
28	銭貨	五銭	—	外径	孔径	厚さ	大正十年発行の五銭。表に菊と桐の文様。重量2.4g。	D-8 SD29 1層	
				1.9	0.4	0.1			
29	ガラス製品	薬瓶	口～底部	口径	器高	底径	瓶底に「MASTER」のエンボス。色調は白色。	D-8 SD29 1層	
				4.2	6.1	4.6			
30	ガラス製品	瓶	口～底部	口径	器高	底径	胴部に「わかば」、「定量」と目盛バーのエンボス。色調は透明。	D-8 SD29 1層	
				1.7	7.0	2.8			
31	ガラス製品	瓶	口～底部	口径	器高	底径	色調は透明。	D-8 SD29 1層	
				1.4	5.1	2.1			
32	瓦	明朝系 丸瓦	—	口径	器高	底径	筒部凸面の玉縁側に横方向のナデによる凹線がみられる。色調は赤色。	D-8 SD42 1層	
				—	—	—			
33	本土産 近現代磁器	小碗	底部	口径	器高	底径	素地は白色で緻密。外面に文様。外底に「輪山」銘あり。	D-8 SD42 1層	
				—	—	3.4			
34	本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径	器高	底径	素地は白色で緻密。高台形状が方形を呈する。内面に日章旗などの文様。	D-8 SD42 2層	
				6.1	2.7	2.1			
35	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	畳付から外底にかけて露胎。素地は白色で緻密。高台内に段を持つ。口唇部に銹釉。	D-8 SD42レンチ 2層	
				8.0	4.6	3.6			
36	本土産 近代陶器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	畳付から外底にかけて露胎。素地は灰黄色で細かい。外面に桜花文。	D-8 SD42 2層	
				8.4	4.5	3.5			
37	ガラス製品	瓶	口～底部	口径	器高	底径	色調は白色。	D-8 SD42畦 2層	
				3.7	3.6	4.3			
38	ガラス製品	瓶	口～底部	口径	器高	底径	色調は白色。	D-8 SD42畦 2層	
				3.5	3.3	2.9			
39	石製品	—	—	口径	器高	底径	一部、円状に削られているのが確認される。石灰質砂岩(ニービ)。	D-8 SD42 1層	
				—	—	—			
40	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	素地は白色で緻密。外面に文様。鶴、亀、松などの文様。	D-8 SK60 2層	
				6.6	7.3	3.9			
41	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	素地は白色で緻密。外面に文様。	D-8 SK60 2層	
				6.4	7.1	3.9			



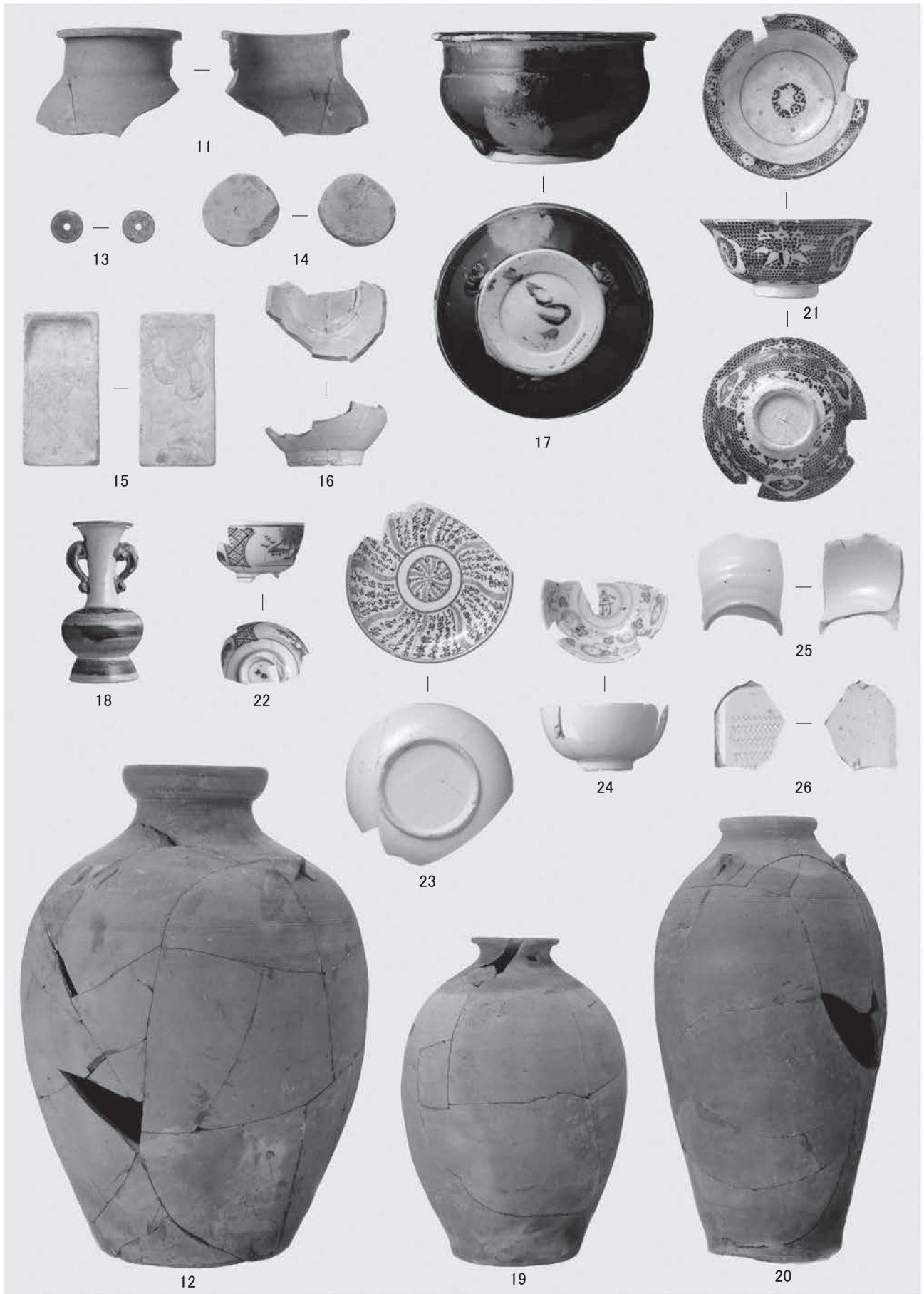
第 66 图 区画3 出土遺物1(I 地区)



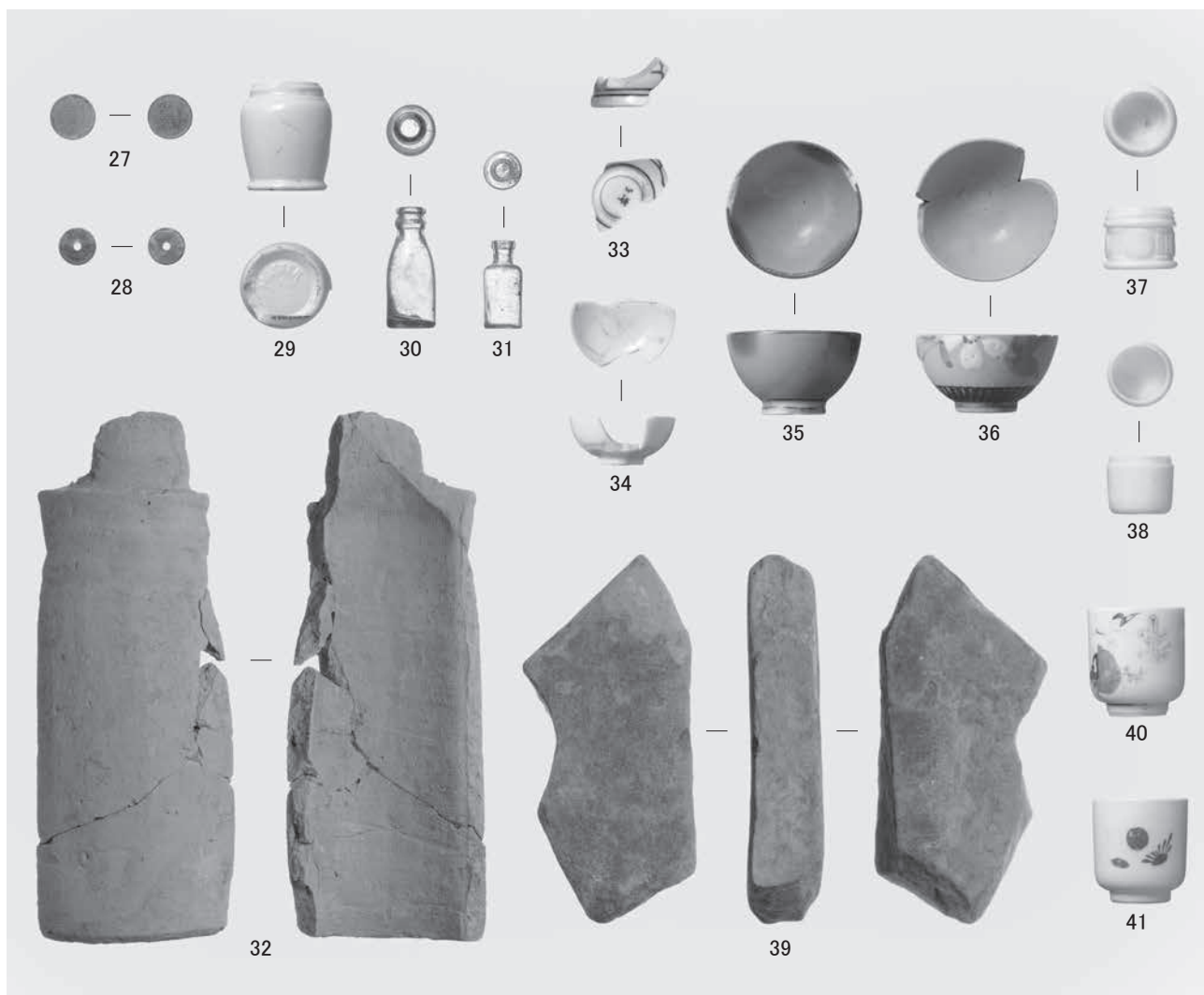
第 67 图 区画3 出土遺物2(I 地区)



图版 27 区画3 出土遺物1 (I 地区)



图版 28 区画3 出土遺物2 (I地区)



図版 29 区画3 出土遺物3 (I 地区)

区画 4

沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、瓦を主とし、白磁、染付、本土産陶磁器、陶質土器、石製品、金属製品等を合計5,253点検出している。特にSD4からは多量の遺物が出土している。第10表に特徴的な遺物の観察事項、第52表に遺物毎の出土状況を示す。

第10表 区画4出土遺物観察一覧(I 地区)a

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地
				長軸	短軸	厚さ		
第68図 図版30	1	石器	石斧	—	—	—	刃部は破損。中央部及び側面に敲打痕。重量555g。緑色岩。	F-7 SD4 2層
	2	石器	磨石	—	—	—	上端部及び側面に敲打痕。重量574g。砂岩。	G-7 SD4 1層
	3	石器	敲石	—	—	—	敲石の破片。重量173g。砂岩。	G-7 SD4 1層
	4	石器	凹石	—	—	—	中央部に使用痕。重量374g。石灰質砂岩。	G-8 SD4 1層
	5	土器	壺	口縁部	—	—	—	口唇部を平坦に成形。内外器面に指頭痕。胎土は砂質で石英等の砂粒を多量に含み、赤色土粒もみられる。

第10表 区画4出土遺物観察一覧(I地区)b

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第68図 図版30	6	カムイヤキ	壺	胴部	口径 —	器高 —	底径 —	頭部片。外面に叩き目痕、内面に回転ナデ。胎土は暗灰色で白色粒を含む。	F-7 SD4畦C 2層
	7	白磁	碗	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	玉縁口縁。素地は白色で緻密。	G-7 SD4 2層
	8	白磁	皿	底部	口径 —	器高 —	底径 4.0	外底及び内底は露胎。素地は灰白色で緻密。	F-7 SD4 2層
	9	染付	碗	底部	口径 —	器高 —	底径 6.9	外底、高台外面及び内底中央部に施釉。畳付は露胎。素地は淡黄色で緻密。福建・広東系。	F-7 SD4 2層
	10	染付	碗	口縁部	口径 15.0	器高 —	底径 —	端反口縁。素地は白色で緻密。外面に草文。徳化窯産。	F-7 SD4 1層
	11	染付	皿	口～底部	口径 14.6	器高 2.9	底径 7.8	端反口縁。畳付は露胎。素地は白色で緻密。内底に「志在書中」図。徳化窯産。	G-7 SD4 1層
	12	染付	皿	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	端反口縁。素地は白色で緻密。内面に草花文。徳化窯産。	F-7 SD4畦C 2層
	13	染付	皿	底部	口径 —	器高 —	底径 8.6	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内底に草花文。徳化窯産。	F-6 SD4 2層
	14	染付	皿	底部	口径 —	器高 —	底径 8.6	畳付は露胎。素地は白色で緻密。徳化窯産。	F-7 SD4 2層
	15	褐釉磁器	小杯	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	外面褐釉。素地は白色で緻密。景德鎮窯産。	G-8 SD4 1層
	16	瑠璃釉	小碗	底部	口径 —	器高 —	底径 4.4	外面は瑠璃釉で外底は露胎。素地は灰白色で緻密。	G-7 SD4 2層
第69図 図版30	17	紫砂	急須	注口	口径 —	器高 —	底径 —	急須の注口。器表面はなめらか。素地は茶褐色で硬質。宜興窯産。	F-8 SD4 2層
	18	本土産磁器	染付小碗	底部	口径 4.1	器高 —	底径 —	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に草花文。	F-8 SD4 2層
	19	本土産磁器	染付蓋	—	口径 12.5	器高 —	底径 10.5	底片。底下部は露胎。素地は白色で緻密。外面に草花文。	F-8 SD4 2層
	20	沖繩産施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.0	器高 6.2	底径 6.6	鉄釉を外腰部～内面まで施釉し、内底を蛇の目釉剥ぎ。素地は灰黄色で細かい。	F-8 SD4 2層
	21	沖繩産施釉陶器	碗	口～底部	口径 12.2	器高 6.1	底径 5.9	全面に白化粧と透明釉を施釉後、内底を蛇の目、畳付を釉剥ぎ。内外面に草花文。素地は淡黄色で細かい。	F-6 SD4 2層
	22	沖繩産施釉陶器	小碗	口～底部	口径 7.9	器高 4.2	底径 3.4	全面に白化粧と透明釉を施釉後、内底を蛇の目、畳付を釉剥ぎ。素地は淡黄色で細かい。外面に草花文。	F-7 SD4 2層
	23	沖繩産施釉陶器	鉢	口～底部	口径 27.0	器高 12.1	底径 9.2	鏝縁口縁。全面に白化粧後、外面鉄釉、内面灰釉を施釉し内底蛇の目釉剥ぎ。素地は暗赤褐色で緻密。	F-7 SD4 1層
	24	沖繩産施釉陶器	壺	口～底部	口径 11.7	器高 23.6	底径 11.2	油壺。黒釉を施釉後口唇を釉剥ぎ。畳付は露胎。素地は灰白色で細かい。一部被熱?による釉の剥がれあり。外底に耐火粘土付着。	F-7 SD4 1層
	25	沖繩産施釉陶器	壺	口～底部	口径 9.8	器高 19.7	底径 11.0	油壺。黒釉を施釉後畳付を釉剥ぎ。素地は灰白色で細かい。完形資料。	G-7 SD4畦A 2層
第69図 図版31	26	沖繩産施釉陶器	壺	底部	口径 —	器高 —	底径 10.0	鉄釉を施釉後、内底と畳付を釉剥ぎ。素地は浅黄色で細かい。	F-6 SD4 2層
	27	沖繩産施釉陶器	酒器	胴部	口径 —	器高 —	底径 —	外面白化粧後に呉須と鉄釉により絵付け。内面は頸部以下露胎。素地は灰黄色で細かい。	F-6 SD4 2層
	28	沖繩産施釉陶器	瓶	口縁部	口径 2.0	器高 —	底径 —	外面白化粧後に鉄釉を内面口頸部～肩部に施釉。内面は頸部以下露胎。素地は灰黄色で細かい。	F-7 SD4 1層
	29	沖繩産施釉陶器	瓶	底部	口径 —	器高 —	底径 5.6	外面白化粧後に鉄釉により絵付け。畳付けは釉剥ぎ、内面は露胎。素地は黄褐色で細かい。	F-6 SD4 2層
	30	沖繩産施釉陶器	香炉	口～底部	口径 14.8	器高 9.3	底径 9.2	白化粧後に内面口縁部～外面腰部まで施釉。外面に緑釉を流し掛け。素地は淡黄色で細かい。	F-7 SD4 2層
	31	沖繩産施釉陶器	火入	底部	口径 —	器高 —	底径 6.9	白化粧後に、外面施釉し胴折れ下部と畳付を釉剥ぎ。素地は淡黄色で細かい。高台内側に耐火粘土付着。	F-7 SD4 2層
	32	沖繩産施釉陶器	蓋	—	口径 6.7	器高 3.4	底径 5.2	外面の甲蓋端部まで瑠璃釉を施釉。素地は灰白色で緻密。握み器部に0.6cmの孔。	F-7 SD4畦B 2層
第70図 図版31	33	沖繩産施釉陶器	蓋	—	口径 18.2	器高 5.4	底径 —	灰釉を底部内外面に施釉。素地は灰白色で細かい。	G-7 SD4 2層
	34	沖繩産無釉陶器	鉢	口縁部	口径 31.0	器高 —	底径 —	内湾口縁。素地は赤褐色で緻密。外面胴上部に沈線+波状文。	F-6 SD4 2層
	35	沖繩産無釉陶器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	逆L字状口縁。器色は暗褐色、素地は暗赤褐色で緻密。口唇上部に沈線。	G-7 SD4 2層

第10表 区画4出土遺物観察一覧(I地区)c

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第70図 図版31	36	沖繩産 無釉陶器	播鉢	底部	口径	器高	底径	楕目は深く間隔は密。素地は暗赤褐色で緻密。	F-6 SD4 2層
					—	—	12.9		
	37	沖繩産 無釉陶器	播鉢	底部	口径	器高	底径	脚部片。素地は赤褐色で緻密。脚部上部に孔。	F-6 SD4 2層
					—	—	13.9		
	38	沖繩産 無釉陶器	播鉢	口縁部	口径	器高	底径	逆L字状口縁。楕目は間隔密。器色は暗褐色、素地は赤褐色で緻密。口唇上部に沈線。	G-8 SD4 1層
					—	—	—		
	39	沖繩産 無釉陶器	播鉢	底部	口径	器高	底径	外面轆轤痕明瞭。楕目は間隔密。素地は赤褐色で緻密。	G-8 SD4 1層
					—	—	12.5		
	40	沖繩産 無釉陶器	壺	口縁部	口径	器高	底径	口縁部は方形状。素地は暗褐色で緻密。	F-8 SD4 2層
				10.2	—	—			
41	沖繩産 無釉陶器	壺	底部	口径	器高	底径	内面轆轤痕明瞭。器色は暗青灰色、素地は暗赤褐色で緻密。	F-7 SD4 1層	
				—	—	7.0			
42	沖繩産 無釉陶器	壺	口縁部	口径	器高	底径	口唇部は方形状。外面に泥釉。素地は暗赤褐色で緻密。	G-7 SD4 1層	
				9.5	—	—			
43	沖繩産 無釉陶器	壺	底部	口径	器高	底径	器壁厚手。器色は暗褐色、素地は赤褐色で緻密。	G-8 SD4 1層	
				—	—	22.0			
44	沖繩産 無釉陶器	瓶	口縁部	口径	器高	底径	器色は内面暗青灰色、素地は暗赤褐色で緻密。肩部及び胴上部に沈線。	G-8 SD4 1層	
				8.4	—	—			
第70図 図版32	45	沖繩産 無釉陶器	甕	口縁部	口径	器高	底径	逆L字状口縁。器色は暗褐色、素地は赤褐色で緻密。口唇側面に沈線。	G-7 SD4 2層
					—	—	—		
	46	沖繩産 無釉陶器	火炉	口~底部	口径	器高	底径	内面轆轤痕明瞭。素地は赤褐色で緻密。肩部に沈線。	G-7 SD4 2層
					13.2	11.7	12.0		
	47	陶質土器	鉢	口縁部	口径	器高	底径	内湾口縁。素地は橙色で硬質。外面口縁部に沈線+波状文。	F-6 SD4 2層
					22.0	—	—		
48	瓦質土器	盤	口~底部	口径	器高	底径	口縁部は内側へ肥厚。器色は黒褐色、素地は灰白色で細かい。混入物に白色砂粒を含む。	G-6 SD4 2層	
				—	—	—			
第71図 図版32	49	円盤状製品	—	—	長径	厚さ	最大幅	素材は沖繩産施釉陶器小碗底部。重量24.6g。	F-8 SD4 2層
					4.8	0.8	4.8		
	50	円盤状製品	—	—	長径	厚さ	最大幅	素材は沖繩産無釉陶器胴部片。重量19.0g。	F-8 SD4 2層
					4.5	0.7	4.3		
	51	円盤状製品	—	—	長径	厚さ	最大幅	素材は沖繩産無釉陶器播鉢胴部片。重量14.3g。	G-7 SD4 1層
					3.4	1.0	3.8		
	52	円盤状製品	—	—	長径	厚さ	最大幅	素材は本土産近現代陶磁器胴部片。重量3.8g。	F-8 SD4 1層
					2.4	0.45	2.6		
	53	円盤状製品	—	—	長径	厚さ	最大幅	素材は本土産近現代陶磁器胴部片。重量2.3g。	G-8 SD4 2層
					2.0	0.4	2.0		
	54	円盤状製品	—	—	長径	厚さ	最大幅	素材は本土産近現代陶磁器小杯底部。重量6.1g。	F-7 SD4 2層
					2.5	0.5	2.7		
	55	煙管	—	雁首	火皿径	長さ	羅字接続部径	沖繩産施釉陶器製。外面は瑠璃釉で素地は灰白色で細かい。重量4.8g。	F-6 SD4 2層
					1.3	2.6	1.2		
	56	煙管	—	雁首	火皿径	長さ	羅字接続部径	青銅製。鍛造で上部に接合部。重量6.4g。	F-7 SD4 1層
					1.1 1.2	4.5	1.1 1.2		
	57	煙管	—	吸口	羅字接続部径	長さ	吸口径	青銅製。鍛造で側面に接合部。重量9.4g。	F-7 SD4 2層
					0.9	7.2	0.7		
58	石製品	硯	—	長軸	横軸	厚さ	長方硯。左側面に不明瞭な文字。重量274.9g。	F-7 SD4 2層	
				12.1	6.1	2.1			
59	銭貨	寛永通宝	—	外径	孔径	厚さ	銭文は不明瞭。重量2.7g。	F-7 SD4 1層	
				2.3	0.6	0.1			
60	染付	碗	口縁部	口径	器高	底径	素地は白色で緻密。外面に牡丹唐草文、腰部に連弁。	F-7 SD4b 2層	
				—	—	—			
61	染付	碗	口縁部	口径	器高	底径	素地は白色で緻密。外面に牡丹唐草文。	F-7 SD4b 2層	
				—	—	—			
62	本土産磁器	染付小碗	口縁部	口径	器高	底径	素地は灰白色で細かい。外面に花文か。	G-8 SD4b 2層	
				9.2	—	—			
63	本土産磁器	染付皿	底部	口径	器高	底径	内底を釉剥ぎ。素地は灰白色で緻密。	G-8 SD4b 2層	
				—	—	3.6			
64	沖繩産 施釉陶器	碗	口~底部	口径	器高	底径	全面に白化粧と透明釉を施釉後、内底を蛇の目、畳付を釉剥ぎ。素地は淡黄色で細かい。外面に丸文。	F-7 SD4b 2層	
				13.3	6.6	5.8			
65	沖繩産 施釉陶器	碗	口縁部	口径	器高	底径	口唇部釉剥ぎ。外面に緑色釉で文様か。	G-8 SD4b 2層	
				—	—	—			
66	沖繩産 施釉陶器	皿	口~底部	口径	器高	底径	全面に白化粧と透明釉を施釉後、内底を蛇の目、畳付を釉剥ぎ。素地は淡黄色で細かい。内底に草花文。	G-8 SD4b 2層	
				14.0	3.7	6.8			

第10表 区画4出土遺物観察一覧(I地区)d

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第71図 図版32	67	沖縄産 施釉陶器	大皿	底部	口径	器高	底径	外面鉄釉、内面白化粧後、透明釉を施釉。内底を蛇の目、畳付を釉剥ぎ。素地は淡黄色で細かい。	G-8 SD4b 2層
	68	沖縄産 施釉陶器	急須	底部	口径	器高	底径	全面に白化粧後、外面に瑠璃釉、内面に透明釉を施釉。素地は淡黄色で細かい。脚は3点で端部欠け。	G-6・7 SD4b 3層
	69	陶質土器	鍋	口縁部	口径	器高	底径	羽釜。鋳端部～胴下部に煤。素地は橙色で硬質。	G-7 SD4b 2層
					16.0	—	—		
	70	青銅製品	鏝	—	長さ	厚さ	—	鏝。表裏面に陽刻で松竹梅文。重量21.1g。	G-7 SD4b 2層
					5.6	0.4	—		
	71	石器	石斧	—	口径	器高	底径	刃部片。研磨調整。重量28.9g。	G-7 SD4c 2層
					—	—	—		
	72	カムイヤキ	壺	胴部	口径	器高	底径	胴部片。器面に叩き目痕。胎土は赤褐色で白色粒を含む。	G-7 SD4c 2層
					—	—	—		
	73	沖縄産 無釉陶器	器種不明	底部	口径	器高	底径	底部片。器色は黒褐色、素地は橙色で細かい。	G-8 SD4c哇A 2層
	74	白磁	小杯	口～底部	口径	器高	底径	灰白色釉を施釉。素地は白色で緻密。	E-7 SD23 2層
4.6					2.5	2.5			
75	染付	碗	口縁部	口径	器高	底径	素地は白色で緻密。外面に丸文。徳化窯産。	E-7 SD23 2層	
				16.0	—	—			
76	色絵	皿	口縁部	口径	器高	底径	素地は灰白色で緻密。内面に文様。	E-7 SD23 2層	
				—	—	—			
77	本土産磁器	染付 小碗	口～底部	口径	器高	底径	全面施釉後に畳付を釉剥ぎ。素地は灰白色で緻密。外面に花唐草文。薩摩。	E-6 SD23 1層	
				9.2	4.9	3.6			
78	沖縄産 施釉陶器	碗	底部	口径	器高	底径	灰釉を内外胴下部まで施釉。素地は灰白色で細かい。畳付に砂目。	E-7 SD23哇 2層	
				—	—	6.7			
第72図 図版32	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径	器高	底径	全面に白化粧と透明釉を施釉後、内底を蛇の目、畳付を釉剥ぎ。素地は灰黄色で細かい。外面に丸文。	E-6 SD23 2層	
				13.4	6.7	6.0			
80	沖縄産 施釉陶器	壺	底部	口径	器高	底径	油壺。黒釉を施釉後畳付を釉剥ぎ。内底露胎。素地は灰白色で細かい。	E-7 SD23 1層	
第72図 図版33	81	沖縄産 施釉陶器	香炉	口縁部	口径	器高	底径	白化粧後に灰釉を内面口縁部～外面に施釉。素地は淡黄色で細かい。	E-7 SD23 1層
					11.9	—	—		
	82	沖縄産 施釉陶器	火炉	底部	口径	器高	底径	白化粧後に外面腰部まで施釉。素地は淡黄色で細かい。	E-7 SD23 2層
					—	—	7.6		
	83	沖縄産 施釉陶器	蓋	—	口径	器高	底径	外面の甲蓋端部まで施釉。素地は淡黄色で細かい。上面に線刻で花文。撮み器部に0.6cmの孔。	F-6 SD23 2層
					8.2	3.6	5.8		
	84	沖縄産 無釉陶器	鉢	口～底部	口径	器高	底径	内湾口縁。素地は赤褐色で緻密。外面に波状文を有し上下端ナゲ消し。外底糸切り痕明瞭。	E-6 SD23 1層
					19.7	10.2	9.2		
	85	沖縄産 無釉陶器	鉢	口～底部	口径	器高	底径	逆L字状口縁。内面口縁部～外面に泥釉。器色は灰褐色、素地は赤褐色で細かい。内外面轆轤痕明瞭。	E-6 SD23 2層
					18.0	15.2	13.0		
	86	沖縄産 無釉陶器	擂鉢	口～底部	口径	器高	底径	逆L字状口縁。櫛目は間隔密。器色は灰黄褐色、素地は赤褐色で緻密。口唇上部に沈線。	E-6 SD23 2層
					29.6	13.3	12.2		
	87	沖縄産 無釉陶器	壺	口～底部	口径	器高	底径	外面に泥釉。器色は灰褐色。素地は赤褐色で緻密。	E-6 SD23 1層
					12.2	23.9	7.8		
	88	円盤状製品	—	—	長径	厚さ	最大幅	素材は沖縄産無釉陶器胴部片。重量73.1g。	E-7 SD23 1層
					6.8	1.3	6.8		
	89	青銅製品	簪	—	全長	—	—	匙状。茎断面六角。重量10.7g。	E-7 SD23 2層
					8.9	—	—		
90	沖縄産 施釉陶器	鉢	底部	口径	器高	底径	鉄釉を外腰部～内面まで施釉し、内底を蛇の目釉剥ぎ。素地は灰黄色で細かい。内底に点を円形に列する。	E-7 SD25 1層	
				—	—	9.0			
91	円盤状製品	—	—	長径	厚さ	最大幅	素材は瓦片。重量41.9g。	E-7 SD25 1層	
				5.7	1.6	5.1			
92	煙管	—	吸口	羅字接続部径	厚さ	吸口径	鍛造で側面に接合部。重量5.5g。	E-7 SD25 1層	
				—	—	0.7			
93	銭貨	寛永通宝	—	外径	孔径	厚さ	新寛永。重量2.6g。	E-7 SD25 1層	
				2.4	0.6	0.1			
94	沖縄産 施釉陶器	瓶	胴部	口径	器高	底径	外面脚部際まで施釉。素地は灰白色で緻密。	E-7 SD26 1層	
				—	—	—			
95	染付	碗	底部	口径	器高	底径	内外面胴部まで施釉。素地は灰白色で細かい。	F-8 SD27 1層	
				—	—	—			
96	円盤状製品	—	—	長径	厚さ	最大幅	素材は沖縄産無釉陶器胴部片。重量39.7g。	F-8 SD27 1層	
				4.3	1.4	4.5			

第10表 区画4出土遺物観察一覧(I地区)e

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第72図 図版33	97	沖縄産 無釉陶器	播鉢	口縁部	口径 26.4	器高 —	底径 —	逆L字状口縁。楯目は間隔密。器色・素地は橙色で緻密。口唇上部に沈線。	F-7 SD31 1層
	98	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.0	器高 6.1	底径 6.8	灰釉を内外胴下部まで施釉。素地は灰白色で細かい。	F-7 SD34 1層
	99	陶質土器	かまど	口～底部	口径 —	器高 —	底径 —	素地は橙色で硬質。内面は刷毛によるナデ、外面に一部指頭痕。一部煤が残る。	F-7 SK11 2層
	100	染付	碗	底部	口径 —	器高 —	底径 7.6	施釉後に畳付釉剥ぎ。素地は灰白色で緻密。外面に文様。	F-7 SK12 4層
第72図 図版34	101	白磁	小杯	口～底部	口径 4.7	器高 3.1	底径 2.1	全面施釉後に口唇部と畳付を釉剥ぎ。腰部に花卉状の文様。内底と畳付に砂目。	F-8 SK14 2層
	102	沖縄産 無釉陶器	皿	口～底部	口径 11.4	器高 2.8	底径 5.0	器色・素地ともに赤褐色で緻密。口縁部に煤。	E-7 SD31 2層
第73図 図版34	103	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 15.6	器高 7.5	底径 7.0	全面に白化粧と透明釉を施釉後、内底を蛇の目、畳付を釉剥ぎ。素地は灰黄色で細かい。外面に丸文。	F-6 SK61 1層
	104	沖縄産 施釉陶器	急須	口縁部	口径 11.8	器高 —	底径 —	黒釉を施釉後、口唇部釉剥ぎ。口縁部内面は露胎。素地は灰白色で緻密。	F-6 SK61 1層
	105	沖縄産 無釉陶器	鉢	口～底部	口径 24.4	器高 14.1	底径 12.8	内湾口縁。素地は赤褐色で緻密。外面に波状文+沈線。	F-6 SK61 1層
	106	沖縄産 無釉陶器	壺	口～底部	口径 9.9	器高 21.4	底径 7.5	外面に一部泥釉。器色は黄褐色。素地は暗赤褐色で緻密。	F-6 SK61 1層
	107	沖縄産 無釉陶器	壺	口縁部	口径 18.0	器高 —	底径 —	玉縁状口縁。器色・素地ともに暗赤褐色で緻密。肩部耳近くに「三」窯印。	F-6 SK61 1層
	108	沖縄産 無釉陶器	瓶	底部	口径 —	器高 —	底径 9.6	外面に一部泥釉。器色は黄褐色。素地は暗赤褐色で緻密。肩部に沈線。	F-6 SK61 1層
	109	沖縄産 無釉陶器	甕	口縁部	口径 45.2	器高 —	底径 —	逆L字状口縁。器色は暗褐色、素地は赤褐色で緻密。口唇側面に沈線、胴上部に沈線+波状文を施文後、丸文貼り付け。その下位に太い突帯。内面に鉄製品付着。	F-6 SK61 1層
	110	沖縄産 無釉陶器	鉢	口～底部	口径 35.6	器高 17.1	底径 13.0	逆L字状口縁。器色・素地ともに橙色で細かい。内外面轆轤痕明瞭。口唇部上面に沈線。	G-6 SK88 1層
	111	カムイヤキ	壺	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	胎土は赤褐色で白色粒を含む。	F-7 SP112 1層
	112	カムイヤキ	壺	胴部	口径 —	器高 —	底径 —	内外面に叩き目痕。胎土は暗灰色で白色粒を含む。	F-7 SP119 1層
	113	染付	碗	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	端反口縁。素地は灰白色で緻密。外面に文様。福建・広東系。	F-7 SP129 1層
	114	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 14.0	器高 5.3	底径 7.0	灰釉を内底及び内外胴下部まで施釉。素地は灰白色で細かい。	F-7 SP133 1層
	115	カムイヤキ	壺	胴部	口径 —	器高 —	底径 —	内外面に叩き目+回転ナデ痕。胎土は暗赤褐色で白色粒を含む。	F-7 SP223 2層
	116	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.2	器高 6.2	底径 6.0	灰釉を内外胴下部まで施釉。素地は灰白色で細かい。内底に重ね焼き痕。	F-7 SP223 2層
	117	カムイヤキ	壺	胴部	口径 —	器高 —	底径 —	内外面に叩き目。胎土は暗灰色で白色粒を含む。	F-7 SP261 1層
	118	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.8	器高 7.1	底径 6.6	全面に白化粧と透明釉を施釉後、内底を蛇の目、畳付を釉剥ぎ。素地は灰白色で細かい。	E-7 SX6 2層
	119	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底部	口径 8.0	器高 4.0	底径 3.8	全面に白化粧と透明釉を施釉後、内底を蛇の目、畳付を釉剥ぎ。素地は灰黄色で細かい。外面に丸文。	E-7 SX6 2層
	120	沖縄産 施釉陶器	香炉	口～底部	口径 12.0	器高 6.6	底径 6.6	白化粧後に内面口縁部～外面腰部まで施釉。素地は淡黄色で細かい。	E-7 SX6 2層
	121	沖縄産 無釉陶器	碗	底部	口径 —	器高 —	底径 5.8	器色・素地ともに暗赤褐色で緻密。	E-7 SX6 2層
	122	円盤状製品	—	—	長径 4.8	厚さ 0.7	最大幅 5.0	素材は沖縄産無釉陶器播鉢胴部片。重量28.2g。	E-7 SX6 2層
図版34	123	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径 14.1	器高 5.2	底径 5.1	全面施釉後に畳付を釉剥ぎ。素地は灰白色で緻密。型紙摺りで鶴丸文。内底に目跡。	F-7 SD4 1層
図版35	124	本土産 近現代磁器	碗	口縁部	口径 13.4	器高 —	底径 —	素地は灰白色で緻密。型紙摺りで文字+花文。	G-8 SD4 1層
	125	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径 11.3	器高 5.3	底径 3.7	全面施釉後に畳付を釉剥ぎ。素地は灰白色で緻密。銅版転写で花文。	F-6 SD4 2層
	126	本土産 近現代磁器	染付 小碗	底部	口径 —	器高 —	底径 —	素地は白色で緻密。外面に草文。	G-6 SD4 2層
	127	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 7.5	器高 5.1	底径 3.1	全面施釉後に畳付を釉剥ぎ。素地は灰白色で緻密。外面に草花文。	F-6 SD4 2層

第10表 区画4出土遺物観察一覧(I地区)f

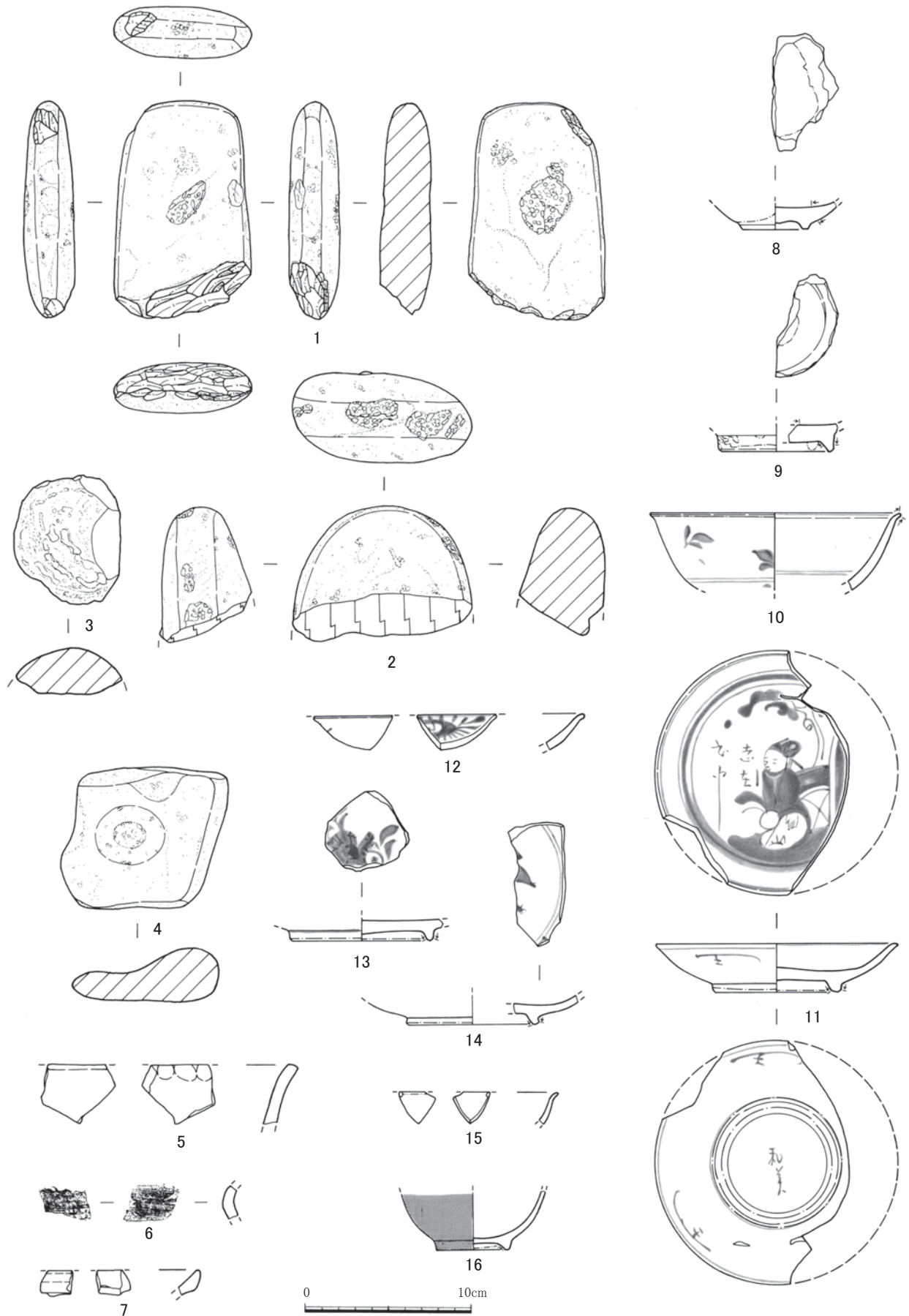
単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
図版35	128	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 8.1	器高 4.6	底径 3.0	全面施釉後に畳付を釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外面に胴版転写による文様。	G-6 SD4 1層
	129	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 6.8	器高 3.9	底径 3.1	クロム青磁。外面に飛鉋。高台内挟り。素地は灰白色で緻密。	F-6 SD4 2層
	130	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 8.4	器高 4.6	底径 3.0	全面施釉後に畳付を釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外面に二重圏線。外底に「岐464」銘。	F-7 SD4 1層
	131	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 7.2	器高 8.1	底径 4.8	全面施釉後に畳付けを釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外面に花文、外底に文字。	F-7 SD4 1層
	132	本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径 5.6	器高 2.9	底径 2.5	高台は花卉形。素地は白色で緻密。	G-8 SD4 1層
	133	本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径 4.8	器高 2.8	底径 1.8	素地は白色で緻密。外面に小槌文。	F-8 SD4 1層
	134	本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径 4.3	器高 2.5	底径 1.9	畳付に靱殻痕。型成形。素地は灰白色で緻密。	G-8 SD4 1層
	135	本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径 6.6	器高 2.5	底径 2.6	全面施釉後に畳付けを釉剥ぎ。素地は灰白色で緻密。	F-6 SD4 2層
	136	本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径 8.3	器高 3.4	底径 3.4	畳付け釉剥ぎ。素地は白色で緻密。軍杯で内底に日章旗か。	G-6 SD4 1層
	137	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径 13.0	器高 2.7	底径 6.6	畳付けを釉剥ぎ。素地は白色で緻密。内底に胴版転写による文様。	F-7 SD4 2層
	138	本土産 近現代磁器	蓋	—	口径 8.7	器高 2.9	底径 —	外面袴火部は釉剥ぎ。素地は白色で緻密。	F-6 SD4 1層
	139	本土産 近代陶器	蓋	—	口径 7.3	器高 3.2	底径 5.2	外面の甲蓋端部、内面袴褐色釉を施釉。撮み器部に0.5cmの孔。素地は黄白色で細かい。	G-7 SD4 2層
	140	鉄製品	へら?	—	長さa 12.6	長さb 3.9	底径 —	刃部短い。重量130.2g。	F-7 SD4 2層
	141	鉄製品	へら	—	長さa 21.5	長さb 3.3	底径 —	刃部若干曲がる。重量233g。	G-7 SD4 2層
	142	鉄製品	へら	—	長さa 17.8	長さb 4.1	底径 —	刃部L字状に曲がる。重量266.5g。	G-8 SD4 2層
	143	鉄製品	蹄鉄	—	長さ 10.2	厚さ 0.7	底径 —	上面接蹄部に留め部。重量157.8g。	G-8 SD4 2層
	144	鉄製品	鍔	—	長さa 23.9	長さb 5.0	底径 —	大型の鍔。重量127.4g。	F-7 SD4 2層
	145	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 2.3	器高 17.1	底径 4.6	胴部に「MUSCULOSINE BYLA CENTILLY-PARIS」、底面に「CDF」文字。色調は茶。栓はキャップか。	G-8 SD4 2層
	146	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 2.0	器高 8.4	底径 a-5.1、b-2.7	底部に「AJINOMOTO 2」文字。色調は透明。ネジ栓。	G-7 SD4 2層
	147	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 1.4	器高 5.5	底径 a-2.5、b-1.4	胴部に「活眼水」文字。色調は透明。栓はキャップか。	G-8 SD4 2層
148	石製品	石臼	—	長さ —	厚さ 10.8	高さ 10.8	下臼。挽き目不明瞭。芯棒孔3.3cm。重量13.0kg。	G-7 SD4 1層	
図版36	149	石製品	香炉	口～底部	長さ 32.2	厚さ 9.6	高さ 17.2	上面凹み部は研磨による滑面となる。重量15.0kg。石灰岩。	F-7 SD4 1層
図版35	150	本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径 5.7	器高 2.7	底径 2.3	素地は白色で緻密。内底に使用による擦痕。高台は花卉形。	F-8 SD4a 2層
図版36	151	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 8.2	器高 4.7	底径 3.1	素地は白色で緻密。外面に網代状文。	G-8 SD4b 2層
	152	本土産 近現代磁器	碗	底部	口径 —	器高 —	底径 4.4	素地は白色で緻密。胴下部に菊花文+松葉文か。	G-6・7 SD4b 3層
	153	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 8.2	器高 4.7	底径 3.4	素地は白色で緻密。外面に草花文。外底に文字。	F-7 SD4b 2層
	154	本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径 8.2	器高 3.4	底径 3.2	畳付釉剥ぎ。素地は白色で緻密。内底に色絵で文様。	F-7 SD4b 2層
	155	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径 13.3	器高 2.7	底径 7.3	素地は白色で緻密。内底に草花文。	G-7 SD4b 2層
	156	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径 11.0	器高 2.4	底径 6.4	波状口縁。素地は白色で緻密。内底に陽刻で草花文。	G-8 SD4b 2層
	157	本土産 近現代磁器	急須	底部	口径 —	器高 —	底径 7.4	外底は露胎。素地は白色で緻密。外面に花唐草文。	G-8 SD4b 2層
	158	本土産 近現代磁器	段重	底部	口径 —	器高 —	底径 10.5	外面のみ施釉。素地は灰白色で緻密。外面に型紙摺りで丸文。外底に「マーカ?」墨書。	F-7 SD4b 2層

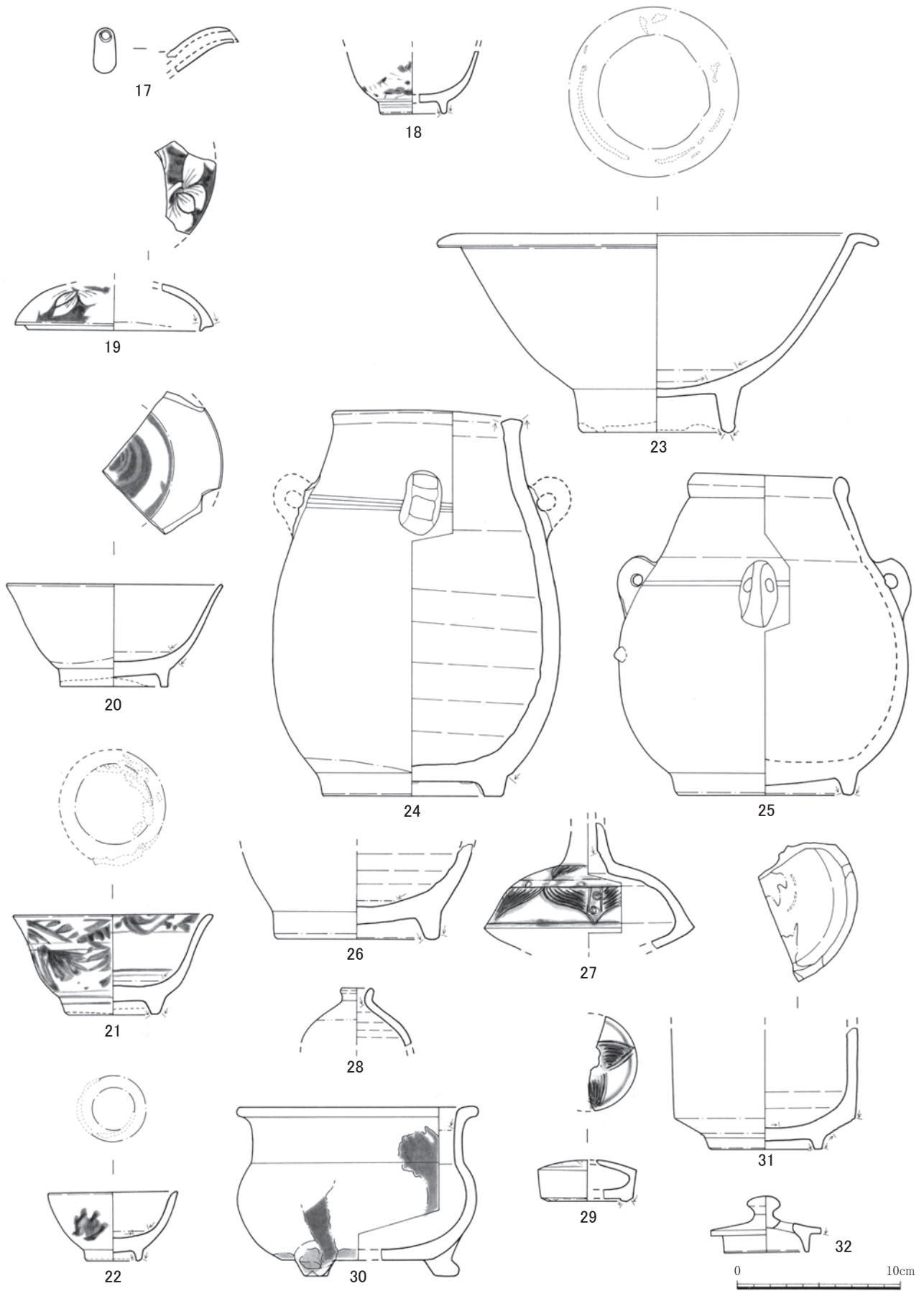
第10表 区画4出土遺物観察一覧(I地区)g

単位:cm

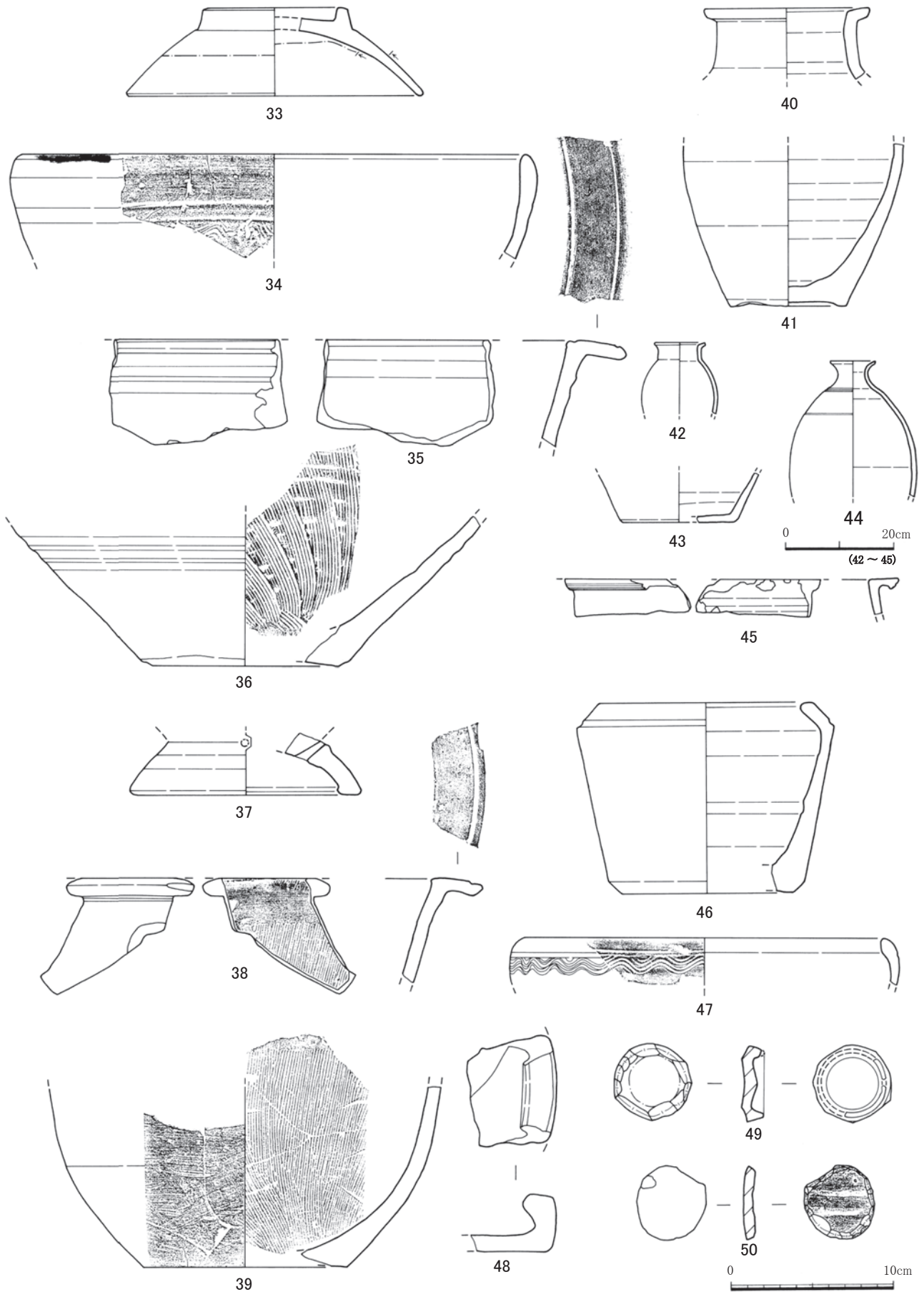
挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	量法			観察事項	出土地	
図版36	159	本土産 近現代磁器	筆架	口～底部	口径 —	器高 3.0	底径 —	灰白色釉を施釉し底部は露胎。素地は白色で緻密。筆孔径1cm。	G-8 SD4b 2層
	160	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 4.0	器高 6.2	底径 4.2	底面10角形。色調は白色。栓はネジ型。	F-7 SD4b 2層
	161	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 1.6	器高 3.7	底径 2.0	底面に「☆」内「H」文字。色調は透明。栓はキャップか。	G-7 SD4b 2層
	162	石製品	砥石	—	口径 —	器高 —	底径 —	板状の砥石。重量1006g。ニービ。置砥。	G-7 SD4b 2層
	163	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 7.7	器高 4.8	底径 3.8	畳付は釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外面に丸文+梅花文、外底に文字。	F-8 SD4c 2層
	164	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 8.4	器高 4.8	底径 3.2	畳付は釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外面に色絵で丸文。	F-7 SD4c 2層
	165	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径 13.2	器高 3.4	底径 8.2	外底は中央のみ施釉。素地は白色で緻密。内面に型紙摺りで日章旗。肥前。	G-7 SD4c 2層
	166	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 1.6	器高 6.2	底径 a=2.7, b=1.6	外面表「ロート目薬」、裏「本舗 山田安民」文字。色調はコバルト色。栓はキャップか。	G-7 SD4c 2層
	167	石製品	石臼	—	長さ 29.7	厚さ 6.6	高さ 6.5	下臼。芯棒孔内に芯棒。芯棒孔2.8cm。重量29.7kg。	F-7 SD4c 2層
図版37	168	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径 13.5	器高 5.9	底径 4.8	畳付露胎。素地は灰白色で緻密。型紙摺で花文。	E-7 SD23 1層
	169	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径 10.9	器高 5.6	底径 4.2	畳付露胎。素地は灰白色で緻密。型紙摺。	E-6 SD23 1層
	170	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径 10.7	器高 6.2	底径 4.4	畳付露胎。素地は灰白色で緻密。型紙摺。	F-6 SD31 1層
	171	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径 11.7	器高 4.8	底径 6.2	畳付露胎。素地は灰白色で緻密。銅版転写。	E-6 SD23 1層
	172	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 8.9	器高 4.1	底径 3.1	畳付露胎。素地は灰白色で緻密。銅版転写。	F-6 SD31 1層
	173	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 7.8	器高 4.8	底径 3.6	畳付露胎。素地は灰白色で緻密。銅版転写。	F-6 SD23 2層
	174	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 6.8	器高 4.3	底径 3.0	畳付露胎。素地は灰白色で緻密。銅版転写で銭文。	E-6 SD23 2層
	175	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 7.8	器高 4.2	底径 4.1	畳付～外底露胎。素地は灰白色で緻密。銅版転写。	E-6 SD23 1層
	176	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径 13.2	器高 3.5	底径 8.3	波縁皿。畳付～外底露胎。素地は灰白色で緻密。	E-6 SD23 1層
	177	本土産 近現代磁器	蓋	—	口径 6.4	器高 3.1	底径 5.0	外面の甲蓋端部～内面施釉。素地は灰白色で緻密。撮み器部に0.3cmの孔。	E-6 SD23 1層
	178	本土産 近現代磁器	小杯	底部	口径 —	器高 —	底径 3.2	外面瑠璃釉。畳付露胎。素地は灰白色で緻密。	F-6 SD23 2層
	179	軍票	—	—	縦 3.15	横 3.8	厚さ 0.05	「PERTER GORSKI 313-49-31 USNR-A T-2-44-C」文字。ジュラルミン製。	E-7 SD23 1層
	180	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 8.4	器高 4.8	底径 3.2	畳付露胎。素地は灰白色で緻密。銅版転写。	E-7 SD25 1層
	181	ガラス製品	蓋	—	口径 3.1	器高 —	底径 —	撮み欠損。色調は透明。	E-7 SD25 1層
	182	本土産 近代陶器	小碗	口～底部	口径 9.0	器高 —	底径 —	内外面施釉。素地は灰白色で緻密。外面に巴文。	F-7 SD31 1層
	183	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径 13.6	器高 5.8	底径 4.8	畳付露胎。素地は灰白色で緻密。型紙摺。内底に目跡。	F-6 SK61 1層
	184	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 7.8	器高 3.7	底径 4.9	畳付露胎。素地は灰白色で緻密。銅版転写。	F-6 SK61 1層
	185	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径 13.3	器高 8.2	底径 1.9	畳付露胎。素地は白色で緻密。色絵で内面草花文か。外底中央に「東洋陶器會社 意匠登録出願中」銘。	E-7 SX6 2層
186	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 4.8	器高 4.4	底径 5.1	底面に「M」文字。色調は淡い緑。栓はキャップか。	E-7 SX6 2層	
187	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 2.4	器高 5.2	底径 4.4	外面に丸文。色調は白色。栓はネジ型。	E-7 SX6 2層	
188	鉄製品	鉄鍋	口縁部	口径 60.0	器高 —	底径 —	大型鍋。口縁部若干の字状に屈曲。底部は底が抜ける。錆による剥離顕著。	G-8 SD4 2層	



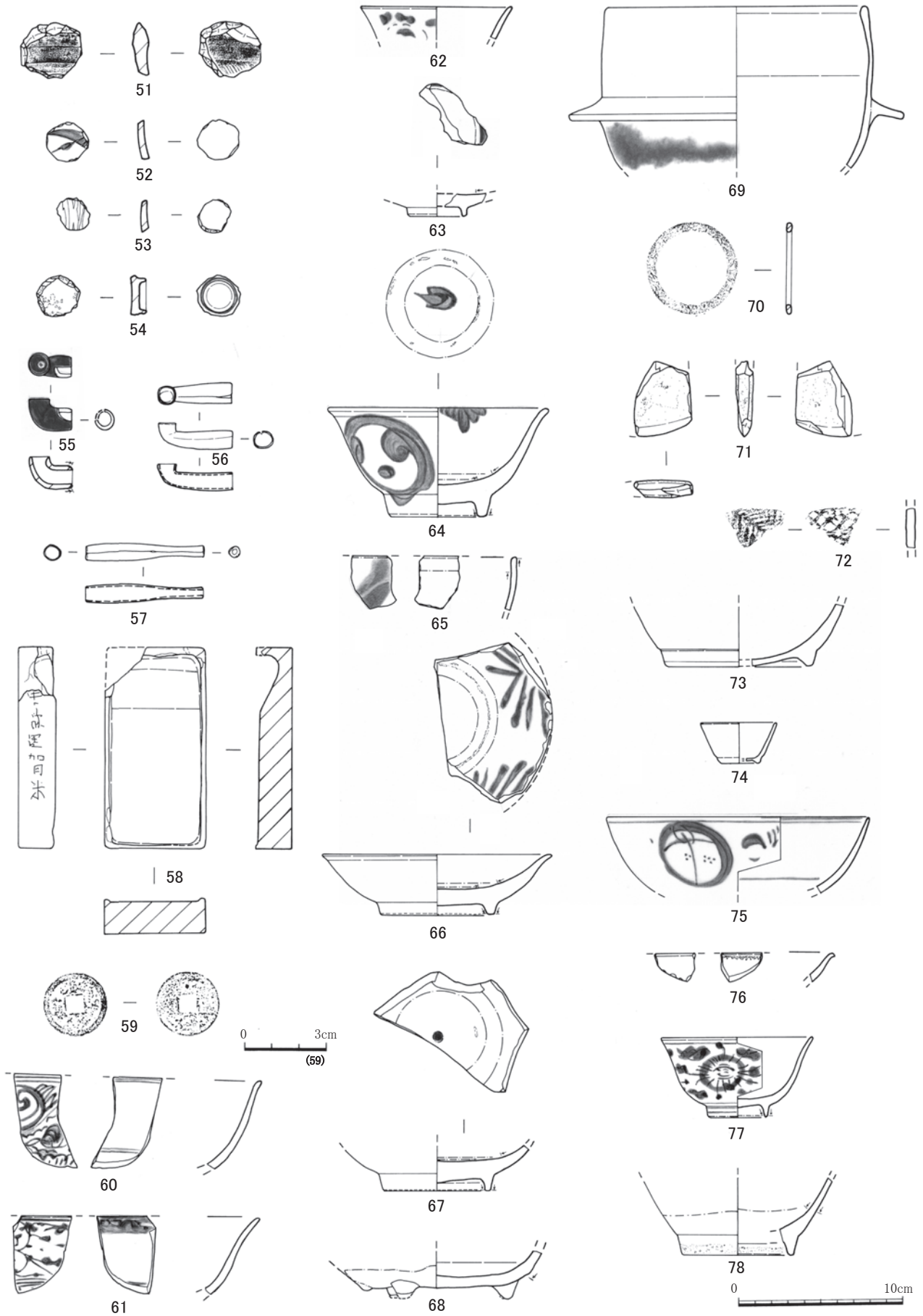
第 68 图 区画 4 出土遺物 1 (I 地区)



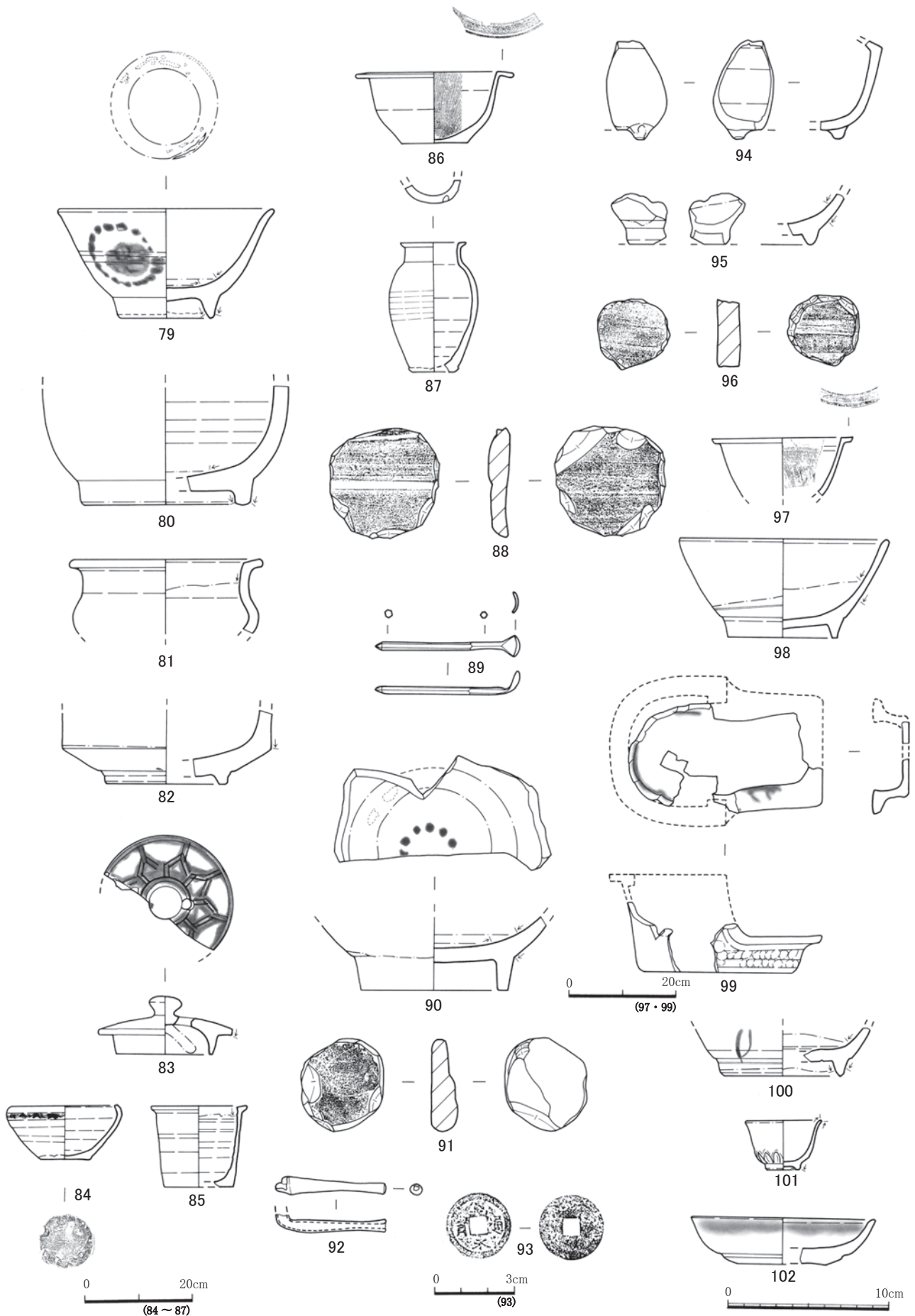
第 69 图 区画4 出土遺物2(I 地区)



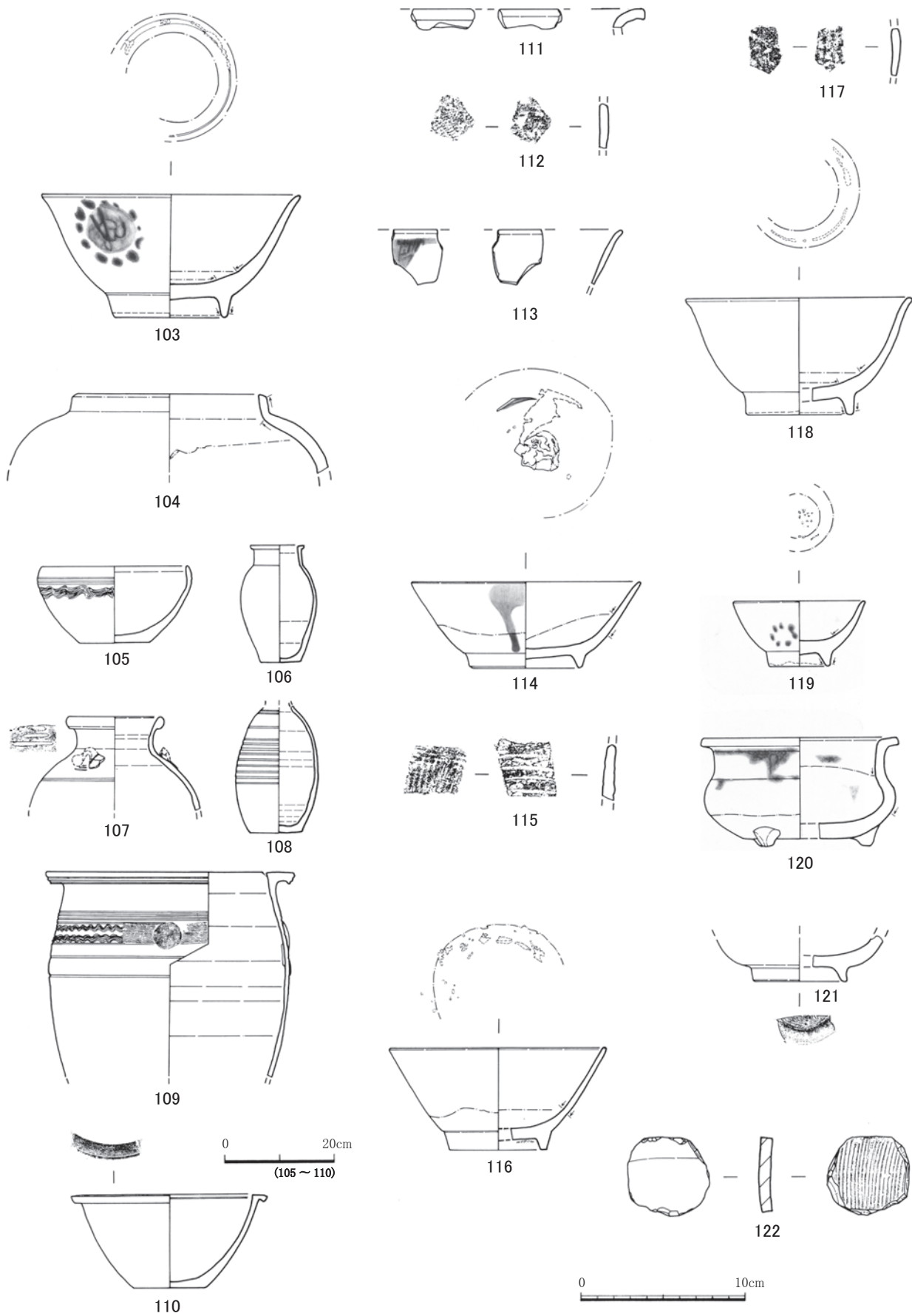
第70图 区画4 出土遺物3(I地区)



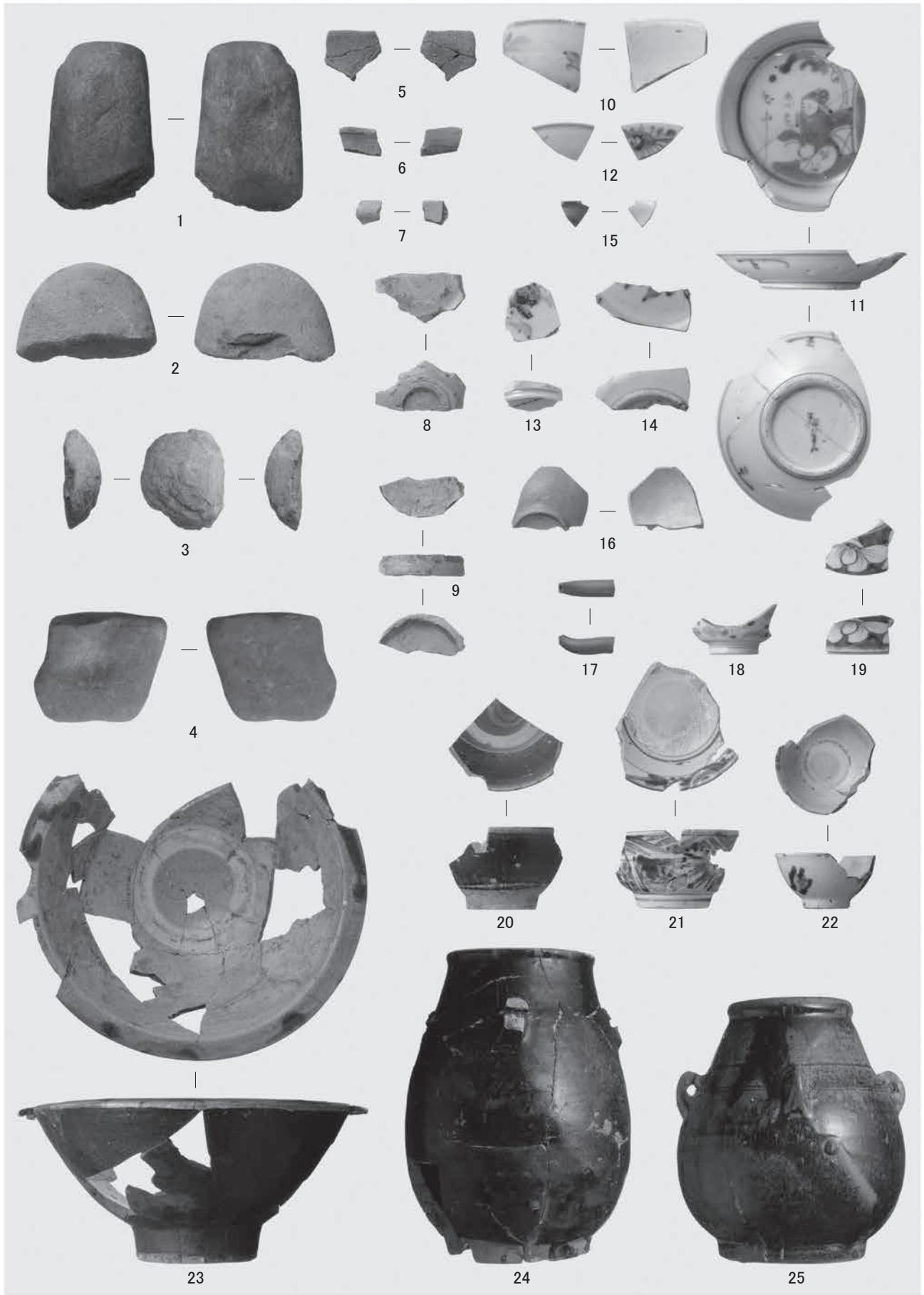
第71图 区画4 出土遺物4(I地区)



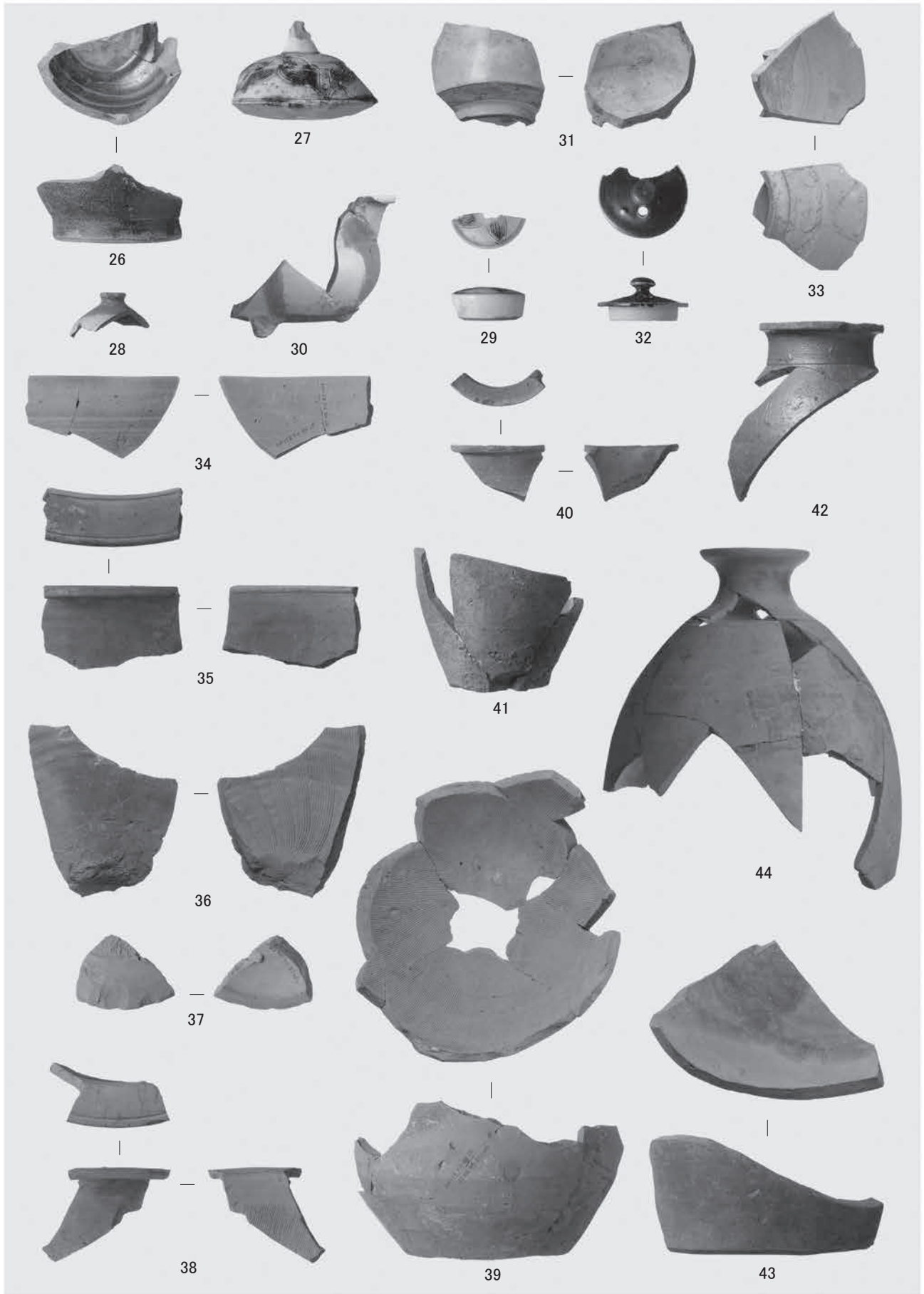
第 72 图 区画4 出土遺物5(I 地区)



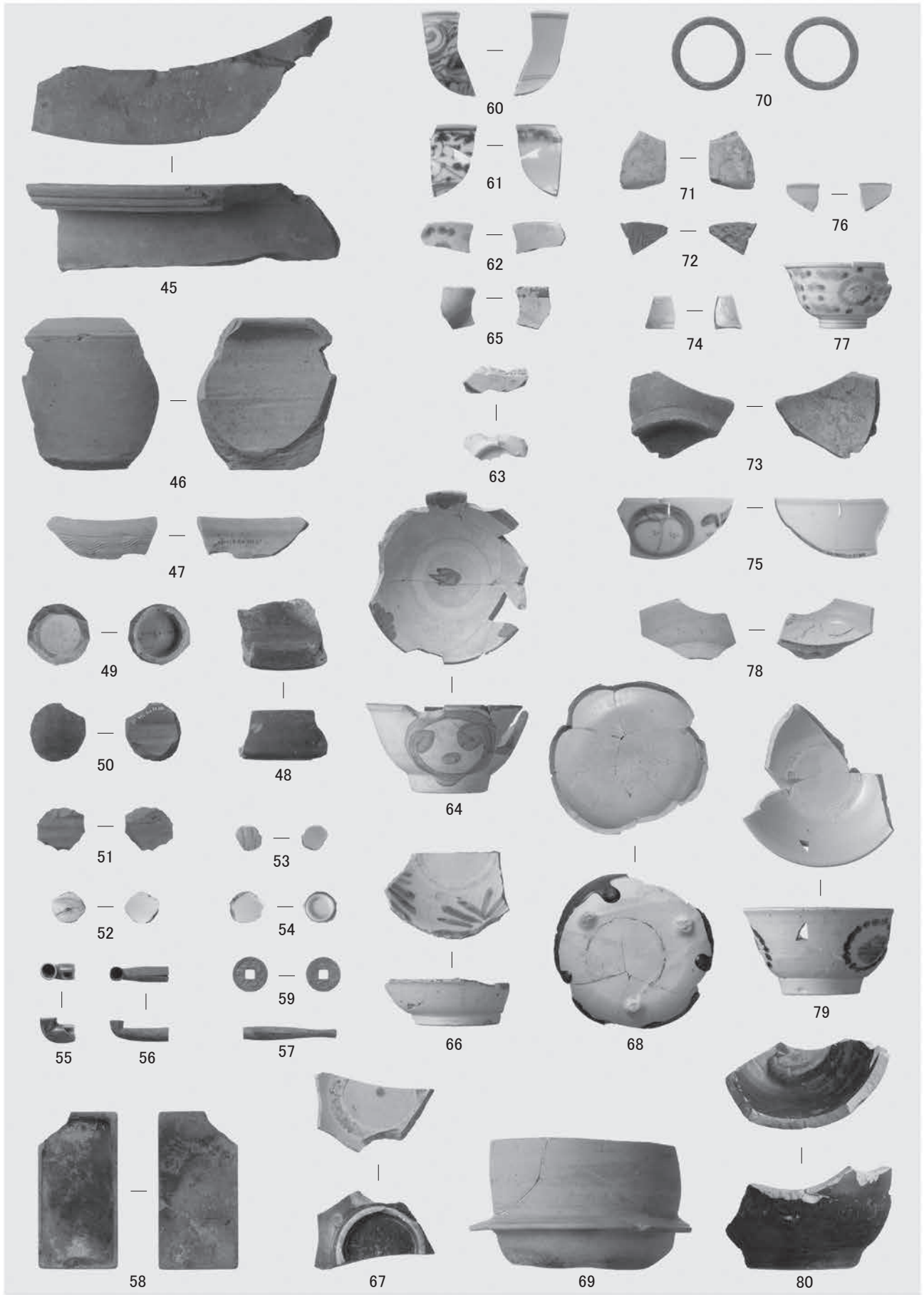
第 73 图 区画 4 出土遺物 6 (I 地区)



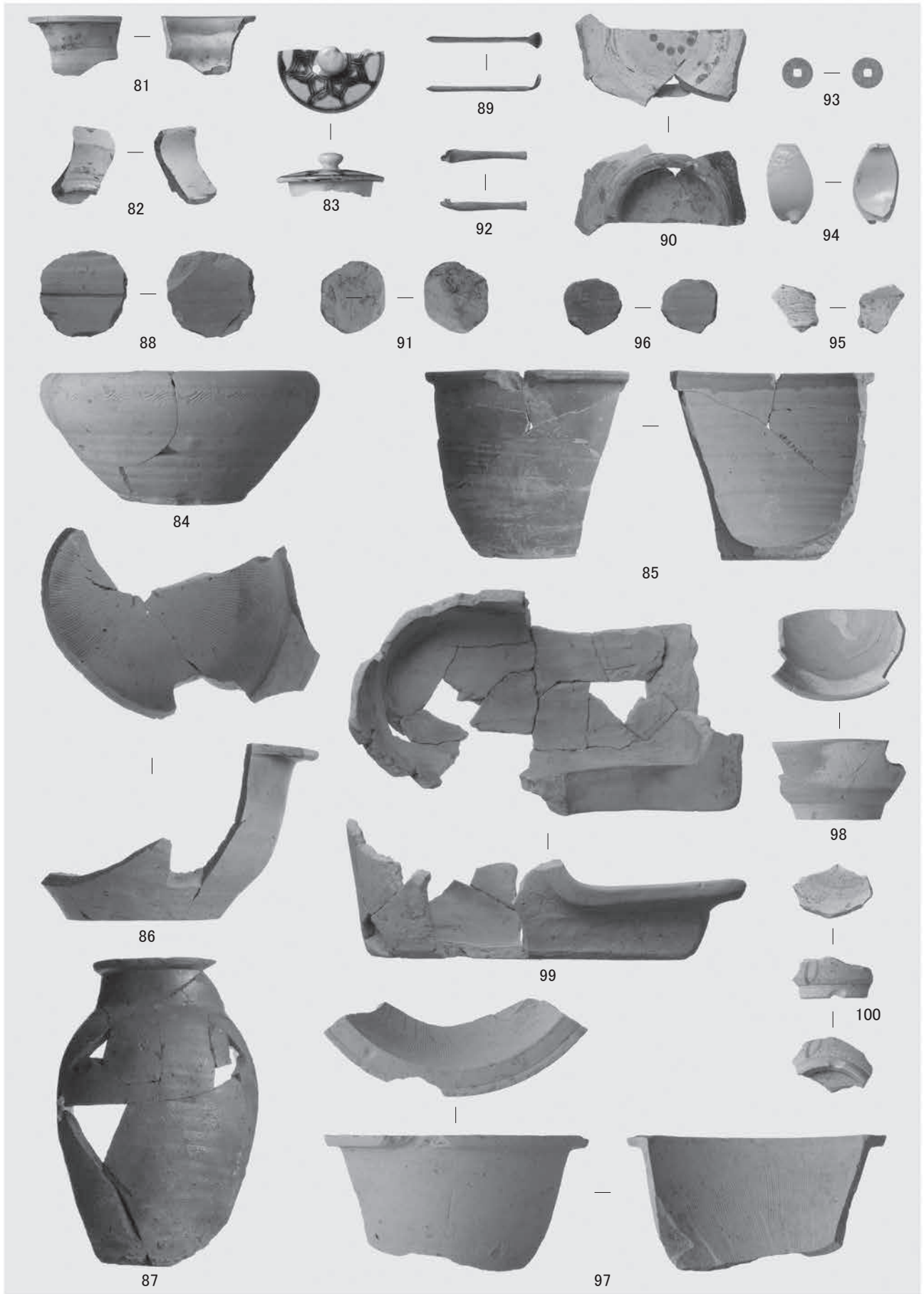
图版 30 区画4 出土遺物1 (I地区)



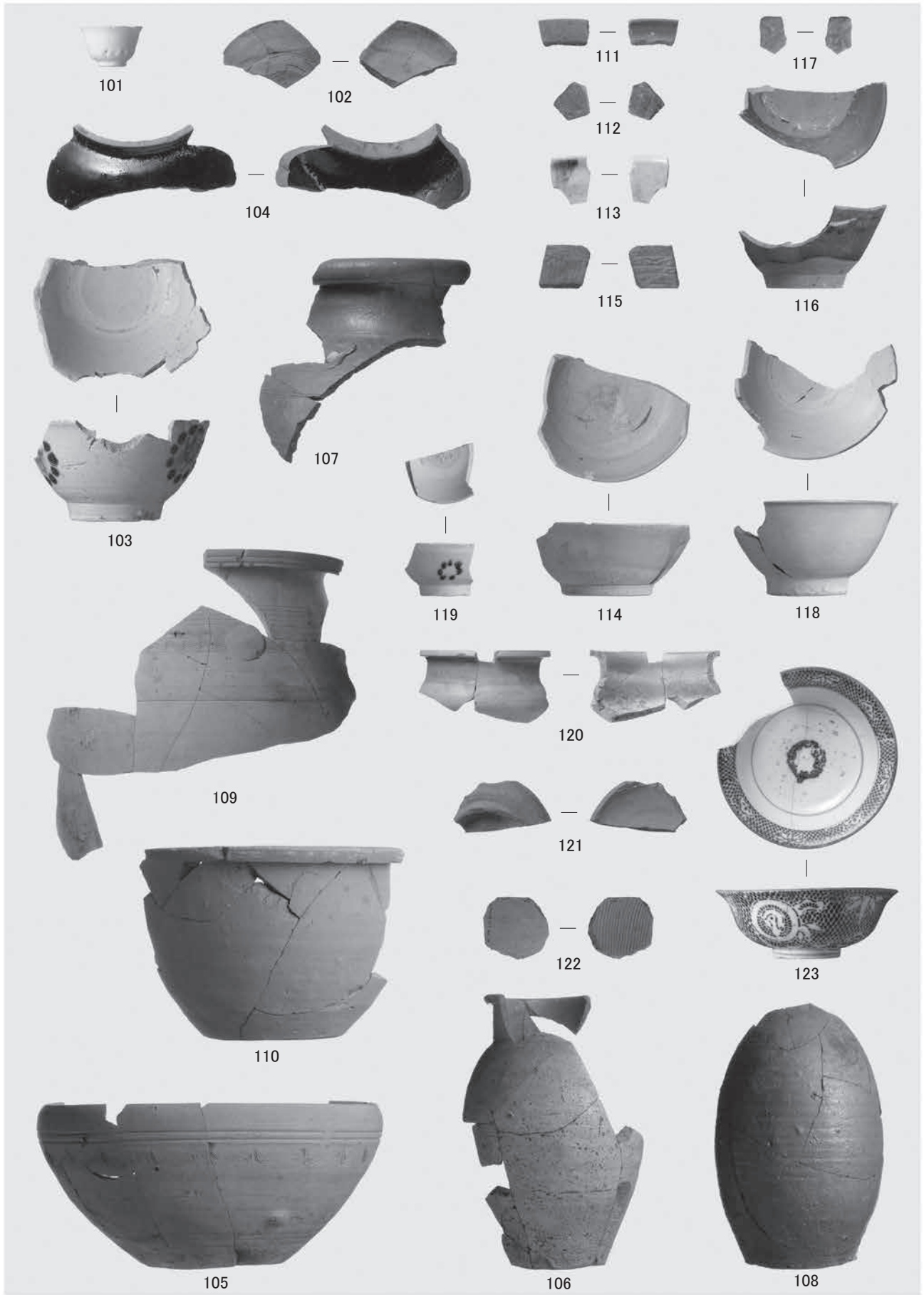
图版 31 区画4 出土遺物2 (I地区)



图版 32 区画4 出土遺物3 (I地区)



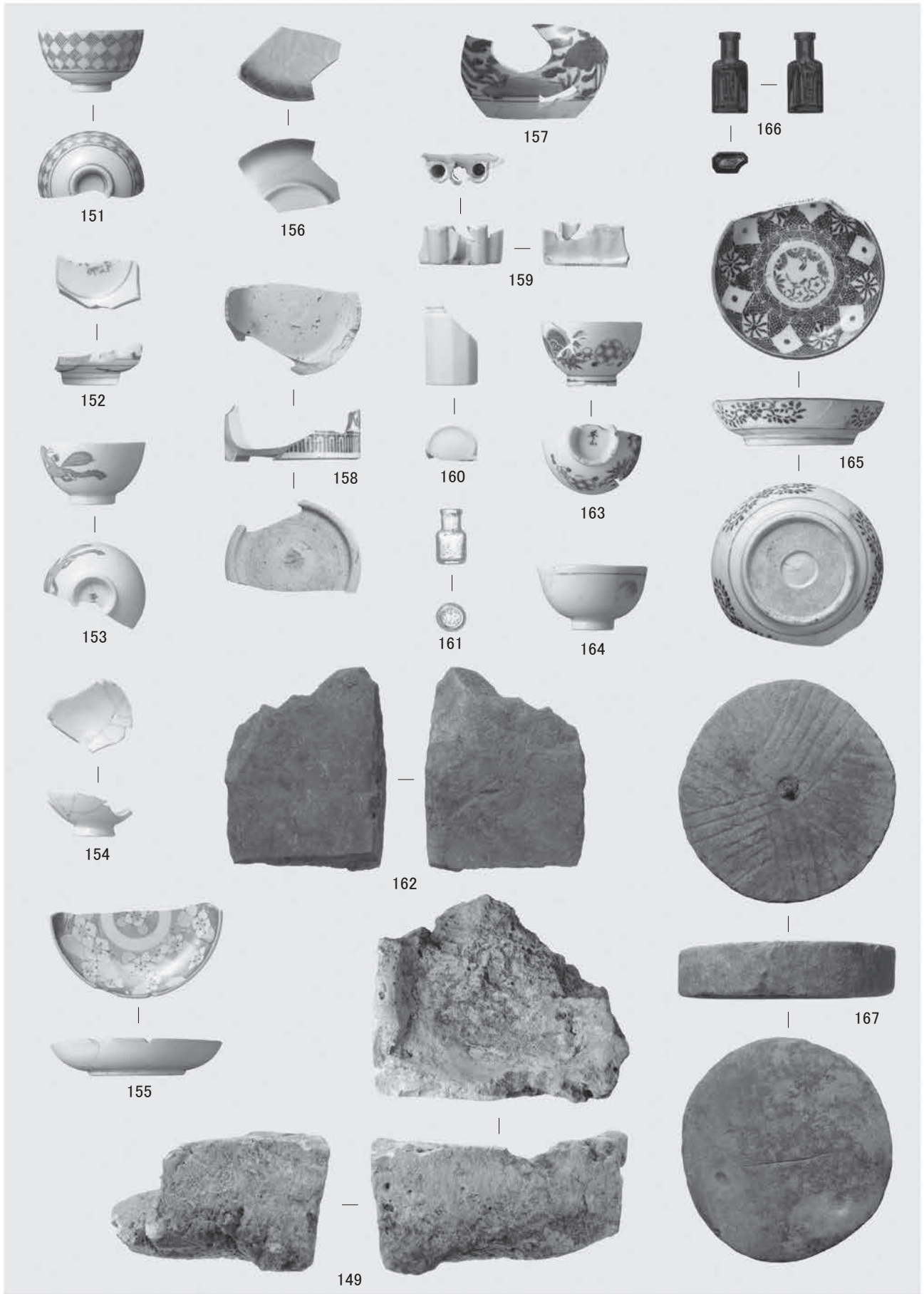
图版 33 区画4 出土遺物4 (I地区)



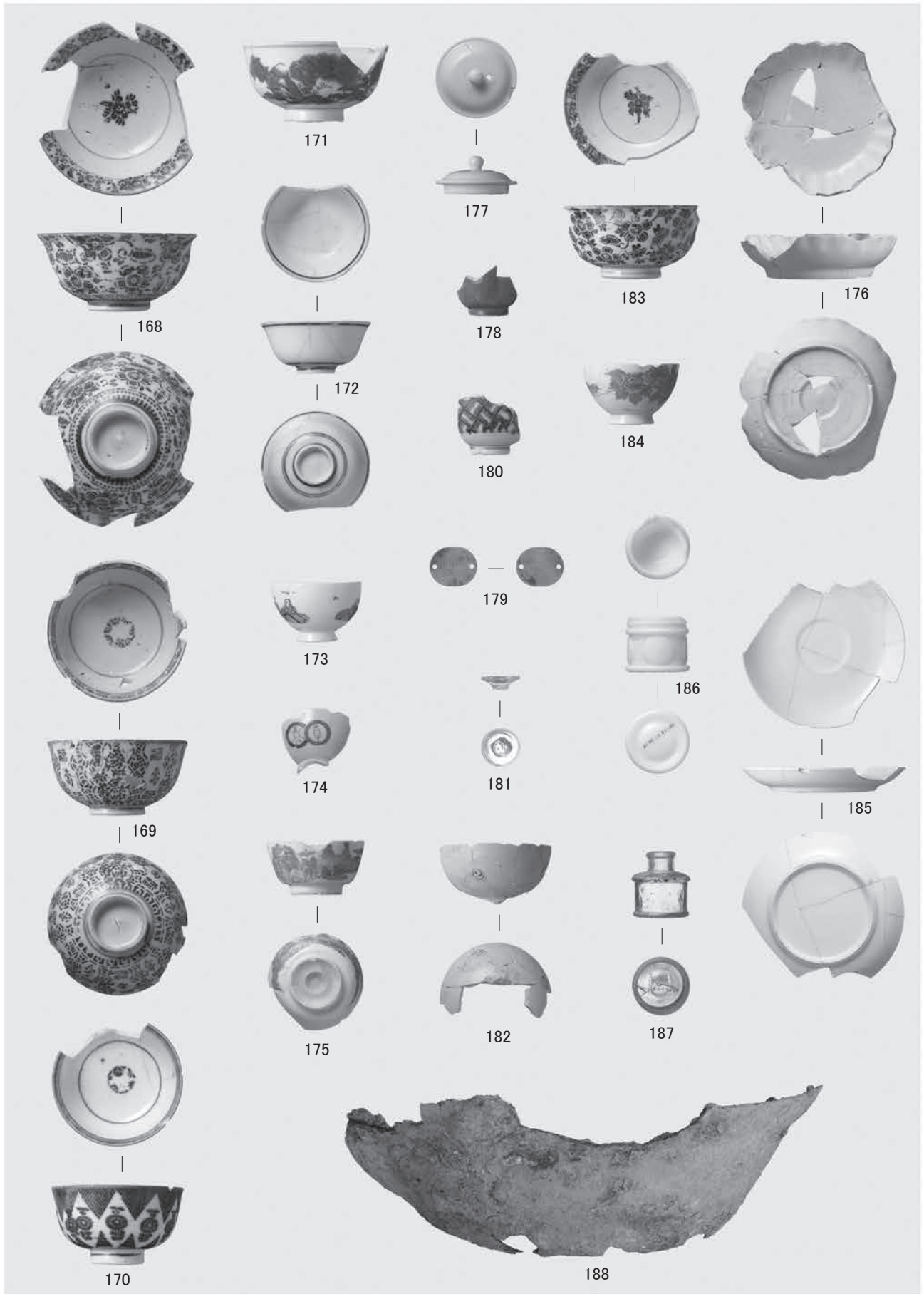
图版 34 区画4 出土遺物5 (I 地区)



图版 35 区画4 出土遺物6 (I地区)



图版 36 区画4 出土遺物7 (I 地区)



图版 37 区画4 出土遺物8 (I地区)

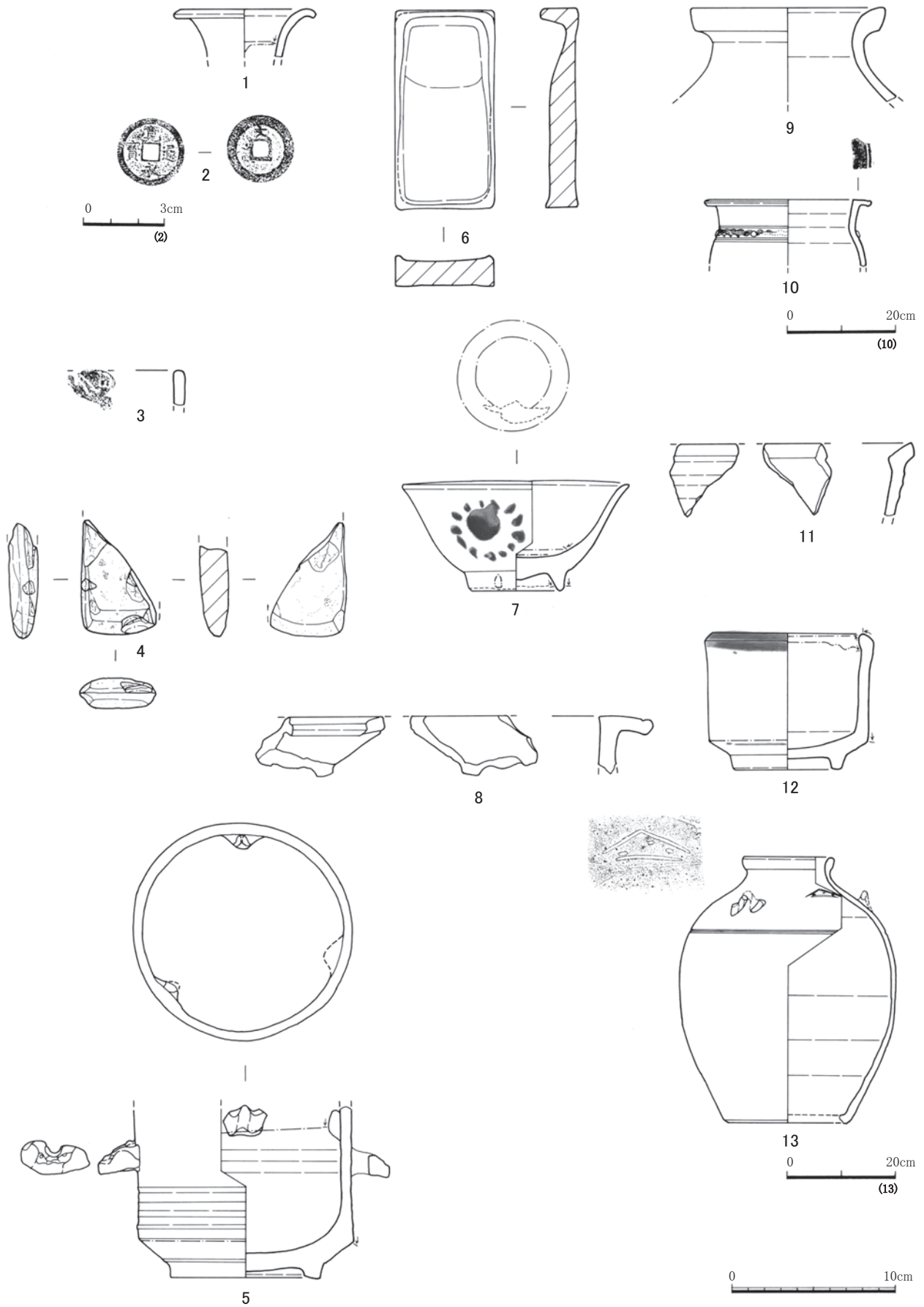
区画 5

瓦、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器を主とし、白磁、染付、本土産陶磁器、土器、陶質土器、石製品、円盤状製品、キセル、金属製品等、合計355点が出土した。第11表に特徴的な遺物の観察事項、第53表に遺物毎の出土状況を示す。

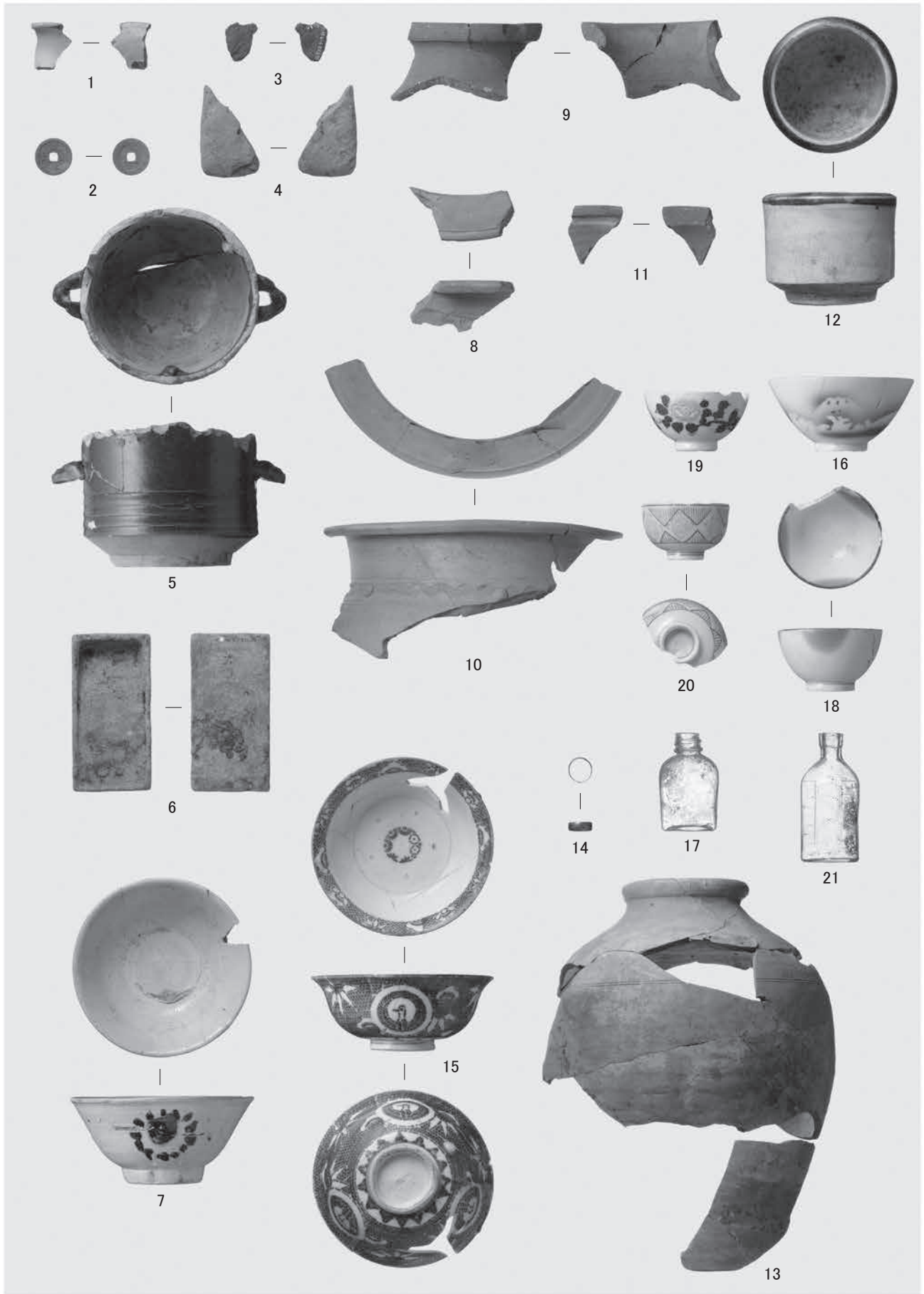
第11表 区画5出土遺物観察一覧(I地区)

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第74図 図版38	1	沖縄産 施釉陶器	瓶	口縁部	口径 8.6	器高 —	底径 —	内外面に施釉。素地はにぶい橙色で細かい。	F-9 SD10 1層
	2	銭貨	寛永通宝	—	外径 2.5	孔径 0.6	厚さ 0.1	背面に「文」の文字。江戸時代。重量3.2g。	G-9 SD10 1層
	3	土器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	石英などの細砂粒が混入。内外面ともにアバタ状を呈する。	F-9 SD12 3層
	4	石器	磨製 石斧	—	口径 —	器高 —	底径 —	表裏面に磨面。緑色千枚岩。重量73.7g。	F-8 SD12 3層
	5	沖縄産 施釉陶器	火炉	底部	口径 —	器高 —	底径 9.1	褐釉を内面口縁部下から腰部まで施釉。口縁内側に突起を貼付。胴部には横位に耳貼付。口縁部を意図的に割ったような細かい割れの痕跡が残る。素地は浅黄橙色。	F-8 SD12畦B 4層
	6	石製品	硯	—	口径 —	器高 —	底径 —	裏面は縁から約1cm幅を残して一段下がる。全体的に風化が著しい。砂岩製か。	F-8 SD12 3層
	7	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.9	器高 6.5	底径 5.8	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗布。素地はにぶい黄橙色。外面に呉須と褐釉で花文3つ。	E-8 SD33 1層
	8	沖縄産 無釉陶器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	素地はにぶい赤褐色。口唇部に1条の沈線。	E-8 SD33 1層
	9	沖縄産 無釉陶器	瓶	口縁部	口径 12.0	器高 —	底径 —	素地はにぶい赤褐色。口縁部下端は稜をもつ。	E-8 SD33 1層
	10	沖縄産 無釉陶器	甕	口縁部	口径 30.8	器高 —	底径 —	素地は明赤褐色。頸部はほぼ直立する。口唇部に1条の沈線。外面口縁部下部に沈線の波状文と貼付した丸文。	E-8 SD33 1層
	11	沖縄産 無釉陶器	火入	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	素地はにぶい赤褐色。口縁部下端は稜をもつ。内外面ともに轆轤痕が明瞭。	E-8 SD33 1層
	12	沖縄産 施釉陶器	火入	口～底部	口径 10.4	器高 8.3	底径 6.7	外面は化粧土の上から透明釉を腰部まで施釉し、口縁部には呉須を施釉。内面は露胎。素地は灰白色。腰部に目跡が確認される。	E-8 SK100 1層
	13	沖縄産 無釉陶器	壺	口～底部	口径 17.0	器高 48.7	底径 23.5	素地はにぶい赤褐色。外面胴上部に沈線。三角形の中に3つの点刻と、「三」の線刻あり。	E-8 SK100 1層+2層
図版38	14	青銅製品	指輪	—	径 a-1.8 b-1.7	厚さ 0.02	高さ 0.3~0.7	細板を環状に成形。板幅は端部が4mm、中央部にかけて板幅が7mmと大きくなる。	F-8 SD12 2層
	15	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径 13.7	器高 5.6	底径 4.0	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内底に5つの胎土目。型紙絵付け。	F-8 SD12畦A 2層
	16	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径 11.4	器高 5.5	底径 4.0	畳付は露胎。素地は白色で緻密。吹き絵。	F-8 SD12 3層
	17	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 1.8	器高 7.5	底径 a-4.0 b-2.1	色調は透明。	F-8 SD12 3層
	18	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 8.0	器高 4.6	底径 3.7	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内外面に文様。口唇部に銹釉。	E-8 SD33 3層
	19	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 8.2	器高 4.5	底径 3.1	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に花文。銅版転写。	E-8 SD33 1層
	20	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 7.4	器高 4.2	底径 2.8	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内外面に文様。外底に銘あり。ゴム判絵付け。	E-8 SD33 3層
	21	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 1.8	器高 9.8	底径 a-4.2 b-3.0	胴部に「60」の目盛がつく。色調は透明。	E-8 SD33 1層



第74图 区画5出土遗物(I地区)



图版 38 区画5 出土遺物 (I 地区)

区画 6

瓦、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器を主とし、青磁、白磁、染付、色絵、褐釉陶器、本土産陶磁器、土器、陶質土器、石製品、円盤状製品、キセル、金属製品等、合計825点が出土した。第12表に特徴的な遺物の観察事項、第54表に遺物毎の出土状況を示す。

第12表 区画6出土遺物観察一覧(I地区)a

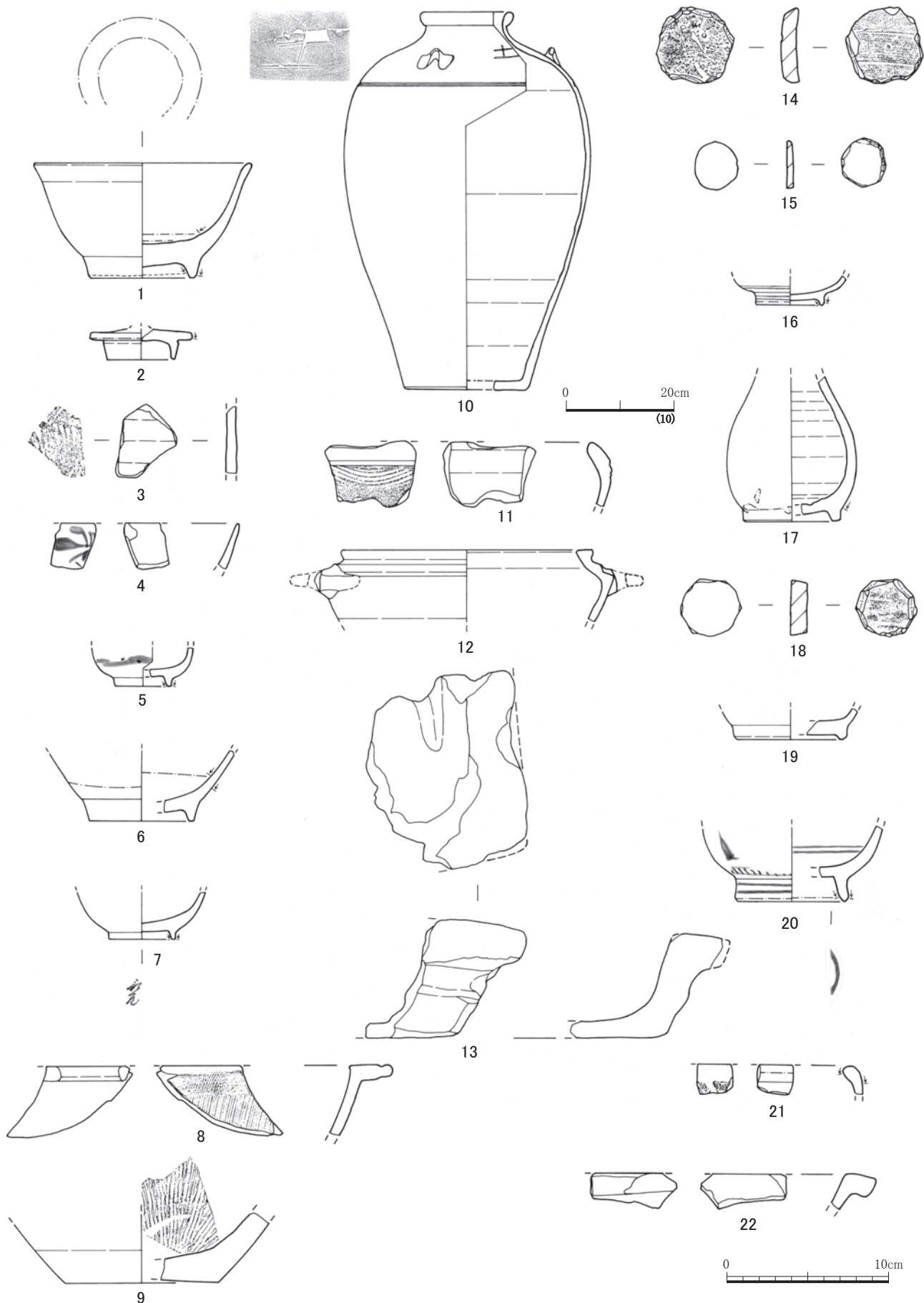
単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第75図 図版39	1	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.4	器高 7.0	底径 6.6	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。内底に目跡あり(アルミナ付着)。畳付にアルミナを塗布。素地は浅黄橙色。	G-9 SD7 2層
	2	沖縄産 施釉陶器	蓋	—	口径 6.2	器高 —	底径 4.1	外面に呉須を施釉。内面は露胎。素地は灰白色。	G-9 SD7 1層
	3	土器	器種不明	胴部	口径 —	器高 —	底径 —	砂粒を多く含む。表面に文様のような長方形を呈する連続した凹みがみられる。グスク土器か。	F-8 SD11 2層
	4	染付	碗	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	素地は灰白色で緻密。外面に花文。徳化窯産。	F-7 SD11 2層
	5	本土産磁器	染付 小碗	底部	口径 —	器高 —	底径 3.4	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に文様あり。	F-8 SD11 2層
	6	沖縄産 施釉陶器	碗	底部	口径 —	器高 —	底径 6.4	内外面の上半部に灰釉を単掛け。フィガキー手法。内底に目跡あり。畳付に砂粒が付着する。素地は灰白色。	F-7 SD11 2層
	7	沖縄産 施釉陶器	小碗	底部	口径 —	器高 —	底径 4.0	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。畳付は露胎。素地は白色。外底に銘あり。	F-8 SD11 2層
	8	沖縄産 無釉陶器	播鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	素地は明赤褐色。口縁外側に広げ口唇部を平坦にする。口唇部に1条の沈線。内面口縁部下に櫛目を施し、間を空けてさらにその下に櫛目を施す。	F-8 SD11 2層
	9	沖縄産 無釉陶器	播鉢	底部	口径 —	器高 —	底径 9.4	素地は明赤褐色。内面に櫛目を密に施す。	F-7 SD11 2層
	10	沖縄産 無釉陶器	壺	口～底部	口径 17.2	器高 69.5	底径 23.0	素地は明赤褐色。外面胴上部に沈線。横耳あり。「二」の線刻あり。	F-8 SD11 2層
	11	陶質土器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	素地は橙色。外面口縁部に沈線による波状文。内外面クロロナデ。	F-8 SD11 2層
	12	陶質土器	火炉	口縁部	口径 15.6	器高 —	底径 —	素地は橙色。外面胴部には横位に耳貼付。内外面クロロナデ。	F-8 SD11 2層
	13	沖縄産 無釉陶器	かまど	口～底部	口径 —	器高 —	底径 —	素地は橙色。外面口縁部下はナデによる横位の凹みがみられる。	F-8 SD11 2層
	14	円盤状製品	—	—	長径 4.6	厚さ 0.9	最大幅 4.7	沖縄産無釉陶器を素材としている。重量28.3g。	F-7 SD11 2層
	15	円盤状製品	—	—	長径 3.0	厚さ 0.4	最大幅 2.7	沖縄産施釉陶器を素材としている。重量4.4g。	F-8 SD11哇A 2層
	16	本土産磁器	染付 碗	底部	口径 —	器高 —	底径 4.1	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面腰部と高台に圏線。	F-8 SD13 1層
	17	沖縄産 施釉陶器	瓶	底部	口径 —	器高 —	底径 6.0	高台から外底及び内面は露胎。素地は灰白色で細かい。内面は轆轤痕が明瞭。	F-8 SD13 1層
	18	円盤状製品	—	—	長径 3.5	厚さ 1.0	最大幅 3.8	沖縄産無釉陶器を素材としている。重量21.2g。	F-8 SD13 1層
第75図 図版40	19	染付	碗	底部	口径 —	器高 —	底径 7.0	素地は淡黄色で細かい。高台は低め。福建・広東系。	F-8 SD32 2層
	20	染付	碗	底部	口径 —	器高 —	底径 7.0	畳付は露胎。素地は灰白色で緻密。外面に文様あり。高台、外底、内底に圏線。徳化窯産。	F-8 SD32 2層
	21	沖縄産 施釉陶器	火入	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	口縁部に褐釉を施釉。外面口縁部下には斜位の刻みによる文様。素地は灰黄色で細かい。	E-8 SD32 2層
	22	沖縄産 無釉陶器	播鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	素地はにぶい赤褐色。	E-8 SD32 2層

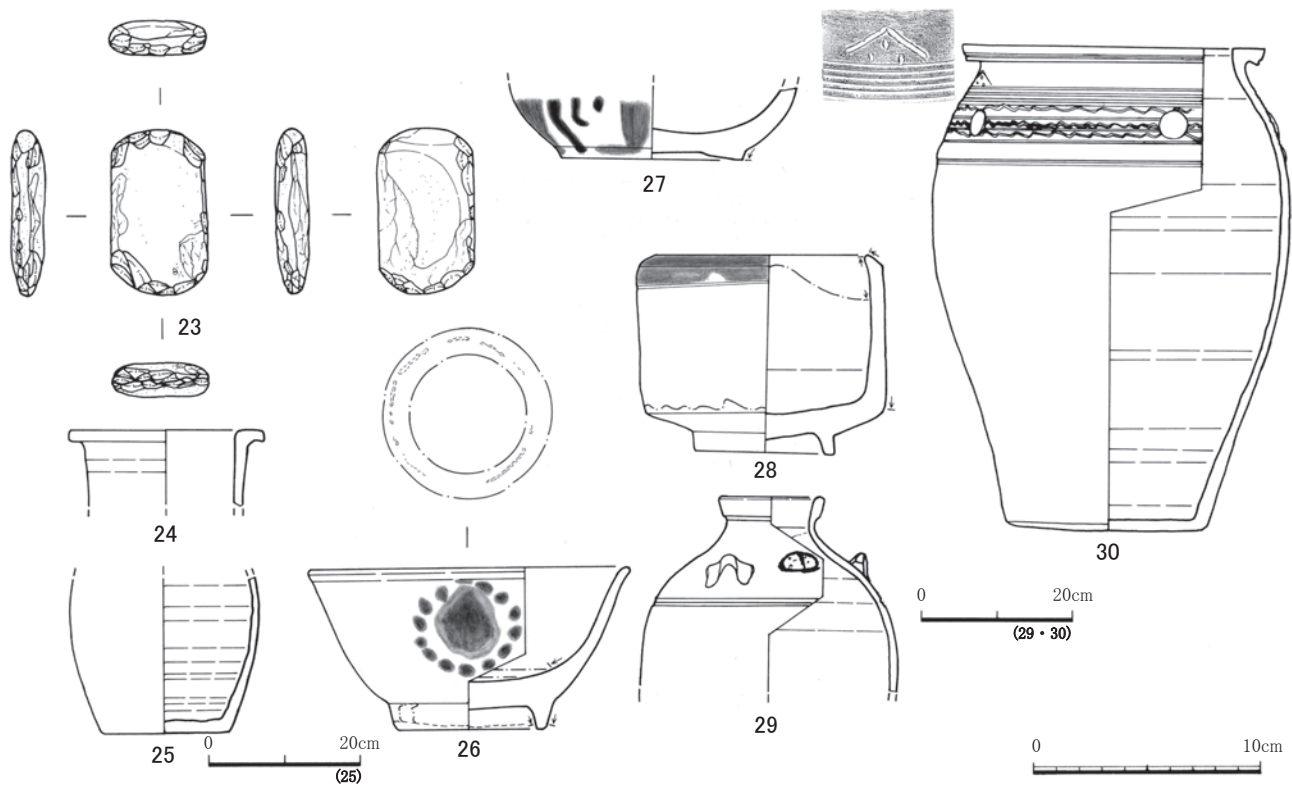
第12表 区画6出土遺物観察一覧(I地区)b

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第76図 図版40	23	石器	石斧	—	口径 —	器高 —	底径 —	前面に磨面。刃部に刃こぼれがみられる。緑色千枚岩。重量87.6g。	G-8 SK47内 2層
	24	沖縄産 無釉陶器	壺	口縁部	口径	器高	底径	口縁外側に広げ口唇部を平坦にする。素地はにぶい赤褐色。	G-8 SK47内 2層
					8.5	—	—		
	25	沖縄産 無釉陶器	壺	底部	口径	器高	底径	素地はにぶい赤褐色。外面に沈線による波状文。内外面ともに轆轤痕が明瞭。	G-8 SK47内 2層
					—	—	16.6		
	26	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径	器高	底径	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地はにぶい黄褐色。外面に呉須と褐釉で花文3つ。	G-7 SK57 1層
					14.1	7.0	6.3		
	27	沖縄産 施釉陶器	酒器	底部	口径	器高	底径	素地は灰白色。畳付は幅が広く、中心に向かって斜めを呈する。高台は低い。	D-8 SK57 1層
—					—	8.0			
28	沖縄産 施釉陶器	火入	口～底部	口径	器高	底径	内外面に化粧土を施した後、外面に透明釉、口縁部に呉須を施す。口縁部下には沈線が1条巡る。素地はにぶい赤褐色。	G-7 SK57 1層	
				10.8	8.8	6.1			
29	沖縄産 無釉陶器	壺	口縁部	口径	器高	底径	素地は明赤褐色。外面胴上部に沈線。横耳を3つ貼付。墨書で、円の中に垂直方向の1本線を描く。	D-8 SK57 1層	
				14.0	—	—			
30	沖縄産 無釉陶器	甕	口～底部	口径	器高	底径	素地は明赤褐色。外面頸部に沈線、その下に波状沈線と貼付した丸文、さらにその下に1条の凸帯を貼付。	G-8 SK47内 2層	
				39.9	64.6	26.6			
図版40	31	本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径	器高	底径	畳付から外底は露胎。素地は白色で緻密。口縁部下部や腰部に稜をもつ。内面口縁部に文様。	G-9 SD7 2層
					6.4	2.1	2.8		
	32	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径	器高	底径	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に型紙絵付けによる文様。口唇部に銹釉。	G-9 SD7 2層
					10.8	2.1	6.6		
	33	鉄製品	蹄鉄	—	長さ	—	—	上面接蹄部に留め部。重量201.0g。	G-9 SD7 2層
					11.3	—	—		
	34	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径	器高	底径	畳付は露胎。素地は白色で細かい。内底に5つの胎土目。型紙絵付け。	F-8 SD11 2層
					13.6	5.9	4.6		
	35	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に花文。銅版転写。	F-8 SD11畦A 2層
					6.8	4.2	3.1		
	36	本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径	器高	底径	畳付は露胎。素地は白色で緻密。	F-7 SD11 2層
					6.5	2.7	2.6		
	37	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径	器高	底径	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に文様。口唇部に銹釉。銅版転写。	F-8 SD11 2層
					12.9	2.6	7.6		
38	ガラス製品	瓶	口～底部	口径	器高	底径	色調は透明。	F-8 SD11 2層	
				1.4	5.5	2.2			
39	ガラス製品	浣腸?	口～底部	口径	器高	底径	色調は透明。	F-8 SD11 2層	
				0.7	—	—			
40	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径	器高	底径	畳付は露胎。素地は白色で細かい。内底に2つの胎土目が確認される。型紙絵付け。	G-8 SK47内 2層	
				13.6	5.3	4.4			
41	本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径	器高	底径	畳付は露胎。素地は白色で緻密。高台形状が花びら(桜)を呈する。口唇部を淡いピンクに色づける。	G-8 SK47内 2層	
				5.6	2.9	2.4			
42	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径	器高	底径	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内底に5つの胎土目。型紙絵付け。	G-7 SK57 1層	
				13.7	6.2	4.7			
43	瓦	明朝系 丸瓦	—	口径	器高	底径	器表面は風化が著しい。色調は灰色。	D-8 SK57 1層	
				—	—	—			
図版41	鉄製品	滑車	—	長さa	長さb	—	重量2,960g。	G-9 SE4 1層	
				29.5	13.1	—			
45	鉄製品	鉄鍋	口～底部	口径	器高	底径	大型鍋。口縁部若干くの字状に屈曲。錆による剥離顕著。	G-8 SK57 1層	
				69.0	25.5	—			



第 75 图 区画 6 出土遗物 1 (I 地区)



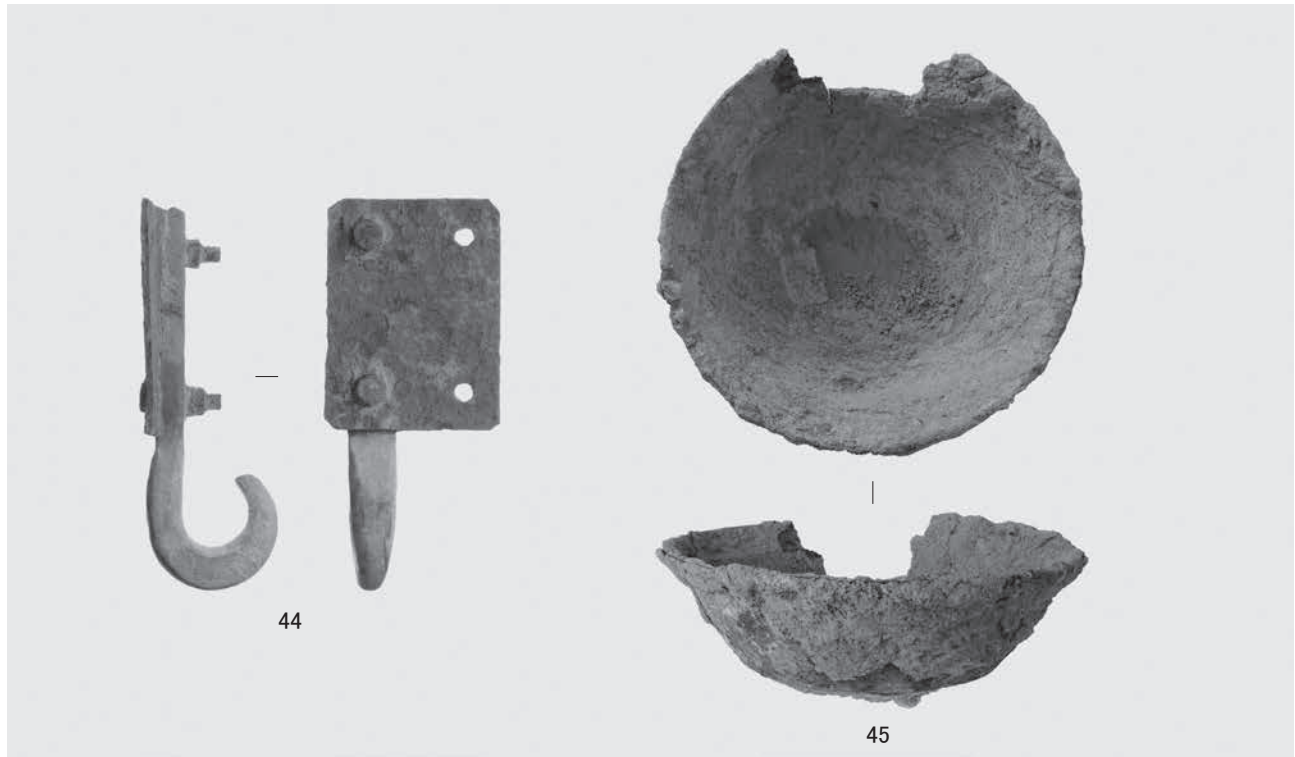
第 76 图 区画6 出土遺物2 (I 地区)



图版 39 区画6 出土遺物1 (I 地区)



图版 40 区画6 出土遺物2 (I地区)



図版 41 区画6 出土遺物3 (I地区)

区画 7

青磁、白磁、染付、本土産陶磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、瓦、金属製品等、合計808点検出している。G-8グリッドのSK103からは位牌が出土している。位牌検出時は木胎が消失し漆膜表面のみ残存する状態であった。漆膜は非常に薄く脆弱であったため、(株)文化財サービスに委託し周囲の土ごとブロックとして取り上げ、洗浄から強化処理、接合など保存処理作業を実施した。

第13表に特徴的な遺物の観察事項、第55表に遺物毎の出土状況を示す。

第13表 区画7出土遺物観察一覧(I地区)a

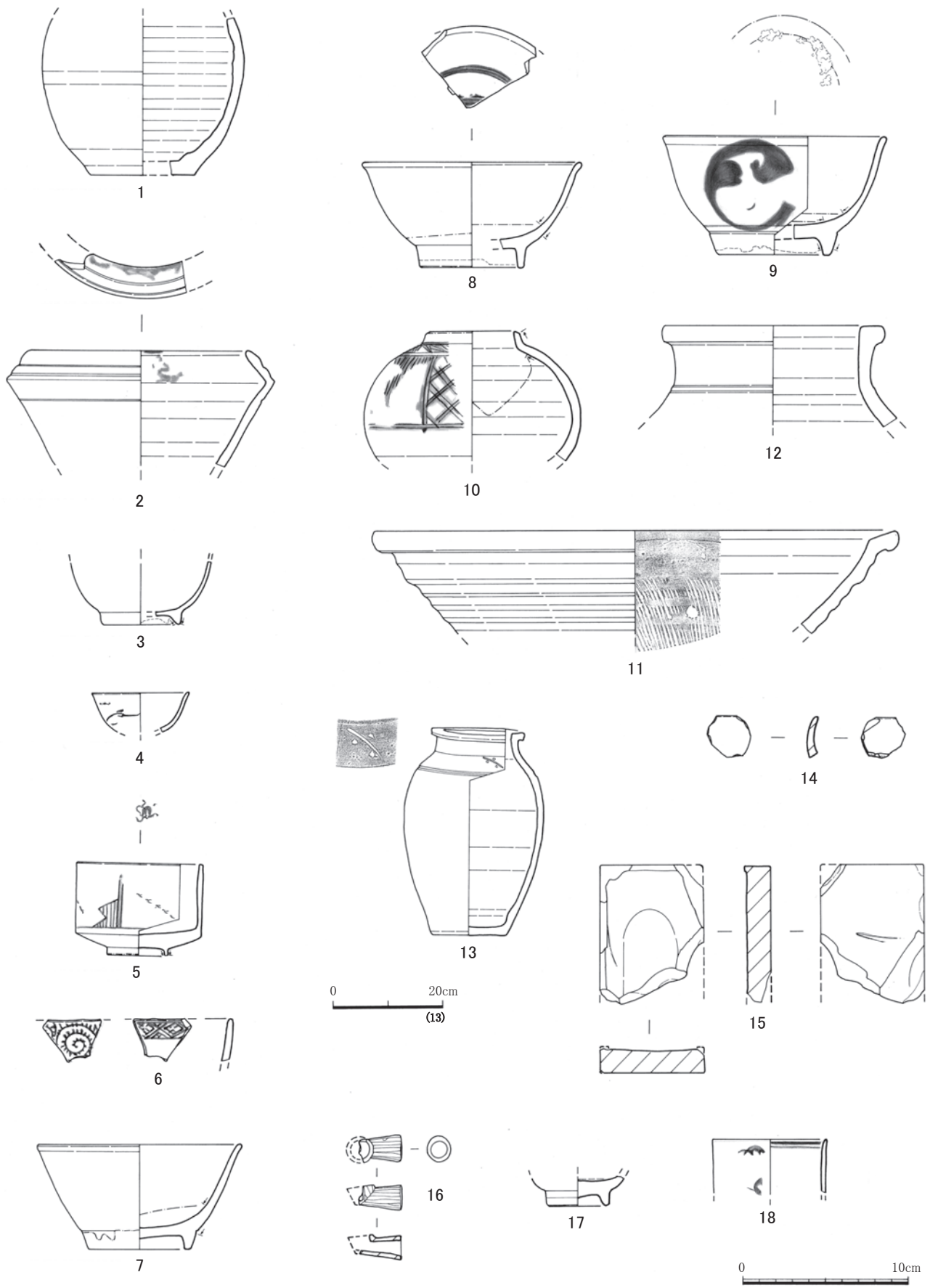
単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第77図 図版42	1	沖縄産 無釉陶器	瓶	底部	口径 —	器高 —	底径 6.4	内面は青灰色。外面及び素地は赤褐色で緻密。	H-7・8 SD6 2層
	2	陶質土器	火炉	口縁部	口径 13.0	器高 —	底径 —	素地は橙色で軟質。外面に沈線。口唇部に一部煤が残る。	H-7 SD6 1層
	3	白磁	碗	底部	口径 —	器高 —	底径 4.6	畳付は露胎。素地は白色で緻密。畳付に砂目付着。徳化窯産。	G-7 SD18 2層
	4	色絵	小碗	口縁部	口径 5.9	器高 —	底径 —	端反口縁。素地は白色で緻密。外面に文様。	G-7 SD18 2層
	5	本土産磁器	染付 小碗	口～底部	口径 7.7	器高 5.6	底径 3.7	腰折れの小碗。畳付釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外面に鳥文、内底に文様。	G-7 SD18 2層
	6	本土産磁器	染付 小碗	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	素地は灰白色で緻密。外面に蛸唐草文、内面に四方禰文。	G-7 SD18 2層
	7	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 12.4	器高 6.3	底径 6.2	灰釉を内胴下部～高台際まで施釉。素地は灰白色で細かい。内底に重ね焼きのアルミナ痕。	G-7 SD18 2層
	8	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.4	器高 6.4	底径 6.4	黒釉を内面～外面胴下部まで施釉後、蛇の目釉剥ぎ。素地は灰白色で細かい。高台にアルミナ痕。	G-7 SD18畦 2層
	9	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.6	器高 7.2	底径 6.8	全面に白化粧と透明釉を施釉後、内底を蛇の目、畳付を釉剥ぎ。素地は灰黄色で細かい。外面に巴文か。内底と畳付にアルミナ痕。	G-7 SD18 2層

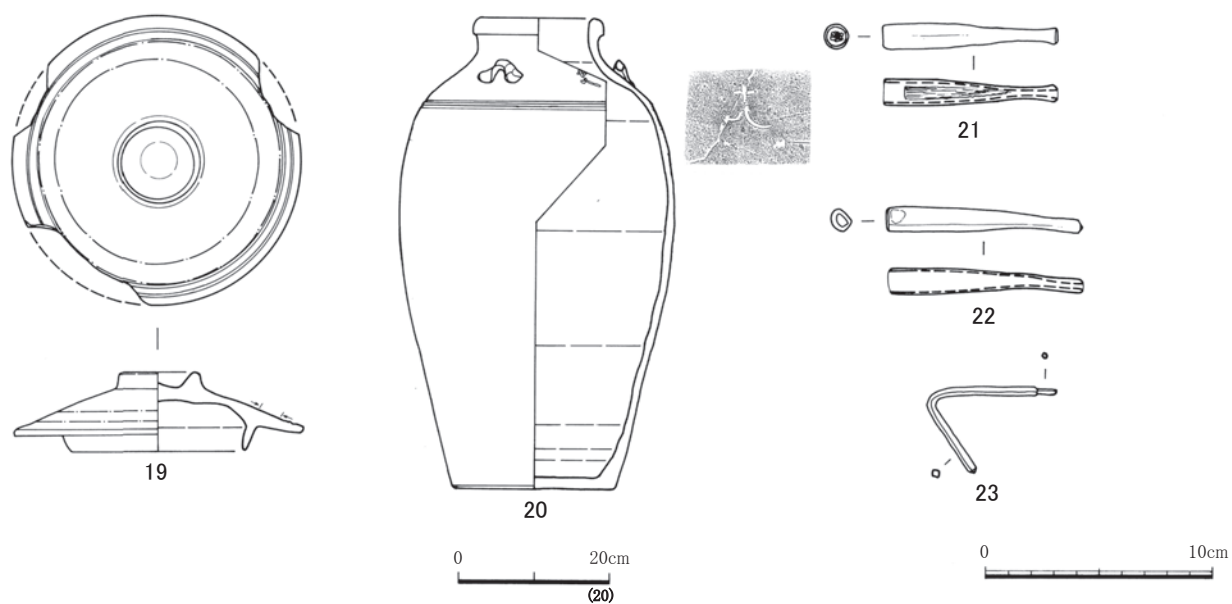
第13表 区画7出土遺物観察一覧(I地区)b

単位:cm

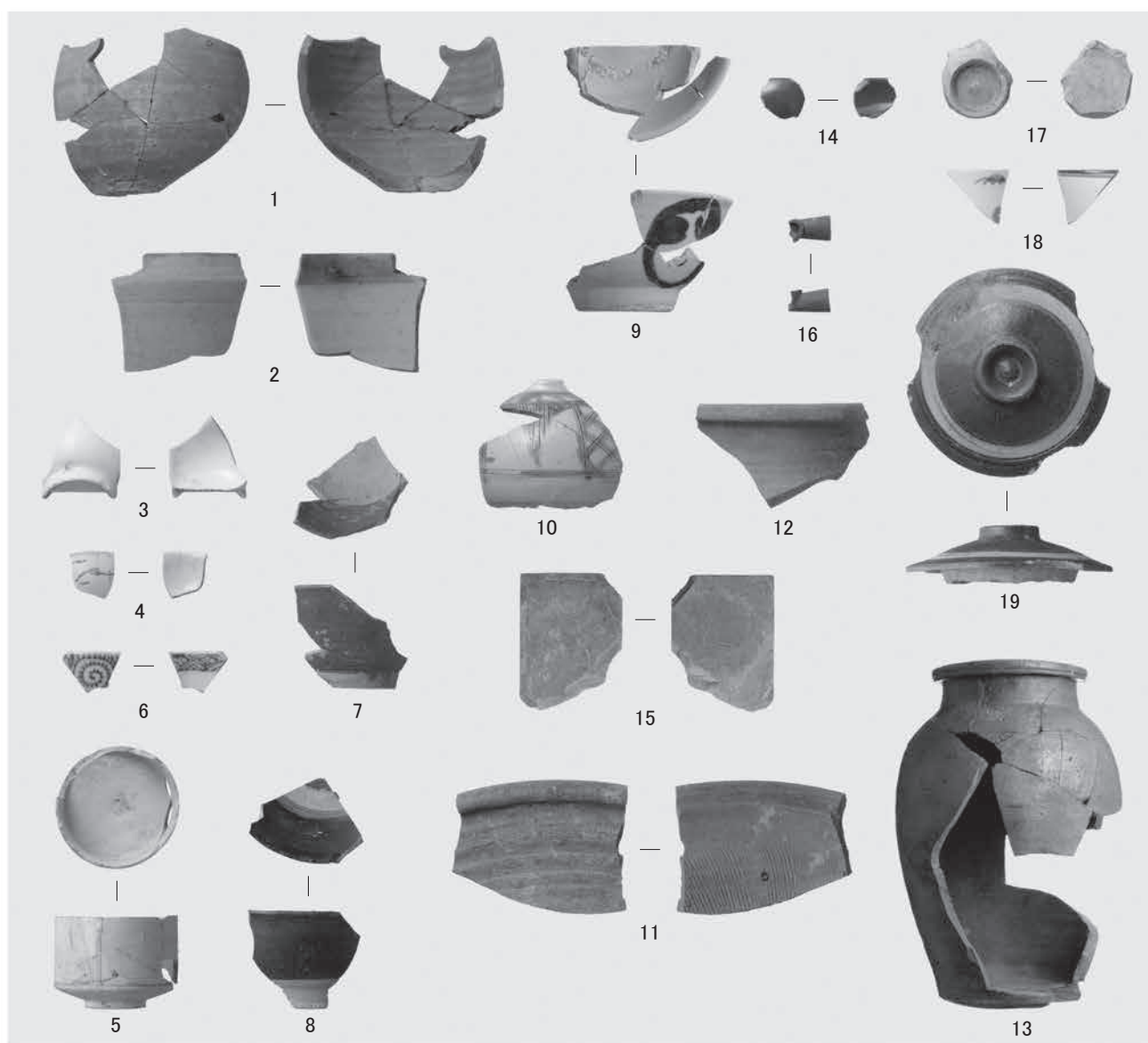
挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第77図 図版42	10	沖縄産 施釉陶器	急須	口縁部	口径 5.7	器高 —	底径 —	全面に白化粧後、内外面に透明釉を施釉。口唇部～内面口縁部まで露胎。素地は灰白色で細かい。外面に線彫りによる文様。	G-7 SD18 2層
	11	沖縄産 無釉陶器	播鉢	口縁部	口径 32.0	器高 —	底径 —	くの字状口縁。櫛目は間隔密。器色・素地ともに赤褐色で緻密。	G-7 SD18 2層
	12	沖縄産 無釉陶器	壺	口縁部	口径 13.6	器高 —	底径 —	口唇部は方形。器色・素地ともに赤褐色で緻密。	G-7 SD18 2層
	13	沖縄産 無釉陶器	壺	口～底部	口径 17.0	器高 37.6	底径 13.0	口唇部は方形。器色・素地ともに赤褐色で緻密。口唇部及び胴部に沈線。胴部上位に窯印線刻。口唇部に泥釉。	G-7 SD18 2層
	14	円盤状製品	—	—	長径 2.5	厚さ 0.6	最大幅 2.2	素材は本土産近現代陶磁器胴部片。重量4.5g。	G-7 SD18 1層
	15	石製品	硯	—	口径 —	器高 —	底径 —	長方硯。全面に線条痕。重量140.3g。	G-7 SD18 2層
	16	煙管	—	雁首	火皿径 1.6	長さ 3.3	羅字接続部径 1.4、1.6	沖縄産無釉陶器製。面取り細かく縦断面丸形。重量5.3g。	H-8 SK43 3層
	17	白磁	小碗	底部	口径 —	器高 —	底径 3.8	外底及び内底は露胎。素地は淡黄色で緻密。	G・H-8 SK73 2層
	18	本土産磁器	染付 小碗	口縁部	口径 7.0	器高 —	底径 —	素地は灰白色で細かい。外面に文様。	H-7 SP67 1層
第78図 図版42	19	沖縄産 施釉陶器	蓋	—	口径 12.7	器高 3.5	底径 7.6	外面の甲蓋端部まで黒釉を施釉後、甲上部を蛇の目釉剥ぎ。素地は灰白色で緻密。	G-8 SK103 1層
第78図 図版43	20	沖縄産 無釉陶器	壺	口～底部	口径 17.2	器高 61.7	底径 21.6	口唇部は玉縁状。器色は外面暗赤褐色、素地は赤褐色で緻密。胴部に沈線。胴部上位に「十八」窯印。	G-8 SK103 1層
	21	煙管	—	吸口	接続部径 1.0	長さ 7.7	吸口径 0.7	青銅製。側面に接合部。羅字残存。重量12.5g。	G-8 SU1 1層
	22	煙管	—	吸口	接続部径 0.8、1.1	長さ 8.6	吸口径 0.7	青銅製。側面に接合部。重量10.2g。	H-7 SX2 1層
	23	青銅製品	簪	竿	竿長 8.4	竿幅 0.4	ムディ幅 0.3	くの字に曲がる。茎断面4角。重量6.6g。	H-7 SY1 A1レンチ 1層
図版43	24	鉄製品	羽釜	口縁部	口径 19.7	器高 —	底径 —	底部欠損。錆により剥離。重量1.7kg。	G-7 SD18 2層
	25	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径 12.7	器高 4.6	底径 5.7	全面施釉後に畳付を釉剥ぎ。素地は灰白色で緻密。型紙摺りで丸文。	G-7 SD18 2層
	26	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径 11.4	器高 6.1	底径 3.8	全面施釉後に畳付を釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外面に千鳥文。外底に「岐74」銘。	G-7 SD18 2層
	27	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 8.0	器高 3.1	底径 5.1	全面施釉後に畳付を釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外面に胴版転写で草花文。外底に「岐311」銘。	G-7 SD18 2層
	28	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 7.0	器高 4.3	底径 3.2	全面施釉後に畳付を釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外面に胴版転写による文様。	G-7 SD18 2層
	29	本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径 5.6	器高 3.0	底径 2.1	全面施釉後に畳付を釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外面に陰刻で文字+陽刻による草花文。	G-7 SD18 2層
	30	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径 13.1	器高 2.7	底径 7.4	全面施釉後に畳付を釉剥ぎ。素地は白色で緻密。内面に胴版転写による文様。	G-7 SD18 1層
	31	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径 11.0	器高 3.0	底径 10.8	型成形で板状粘土貼り付けにより枠を区画する。口唇部、外底は露胎。	G-7 SD18 2層
	32	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 5.0	器高 3.7	底径 5.4	底面に文様。色調は淡い緑。栓はキャップか。	G-7 SD18 1層
	33	本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径 6.5	器高 2.5	底径 2.9	畳付～外底露胎。外面に文様。	G-8 SK103 1層
	34	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径 13.1	器高 2.7	底径 7.3	全面施釉後に畳付を釉剥ぎ。素地は白色で緻密。内面に胴版転写による文様。	G-8 SK103 1層
図版43 (図版44)	35	位牌	—	—	口径 —	器高 —	底径 —	位牌札の破片で漆膜表面のみ残存。札は中央に太めの札を配して左右に4枚、計9列の札が上下に並ぶ。漆表面に金色で文字。台座部分には金色で文様。	G-8 SK103 1層
図版43	36	石製品	香炉	—	長さ —	厚さ 9.0	高さ 12.5	上面に窪み。全面に整形痕。重量3.9kg。	G-8 SK103 1層
	37	鉄製品	包丁?	—	長さa 23.0	長さb 4.2	—	柄は一部残る。重量72.2g。	G-8 SK103 1層



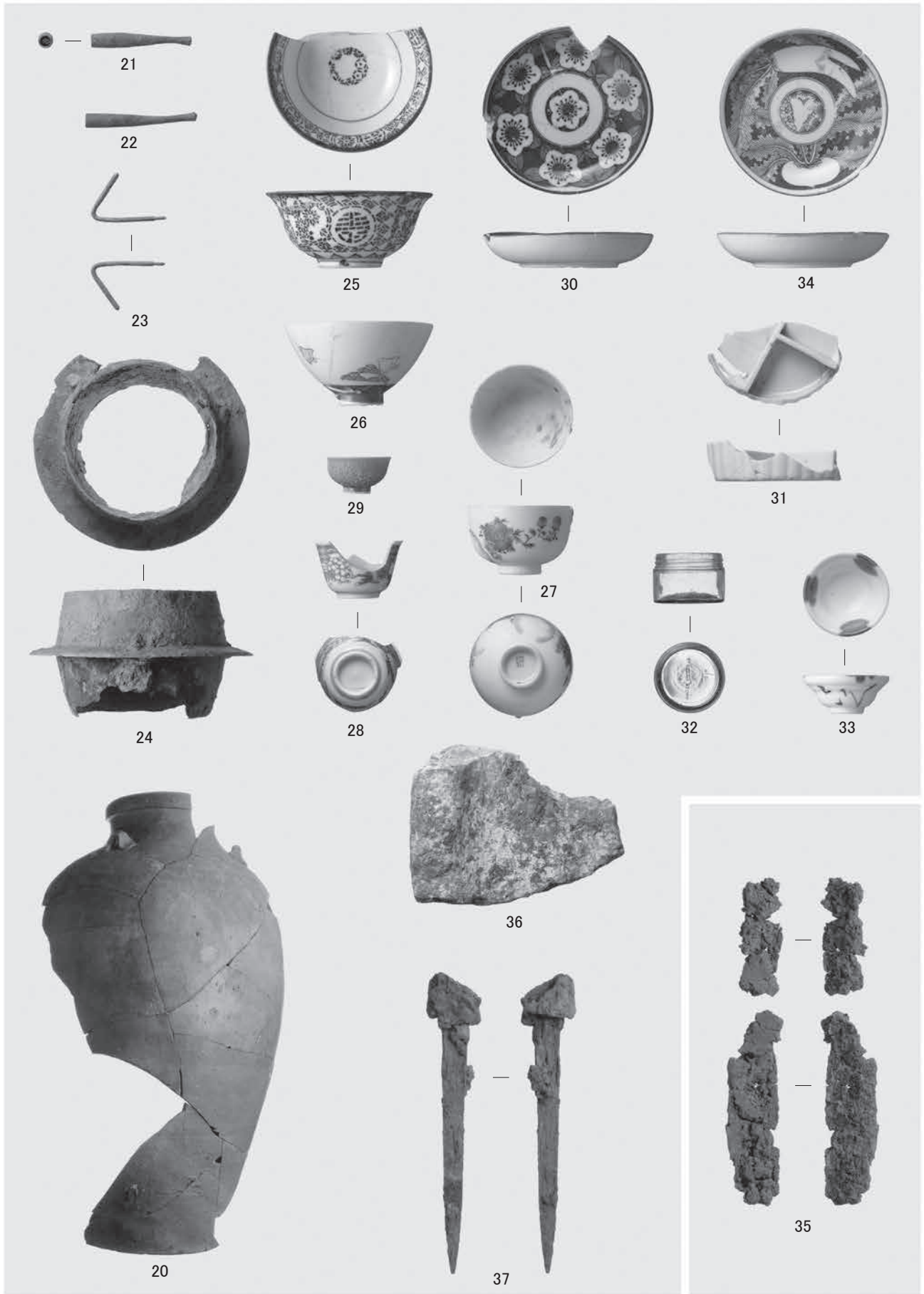
第 77 图 区画 7 出土遺物 1 (I 地区)



第 78 图 区画7 出土遺物2(I 地区)



图版 42 区画7 出土遺物1 (I 地区)



图版 43 区画7 出土遺物2 (I地区)



(图版 43-35)

图版 44 区画7 出土遺物3 位牌 (I 地区)

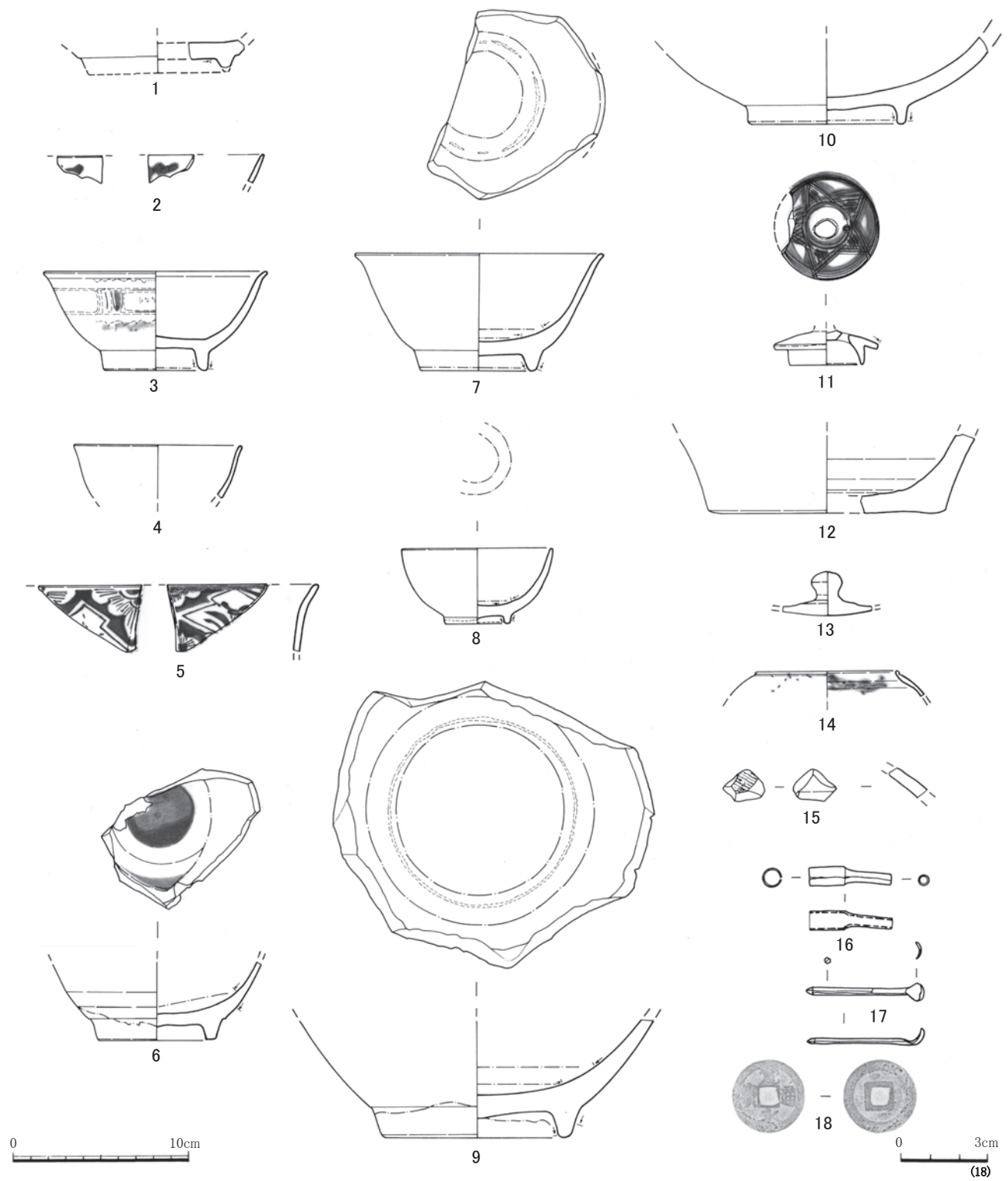
区画 8

白磁、染付、本土産陶磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、瓦、金属製品等、合計513点検出している。第14表に特徴的な遺物の観察事項、第56表に遺物毎の出土状況を示す。

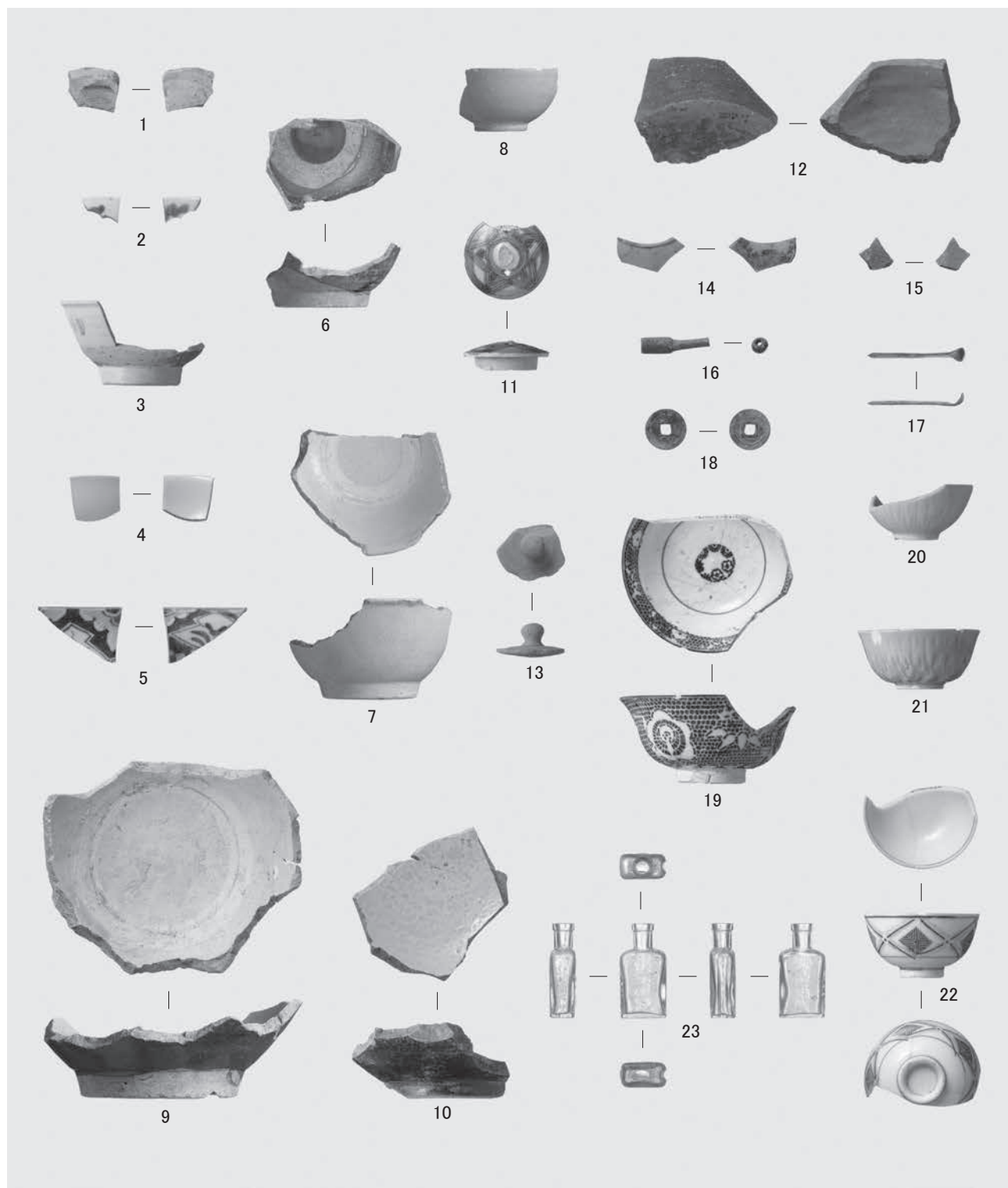
第14表 区画8出土遺物観察一覧(I地区)

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第79図 図版45	1	染付	碗	底部	口径	器高	底径	豊付～高台内露胎。素地は黄白色で緻密。	H-9 SD2 1層
					—	—	—		
	2	染付	皿	口縁部	口径	器高	底径	内外面施釉。素地は灰白色で緻密。内外面に文様。	H-9 SD2 1層
					—	—	—		
	3	色絵	碗	口～底部	口径	器高	底径	全面施釉後に豊付釉剥ぎ。素地は灰白色で緻密。外面に文様。	H-8 SD2 2層
					12.8	5.7	5.8		
	4	本土産磁器	小碗	口縁部	口径	器高	底径	外面緑灰色釉、内面透明釉で掛け分け。素地は灰白色で緻密。	H-9 SD2 1層
					9.6	—	—		
	5	本土産磁器	染付鉢	口縁部	口径	器高	底径	内外面施釉。素地は灰白色で緻密。内外面に文様で草花文。	H-8 SD2 2層
					—	—	—		
	6	沖縄産施釉陶器	碗	底部	口径	器高	底径	褐色釉を内底及び内胴下部～高台際まで施釉。素地は灰白色で細かい。内底に重ね焼きのアルミナ痕。	H-8 SD2 2層
					—	—	6.6		
	7	沖縄産施釉陶器	碗	口～底部	口径	器高	底径	全面に白化粧と透明釉を施釉後、内底を蛇の目、豊付を釉剥ぎ。素地は灰黄色で細かい。内底に重ね焼きのアルミナ痕。	H-8 SD2 4層
					14.4	6.8	6.6		
	8	沖縄産施釉陶器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	全面施釉後、内底を蛇の目、豊付を釉剥ぎ。素地は灰白色で細かい。	H-8 SD2 2層
					8.6	4.3	3.8		
	9	沖縄産施釉陶器	鉢	底部	口径	器高	底径	外面黒釉、内面白化粧後に透明釉で掛け分け。内底を蛇の目釉剥ぎ、高台露胎。素地は灰黄色で細かい。	H-8 SD2 2層B
					—	—	11.0		
10	沖縄産施釉陶器	鉢	底部	口径	器高	底径	外面黒釉、内面白化粧後に透明釉で掛け分け。素地は灰黄色で細かい。	H-9 SD2 2層	
				—	—	9.0			
11	沖縄産施釉陶器	蓋	—	口径	器高	底径	全面白化粧後、外面甲蓋端部まで施釉。素地は淡黄色で細かい。上面に線刻で星の文様。撮み器部に0.3cmの孔。	H-9 SD2 2層	
				5.8	—	4.2			
12	沖縄産無釉陶器	壺	底部	口径	器高	底径	内面輪轆痕明瞭。器色は暗青灰色、素地は暗赤褐色で緻密。	H-9 SD2 1層	
				—	—	13.6			
13	陶質土器	蓋	—	口径	器高	底径	素地は橙色で軟質。	H-9 SD2 2層	
				5.1	2.5	—			
14	陶質土器	土瓶	口縁部	口径	器高	底径	頸部は短い。薄手。素地は橙色で軟質。一部煤付着。	H-9 SD2 2層	
				8.0	—	—			
15	カムイヤキ	壺	胴部	口径	器高	底径	胴部片。外面に叩き目痕、内面に回転ナデ。胎土は暗赤褐色。	H-9 SD5 2層C	
				—	—	—			
16	煙管	—	吸口	接続部径	長さ	吸口径	青銅製。側面に接合部。重量7.9g。	H-9 SD5 1層	
				1.1 0.6	4.7	0.6			
17	青銅製品	簪	—	全長	—	—	匙状。茎断面六角。重量4.4g。	G-9 SP11 1層	
				6.8	—	—			
18	銭貨	寛永通宝	—	外径	孔径	厚さ	新寛永か。銭文が潰れる。重量3.1g。	G-9 SP86 1層	
				2.5	0.6	0.1			
図版45	19	本土産近現代磁器	碗	口～底部	口径	器高	底径	全面施釉後に豊付を釉剥ぎ。素地は灰白色で緻密。型紙摺りで鶴丸文。内底に目跡。	H-9 SD2 2層
					12.8	5.8	4.8		
	20	本土産近現代磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	クロム青磁。外面に飛跑。高台内抉り。素地は灰白色で緻密。	H-9 SD2 2層E
					7.8	3.8	3.0		
	21	本土産近現代磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	クロム青磁。外面に飛跑。素地は灰白色で緻密。	H-8 SD2 2層
				8.6	4.1	3.3			
22	本土産近現代磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	全面施釉後に豊付を釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外面に胴版転写による文様。	H-9 SD2 2層	
				8.2	4.6	3.0			
23	ガラス製品	瓶	口～底部	口径	器高	底径	胴部前面に「快治液」、背面に「生盛薬劑」、左側面に「スリグスリ」文字。色調は透明。栓はキャップか。	H-8 SD2 2層	
				1.5	6.6	a-3.1 b-1.7			



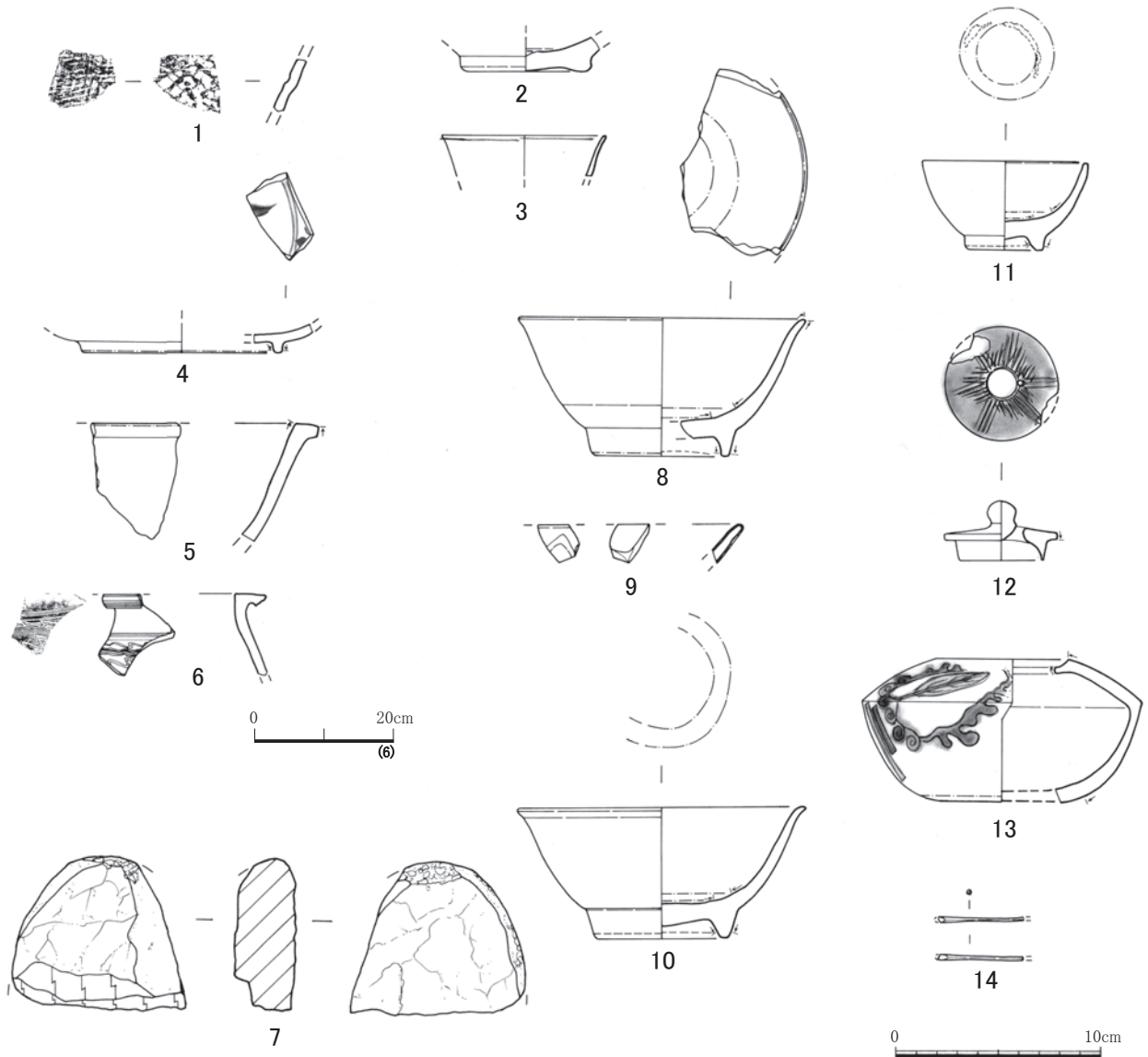
第 79 图 区画8 出土遺物 (I 地区)



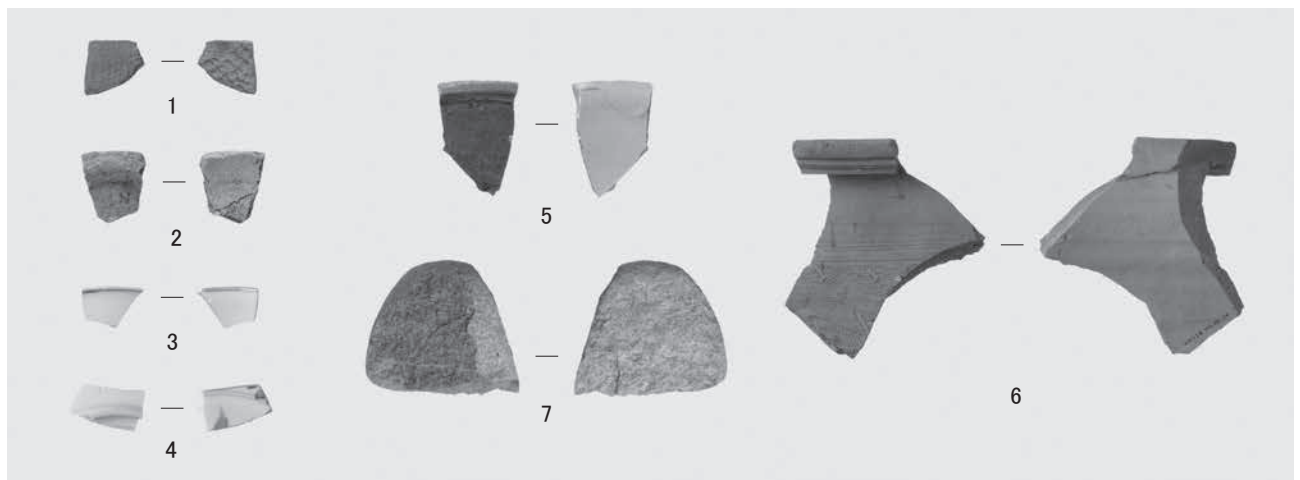
図版 45 区画8 出土遺物 (I 地区)

区画 9

白磁、染付、本土産陶磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、瓦、金属製品等、合計513点検出している。第15表に特徴的な遺物の観察事項、第57表に遺物毎の出土状況を示す。



第 80 图 区画9 出土遺物 (I 地区)

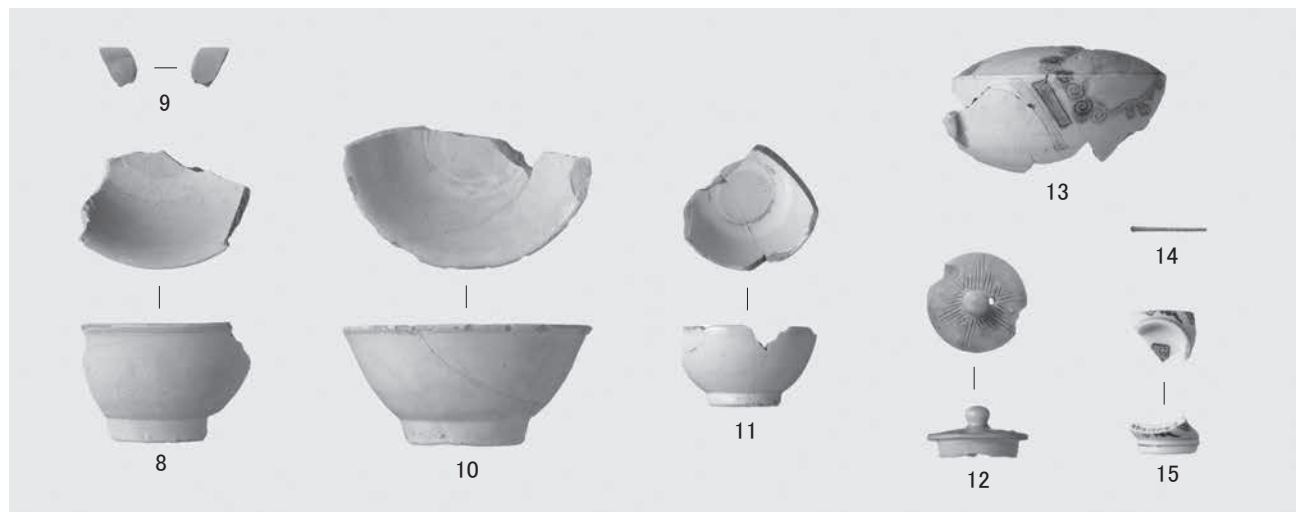


图版 46 区画9 出土遺物1 (I 地区)

第15表 区画9出土遺物観察一覧(I地区)

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第80図 図版46	1	カムイヤキ	壺	胴部	口径	器高	底径	器面に叩き目痕。胎土は赤褐色で白色粒を含む。	H-8 SD1畦B 1層
					—	—	—		
	2	白磁	碗	底部	口径	器高	底径	高台露胎。素地は黄白色で緻密。	H-9 SD1畦C 1層
					—	—	6.1		
	3	染付	小碗	口縁部	口径	器高	底径	口鏝で口唇部に褐釉。素地は灰白色で緻密。	H-9 SD1 2層
					8.0	—	—		
	4	染付	皿	底部	口径	器高	底径	畳付は露胎。素地は灰白色で緻密。内底に草文か。徳化窯産。	H-8 SD1畦A・B 2層
				—	—	9.7			
	沖縄産 施釉陶器	鉢	口縁部	口径	器高	底径	外面黒釉、内面白化粧後に透明釉で掛け分け。口唇部釉剥ぎ。素地は灰黄色で細かい。	H-9 SD1 2層	
				—	—	—			
	沖縄産 無釉陶器	甕	口縁部	口径	器高	底径	逆L字状口縁。器色は褐色、素地は赤褐色で緻密。口唇側面に沈線、胴部に沈線+波文。	H-8 SD1 2層	
				—	—	—			
	石器	磨石	—	口径	器高	底径	表面に一部滑面が残る。側面及び裏面に敲打痕。重量313.5g。緑色岩。	I-8 SD3 1層	
				—	—	—			
第80図 図版47	8	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径	器高	底径	全面白化粧と透明釉を施釉後、内底を蛇の目、畳付を釉剥ぎ。素地は淡黄色で細かい。	H-8 SD3 1層
					14.0	6.7	6.8		
	9	青磁	碗	口縁部	口径	器高	底径	外面に蓮弁文。素地は灰白色で緻密。	H-8 SK43 トレンチ 2層
					—	—	—		
	10	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径	器高	底径	全面白化粧と透明釉を施釉後、内底を蛇の目、畳付を釉剥ぎ。素地は淡黄色で細かい。畳付にアルミナ痕。	H・I-8 SK41 3層
					14.0	6.4	6.3		
	11	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	全面白化粧と透明釉を施釉後、内底を蛇の目、畳付を釉剥ぎ。素地は淡黄色で細かい。	H-8 SK41 2層
				8.0	4.3	3.7			
	沖縄産 施釉陶器	蓋	—	口径	器高	底径	全面白化粧後、外面甲蓋端部まで施釉。素地は灰白色で細かい。上面に線刻で文様。撮み器部に0.3cmの孔。	H・I-8 SK41 3層	
				5.5	2.8	4.1			
	沖縄産 施釉陶器	急須	口縁部	口径	胴径	—	—	全面に白化粧後、透明釉を施釉。口唇部蓋置き部露胎。素地は灰白色で細かい。外面に線彫りによる文様。	H・I-8 SK41 3層
				6.3	13.6	—	—		
	青銅製品	簪	—	口径	器高	底径	—	—	H-8 SK41 2層
				—	—	—	破片。茎断面六角。重量0.9g。		
図版47	本土産 近現代磁器	小碗	底部	口径	器高	底径	—	—	H-8 SD3畦C 1層
				—	—	3.7	全面施釉後に畳付を釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外面に胴版転写による文様。外底に銘あり。		



図版 47 区画9 出土遺物2 (I地区)

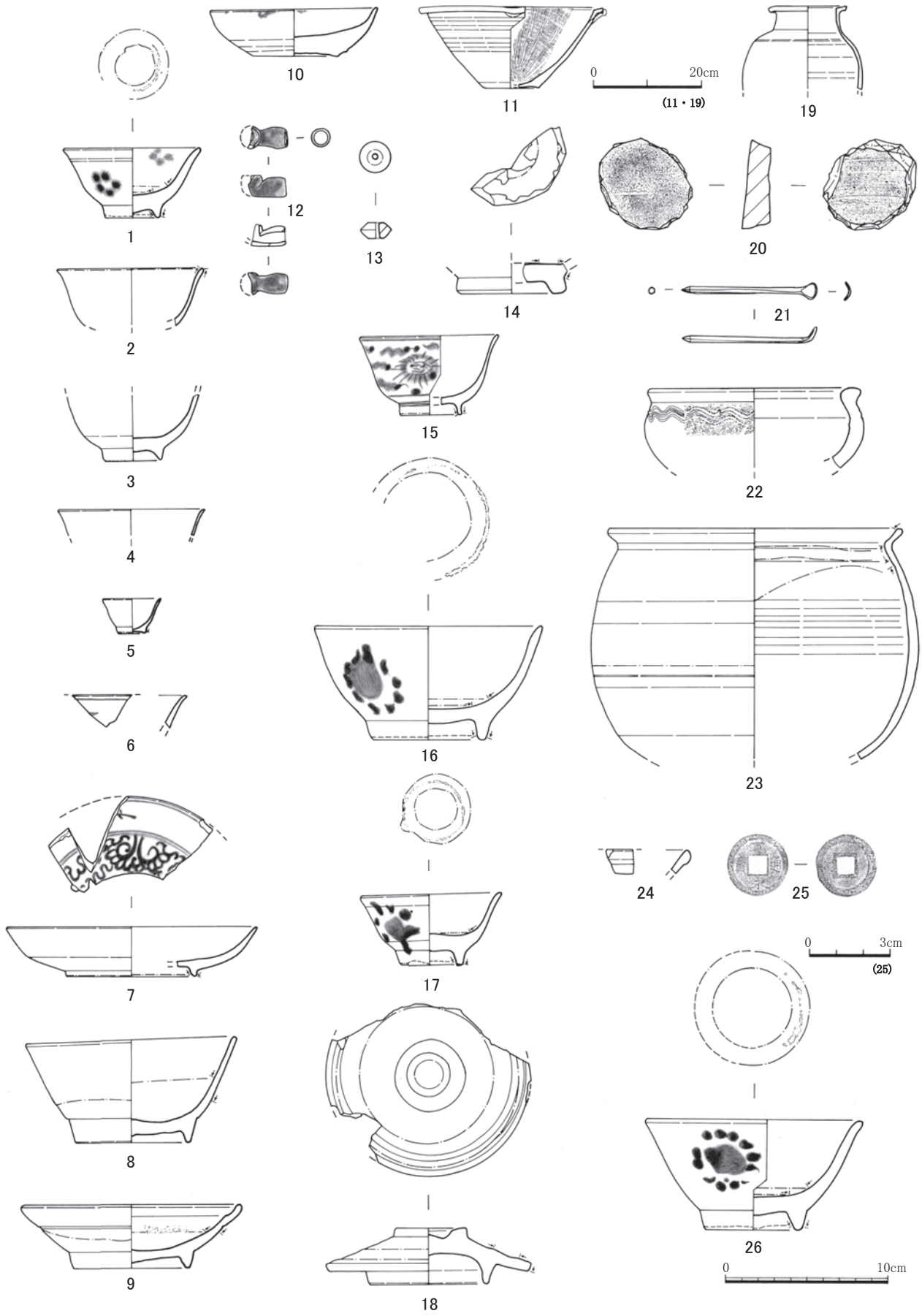
区画10

沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、瓦を主とし、青磁、白磁、染付、本土産陶磁器、陶質土器、金属製品等を合計743点検出している。第16表に特徴的な遺物の観察事項、第58表に遺物毎の出土状況を示す。

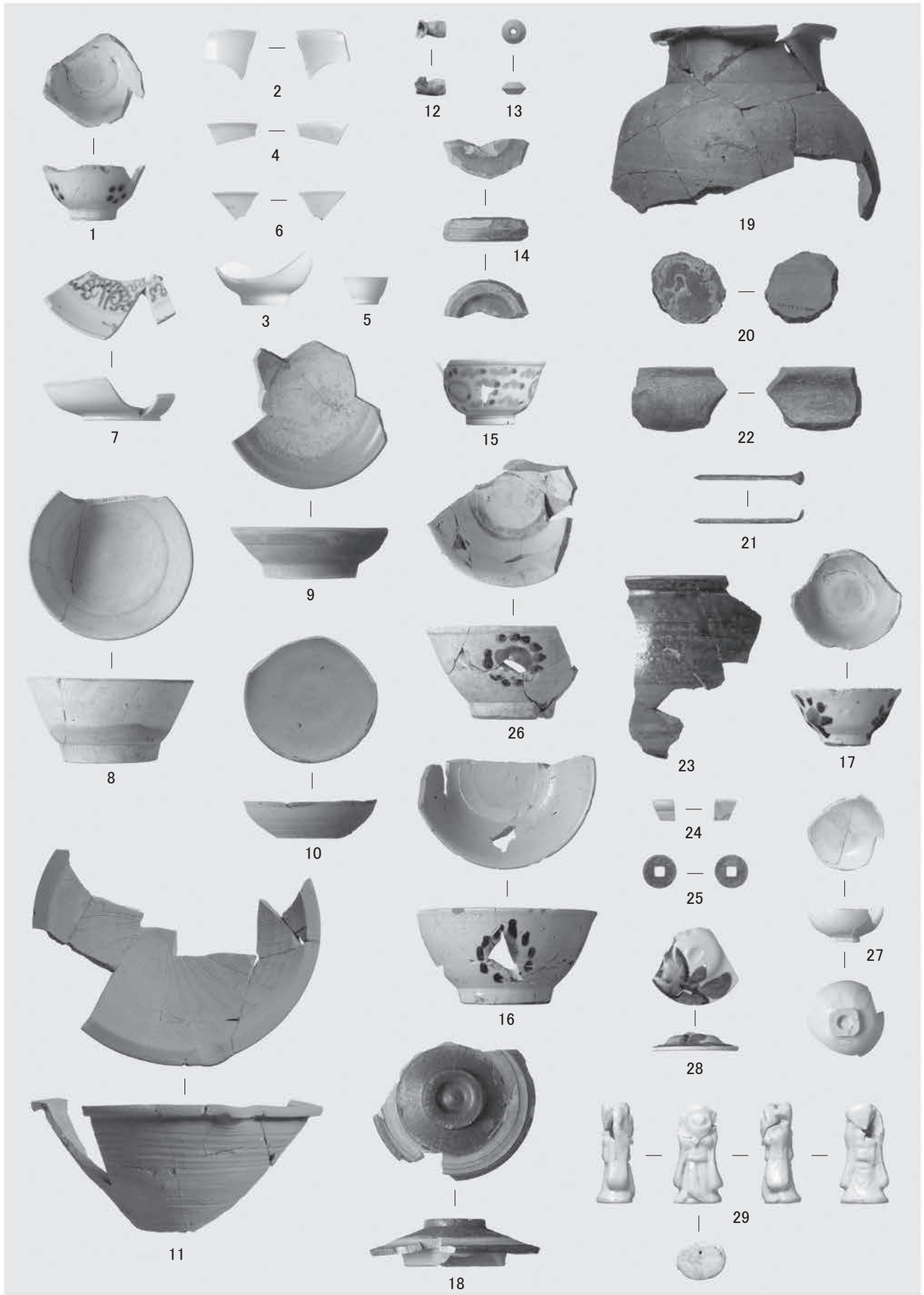
第16表 区画10出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
第81図 図版48	1	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底部	口径 8.4	器高 4.3	底径 3.4	胴部に圏線と五点の文様を施す。見込に石灰が付着する。見込は蛇の目状、畳付は露胎となる。	D-10 SD40内
	2	白磁	小碗	口縁部	口径 9.0	器高 —	底径 —	口縁は僅かに外反し、露胎となる。	D-9 SK66 1・2層
	3	白磁	小碗	底部	口径 —	器高 —	底径 3.5	高台内側は外側に広がる。	D-9 SK66 1・2層
	4	白磁	小碗	口縁部	口径 9.0	器高 —	底径 —	口縁端で僅かに外反する。	D-9 SK66 1・2層
	5	白磁	小杯	口～底部	口径 3.6	器高 2.2	底径 1.7	口縁と胴部の境で僅かに外側に広がる。畳付は露胎となる。	D-9 SK66 1・2層
	6	染付	小碗	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	口縁は僅かに外反し、口縁に圏線、胴部に文様を施す。	D-9 SK66 1・2層
	7	染付	皿	口～底部	口径 15.4	器高 3.1	底径 8.0	見込に雲文を施す。畳付は露胎となる。	D-9 SK66 3層
	8	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 12.9	器高 6.5	底径 7.2	外面胴部中位から内面中位まで白化粧を施され、その他は露胎となる。	D-9 SK66 3層
	9	沖縄産 施釉陶器	皿	口～底部	口径 13.6	器高 3.9	底径 7.1	口縁外面は玉縁状、内面は頸縁に作られる。外面胴部中位から内面中位まで施釉。内面の施釉縁に砂が付着する。	D-9 SK66 1・2層
	10	沖縄産 無釉陶器	皿	口～底部	口径 10.3	器高 3.0	底径 5.2	底部は碁笥底状に作られ、外面下位に轆轤痕を残す。	D-9 SK66 3層上面
	11	沖縄産 無釉陶器	播鉢	口～底部	口径 34.0	器高 15.0	底径 10.1	口縁1箇所に注口のように窪んだ箇所を設けており、内面は、9条を1組として、目を設けている。外面は轆轤痕を残す。	D-9 SK66 3層
	12	煙管	—	雁首	火皿 (1.4)	長さ (2.9)	接続部径 1.1	外面に青色釉を施す。重量3.6g。	D-9 SK66 3層
	13	土製品	玉?	—	口径 —	器高 —	底径 —	算盤の玉で、釉は施されない。重量2.4g。	D-9 SK66 1・2層
	14	青磁	碗	底部	口径 —	器高 —	底径 6.2	青磁碗の底部を円盤状製品として加工したもので、半分は欠けている。	D-9 SK68内
	15	本土産磁器	染付 小碗	口～底部	口径 8.6	器高 4.9	底径 3.7	口縁に圏線、胴部に雲文、丸文を施す。畳付は露胎となる。	D-9 SK68内
	16	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 14.0	器高 7.0	底径 7.1	胴部に圏線と花文の文様を施す。見込みは蛇の目状、畳付は露胎となる。	D-9 SK68内
	17	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底部	口径 8.7	器高 4.5	底径 3.9	胴部に圏線と花文の文様を施す。見込みは蛇の目状、畳付は露胎となる。	D-9 SK68内
	18	沖縄産 施釉陶器	蓋	—	口径 12.2	器高 3.5	底径 7.4	外面に蛇の目状に露胎となり、その中に圏線を巡らす。	D-9 SK68内
	19	沖縄産 無釉陶器	壺	口縁部	口径 14.4	器高 —	底径 —	内外面に轆轤痕を残す。	D-9 SK68内
	20	円盤状製品	—	—	長径 5.6	厚さ 1.7	最大幅 5.7	外面から調整され、円盤状に成形されている。重量69.5g。	D-9 SK68内
	21	青銅製品	簪	—	全長 8.3	—	—	簪の完形。断面は四角形。重量8.3g、カブ長1.3cm、竿長7.3cm、竿幅0.4cm。	D-9 SK68内
	22	沖縄産 無釉陶器	鉢	口縁部	口径 13.1	器高 —	底径 —	胴部に3状1組の波状文を施す。	D-9 SK69内
	23	沖縄産 施釉陶器	鍋	口縁部	口径 18.2	器高 —	底径 —	外面胴部中位から内面胴部上位まで施釉する。内外面に轆轤痕を残す。	D-9 SK70内
	24	白磁	碗	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	口縁を玉縁状に成形する。	D-9 SX16内
	25	銭貨	寛永 通宝	—	外径 2.3	孔径 0.6	厚さ 0.1	寛永通宝だが、文字は不鮮明。重量2.2g。	D-9 SX16内
	26	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.4	器高 6.8	底径 6.2	胴部に圏線と花文の文様を施す。見込みは蛇の目状、畳付は露胎となる。	C-9 SX19内
図版48	27	本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径 6.0	器高 a-2.2 b-2.1	底径 2.5	口縁は釉が剥けている部分がある。高台の外縁は方形で、角は丸みを帯びる。	D-10 SK46内
	28	本土産 近現代磁器	蓋	—	口径 7.5	器高 —	底径 —	摘みは失われているため、確認できない。文様が確認できるが、特定はできない。	D-10 SK46内
	29	本土産 近現代磁器	人形	—	口径 —	器高 —	底径 —	西行。底部は露胎で、僅かに孔を開けている。	D-10 SK46内
図版49	30	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 —	器高 3.9	底径 3.8	外面に松、山、橋等の庭園文様を施す。	D-9 SK68内
	31	本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径 5.5	器高 2.3	底径 2.3	口縁と胴部の境で僅かに外側に広がる。	D-9 SK68内
	32	本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径 7.7	器高 3.3	底径 3.0	高台外面に波文、高台内に点(月)を施す。	D-8 SK68内
	33	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径 11.1	器高 2.0	底径 6.6	見込に草花文を施す。	D-9 SK68内
	34	鉄製品	カマ	—	長さa 13.1	長さb 11.0	—	金属部分のみ残っており、柄部分は残っていない。先端を失っている。重量80.2g。	D-9 SX16内
	35	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 8.2	器高 4.8	底径 3.0	口縁に樺文、胴部に草文を施す。	C-9 SX19内
36	鉄製品	クワ	—	長さa 33.8	長さb 13.8	—	平鍬。直線的に作られる。重量1800g。	C-9 SX19内	



第 81 图 区画 10 出土遺物 (II 地区)



图版 48 区画 10 出土遺物1 (Ⅱ地区)



図版 49 区画 10 出土遺物2 (Ⅱ地区)

区画11

沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、瓦を主とし、青磁、白磁、染付、本土産陶磁器、陶質土器、石製品、鉄製品等を合計1,396点検出している。SK3から沖縄産無釉陶器の壺が集中して検出されている。第17表に特徴的な遺物の観察事項、第59表に遺物毎の出土状況を示す。

第17表 区画11出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)a

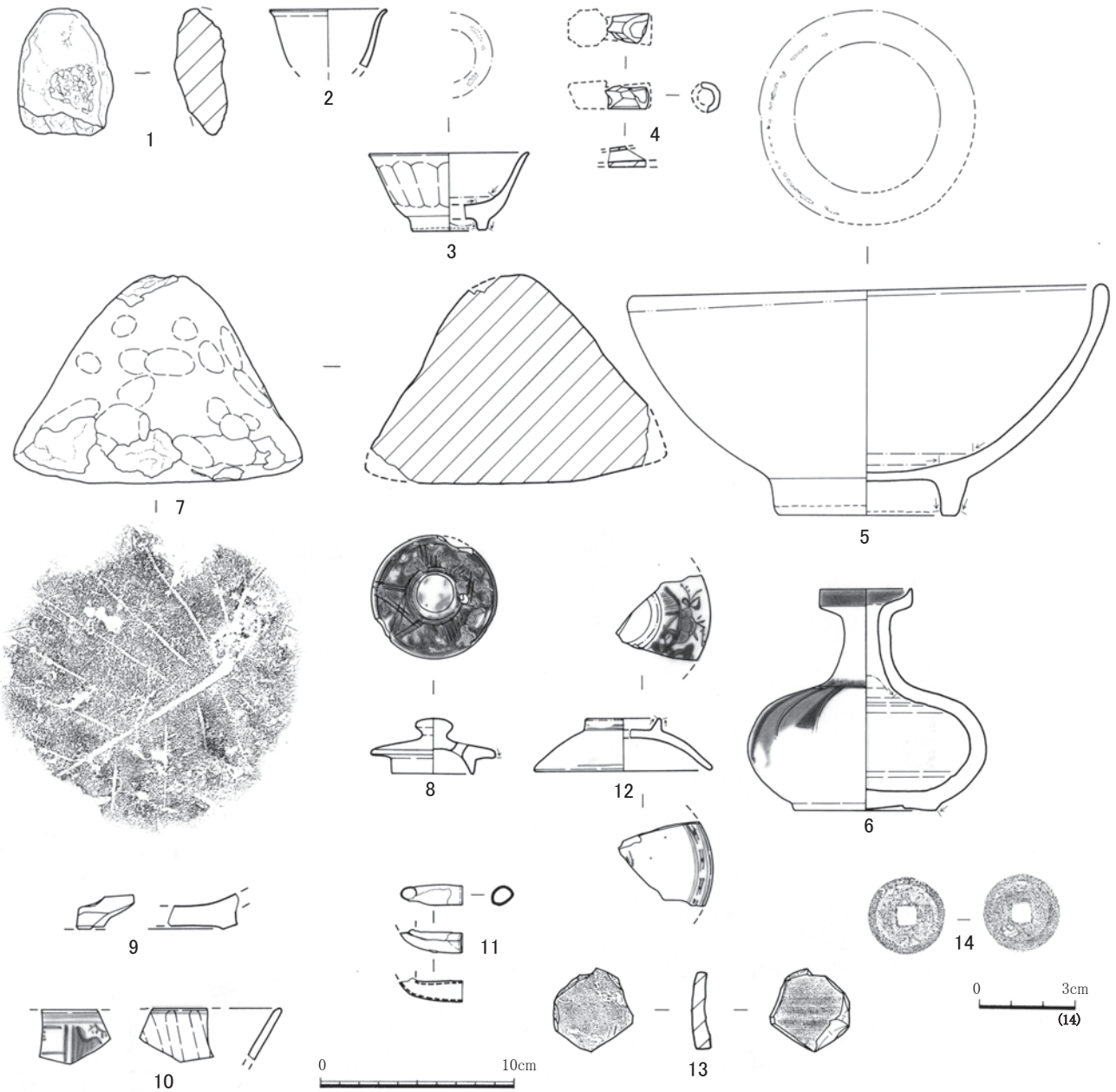
単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第82図 図版50	1	石器	敲石	—	—	—	全体的に粗く整形されており、表面に磨った箇所を残す。重量120.7g。	C-9 SD8内	
	2	瑠璃釉	小碗	口縁部	口径 6.0	器高 —	底径 —	口縁部は外反する。瑠璃釉色は外面のみに施す。	C-9 SD8内
	3	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底部	口径 8.2	器高 4.0	底径 4.0	胴部は蓮弁状に面取りされる。見込は蛇の目釉剥ぎ、畳付が露胎となる。	C-9 SD8内
	4	煙管	—	雁首	—	—	—	六角形に形成される。火皿は欠けており不明である。重量3.0g。	C-9 SD8内
	5	沖縄産 施釉陶器	鉢	口～底部	口径 25.0	器高 12.0	底径 9.6	外面は黒色釉、内面は白化粧を施す。見込は蛇の目釉剥ぎ、畳付は露胎となる。	C-9 SK3内
	6	沖縄産 施釉陶器	酒器	口～底部	口径 4.8	器高 11.4	底径 7.3	口縁内部と胴部に青色釉、胎釉を施す。	C-9 SK3内 1層
	7	土製品	不明	—	—	—	—	円錐状に成形され、底部に植物痕がある。全体に煤が付着している。重量1550g	C-9 SK3内 1層
	8	沖縄産 施釉陶器	蓋	—	口径 6.4	器高 2.9	底径 4.2	沈線の文様があり、その上から青色釉が施される。	C-10 SK22内
	9	白磁	碗	底部	口径 —	器高 —	底径 —	内面に施釉。高台は低め。素地は灰白色。	C-10 SK27内
	10	染付	碗	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	胴部に梅、寿文字を施す。	C-10 プラン1
	11	煙管	—	雁首	—	—	接続部径 1.0	火皿は欠けている。一枚の銅を巻いて、作られており、接合部を確認できる。重量3.4g。	C-10 プラン2
	12	本土産磁器	染付 蓋	—	口径 9.2	器高 2.7	底径 —	外面に草花文、内面口縁に帯状の文様を施す。	C-10 SX3内
	13	円盤状製品	—	—	長径 4.2	厚さ 0.8	最大幅 4.1	沖縄産無釉陶器を再利用したもの。加工が粗く、円形からは若干遠い。重量16.8g	C-10 SX3内 南側
	図版50	14	銭貨	寛永通宝	—	外径 2.4	孔径 0.6	厚さ 0.1	銭名不明。残りは良い。重量2.3g。
15		銭貨	25セント	—	外径 2.4	孔径 —	厚さ 0.1	アメリカのコインで残りは良好。	C-9 SD8内
16		ガラス製品	瓶	口～底部	口径 1.4	器高 5.6	底径 2.1	頸部が長い。表面に「タムシ液」、裏面に「水谷製薬 高橋専賣」。	C-9 SD8内
17		本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径 —	器高 2.7	底径 —	素地は白色で緻密。外面胴部に1条の突帯を巡らす。	C-10 SD12内
18		本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径 13.2	器高 5.0	底径 5.8	スキャンマカイ。内外面に花文等を施す。	C-9 SK3内 1層
19		本土産 近現代磁器	小杯	口～底部	口径 6.0	器高 2.7	底径 2.4	胴部下位から底部は花形に形成され、見込に梅、草文を施す。	C-9 SK3内
20	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径 11.5	器高 2.4	底径 6.5	内面全体に草花文を施す。	C-9 SK3内	

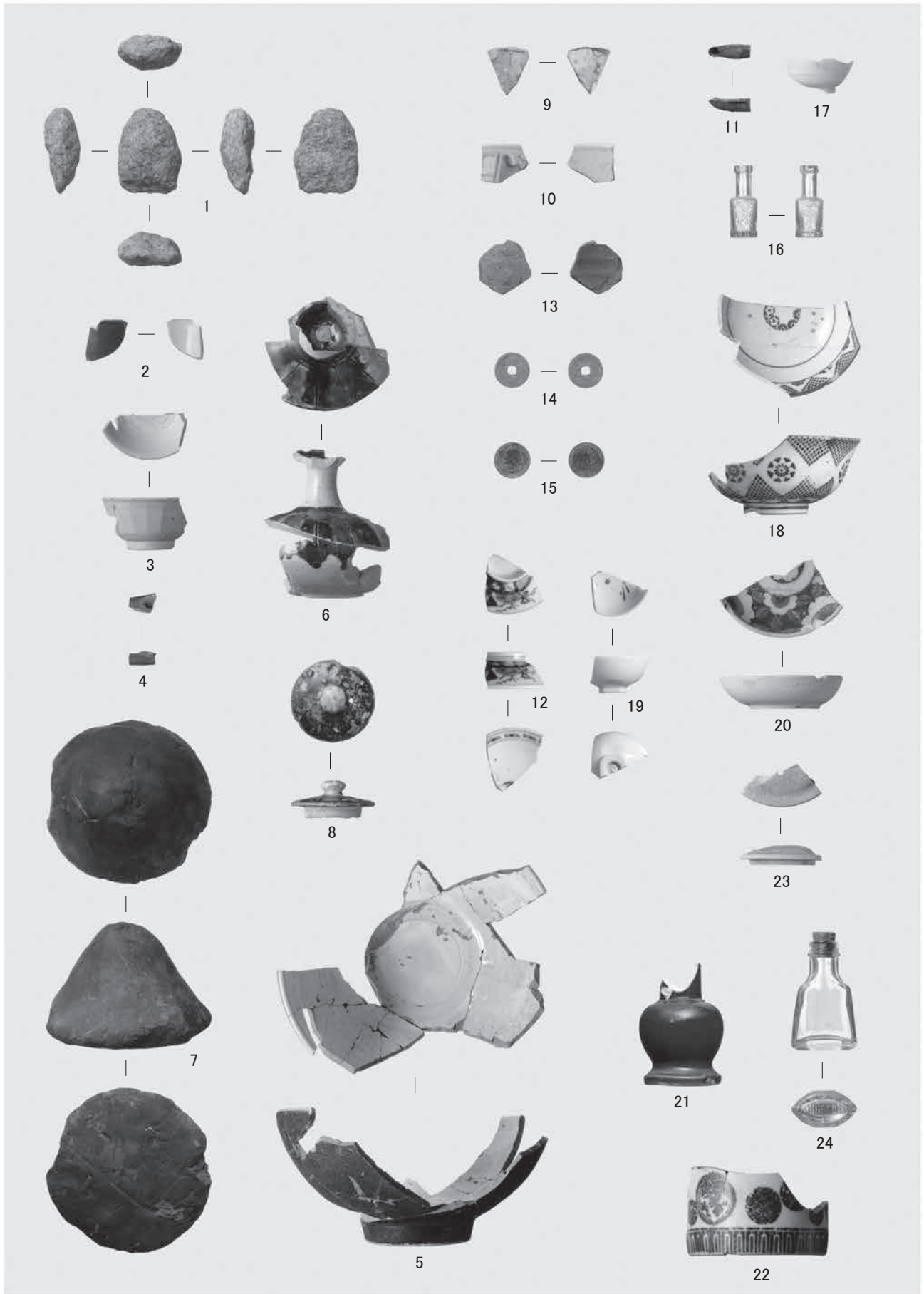
第17表 区画11出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)b

単位:cm

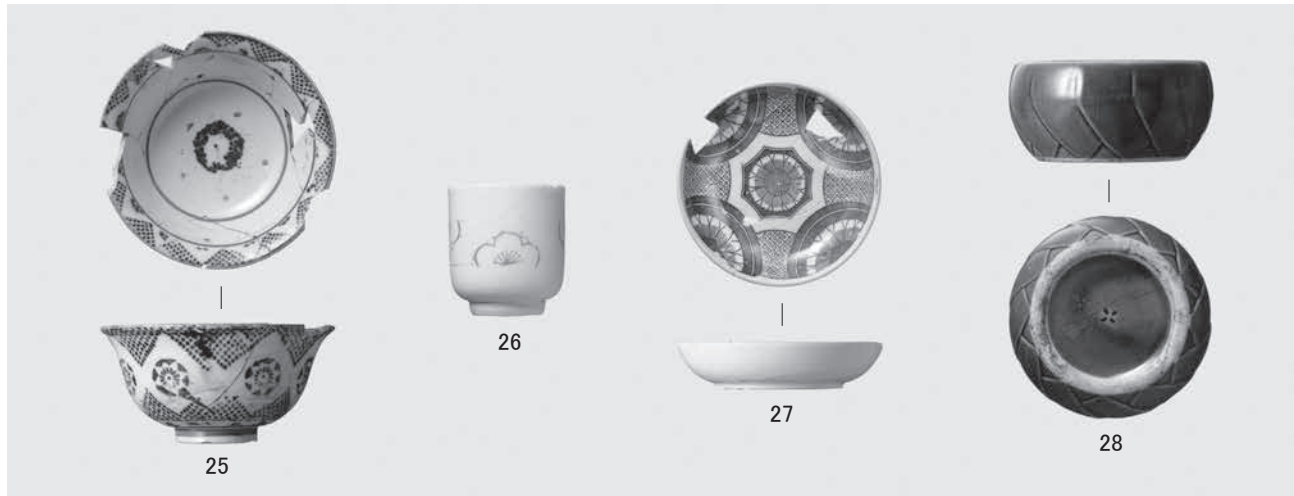
挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
図版50	21	本土産 近現代磁器	瓶	底部	口径 —	器高 —	底径 5.8	外面に青色釉、高台際に褐色圈線を巡らす。	C-9 SK3内 1層
	22	本土産 近現代磁器	火入	底部	口径 —	器高 —	底径 10.6	胴部に波状文、蓮弁文等を施す。	C-9 SK3内
	23	本土産 近代陶器	蓋	—	口径 10.2	器高 —	底径 8.0	全体に貫入が入る。	C-9 SK3内
	24	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 2.1	器高 8.4	底径 a-5.0 b-2.8	底部に「AJINOMOTO」の字が入る。	C-9 SK3
図版51	25	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径 12.9	器高 6.2	底径 4.5	スカンマカイ。内外面に花文等を施す。	C-10 プラン1
	26	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径 6.5	器高 7.1	底径 3.8	胴部に梅文を施す。	C-10 SX1内
	27	本土産 近現代磁器	皿	口～底部	口径 11.2	器高 2.5	底径 6.7	内面に密に文様を施す。	C-10 SX1内
	28	本土産 近代陶器	蓋物	口～底部	口径 10.3	器高 5.3	底径 8.3	外面は沈線で蓮弁状に区切られる。墨付を除き、褐色釉が施される。	C-10 SX1内



第 82 図 区画 11 出土遺物(Ⅱ地区)



图版 50 区画 11 出土遺物1 (Ⅱ地区)

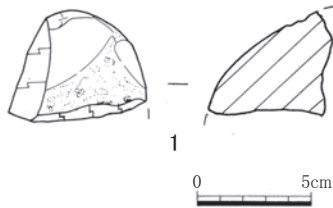


図版 51 区画 11 出土遺物2 (Ⅱ地区)

区画12

南北側を道跡、東側を溝に区切られているが、ピット及び土坑といった遺構は確認できなかったため、ここでは遺構図は省略した。

出土した遺物は土器3点、磨石1点の合計4点のみである。磨石は丁寧に角をとられ、滑らかである。側面も研磨された様子があることから、欠けた後も別の用途で使用されたと考えられる。3.5cm×4.5cm。



第83図 区画 12 出土遺物(Ⅱ地区)



図版 52 区画 12 出土遺物 (Ⅱ地区)

区画13

瓦を主とし、白磁、染付、色絵、本土産陶磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、陶質土器、石製品、金属製品等を合計3,282点検出している。特に瓦が多く、D-10グリッドの遺構及び包含層から多量に出土している。第18表に特徴的な遺物の観察事項、第61表に遺物毎の出土状況を示す。

第18表 区画13出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)a

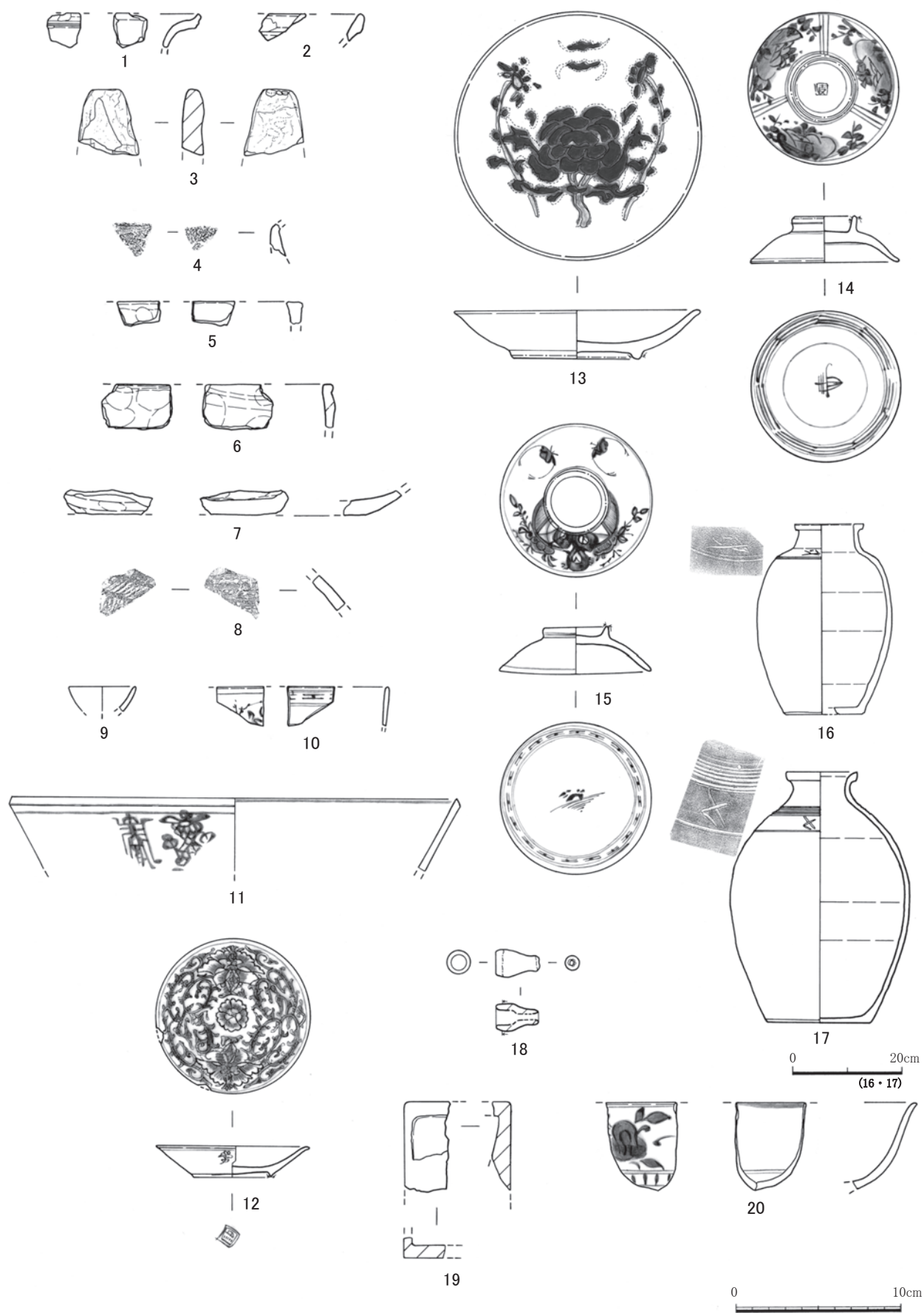
単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
第84図 図版53	1	カムイヤキ	壺	口縁部	口径	器高	底径	口縁部が真直ぐ立上る。	D-10 SD37 上層
	2	白磁	碗	口縁部	口径	器高	底径	口縁部が玉縁状に作られる。	E-10 SD51内
	3	石器	石斧	—	口径	器高	底径	刃部は欠損しており、他の部分は粗く成形されたままである。重量29.8g。	E-9 SD57内
	4	土器	鉢	口縁部	口径	器高	底径	口唇は欠損しており不明であるが、外反すると想定される。	E-10 SD65内

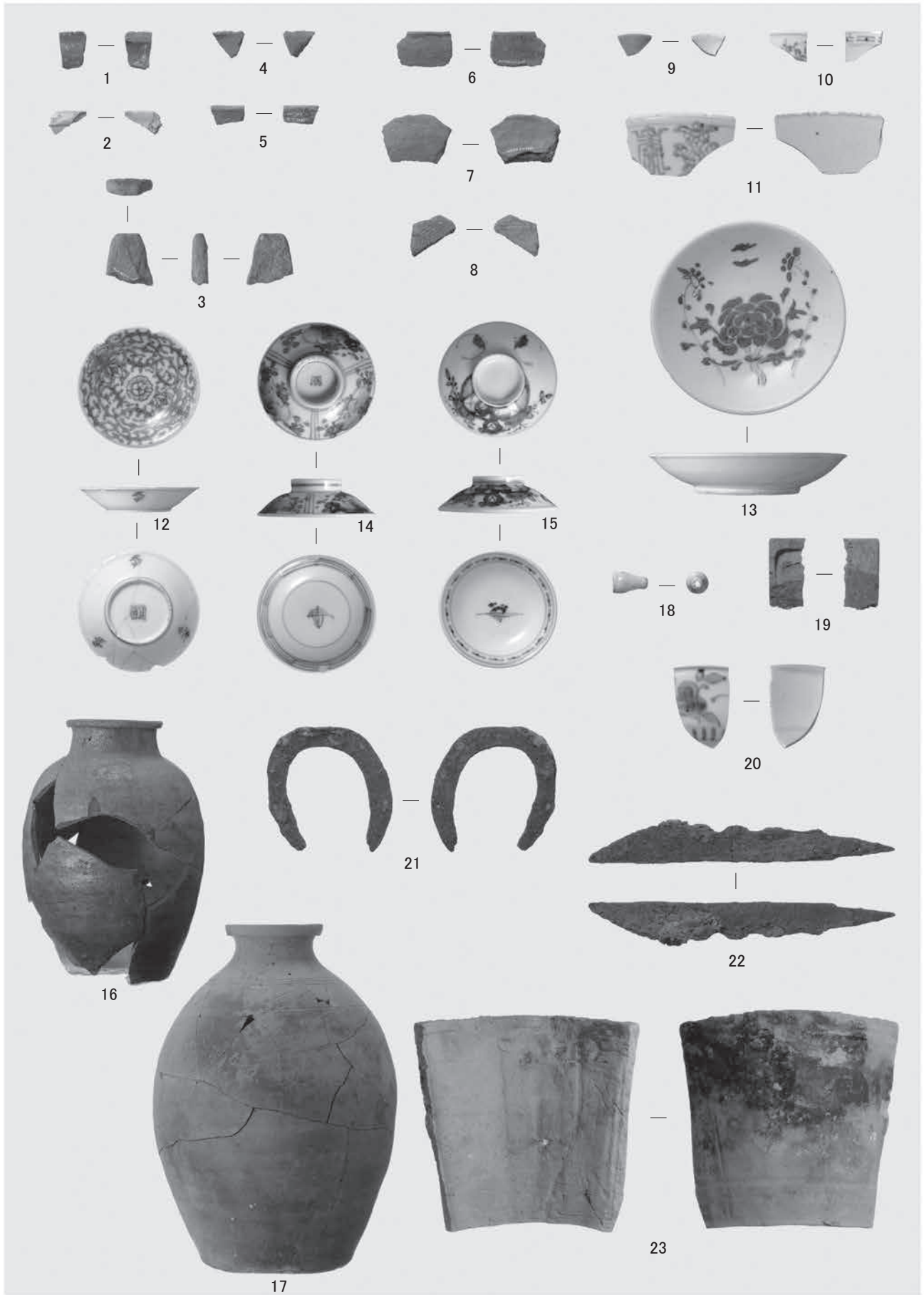
第18表 区画13出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)b

単位:cm

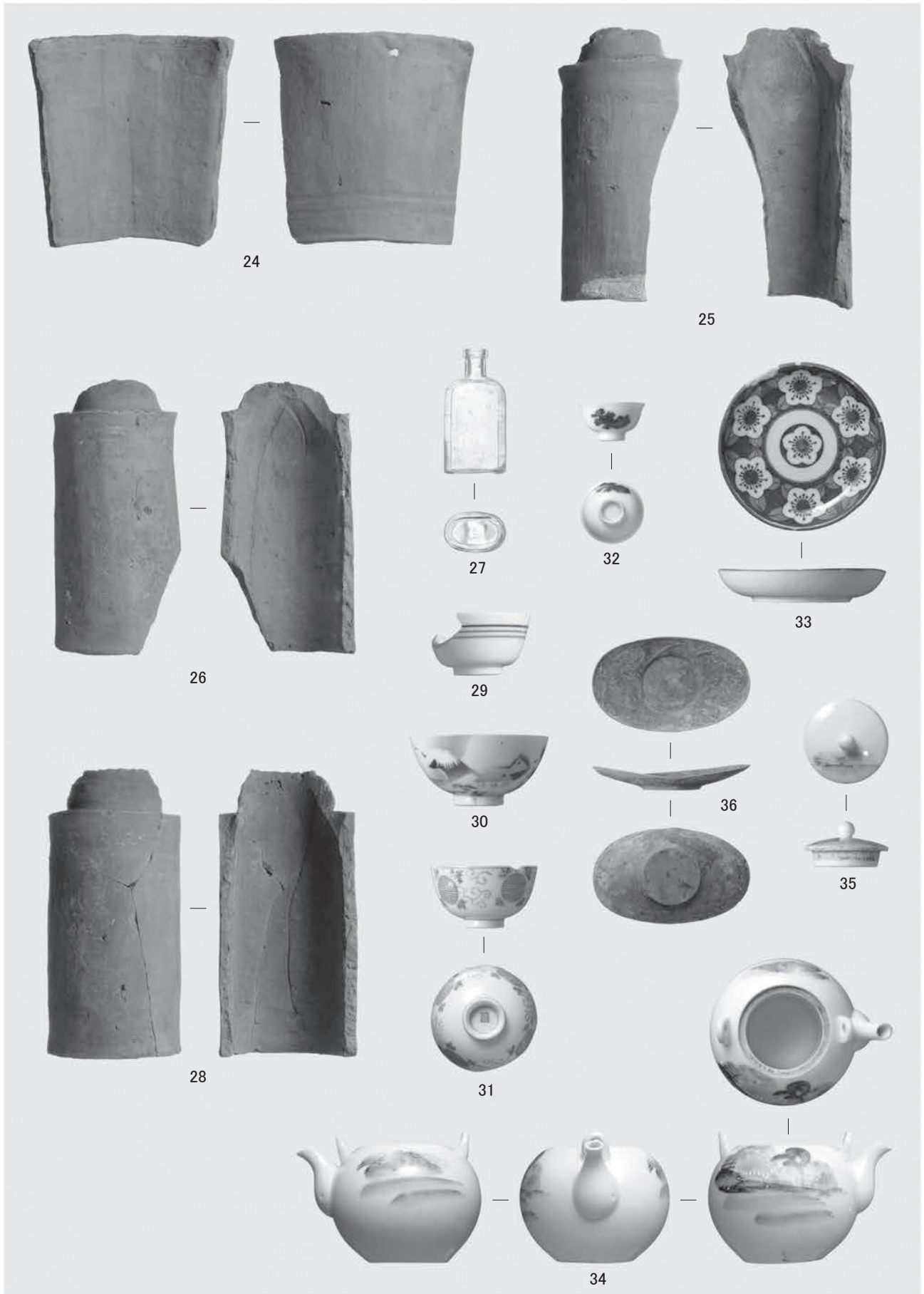
挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地		
第84図 図版53	5	土器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	口唇は僅かに内傾する。外面に指頭の調整が見られる。	E-10 SK87内	
	6	土器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	口唇は若干肥厚する。内外面に指頭の調整があり、内面はさらにナデ調整も入る。	E-10 SK87内	
	7	土器	鉢	底部	口径 —	器高 —	底径 —	底部で、平底に作られる。胎土に滑石が入る。	E-10 SK87内	
	8	カムイヤキ	壺	胴部	口径 —	器高 —	底径 —	外面に羽状の叩き目。	D-10 SS1 覆土2	
	9	瑠璃釉	小杯	口縁部	口径 4.1	器高 —	底径 —	外面に瑠璃釉が施される。	D-10 SS1 2層	
	10	本土産磁器	染付碗	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	内外面に文様を施すが、小破片のため、文様は明確でない。	D-10 SS1 覆土3	
	11	染付	鉢	口縁部	口径 27.3	器高 —	底径 —	胴部に寿字文及び花文を施す。	E-11 SS2内	
	12	染付	皿	口～底部	口径 9.3	器高 1.9	底径 4.8	内面中央に牡丹文、その周囲に唐草文、外面胴部に花文、高台内に銘文を施す。	E-9 トレンチ1	
	13	色絵	皿	口～底部	口径 15.0	器高 3.0	底径 7.9	内面に牡丹を描く。畳付は露胎となる。	E-9 トレンチ1	
	14	本土産磁器	染付蓋	—	口径 9.2	器高 2.8	底径 3.9	外面を3つに区切り草花文を描き、中央に銘を描く。内面は中央に海?、口縁に三本一組の圏線を巡らす。	E-9 トレンチ1	
	15	本土産磁器	染付蓋	—	口径 9.3	器高 2.8	底径 4.0	外面に草花文、内面は中央に海?、口縁に二本一組の文様を描く。	E-9 トレンチ1	
	16	沖繩産無釉陶器	壺	口～底部	口径 12.5	器高 34.5	底径 14.7	外面肩に沈線を巡らし、肩と頸の間に沈線で銘を描く。	E-9 トレンチ1	
	17	沖繩産無釉陶器	壺	口～底部	口径 13.1	器高 45.5	底径 19.8	外面肩に8条一組の沈線と1条の沈線を巡らす。その間に沈線で銘を描く。	E-9 トレンチ1	
	18	煙管	—	吸口	接続口径 1.5	長さ 2.6	吸口径 0.9	唇が接する箇所は丸味を帯びるように作られ、施釉される。重量6.1g。	E-9 トレンチ1	
	19	石製品	硯	—	口径 —	器高 —	底径 —	池の部分が僅かに残る。重量29.7g。	E-9 トレンチ1	
	20	染付	碗	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	口縁部を外反させる。外面胴部に草花文、蓮弁を描く。	E-9 SW II層	
	図版53	21	鉄製品	蹄鉄	—	長さ 9.9	厚さ 0.4	—	左右対称のものが多いが、本製品は対称ではない。本製品を止めたと考えられる鋸(釘)も残存している。重量101.0g。	E-10 SK76内
		22	鉄製品	包丁	—	長さa 23.8	長さb 3.5	—	刃部は欠損しており、柄の部分も失われている。重量67.5g。	E-10 SK87内
		23	瓦	明朝系平瓦	—	口径 —	器高 —	底径 —	外面に煤が付着する。色調は赤色。	D-10 SS1 覆土2
	図版54	24	瓦	明朝系平瓦	—	口径 —	器高 —	底径 —	上記のものとはほぼ同じ。色調は赤色。	D-10 SS1内
25		瓦	明朝系丸瓦	—	口径 —	器高 —	底径 —	凹面に布目跡、筒部端に漆喰痕を残す。色調は赤色。	D-10 SS1 覆土2	
26		瓦	明朝系丸瓦	—	口径 —	器高 —	底径 —	凹面に布目跡。色調は赤色。	D-10 SS1内	
27		ガラス製品	瓶	口～底部	口径 1.9	器高 9.5	底径 a-4.5 b-2.8	外面に目盛りが残る。外底に「5」。	E-9 SP235内	
28		瓦	明朝系丸瓦	—	口径 —	器高 —	底径 —	凹面に布目跡。色調は赤色。	E-9 SX15内	
29		本土産近現代磁器	小碗	口～底部	口径 7.2	器高 4.5	底径 3.7	口縁と胴部の境に3条の圏線を巡らす。	E-9 SX15内	
30		本土産近現代磁器	碗	口～底部	口径 10.8	器高 5.4	底径 3.9	外面に富士山、鳥、民家、松等の文様を描く。	E-9 トレンチ1	
31		本土産近現代磁器	小碗	口～底部	口径 8.4	器高 4.8	底径 3.0	外面に雪?、唐草を描く。高台内に「岐605」銘を残す。	E-9 トレンチ1	
32		本土産近現代磁器	小杯	口～底部	口径 5.1	器高 2.8	底径 2.0	外面に一葉、高台内に圏線を巡らす。	E-9 トレンチ1	
33		本土産近現代磁器	皿	口～底部	口径 13.0	器高 2.6	底径 7.5	内面全体に梅を配置し、口唇は褐釉を施す。	E-9 トレンチ1	
34		本土産近現代磁器	急須	口～底部	口径 6.9	器高 8.7	底径 6.0	外面に山を中心とした風景を描き、高台内に「瀬751」を印刻する。内部は茶漉しが付く。	E-9 トレンチ1	
35		本土産近現代磁器	蓋	—	口径 6.4	器高 3.5	底径 4.8	図版54-34の蓋。外面に風景?を描く。	E-9 トレンチ1	
36		青銅製品	茶たぐ	口～底部	口径 a-12.0 b-7.3	器高 4.3	底径 1.8	内面に鶴、草木の文様を残す。重量45.3g。	E-9 トレンチ1	



第 84 图 区画 13 出土遗物(Ⅱ地区)



图版 53 区画 13 出土遺物1 (Ⅱ地区)



图版 54 区画 13 出土遺物2 (Ⅱ地区)

区画14

染付、本土産陶磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、瓦等を45点検出したが、いずれも胴部片のため、今回は図化せず、集計のみ行った。第62表に遺物毎の出土状況を示す。

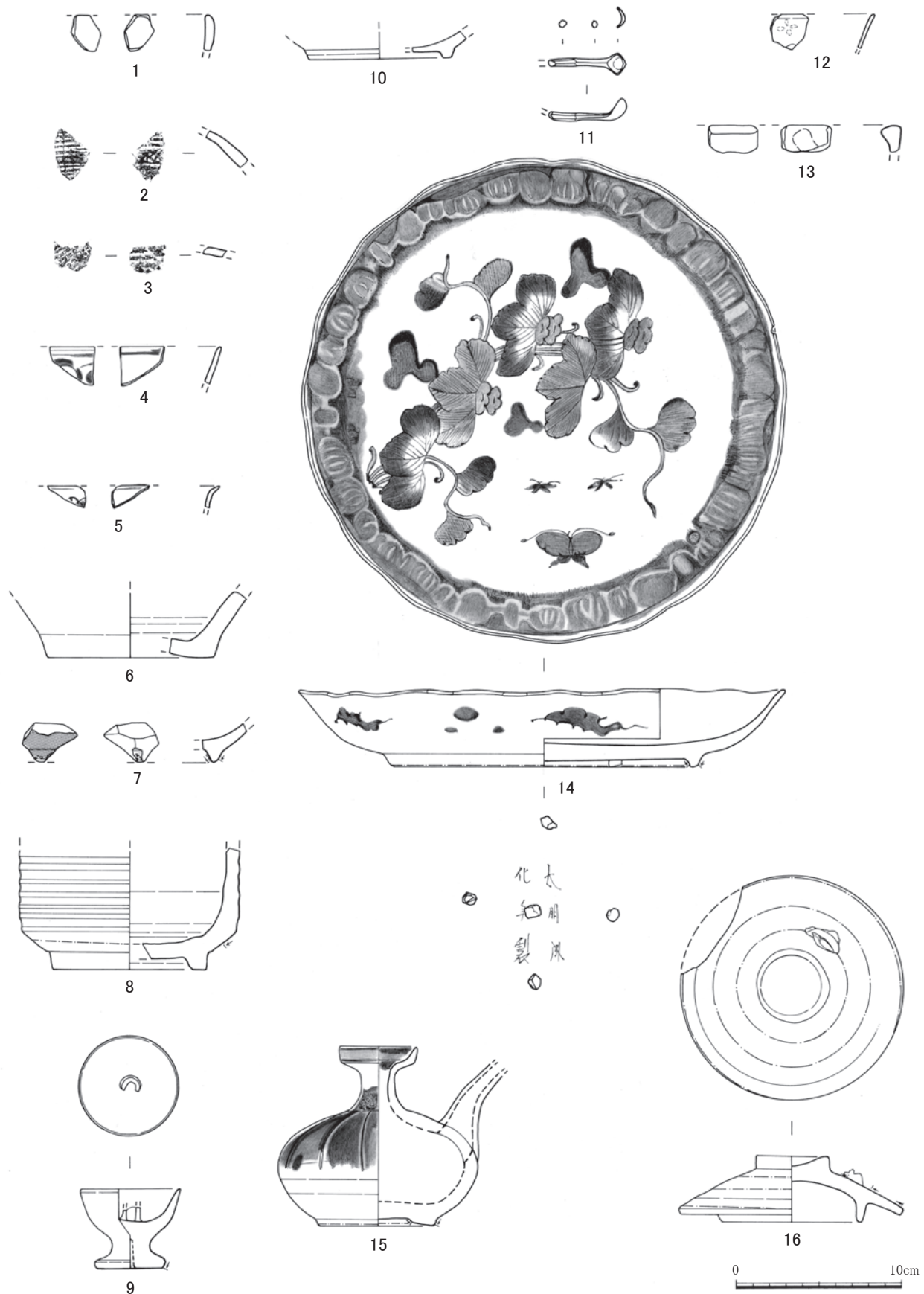
区画15

沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、瓦を主とし、白磁、染付、色絵、瑠璃釉、本土産陶磁器、陶質土器、金属製品等を合計378点検出している。第19表に特徴的な遺物の観察事項、第63表に遺物毎の出土状況を示す。

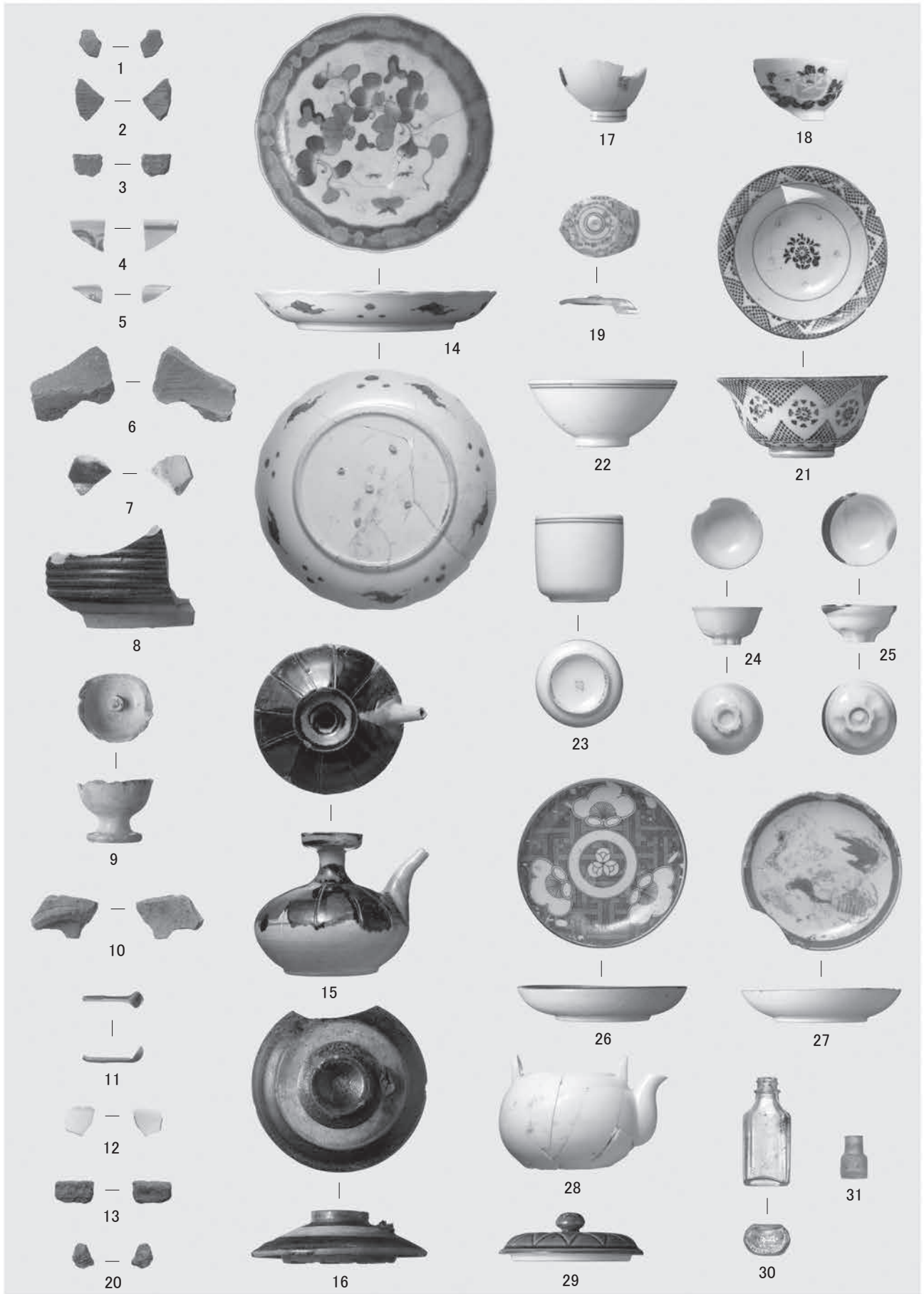
第19表 区画15出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第85図 図版55	1	土器	鉢	口縁部	—	—	—	内湾気味に作られる。石英粒を入れている。	F-11・G-12 SD14上層
	2	カムイヤキ	壺	胴部	口径	器高	底径	内外面に調整のための叩き目が残る。	F-11・G-12 SD14内
	3	カムイヤキ	鉢	胴部	口径	器高	底径	内外面に調整のための叩き目が残る。	F-11・G-12 SD14 3層
	4	染付	小碗	口縁部	口径	器高	底径	外面胴部に草花文?、内面に圏線を描く。	F-11・G-12 SD14内
	5	染付	小杯	口縁部	口径	器高	底径	口唇は尖る。外面に草花文?、内面に圏線を描く。	F-11・G-12 SD14内
	6	褐釉陶器	壺	底部	口径	器高	底径	底部中央が窪むように作られる。底部は露胎。	F-11・G-12 SD14上層
	7	瑠璃釉	瓶	底部	口径	器高	底径	外面に瑠璃釉が施される。壘付は露胎となり、高台に砂が付着する。	F-11・G-12 SD14内
	8	沖縄産 施釉陶器	火炉	底部	口径	器高	底径	外面腰部分まで黒釉を施し、外面腰部以下及び内面は露胎。	F-11・G-12 SD14下層
	9	沖縄産 施釉陶器	灯明具	口~底部	口径	器高	底径	口縁部に煤が残る。	F-11・G-12 SD14上層
	10	陶質土器	器種 不明	底部	口径	器高	底径	内外面共に煤が付着していた跡がある。	F-11・G-12 SD14 3層
	11	青銅製品	簪	—	カブ径 a-1.3 b-1.2	カブ長 1.6	竿幅 0.4	竿は六角形に作られる。アルミニウム製。	F-11・G-12 SD14上層
	12	色絵	小碗	口縁部	口径	器高	底径	外面に草花文。	E-11 SD21 2層
	13	土器	鉢	口縁部	口径	器高	底径	口縁部は内側に肥厚する。	E-11 SK29内
	14	本土産磁器	染付 大皿	口~底部	口径	器高	底径	口縁は波状にし、内面に牡丹又は桐を描く。高台内に「大明成化年製」を描き、胎土目を残す。	E-11 SK29内
	15	沖縄産 施釉陶器	酒器	口~底部	口径	器高	底径	胴部上位から中位にかけて、沈線で区切り、青色釉と鉛釉を交互に施す。	E-11 SK29内
	16	沖縄産 施釉陶器	蓋	—	口径	器高	底径	外面に蛇の目状に露胎箇所を作る。内面は露胎で、煤が付着する。	E-11 SK29内
図版55	17	本土産 近現代磁器	小碗	口~底部	口径	器高	底径	外面に「○泉」銘。	F-11・G-12 SD14内
	18	本土産 近現代磁器	小碗	口~底部	口径	器高	底径	外面に牡丹文。	F-11・G-12 SD14 1層
	19	本土産 近現代磁器	蓋	—	口径	器高	底径	摘みは欠けている。外面に草花文。	F-11・G-12 SD14内
	20	石器	不明	—	口径	器高	底径	全体が粗く打ち欠けられている。	E-11 SD21内
	21	本土産 近現代磁器	碗	口~底部	口径	器高	底径	花文を中心に、内外面に文様を描く。	E-11 SK29内
	22	本土産 近現代磁器	碗	口~底部	口径	器高	底径	口縁に2条の圏線を巡らす。	E-11 SK29内
	23	本土産 近現代磁器	小碗	口~底部	口径	器高	底径	口縁に2条の圏線を巡らす。高台内に「岐374」。	E-11 SK29内
	24	本土産 近現代磁器	小杯	口~底部	口径	器高	底径	外面腰部から高台を桜の葉に形作る。口唇部に桜色釉。	E-11 SK29内
	25	本土産 近現代磁器	小杯	口~底部	口径	器高	底径	外面腰部から高台を葉状に作る。口縁部の約半分に緑色釉、その反対側に丸く桜色釉を施し、草と花の対を描く。	E-11 SK29内
	26	本土産 近現代磁器	皿	口~底部	口径	器高	底径	内面に梅文を配置し、その間を幾何学文で埋める。口唇は褐釉を施す。	E-11 SK29内
	27	本土産 近現代磁器	皿	口~底部	口径	器高	底径	内面に松竹梅、屏風等を描く。	E-11 SK29内
	28	本土産 近現代磁器	急須	口~底部	口径	器高	底径	外面に松文を描く。底部は基筒底状に作られ、注ぎ口内側は茶漉しが付く。	E-11 SK29内
	29	本土産 近代陶器	蓋	—	口径	器高	底径	外面は蓮弁状に作られ、摘みも葉を作る。	E-11 SK29内
	30	ガラス製品	瓶	口~底部	口径	器高	底径	外面に筆記体で「Duraqlas」、底面に「OWENS」。	E-11 SK29内
	31	ガラス製品	瓶	口~底部	口径	器高	底径	胴部中央が僅かに窪み、指で摘みやすくなっている。	E-11 SK29内



第 85 图 区画 15 出土遺物 (Ⅱ地区)



图版 55 区画 15 出土遺物 (Ⅱ地区)

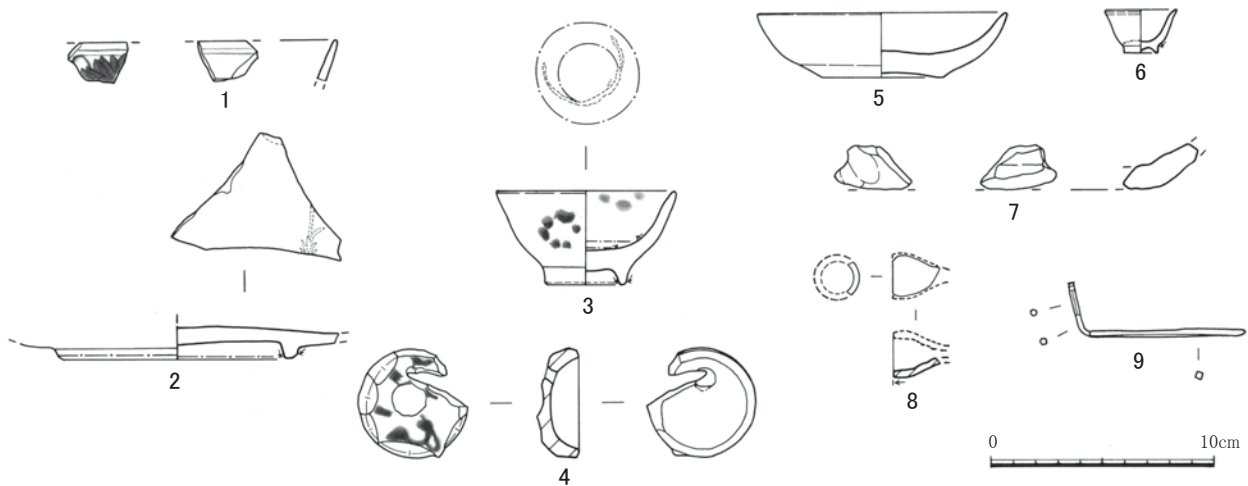
区画16

沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、瓦を主とし、染付、色絵、瑠璃釉、本土産陶磁器、陶質土器、金属製品等を合計207点検出している。第20表に特徴的な遺物の観察事項、第64表に遺物毎の出土状況を示す。

第20表 区画16出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)

単位:cm

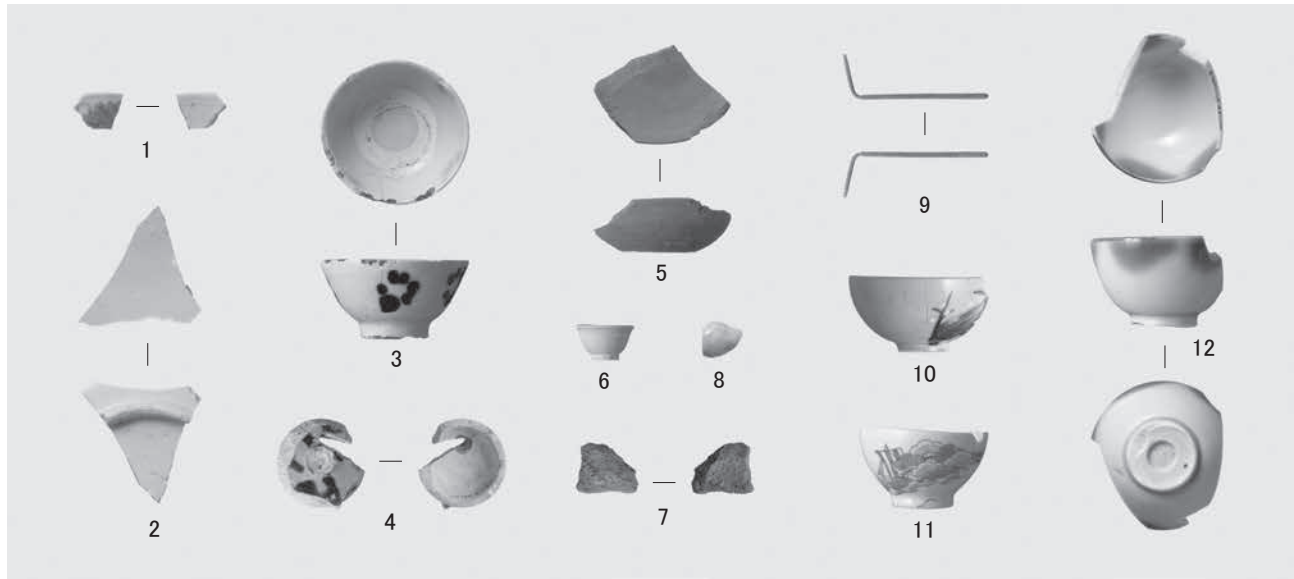
挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第86図 図版56	1	染付	碗	口縁部	口径	器高	底径	外面に花文と圏線、内面に圏線を巡らす。	F-11 SD1内
	—	—	—	—	—	—			
	2	色絵	皿	底部	口径	器高	底径	見込に草花文?を描く。置付は露胎。	G-11 SD46内
	—	—	—	—	—	10.7			
	3	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	外面4箇所の花文を施す。見込は蛇の目釉剥ぎ。見込に焼成時に積重ねた跡あり。	G-11 SD46内
	8.1	4.2	3.7						
	4	円盤状製品	—	—	長径	厚さ	最大幅	蓋の摘みと庇を打ち欠いて円状としている。蒸気の出口は大きく欠けている。重量22.4g。	G-11 SD46内 2層
	4.9	0.7	4.9						
	5	沖縄産 無釉陶器	皿	口～底部	口径	器高	底径	僅かに基筒底状に作られる。	G-11 SD46内
11.2	2.9	5.6							
6	沖縄産 施釉陶器	小杯	口～底部	口径	器高	底径	口縁は僅かに外反する。	F-11 SK31内	
3.2	2.0	1.5							
7	土器	鉢	底部	口径	器高	底径	底部と胴部の境が明確で、角がある。	F-11 SK35内 4層	
—	—	—							
8	煙管	—	吸口	接続部径	厚さ	吸口径	唇が接するところは欠損。	F-11 SX7内	
1.0	—	—							
9	青銅製品	簪	—	全長	—	—	竿部分は四角形、花が付いていた箇所は六角形。	G-10 SX8 2層	
—	—	—							
図版56	10	本土産 近代陶器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	外面に梅文を描く。花は白色釉を厚く盛り、凸状に作っている。	G-11 SD46内
	8.3	4.0	3.1						
	11	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	外面に梅文に帆掛け舟を描く。	G-11 SD46内
7.0	4.3	3.3							
12	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	口縁に青色釉を施す。口唇は褐釉。	G-11 SD46内	
8.1	4.8	3.6							



第86図 区画16 出土遺物(Ⅱ地区)

区画17

沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、瓦を主とし、白磁、染付、色絵、本土産陶磁器、陶質土器、石器、金属製品等を合計422点検出している。第21表に特徴的な遺物の観察事項、第65表に遺物毎の出土状況を示す。

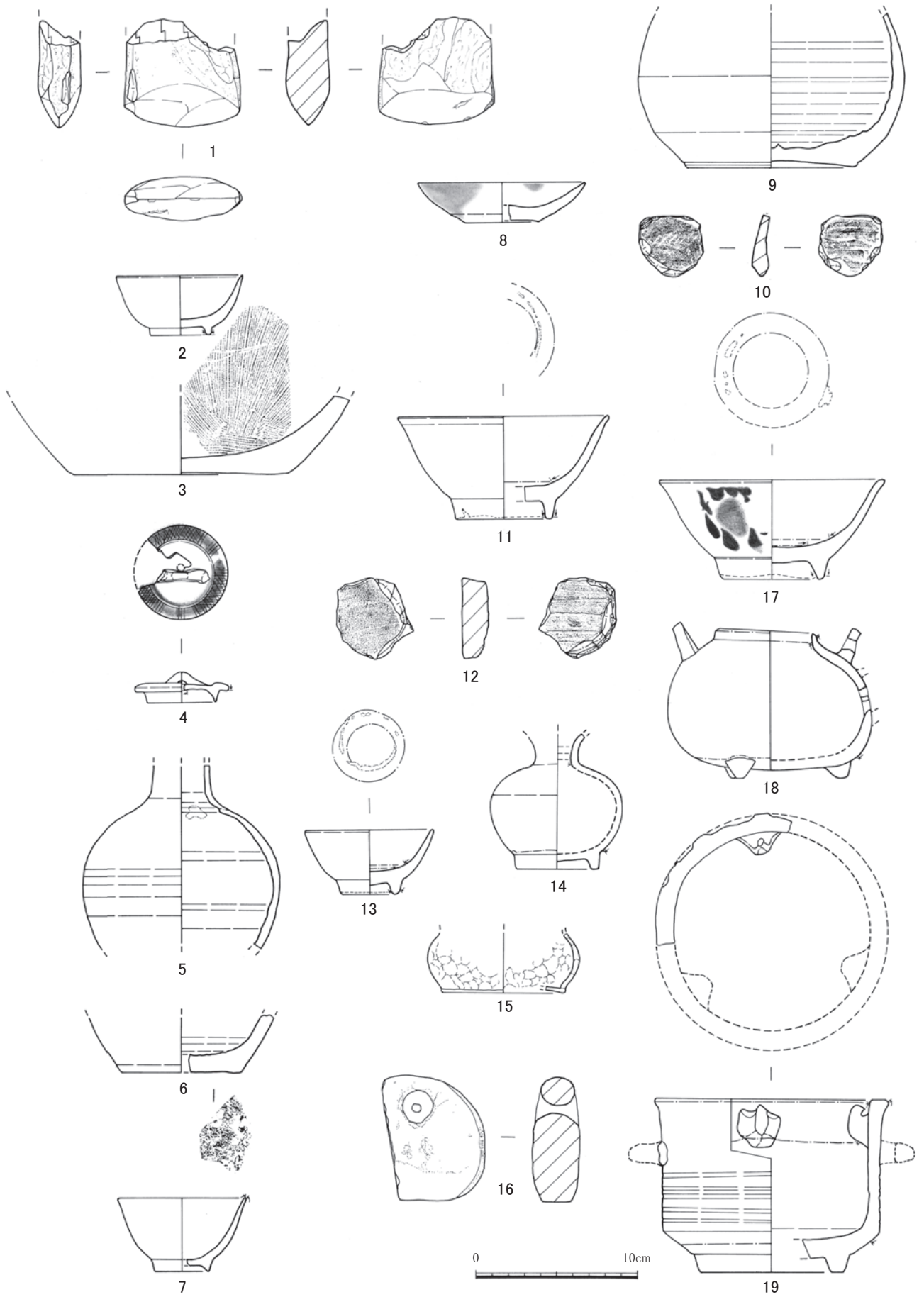


図版 56 区画 16 出土遺物 (II 地区)

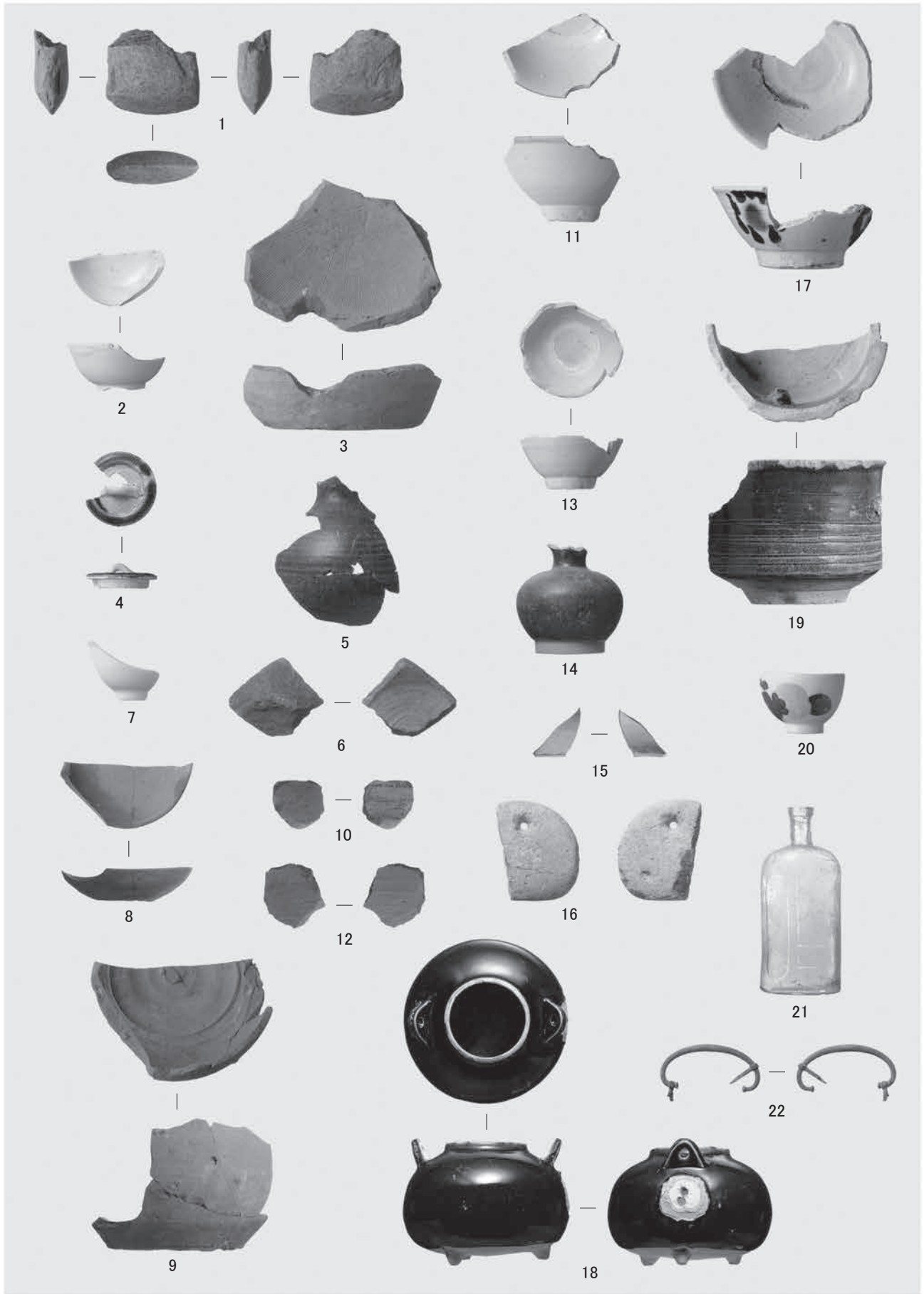
第21表 II 区 区画17出土遺物観察一覧(II 地区)

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第87図 図版57	1	石器	石斧	—	—	—	着柄部、基部は欠損。刃部のみ残る。全体が丁寧に研磨されている。重量186.4g。	H-11 SD43~44間 2層	
	2	沖縄産 施釉陶器	小碗	口~底部	口径 7.8	器高 3.7	底径 3.7	畳付は露胎となる。	H-11 SD43~44間 2層
	3	沖縄産 無釉陶器	挿針	底部	口径 —	器高 —	底径 13.0	内面全体に櫛目を付ける。	H-11 SD43~44間 2層
	4	沖縄産 施釉陶器	蓋	—	口径 5.8	器高 1.9	底径 4.3	縁に沈線を描き、紺色釉をかけている。	H-11 SD44内
	5	沖縄産 施釉陶器	瓶	胴部	口径 —	器高 —	底径 —	内外面に轆轤跡が残る。外面に飴釉をかける。	H-11 SD44内
	6	沖縄産 無釉陶器	壺	底部	口径 —	器高 —	底径 7.5	僅かに畳付を作る。内外面ともに灰色である。	H-11 SD44内
	7	白磁	小碗	口~底部	口径 8.0	器高 4.5	底径 3.4	口唇は露胎。	G-11・H-11 SD47~48間
	8	沖縄産 施釉陶器	皿	口~底部	口径 10.4	器高 2.5	底径 4.6	底部は基筒底状に作られる。外面及び内面一部に煤が付着する。	G-11・H-11 SD47~48間
	9	沖縄産 無釉陶器	瓶	底部	口径 —	器高 —	底径 10.4	底部と胴部の繋ぎ目が明確となっている。外底部は内側に窪む。	G-12 SD49 2層
	10	円盤状製品	C	—	長径 3.8	厚さ 1.1	最大幅 4.0	打ち欠いて円形に成形している。重量16.3g。	G-12 SD49内
	11	沖縄産 施釉陶器	碗	口~底部	口径 13.2	器高 6.4	底径 6.0	見込は蛇の目軸剥ぎ、畳付は露胎となる。	G-11 SK53内
	12	円盤状製品	—	—	長径 5.0	厚さ 1.6	最大幅 4.8	打ち欠いて円形に成形している。重量52.0g。	G-11 SK53内
	13	沖縄産 施釉陶器	小碗	口~底部	口径 8.0	器高 4.0	底径 3.6	見込は蛇の目軸剥ぎ、畳付は露胎となる。	H-11 SX9内
	14	沖縄産 施釉陶器	瓶	底部	口径 —	器高 —	底径 5.1	外面頸部から高台際まで施釉され、その他は露胎。	H-11 SX9内
	15	産地不明	袋物	底部	口径 —	器高 —	底径 7.6	調整跡が細かく残る。	H-11 SX9内
	16	石製品	鐘?	—	口径 —	器高 —	底径 —	全体が丁寧に研磨されている。孔を穿つ箇所をやり直した跡がある。重量205.2g。	H-11 SX9内
	17	沖縄産 施釉陶器	碗	口~底部	口径 14.0	器高 6.2	底径 6.5	外面に花文を描く。見込は蛇の目軸剥ぎ、畳付は露胎。	H-11 SX12内
	18	沖縄産 施釉陶器	急須	口~底部	口径 6.3	器高 9.3	底径 7.4	注ぎ口は欠損。底部以外は青色釉。	H-11 SX12内
	19	沖縄産 施釉陶器	火炉	口~底部	口径 14.6	器高 10.7	底径 8.8	外面胴部中位以下に沈線を巡らす。外面高台際から内面胴部上位まで飴釉を施す。	H-11 SX12内
図版57	20	本土産 近現代磁器	小碗	口~底部	口径 7.2	器高 —	底径 4.7	胴部に草、花を描く。	G-12 SD49 2層
	21	ガラス製品	瓶	口~底部	口径 2.0	器高 14.2	底径 a=6.2 b=4.3	薬瓶。薄く作られる。	G-12 SD49内
	22	青銅製品	把手	—	長さ 7.7	—	—	接続部に固定用のピンが付いている。重量19.0g。	G-12 SD49 4層



第 87 图 区画 17 出土遗物 (Ⅱ地区)



图版 57 区画 17 出土遺物 (II 地区)

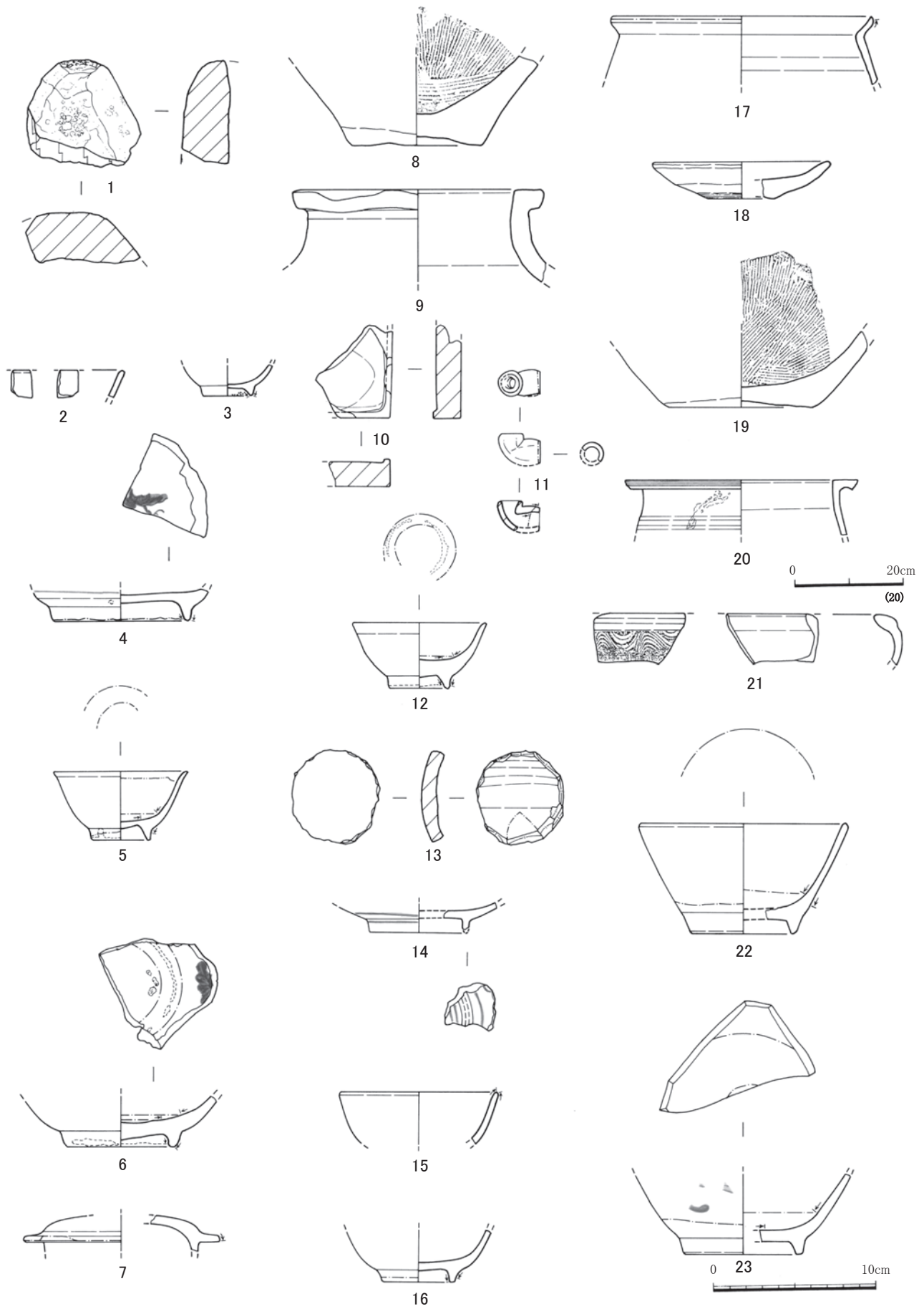
道1 (I地区)

沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、瓦を主とし、染付、本土産陶磁器、石製品、金属製品等を合計378点検出している。第22表に特徴的な遺物の観察事項、第66表に遺物毎の出土状況を示す。

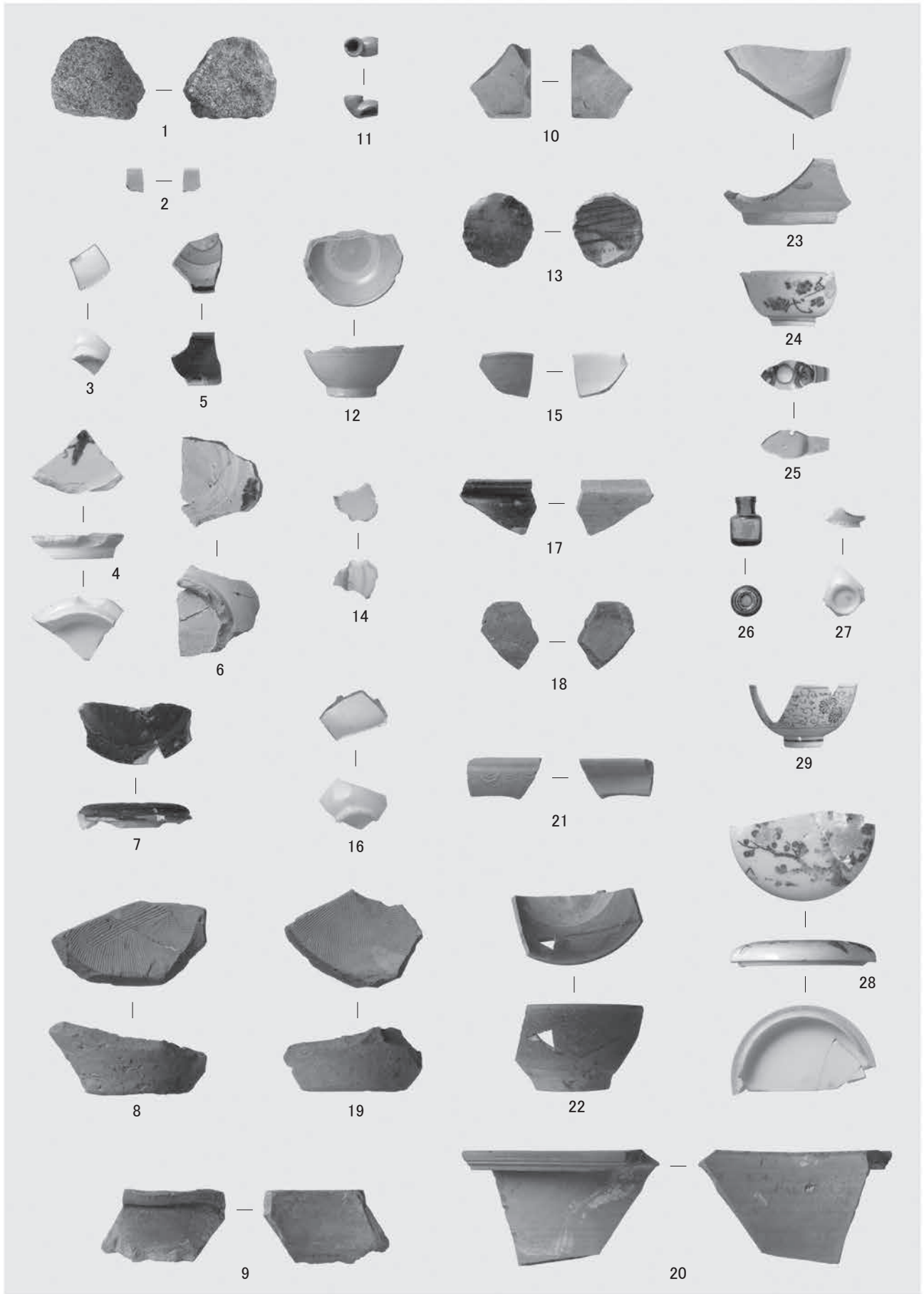
第22表 道1出土遺物観察一覧(I地区)

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第88図 図版58	1	石器	磨石	—	—	—	表面に滑面と敲打痕。重量203.8g。斑レイ岩。	H-8 SD9 1層	
	2	白磁	碗	口縁部	口径	器高	底径	素地は黄白色で細かい。	H-1-7 SD9 2層
	3	白磁	小碗	底部	口径	器高	底径	量付露胎。素地は灰白色で緻密。高台内面に砂目。	H-1-7 SD9 2層
	4	染付	碗	底部	口径	器高	底径	量付は露胎。素地は白色で緻密。内底に文様。徳化窯産。	H-8 SD9 2層
	5	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	外面褐釉、内面灰釉を掛け分け。内底蛇の目軸剥ぎ。素地は灰白色で細かい。量付に重ね焼きのアルミナ痕。	I-8 SD9 1層
	6	沖縄産 施釉陶器	皿	底部	口径	器高	底径	全面に白化粧と透明釉を施釉後、内底を蛇の目、量付を釉剥ぎ。素地は灰黄色で細かい。内底と高台に重ね焼きのアルミナ痕。	H-1-7 SD9 2層
	7	沖縄産 施釉陶器	蓋	—	口径	器高	底径	外面の甲蓋端部まで褐釉を施釉。素地は灰白色で緻密。	I-8 SD9 1層
	8	沖縄産 無釉陶器	播鉢	底部	口径	器高	底径	楡目は深く間隔は密。素地は暗赤褐色で緻密。	H-8 SD9 1層
	9	沖縄産 無釉陶器	壺	口縁部	口径	器高	底径	口唇部は方形。素地は暗赤褐色で緻密。	H-8 SD9 2層
	10	石製品	硯	—	口径	器高	底径	長方硯。全面に線条痕。重量67.6g。	H-8 SD9 1層
	11	煙管	—	雁首	火皿径	長さ	接続口径	沖縄産施釉陶器製。外面は灰釉で素地は灰白色で細かい。重量5.1g。	I-8 SD9 1層
	12	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	白化粧後に、灰オリーブ色釉を施釉し内底蛇の目・量付を釉剥ぎ。素地は灰白色で細かい。内底にアルミナ附着。	I-7 SD22 1層
	13	円盤状製品	—	—	長径	厚さ	最大幅	素材は沖縄産施釉陶器胴部片。重量39.2g。	I-7 SD22 1層
	14	染付	碗	底部	口径	器高	底径	全面施釉後に量付を釉剥ぎ。素地は灰白色で緻密。外底に文様。	H-8 SF1 1層
	15	瑠璃釉	小碗	口縁部	口径	器高	底径	外面瑠璃釉、内面青灰白色釉を掛け分け。素地は灰白色で緻密。	H-8 SF1 1層
	16	本土産磁器	青磁 小碗	底部	口径	器高	底径	全面施釉後に量付を釉剥ぎ。素地は灰白色で緻密。	G-9 SF1 1層
	17	沖縄産 施釉陶器	鍋	口縁部	口径	器高	底径	くの字状口縁。外面に褐釉を施釉。素地は灰白色で細かい。	H-8 SF1 1層
	18	沖縄産 無釉陶器	皿	口～底部	口径	器高	底径	ベタ底。器色は暗灰色、素地は暗赤褐色で緻密。	H-8 SF1 1層
	19	沖縄産 無釉陶器	播鉢	底部	口径	器高	底径	楡目間隔は密。素地は暗赤褐色で緻密。	H-8 SF1 1層
	20	沖縄産 無釉陶器	甕	口縁部	口径	器高	底径	逆L字状口縁。素地は赤褐色で緻密。口唇側面に沈線。外面に漆喰附着。	H-8 SF1 1層
	21	陶質土器	鉢	口縁部	口径	器高	底径	内湾口縁。素地は橙色で硬質。外面口縁部に沈線+波状文。	H-8 SF1 1層
	22	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径	器高	底径	灰釉を内胴下部～高台際まで施釉。素地は鈍橙色で細かい。	H-7 SF2 1層
	23	沖縄産 施釉陶器	碗	底部	口径	器高	底径	灰釉を内胴下部～高台際、内底に施釉。素地は灰白色で細かい。外面に文様。	H-7 SF2 1層
図版58	24	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	全面施釉後に量付を釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外面に胴版転写による文様。	H-8 SD9 1層
	25	本土産 近現代磁器	蓋	—	口径	器高	底径	甲蓋端部は露胎。撮み器部に1.2cmの孔。素地は灰白色で細かい。上面に文様。	I-8 SD9 1層
	26	ガラス製品	瓶	口～底部	口径	器高	底径	底部に◇内「SY」文字。色調は茶。栓はキャップか。	H-8 SD9 1層
	27	本土産 近現代磁器	小杯	底部	口径	器高	底径	全面施釉後に量付を釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外底に文字？。	I-7 SD22 1層
	28	本土産 近現代磁器	蓋	—	口径	器高	底径	袴端部露胎。素地は白色で緻密。上面に銅版転写と型紙摺で草花文。	I-7 SD22 1層
	29	本土産 近現代磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	全面施釉後に量付を釉剥ぎ。素地は灰白色で緻密。外面に花唐草文。	H-8 SF1 1層



第 88 图 道 1 出土遺物 (I 地区)



图版 58 道1 出土遺物 (I 地区)

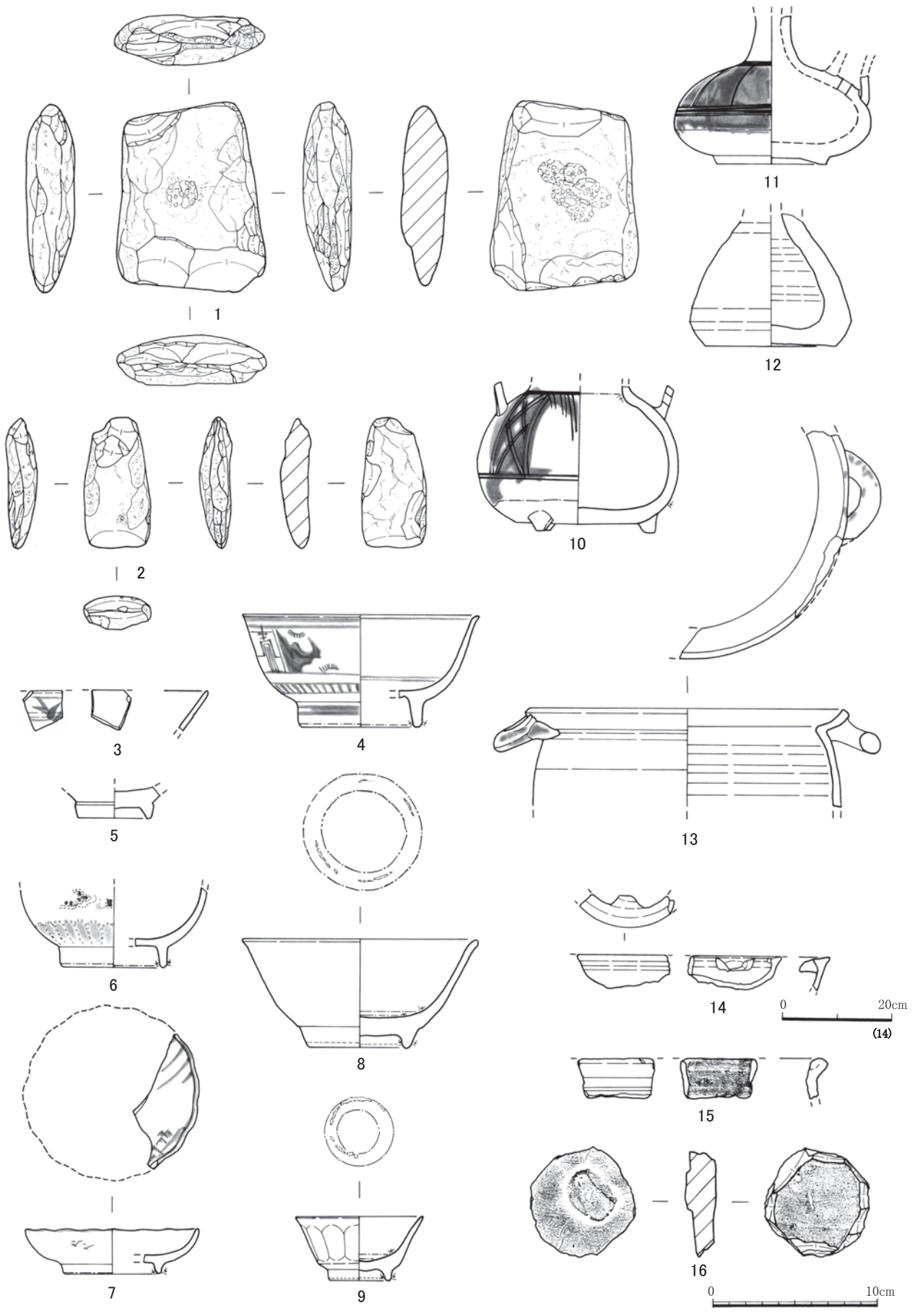
道1 (II地区)

沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、瓦を主とし、染付、色絵、本土産陶磁器、石製品、金属製品等を合計993点検出している。SD59から大部分の出土となっている。第23表に特徴的な遺物の観察事項、第67表に遺物毎の出土状況を示す。

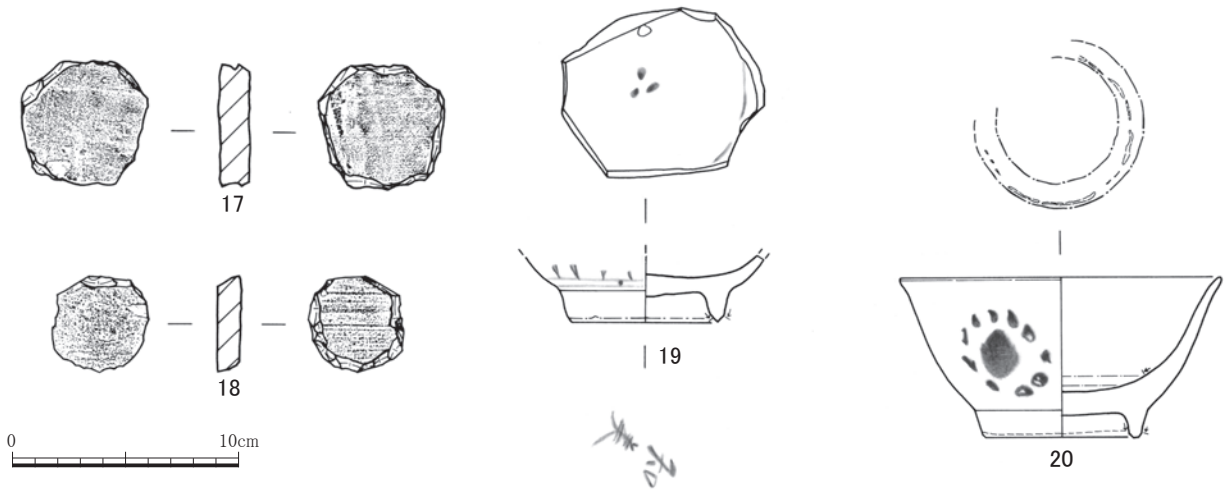
第23表 道1出土遺物観察一覧(II地区)

単位:cm

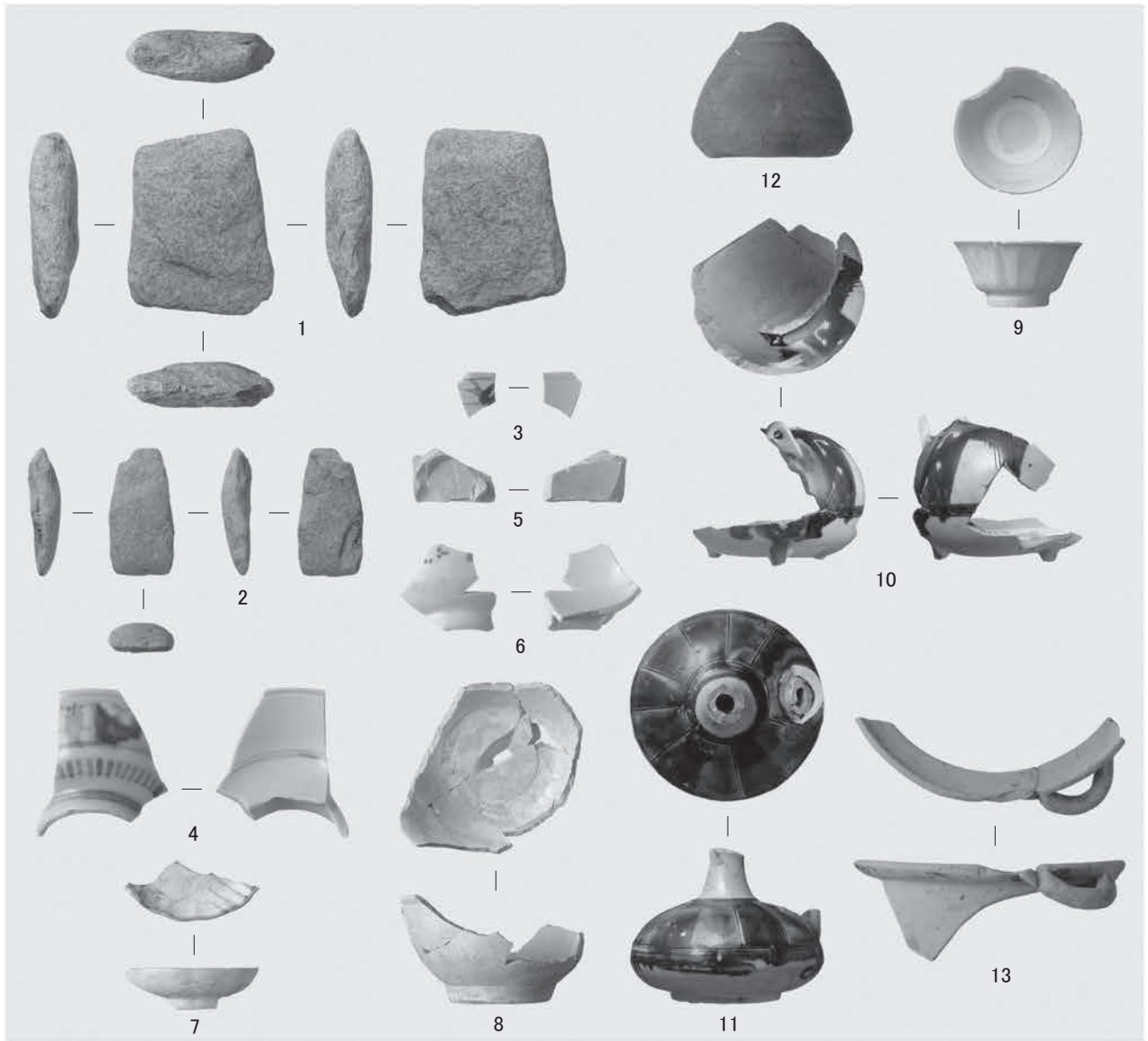
挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第89図 図版59	1	石器	石斧	—	—	—	全体的に磨かれているが、刃部は使用により欠けている。緑色片岩。重量503.4g。	E-10 SD59内	
	2	石器	石斧	—	—	—	表面は全体を磨いているが、裏面は刃部のみ磨いている。長軸の断面は蒲鉾状。重量91.8g。	E-10 SD59内	
	3	染付	碗	口縁部	口径	器高	底径	外面口縁部に草花文、内面口縁部に圏線を巡らす。	E-10 SD59内
	4	染付	碗	口～底部	口径 14.4	器高 6.9	底径 7.6	外面胴部に梅花文、寿字文及び蓮弁文を描き、内面は圏線を巡らす。	E-10 SD59内
	5	本土産陶器	碗	底部	口径	器高	底径	口縁を稜花状に成形し、呉須を塗る。内面に松林等を描く。	E-10 SD59内
	6	色絵	碗	底部	口径	器高	底径	外面に花文、蓮弁文を描く。	E-10 SD59内
	7	本土産磁器	染付皿	口～底部	口径 10.6	器高 2.7	底径 6.0	畳付から高台内は露胎。	E-10 SD59内
	8	沖縄産施釉陶器	碗	口～底部	口径 14.4	器高 6.6	底径 6.2	白化粧とし、内外面に細かい貫入が入っている。見込は蛇の目釉剥ぎとする。	E-10 SD59内
	9	沖縄産施釉陶器	小碗	口～底部	口径 7.9	器高 3.9	底径 3.9	外面胴部は蓮弁状に面取りする。見込は蛇の目釉剥ぎ。	E-10 SD59内
	10	沖縄産施釉陶器	急須	底部	口径	器高	底径	外面は沈線で格子状に描いたのちに釉薬にて色を加えている。	E-10 SD59内
	11	沖縄産施釉陶器	酒器	底部	口径	器高	底径	胴部上位から中位にかけて、沈線で区切り、青色釉と飴釉を交互に施す。	E-10 SD59内
	12	沖縄産無釉陶器	瓶	底部	口径	器高	底径	厚く、底部から頸部に向けて、窄まるように作られる。	E-10 SD59内
	13	陶質土器	鍋	口縁部	口径 19.8	器高	底径	把手は下向きに付けられる。外面は煤が付着している。	E-10 SD59内
第89図 図版60	14	陶質土器	かまど	口縁部	口径	器高	底径	口唇は中央で僅かに段をつける。内面は煤が付着する。	E-10 SD59内
	15	瓦質土器	火炉	口縁部	口径	器高	底径	口縁部は外反するとともに肥厚させている。	E-10 SD59内
	16	円盤状製品	—	—	長径 6.7	厚さ 1.8	最大幅 6.4	耳の部分を利用し、製品を作っている。重量84.8g。	E-10 SD59内
第90図 図版60	17	円盤状製品	—	—	長径 5.4	厚さ 1.4	最大幅 5.5	瓦を円盤状に成形している。重量53.8g。	E-10 SD60内
	18	円盤状製品	—	—	長径 4.2	厚さ 1.1	最大幅 4.2	沖縄産陶器を円盤状に成形している。重量25.9g。	E-11 SK79内
	19	染付	碗	底部	口径	器高	底径	外面腰部に蓮弁文、高台内に「和美」銘、見込に3点文を描く。	E-11 SK82内
	20	沖縄産施釉陶器	碗	口～底部	口径 14.2	器高 7.0	底径 6.8	外面に草花文を描く。	E-11 SK82内
図版60	21	石器	磨石	—	口径	器高	底径	平坦に加工されている箇所がある。重量99.4g。	E-10 SD59内
	22	石器	磨石	—	口径	器高	底径	磨かれている箇所があるが、大部分は欠けている。重量16.3g。	E-10 SD59内
	23	瓦	不明瓦 平瓦	—	口径	器高	底径	内面は布目跡が付く。内外面は黒色を呈す。	E-10 SD59内
	24	本土産近現代磁器	小碗	口縁部	口径 7.9	器高	底径	外面に染色体状の文様を描く。口唇に褐釉を塗る。	E-10 SD59内
	25	本土産近現代磁器	小碗	口縁部	口径 7.4	器高	底径	外面に草花文を描く。	E-10 SD59内
	26	本土産近現代磁器	小碗	口縁部	口径 6.9	器高	底径	外面に草花文？、口唇に呉須を施す。	E-10 SD59内
	27	本土産近現代磁器	蓋	—	口径 9.8	器高	底径	外面に草花文を描く。摘みは欠損。	E-10 SD59内
	28	本土産近現代磁器	蓋	—	口径 9.8	器高 2.6	底径 8.6	鶴文、花文を描く。	E-10 SD59内
	29	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 1.9	器高 7.9	底径 3.7	横方向に調整跡が付く。	E-10 SD59内
	30	本土産近現代磁器	小杯	口～底部	口径 6.3	器高 4.7	底径 3.0	外面に花文、見込は蛇の目釉剥ぎ。白化粧。	E-11 SK82内



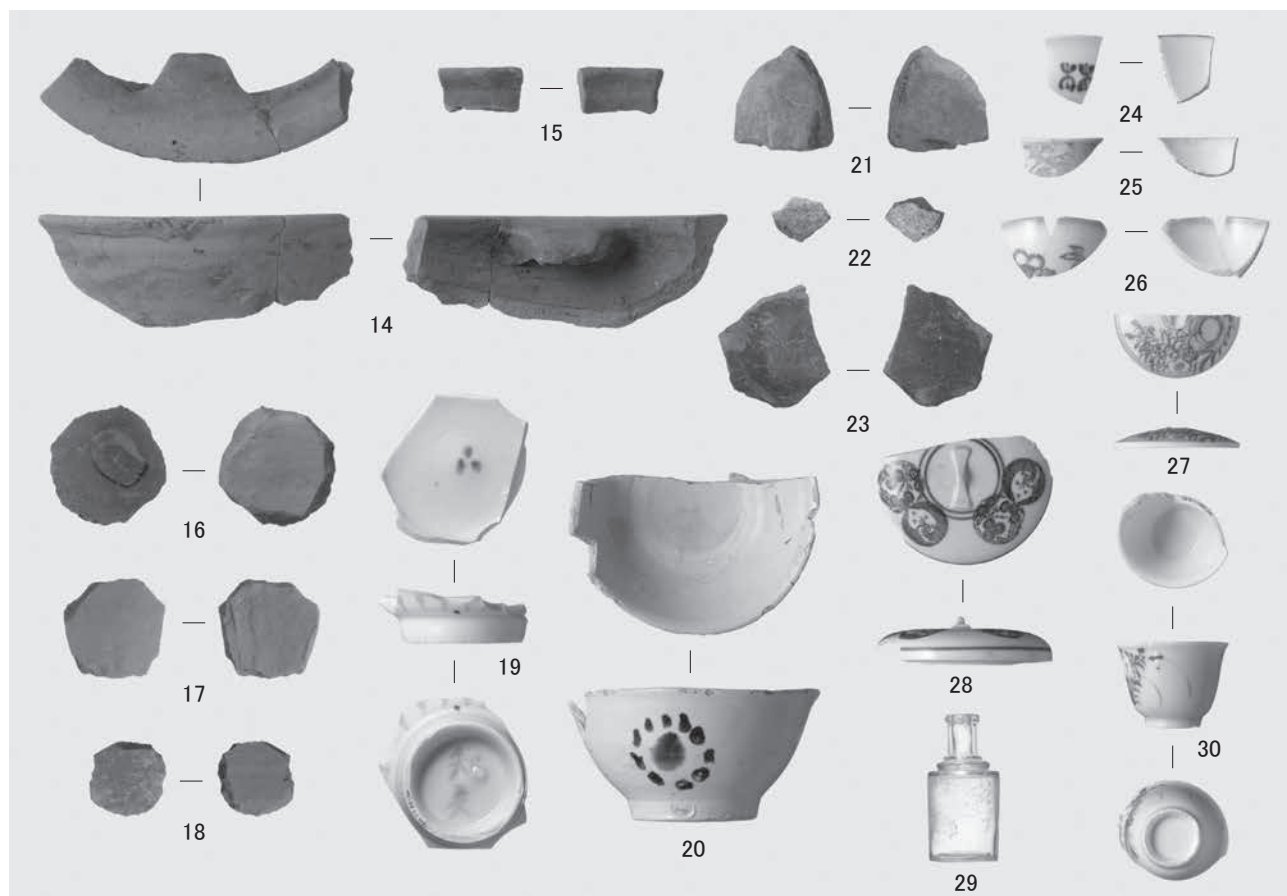
第 89 图 道 1 出土遺物 1(II 地区)



第 90 图 道1 出土遺物2(Ⅱ地区)



图版 59 道1 出土遺物1(Ⅱ地区)



図版 60 道1 出土遺物2 (Ⅱ地区)

道2 (Ⅱ地区)

沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、瓦を主とし、青磁、白磁、染付、本土産陶磁器、石製品、金属製品等を合計682点検出している。第24表に特徴的な遺物の観察事項、第68表に遺物毎の出土状況を示す。

第24表 道2出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)a

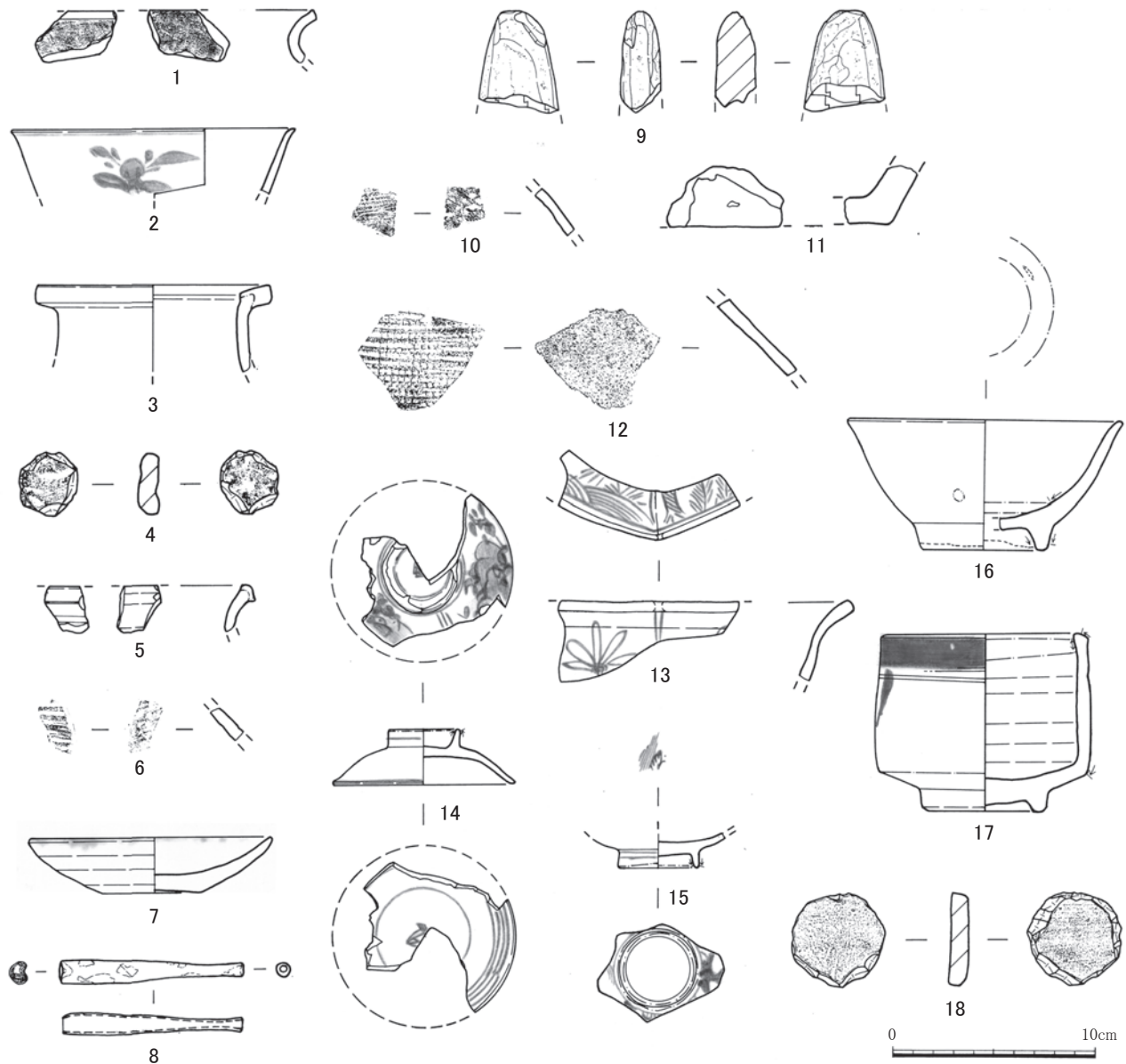
単位: cm

挿図番号 図版番号	種類・分類	部位	法量			観察事項	出土地	
第91図 図版61	1	カムイヤキ 壺	口縁部	口径	器高	底径	口縁部は外反し、口唇は僅かに厚い。	D-9・10 SD34内
	2	染付 碗	口縁部	口径	器高	底径	口唇は外反、外面胴部に草花文を描く。	D-9・10 SD34内
	3	沖縄産 無釉陶器 壺	口縁部	口径	器高	底径	直行する口縁に粘土を追加して外反させる。	D-9・10 SD34内
	4	円盤状製品	—	長径	厚さ	最大幅	内外面から調整されている。全体が角が取れ、滑らか。重量8.8g。	D-9・10 SD34内
	5	カムイヤキ 壺	口縁部	口径	器高	底径	口唇内外面を肥厚させる。外面の肥厚は尖るように作られる。頸部下部に沈圈線を巡らす。	D-9 SD35内
	6	カムイヤキ 壺	胴部	口径	器高	底径	外面を平行の叩き目、内面は格子状の叩き目で調整している。	D-9 SD35内
	7	沖縄産 無釉陶器 皿	口～底部	口径	器高	底径	口唇部に高台内は窪む。外面に轆轤跡。口唇部にタール状のものが付着する。	D-9 SD35内
	8	煙管	吸口	接続部径	長さ	吸口径	繋ぎ目はなく、口付は僅かに厚く作られる。内部に羅字の一部が残る。重量12.5g。	D-9 SD35内
	9	石器 石斧	—	口径	器高	底径	刃部は欠損している。表面の一部、側面は研磨されている。緑色岩。重量60.1g。	D-9 SD35内
	10	カムイヤキ 壺	胴部	口径	器高	底径	外面は細かい平行の叩き、内面を格子状の叩きで調整。	D-9・10 SD36 1層
	11	褐釉陶器 壺	底部	口径	器高	底径	外面は露胎、内面に釉を施す。赤色粒を含む。	D-9・10 SD36 上層
	12	褐釉陶器 壺	胴部	口径	器高	底径	外面に叩き目調整跡あり。白色粒、赤色粒を多く含み、内外面からも確認できる。	D-9・10 SD36 1層

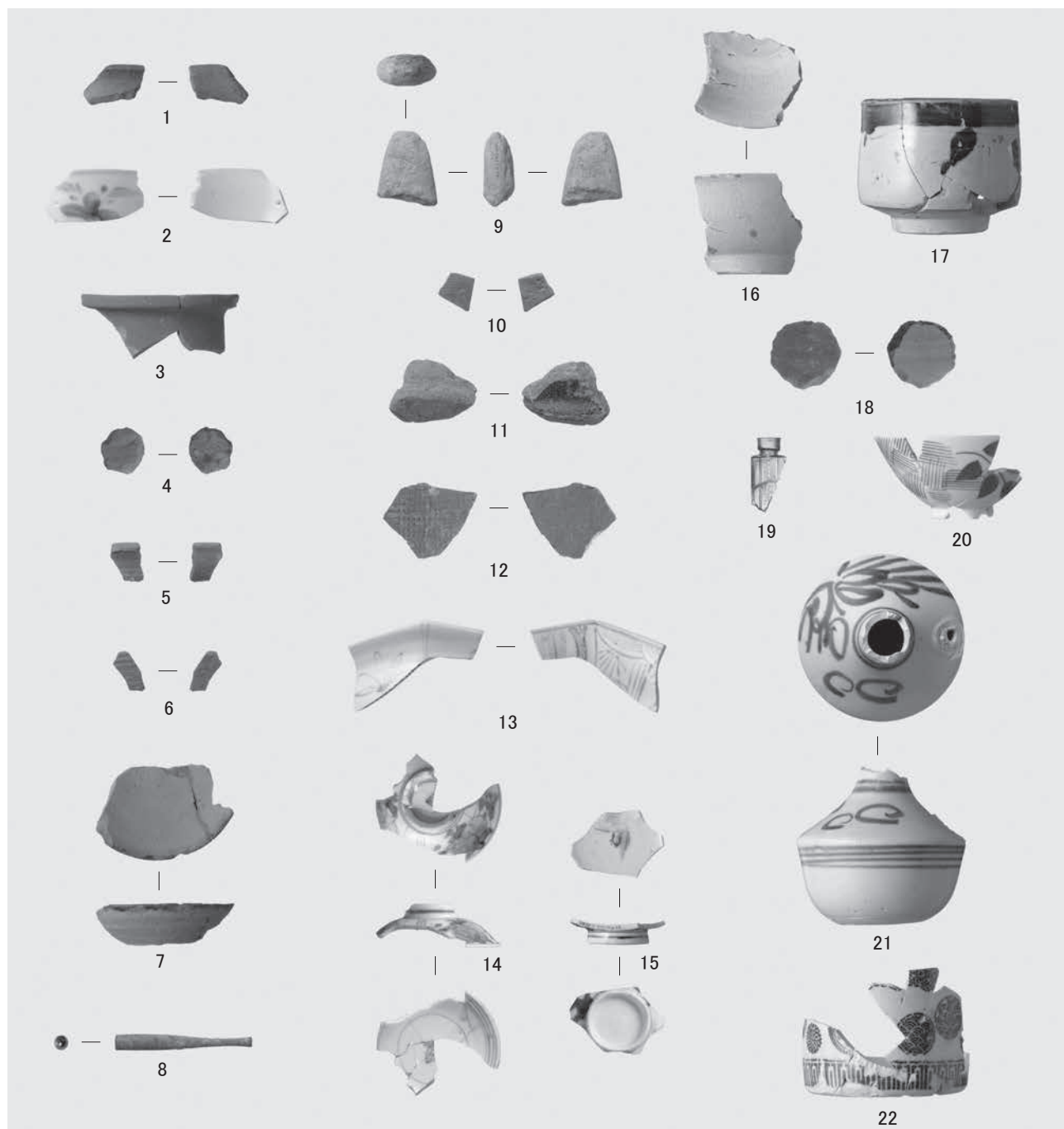
第24表 道2出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)b

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類・分類	部位	法量			観察事項	出土地		
			口径	器高	底径				
第91図 図版61	13	本土産磁器 染付鉢	口縁部	—	—	—	口縁部を外反させ、上面形は八角形にする。外面は2条線で区切り、中に花文を描く。内面は波文、草文等を描く。	D-9・10 SD36内	
	14	本土産磁器 蓋	—	口径 9.0	器高 2.7	—	外面草花文、圏線、銘を描き、内面は4条1組の圏線等を描く。	D-9・10 SD36 1層	
	15	本土産磁器 染付碗	底部	口径 —	器高 —	底径 4.0	外面に圏線等、内面に風景を描く。	D-9・10 SD36 下層	
	16	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.6	器高 6.4	底径 6.4	外面に鉄釉1点で文様?を描く。壘付露胎、見込蛇の目釉剥ぎで、全体に貫入が入る。	D-9・10 SD36内
	17	沖縄産 施釉陶器	火入	口～底部	口径 10.2	器高 8.8	底径 6.2	全体を白化粧とし、口唇部外側から外面口縁部に呉須を施す。外面胴部2箇所(魚?)を呉須で表現する。外面腰部以下及び内面は釉葉なし。	D-9・10 SD36内
	18	円盤状製品	—	—	長径 4.6	厚さ 0.9	最大幅 4.6	内外面から調整されている。重量30.9g。	D-9・10 SD36内
図版61	19	ガラス製品	瓶	口縁部	口径 1.5	器高 —	底径 —	外面に「YE・ROHTO」銘。	D-9・10 SD34内 + D-9 SD35 粘土層
	20	本土産 近現代磁器	碗	口～底部	口径 11.5	器高 5.5	底径 4.0	外面に8条1組の直線文を格子状に組み合わせたものと草文を描く。	D-9・10 SD36 1層
	21	本土産 近現代磁器	水注	底部	口径 —	器高 —	底径 5.3	胴部に草文、圏線を巡らす。頸部と注ぎ口は欠損。底部は碁箱底状で露胎となる。	D-9・10 SD36内
	22	本土産 近現代磁器	火入	底部	口径 —	器高 —	底径 10.1	外面胴部に波文、蓮弁文を施す。高台内は窪む。	D-9・10 SD36内



第91図 道2 出土遺物(Ⅱ地区)



図版 61 道2 出土遺物（Ⅱ地区）

第3項 包含層出土遺物

a I地区（Ⅱ層）

Ⅱ層より出土した遺物は総数5,761点である。遺物の種類としては、青磁、白磁、染付、色絵、瑠璃釉、褐釉陶器、本土産染付、本土産陶器、本土産近代陶器、本土産近現代磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、土器、陶質土器、瓦質土器、カムイヤキ、瓦、煉瓦、円盤状製品、石器、石製品、石材、貝製品、煙管、銭貨、青銅製品、鉄製品、ガラス製品、産地不明品などである。Ⅱ層についても、主体は本土産近現代磁器及び沖縄産施釉陶器の碗や皿、沖縄産無釉陶器の壺、瓦などである。縄文時代相当の資料から近現代の資料までが混在してみられる。図示および写真撮影した遺物の特徴については、観察表（第25表）に記す。

第25表 包含層(Ⅱ層)出土遺物観察一覧(Ⅰ地区)a

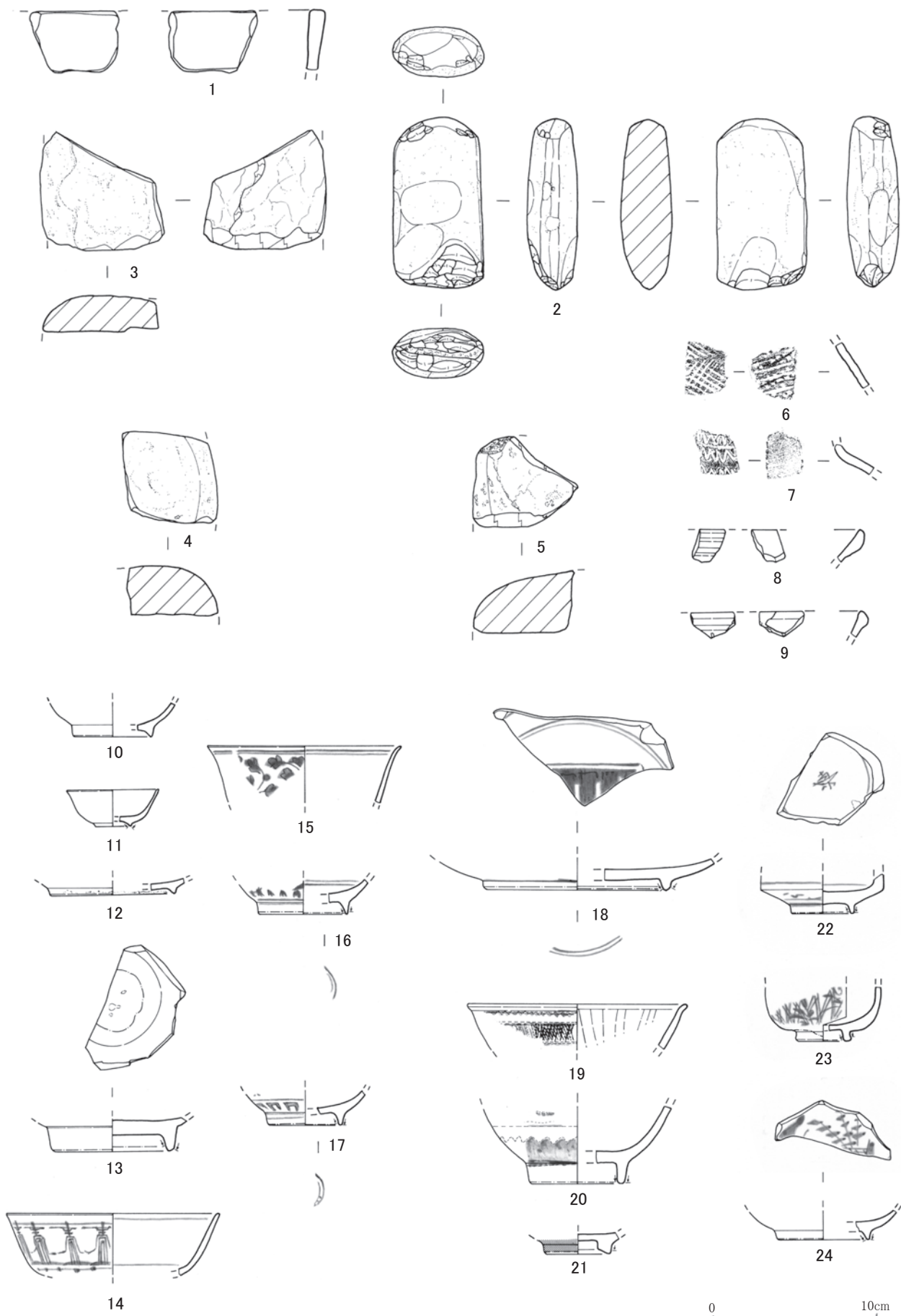
単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第92図 図版62	1	土器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	石英などの粗砂粒を多く混入する。口唇部は平坦。縄文時代晩期相当の土器と考えられる。	G-8 Ⅱ層
	2	石器	磨製石斧	—	口径 —	器高 —	底径 —	表裏面及び上端に磨面。刃縁は大きく摩滅している。緊縛痕あり。磨石転用品と考えられる。緑色岩。重量335.0g。	G-6 Ⅱ層
	3	石器	磨石	—	口径 —	器高 —	底径 —	左側側面に磨面。裏面及び上下端は自然面。砂岩。重量171.6g。	H-7 Ⅱ層
	4	石器	磨石	—	口径 —	器高 —	底径 —	表面及び左側側面に磨面。他はすべて自然面。緑色岩。重量189.8g。	G-8 Ⅱ層
	5	石器	磨石	—	口径 —	器高 —	底径 —	表面に磨面。他はすべて自然面。砂岩。重量160.8g。	E-8 Ⅱ層
	6	カマイヤキ	壺	胴部	口径 —	器高 —	底径 —	内面は格子状の当て具痕、外面には羽状の叩き目痕がみられ、ともにナデ調整が施される。胎土は灰黒色を呈し、白色粒を含む。	E-8 Ⅱ層
	7	カマイヤキ	壺	胴部	口径 —	器高 —	底径 —	内面に回転擦痕。外面は波状の沈線が3本めぐり、胎土は灰色で、黒色粒、白色粒を含む。	F-8 Ⅱ層
	8	白磁	碗	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	玉縁口縁。玉縁下端の削りが明瞭。素地は白灰色で細かい。黒色粒を含む。	F-9 Ⅱ層
	9	白磁	碗	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	玉縁口縁。素地は白色で緻密。黒色粒を含む。	F-7 Ⅱ層
	10	白磁	小碗	底部	口径 —	器高 —	底径 4.8	素地は白色の緻密。黒色粒を含む。福建産か。	H-8 Ⅱ層
	11	白磁	小杯	口～底部	口径 5.6	器高 2.3	底径 2.2	量付は露胎で、砂目あり。内面には砂が付着している。素地は白色で緻密。徳化窯産。	C-8 Ⅱ層
	12	白磁	皿	底部	口径 —	器高 —	底径 7.6	量付に砂目あり。型成形。素地は白色で緻密。徳化窯産。	I-8 Ⅱ層
	13	染付	碗	底部	口径 —	器高 —	底径 7.4	見込みは蛇の目状に釉剥ぎ。量付は露胎。内底に目跡あり。素地は白灰色で細かい。黒色粒を含む。福建・広東系。	E-6 Ⅱ層
	14	染付	碗	口縁部	口径 13.0	器高 —	底径 —	素地は白色で緻密。徳化窯産。	F-7 Ⅱ層
	15	染付	碗	口縁部	口径 11.8	器高 —	底径 —	素地は白色で緻密。黒色粒を僅かに含む。景德鎮産。	F-7 Ⅱ層
	16	染付	小碗	底部	口径 —	器高 —	底径 5.4	量付は露胎。素地は白色で緻密。景德鎮産。	E-8 Ⅱ層
	17	染付	小碗	底部	口径 —	器高 —	底径 4.4	量付は露胎。素地は白色で緻密。徳化窯産。	H-7 Ⅱ層
	18	染付	皿	底部	口径 —	器高 —	底径 11.0	量付は露胎。素地は白色で緻密。徳化窯産。	H-8 Ⅱ層
	19	色絵	碗	口縁部	口径 13.4	器高 —	底径 —	素地は淡灰白色で緻密。	H-8 Ⅱ層
	20	色絵	碗	底部	口径 —	器高 —	底径 5.4	量付は露胎。素地は淡灰白色で緻密。	H-9 Ⅱ層
	21	瑠璃釉	碗	底部	口径 —	器高 —	底径 4.0	量付から外底にかけて露胎。素地は淡灰白色で緻密。	F-8 Ⅱ層
22	本土産磁器	染付小碗	底部	口径 —	器高 —	底径 3.9	量付は露胎。素地は白色で細かい。肥前産。	F-7 Ⅱ層	
23	本土産磁器	染付小碗	底部	口径 —	器高 —	底径 3.2	量付は露胎。素地は白色で緻密。肥前産。	C-8 Ⅱ層	
24	本土産磁器	染付皿	底部	口径 —	器高 —	底径 5.6	量付は露胎。素地は白色で緻密。肥前産。	G-8 Ⅱ層	
第93図 図版62	25	本土産磁器	染付碗	底部	口径 —	器高 —	底径 —	量付は露胎。素地は白色で緻密。肥前産。	G-8 Ⅱ層
	26	沖縄産施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.2	器高 5.7	底径 6.4	内外面の上半部に灰釉を単掛け。下半部は露胎。内底中央に鉄絵で丸文。フィガキー手法。内面の一部に煤が付着。素地は黄色味をおびた白色で緻密。	E-6 Ⅱ層
	27	沖縄産施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.2	器高 6.7	底径 6.0	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。内底及び量付から外底は露胎。口唇部に緑釉を施釉。内底に目跡あり(アルミナ付着)。外面は轆轤痕が明瞭。素地は黄色味をおびた白色で粗い。	E-6 Ⅱ層
	28	沖縄産施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.4	器高 6.8	底径 6.2	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。量付は露胎。呉須で花卉状文を描く。素地は橙白色で細かい。	E-7 Ⅱ層
	29	沖縄産施釉陶器	小碗	口～底部	口径 10.0	器高 5.3	底径 3.9	内面及び外面上半部まで灰釉を単掛け。外面下半部から外底まで露胎。素地は橙白色で細かい。	D-6 Ⅱ層
	30	沖縄産施釉陶器	小碗	口～底部	口径 9.6	器高 4.5	底径 4.4	内面に灰釉、外面に鉄釉を掛け分け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。外面は高台脇まで施釉し、高台以下は露胎。内底に目跡あり。素地は橙白色でやや粗い。	H-8 Ⅱ層
	31	沖縄産施釉陶器	皿	口～底部	口径 21.1	器高 6.1	底径 9.2	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。量付は露胎。内面に呉須と鉄釉で文様を描く。量付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は橙白色で細かい。	D-8 Ⅱ層

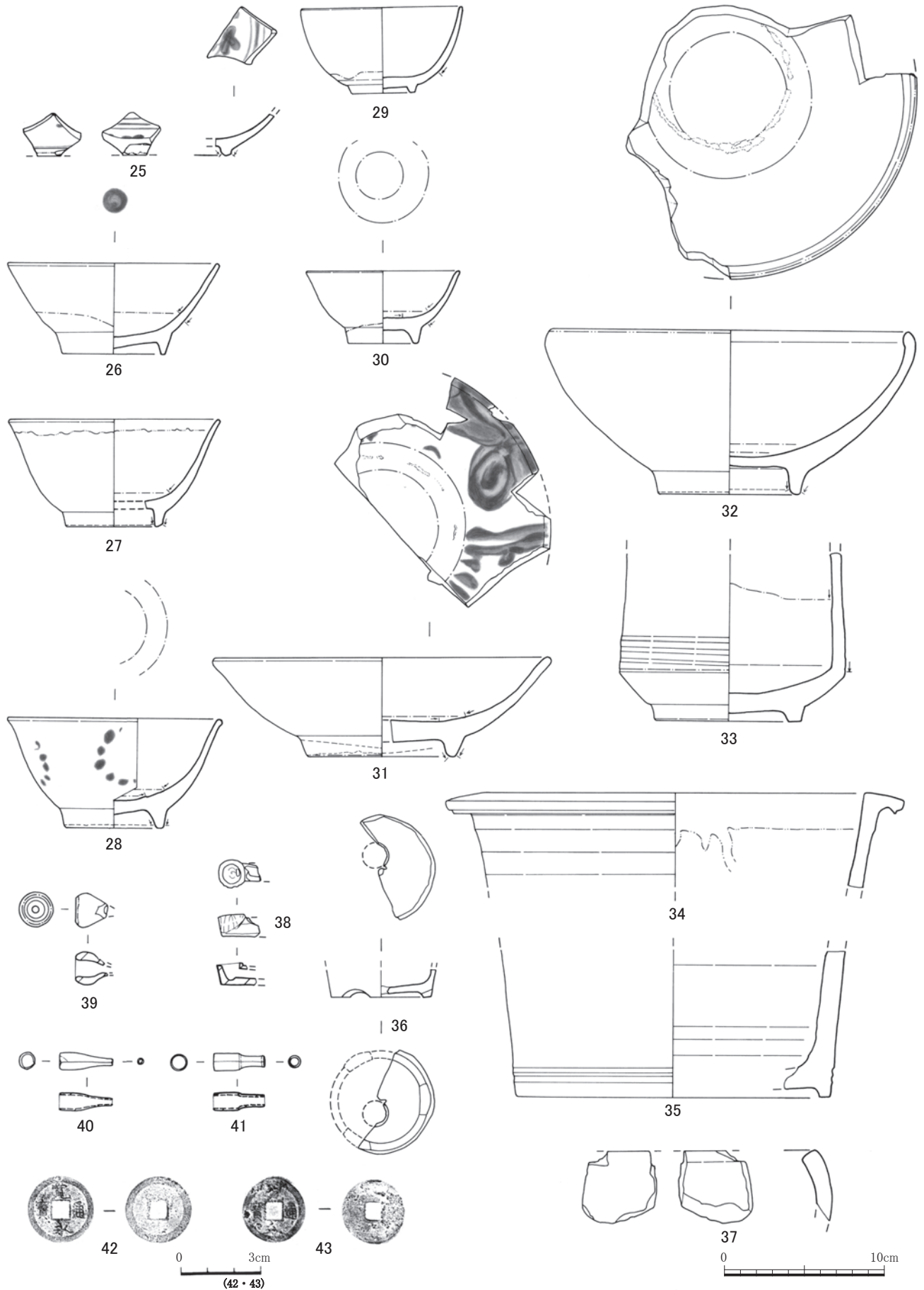
第25表 包含層(Ⅱ層)出土遺物観察一覧(Ⅰ地区)b

単位:cm

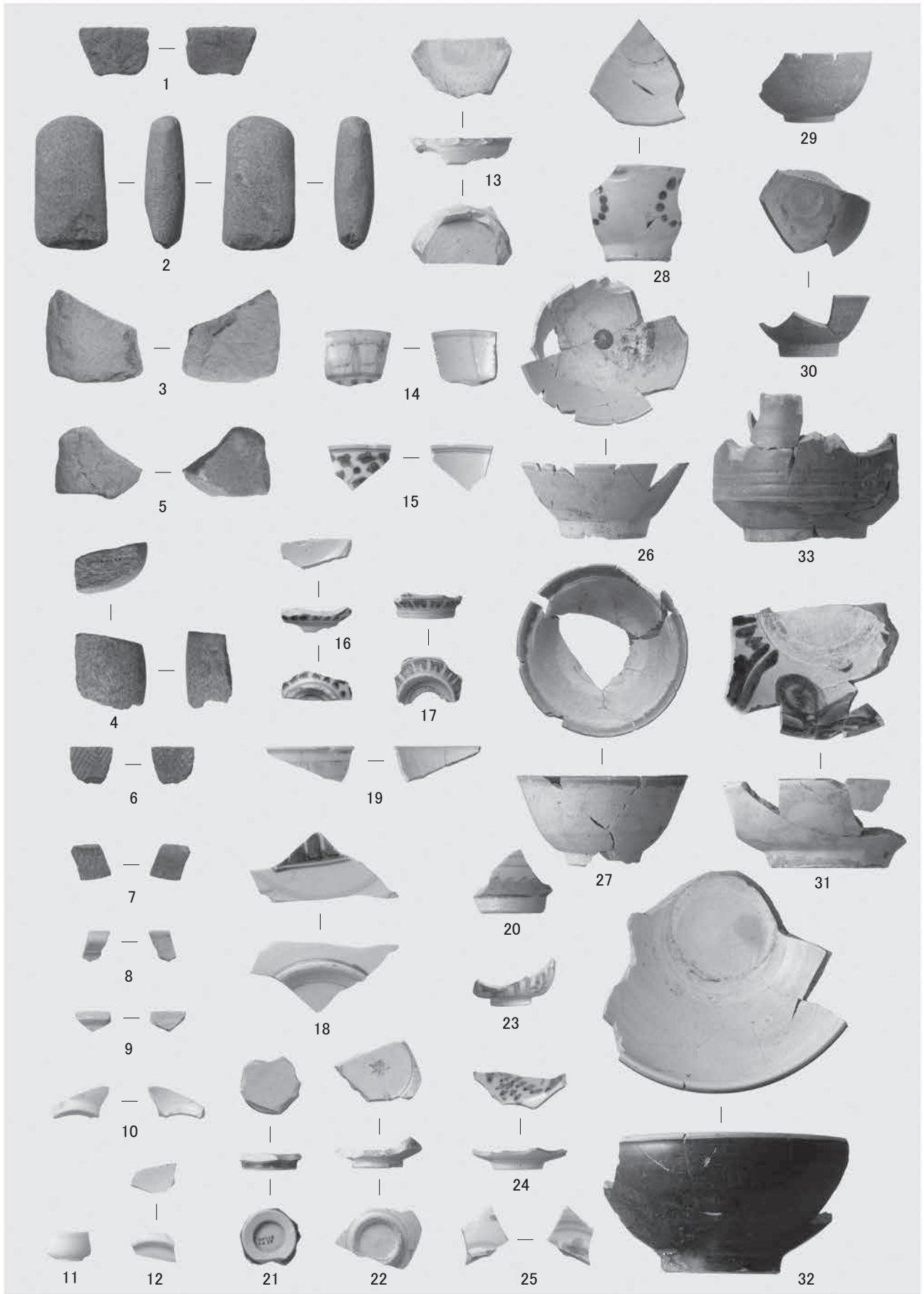
挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
第93図 図版62	32	沖縄産 施釉陶器	鉢	口～底部	口径 23.0	器高 10.2	底径 9.0	内面に白化粧+透明釉、外面に鉛釉を掛け分け。内底を蛇の目状に釉剥ぎ。量付は露胎で、アルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は黄色味をおびた白色でやや粗い。	E-7 Ⅱ層
	33	沖縄産 施釉陶器	火炉	底部	口径 —	器高 —	底径 9.2	内外面に灰釉を単掛け。内面下半部は露胎。外面腰部から外底まで露胎。外面腰部近くに3本の沈線。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は橙白色で、やや粗い。	G-8 Ⅱ層
第93図 図版63	34	沖縄産 無釉陶器	鉢	口縁部	口径 28.6	器高 —	底径 —	外面口唇下部に1本の沈線。素地は赤褐色でやや粗い。黒色粒、赤色粒、白色粒を含む。	D-8 Ⅱ層
	35	沖縄産 無釉陶器	鉢	底部	口径 —	器高 —	底径 19.6	底部近くに2本の沈線。内外面ともに轆轤痕が明瞭。素地は赤褐色でやや粗い。黒色粒、赤色粒、白色粒を含む。	D-8 Ⅱ層
	36	沖縄産 無釉陶器	鉢	底部	口径 —	器高 —	底径 6.2	挟り入り高台。外底面から内底面に向かって開けられた孔があることより、植木鉢と考えられる。素地は暗赤褐色で粗い。白色粒を含む。	E-7 Ⅱ層
	37	瓦質土器	火炉	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	外面及び口唇部上面はミガキ、内面は丁寧なヨコナデを施す。胎土は暗灰黄色で粗い。白色粒、赤色粒を含む。	C-8 Ⅱ層
	38	煙管	雁首	—	口径 —	器高 —	底径 —	沖縄産陶器製。無釉。火皿部の立ち上がり(脂反し)は低い。火皿及び、首部の面取りが明瞭。先に火皿部から孔が開けた後に火口側から孔を開けている。素地は暗褐色でやや粗い。白色粒、黒色粒を含む。火皿1.6cm、重量4.6g。	H-9 Ⅱ層
	39	煙管	吸口	—	口径 —	器高 —	底径 —	沖縄産陶器製。透明釉を施す。小口は露胎で平坦に仕上げ。素地は黄色味の強い白色でやや粗い。黒色粒を含む。口付部分は欠損。小口2.1cm、重量6.3g。	G-9 Ⅱ層
	40	煙管	吸口	—	口径 —	器高 —	底径 —	青銅製。板材を筒状に曲げて作られたものと考えられる。口付部分は欠損。小口1.0cm、吸口0.4cm、重量4.9g。	F-7 Ⅱ層
	41	煙管	吸口	—	口径 —	器高 —	底径 —	青銅製。小口及び口付は平坦に仕上げ。小口1.0cm、吸口0.6cm、重量6.7g。	F-6 Ⅱ層
	42	銭貨	寛永通寶	—	外径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	江戸時代。重量3.0g。	C-8 Ⅱ層
	43	銭貨	寛永通寶	—	外径 2.3	孔径 0.6	厚さ 0.1	上部及び下部は変形。江戸時代。重量2.6g。	H-8 Ⅱ層
図版63	44	本土産磁器	小碗	底部	口径 —	器高 —	底径 4.0	透明釉を施す。素地は白色で緻密。統制磁器。外底に「□1056」という銘あり。近現代。	D-8 Ⅱ層
	45	本土産磁器	小碗	底部	口径 —	器高 —	底径 3.3	透明釉を施す。素地は白色で緻密。統制磁器。外底に「□376」という銘あり。近現代。	H-8 Ⅱ層
	46	本土産磁器	蓋	—	口径 —	器高 1.2	底径 —	ほぼ完形。撮径1.2cm。外面に銅版転写による文様。素地は白色で緻密。透明釉を施す。近現代。	D-8 Ⅱ層
	47	本土産陶器	蓋	—	口径 —	器高 2.2	底径 —	撮径1.5cm。外面にゴム版による文様。透明釉を施す。素地は白灰色で細かい。近代。	H-7 Ⅱ層
	48	本土産磁器	香炉	口～底部	口径 —	器高 —	底径 4.2	青磁の香炉。量付は露胎。素地は白灰色で細かい。黒色粒を大量に含む。近現代。	C-8 Ⅱ層
	49	本土産陶器	散蓮華	皿部	口径 —	器高 —	底径 —	接地面以外に淡黄色及び緑色の釉を施す。素地は黄色味を帯びた白色で細かい。黒色粒を含む。近代。	I-7 Ⅱ層
	50	銭貨	一銭	—	外径 2.3	孔径 —	厚さ 0.1	大正十二年発行の一銭青銅貨。表に桐の文様。重量3.7g。	C-8 Ⅱ層
	51	銭貨	一銭	—	外径 2.3	孔径 —	厚さ 0.1	昭和九年発行の一銭青銅貨。表に桐の文様。重量3.7g。	H-8 Ⅱ層
	52	鉄製品	器種不明	—	口径 —	器高 —	底径 —	「L」字状を呈する。端部は平坦になっている。全体的に歪んでいる。長さa10.3cm、長さb1.0cm、重量24.3g。	H-7 Ⅱ層
	53	鉄製品	釘	—	口径 —	器高 —	底径 —	断面四角形を呈する。釘の頭はつぶれている。長さa26.3cm、長さb1.4cm、重量225.0g。	G-8 Ⅱ層
	54	鉄製品	ヘラ	—	口径 —	器高 —	底径 —	刃部。長さa13.3cm、長さb4.6cm、重量146.1g。	H-8 Ⅱ層
	55	鉄製品	包丁	—	口径 —	器高 —	底径 —	刃部～中子。刃の形状は方形を呈する。長さa17.3cm、長さb2.8cm、重量50.2g。	F-8 Ⅱ層
	56	鉄製品	手斧?	—	口径 —	器高 —	底径 —	刃部。両刃。長さa12.5cm、長さb5.5cm、重量242.2g。	C-8 Ⅱ層
	57	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 1.2	器高 4.1	底径 1.4	ガラス自体に気泡が多くみられる。	F-8 Ⅱ層
58	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 1.6	器高 6.0	底径 a=2.5 b=2.2	ガラス自体に気泡が多くみられる。外面に目盛と考えられる線が5本入っている。	F-8 Ⅱ層	
59	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 3.2	器高 3.9	底径 4.4	外面二箇所に「鈴虫」というエンボス。鈴虫ポマードの瓶と考えられる。	F-8 Ⅱ層	
60	石製品	石臼	—	口径 —	器高 4.5	底径 —	厚さ3.3cm、孔2.4cm、重量8.2kg。砂岩。	F-8 Ⅱ層	
61	石製品	石臼	—	口径 —	器高 10.6	底径 —	厚さ10.6cm、孔1.7cm、重量21.0kg。砂岩。	H-9 Ⅱ層	
62	石製品	石臼	—	口径 —	器高 11.0	底径 —	厚さ8.9cm、孔4.0cm、重量9.5kg。砂岩。	C-8 Ⅱ層	



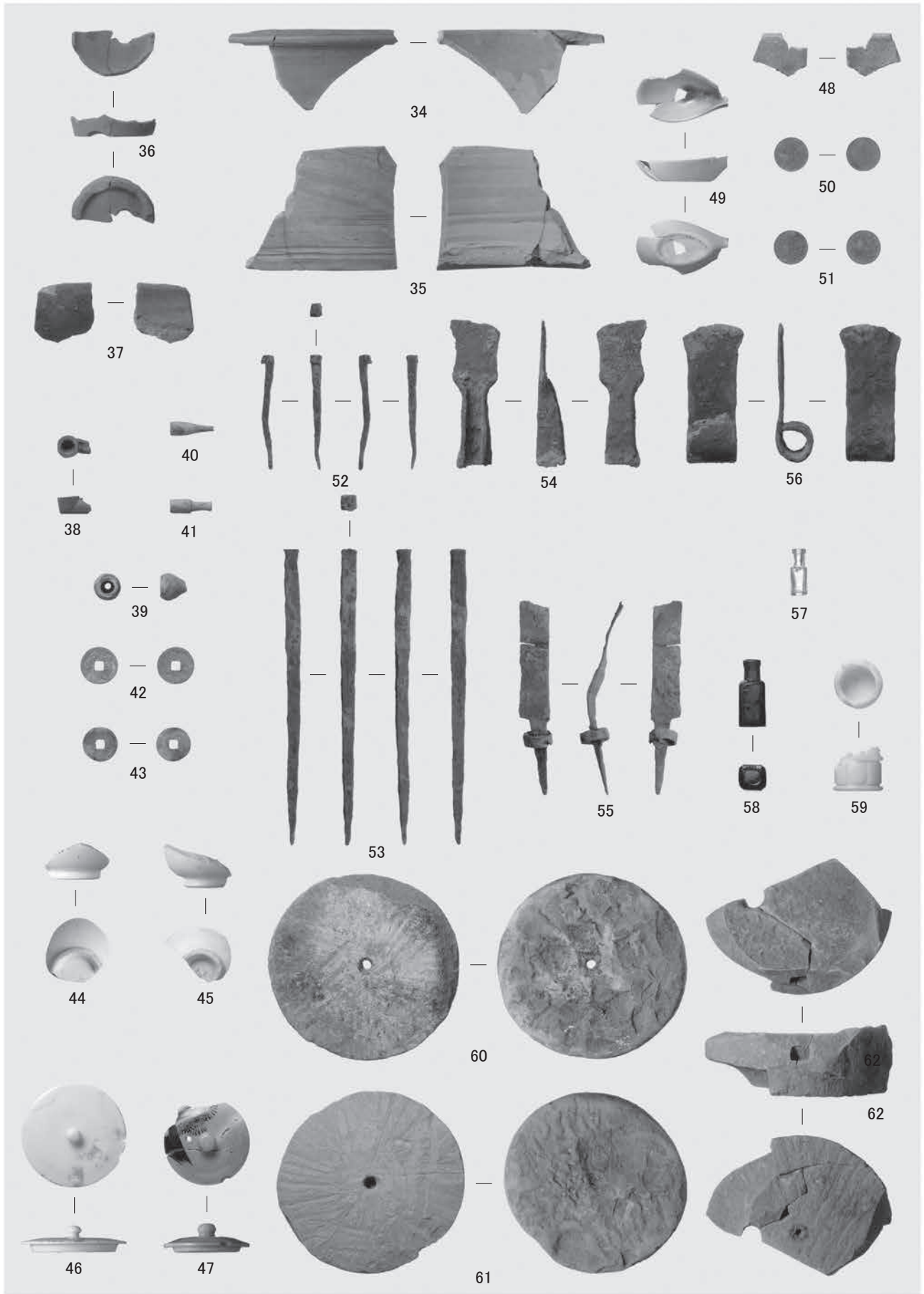
第 92 图 包含層(Ⅱ層)出土遺物1(I地区)



第93图 包含層（Ⅱ層）出土遺物2（Ⅰ地区）



图版 62 包含層（Ⅱ層）出土遺物1（Ⅰ地区）



图版 63 包含層 (II 層) 出土遺物2 (I 地区)

b II 地区 (II 層)

II 層より出土した遺物は総数3,284点である。遺物の種類としては、青磁、白磁、染付、色絵、瑠璃釉、褐釉陶器、本土産染付、本土産陶器、本土産近代陶器、本土産近現代磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、土器、陶質土器、瓦質土器、カムイヤキ、瓦、煉瓦、円盤状製品、石器、石製品、石材、貝製品、煙管、銭貨、青銅製品、鉄製品、ガラス製品、産地不明品などである。I 地区同様に、主体は本土産近現代磁器及び沖縄産施釉陶器の碗や皿、沖縄産無釉陶器の壺、瓦などで、縄文時代相当の資料から近現代の資料までが混在する。図示および写真撮影した遺物の特徴については、観察表(第26表)に記す。

第26表 包含層(II層)出土遺物観察一覧(II地区)a

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第94図 図版64	1	土器	鍋	口縁部	—	—	指頭による調整の後にナデ調整。口唇部は平坦。石英などの細砂粒を混入する。ややアバタ状を呈する。	E-9 II層	
	2	土器	鍋	口縁部	—	—	滑石を多く混入する。	D-11 II層	
	3	石器	磨製石斧	—	口径	器高	底径	表裏面に磨面。緑色岩。重量172.2g。	E-9 II層
	4	石器	磨製石斧	—	口径	器高	底径	表裏面に磨面。刃部は破損。緑色岩。重量121.0g。	D-10 II層
	5	石器	磨石	—	口径	器高	底径	破損が著しく、不明瞭だが、一部磨面が確認できる。緑色岩。重量43.7g。	C・D-10 II層
	6	石器	石鏃	—	口径	器高	底径	周縁に剥離の痕跡が一部でみられるが、全体的には確認できないことより、未製品と考えられる。緑色岩。重量3.5g。	E-9 II層
	7	カムイヤキ	壺	胴部	口径	器高	底径	内面は当て具痕がみられ、ナデ調整が施される。胎土は暗褐色を呈し、白色粒を多く含む。	C-10 II層
	8	カムイヤキ	壺	胴部	口径	器高	底径	内面は当て具痕、外面には叩き目痕がみられ、ともにナデ調整が施される。胎土は暗褐色を呈し、白色粒、黒色粒、褐色粒を含む。	D-10 II層
	9	カムイヤキ	壺	胴部	口径	器高	底径	内面は当て具痕、外面には叩き目痕がみられ、ともにナデ調整が施される。胎土は暗褐色を呈し、白色粒を多く含む。	E-10 II層
	10	カムイヤキ	壺	胴部	口径	器高	底径	内面は回転擦痕が明瞭。また内面には当て具痕、外面には叩き目痕がみられる。胎土は暗褐色を呈し、白色粒を多く含む。	G-12 II層
	11	カムイヤキ	壺	胴部	口径	器高	底径	内面は当て具痕が僅かにみられる。胎土は暗褐色を呈し、白色粒を多く含む。	D-11 II層
	12	カムイヤキ	器種不明	口縁部	口径	器高	底径	小破片のため不明瞭。胎土は灰色を呈し、白色粒を含む。碗形?	G-12 II層
	13	白磁	碗	口縁部	口径	器高	底径	玉縁口縁。素地は白灰色で緻密。黒色粒を含む。	E-10 II層
	14	白磁	碗	口縁部	口径	器高	底径	玉縁口縁。玉縁下端の削りが明瞭。素地は白灰色で緻密。黒色粒を含む。	D-10 II層
	15	白磁	碗	口縁部	口径	器高	底径	玉縁口縁。玉縁下端の削りが明瞭。素地は白灰色で緻密。黒色粒を含む。	G-12 II層
	16	白磁	小碗	口縁部	口径 8.8	器高 —	底径 —	型成形。口唇部を軸剥ぎする。素地は白色で緻密。徳化窯産。	C-10 II層
	17	白磁	碗	口縁部	口径	器高	底径	素地は白色で緻密。黒色粒を含む。	D-10 II層
第94図 図版65	18	白磁	小碗	口縁部	口径 8.4	器高 —	底径 —	素地は白色で緻密。	D-10 II層
	19	青磁	碗	底部	口径	器高	底径 5.0	内外面施釉。畳付から外底にかけて露胎。内底に印花文。素地は淡褐色で細かい。	D-11 II層
	20	青磁	器種不明	底部	口径	器高	底径 2.8	内面は露胎となっており、轆轤痕が明瞭。素地は橙色で細かい。黒色粒を含む。	G-11・12 II層
	21	染付	碗	口縁部	口径 14.4	器高 —	底径 —	素地は白色で緻密。徳化窯産。	E-9 II層
	22	染付	碗	口縁部	口径 14.5	器高 —	底径 —	素地は白色で緻密。黒色粒を含む。徳化窯産。	E-10 II層
	23	染付	碗	口縁部	口径	器高	底径	素地は白色で緻密。黒色粒を含む。徳化窯産。	F-10 II層
	24	染付	碗	底部	口径	器高	底径 8.0	畳付は露胎。素地は白色で緻密。徳化窯産。	E-9 II層
	25	染付	小碗	底部	口径	器高	底径 3.8	畳付は露胎。素地は白色で緻密。徳化窯産。	D-10 II層
	26	染付	小碗	底部	口径	器高	底径 4.6	畳付は露胎。素地は白色で緻密。徳化窯産。	G-11・12 II層
第95図 図版65	27	染付	皿	口～底部	口径 15.4	器高 3.1	底径 8.0	畳付は露胎。素地は白色で緻密。	C-10 II層
	28	染付	皿	口縁部	口径 15.0	器高 —	底径 —	素地は白色で緻密。黒色粒を含む。徳化窯産。	D-10 II層
	29	染付	皿	口縁部	口径 14.0	器高 —	底径 —	素地は白灰色で緻密。黒色粒を含む。徳化窯産。	E-9 II層

第26表 包含層(Ⅱ層)出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)b

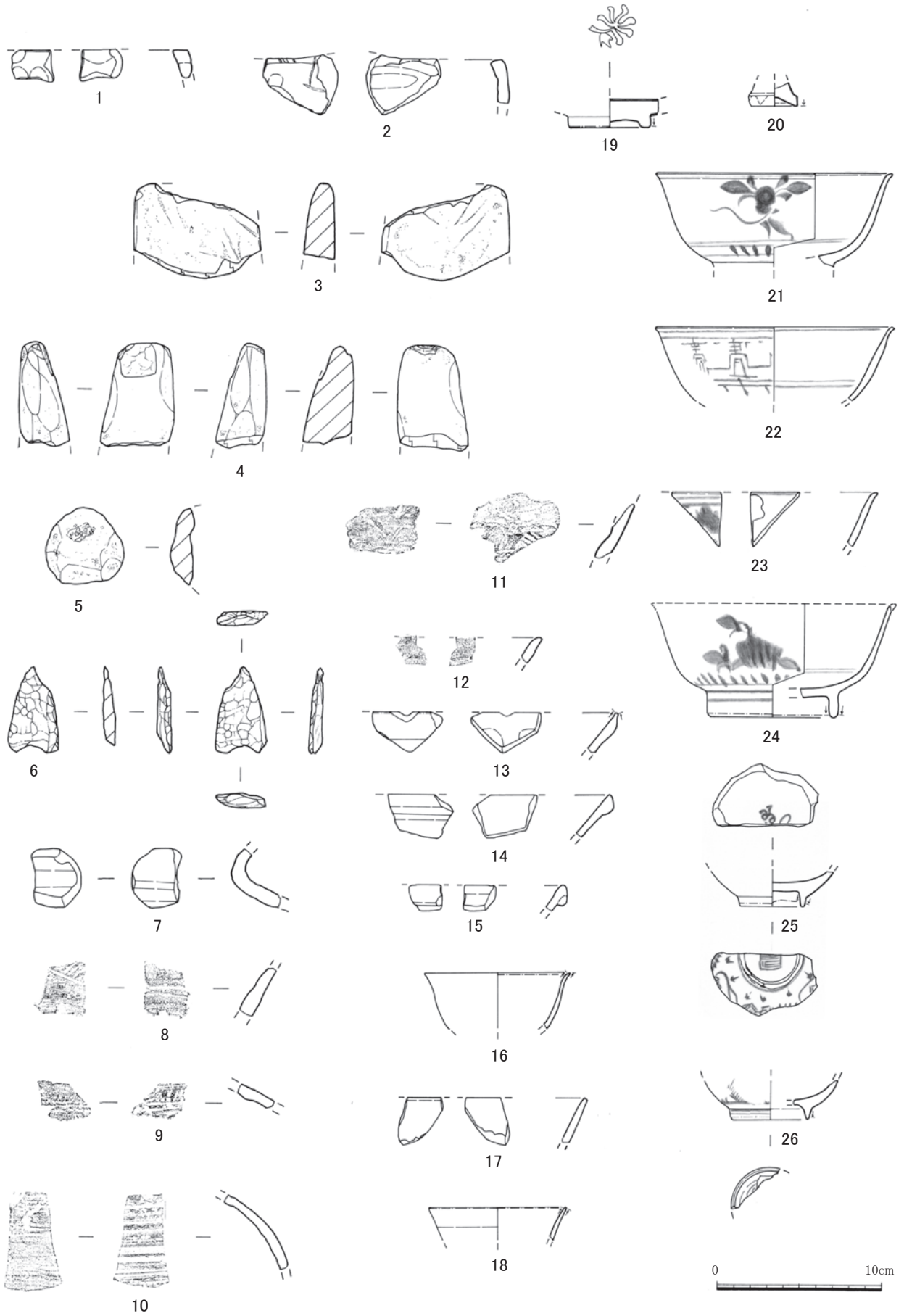
単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第95図 図版65	30	染付	皿	口～底部	口径 10.0	器高 1.6	底径 5.9	畳付は露胎。素地は白灰色で緻密。	E-10 Ⅱ層
	31	色絵	皿	口～底部	口径 15.4	器高 2.7	底径 8.3	畳付は露胎。素地は白灰色で緻密。黒色粒を含む。	E-9 Ⅱ層
	32	染付	碗	口縁部	口径 10.6	器高 —	底径 —	素地は白色で緻密。福建・広東系。	E-10 Ⅱ層
	33	染付	蓋	—	口径 —	器高 —	底径 —	素地は白色で緻密。撮み3.9cm。	E-11 Ⅱ層
	34	本土産磁器	染付皿	底部	口径 —	器高 —	底径 3.8	畳付は露胎。素地は白色で緻密。	E-10 Ⅱ層
	35	本土産磁器	染付蓋	—	口径 9.3	器高 2.8	底径 —	素地は白色で緻密。36と同一個体。撮み4.0cm。	D-10 Ⅱ層
	36	本土産磁器	染付蓋	—	口径 9.0	器高 —	底径 —	素地は白色で緻密。35と同一個体。	E-10 Ⅱ層
	37	本土産磁器	染付蓋	—	口径 6.2	器高 —	底径 5.2	素地は白色で緻密。	E-10 Ⅱ層
	38	本土産磁器	染付鉢	口～底部	口径 17.2	器高 7.8	底径 6.4	畳付は露胎。素地は白灰色で緻密。黒色粒を含む。稜花鉢。	C-10 Ⅱ層
	39	本土産磁器	色絵小碗	口縁部	口径 8.8	器高 —	底径 —	素地は白色で緻密。外面の顔料はほとんど剥げている。	F-10 Ⅱ層
第95図 図版66	40	沖縄産施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.2	器高 5.5	底径 6.5	内外面の上半部に灰釉を単掛け。下半部は露胎。フィガキー手法。外面口縁部下の削りが明瞭。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は灰黄色で細かい。	E-9 Ⅱ層
	41	沖縄産施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.4	器高 5.9	底径 6.6	内外面の上半部に灰釉を単掛け。下半部は露胎。フィガキー手法。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は灰黄色で細かい。黒色粒を含む。	F-10 Ⅱ層
	42	沖縄産施釉陶器	碗	口～底部	口径 12.8	器高 6.2	底径 6.0	内面及び外面上半部まで黒釉を単掛け。外面下半部から外底まで露胎。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。素地は淡黄色で細かい。	E-10 Ⅱ～Ⅲ層
	43	沖縄産施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.0	器高 6.5	底径 6.0	内面に白化粧+透明釉、外面に黒釉を掛け分け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎。畳付及び内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は淡橙色でやや粗い。黒色粒、白色粒を含む。	G-12 Ⅱ層
第96図 図版66	44	沖縄産施釉陶器	碗	底部	口径 —	器高 —	底径 6.8	内面に白化粧+透明釉、外面に黒釉を掛け分け。見込みは蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎。畳付及び見込みに目跡あり(アルミナ付着)。素地は淡橙色でやや粗い。黒色粒を含む。	D-11 Ⅱ層
	45	沖縄産施釉陶器	碗	口～底部	口径 14.1	器高 6.9	底径 6.4	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は淡橙色でやや粗い。黒色粒を含む。	E-9 Ⅱ層
	46	沖縄産施釉陶器	碗	口～底部	口径 14.2	器高 6.5	底径 6.8	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は橙色でやや粗い。黒色粒を含む。	F-10 Ⅱ層
	47	沖縄産施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.5	器高 6.7	底径 6.4	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は淡橙色でやや粗い。黒色粒を多く含む。	D-10 Ⅱ層
	48	沖縄産施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.0	器高 6.5	底径 6.4	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は橙色で粗い。黒色粒を含む。	C-10 Ⅱ層
	49	沖縄産施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.4	器高 7.3	底径 5.7	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は淡橙色で粗い。黒色粒を含む。	G-11 Ⅱ層
	50	沖縄産施釉陶器	碗	口縁部	口径 10.4	器高 —	底径 —	内外面に黒釉を単掛け。内面口縁部下が凹む。素地は淡灰色で粗い。	D-11 Ⅱ層
第96図 図版67	51	沖縄産施釉陶器	皿	口～底部	口径 13.2	器高 3.5	底径 6.6	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎。畳付にアルミナを塗布。素地は淡黄色で粗い。黒色粒を含む。稜花皿。	E-9 Ⅱ層
	52	沖縄産施釉陶器	鉢	口～底部	口径 20.8	器高 9.4	底径 8.6	内面に白化粧+透明釉、外面に黒釉を掛け分け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は橙色でやや粗い。黒色粒を含む。	E-9 Ⅱ層
	53	沖縄産施釉陶器	鍋	口～底部	口径 14.9	器高 10.9	底径 5.6	内面口縁部下の一部と、外面胴部途中まで褐釉?を単掛け。丸みをもった底部で脚が貼付される。底部には煤が付着。内外面ともに轆轤痕が明瞭。素地は淡灰色で細かい。	C-10 Ⅱ層
	54	沖縄産施釉陶器	蓋	—	口径 6.2	器高 —	底径 3.8	外面に褐釉?を施釉。撮みは欠損。素地は淡い橙色でやや粗い。黒色粒を含む。	G-12 Ⅱ層
	55	沖縄産施釉陶器	火入	口～底部	口径 10.5	器高 8.3	底径 6.8	内面及び畳付は露胎。外面は口唇部に鉄釉、胴部に灰釉を施釉。高台脇にアルミナ付着。内面は轆轤痕が明瞭。素地は灰色で細かい。黒色粒を含む。	C-10 Ⅱ層
	56	沖縄産施釉陶器	火炉	底部	口径 —	器高 —	底径 10.0	外面に黒釉を単掛け。内面及び外面腰部以下は露胎。外面腰部近くに3本の沈線。内面は轆轤痕が明瞭。素地は橙白色で、やや粗い。黒色粒を含む。	G-12 Ⅱ層
	57	沖縄産無釉陶器	瓶	底部	口径 —	器高 —	底径 6.8	底面はぼこぼこしている。内外面ともに轆轤痕が明瞭。素地は暗褐色で細かい。白色粒を多く含む。	E-11 Ⅱ層
第97図 図版67	58	沖縄産無釉陶器	甕	口縁部	口径 30.0	器高 —	底径 —	外面口縁部下に波状の沈線による文様あり。内面は轆轤痕が明瞭。素地は暗褐色で粗い。石灰岩粒などの白色粒、黒色粒を含む。	E-9 Ⅱ層
	59	沖縄産無釉陶器	蓋	—	口径 10.6	器高 —	底径 —	素地は褐色で細かい。白色粒を含む。	D-10 Ⅱ層
	60	陶質土器	浅鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	外面に2本の沈線と波状の沈線をめぐらす。胎土は橙色で細かい。白色粒や黒色粒などを含む。	E-9 Ⅱ層
	61	陶質土器	器種不明	底部	口径 —	器高 —	底径 5.7	平底を呈する。胎土は褐色で細かい。白色粒や黒色粒などを含む。	D-11 Ⅱ層
	62	陶質土器	蓋	撮み	口径 —	器高 —	底径 —	胎土は褐色で細かい。白色粒や黒色粒などを含む。撮み1.7cm。	D-11 Ⅱ層

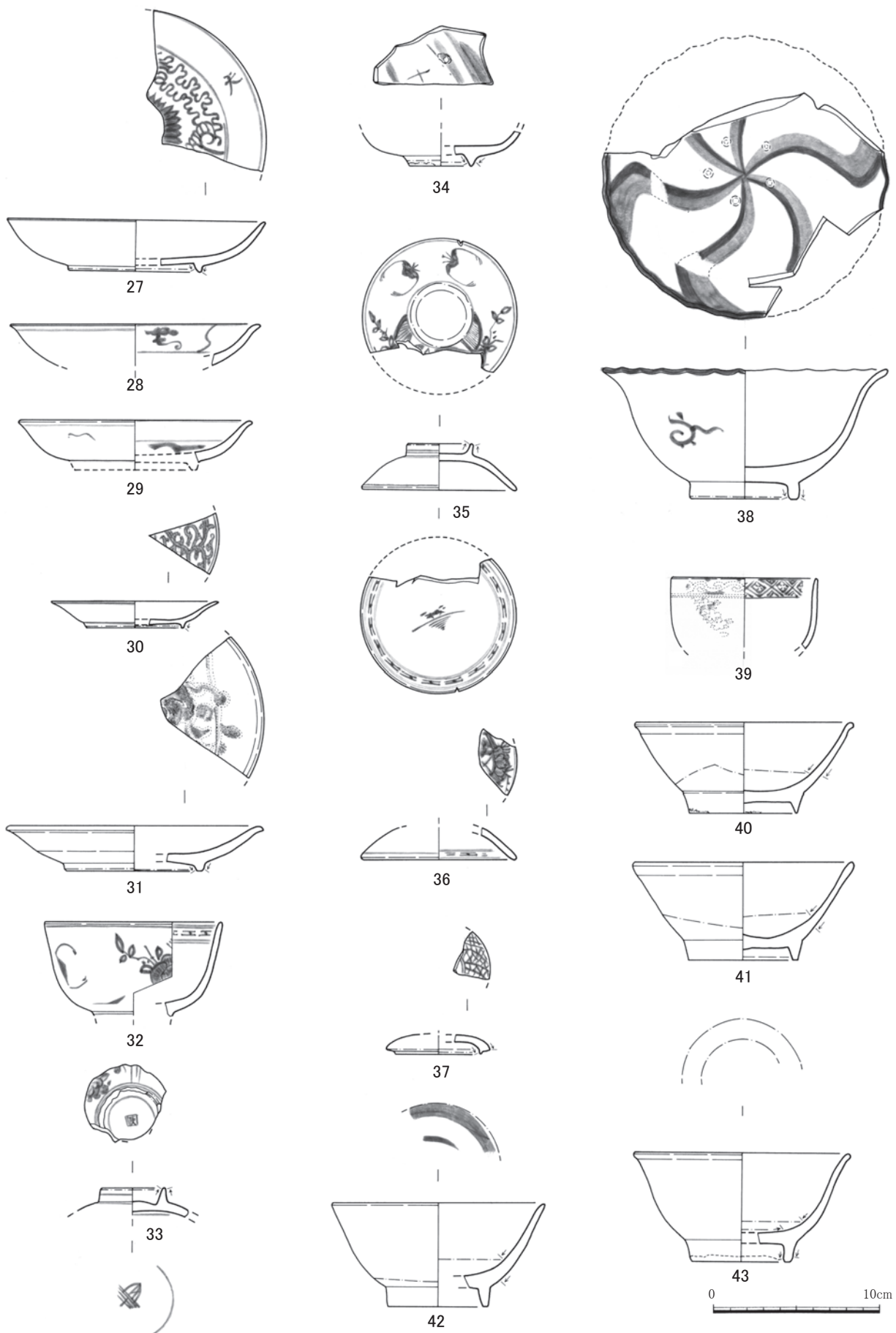
第26表 包含層(Ⅱ層)出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)c

単位:cm

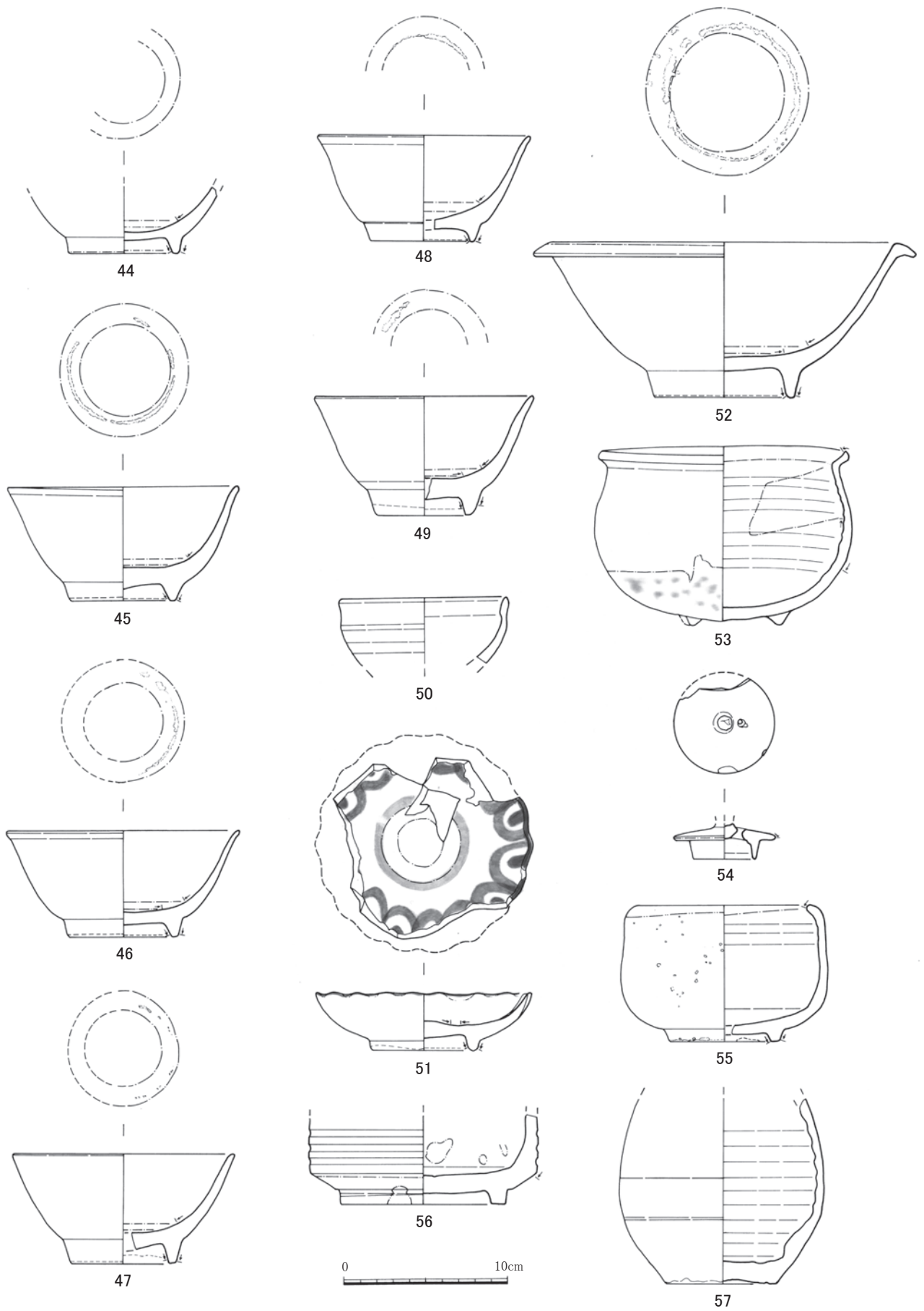
挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
第97図 図版68	63	円盤状製品	—	口径	器高	底径	カムイヤキを素材としている。重量28.4g。	C-10 Ⅱ層	
	64	円盤状製品	—	口径	器高	底径	明朝系赤瓦を素材としている。重量36.9g。	F-11 Ⅱ層	
	65	円盤状製品	—	口径	器高	底径	沖繩産無釉陶器を素材としている。重量14.2g。	D-11 Ⅱ層	
	66	円盤状製品	—	口径	器高	底径	明朝系赤瓦を素材としている。重量21.0g。	E-9 Ⅱ層	
	67	円盤状製品	—	口径	器高	底径	本土産磁器を素材としている。重量6.8g。	E-9 Ⅱ層	
	68	煙管	—	雁首	口径	器高	底径	沖繩産陶器製。無釉。火皿部は欠損。素地は暗褐色でやや粗い。黒色粒を含む。重量3.1g。	D-10 Ⅱ層
	69	煙管	—	雁首	口径	器高	底径	沖繩産陶器製。緑釉を施す。火皿部の立ち上がり(脂反し)は低い。素地は淡く黄色味をおびた白色で細かい。重量2.7g。	G-12 Ⅱ層
	70	煙管	—	雁首	口径	器高	底径	青銅製。火皿部は欠損。重量8.2g。	G-12 Ⅱ層
	71	銭貨	一銭	—	外径	孔径	厚さ	大正七年発行の一銭青銅貨。表に桐の文様。重量3.6g。	G-12 Ⅱ層
	72	青銅製品	簪	—	口径	器高	底径	押差。カブは耳掻き型。	E-9 Ⅱ層
	73	硯	—	—	口径	器高	底径	海部は欠損。陸部中央には僅かに凹みあり。側面には線条痕がみられる。裏面に何らかの文字が線彫されているが不明瞭。緑色千枚岩。	F-10 Ⅱ層
図版68	74	瓦	明朝系丸瓦	玉縁部	口径	器高	底径	色調は赤色。漆喰が付着。	E-9 Ⅱ層
	75	本土産磁器	碗	口～底部	口径	器高	底径	量付は露胎で砂粒が付着する。素地は白色で細かい。黒色粒を含む。内底に5つの胎土目が確認できる。型紙絵付け。近現代。	E-10 Ⅱ層
	76	本土産磁器	碗	口～底部	口径	器高	底径	量付は露胎。素地は白色で細かい。黒色粒を含む。内底に3つの胎土目が確認できる。型紙絵付け。近現代。	G-11・12 Ⅱ層
	77	本土産磁器	碗	口～底部	口径	器高	底径	量付は露胎で砂粒が付着する。素地は白色で緻密。吹き絵技法と思われる。近現代。	E-10 Ⅱ層
	78	本土産磁器	碗	口～底部	口径	器高	底径	量付は露胎。素地は白色で緻密。銅版転写。近現代。	G-11・12 Ⅱ層
	79	本土産磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	量付から外底にかけて露胎。素地は白色で緻密。クロム青磁。	E-11 Ⅱ層
	80	本土産磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	量付は露胎。素地は白色で緻密。吹き絵技法と思われる文様と外面腰部に型押し?による波状の文様がみられる。近現代。	F-11 Ⅱ層
	81	本土産磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	量付は露胎で砂粒が付着する。素地は白色で緻密。黒色粒を含む。銅版転写技法と思われる。近現代。	E-9 Ⅱ層
	82	本土産磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	量付は露胎。素地は白色で緻密。銅版転写技法と思われる。近現代。	H-12 Ⅱ層
	83	本土産磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	量付は露胎。素地は白色で緻密。銅版転写技法と思われる。近現代。	E-10 Ⅱ層
	84	本土産磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	量付は露胎で砂粒が付着する。素地は白色で緻密。銅版転写技法と思われる。近現代。	D-10 Ⅱ層
図版69	85	本土産磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	量付は露胎で砂粒が少量付着する。素地は白色で緻密。銅版転写技法と思われる。近現代。	C-10 Ⅱ層
	86	本土産磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	量付は露胎。素地は白色で緻密。銅版転写技法と思われる。近現代。	E-11 Ⅱ層
	87	本土産磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	量付は露胎で砂粒が付着する。素地は白色で緻密。近現代。	E-9 Ⅱ層
	88	本土産磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	量付は露胎。統制磁器。外面口縁部に緑色の圏線が2本。外底に「岐286」という銘あり。近現代。	E-9 Ⅱ層
	89	本土産磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	量付は露胎。素地は白色で緻密。外面口縁部に緑色の圏線が2本。近現代。	G-12 Ⅱ層
	90	本土産磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	量付は露胎。高台が二重にある。素地は白色で緻密。近現代。	D-10 Ⅱ層
	91	本土産磁器	小杯	口～底部	口径	器高	底径	量付は露胎で砂粒が付着する。素地は白色で緻密。近現代。	E-9 Ⅱ層
	92	本土産磁器	小杯	口～底部	口径	器高	底径	量付から外底にかけて露胎。素地は白色で緻密。外面腰部を面取りする。高台は方形をなす。近現代。	E-10 Ⅱ層
	93	本土産磁器	皿	口～底部	口径	器高	底径	量付は露胎。外底は蛇の目状に釉剥ぎする。素地は白色で緻密。黒色粒を含む。内底に5つの胎土目が確認できる。型紙絵付け。稜花皿。近現代。	E-9 Ⅱ層
	94	本土産磁器	皿	口～底部	口径	器高	底径	外底を蛇の目状に釉剥ぎする。素地は白色で緻密。黒色粒を含む。内底に2つの胎土目が確認できる。型紙絵付け。稜花皿。近現代。	F-11 Ⅱ層
	95	本土産磁器	皿	口～底部	口径	器高	底径	量付は露胎。銅版転写。近現代。	E-9 Ⅱ層
	96	本土産磁器	皿	口～底部	口径	器高	底径	量付は露胎。素地は白灰色で緻密。黒色粒を含む。銅版転写。近現代。	D-10 Ⅱ層
	97	本土産磁器	皿	口～底部	口径	器高	底径	量付は露胎。素地は白色で緻密。黒色粒を含む。銅版転写。近現代。	G-11・12 Ⅱ層
	98	本土産磁器	皿	口～底部	口径	器高	底径	量付は露胎。素地は白色で細かい。銅版転写。近現代。	E-10 Ⅱ層
	99	本土産陶器	蓋	—	口径	器高	底径	透明釉を施す。素地は黄色味をおびた白色でやや粗い。近代。	E-10 Ⅱ層
	100	本土産陶器	播鉢	口～底部	口径	器高	底径	口唇部から外面高台脇まで茶色の釉を施す。量付は露胎。内面に櫛目をまんべんなく施す。素地は淡褐色で粗い。黒色粒を含む。	E-9 Ⅱ層
	101	ガラス製品	瓶	口～底部	口径	器高	底径	ガラス自体に気泡がみられる。瓶底には「近」という文字のエンボス。	D・E-9 Ⅱ層
	102	ガラス製品	瓶	口～底部	口径	器高	底径	ガラス自体に気泡が多くみられる。	F-10 Ⅱ層



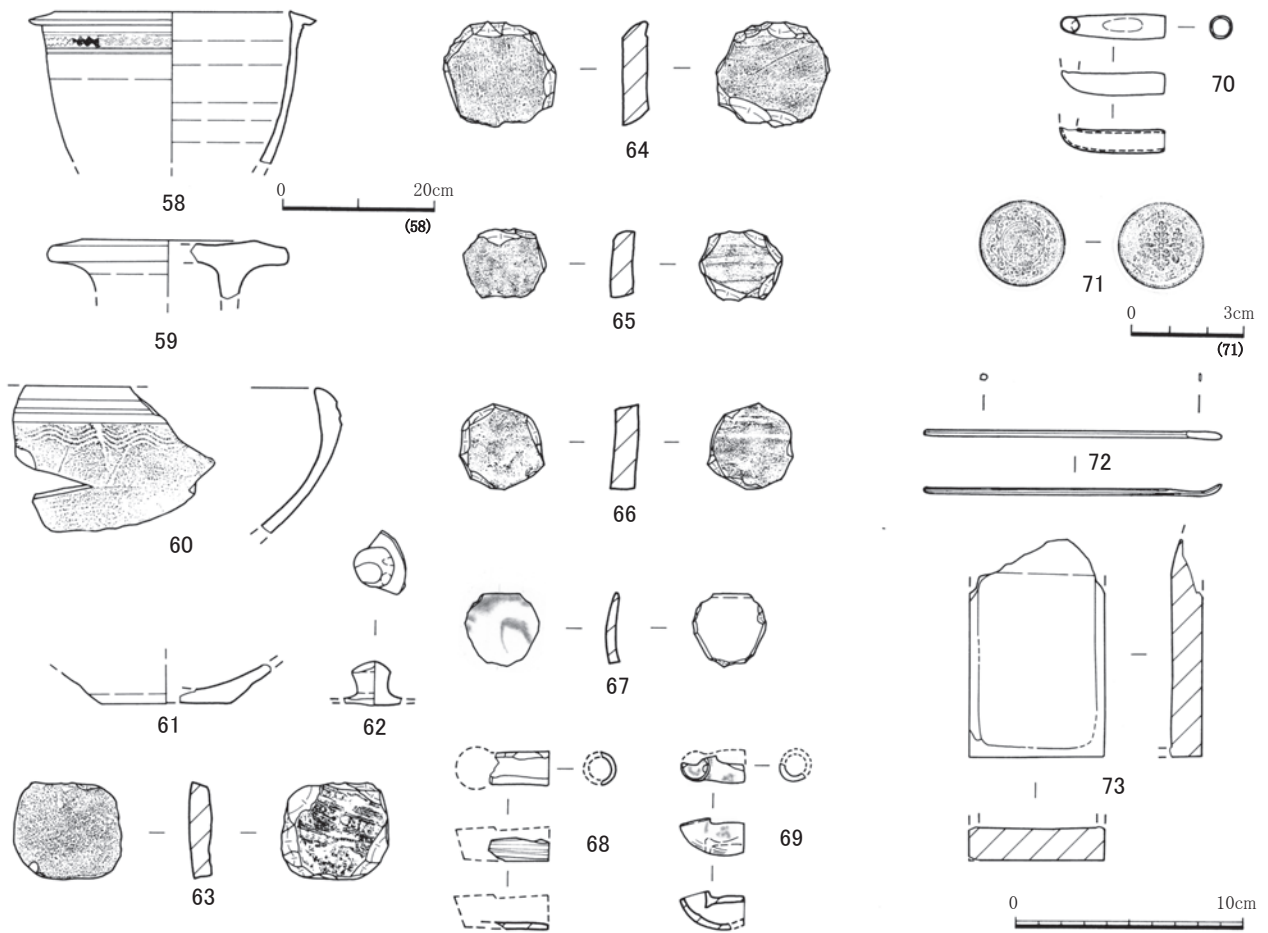
第 94 图 包含層(Ⅱ層)出土遺物1(Ⅱ地区)



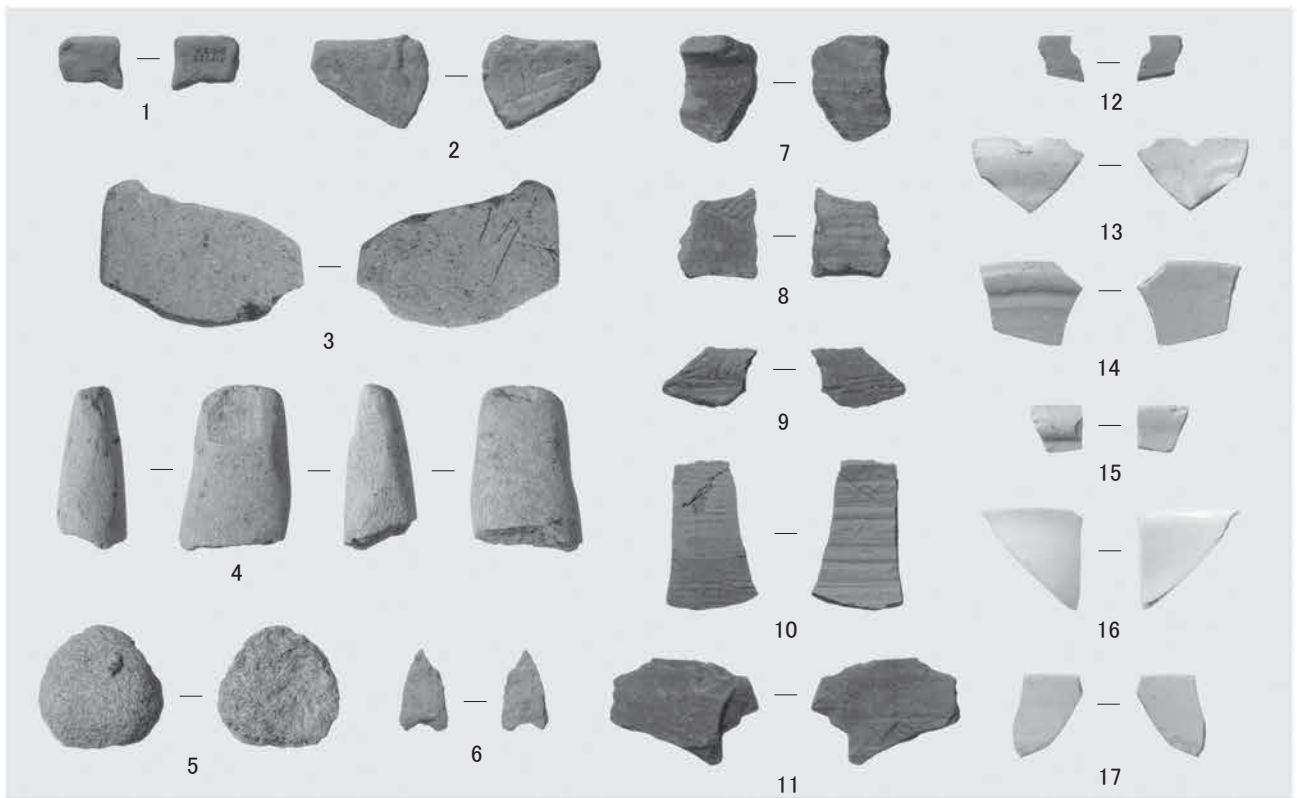
第 95 图 包含層(Ⅱ層)出土遺物2(Ⅱ地区)



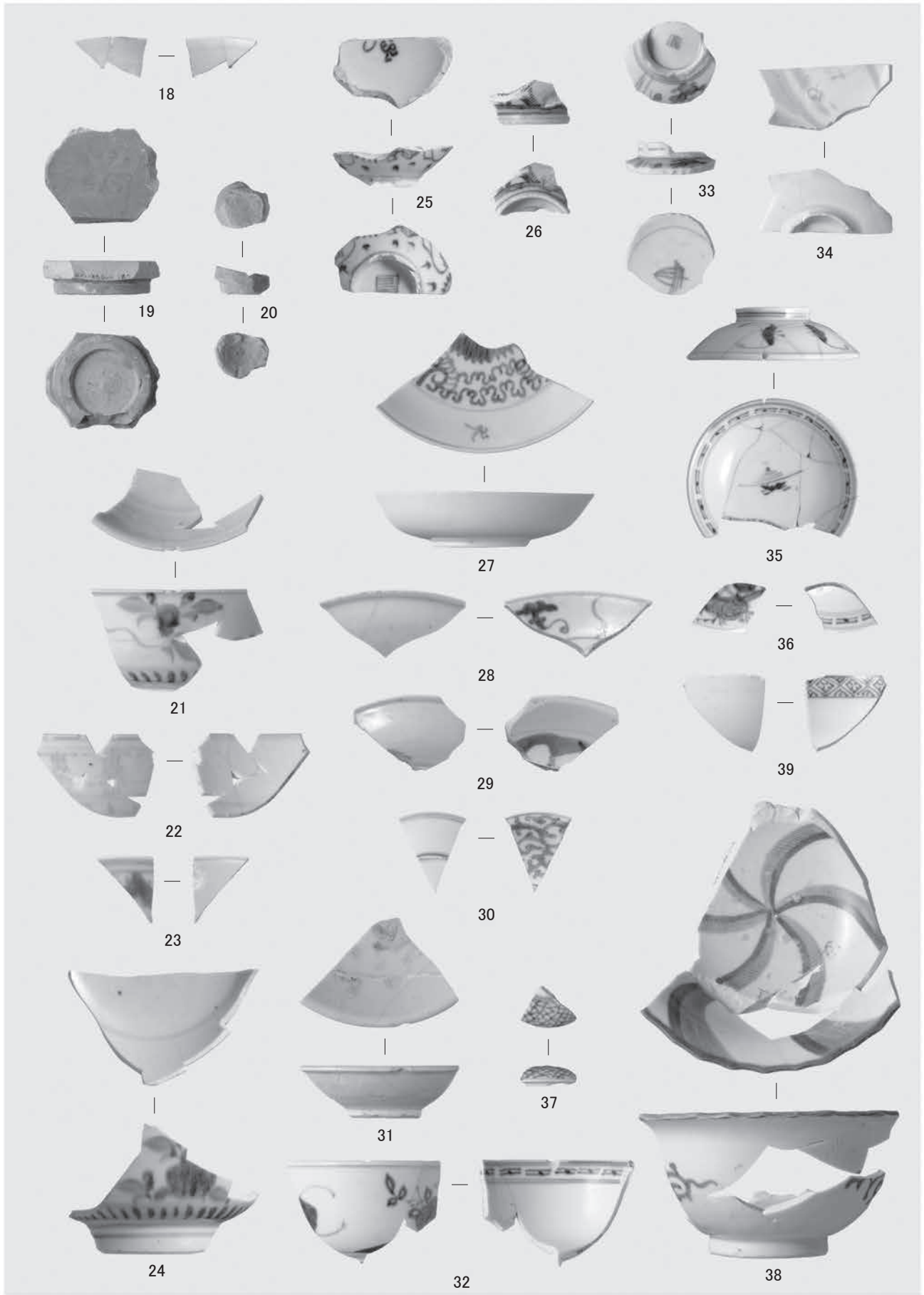
第 96 图 包含層(Ⅱ層)出土遺物3(Ⅱ地区)



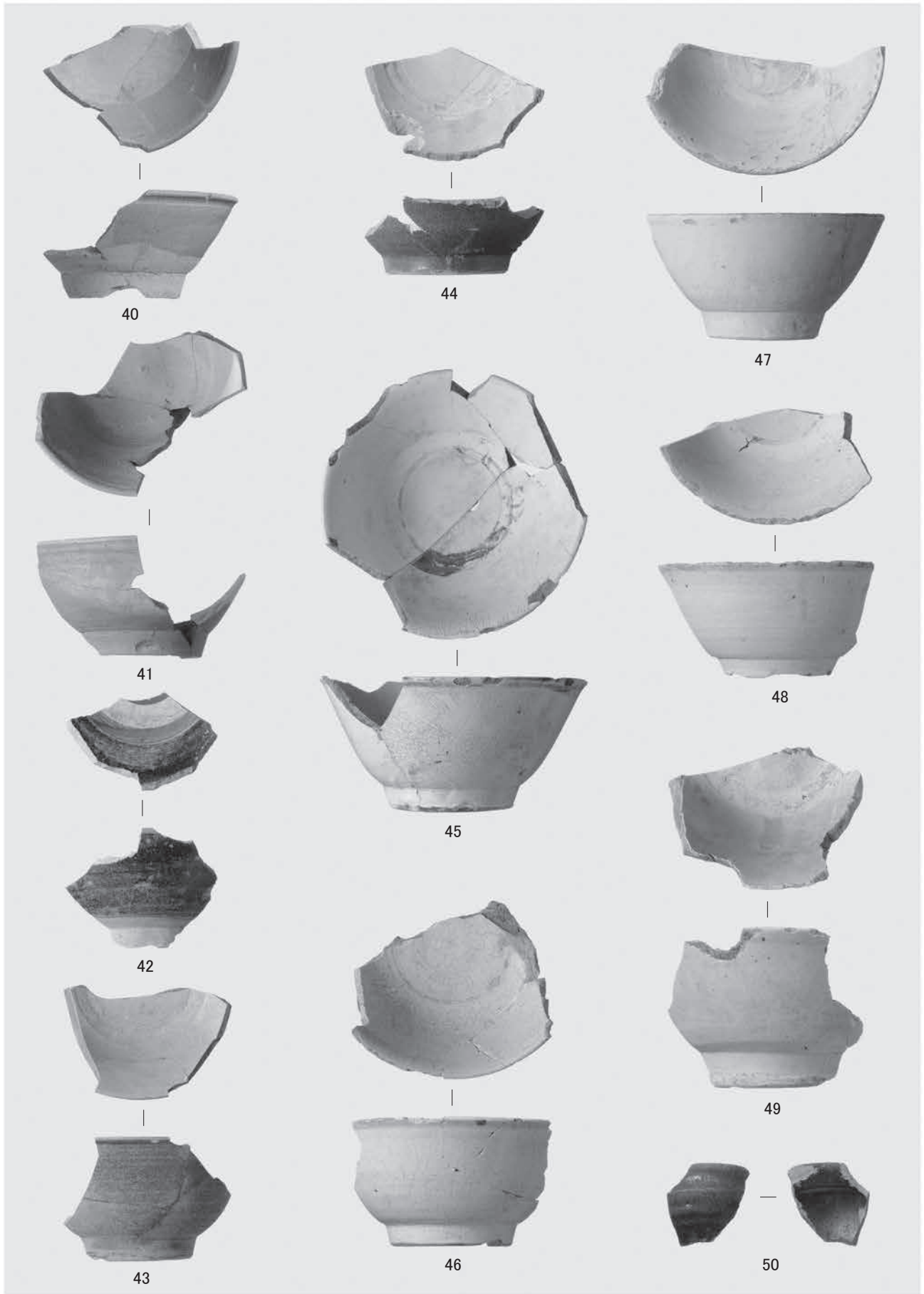
第97图 包含層(Ⅱ層)出土遺物4(Ⅱ地区)



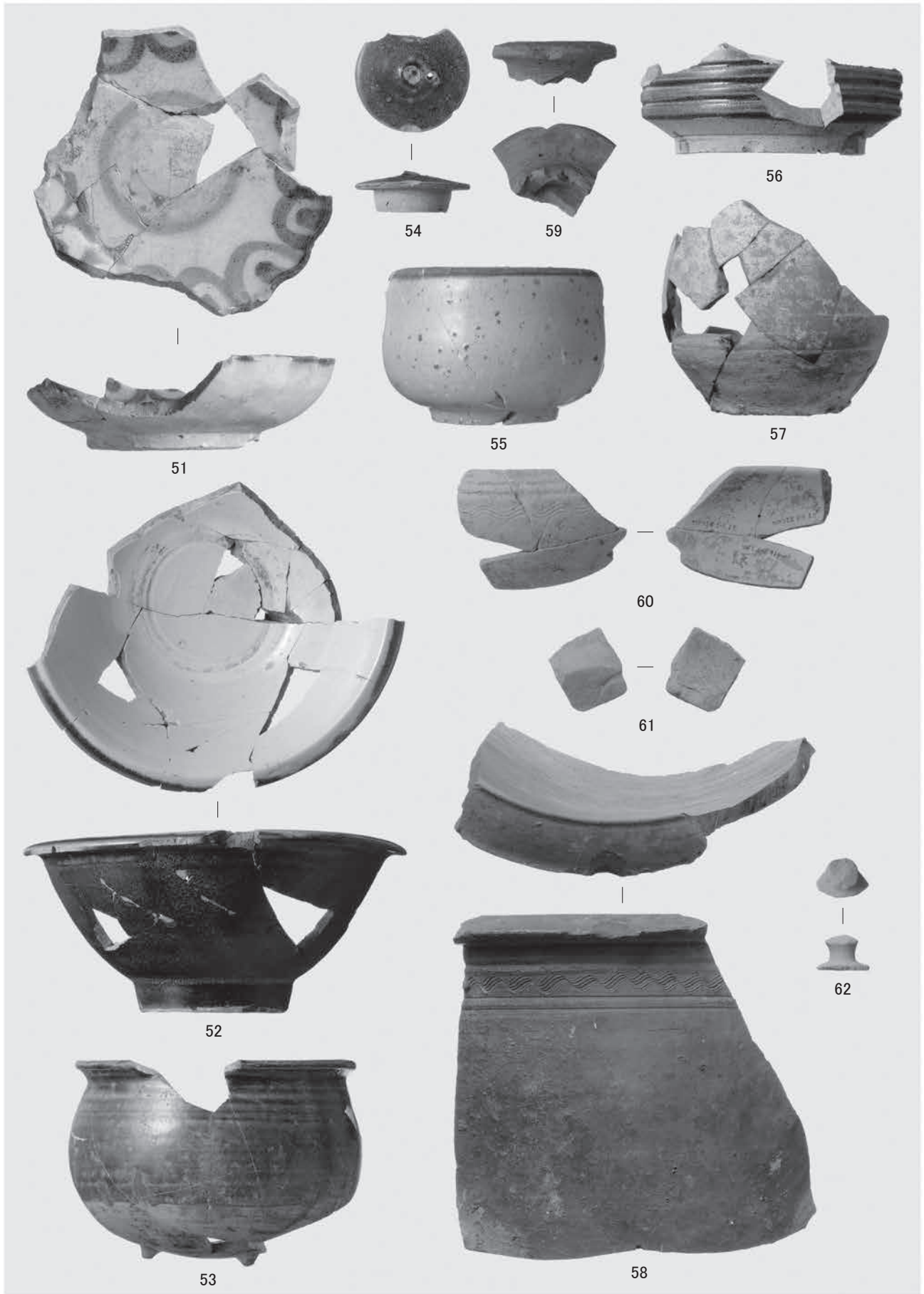
图版64 包含層(Ⅱ層)出土遺物1(Ⅱ地区)



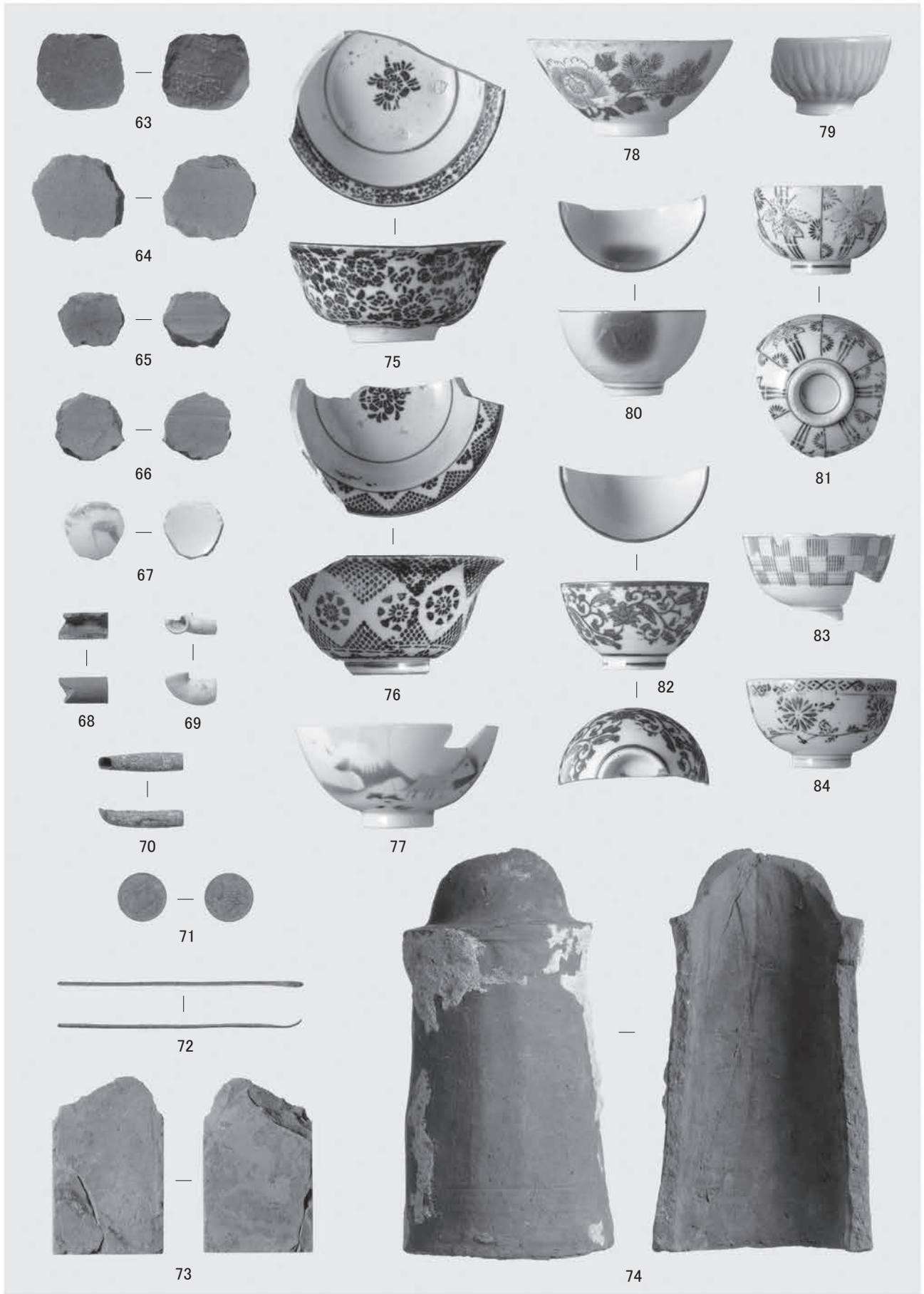
图版 65 包含層（Ⅱ層）出土遺物2（Ⅱ地区）



图版 66 包含層（Ⅱ層）出土遺物3（Ⅱ地区）



图版 67 包含層（Ⅱ層）出土遺物4（Ⅱ地区）



图版 68 包含層（Ⅱ層）出土遺物5（Ⅱ地区）



图版 69 包含層（Ⅱ層）出土遺物 6（Ⅱ地区）

第4節 表土・攪乱層出土遺物

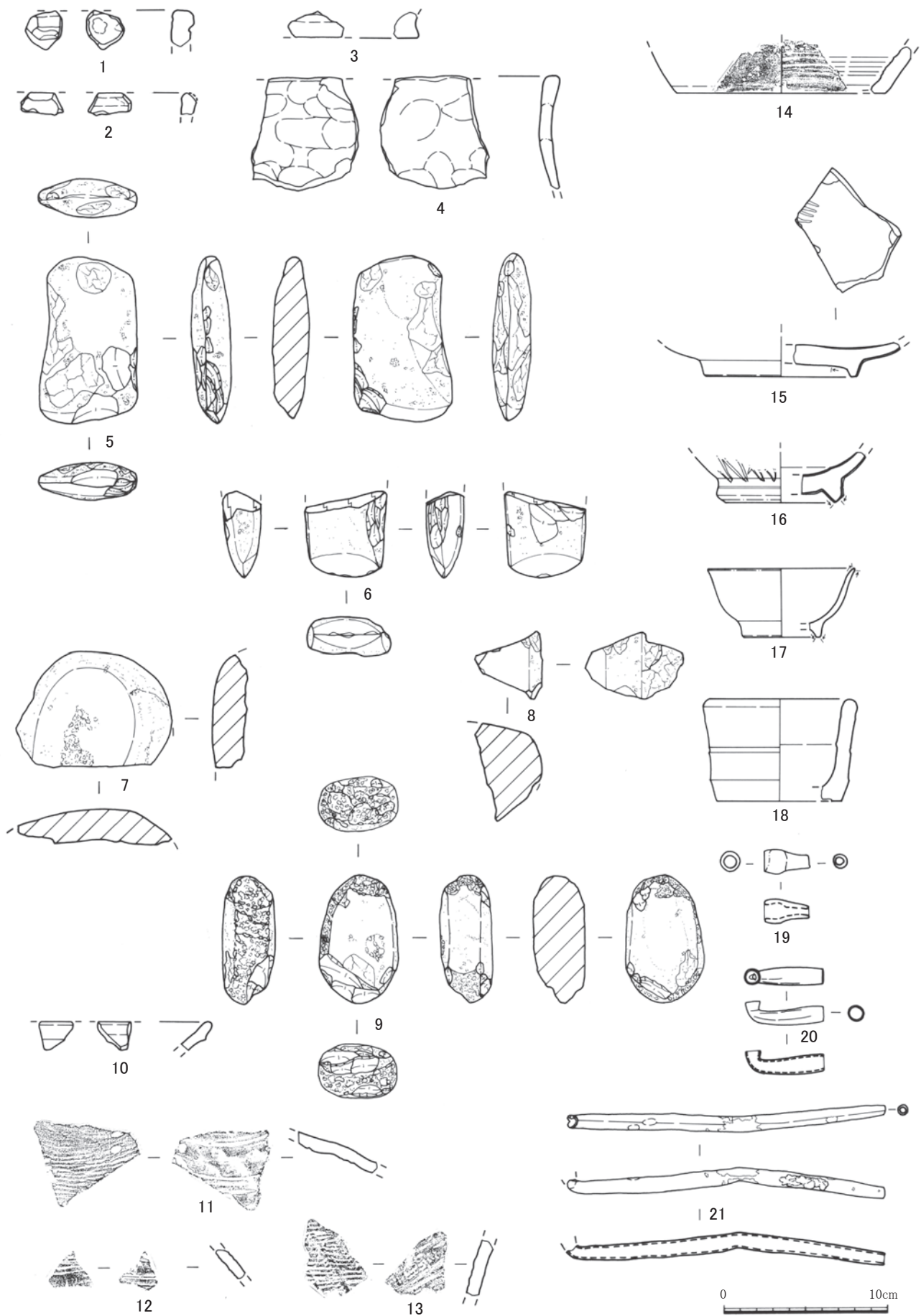
a I地区

表土・攪乱層での遺物出土は総数18,063点である。遺物の種類としては、青磁、白磁、染付、色絵、青磁染付、褐釉磁器、褐釉陶器、本土産青磁、本土産染付、本土産陶器、本土産近代陶器、本土産近現代磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、土器、陶質土器、カムイヤキ、瓦、煉瓦、円盤状製品、石器、石製品、石材、煙管、銭貨、青銅製品、鉄製品、ガラス製品、プラスチック製品、産地不明品などである。主体は、本土産近現代磁器及び沖縄産施釉陶器の碗や皿、沖縄産無釉陶器の壺、瓦などである。古くは縄文時代晩期相当の資料から、近現代の資料まであらゆる時代の遺物が混在してみられるのが特徴である。図示および写真撮影した遺物の特徴については、観察表（第27表）に記す。

第27表 表土・攪乱層出土遺物観察一覧(I地区)a

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
第98図 図版70	1	土器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	白色粒・黒色粒を僅かに混入する。	表採
	2	土器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	黒色粒・赤色粒・白色粒・石英粒?を僅かに混入する。	表採
	3	土器	鉢	—	口径 —	器高 —	底径 —	粗砂粒を多く混入する。チャートや石英などの粗砂粒もみられる。4と胎土が類似。縄文時代晩期相当の土器と考えられる。	表採
	4	土器	鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	砂粒、チャート、石英を混入する。特に砂粒が多い。口唇部は平坦。3と胎土が類似。縄文時代晩期相当の土器と考えられる。	I層攪乱
	5	石器	磨製石斧	—	口径 —	器高 —	底径 —	刃部を研磨。刃縁は摩滅している。大きく偏刃。表裏面には柄を取り付けて使用した際にできた剥落がある。緊縛痕あり。緑色岩。重量231.8g。	I層攪乱
	6	石器	磨製石斧	—	口径 —	器高 —	底径 —	刃部片。側面及び刃部を研磨。刃縁に刃こぼれがみられる。緑色岩。重量96.5g。	不明
	7	石器	磨石	—	口径 —	器高 —	底径 —	表面に磨面。砂岩。重量192.6g。	表採
	8	石器	磨石	—	口径 —	器高 —	底径 —	表面及び側面に磨面。角閃石珪岩(久米島のグリーンタフの仲間)。重量75.2g。	表採
	9	石器	敲石類	—	口径 —	器高 —	底径 —	表裏面及び側面に磨面。上下端及び側面に敲打痕。緑色岩。重量211.5g。	I層攪乱
	10	カムイヤキ	壺	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	内面は一段凹む。外面は段をもつ。内外面ともに回転擦痕あり。胎土は灰黒色を呈し、白色、黒色粒を含む。	I層攪乱
	11	カムイヤキ	壺	胴部	口径 —	器高 —	底径 —	内面は当て具痕、外面には叩き目痕がみられ、内外面ともに回転擦痕とナデ調整が施される。胎土は灰黒色を呈する。	I層攪乱
	12	カムイヤキ	—	胴部	口径 —	器高 —	底径 —	内面に回転擦痕。外面は叩き目痕がみられ、ナデ調整が施される。胎土は灰色を呈し、白色粒を含む。	表採
	13	カムイヤキ	壺	胴部	口径 —	器高 —	底径 —	内面は当て具痕がみられ、回転擦痕とナデ調整が施される。外面は羽状の叩き目痕がみられ、ナデ調整が施される。胎土は暗褐色を呈し、白色粒、黒色粒を含む。	I層攪乱
	14	カムイヤキ	壺	底部	口径 12.8	器高 —	底径 —	内面は回転擦痕とナデ調整、外面はナデ調整が施される。胎土は灰色を呈し、白色粒を含む。	I層攪乱
	15	青磁	碗	底部	口径 —	器高 —	底径 9.2	内外面施釉。畳付まで施釉。一部、畳付を越えて外底まで釉が広がっている。素地は灰白色で細かい。	表採
	16	青磁	瓶	底部	口径 —	器高 —	底径 6.6	内外面施釉。畳付は露胎。外面に片切り彫りによる蓮弁文。内面は轆轤痕が明瞭。素地は灰白色で緻密。	I層攪乱
	17	白磁	小碗	口～底部	口径 9.0	器高 4.2	底径 4.7	口唇部は釉剥ぎする。畳付には砂目あり。素地は白色で緻密。徳化窯産。	表採
	18	沖縄産 無釉陶器	香炉	口～底部	口径 9.4	器高 6.3	底径 7.6	無文。内外面には大小の気泡痕が無数にみられる。素地は暗褐色で細かい。黒色粒を含む。	表採
	19	煙管	吸口	—	口径 —	器高 —	底径 —	沖縄産陶器製。白釉を施す。小口は露胎で平坦に仕上げ。素地は黄色味を帯びた灰白色で細かい。黒色粒を含む。小口1.2cm、吸口0.9cm。	I層攪乱
	20	煙管	雁首	—	口径 —	器高 —	底径 —	青銅製。火皿は隅丸方形を呈する。首部の上面及び側面に凹みあり。火皿0.95cm、雁首4.8cm、小口0.9cm、重量8.8g。	表採
	21	煙管	—	—	口径 —	器高 —	底径 —	青銅製。火皿～脂反し部分は欠損。中央部分でやや「く」の字状に凹む。吸口0.6cm、重量41.8g。	I層攪乱
図版70	22	本土産磁器	皿	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	外面に蓮弁文。素地は白色で緻密。クロム青磁。	表採
	23	本土産磁器	小杯	口～底部	口径 6.1	器高 2.3	底径 —	高台は「忠」という文字をなす。内面は透明釉、外面は鉄釉を施す。高台は露胎。素地は白色で緻密。近現代。	I層攪乱
	24	本土産磁器	小碗	底部	口径 —	器高 —	底径 3.4	内外面に透明釉を施す。畳付は露胎。素地は白色で緻密。外底に銘あり。近現代。	表採
図版71	25	本土産磁器	段重	口～底部	口径 —	器高 5.3	底径 —	方形を呈する。内外面に透明釉を施す。口唇部と高台脇は露胎。外面に松と竹の文様。素地は白色で緻密。近現代。	不明
	26	本土産陶器	皿	口～底部	口径 —	器高 2.1	底径 —	稜花皿。内外面に黄色釉を施すが、高台は露胎。内面及び内底に型押しによる文様がみられる。素地は黄色味をおびた白色で細かい。近代。	不明
	27	本土産陶器	蓋	—	口径 9.8	器高 2.0	底径 8.6	内外面に黄色の釉を施す。被熱を受け、釉葉が剥がれている。素地は淡橙色で粗い。28と質感が類似することよりセットの可能性が。近代。	不明
	28	本土産陶器	蓋もの	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	内外面に黄色の釉を施す。外面に葉っぱの文様があり、緑色の釉を施す。素地は淡橙色で粗い。27と質感が類似することよりセットの可能性が。近代。	不明

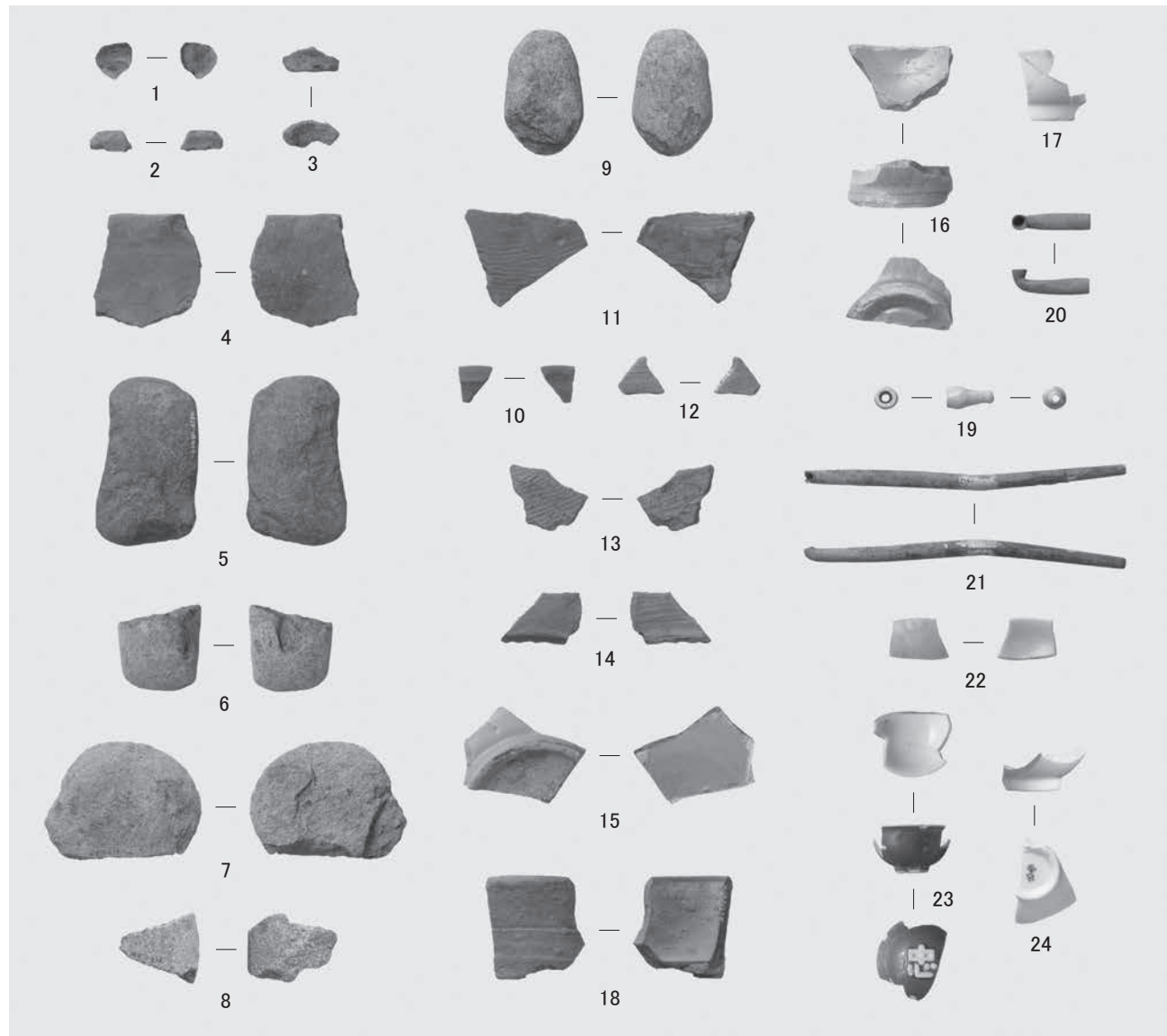


第 98 图 表土・搅乱 出土遺物 (I 地区)

第27表 表土・攪乱出土遺物観察一覧(I地区)b

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
図版71	29	銭貨	無文銭	—	外径 1.8	孔径 0.6	厚さ 0.1	重量0.8g。	I層攪乱
	30	銭貨	半銭	—	外径 2.2	孔径 —	厚さ 0.1	明治十年発行の半銭銅貨。重量3.2g。	I層攪乱
	31	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 2.4	器高 22.4	底径 6.4	表面に「大日本麥酒株式会社製造」というエンボス。	I層攪乱
	32	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 1.5	器高 8.1	底径 2.8	外底に「30」及び「6」というエンボス。	I層攪乱
	33	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 1.8	器高 6.9	底径 a=4.1, b=1.9	外底に「味の素」というエンボス。	I層攪乱
	34	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 1.5	器高 7.2	底径 0.7	表面に「EYE WATER ROHTO」というエンボス。両口点眼式の目薬。	I層攪乱
	35	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 1.4	器高 7.9	底径 0.5	表面に「SANTENDO」というエンボス。両口点眼式の目薬。	I層攪乱
	36	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 2.6	器高 6.4	底径 5.1	ガラス自体に気泡がみられる。瓶底に「登録M」と思われるエンボス。	I層攪乱
	37	ガラス製品	瓶	口～底部	口径 4.5	器高 3.4	底径 5.1	口縁部～底部。瓶底に「メナム ポマード」というエンボス。整髪料。	I層攪乱
	38	石製品	石臼	—	口径 —	器高 10.6	底径 —	厚さ9.2cm、孔4.7cm、重量15.1kg。輝緑岩？	I層攪乱
	39	石製品	不明	—	口径 —	器高 35.0	底径 —	石灰岩の内側をくり抜き、容器状に加工したものか？厚さ8.4cm、重量20.3kg。石灰岩と思われる。	I層攪乱
	40	石製品	錘	—	口径 —	器高 —	底径 —	表面及び側面に磨面。流紋岩。	I層攪乱
	41	石器	不明	—	口径 —	器高 —	底径 —	剥片。チャートか。	表採



図版 70 表土・攪乱 出土遺物1 (I地区)



図版 71 表土・攪乱 出土遺物2 (I 地区)

b II 地区

表土・攪乱層で出土した遺物は総数18,063点である。遺物の種類としては、青磁、白磁、染付、色絵、タイ産褐釉陶器、褐釉陶器、本土産白磁、本土産染付、本土産陶器、本土産近代陶器、本土産近現代磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、土器、陶質土器、瓦質土器、カムイヤキ、瓦、煉瓦、円盤状製品、石器、石製品、石材、土製品、骨製品、木製品、煙管、青銅製品、鉄製品、ガラス製品、プラスチック製品、ボタン、産地不明品などである。I 地区と同様に、主体は本土産近現代磁器や沖縄産施釉陶器の碗や皿、沖縄産無釉陶器の壺、瓦などである。古くは縄文時代晚期相当の資料から、近現代の資料まであらゆる時代の遺物が混在してみられるのが特徴である。図示および写真撮影した遺物の特徴については、観察表(第28表)に記す。

第28表 表土・攪乱出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)a

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地		
				長軸	厚さ	短軸				
第99図 図版72	1	土器	鉢	口縁部	—	—	—	口縁部と考えられるが、小破片のため、不明瞭。	D-11 I層	
	2	石器	磨石	—	—	—	—	表面に磨面。側縁には打割のような痕跡もあることより、石斧の未製品の可能性もある。砂岩。重量475g。	E-10・11 I層	
	3	カムイヤキ	壺	胴部	口径	器高	底径	—	内面は回転擦痕、外面には叩き目痕がみられる。胎土は暗褐色を呈し、白色粒を多く含む。	D・E-11 I層
	4	カムイヤキ	壺	胴部	口径	器高	底径	—	胴部内面は当て具痕がみられ、ナデ調整が施される。外面は波状の沈線が2本めぐる。胎土は灰黒色を呈し、白色粒を多く含む。	D-10 I層
	5	白磁	碗	口縁部	口径	器高	底径	—	玉縁口縁。素地は白灰色で緻密。黒色粒を含む。	C-10 I層
	6	白磁	碗	口縁部	口径	器高	底径	—	玉縁口縁。玉縁下端の削りが明瞭だが、玉縁の作りは薄い。素地は白灰色で細かい。黒色粒を含む。	D-9 I層
	7	白磁	小碗	底部	口径	器高	底径	—	量付に砂目あり。素地は白色で緻密。外底に型押しによる文様のようなものがある。徳化窯産。	E-9 I層
	8	白磁	小杯	底部	口径	器高	底径	—	型成形。素地は白色で緻密。徳化窯産。	E-11 I層
	9	白磁	皿	口～底部	口径	器高	底径	—	内外面に施釉し、量付から外底にかけては露胎。口唇部を釉剥ぎする。素地は白色で緻密。徳化窯産。	E-11 I層
	10	白磁	皿	口縁部	口径	器高	底径	—	内外面に施釉。口唇部を釉剥ぎする。外面口縁部には砂粒が付着する。素地は白色で緻密。黒色粒を僅かに含む。徳化窯産。	E-10 I層
	11	青磁	碗	胴部	口径	器高	底径	—	外面に片切り彫りによる鎬蓮弁文。素地は灰色で細かい。黒色粒を含む。	D・E-11 I層
	12	青磁	碗	口縁部	口径	器高	底径	—	素地は灰白色で緻密。黒色粒を含む。	D-10・11 I層
	13	青磁	皿	口縁部	口径	器高	底径	—	口唇部下部に削りを入れて、玉縁状を呈する。素地は灰白色で緻密。黒色粒を含む。	E-10・11 I層
	14	染付	碗	底部	口径	器高	底径	—	量付は露胎。素地は白灰色で緻密。	G・H-11 I層
	15	染付	小碗	底部	口径	器高	底径	—	高台脇から量付は露胎。素地は白灰色で緻密。	F-9 I層
	16	染付	小碗	底部	口径	器高	底径	—	量付は露胎。素地は白灰色で緻密。徳化窯産と考えられる。	E-9 I層
	17	染付	皿	口～底部	口径	器高	底径	—	高台脇から量付は露胎。外面は轆轤痕が明瞭。素地は白色で緻密。	E-10 I層
	18	染付	皿	口縁部	口径	器高	底径	—	素地は白色で緻密。	D-10・11 I層
	19	染付	皿	底部	口径	器高	底径	—	高台脇から量付は露胎。素地は白色で緻密。	E-9 I層
	20	染付	皿	口～底部	口径	器高	底径	—	量付は露胎。素地は白色で緻密。21と同一個体と思われる。	E-10 I層
	21	染付	皿	口～底部	口径	器高	底径	—	量付は露胎。素地は白色で緻密。20と同一個体と思われる。	E-11 I層
	22	染付	鉢	底部	口径	器高	底径	—	内底は蛇の目状に釉剥ぎ。量付は露胎で砂目あり。素地は白灰色で緻密。黒色粒を含む。	E-10・11 I層
	23	染付	散蓮華	皿部	口径	器高	底径	—	接地面は露胎。素地は白色で緻密。黒色粒を含む。	E-10 I層
	24	色絵	碗	底部	口径	器高	底径	—	素地は白色で緻密。黒色粒を含む。外面に僅かに文様の痕跡を確認できるが、顔料が剥げており不明瞭。	E-9 I層
	25	色絵	小碗	口縁部	口径	器高	底径	—	口唇部を釉剥ぎする。素地は白色で緻密。	G-11 I層
第100図 図版72	26	色絵	皿	口～底部	口径	器高	底径	—	量付は露胎。素地は白色で緻密。黒色粒を含む。	E-9 I層
	27	色絵	皿	口～底部	口径	器高	底径	—	量付は露胎。外面は轆轤痕が明瞭。素地は白色で緻密。黒色粒を含む。	E-10 I層
	28	色絵	皿	口～底部	口径	器高	底径	—	量付は露胎。外面は轆轤痕が明瞭。素地は白色で緻密。	E-10 I層
	29	褐釉陶器	壺	口縁部	口径	器高	底径	—	口唇部は露胎。素地は黒色で細かい。白色粒、褐色粒を含む。30と同一個体と思われる。	E-9 I層
	30	褐釉陶器	壺	口縁部	口径	器高	底径	—	口唇部は露胎。素地は黒色で細かい。白色粒、褐色粒を含む。29と同一個体と思われる。	E-9 I層
	31	本土産磁器	染付碗	口～底部	口径	器高	底径	—	量付は露胎。素地は白色で緻密。	D-10・11 I層
	32	本土産磁器	染付小碗	口縁部	口径	器高	底径	—	素地は白色で緻密。	D-10・11 I層
	33	本土産磁器	染付碗	底部	口径	器高	底径	—	量付は露胎。素地は白色で緻密。	E-11 I層
	34	本土産磁器	染付碗	底部	口径	器高	底径	—	量付は露胎。素地は白色で緻密。	E-10 I層
	35	本土産磁器	染付皿	口縁部	口径	器高	底径	—	口唇部から内面口縁部下半まで露胎。素地は白色で緻密。	E-10 I層
	36	本土産磁器	染付小碗	底部	口径	器高	底径	—	量付は露胎。素地は白色で緻密。	H-10 I層
	37	本土産磁器	染付皿	口～底部	口径	器高	底径	—	高台脇から量付は露胎。素地は白色で緻密。稜花皿。	E-10 I層
	38	本土産磁器	染付皿	口縁部	口径	器高	底径	—	素地は白色で緻密。稜花皿。	E-9 I層
	39	本土産磁器	染付皿	底部	口径	器高	底径	—	量付は露胎。素地は白色で緻密。黒色粒を含む。	E-10 I～II層 上面
	40	本土産磁器	染付皿	底部	口径	器高	底径	—	外底中央部は円状に一段凹み、釉薬がかかる。量付から外底中央部以外は露胎。素地は白色で緻密。黒色粒を含む。	F-9・10 I層

第28表 表土・攪乱出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)b

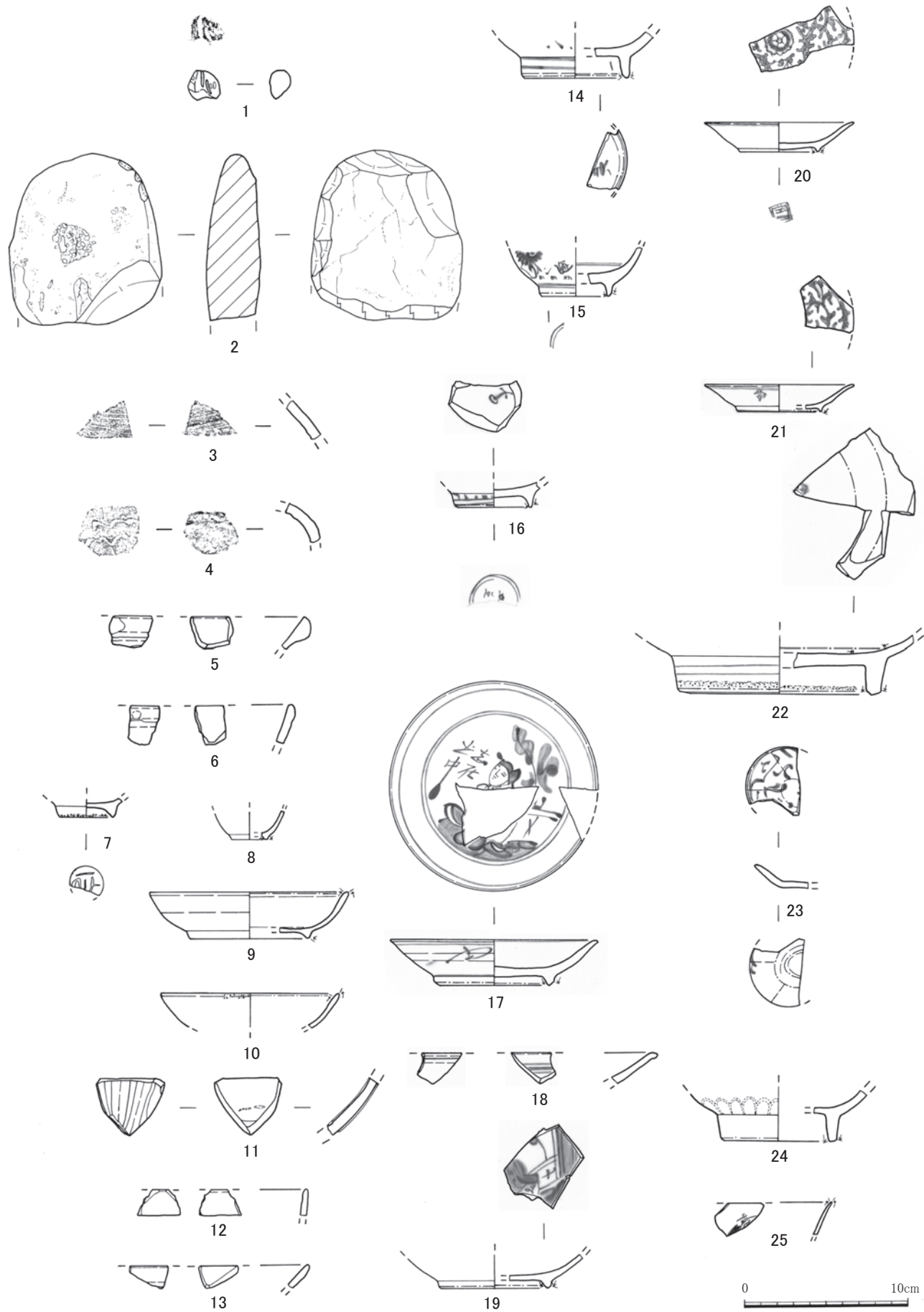
単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地	
				口径	器高	底径			
第100図 図版72	41	本土産磁器	染付鉢	口～底部	口径 13.4	器高 6.1	底径 5.6	畳付は露胎。素地は白色で緻密。稜花鉢。	E-10 I層
	42	本土産磁器	染付鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	素地は白色で緻密。稜花鉢。	攪乱
	43	本土産磁器	染付鉢	口縁部	口径 —	器高 —	底径 —	胴部は角をもつ。素地は白色で緻密。	E-10 I層
第101図 図版72	44	本土産磁器	染付蓋	—	口径 9.1	器高 —	底径 —	素地は白色で緻密。	D-10 I層
	45	本土産磁器	染付蓋	—	口径 9.4	器高 —	底径 —	素地は白色で緻密。外面に雷文。	E-9 I層
	46	本土産磁器	瓶	底部	口径 —	器高 —	底径 6.3	畳付は露胎。素地は白色で緻密。黒色粒を含む。	E-9 I層
第101図 図版73	47	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.8	器高 7.0	底径 6.2	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。外面に呉須と鉄釉で文様を描く。素地は黄色味をおびた白色で粗い。	E-10 I層
	48	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.6	器高 6.6	底径 6.2	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は黄色味をおびた白色で粗い。	E-11 I層
	49	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 14.4	器高 6.9	底径 6.2	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は黄色味をおびた白色で粗い。黒色粒を含む。	不明
	50	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 14.8	器高 7.0	底径 6.8	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は黄色味をおびた白色で粗い。	E-9 I層
	51	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底部	口径 13.8	器高 6.9	底径 6.8	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は黄色味をおびた白色で粗い。黒色粒を含む。	F-9・10 I層
	52	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底部	口径 8.5	器高 3.7	底径 4.0	内外面に透明釉を施す。畳付は露胎。素地は白色で細かい。黒色粒を含む。外面に3本の沈線。	D-10 I層
	53	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底部	口径 8.6	器高 4.6	底径 3.8	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎で、アルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は赤味をおびた白色で粗い。外面は多角形に面取りされる。	G-10 I層
	54	沖縄産 施釉陶器	小碗	底部	口径 —	器高 —	底径 3.8	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎で、アルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は黄色味をおびた白色で粗い。外面は多角形に面取りされる。	E-10・11 I層
	55	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底部	口径 8.4	器高 4.5	底径 3.9	内面に灰釉、外面に鉄釉を掛け分け。内面見込みは蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎で、アルミナを塗布。見込みに目跡あり。素地は黄色味をおびた白色で粗い。	D-10・11 I層
	56	沖縄産 施釉陶器	鉢	口～底部	口径 25.6	器高 12.8	底径 8.2	内面に白化粧+透明釉、外面に鉛釉を掛け分け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎で、アルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は暗灰色で細かい。内外面ともに轆轤痕が明瞭。	E-10 I層
	57	沖縄産 施釉陶器	小鉢	口～底部	口径 17.4	器高 7.0	底径 7.6	内外面に白化粧+透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎。内面に呉須と鉄釉で文様を描く。畳付にアルミナを塗布。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は橙白色で粗い。	D-10 I層
	58	沖縄産 施釉陶器	火入	口～底部	口径 10.8	器高 8.2	底径 6.8	内面口唇部と外面腰部まで透明釉を施釉。外面口縁部と胴部に呉須で文様を描く。外面腰部と高台の間に目跡あり。素地は白灰色で粗い。	攪乱
	59	沖縄産 施釉陶器	火入	口～底部	口径 9.8	器高 8.8	底径 6.8	内面口唇部と外面腰部まで透明釉を施釉。外面口縁部と胴部に呉須と2本の沈線による文様。外面腰部と高台の間に目跡あり。畳付の仕上げが粗い。素地は暗灰色で細かい。	E-9 I層
	60	沖縄産 施釉陶器	火入	口縁部	口径 10.4	器高 —	底径 —	内面口唇部と外面腰部まで施釉。外面口縁部は緑釉、胴部は象嵌による文様。素地は褐灰色で細かい。	D-10・11 I層
	第102図 図版73	61	沖縄産 施釉陶器	瓶	胴部	口径 —	器高 —	底径 —	内外面ともに施釉。外面口縁部は緑釉、胴部は象嵌による文様。素地は褐灰色で細かい。内外面ともに轆轤痕が明瞭。
62		沖縄産 無釉陶器	播鉢	底部	口径 —	器高 —	底径 —	内面に櫛目をまんべんなく施す。素地は赤褐色で、黒色粒、白色粒を含む。	E-10・11 I層
63		沖縄産 無釉陶器	壺	口縁部	口径 12.0	器高 —	底径 —	素地は暗褐色で粗い。	E-10・11 I層
64		沖縄産 無釉陶器	壺	底部	口径 —	器高 —	底径 6.6	素地は暗褐色で粗い。内面は轆轤痕が明瞭。	E-10・11 I層
65		沖縄産 無釉陶器	壺	口～底部	口径 17.0	器高 46.8	底径 19.8	完形。	不明
第102図 図版74	66	沖縄産 無釉陶器	壺	口縁部	口径 17.0	器高 —	底径 —	素地は赤褐色で粗い。白色粒を多く含む。内面は轆轤痕が明瞭。	E-10・11 I層
	67	沖縄産 無釉陶器	壺	底部	口径 —	器高 —	底径 —	素地は赤褐色で粗い。白色粒を含む。内外面は轆轤痕が明瞭。	E-10・11 I層
	68	沖縄産 施釉陶器	蓋	—	口径 16.8	器高 —	底径 13.4	素地は赤褐色で粗い。白色粒、黒色粒を含む。内外面は轆轤痕が明瞭。	F-9・10 I層
	69	陶質土器	鉢	底部	口径 —	器高 —	底径 9.2	胎土は橙色で、黒色粒、白色粒、褐色粒を含む。外底に糸切痕あり。	E-10・11 I層
	70	瓦質土器	播鉢	底部	口径 —	器高 —	底径 9.0	内面に櫛目を密に施す。胎土は暗灰色で白色粒、黒色粒を含む。	E-9 I層
	71	瓦質土器	七輪	口～底部	口径 —	器高 —	底径 —	胎土は暗灰色。内面は轆轤痕が明瞭。	不明
	72	瓦質土器	箱形容器	底部	口径 —	器高 —	底径 —	外面は磨かれたかのように光沢をもつ。胎土は暗赤褐色で、石英粒、白色粒、赤色粒、雲母を含む。73と同一個体と考えられる。	E-10 I層
	73	瓦質土器	箱形容器	底部	口径 —	器高 —	底径 —	外面は磨かれたかのように光沢をもつ。胎土は暗赤褐色で、石英粒、白色粒、赤色粒、雲母を含む。72と同一個体と考えられる。	E-10 I層
	74	円盤状製品	—	—	口径 —	器高 —	底径 —	沖縄産無釉陶器を素材としている。重量17.6g。	G-11 I層
	75	銭貨	寛永通寶	—	外径 2.5	孔径 0.6	厚さ 0.1	江戸時代。重量2.8g。	C-10 I層
76	銭貨	一銭	—	外径 2.3	孔径 —	厚さ 0.1	大正十年発行の一銭青銅貨。表に桐の文様。重量3.6g。	C-10 I層	
77	煙管	—	吸口	口径 —	器高 —	底径 —	青銅製。板材を筒状に曲げて作られたものと考えられる。吸口0.6cm、小口1.0cm、重量7.9g。	E-9 I層	

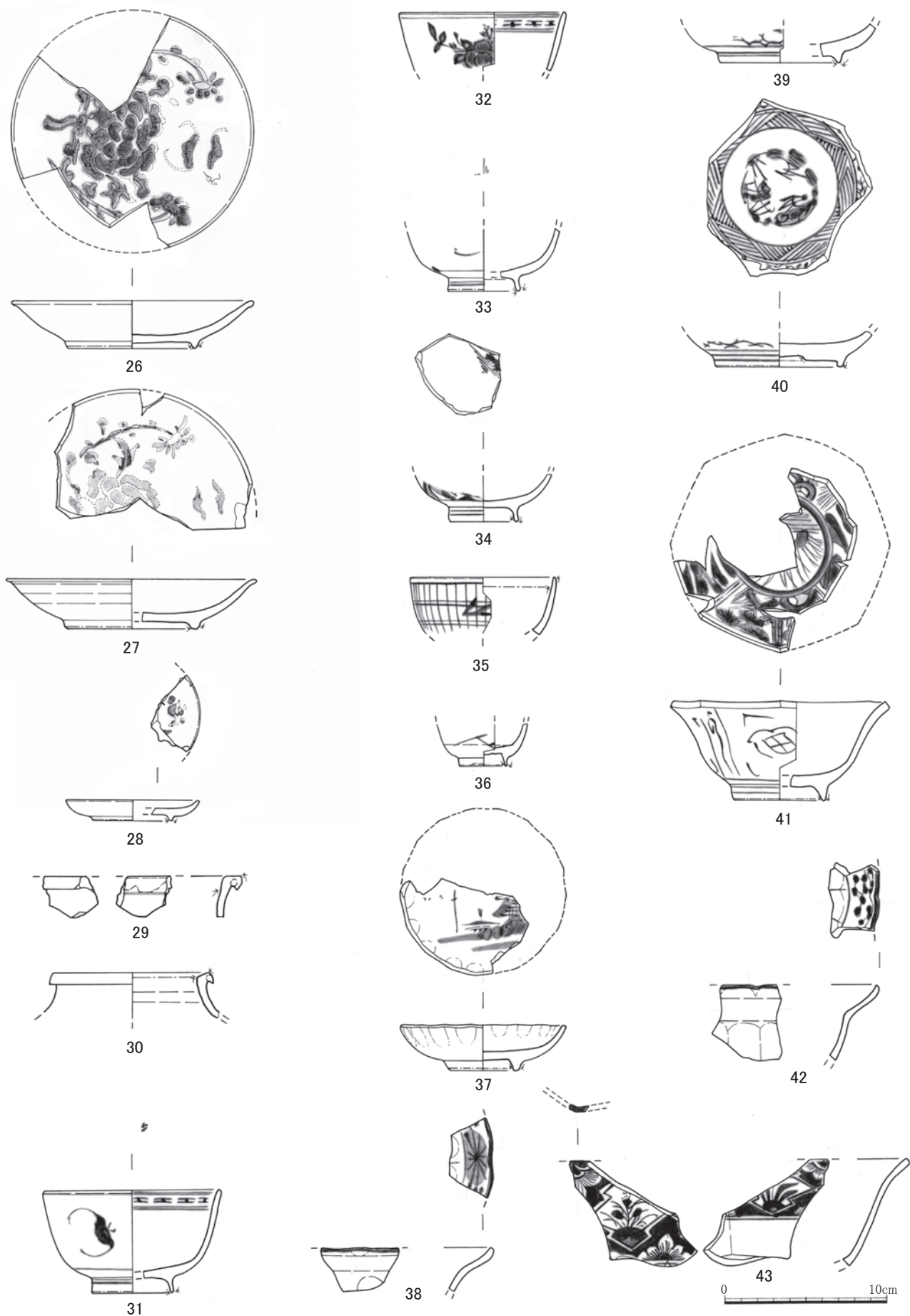
第28表 表土・攪乱出土遺物観察一覧(Ⅱ地区)c

単位:cm

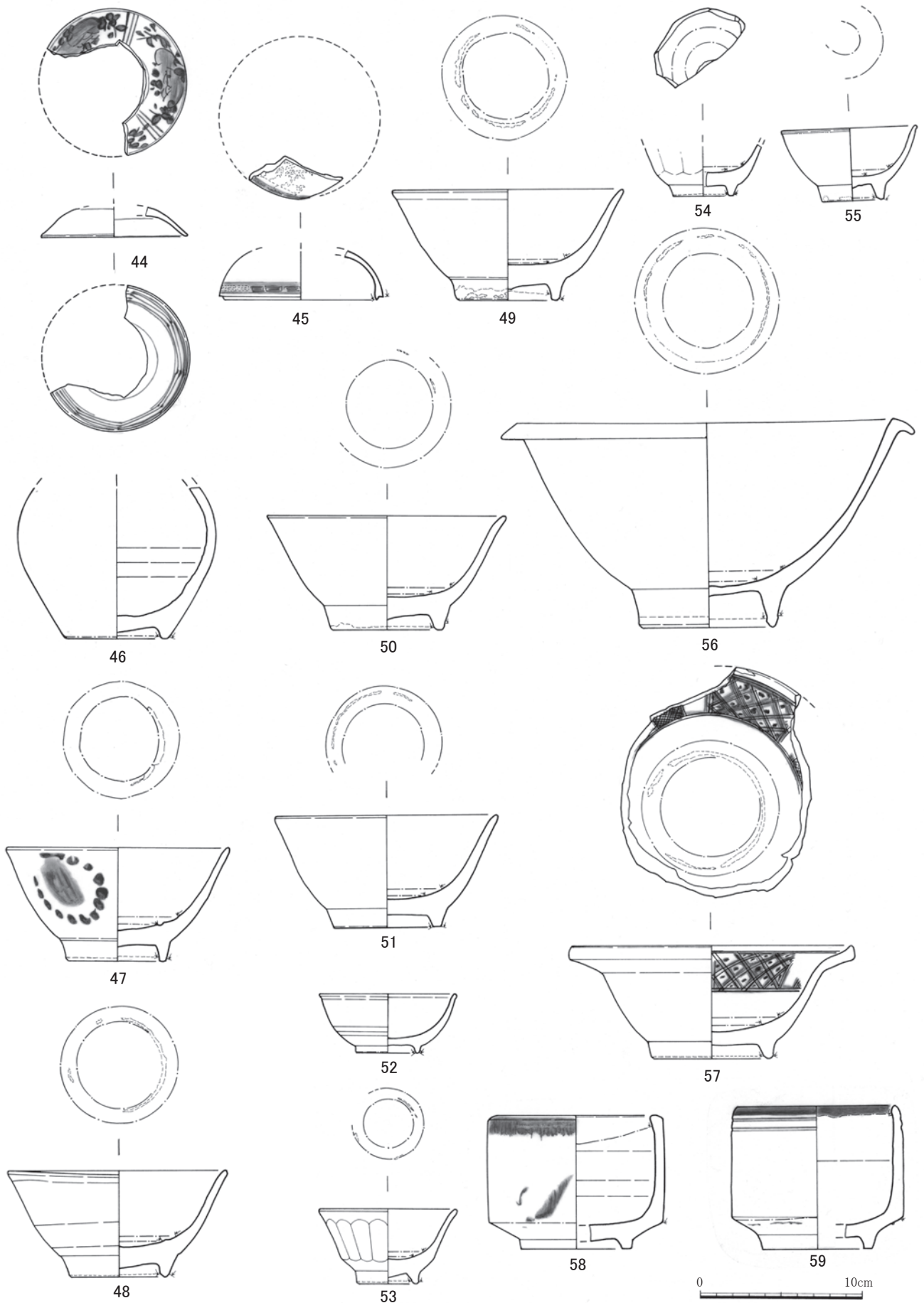
挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量			観察事項	出土地				
				口径	器高	底径						
第102図 図版74	78	煙管	—	吸口	—	—	—	青銅製。火皿部分は欠損。重量33.2g。	D-9 I層			
	79	石製品	硯	—	—	—	—	海部は欠損。陸部中央に凹みあり。側面には線条痕がみられる。裏面に「天皇陛下は」という文字が彫られている。緑色千枚岩。	E-9 I層			
	80	石製品	硯	—	—	—	—	海部は欠損。砂岩？	E-9 I層			
	81	木製品	蓋	—	—	—	—	側面に段差がみられることよりの蓋と考えられる。	不明			
	82	石製品	石球？	—	—	—	—	表面は滑らかで丁寧に仕上げている。	G・H-10 I層			
図版74	83	瓦	明朝系 平瓦	広端 ～狭端部	口径	器高	底径	—	—	—	色調は赤色。凹面に漆喰が付着。	E-10 I層
	84	瓦	明朝系 平瓦	広端 ～狭端部	口径	器高	底径	—	—	—	色調は赤色。	E-11 I層
	85	瓦	明朝系 丸瓦	玉縁部	口径	器高	底径	—	—	—	色調は赤色。漆喰が付着。	不明
	86	瓦	明朝系 丸瓦	玉縁部	口径	器高	底径	—	—	—	色調は赤色。漆喰が付着。	E-10 I層
図版75	87	瓦	明朝系 丸瓦	玉縁部	口径	器高	底径	—	—	—	色調は赤色。漆喰が付着。	E-11 I層
	88	本土産磁器	碗	口～底部	口径	器高	底径	13.3	6.0	5.0	畳付は露胎。素地は白色で細かい。内底に4つの胎土目が確認できることより、本来は5つの胎土目があつたと考えられる。型紙絵付け。近現代。	G-10 I層
	89	本土産磁器	碗	口～底部	口径	器高	底径	12.4	6.0	4.5	畳付は露胎。素地は白色で緻密。型紙絵付け。近現代。	E-10 I層
	90	本土産磁器	碗	口～底部	口径	器高	底径	12.3	5.4	5.3	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内底に5つの胎土目が確認できる。型紙絵付け。近現代。	D-10 I層
	91	本土産磁器	碗	口～底部	口径	器高	底径	—	5.4	3.8	畳付は露胎。素地は白色で緻密。吹き絵技法。近現代。	攪乱
	92	本土産磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	—	4.8	3.7	畳付は露胎。素地は白色で緻密。銅版転写。近現代。	不明
	93	本土産磁器	碗	口～底部	口径	器高	底径	11.1	5.1	3.8	素地は白色で緻密。統制磁器。外面口縁部に緑色の圏線が2本。外底に「□662」という銘あり。近現代。	不明
	94	本土産磁器	碗	口～底部	口径	器高	底径	11.0	5.6	4.9	素地は白色で緻密。統制磁器。外面口縁部に緑色の圏線が2本。外底に印と「□241」という銘あり。近現代。	不明
	95	本土産磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	8.0	3.7	3.4	畳付から高台内は露胎。素地は白色で緻密。クロム青磁。近現代。	D-10 I層
	96	本土産磁器	小碗	底部	口径	器高	底径	—	—	3.8	畳付は露胎。素地は白色で緻密。近現代。	F-9・10 I層
	97	本土産磁器	小碗	口～底部	口径	器高	底径	8.2	4.5	3.7	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面口縁部に緑色の圏線が3本。近現代。	E-11 I層
	98	本土産磁器	小碗	底部	口径	器高	底径	—	—	4.1	素地は白色で緻密。統制磁器。外底に「□L056」という銘あり。近現代。	D-9 I層
	99	本土産磁器	小杯	口～底部	口径	器高	底径	—	2.8	2.2	畳付から高台内は露胎。素地は白色で緻密。外面腰部を4箇所面取りする。高台は方形をなす。近現代。	不明
	100	本土産磁器	小杯	口～底部	口径	器高	底径	—	—	2.8	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に文様。銅版転写。近現代。	不明
	101	本土産磁器	皿	口～底部	口径	器高	底径	12.8	2.6	7.3	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に文様。銅版転写。近現代。	G・H-10 I層
	102	本土産磁器	皿	口～底部	口径	器高	底径	12.7	2.4	7.5	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に文様。銅版転写。近現代。	E-10 I層
	103	本土産磁器	皿	口～底部	口径	器高	底径	—	2.5	7.6	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に文様。銅版転写。近現代。	E-11 I層
	104	本土産磁器	皿	口～底部	口径	器高	底径	—	2.6	7.2	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に文様。銅版転写。近現代。	不明
	105	本土産磁器	蓋	—	口径	器高	底径	—	—	—	内面は露胎。素地は白色で緻密。近現代。	E-10 I層
	106	本土産磁器	皿	口～底部	口径	器高	底径	—	1.1	—	底部は露胎。素地は白色で緻密。近現代。	D-10 I層
107	本土産磁器	皿	口～底部	口径	器高	底径	—	0.5	—	底部は露胎。素地は白色で緻密。近現代。	G-10 I層	
108	本土産陶器	皿	口～底部	口径	器高	底径	—	4.3	—	内外面に青色の釉を施す。高台は露胎。素地は白色で細かい。稜花皿。近代。	G-10 I層	
109	青銅製品	把手	—	口径	器高	底径	—	—	—	調度品金具。長さ7.8cm。	不明	
110	鉄製品	ノミ	—	口径	器高	底径	—	—	—	長さa11.2cm、長さb2.2cm、重量85.4g。	E-9 I層	
111	鉄製品	鉄釘B	—	口径	器高	底径	—	—	—	下半部が反っている。長さa6.1cm、長さb1.0cm、重量6.9g。	E-9 I層	
112	鉄製品	カマ	—	口径	器高	底径	—	—	—	刃こぼれが著しい。長さa17.7cm、長さb3.2cm、重量55.3g。	E-9 I層	
113	ガラス製品	瓶	口～底部	口径	器高	底径	2.2	7.1	6.0	ガラス自体に気泡がみられる。肩部には「白樺」、胴部に「小倉油」、瓶底には白樺と思われる植物の葉のエンボス。	不明	
114	ガラス製品	瓶	口～底部	口径	器高	底径	—	8.3	4.8	ガラス自体に小さな気泡がみられる。瓶底には「AJINOMOTO」というエンボス。	不明	
115	ガラス製品	瓶	口～底部	口径	器高	底径	—	—	3.7	ガラス自体に気泡が多くみられる。胴部には、星が3つ入ったエンボスがある。	E-10 I層	
116	石器	磨石	—	口径	器高	底径	—	—	—	表面に磨面。他はすべて自然面。砂岩。	不明	
117	石製品	石臼	—	長さ	厚さ	高さ	—	14.1	14.1	重量30.0kg。	不明	
118	石製品	石臼	—	長さ	厚さ	高さ	—	11.8	13.5	重量26.0kg。	不明	
119	石製品	石臼	—	長さ	厚さ	高さ	—	6.4	6.4	重量11.5kg。	不明	



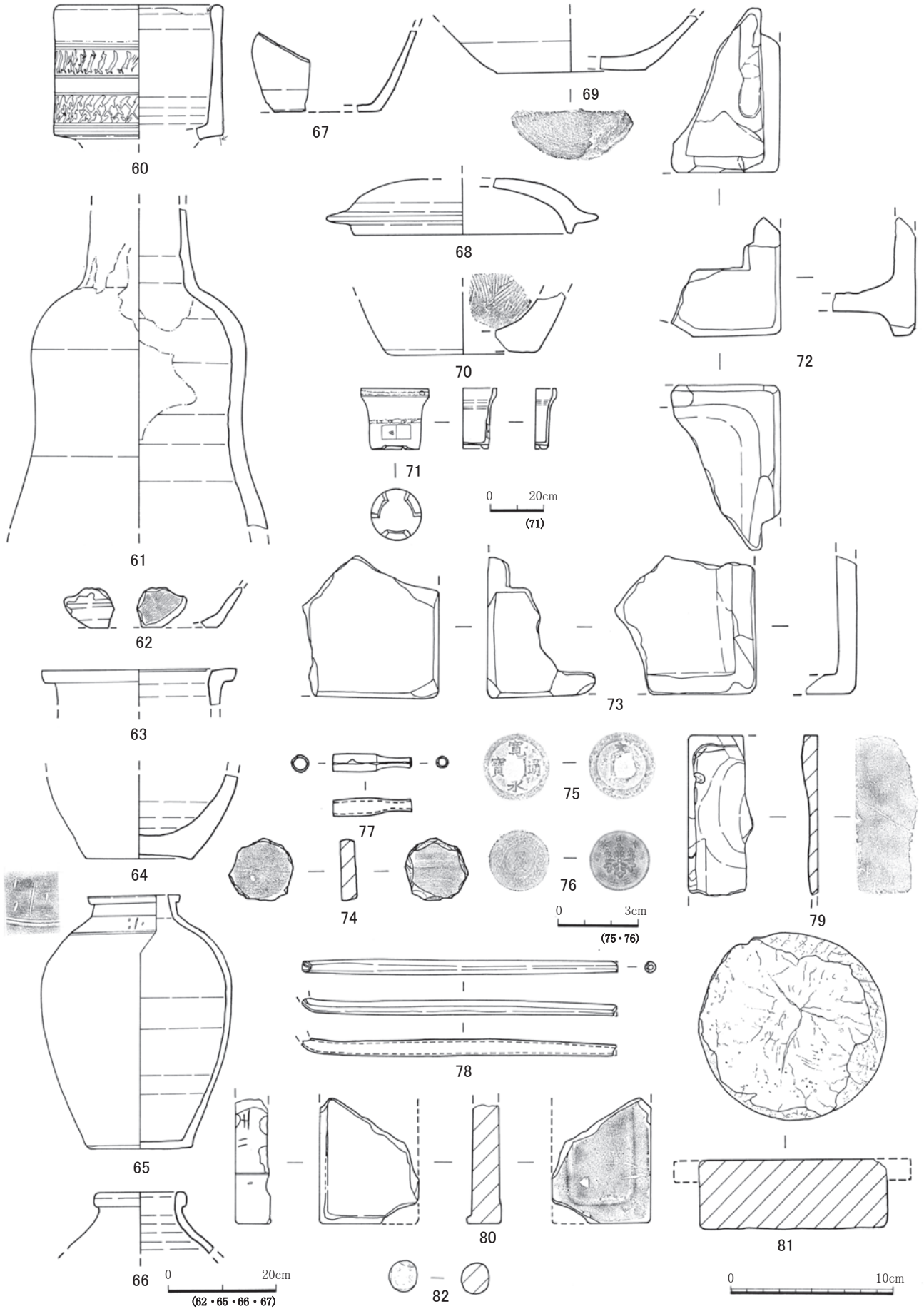
第99图 表土・搅乱出土遺物1(II地区)



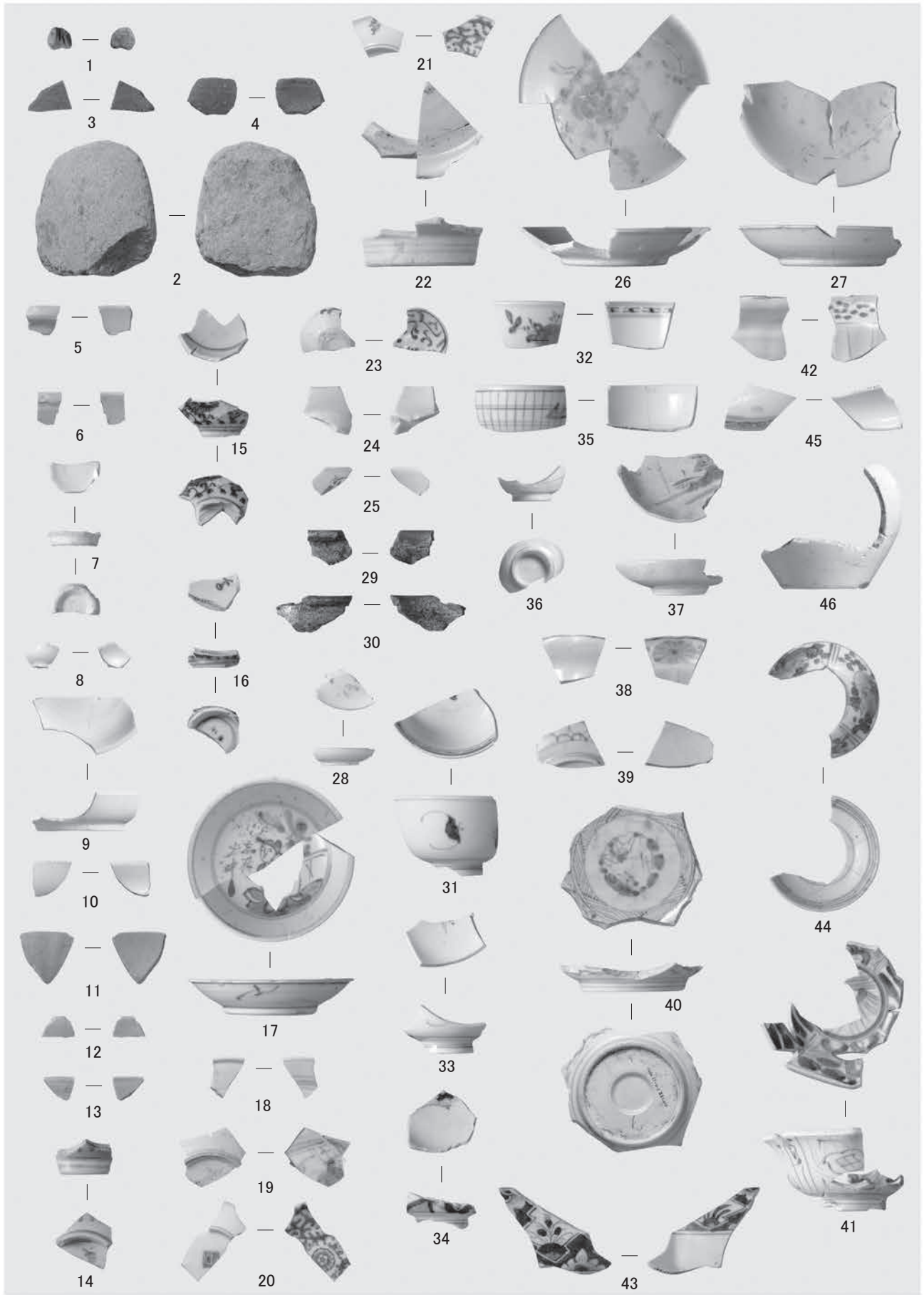
第 100 图 表土・搅乱 出土遺物2(Ⅱ地区)



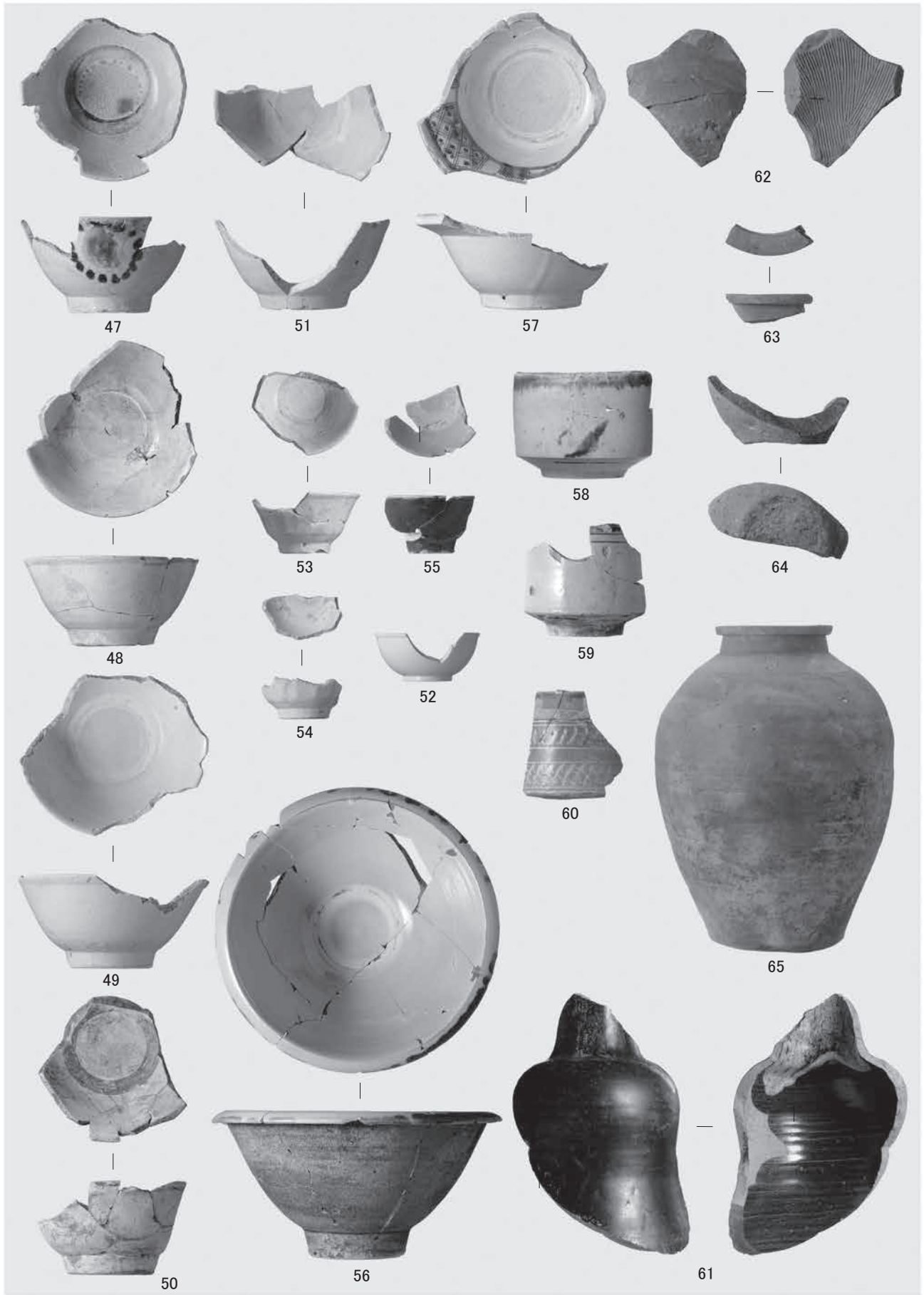
第101图 表土・攪乱出土遺物3(Ⅱ地区)



第102图 表土・搅乱出土遺物4(Ⅱ地区)



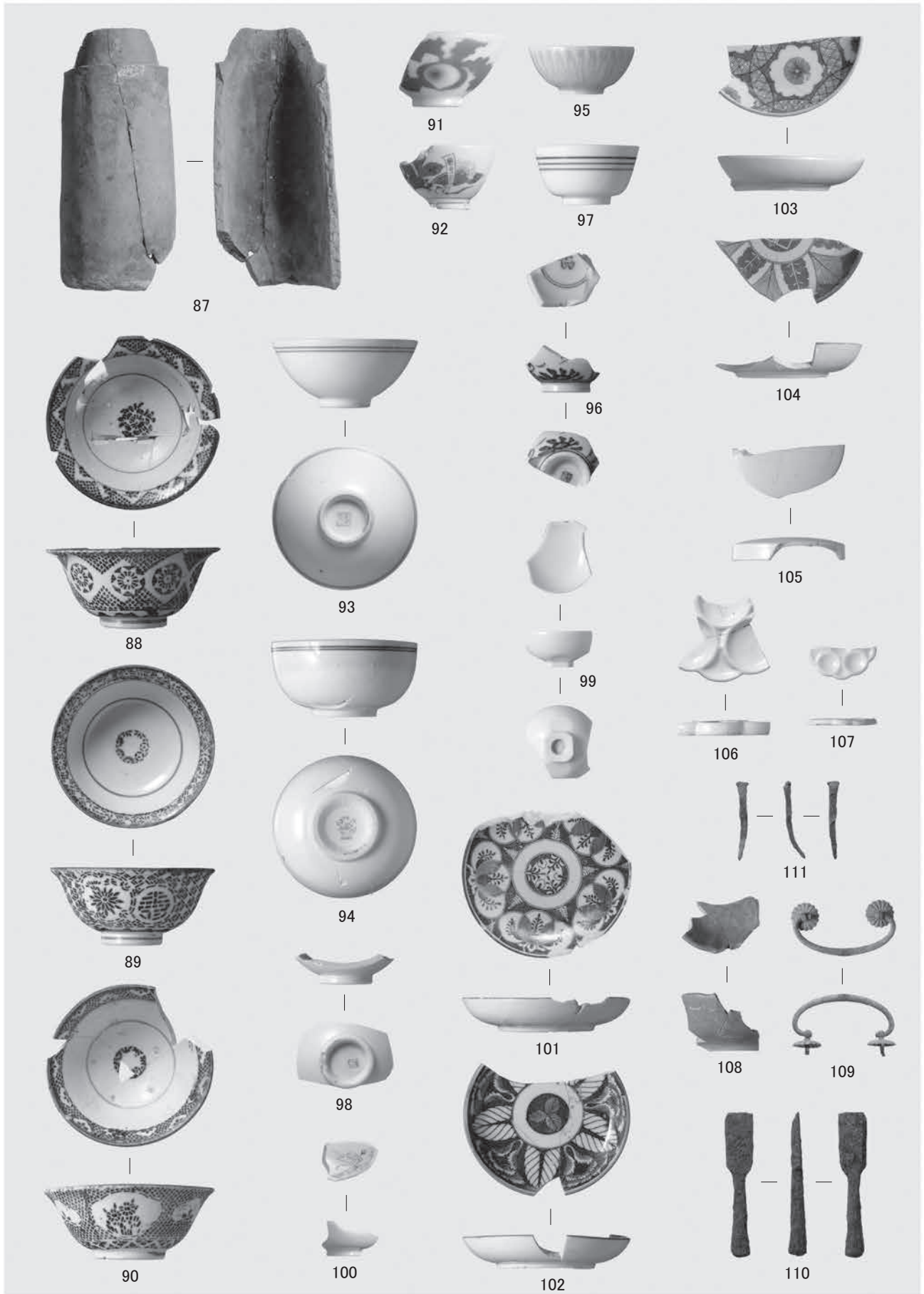
图版 72 表土·搅乱 出土遺物1 (Ⅱ地区)



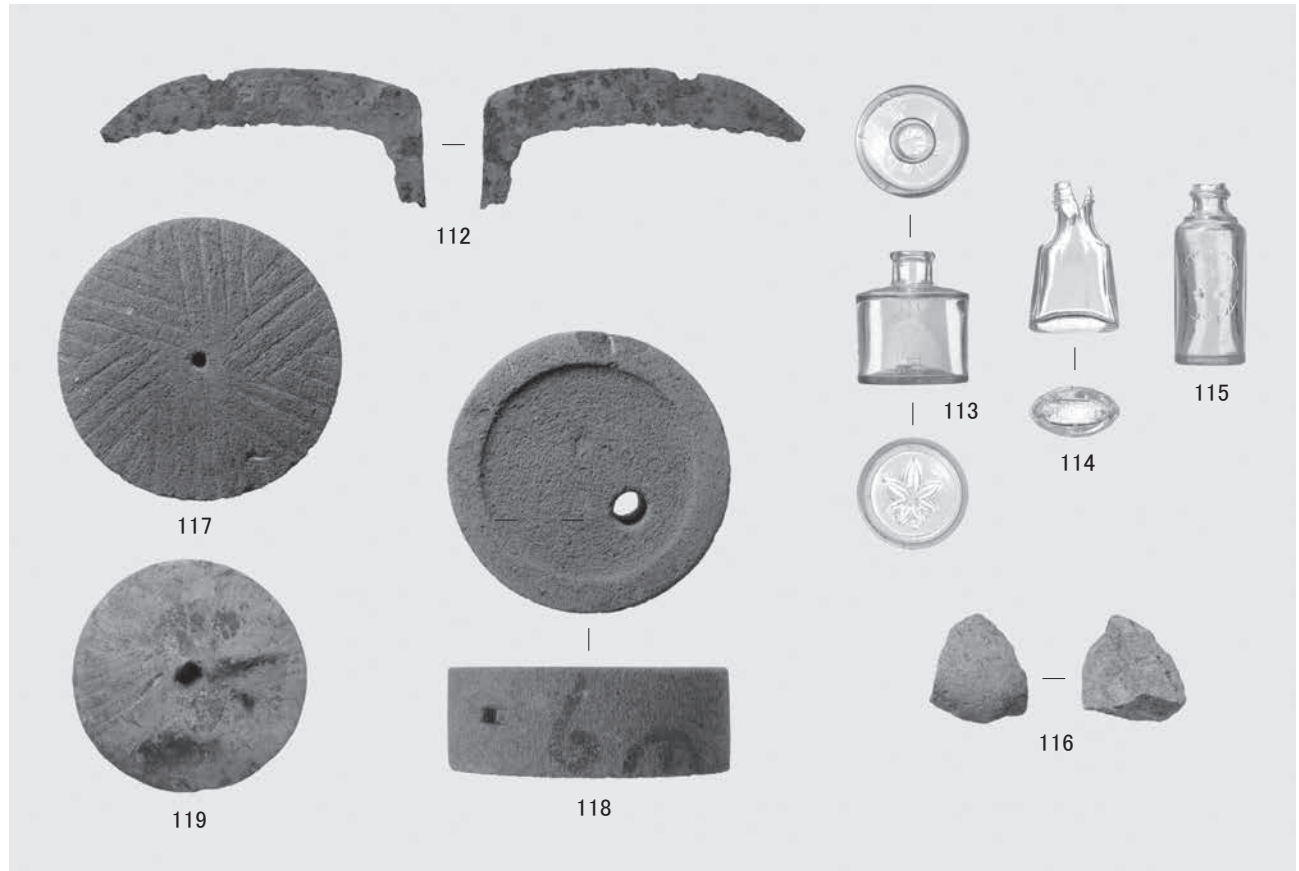
图版 73 表土·搅乱 出土遺物2 (Ⅱ地区)



图版 74 表土·搅乱 出土遺物3 (Ⅱ地区)



图版 75 表土·搅乱 出土遺物4 (Ⅱ地区)



図版 76 表土・攪乱 出土遺物5 (II 地区)

<貝の生息域分類>

外洋～内湾	水深	底質
I 外洋・サンゴ礁域	0 潮間帯上部 (I ではノッチ、III ではマングローブ)	a 岩盤
II 内湾・転石地域	1 潮間帯中・下部	b 転石
III 河口干潟・マングローブ域	2 亜潮間帯上縁部(I ではイノー)	c 岩礫底、砂泥底、砂底
	3 干潮(I にのみ適用)	d マングローブ植物上
	4 礁斜面およびその下部	e 淡水の流入する礫底
IV 淡水域	5 止水	
	6 流水	
V 陸域	7 林内	
	8 林内・林縁部	
	9 林縁部	
	10 海浜部	
VI その他	11 打ち上げ物	
	12 化石	

第5節 自然遺物

1. 貝類遺体

平成20年度のⅠ・Ⅱ地区からは貝類遺体が出土している。詳細については、第99・100表に示す。

2. 脊椎動物遺体

平成20年度のⅠ・Ⅱ地区からは脊椎動物遺体が出土しており、魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類(人骨含む)が確認されている。詳細については、第101～122表に示す。

<動物遺存体種名一覧>

節足動物門 Phylum ARTHROPODA

軟甲亜綱 Subclass Malacostraca

十脚目 Order Decapoda

科・属不明 Fam.et gen.indet

脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA

軟骨魚綱 Class Chondrichthyes

メジロザメ目 Order Carcharhiniformes

メジロザメ科 Family Carcharhinidae

属・種不明 Gen.et sp.indet.

硬骨魚綱 Class Osteichthyes

スズキ目 Order Perciformes

カマス科 Family Sphyraenidae

カマス属 Sphyraena sp.

ハタ科 Family Serranidae

マハタ型 Serranidae cf. *Epinephelus*

属・種不明 Gen.et sp.indet

アジ科 Family Carangidae

属・種不明 Gen.et sp.indet

フエダイ科 Family Lutjanidae

属・種不明 Gen.et sp.indet.

タイ科 Family Sparidae

属・種不明 Gen.et sp.indet.

フエフキダイ科 Family Lethrinidae

ハマフエフキ型 Lethrinus cf. *L. nebulosus*

フエフキダイ属 Lethrinus sp.

属・種不明 Gen.et sp.indet.

ベラ科 Family Labridae

シロクラベラ型

Labridae cf. *Cherodon shoenleinii*

属・種不明 Gen.et sp.indet.

アイゴ科 Family Siganidae

アイゴ属 Siganus sp.

フグ目 Order Tetraodontiformes

ハリセンボン科 Family Diodontidae

属・種不明 Gen.et sp.indet.

両生綱 Class Amphibia

無尾目 Order Anura

科・属不明 Fam.et gen.indet

爬虫綱 Class Reptilia

有鱗目 Order Squamata

トカゲ亜目 Suborder Sauria

科・属不明 Fam.et gen.indet

ヘビ亜目 Suborder Ophidia

科・属不明 Fam.et gen.indet

鳥綱 Class Aves

キジ目 Order Galliformes

キジ科 Family *Phasianidae*

ニワトリ *Gallus gallus var. domesticus*

科・属不明 Fam.et gen.indet

哺乳綱 Class Mammalia

霊長目 Order Primates

ヒト科 Family Hominidae

ヒト *Homo sapiens*

トガリネズミ形目 Order Soricomorpha

トガリネズミ科 Family Soricidae

ジャコウネズミ *Suncus murinus*

ウサギ目(重歯目) Order Lagomorpha

ウサギ科 Family Laporidae

属・種不明 Gen.et sp.indet

齧歯目 Order Rodentia

ネズミ科 Family Muridae

属・種不明 Gen.et sp.indet

食肉目 Order Carnivora

イヌ科 Family Canidae

イヌ *Canis familiaris*

ネコ科 Family Felidae

ネコ *Felis catus*

奇蹄目 Order Perissodactyla

ウマ科 Family Equidae

ウマ *Equus caballus*

偶蹄目 Order Artiodactyla

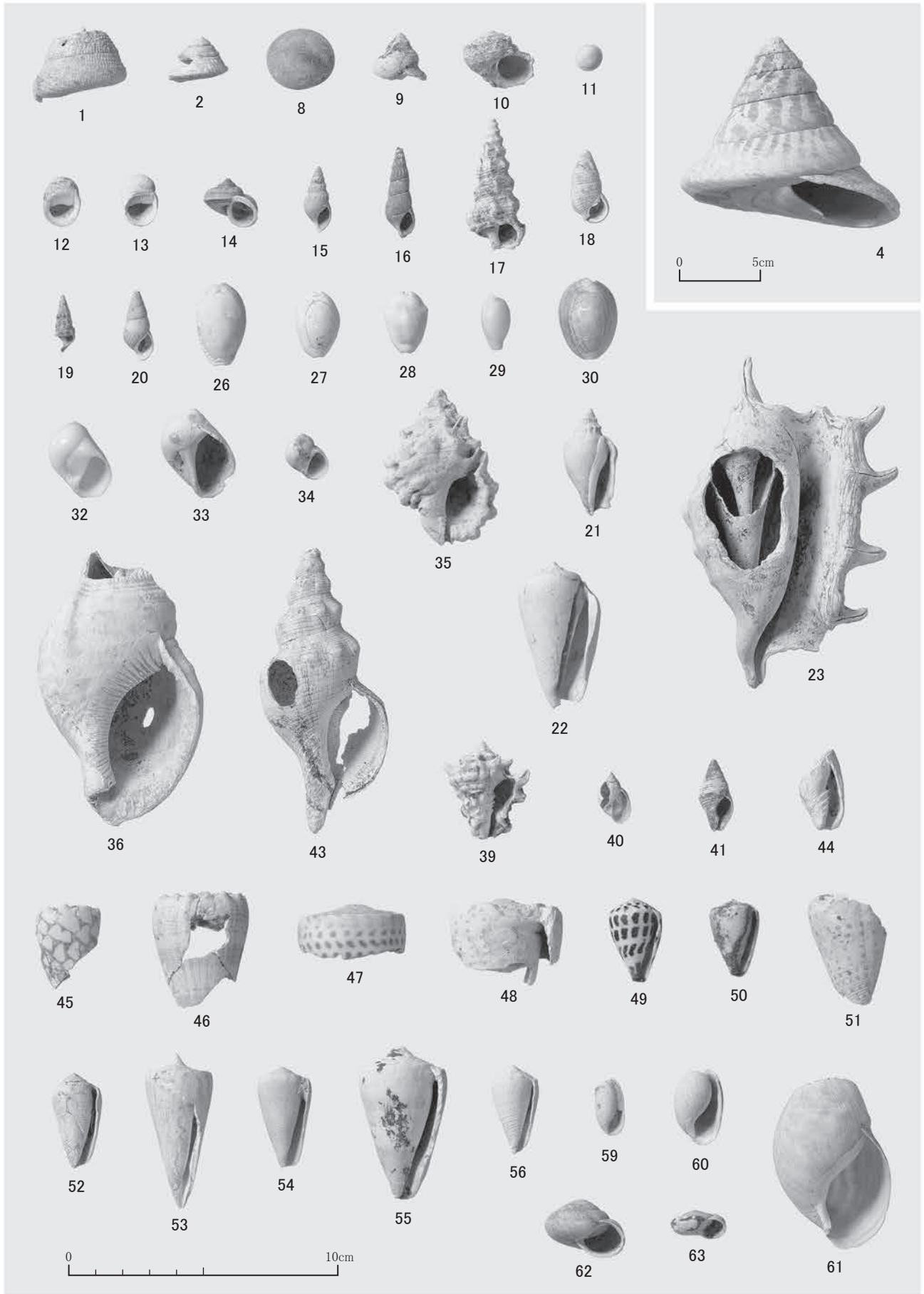
イノシシ科 Family Suidae

ブタ *Sus scrofa var. domesticus*

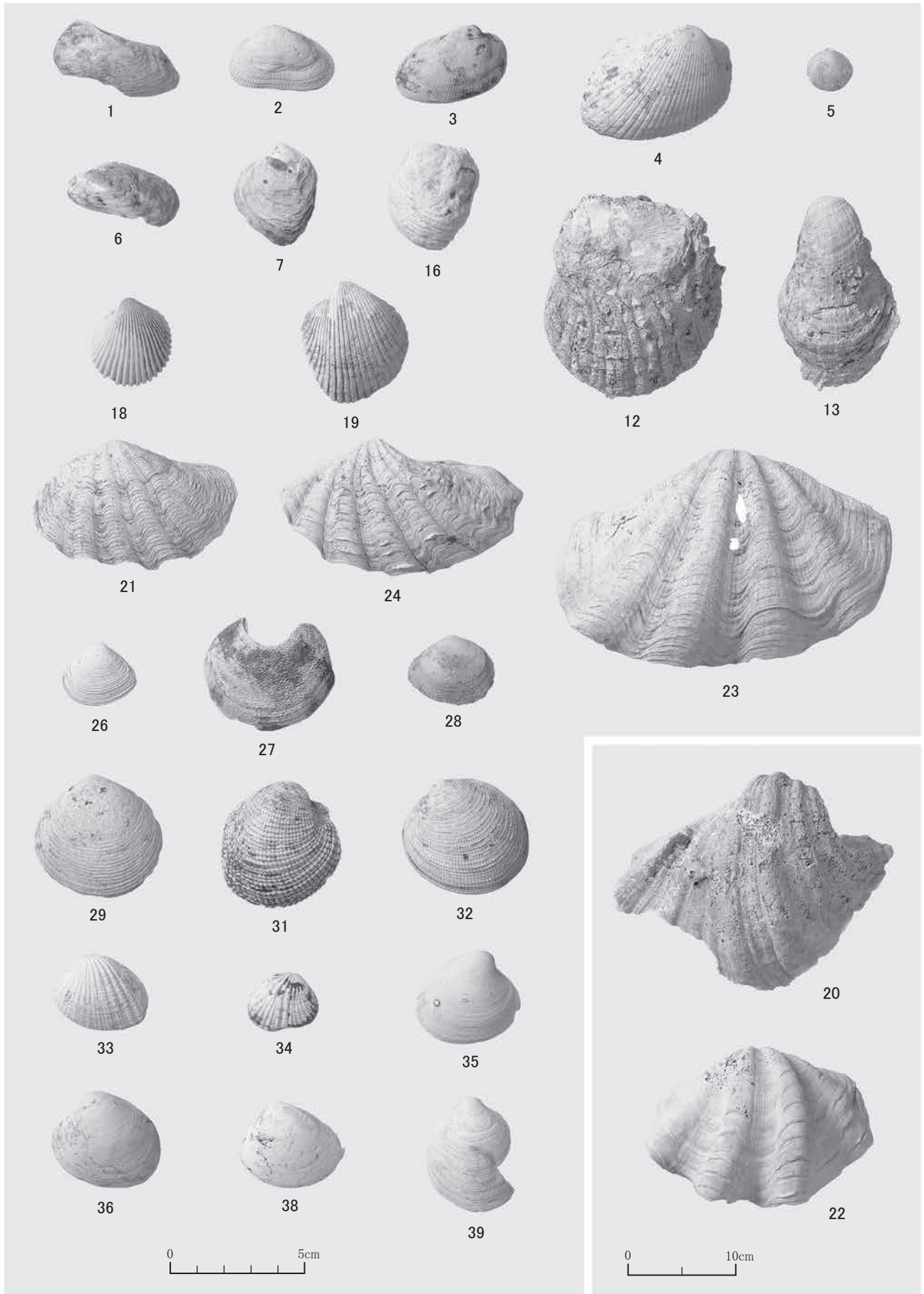
ウシ科 Family Bovidae

ウシ *Bos taurus*

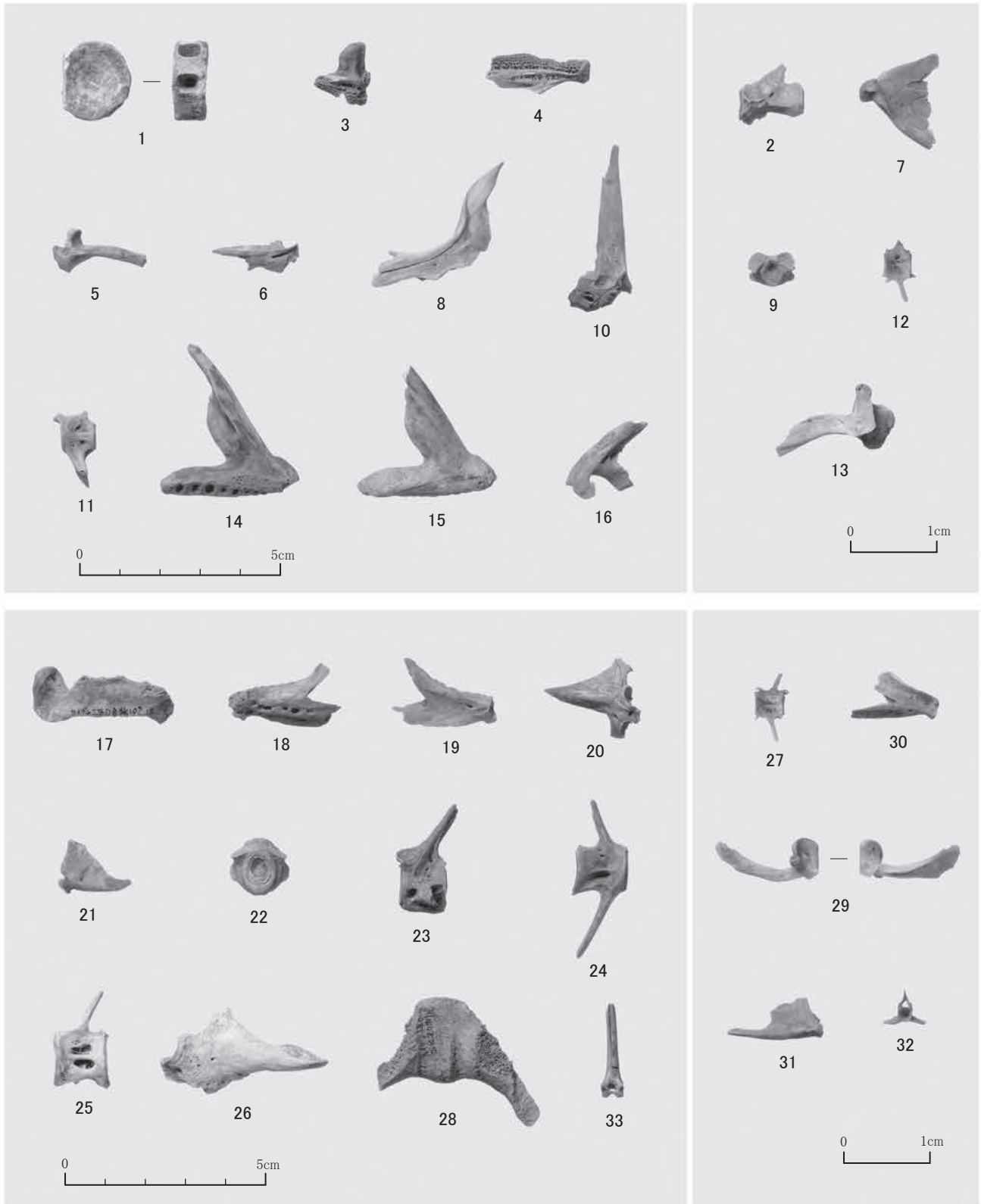
ヤギ *Capra hircus*



図版 77 貝類遺体1 (巻貝)



図版 78 貝類遺体2 (二枚貝)



図版 79 脊椎動物遺体1

- サカナ 上 サメ類メジロザメタイプ 1. 椎骨 カマス属 2. 腹椎 ハタ科マハタ型 3. 左 前上顎骨 4. 左 歯骨 ハタ科 5. 左 主上顎骨
 6. 左 角骨 7. 左 方骨 8. 左 擬鎖骨 9. 第一椎骨 10. 腹椎 キズあり ハタ型 11. 尾椎 アジ科 12. 尾椎 フェダイ科
 13. 右 主上顎骨 フェフキダイ属ハマフエキ型 14. 左 前上顎骨 15. 右 前上顎骨 フェフキダイ属 16. 左 口蓋骨
- 下 フェフキダイ科 17. 左 主上顎骨 18. 左 歯骨 19. 左 歯骨 キズあり 20. 左 角骨 21. 左 方骨 22. 第一椎骨 23. 腹椎 キズあり タイ型
 24. 尾椎 キズあり ペラ科シロクラペラ型 25. 尾椎 ペラ科 26. 右 角骨 アイゴ属 27. 尾椎 ハリセンボン?
 28. 前上顎骨か歯骨 キズあり 要検討 29. 左 主上顎骨 要確認 30. 左 歯骨 31. 右 方骨 保留 32. 腹椎 種不明 33.
 背鰭棘



図版 80 脊椎動物遺体2

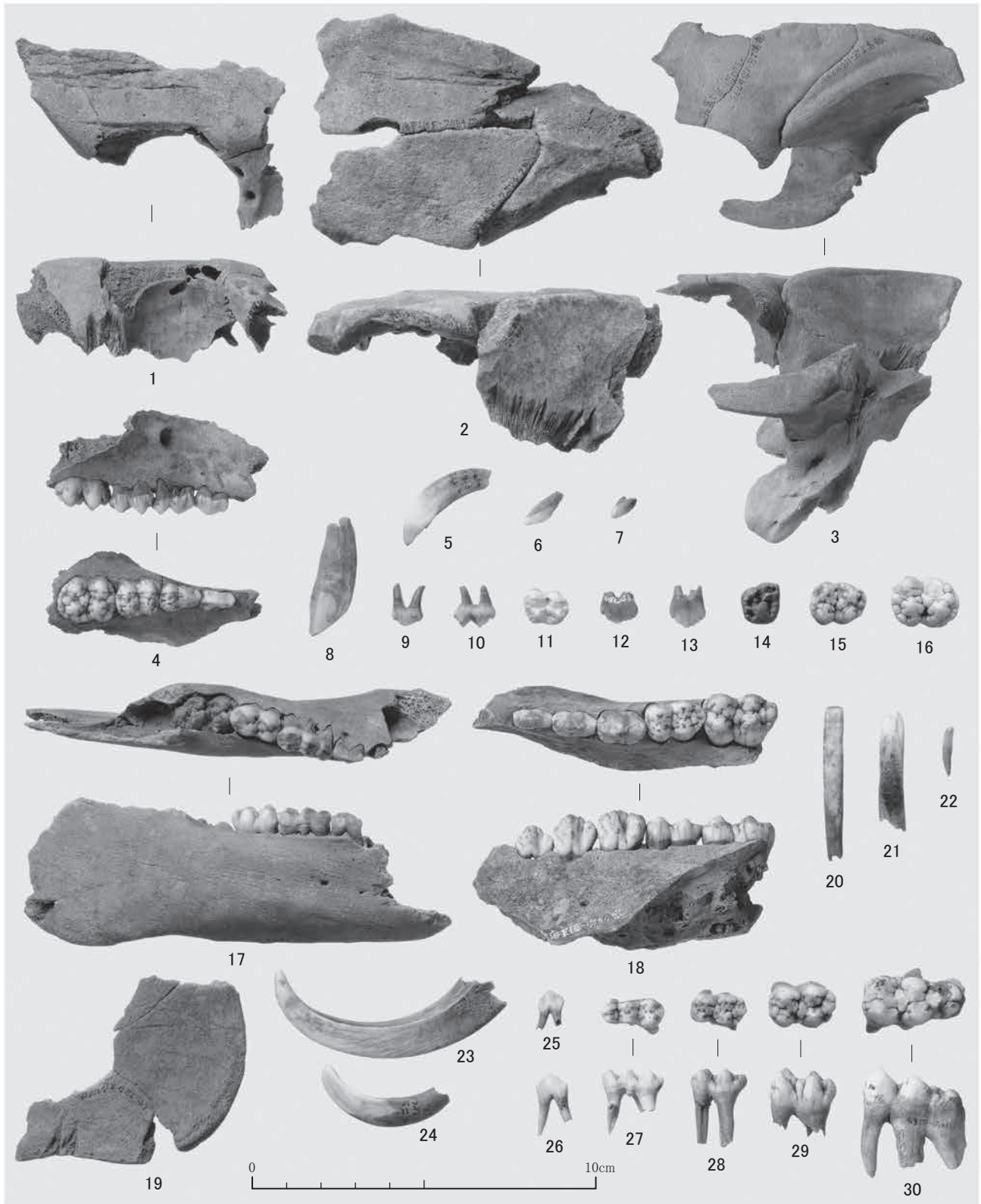
上 トカゲ 1. 左右不明 下顎骨 カエル 2. 椎骨 ニワトリ 3. 頸椎 4. 胸骨 5. 胸椎 6. 鎖骨 キズあり? 7. 左 烏口骨 キズあり
8. 左 肩甲骨 キズあり 9. 右 上腕骨 10. 左 橈骨 キズあり 11. 右 尺骨 12. 左 中手骨 13. 右 大腿骨 キズあり 14. 左 脛骨
キズあり? 15. 左 中足骨 ♀ キズあり 16. 左右不明 趾骨 キズあり トリ 17. 右 脛骨 18. 右 上腕骨

下 ジャコウネズミ 19. 右 下顎骨 ネズミ 20. 左 下顎骨 21. 環椎 22. 頸椎 23. 胸椎 24. 左 肩甲骨 25. 左 上腕骨 26. 左
右不明 橈骨 27. 右 尺骨 28. 右 寛骨 29. 右 大腿骨 30. 左 脛骨 31. 左 距骨 32. 右 踵骨 33. 左右不明 中手・中足骨
34. 左右不明 基節骨 ネコ 35. 左 大腿骨 36. 左右不明 基節骨 37. 左右不明 中節骨 キズあり



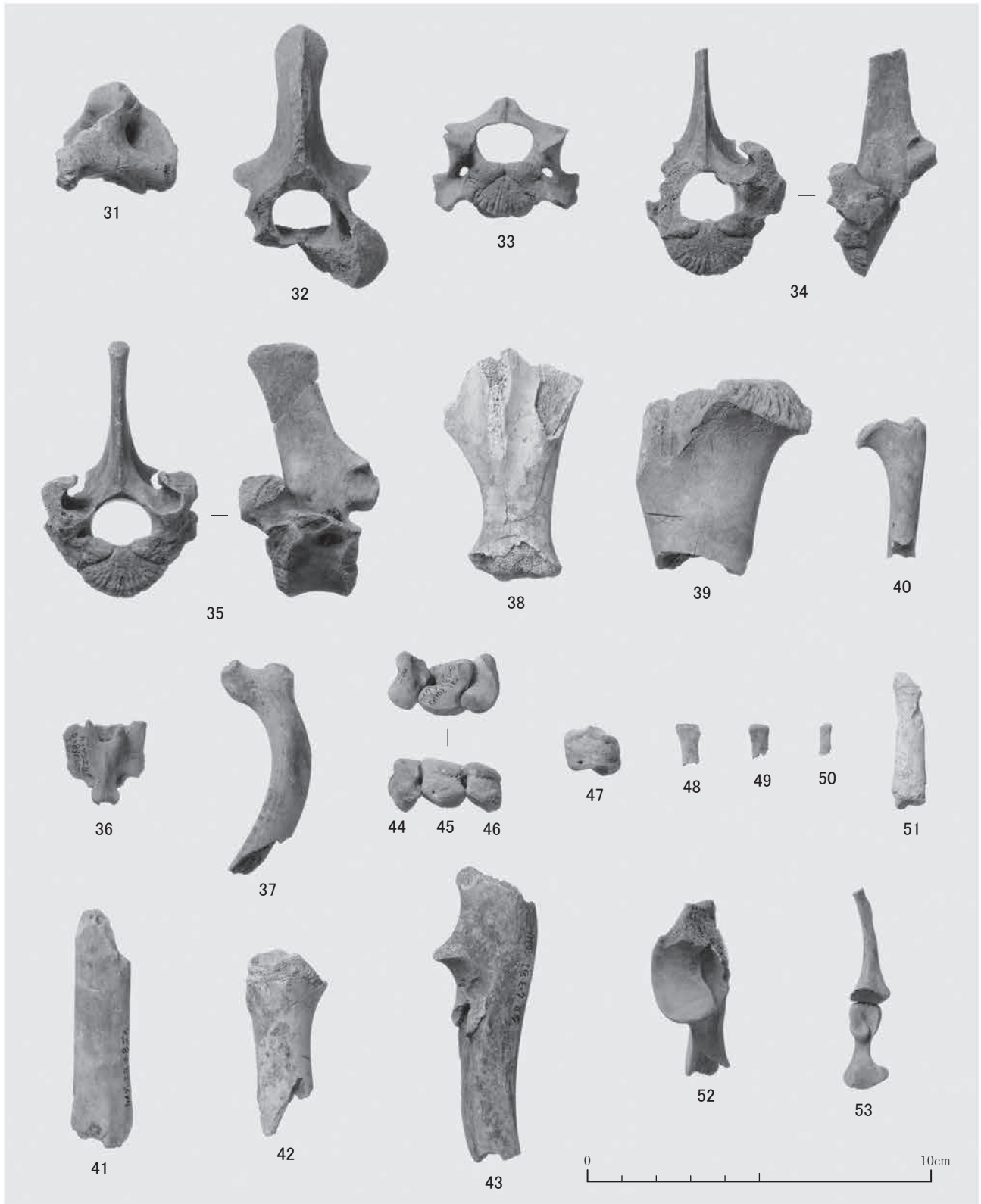
図版 81 脊椎動物遺体3

ウマ 1. 左上顎骨 P³ 2. 左上顎骨 P⁴ 3. 左上顎骨 M¹ か M² 4. 左下顎骨 P₄ 5. 軸椎 6. 左上腕骨 キズあり 7. 左 橈骨 キズあり 8. 左右不明 中手骨 キズあり



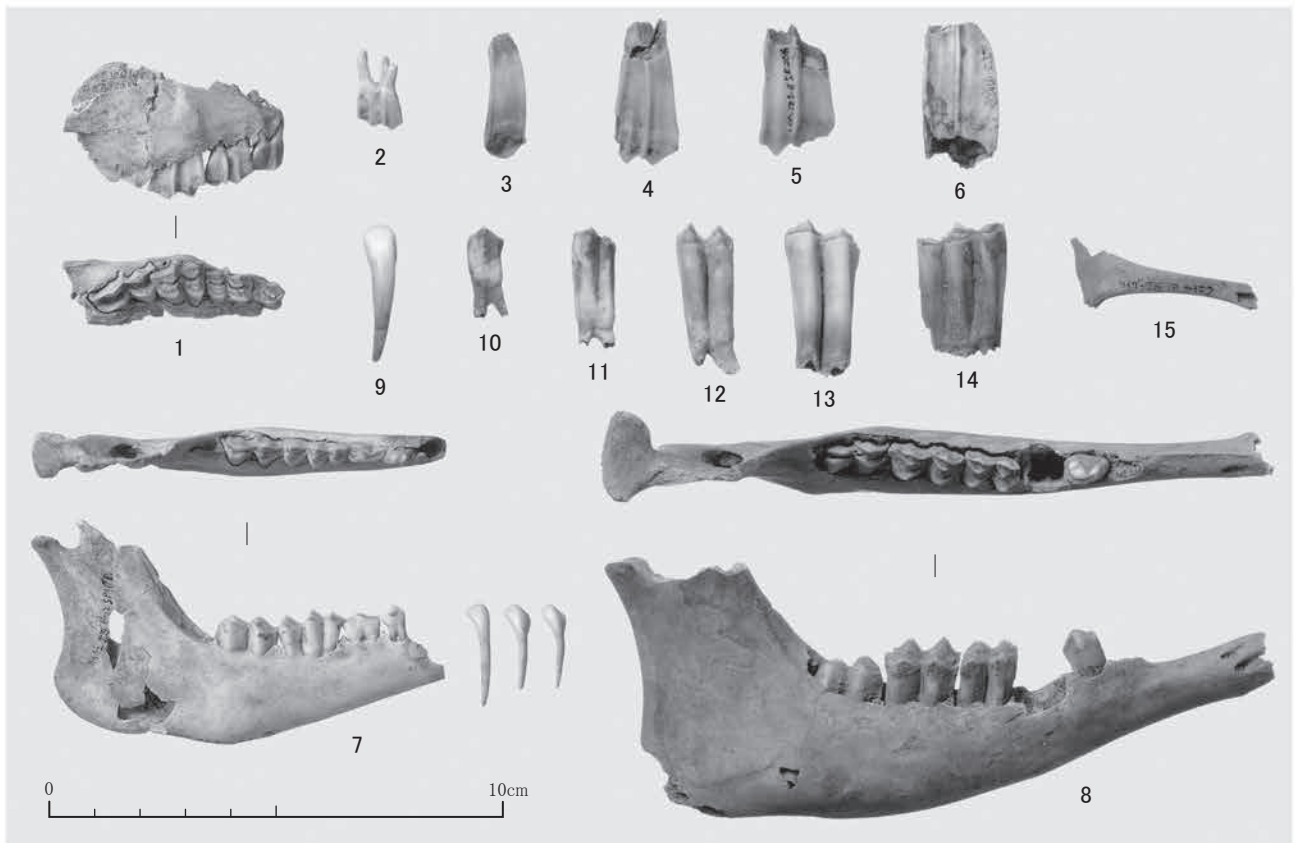
図版 82 脊椎動物遺体4

ブタ 1. 右 頭頂骨+前頭骨 キズあり 2. 右左 頭頂骨~前頭骨 キズあり 3. 左 頭頂・前頭骨~側頭骨 4. 右 上顎骨 dm^{2,3,4}M¹
 5. 左 上顎骨 I¹ 6. 左 上顎骨 I² 7. 左右不明 上顎骨 I³ 8. 右 上顎骨 C ♀ 9. 左 上顎骨 dm² 10. 左 上顎骨 dm³ 11. 左
 上顎骨 dm⁴ 12. 左 上顎骨 P² 13. 左 上顎骨 P³ 14. 右 上顎骨 P⁴ 15. 右 上顎骨 M¹ 16. 左 上顎骨 M² 17. 右 下顎骨 dm^{3,4}M^{1,2}
 18. 左 下顎骨 P^{2,3,4}M^{1,2} 19. 左 下顎骨 キズあり 20. 左 下顎骨 I₁ 21. 右 下顎骨 I₂ 22. 右 下顎骨 I₃ 23. 左 下顎骨
 C ♂ 24. 右 下顎骨 C ♀ 25. 左 下顎骨 dm₂ 26. 左 下顎骨 dm₃ 27. 左 下顎骨 dm₄ 28. 左 下顎骨 M₁ 29. 左 下顎骨 M₂
 30. 右 下顎骨 M₃



図版 83 脊椎動物遺体5

フタ 31. 環椎 キズあり 32. 軸椎 キズあり 33. 頸椎 キズあり 34. 胸椎 キズあり 35. 腰椎 キズあり 鉄鏽付着 36. 尾椎 37. 左 肋骨
 キズあり 38. 左 肩甲骨 キズあり 39. 左 上腕骨 キズあり 40. 右 上腕骨 幼 41. 右 橈尺骨 キズあり 42. 左 橈骨 キズあり
 43. 左 尺骨 44. 右 尺側手根骨 45. 右 中間手根骨 46. 右 橈側手根骨 47. 左 第4手根骨 48. 右 第3中手骨 幼 49. 右 第
 4中手骨 幼 50. 右 第5中手骨 幼 51. 右 第5中手骨 キズあり 52. 右 寛骨 臼部 キズあり 53. 右 寛骨 腸骨部～坐骨 幼



図版 84 脊椎動物遺体6

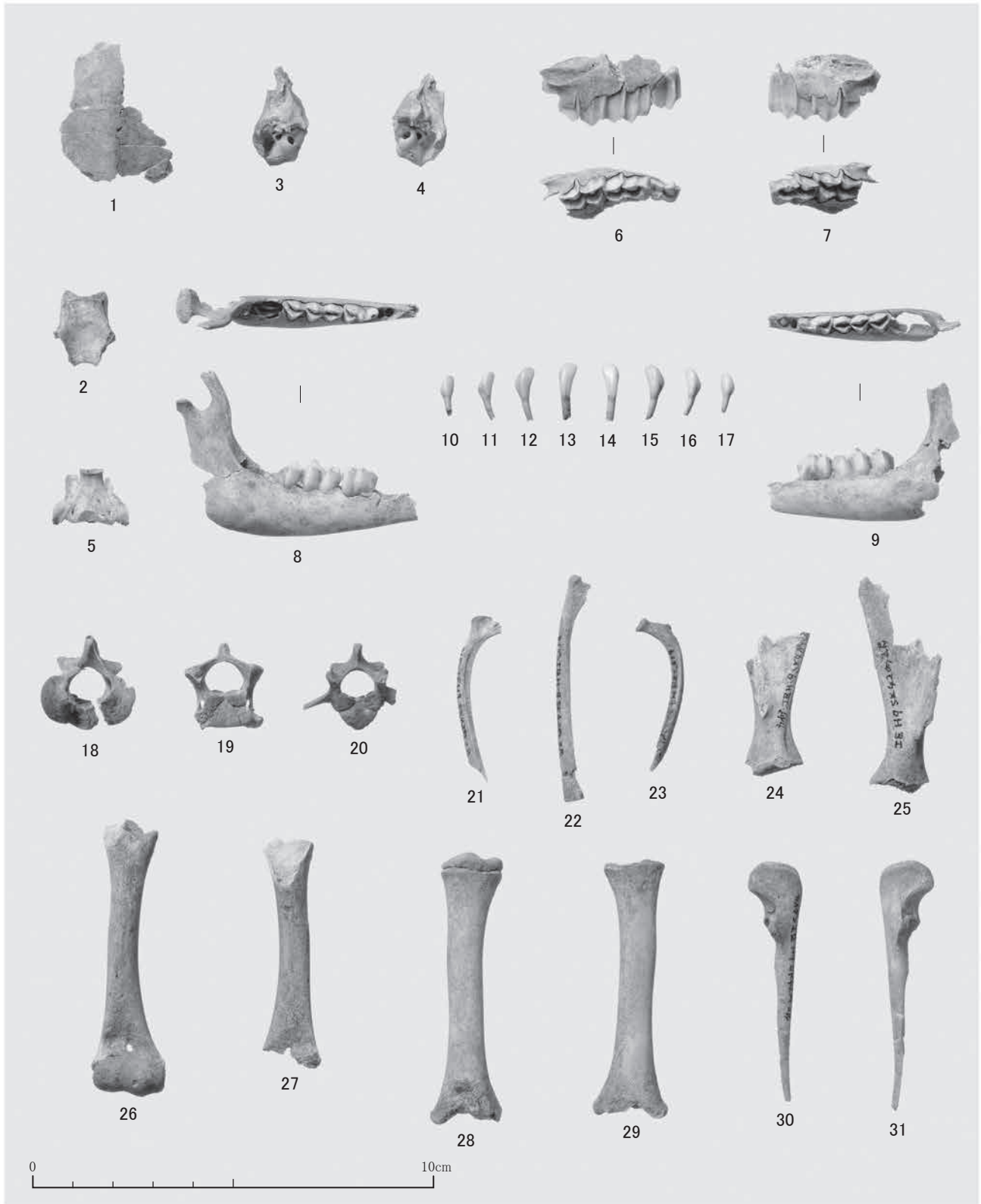
上 **フタ** 54. 右大腿骨 若キズあり 55. 右大腿骨 56. 右膝蓋キズあり 57. 右脛骨キズあり 58. 右脛骨幼 59. 右腓骨キズあり 60. 左距骨キズあり 61. 左踵骨 62. 左中心足根骨キズあり 63. 左第4足根骨 64. 左第2中足骨 65. 右第3中足骨 66. 左第4中足骨キズあり 67. 左基節骨 68. 左中節骨 69. 左末節骨

下 **ヤギ** 1. 右上顎骨 $P^4M^{1,2,3}$ 2. 左上顎骨 dm^3 3. 右上顎骨 P^4 4. 左上顎骨 M^1 5. 左上顎骨 M^2 6. 右上顎骨 M^3 7. 右下顎骨 $I^{1,2,3}dm^{2,3,4}M^1$ 8. 右下顎骨 $P^3M^{1,2,3}$ 9. 右下顎骨 I_1 10. 左下顎骨 P_3 11. 左下顎骨 P_4 12. 左下顎骨 M_1 13. 左下顎骨 M_2 14. 右下顎骨 M_3 15. 舌骨



図版 85 脊椎動物遺体7

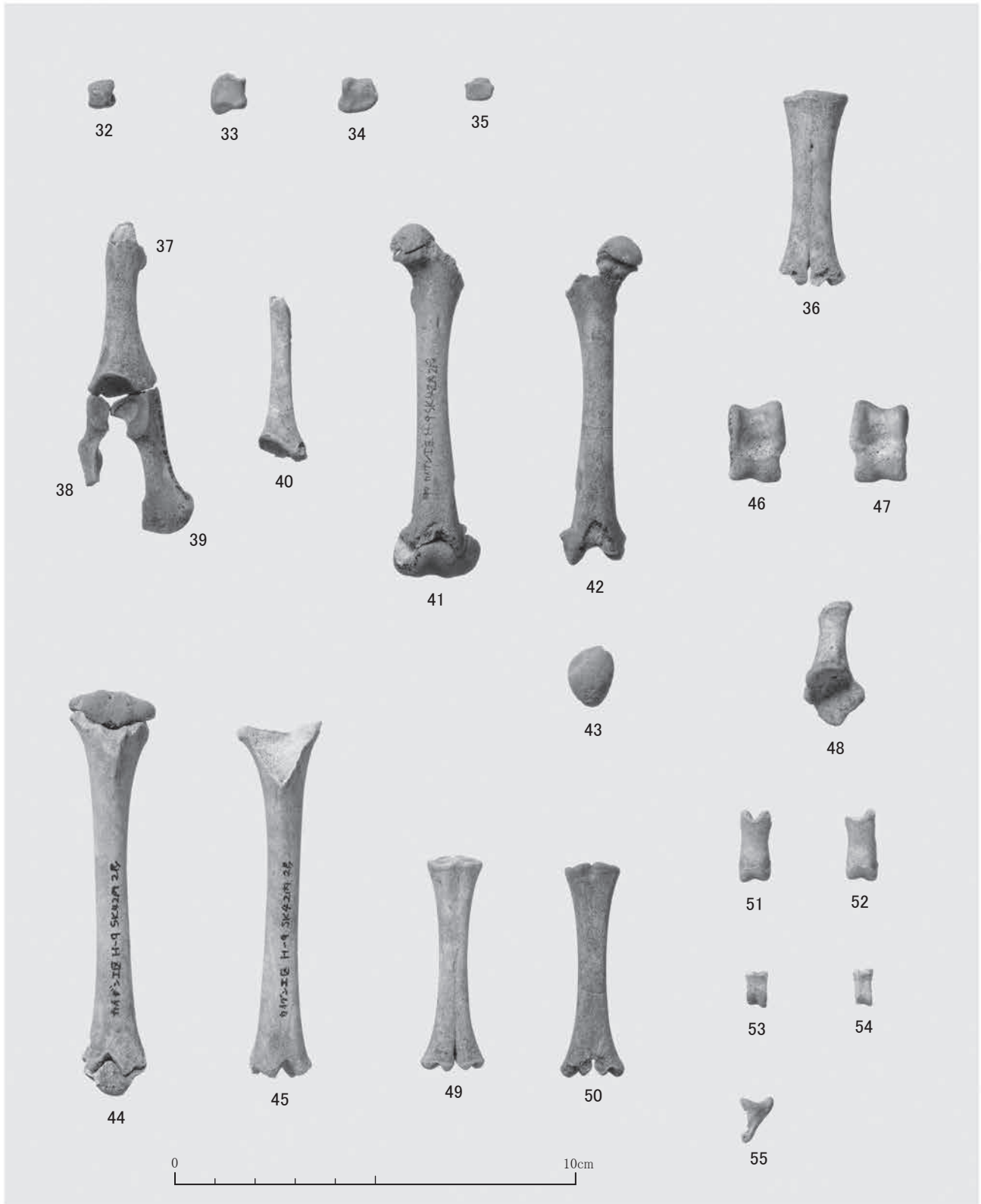
ヤギ 16. 軸椎 17. 頸椎3 18. 胸椎 19. 仙骨 20. 右肋骨キズあり 21. 右肩甲骨 22. 左上腕骨キズあり 23. 右橈尺骨キズあり 24. 右橈骨 25. 左尺骨 26. 左橈側手根骨 27. 左第2+第3手根骨 28. 左第4手根骨 29. 右中手骨 30. 左寛骨腸骨部～恥骨 31. 右大腿骨 32. 左大腿骨 33. 右脛骨 34. 左踵骨幼 35. 左距骨 36. 左果骨 37. 左第2第3足根骨 38. 左第4中心足根骨 39. 左中足骨 40. 左基節骨 41. 右中節骨 42. 右末節骨



図版 86 脊椎動物遺体8

ヤギ (幼一頭体)

1. 頭蓋骨 2. 後頭骨 底部 3. 左 頭蓋骨 鼓室部 4. 右 頭蓋骨 鼓室部 5. 頭蓋骨 蝶形骨体 6. 右 上顎骨dm^{2,3,4} 7. 左 上顎骨dm^{3,4} 8. 右 下顎骨dm^{3,4}M<D> 9. 左 下顎骨dm^{3,4} 10~13. 左 下顎骨i^{1,2,3,4} 14~17. 右 下顎骨i^{1,2,3,4} 18. 軸椎 19. 頸椎 20. 腰椎 21. 右 肋骨 22. 右 肋骨 23. 左 肋骨 24. 左 肩甲骨 25. 右 肩甲骨 26. 左 上腕骨 27. 右 上腕骨 28. 左 橈骨 29. 右 橈骨 30. 左 尺骨 31. 右 尺骨



図版 87 脊椎動物遺体9

ヤギ (幼一 個体)

32. 左 中間手根骨 33. 左 第2+3手根骨 34. 右 第2+3手根骨 35. 右 第4手根骨 36. 左 中手骨 37. 左 寛骨 腸骨部
 38. 左 寛骨 恥骨 39. 左 寛骨 坐骨 40. 右 寛骨 腸骨部 41. 左 大腿骨 42. 右 大腿骨 43. 左右不明 膝蓋骨 44. 左 脛骨
 45. 右 脛骨 46. 左 距骨 47. 右 距骨 48. 左 踵骨 49. 左 中足骨 50. 右 中足骨 51. 左 基節骨 52. 右 基節骨 53. 左
 中節骨 54. 右 中節骨 55. 左 末節骨



図版 88 脊椎動物遺体 10

ウシ 1. 左上顎骨 M² 2. 環椎 3. 椎骨 キズあり 4. 左 第一肋骨 キズあり 5. 右 肩甲骨 キズあり 6. 右 尺骨 7. 右 副手根骨
8. 左 脛骨 キズあり 9. 右 第4中心足根骨 キズあり 10. 右 中足骨 キズあり 11. 左 中節骨 焼け 12. 右 末節骨

第5章 自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

宜野湾市に所在する米海軍病院建設予定地内の発掘調査では、水場遺構とされる凹地が検出され、また、作成されたマージの土層断面の上部からは、複数層位に及ぶ可能性があると思われる耕作土層が検出されている。さらに調査区内では、用途・性格不明のピットや窯跡、炉跡、石組遺構など様々な遺構が検出されている。

本報告では、これらの遺構を対象として自然科学分析を行うことにより、遺構の機能・用途に係わる情報を得るとともに当時の周辺環境についても検討する。また、今回の発掘調査により出土した貝塚時代およびグスク時代とされる各時期の土器片について、その材質の特性(胎土)を明らかにすることにより、各時期における土器の生産と使用に係わる資料を作成する。

I. 遺構および堆積物の分析

1. 試料

(1) 水場遺構(Ⅱ地区SX3)

水場遺構とされる凹地を埋積する4層からなる堆積層が確認された。試料は、上位より各層につき1点ずつのNo. 1～No. 4までの4点を採取した。No. 1採取層は、青灰～緑灰色を呈する極細粒砂を含む砂質シルトであり、不明瞭なラミナが確認された。中礫～大礫径の石灰岩礫を包含する。No. 2およびNo. 3採取層は、いずれもシルトであり、植物遺体を多量に含む。No. 3採取層の方が植物遺体の含有量は多い。No. 4採取層は、極細粒砂を含む砂質シルトであり、シルトの薄層が複数狭在する。

なお、No. 3およびNo. 4より抽出した広葉樹(ヤブニッケイ)の葉の破片を放射性炭素年代測定の試料とする。

(2) 埋没谷内黒色層(D-10区南壁)

壁面に認められた土層は、大きく6層位に分けられた。最も上位の層位は、空隙が多く団粒状を呈する腐植質土壌であり、その下位は粘土質の腐植質土壌である。その下位は、極細砂混じりの粘土質シルトであり、上部は炭化物などの混入物が比較的多く含まれ、下部は上部より粘土質である。その下位の層位は、上位と同様の極細砂混じりの粘土質シルトであるが、炭化物などの混入物が少量しか含まれない。さらに下位の層位は、古い耕作層かあるいは腐植質土壌からマージへの漸移層と考えられる層位であり、下部はマージとなる。試料は、上位より、粘土質の腐植質土壌、極細砂混じり粘土質シルトの下部、混入物の少ない極細砂混じり粘土質シルト、漸移層、マージ上部、マージ下部の各層位につき1点ずつ、No. 1～No. 6までの合計6点を採取した。

(3) 各種遺構

対象とした遺構は、西側地区で検出されたピット、東側地区で検出された窯跡、Ⅰ地区E-8で検出された炉跡および石組遺構の4基である。ピットからは「スミ・Pit」、窯跡からは「SY1ベルト部分」および「壁面」、炉跡からは「SL2・No. 1・No. 2」、石組遺構からは「SK50・No. 220・11層下部?(以下SK50・No. 220と略す)」の各試料を採取した。いずれも腐植質の土壌である。

なお、ピットのスミ・Pit、窯跡のSY1ベルト部分、石組遺構のSK50・No. 220の各試料からは、炭化材を抽出し、これらを放射性炭素年代測定の試料とした。さらに、調査区内の「コンクリート箇所」とされた地点から採取された「西側スミ1」という名称の土壌試料より抽出した炭化材についても、放射性炭素年代測定を行う。

また、窯跡では被熱によると考えられる赤化した土壌いわゆる焼土が確認されている。この焼土範囲からは、ブロック状の試料1点と、約7cm³のポリカーボネイト製の立方体容器を用いた定方位の計20個の土壌試料を採取した。土壌試料は鮮明に赤化しており、考古地磁気年代決定に供する被熱土壌として申し分のない状況であると判断された。

(4) 分析試料の選択

次項各分析に選択した試料は、一覧にして第29表に示す。各分析項目における分析点数などは第29表を参照されたい。

第29表 遺構および堆積物試料一覧と分析項目

遺構名・地点名	試料名	放射性炭素年代測定(AMS)	珪藻分析	花粉分析・寄生虫卵分析	植物珪酸体分析	微細物分析		土壌理化学分析(蛍光X線分析・粒度分析含む)	土壌薄片観察	脂肪酸分析	焼土薄片観察	熱残留磁気分析
						洗い出し・分類	同定・統計・解析					
水場遺構(II地区SX3)	No.1		1	1	1			1	1			
	No.2		1	1	1			1	1	1		
	No.3	1	1	1	1			1	1	1		
	No.4		1	1	1			1	1	1		
埋没谷内黒色層(D-10区南壁)	No.1		1	1	1			1	1			
	No.2		1	1	1			1	1			
	No.3		1	1	1			1	1			
	No.4							1	1			
	No.5		1	1	1			1	1			
	No.6		1	1	1			1	1			
ピット(西側地区)	SM・Pit	1	1	1	1			1	1	1		
窯跡(東側地区)	SY1-ベルト部分	1	1	1	1	1	1	1	1			
	SY1壁面										1	20
炉跡(I地区E-8)	SL2・No.1										1	
石組遺構	SK50・No220・11層下部?	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
コンクリート箇所	西側SM1	1										
分析点数合計		5	12	12	12	2	2	13	13	5	2	20

2. 分析方法

(1) 分析方法の選択

本報告では、各遺構の年代資料獲得を目的として放射性炭素年代測定を行い、水域環境については珪藻化石の産状を分析する。また、周辺植生の情報として花粉分析および植物珪酸体分析を行い、植生とともに植物利用の検討も目的とした微細物分析を行う。なお、花粉分析では、同時に寄生虫卵の確認も行い、トイレ遺構の検討も行う。

遺構覆土については、有機炭素量や窒素、リン酸含量などの土壌理化学性を捉え、これに加えて粒度分析、元素分析および包含される砂粒の鉱物組成・岩石組成や粒径組成も分析することにより、その特性を明らかにする。これらの特性から、遺構埋積時の状態や埋没した耕作土などの検討を行う。さらに、水場遺構の覆土とピットの覆土を対象として、脂肪酸分析を行い、動植物の埋積状況を確認する。

遺構の中でも窯跡では、焼土とされる赤色化した土壌の範囲が確認されたことから、熱残留磁気分析を実施することにより、古地磁気年代と被熱の検証を行い、また、薄片観察による鉱物の高温変化の観察からも被熱温度の推定を行う。

以下に各分析項目の説明を述べる。

(2) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う(酸・アルカリ・酸処理;AAA処理)。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合は、結果表にAaAと記載している。

試料をバイコール管に入れ、1 gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C(30分)850°C(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1 mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.00(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正は、測定誤差 σ 、2 σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2 σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、2 σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(3) 珪藻分析

試料を湿重で7 g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法(4時間放置)の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer(1992)、Krammer & Lange-Bertalot(1986, 1988, 1991a, 1991b)、渡辺ほか(2005)、小林ほか(2006)などを参照し、分類基準は、Round, Crawford & Mann(1990)に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は、柳沢(2000)に従う。

同定結果は、中心類(Centric diatoms; 広義のコアミケイソウ綱Coscinodiscophyceae)と羽状類(Pennate diatoms)に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類(Araphid pennate diatoms; 広義のオビケイソウ綱Fragilariophyceae)と有縦溝羽状珪藻類(Raphid pennate diatoms; 広義のクサリケイソウ綱Bacillariophyceae)に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各種類の生態性については、Vos & de Wolf(1993)を参考とするほか、塩分濃度に対する区分はLowe(1974)に従い、真塩性種(海水生種)、中塩性種(汽水生種)、貧塩性種(淡水生種)に類別する。また、貧塩性種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率2.0%以上の種類について主要珪藻化石群集の層位分布図を作成するほか、淡水生種の生態性についても100個体以上の試料について図示する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、淡水生種(貧塩性種)については安藤(1990)、陸生珪藻については伊

藤・堀内(1991)、汚濁耐性については渡辺ほか(2005)の環境指標種を参考とする。

(4) 花粉・寄生虫卵分析

試料10ccを正確に秤り取る。これについて水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離の順に物理・化学的処理を施し、寄生虫卵および花粉・胞子を分離・濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して出現する全ての花粉・胞子と寄生虫卵について同定・計数する。

結果は、花粉・胞子については同定および計数結果の一覧表として、寄生虫卵については1ccあたりに含まれる寄生虫卵の個数として併せて表示する。寄生虫卵の個数については有効数字を考慮し、10の位を四捨五入して100単位に丸め、100個体未満については「<100」で表示する。また、花粉化石群集の密度の層位分布図としても表示する。なお、図中の花粉・胞子化石は木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出した相対頻度で、寄生虫卵は1ccあたりに含まれる個数で示す。なお、図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

(5) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2004)の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作製に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、検出された分類群とその個数の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め(100単位にする)、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

(6) 微細物洗い出し分析

試料を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実や炭化材(主に径4mm以上)、動物遺存体、土器などの遺物を抽出する。

抽出された種実遺体を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等の図鑑との対照から、種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。その他の抽出物と分析残渣は、70℃48時間乾燥後の重量を表示し、炭化材と土器は最大径(mm)を併せて表示する。分析後は、種実遺体を容器に入れ、70%程度のエタノール溶液で液浸保管する。

(7) 土壌理化学分析(蛍光X線分析による全分析および粒度分析含む)

有機炭素はチューリン法、全窒素は硫酸分解-水蒸気蒸留法、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、可給態リン酸はトルオーグ法、可給態窒素はリン酸緩衝液抽出-水蒸気蒸留法、粒度組成はピペット法でそれぞれ行った(土壌標準分析・測定法委員会, 1986、土壌環境分析法編集委員会, 1997)。また、全分析および全鉄量は蛍光X線分析法、酸性シュウ酸塩可溶鉄およびジチオナイトクエン酸可溶鉄はAcid-oxalate法、Holmgren法(L.P. van Reeuwijk, 1986)に従い定量し、永塚(1973)の方法により鉄の活性度・結晶化指数を算出した。以下に各項目の操作工程を示す。

1) 分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を振動ミル(平工製作所製TI100; 10ml容タングステンカーバイド容器)で微粉碎し、微粉碎試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

2) 有機炭素

微粉碎試料0.100~0.500gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量(Org-C乾土%)を求める。これに1.724を乗じて腐植含量(%)を算出する。

3) 全窒素

微粉碎試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤り、分解剤約3.0gと硫酸10mlを加え加熱分解した。分解後、蒸留水約30mlを加え放冷した後、分解液全量を供試し水蒸気蒸留法によって窒素を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全窒素量(T-N%)を求める。また、有機炭素量を全窒素量で除し、C/N(炭素率)を算出する。

4) 全リン酸

微粉碎試料1.00gをケルダールフラスコに秤りとり、はじめに硝酸(HNO₃)10mlを加えて加熱分解した。放冷後、過塩素酸(HClO₄)20mlを加えて再び加熱分解を行った。分解終了後、蒸留水で100mlに定容し、ろ過した。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液(バナドモリブデン酸・硝酸液)を加えて分光光度計によりリン酸(P₂O₅)濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P₂O₅mg/g)を求める。

5) 可給態リン酸

風乾細土試料1.00gを300ml三角フラスコに秤りとり、0.002N硫酸溶液(pH₃)200mlを加え、室温で1時間振とうし、ろ過する。ろ液一定量を試験管に採り、混合発色試薬を加えて分光光度計によりリン酸濃度を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの可給態リン酸量(P₂O₅mg/乾土100g)を求める。

6) 可給態窒素

風乾細土試料10.00gを100ml三角フラスコにはかり、pH7.0リン酸緩衝液50mlを加え、室温で1時間振とうし、ろ過する。ろ液をケルダール分解し、水蒸気蒸留法によって窒素を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの可給態窒素量(Nmg/乾土100g)を求める。

7) 全分析・全鉄量(蛍光X線分析法)

蛍光X線分析装置を利用し、ガラスビード法により、主成分10元素(SiO₂, TiO₂, Al₂O₃, Fe₂O₃, MnO, MgO, CaO, Na₂O, K₂O, P₂O₅)による化学組成を求める。以下に利用した装置、試料処理法、測定条件を記す。

a) 装置

理学電機工業社製RIX1000(FP法のグループ定量プログラム)

b) 試料調製

105℃で24時間乾燥させた微粉碎試料を磁製坩堝に精秤し、電気炉を用いて1000℃で2時間灼熱し、灼熱減量(Ig. loss)を算出する。

上記、灼熱後の試料を利用し、以下の条件でガラスビードを作成する。

溶融装置; 自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビードサンプラー(3491A1)

溶剤及び希釈率; 融剤(四ホウ酸リチウム)5.000g: 試料0.500g

剥離剤; LiI(溶融中2回投入)

溶融温度; 1200℃, 約7分

c) 測定条件

X線管;Cr (50Kv-50mA)
スペクトル;全元素K α
分光結晶;LiF, PET, TAP, Ge
検出器;F-PC, SC

計数時間;PeaK40sec, Back20sec

8) 酸性シュウ酸塩可溶鉄(Acid-oxalate法)

微粉碎試料300mgに0.2M酸性シュウ酸塩溶液(pH3)を30ml加え、暗所で4時間振とうする。振とう後、0.4%高分子凝集剤を2滴加えて軽く振とうした後、3000rpmで15分間遠心分離する。上澄み液の一定量を蒸留水で希釈し、干渉抑制剤を加えた後、原子吸光光度計により鉄(Fe)の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの鉄の含有量(%)を求める。

9) ジチオナイトクエン酸可溶鉄(Holmgren法)

微粉碎試料500mgにDCB抽出液30mlを添加して16時間振とうする。振とう後、0.4%高分子凝集剤を2滴加えて軽く振とうした後、遠心分離する。上澄み液の一定量を蒸留水で希釈し、干渉抑制剤を加えた後、原子吸光光度計により鉄(Fe)の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの鉄の含有量(%)を求める。

10) 粒度分析(ピペット法)

風乾細土試料10.00gに30%過酸化水素水を加え、熱板上で有機物を分解する。分解終了後、遠心洗浄を行い、脱塩した後、蒸留水約400mlと分散剤(4%ヘキサメタリン酸ナトリウム)10mlを加え、攪拌しながら20分間音波処理を行う。この懸濁液を500ml沈底瓶に移し、蒸留水で500mlに定容する。

沈底瓶を1分間激しく振り、直ちに静置して所定の時間に5cmの深さから懸濁液10mlを採取する。採取懸濁液は蒸発乾固させ、秤量する(シルト・粘土の含量)。さらに、所定の時間が経過した後、沈底瓶から懸濁液を5cmの深さから10ml採取し、蒸発乾固させ、秤量する(粘土含量)。沈底瓶に残ったシルト・粘土はサイフォンを使ってすべて洗い流し、その残査を乾燥・秤量する(砂含量)。これを0.2mm ϕ の篩で篩い分け、篩上の残留物を秤量する(粗砂含量)。これら測定値をもとに粗砂(2.0-0.2mm)・細砂(0.2-0.02mm)・シルト(0.02-0.002mm)・粘土(0.002mm以下)4成分の合計を100とする各成分の重量%を求め、国際法によって土性区分を行う。

(8) 土壌薄片観察

土壌試料を樹脂により固化した後に、ダイヤモンドカッターにより試料を22 \times 30 \times 15mm大の直方体に切断して薄片用のチップとした。そのチップをスライドガラスに貼り付け、#180~#800の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ0.1mm以下まで研磨した。さらに、メノウ板上で#2500の研磨剤を用いて正確に0.03mmの厚さに調整した。スライドガラス上で薄くなった薄片の上にカバーガラスを貼り付け完成とした。

データの呈示は、松田ほか(1999)が示した仕様に従う。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫~中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

(9) 脂肪酸分析

分析は、坂井ほか(1996)に基づき、脂肪酸およびステロール成分の含量測定を行う。試料が浸るに十分なクロロホルム:メタノール(2:1)を入れ、超音波をかけながら脂質を抽出する。ロータリーエバポレーターにより、溶媒を除去し、抽出物を塩酸-メタノールでメチル化を行う。ヘキサンにより脂質を再抽出し、セップパックシリカを使用して脂肪酸メチルエステル、ステロールを分離する。脂肪酸のメチル

エステルの分離は、キャピラリーカラム (ULBON, HR-SS-10, 内径0.25mm, 長さ30m) を装着したガスクロマトグラフィー (GC-14A, SHIMADZU) を使用した。注入口温度は250℃、検出器は水素炎イオン検出器を使用する。ステロールの分析は、キャピラリーカラム (J&W SCIENTIFIC, DB-1, 内径0.36mm, 長さ30m) を装着する。注入口温度は320℃、カラム温度は270℃恒温で分析を行う。キャリアガスは窒素を、検出器は水素炎イオン化検出器を使用する。

(10) 焼土薄片観察

前述した土壌薄片作製と同様の過程で焼土の薄片を作製し、偏光顕微鏡下において焼成の状況について観察記載を行った。鏡下における量比は、薄片上の観察面全体に対して、多量 (>50%)、中量 (20~50%)、少量 (5~20%)、微量 (<5%) およびきわめて微量 (<1%) という基準で目視により判定した。代表的な個所については下方ポーラーおよび直交ポーラー下において写真撮影を行い、写真図版として添付した。

(11) 熱残留磁気分析

土壌中に含まれる磁性鉱物 (酸化鉄や水酸化鉄) は堆積時の地球磁場情報 (強度と方向) を記録する。この磁化 (磁場の化石) を堆積残留磁化と呼ぶが、磁気的には不安定な場合が多く、磁場記録としての信頼性は低い。堆積後に、土壌が何らかの過程 (例えば、古代人の焚き火など) で熱を受けると、土壌中の磁性鉱物は化学的に変化したり (主に水酸化物から酸化物に)、加えて熱的な残留磁化を獲得する。そういった過程を経て、土壌は堆積時よりもかなり大きい強度でより安定な残留磁化 (熱残留磁化) を示すようになる。その残留磁化の方向は、堆積時よりもさらに正確に、受熱時の地球磁場方向と平行になることが知られている。

土壌が被熱を経て地球磁場の正確な記録を持つようになることを利用して、過去の地球磁場方向や強度の変化を復元する研究 (考古地磁気学) が行われてきた。その成果として、過去2,000年間の地球磁場方向変化のほぼ連続した考古地磁気標準曲線が作成されている (Hirooka, 1971; 1983; Shibuya, 1980; Maenaka, 1990)。これらの曲線と年代のわからない焼土の残留磁化方向を比較することによって、焼土の年代を決定できる。この方法を考古地磁気年代決定法と呼ぶ。この方法を利用するときの注意点は、標準曲線の年代軸が考古学側から与えられたもの (土器編年など) であるということである。よって、土器編年などの修正が行われることがあれば、考古地磁気年代も修正されなければならない。

また、上記の考古地磁気標準曲線は近畿地方の考古遺物の残留磁化測定に基づいて作成されている。つまり、近畿地方の古地磁気永年変化を復元したものである。現在、近畿地方と沖縄県の間には、偏角について2.4°の違い (近畿では-7.0°、沖縄県では-4.6°) があり、伏角については9.4°の違い (近畿では48.5°、沖縄県では39.1°) がある。過去においてこれと同等の地磁気方向の地域差があったと仮定するのは理にかなっていないので、この差の補正を行って年代決定をする必要がある。この報告では、現在の地磁気方向の地域差が過去にも同じとして、年代を決定する。

また、土壌内の磁性鉱物組成から土壌が被熱した温度の推定が可能である。ここでは、土壌内の磁性鉱物を決定し、被熱温度の考察も行う。

残留磁化測定にはスピナー磁力計を、磁化の安定性の検討と二次的な磁化の除去には交流磁場消磁法を用いた。まず、4個のパイロット試料 (1, 6, 11, 16) を用いて最大30mTまでの段階交流磁場消磁を実施し、残留磁化の安定性を検討し、また二次磁化 (粘性残留磁化) が除去される交流磁場レベルを調べた。また、MS2帯磁率計を用いて採取試料の帯磁率を測定した。さらに、土壌内の磁性鉱物種の決定のために、2個のパイロット試料 (1, 11) に、最大約2800mTの直流磁場で等温残留磁化 (Isothermal Remanent Magnetization; IRM) を着磁し、その強度を測定した。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定結果を第30表、暦年較正結果を第31表に示す。同位体効果の補正を行った測定結果は、水場遺構の葉が150±20BP、ピットの炭化材が1,070±20BP、窯跡の炭化材が170±20BP、石組遺構の炭化材が140±20BP、コンクリート箇所の炭化材が1,260±20BPである。

また、測定誤差をσとして計算させた暦年較正年代は、水場遺構の葉がcalAD1,675-1,952、ピットの炭化材がcalAD902-1,013、窯跡の炭化材がcalAD1,669-1,944、石組遺構の炭化材がcalAD1,681-1,952、コンクリート箇所の炭化材がcalAD692-772である。

第30表 放射性炭素年代測定結果

遺構	試料名	種別	樹種	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.
水場遺構 (II地区SX3)	No.3,4	葉	ヤブニッケイ	150±20	-32.92±0.43	280±20	IAAA-93170
ピット(西側地区)	SM・Pit	炭化材	広葉樹	1,070±20	-30.50±0.43	1,160±20	IAAA-93171
窯跡(東側地区)	SY1ベルト部分	炭化材	マツ属複雑維管束亜属	170±20	-26.46±0.43	190±20	IAAA-93172
石組遺構 (I地区E-8)	集石012・No220	炭化材	マキ属	140±20	-29.45±0.39	210±20	IAAA-93173
コンクリート箇所	西側SM1	炭化材	広葉樹	1,260±20	-30.61±0.45	1,360±20	IAAA-93174

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
 2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
 3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第31表 暦年較正結果

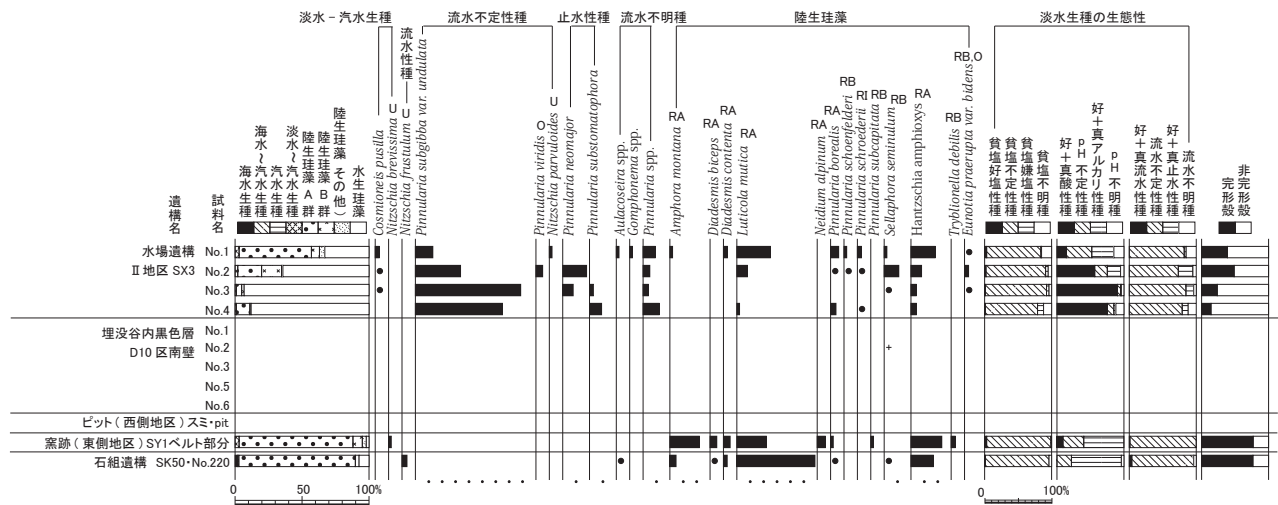
遺構	試料名	暦年較正用 BP	暦年較正年代(cal)				相対比	Code No.
			σ	2σ	σ	2σ		
水場遺構 (II地区SX3)	No.3,4	152±22	σ	cal AD 1,675 - cal AD 1,692	cal BP 275 - 258	0.159	IAAA-93170	
				cal AD 1,728 - cal AD 1,777	cal BP 222 - 173	0.495		
				cal AD 1,799 - cal AD 1,811	cal BP 151 - 139	0.118		
			2σ	cal AD 1,920 - cal AD 1,491	cal BP 30 - 459	0.226		
				cal AD 1,951 - cal AD 1,952	cal BP - 1 - 2	0.002		
				cal AD 1,667 - cal AD 1,699	cal BP 283 - 251	0.165		
ピット(西側地区)	SM・Pit	1,073±24	σ	cal AD 1,721 - cal AD 1,782	cal BP 229 - 168	0.389	IAAA-93171	
				cal AD 1,797 - cal AD 1,818	cal BP 153 - 132	0.111		
				cal AD 1,833 - cal AD 1,880	cal BP 117 - 70	0.133		
			2σ	cal AD 1,915 - cal AD 1,953	cal BP 35 - 3	0.201		
				cal AD 902 - cal AD 915	cal BP 1,048 - 1,035	0.207		
				cal AD 968 - cal AD 1,013	cal BP 982 - 937	0.793		
窯跡(東側地区)	SY1ベルト部分	168±23	σ	cal AD 896 - cal AD 923	cal BP 1,054 - 1,027	0.223	IAAA-93172	
				cal AD 1,669 - cal AD 1,683	cal BP 281 - 267	0.164		
				cal AD 1,735 - cal AD 1,780	cal BP 215 - 170	0.582		
			2σ	cal AD 1,798 - cal AD 1,805	cal BP 152 - 145	0.087		
				cal AD 1,930 - cal AD 1,944	cal BP 20 - 6	0.167		
				cal AD 1,664 - cal AD 1,695	cal BP 286 - 255	0.182		
石組遺構 (I地区E-8)	SK50・No220	137±22	σ	cal AD 1,726 - cal AD 1,813	cal BP 224 - 137	0.582	IAAA-93173	
				cal AD 1,838 - cal AD 1,842	cal BP 112 - 108	0.007		
				cal AD 1,852 - cal AD 1,867	cal BP 98 - 83	0.019		
			2σ	cal AD 1,874 - cal AD 1,875	cal BP 76 - 75	0.002		
				cal AD 1,918 - cal AD 1,952	cal BP 32 - 2	0.209		
				cal AD 1,681 - cal AD 1,697	cal BP 269 - 253	0.153		
コンクリート箇所	西側SM1	1,262±24	σ	cal AD 1,725 - cal AD 1,739	cal BP 225 - 211	0.126	IAAA-93174	
				cal AD 1,752 - cal AD 1,762	cal BP 198 - 188	0.070		
				cal AD 1,802 - cal AD 1,815	cal BP 148 - 135	0.110		
			2σ	cal AD 1,835 - cal AD 1,878	cal BP 115 - 72	0.337		
				cal AD 1,916 - cal AD 1,937	cal BP 34 - 13	0.197		
				cal AD 1,951 - cal AD 1,952	cal BP - 1 - 2	0.007		
コンクリート箇所	西側SM1	1,262±24	σ	cal AD 1,674 - cal AD 1,709	cal BP 276 - 241	0.161	IAAA-93174	
				cal AD 1,717 - cal AD 1,778	cal BP 233 - 172	0.255		
				cal AD 1,799 - cal AD 1,890	cal BP 151 - 60	0.411		
			2σ	cal AD 1,909 - cal AD 1,942	cal BP 41 - 8	0.169		
				cal AD 1,950 - cal AD 1,953	cal BP 0 - 3	0.005		
				cal AD 692 - cal AD 749	cal BP 1,258 - 1,201	0.865		
コンクリート箇所	西側SM1	1,262±24	σ	cal AD 763 - cal AD 772	cal BP 1,187 - 1,178	0.135	IAAA-93174	
				cal AD 670 - cal AD 782	cal BP 1,280 - 1,168	0.961		
				cal AD 789 - cal AD 810	cal BP 1,161 - 1,140	0.037		
			2σ	cal AD 849 - cal AD 851	cal BP 1,101 - 1,099	0.002		

1)暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用した。
 2)暦年の計算には、暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
 3)年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。
 4)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である
 5)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

測定に用いた葉と炭化材については、年代値を評価する資料とするため、葉同定、樹種同定を実施した。同定結果は、第30表に併せて示した。水場遺構の葉は常緑広葉樹のヤブニッケイ、ピットとコンクリート箇所の炭化材は、いずれも広葉樹の炭化材であるが、種類は不明である。窯跡の炭化材は針葉樹のマツ属複雑維管束亜属、石組遺構の炭化材は針葉樹のマキ属である。

(2) 珪藻分析

結果を第32表、第103図に示す。珪藻化石の産出頻度は、水場遺構の4試料と、窯跡のベルト部分、石組遺構の試料と合わせて6試料からは産出するが、埋没谷内黒色層(D-10区南壁)の5試料およびピットのスミ・Pitの計6試料は殆ど産出しなかった。化石が産出した試料の完形殻の出現率は、窯跡のベルト部分と石組遺構の試料は約70%と化石の保存状態が良いが、水場遺構の4試料は約40%以下と悪かった。産出分類群数は、合計で22属42分類群である。地点別に珪藻化石群集の特徴を下位より述べる。



第 103 図 主要珪藻化石群集の層位分布

海水-汽水-淡水生産産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生産の生態性の比率は淡水生産の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。(環境指標種, O: 沼沢湿地付着種, U: 広域適応種, RA: 陸生珪藻A群, RB: 陸生珪藻B群, RI: 未区分陸生珪藻)

1) 水場遺構(II地区SX3)

本地区は、No. 4、3、No. 2、No. 1で群集組成に違いが見られる。

No. 4、3は、淡水域に生育する水生珪藻(以下、水生珪藻と言う)が全体の約90%を占め優占する。淡水性種の生態性(塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応性)の特徴は、貧塩不定性種、好+真酸性種、流水不定性種が優占する。特徴は、流水不定性で好酸性・付着性の*Pinnularia subgibba* var. *undulata*が70%前後と優占し、好止水性で好酸性・付着性の*Pinnularia substomatophora*、*Pinnularia neomajor*等を伴う。

No. 2になると、前試料で優占した*Pinnularia subgibba* var. *undulata*は約30%に減少し、好止水性で好酸性・付着性の*Pinnularia neomajor*が増加し、約20%産出する。また、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻も増加する。その主なものは、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻A群の*Luticola mutica*、*Hantzschia amphioxys*、水域にも陸域にも生育する陸生珪藻B群の*Sellaphora seminulum*等である。

No. 1は、陸生珪藻が全体の約70%を占め優占する。主要種は、陸生珪藻A群の*Luticola mutica*が約25%、*Hantzschia amphioxys*が約20%と多産し、同じく陸生珪藻A群の*Pinnularia borealis*、*Diademsis contenta*、*Amphora montana*等を伴う。水生珪藻としては、*Pinnularia subgibba* var. *undulata*が約10%産出する他、淡水～汽水生種の*Cosmioneis pusilla*等が産出する。

2) 窯跡

産出種の大部分が、陸生珪藻(陸生珪藻A群が優占)で占められる。特徴は、陸生珪藻A群の*Amphora montana*、*Luticola mutica*、*Hantzschia amphioxys*がそれぞれ約20%と多産し、同じく陸生珪藻A群の*Diademsis biceps*、*Diademsis contenta*、*Pinnularia borealis*、*Neidium alpinum*等を伴う。

第32表 珪藻分析結果

種 類	生態性			環境 指標種	水場遺構 II 地区SX3				埋没谷内黒色層 D10区南壁				ピット スミ Pit	窯跡 SY1 ベルト部分	石組遺構 SK50 No.220
	試料番号	塩分	pH		流水	1	2	3	4	1	2	3			
Bacillariophyta (珪藻植物門)															
Centric Diatoms (中心型珪藻類)															
<i>Plagiogramma appendiculatum</i> Giffen	Euh														
<i>Aulacoseira islandica</i> (O.Mull.)Simonsen	Ogh-ind	ind	l-ph	U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Aulacoseira</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Orthoseira roeseana</i> (Rabh.)O'Meara	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Araphid Pennate Diatoms (無縦溝羽状珪藻類)															
<i>Fragilaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Thalassionema nitzschioides</i> (Grun.)Grunow	Euh			A,B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Raphid Pennate Diatoms (有縦溝羽状珪藻類)															
Biraphid Pennate Diatoms (双縦溝羽状珪藻類)															
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	2	-	-	-	-	-	-	-	-	22	5
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eolimna tantula</i> (Hust.)	Ogh-ind	ind	r-ph	RI,U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Geissleria ignota</i> (Krasske)Lange-B. et Metzeltin	Ogh-ind	ind	ind	RB,T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Navicula soehrensensis</i> var. <i>musciicola</i> (Petersen) Krasske	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Stauroneis acuta</i> W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Stauroneis borrichii</i> (Pet.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Stauroneis tenera</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Cosmioneis pusilla</i> (W.Smith)Mann & Stickle	Ogh-Meh	ind	ind		3	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diadesmis biceps</i> Arnott ex Grunow in Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	2
<i>Diadesmis contenta</i> (Grun.)ex Van HeurckD.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	3	-	-	-	-	-	-	-	-	5	3
<i>Luticola mutica</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	25	8	-	2	-	-	-	-	-	22	63
<i>Luticola ventricosa</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	RI,U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt	Ogh-ind	ac-il	ind	RA	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	6	2	-	4	-	-	-	-	-	2	2
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia microstauron</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia neomajor</i> Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-bi		-	18	8	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia schoenfelderii</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RB	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia schroederii</i> (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	3	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia stomatophora</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
<i>Pinnularia subgibba</i> var. <i>undulata</i> Krammer	Ogh-ind	ac-il	ind		13	34	81	65	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia substomatophora</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	3	9	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O,U	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		9	5	4	12	-	-	-	-	-	-	-
<i>Sellaphora seminulum</i> (Grun.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RB,S	2	11	1	-	-	1	-	-	-	-	1
管縦溝類															
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	18	8	4	4	-	-	-	-	-	23	18
<i>Nitzschia brevissima</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
<i>Nitzschia inconspicua</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
<i>Nitzschia frustulum</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
<i>Nitzschia palustris</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia parvuloides</i> Cholnoky	Ogh-ind	ind	ind	U	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Tryblionella debilis</i> Arnott	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
短縦溝類															
<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> (Ehren.)Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	1	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-
海水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種					3	2	1	1	0	0	0	0	0	3	1
淡水生種					97	99	102	99	0	1	0	0	0	97	105
珪藻化石総数					100	101	103	100	0	1	0	0	0	100	108

凡例

H.R.: 塩分濃度に対する適応性 pH: 水素イオン濃度に対する適応性 C.R.: 流水に対する適応性
 Euh : 海水生種 al-bi : 真アルカリ性種 l-bi : 真止水性種
 Ogh-Meh : 淡水～汽水生種 al-il : 好アルカリ性種 l-ph : 好止水性種
 Ogh-hil : 貧塩好塩性種 ind : pH 不定性種 ind : 流水不定性種
 Ogh-ind : 貧塩不定性種 ac-il : 好酸性種 r-ph : 好流水性種
 Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種 ac-bi : 真酸性種 r-bi : 真流水性種
 Ogh-unk : 貧塩不明種 unk : pH 不明種 unk : 流水不明種

環境指標種群

A: 外洋指標種, B: 内湾指標種 (小杉, 1988)
 O: 沼沢湿地付着生種 (安藤, 1990)
 S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種 (以上はAsai and Watanabe, 1995)
 R: 陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, RI:未区分, 伊藤・堀内, 1991)

3) 石組遺構

本試料も産出種の大部分が、陸生珪藻 (陸生珪藻 A 群が優占) で占められる。特徴は、陸生珪藻 A 群の *Luticola mutica* が約60%と優占し、同じく陸生珪藻 A 群の *Hantzschia amphioxys* が約20%と多産す

る。これに付随して、陸生珪藻A群の*Amphora montana*、*Diadesmis contenta*等を伴う。

4) 埋没谷内黒色層(D-10区南壁)およびピット

埋没谷内黒色層のD-10区南壁のNo. 1、2、3、5、6では、No. 2から陸生珪藻B群の*Sellaphora seminulum*が1個体産出するがその他は無化石である。また、ピットのスミ・Pitも無化石である。

(3) 花粉・寄生虫卵分析

結果を第33表、第104図に示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

水場遺構(Ⅱ地区SX3)のNo. 1-4では、いずれの試料からも花粉化石が豊富に産出した。群集組成は類似しており、木本花粉が優占し、マツ属が多産する。次いでミカン科が多く産出し、ソテツ属、センダン属、ウコギ科、クチナシ属等を伴う。ミカン科は、形態的な特徴からはミカン属である可能性も指摘されるが、今回はミカン科に留めておく。草本花粉ではイネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、アカザ科、キンポウゲ属、ヨモギ属、タンポポ科等を伴う。

なお、寄生虫卵は、No. 1から鞭虫卵、No. 3から鞭虫卵およびマンソン裂頭条虫卵、No. 4から回虫卵がそれぞれ検出されたが、いずれも含有量は1ccあたり100個体未満であった。

埋没谷内黒色層(D-10区南壁)では、花粉化石の産出状況が悪く、No. 1からマツ属、ミカン科が、No. 3からキク亜科、タンポポ科が、わずかに検出されるのみである。また、No. 2、5、6からは花粉化石は1個体も検出されなかった。また、寄生虫卵は、いずれの試料からも検出されない。

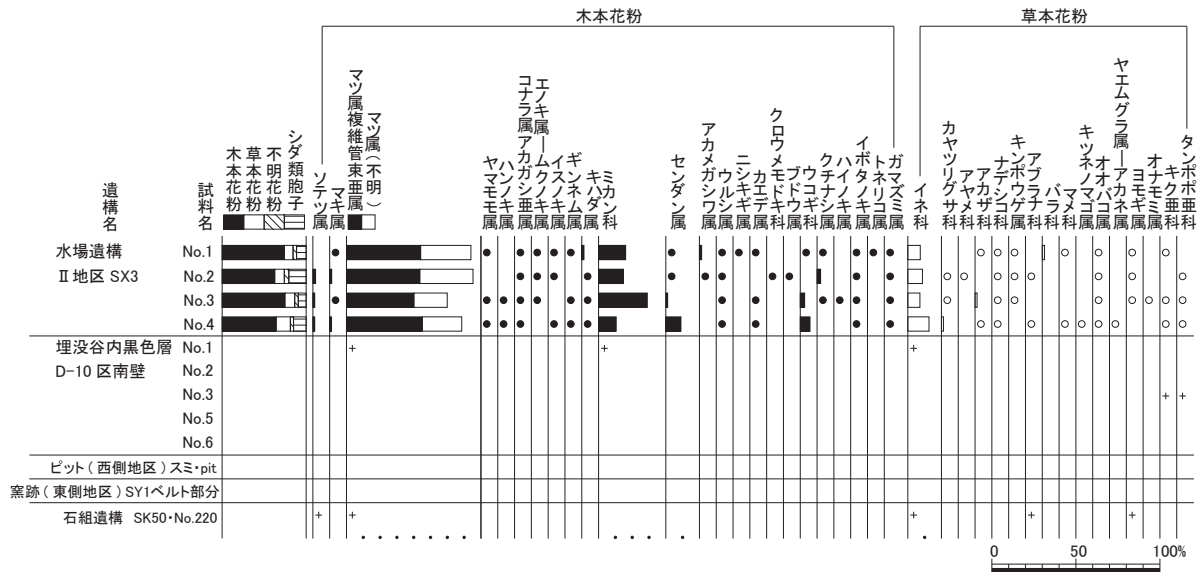
ピットおよび窯跡試料では、花粉化石・シダ類胞子・寄生虫卵は1個体も検出されなかった。なお、分析残渣中には、炭化あるいは分解の影響を受けた微細な植物片が多量に含まれる。

石組遺構では、花粉化石が検出されるものの、定量分析が行えるだけの個体数を得ることは出来なかった。検出された種類は、木本花粉ではソテツ属、マツ属が、草本花粉ではイネ科、アブラナ科、ヨモギ属がわずかに認められるに過ぎない。また、寄生虫卵は1個体も検出されず、分析残渣中には西側地区や東側地区同様、炭化あるいは分解の影響を受けた微細な植物片が多量に含まれていた。

第33表 花粉・寄生虫卵分析結果

種類	水場遺構 Ⅱ地区SX3				埋没谷内黒色層 D10区南壁					ピット スミ Pit	窯跡 SY1 ペルト部分	石組遺構 SK50 No.220
	1	2	3	4	1	2	3	5	6			
木本花粉												
ソテツ属	-	4	3	3	-	-	-	-	-	-	-	1
マキ属	2	3	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属(維管束亜属)	134	106	109	125	-	-	-	-	-	-	-	1
マツ属(不明)	91	77	54	65	1	-	-	-	-	-	-	9
ヤマモモ属	1	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	2	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
エノキ属-ムクノキ属	1	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イスノキ属	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ギンネム属	1	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-
キハダ属	4	1	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ミカン科	49	36	79	29	1	-	-	-	-	-	-	-
センダン属	1	1	3	25	-	-	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ属	4	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	2	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ニシキギ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	2	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-
クロウメモドキ科	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ブドウ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	1	-	7	16	-	-	-	-	-	-	-	-
クチナシ属	2	5	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ハイノキ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	2	1	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-
トネリコ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属	2	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉												
イネ科	29	32	25	52	1	-	-	-	-	-	-	2
カヤツリグサ科	-	2	3	5	-	-	-	-	-	-	-	-
アヤメ科	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科	1	-	4	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ナデシコ科	2	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
キンポウゲ属	1	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
バラ科	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マメ科	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
キツネノマゴ属	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
オオバコ属	1	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤエムグラ属-アカネ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	1	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1
オナモミ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キク亜科	1	-	1	3	-	-	10	-	-	-	-	-
タンポポ科	-	1	1	3	-	-	1	-	-	-	-	-
不明花粉	17	21	15	16	-	-	1	-	-	-	-	3
シダ類胞子												
シダ類胞子	47	80	34	64	6	1	10	-	1	-	-	8
合計												
木本花粉	304	243	272	277	2	0	0	0	0	0	0	11
草本花粉	42	43	41	71	1	0	11	0	0	0	0	4
不明花粉	17	21	15	16	0	0	1	0	0	0	0	3
シダ類胞子	47	80	34	64	6	1	10	0	1	0	0	8
総計(不明を除く)	393	366	347	412	9	1	21	0	1	0	0	23
寄生虫卵												
回虫卵	0	0	0	<100	0	0	0	0	0	0	0	0
鞭虫卵	<100	0	<100	0	0	0	0	0	0	0	0	0
マンソン裂頭条虫卵	0	0	<100	0	0	0	0	0	0	0	0	0

1) <100:100個体未満。



第104図 花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

(4) 植物珪酸体分析

結果を第34表と第105図に示す。各試料から検出された植物珪酸体は、概して保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下に、各地点での産状を述べる。

1) 水場遺構(II地区SX3)

試料の多くから栽培植物であるイネ属が検出され、短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見られる。その含量は、概して少ない。短細胞珪酸体では、多くてもNo. 1の約700個/gであり、他は300~400個/gである。機動細胞珪酸体はさらに少なく、100個/g未満~300個/gであり、No. 3では認められない。

この他にタケ亜科、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が認められ、各試料での産状も同様である。

第34表 植物珪酸体含量

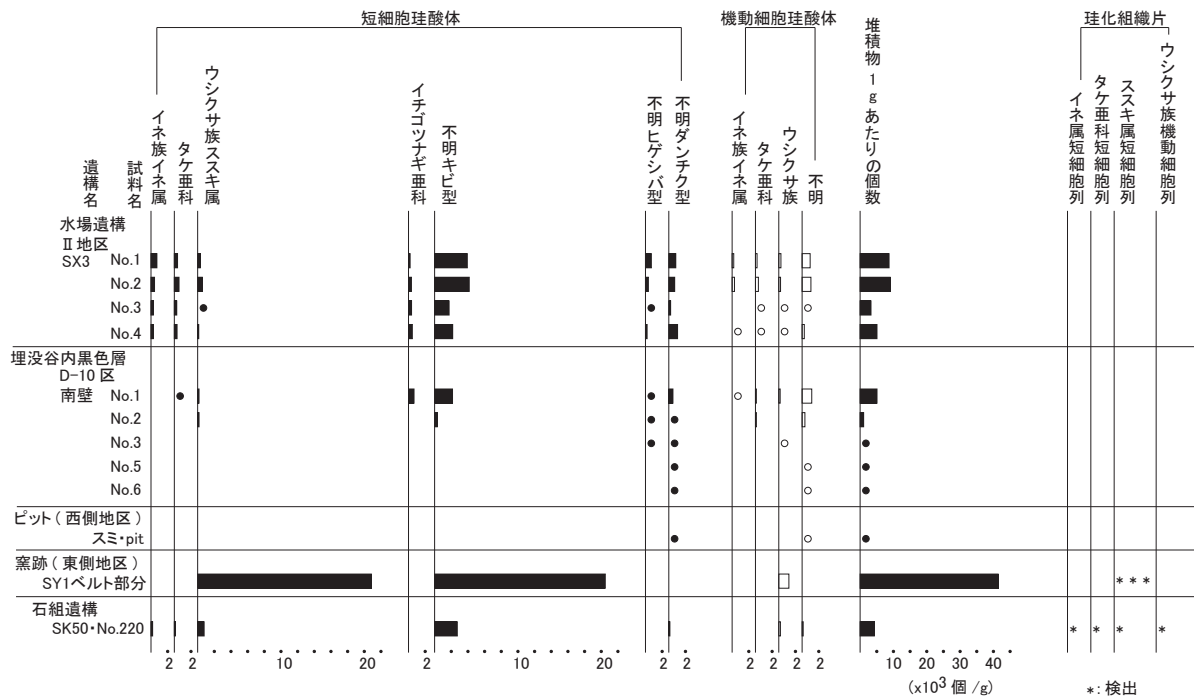
種類	水場遺構 II 地区 SX3				埋没谷内黒色層 D10区南壁					ピット スミ Pit	窯跡 SY1 ベルト部分	石組遺構 SK50 No.220
	1	2	3	4	1	2	3	5	6			
イネ科葉部短細胞珪酸体												
イネ族イネ属	700	400	300	300	-	-	-	-	-	-	-	200
タケ亜科	400	600	300	300	<100	-	-	-	-	-	-	100
ウシクサ族ススキ属	300	600	<100	100	200	200	-	-	-	-	20,000<	800
イチゴツナギ亜科	200	400	400	500	700	-	-	-	-	-	-	-
不明キビ型	3,900	4,200	1,700	2,200	2,100	300	-	-	-	-	20,000<	2,700
不明ヒゲシバ型	700	400	<100	200	<100	<100	-	-	-	-	-	-
不明ダンチク型	800	700	200	1,100	500	<100	<100	<100	<100	<100	-	100
イネ科葉身機動細胞珪酸体												
イネ族イネ属	200	300	-	<100	<100	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科	200	400	<100	<100	100	100	-	-	-	-	-	-
ウシクサ族	300	200	<100	<100	200	-	<100	-	-	-	1,200	200
不明	1,000	1,100	<100	300	1,200	300	-	<100	<100	<100	-	100
合計												
イネ科葉部短細胞珪酸体	7,100	7,100	3,000	4,600	3,600	600	100	<100	<100	<100	40,000<	4,000
イネ科葉身機動細胞珪酸体	1,600	1,900	200	500	1,500	400	<100	<100	<100	<100	1,200	300
総計	8,700	9,000	3,300	5,100	5,100	1,100	200	100	100	100	41,200<	4,300
珪化組織片												
イネ属短細胞列	-	--	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*
タケ亜科短細胞列	-	--	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*
ススキ属短細胞列	-	--	-	-	-	-	-	-	-	-	***	*
ウシクサ族機動細胞列	-	--	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*

含量は(個/g)、10の位で丸めている(100単位にする)

合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている

<100: 100個/g未満

-: 未検出, *: 検出, **: 多い, ***: 非常に多い



第105図 植物珪酸体含量

堆積物 1gあたりに換算した個数を示す。堆積物 1gあたりの個数の●○は 200個/g 未満、他の●○は 100個/g 未満を示す。また、珪化組織片の産状を*で示す。

*: 検出
***: 非常に多い

2) 埋没谷内黒色層(D-10区南壁)

No. 6～3では主に不明が見られ、その含量は少ない。No. 2では、不明に加えてタケ亜科やススキ属が見られる。No. 1では、タケ亜科、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科とともに、イネ属の機動細胞珪酸体がわずかに見られる。

3) ビット

不明が見られ、その含量は少ない。

4) 窯跡

ススキ属の短細胞列が数多く見られ、ウシクサ族の機動細胞珪酸体なども認められる。

5) 石組遺構

珪化組織片としてイネ属短細胞列、タケ亜科短細胞列、ススキ属短細胞列、ウシクサ族機動細胞列がわずかに見られる。また単体の植物珪酸体としてイネ属、タケ亜科、ススキ属を含むウシクサ族なども認められる。

(5) 微細物洗い出し分析

結果を第35表に示す。東側地区のベルト部分からは炭化材0.34g(最大径10.78mm)と土器0.12g(最大径8.06mm)が検出された。土No. 220集石012の11層下部?からは、明るく開けた場所に生育する草本のイヌタデ近似種の果実1個と、炭化材2.35g(最大径13.97mm)、動物遺存体(椎骨1個0.36g、ウニ類のトゲ0.06g)が検出された。両試料の分析残渣は砂礫主体で、微細な炭化材を含む。以下に、種実の形態的特徴等を記す。

第35表 微細物洗い出し分析結果

種類・部位	試料情報			備考
	イヌタデ近似種 果実	窯跡 SY1 ベルト部分	石組遺構 SK50 No.220	
イヌタデ近似種 果実	個数	-	1個	破片
炭化材	重量	0.34g	2.35g	
	最大径	10.78mm	13.97mm	
不明炭化物	重量	-	0.03g	
動物遺存体	重量			
椎骨		-	0.36g	1個
ウニ類のトゲ	重量	-	0.06g	
土器	重量	0.12g	-	
	最大径	8.06mm	-	
分析残渣				
炭化材主体	重量	0.30g	0.49g	
植物片	重量	0.01g	-	
砂礫	重量	39.31g	7.51g	
分析量	容量	200cc	100cc	
	重量	315.91g	176.64g	

・イヌタデ近似種 (*Polygonum cf. longisetum* De Bruyn) タデ科タデ属

果実の破片が検出された。黒色、完形ならば長さ2.5mm、径1.5mm程度の丸みのある三稜状卵体。破片は3裂した1片で長さ2mm、幅1.3mm程度。頂部は尖り、基部は切形。果皮表面は平滑で光沢がある。

(6) 土壌理化学分析

結果を第36表、第37表に示す。以下に各地点、各遺構について述べる。

1) 水場遺構(Ⅱ地区SX3)

4点の試料ともに、有機炭素量は2%前後、腐植含量は3~4%であり、全窒素量は0.2%前後であった。その中で、No. 2が僅かに他の試料に比べて有機炭素量・腐植含量が高く、C/N比も他の試料の11よりも若干高い12を示した。全リン酸量は約6~8mg/gであるが、その中でNo. 2が最も高い8.22mg/gを示し、No. 4が最も低い5.54mg/gを示す。可給態リン酸では、No. 1~3が11~13mg/100gであるが、No. 4はそれらより低い8.5mg/100gであり、可給態窒素もNo. 1~3が7~8mg/100gであるのに対してNo. 4は6.1mg/100gである。全鉄は4点の試料ともに5%前後であり、活性度は0.5~0.6、結晶化指数は0.3~0.4であった。

粒径組成は、No. 1~3は粘土含量が約50%の重埴土であるが、No. 4はそれらよりも粘土含量がやや少ない(約40%)軽埴土に分類された。元素組成では、4点の試料ともに特異な組成は認められないが、その中でNo. 4は、他の3点に比べて Al_2O_3 の含有量がやや少ないことが指摘できる。

2) 埋没谷内黒色層(D-10区南壁)

有機炭素量および腐植含量は、上位の試料ほど多い傾向が認められ、No. 4~6では有機炭素量が0.2%前後、腐植含量が0.3~0.4%であるが、No. 3~No. 1ではそれぞれ0.4~0.8%、0.7~1.3%の値を示す。全窒素量はNo. 5が0.04%であるほかは、0.07~0.09%を示す。したがって、C/N比は、No. 3~No. 6は3~4であるが、No. 2~1では7~9を示す。全リン酸量は、下位の試料に多い傾向が認められ、No. 3~No. 6では約7~8mg/gであるが、No. 2、1では約5mg/gである。可給態リン酸も下位の試料に多い傾向があり、No. 5、6では10~11mg/100g、No. 2~4では約9mg/100g、No. 1では約6mg/100gとなる。可給態窒素は、No. 5が1.4mg/100gであるほかはいずれも約2mg/100g程度である。全鉄は6点の試料ともに4~5%であり、活性度は0.2前後、結晶化指数は約0.6であった。

粒径組成は、No. 1~4は粘土含量が約40%の軽埴土であるが、No. 5、6はそれらよりも粘土含量がやや多い(約50%)重埴土に分類された。元素組成では、No. 1、2の2点とNo. 3~6の4点との間に、 SiO_2 、 Al_2O_3 、 K_2O 、 P_2O_5 の各元素における値の違いが認められる。 SiO_2 ではNo. 1、2の方が他の4点よりも多く、 Al_2O_3 、 K_2O 、 P_2O_5 ではNo. 1、2の方が他の4点よりも少ない傾向を示す。

3) ピット

第36表における有機炭素量から結晶化指数までの各値のうち、全リン酸と可給態リン酸を除く各値は、上述した埋没谷内黒色層の上部(No. 1、2)の試料の値に概ね近似し、全リン酸と可給態リン酸は同下部(No. 3~6)の試料の値に近似する。また、粒径組成は埋没谷内黒色層下部と同様の粘土含量約50%の重埴土に分類され、元素組成も埋没谷内黒色層下部の各値に近似する。

4) 窯跡

有機炭素量および腐植含量が前述した水場遺構や埋没谷内黒色層の試料に比べて高く、それぞれ約4%、約7%という値を示す。全窒素量は前述した各試料とほぼ同様なため、C/N比は31と極めて高い。さらに、全リン酸量および可給態リン酸量も、それぞれ約14mg/g、約230mg/100gという前述した各試料に比べてはるかに高い値を示す。可給態窒素量は埋没谷内黒色層上部程度であり、全鉄、活性度、結晶化指数などは埋没谷内黒色層下部に近似する。また、粒径組成は、埋没谷内黒色層上部に近い軽埴土に分類される。

元素組成は、前述した他の試料に比べて、 Al_2O_3 、値が約11%とやや低く、 CaO と P_2O_5 の値が、それぞ

れ約2.4%、約1.5%と非常に高い値を示す。

5) 石組遺構

有機炭素量および腐植含量が前述した水場遺構や埋没谷内黒色層の試料に比べて高く、それぞれ約3%、約4%という値を示す。全窒素量は前述した各試料とほぼ同様なため、C/N比は25と極めて高い。さらに、全リン酸量および可給態リン酸量も、それぞれ約9mg/g、約130mg/100gという前述した各試料に比べてはるかに高い値を示す。可給態窒素量は埋没谷内黒色層上部程度であり、全鉄、活性度、結晶化指数などは埋没谷内黒色層下部に近似する。また、粒径組成は、埋没谷内黒色層上部に近い軽埴土に分類される。

元素組成は、前述した他の試料に比べて、SiO₂の値が約52%とやや低く、CaOとP₂O₅の値が、それぞれ約4.3%、約1.0%と非常に高い値を示す。

第36表 土壌理化学分析結果

遺構名・地点名	試料名	土色	有機炭素 (%)	腐植 (%)	全窒素 (%)	C/N	全リン酸 (mg/g)	可給態リン酸 (mg/100g)	可給態窒素 (mg/100g)	全鉄 Fe _t (%)	DCB可溶鉄 Fe _d (%)	酸性シュウ酸塩可溶鉄 Fe _o (%)	活性度 Fe _o /Fe _t	結晶化指数 (Fe _d -Fe _o)/Fe _t	粒径組成				
															粗砂 (%)	細砂 (%)	シルト (%)	粘土 (%)	土性
水場遺構 (II地区 SX3)	No.1	10YR4/2 灰黄褐	2.19	3.78	0.20	11	6.94	12.8	7.9	5.27	3.64	1.86	0.51	0.34	2.1	24.5	24.6	48.8	HC
	No.2	10YR4/3 にぶい黄褐	2.37	4.09	0.20	12	8.22	11.8	7.7	5.11	3.48	1.58	0.45	0.37	1.7	24.1	25.3	48.9	HC
	No.3	10YR4/3 にぶい黄褐	1.97	3.40	0.18	11	7.10	11.0	7.2	5.38	3.55	2.07	0.58	0.28	2.3	21.8	25.8	50.1	HC
	No.4	10YR4/3 にぶい黄褐	1.61	2.78	0.15	11	5.54	8.5	6.1	4.70	3.20	1.91	0.60	0.27	6.8	32.6	19.8	40.8	LiC
埋没谷内黒色層 (D-10区南壁)	No.1	10YR3/3 暗褐	0.78	1.34	0.09	9	5.38	6.0	2.4	4.22	3.07	0.64	0.21	0.58	5.7	23.5	30.6	40.2	LiC
	No.2	10YR3/3 暗褐	0.58	1.00	0.08	7	5.39	8.7	2.3	3.88	2.79	0.56	0.20	0.57	7.6	29.9	26.8	35.7	LiC
	No.3	10YR3/4 暗褐	0.38	0.66	0.09	4	6.78	8.1	2.4	4.61	3.34	0.63	0.19	0.59	5.4	23.3	28.9	42.4	LiC
	No.4	10YR3/4 暗褐	0.23	0.40	0.08	3	7.03	9.4	1.8	4.78	3.40	0.64	0.19	0.58	4.8	23.1	27.4	44.7	LiC
	No.5	10YR3/4 暗褐	0.15	0.26	0.04	4	7.77	11.3	1.4	4.99	3.56	0.75	0.21	0.56	3.8	20.2	30.9	45.1	HC
	No.6	10YR4/6 褐	0.20	0.34	0.07	3	7.64	10.3	1.6	5.13	3.66	0.59	0.16	0.60	4.0	20.3	25.8	49.9	HC
ピット(西側地区)	SM・Pit	10YR3/3 暗褐	0.90	1.55	0.11	8	7.13	11.1	3.3	4.67	3.29	0.65	0.20	0.57	3.2	15.6	35.1	46.1	HC
窠跡(東側地区)	SY1 ベルト部分	10YR2/1 黒	3.97	6.84	0.13	31	14.48	230.7	2.4	5.78	4.01	1.25	0.31	0.48	11.0	26.7	26.3	36.0	LiC
石組遺構	SK50・No.220	10YR2/1 黒褐	2.54	4.38	0.10	25	9.28	130.7	2.4	3.65	2.61	0.51	0.20	0.58	12.6	34.5	20.6	32.3	LiC

備考)

- (1) 土色:マンセル色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修, 1967)による。
- (2) 腐植(%):有機炭素量(%) \times 1.724
- (3) C/N:有機炭素量/全窒素量

- (4) 全鉄(Fe_t):蛍光X線分析による。
- (5) 活性度:Fe_o/Fe_t
- (6) 結晶化指数:(Fe_d-Fe_o)/Fe_t
- (7) 土性:国際法区分による。

第37表 全分析(蛍光X線分析)結果

遺構名・地点名	試料名	SiO ₂ (%)	TiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	MnO (%)	MgO (%)	CaO (%)	Na ₂ O (%)	K ₂ O (%)	P ₂ O ₅ (%)	Ig.Loss (%)
水場遺構 (II地区SX3)	No.1	58.34	0.92	16.48	7.54	0.08	0.73	0.71	0.16	1.64	0.71	12.69
	No.2	57.98	0.93	16.68	7.31	0.07	0.74	0.64	0.18	1.69	0.74	13.04
	No.3	57.59	0.95	17.09	7.69	0.10	0.80	0.67	0.18	1.72	0.69	12.52
	No.4	63.97	0.81	14.47	6.72	0.11	0.65	0.61	0.15	1.46	0.56	10.49
埋没谷内黒色層 (D-10区南壁)	No.1	66.11	1.00	14.37	6.04	0.43	0.59	0.61	0.19	1.47	0.55	8.64
	No.2	69.49	0.91	12.82	5.55	0.49	0.53	0.53	0.18	1.38	0.55	7.57
	No.3	64.13	1.02	15.47	6.59	0.54	0.64	0.55	0.18	1.60	0.69	8.59
	No.4	63.54	1.00	15.97	6.84	0.50	0.68	0.50	0.19	1.62	0.72	8.44
	No.5	62.18	1.04	16.75	7.14	0.47	0.68	0.50	0.16	1.74	0.82	8.52
	No.6	60.95	0.99	17.60	7.34	0.25	0.73	0.50	0.17	1.79	0.80	8.88
ピット(西側地区)	SM・Pit	61.61	1.13	16.32	6.68	0.61	0.69	0.52	0.19	1.80	0.72	9.73
窠跡(東側地区)	SY1 ベルト部分	51.75	0.77	16.29	8.27	0.18	0.75	2.39	0.14	1.58	1.50	16.38
石組遺構	SK50・No.220	63.27	0.65	10.73	5.22	0.16	0.53	4.30	0.14	1.25	0.99	12.76

備考)

- (1) 蛍光X線分析による測定値。

(7) 土壌薄片観察

観察結果を第39表、第106図～第109図に示す。水場遺構、埋没谷内黒色層およびピット、窯跡、石組遺構のいずれの遺構覆土もほぼ同様の砂粒組成である。すなわち、砂粒のほとんどは石英の鉱物片であり、他に微量のカリ長石や斜長石の鉱物片と多結晶石英を含み、さらに試料によっては極めて微量のチャートあるいは石灰岩の岩石片を含む。また、水場遺構およびピットの覆土には少量、窯跡試料および石組遺構の試料には中量の植物片が含まれている。

碎屑物の割合は、水場遺構のNo. 1 と石組遺構の試料で20%をやや超える比較的多い値を示すが、他の試料は、10～20%の範囲内である。ただし、ピットの試料は10%未満でやや低い値を示す。

砂粒の粒径組成は、窯跡試料が極細粒砂をモードとするほかは、いずれの試料も細粒砂をモードとするほぼ同様の組成を示す。

(8) 脂肪酸分析

結果を第38表に示す。脂肪酸は水場遺構(Ⅱ地区SX3)のNo. 2で、ステアリン酸が検出されたのみである。ステロールは、ピット試料以外から検出される。水場遺構(Ⅱ地区SX3)のNo. 2、石組遺構試料は、コプロスタノールとコレステロールのみからなり、特にコプロスタノールの割合が高い。水場遺構(Ⅱ地区SX3)のNo. 3、4では、コプロスタノール、コレステロールのほか、エルゴステロール、カンペステロール等も検出されるが、2試料共にエルゴステロールの割合が高い。

(9) 焼土薄片観察

1) 窯跡(東側地区)壁面

本試料は、粗粒シルト～粗粒砂サイズの碎屑片を中量程度含む砂混じり粘土である。碎屑片の大部分は石英からなり、カリ長石、斜長石、白雲母、黒雲母、角閃石、ジルコン、不透明鉱物、多結晶石英なども伴う。基質は褐色～赤褐色を呈し、褐色を呈する粘土鉱物、セリサイト、水酸化鉄などから構成される。

基質に散在する水酸化鉄の一部には、赤味の強いものが散見される。この赤味を増した水酸化鉄は炉跡試料のように焼成により赤鉄鉱化したものとみることが可能である。この場合、同様に270～325℃程度以上の焼成温度が想定される。

2) 炉跡(Ⅰ地区E-8) 炉002 No. 1

本試料は、粗粒シルト～粗粒砂サイズの碎屑片を中量程度含む砂混じり粘土である。碎屑片の大部分は石英であり、その他、カリ長石、斜長石、白雲母、黒雲母、ジルコン、不透明鉱物、多結晶石英などを伴う。基質は褐色または赤褐色を呈し、褐色を呈する粘土鉱物、セリサイト、水酸化鉄などから構成され、一部において、酸化鉄結核が認められる。

肉眼的に褐色に見える部分と、赤褐色に見える部分の碎屑片および基質粘土における構成物の違いはなく、同質な物質で構成されている。鏡下における褐色部から赤褐色部への色調の変化は、基質粘土

第38表 脂肪酸分析結果

種 類	水場遺構 Ⅱ地区SX3			ピット スミ Pit	石組遺構 SK50 No.220
	2	3	4		
脂肪酸組成					
ミスチン酸(C14)	-	-	-	-	-
パルミチン酸(C16)	-	-	-	-	-
パルミトレイン酸(C16:1)	-	-	-	-	-
ステアリン酸(C18)	100.0	-	-	-	-
エライジン酸(C18:1trans)	-	-	-	-	-
オレイン酸(C18:1cis)	-	-	-	-	-
リノール酸(C18:2)	-	-	-	-	-
αリノレン酸(C18:3)	-	-	-	-	-
アラキジン酸(C20)	-	-	-	-	-
イコセン酸(C20:1)	-	-	-	-	-
アラキドン酸(C20:4)	-	-	-	-	-
ベヘン酸(C22)	-	-	-	-	-
ドコセン酸(C22:1trans)	-	-	-	-	-
エルカ酸(C22:1cis)	-	-	-	-	-
イコサペンタエン酸(C20:5)	-	-	-	-	-
リグノセリン酸(C24)	-	-	-	-	-
テトラコセン酸(C24:1)	-	-	-	-	-
ドコサヘキサエン酸(C22:6)	-	-	-	-	-
ステロール組成					
コプロスタノール	67.9	9.5	9.7	-	79.9
コレステロール	32.1	11.7	9.5	-	20.1
エルゴステロール	-	68.6	73.6	-	-
カンペステロール	-	6.5	7.2	-	-
スティグマステロール	-	3.7	-	-	-
シトステロール	-	-	-	-	-
分析試料の重量(g)	106.9	105.2	107.2	106.1	101.9

第39表 土壤薄片観察結果(1)

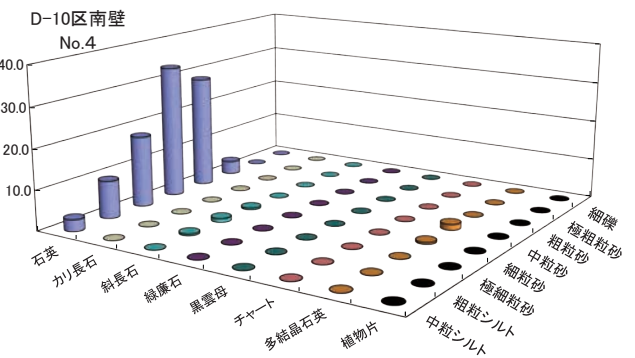
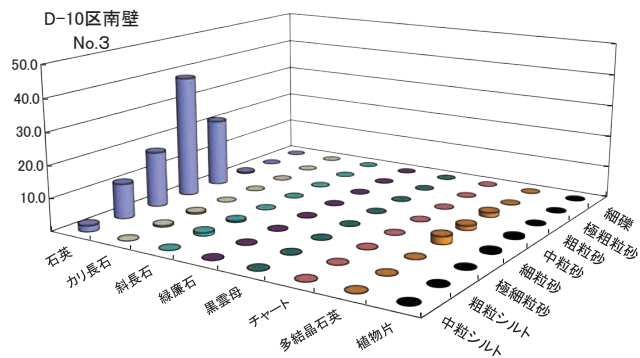
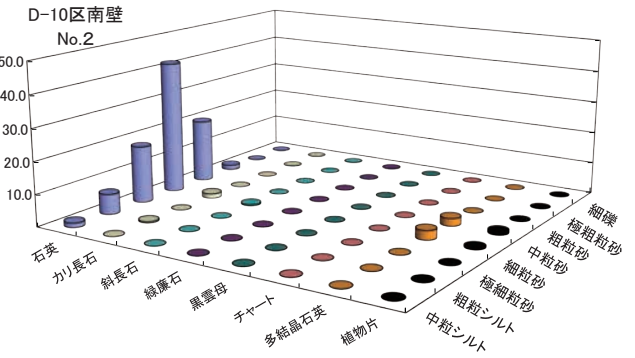
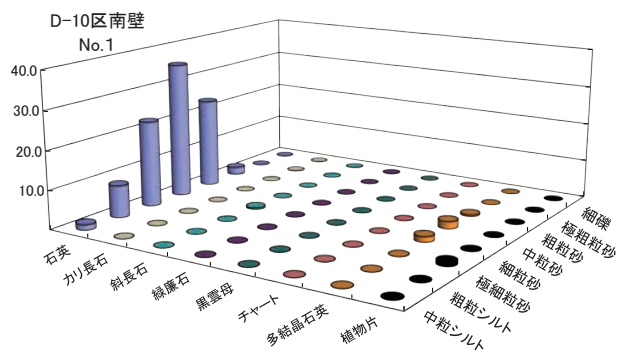
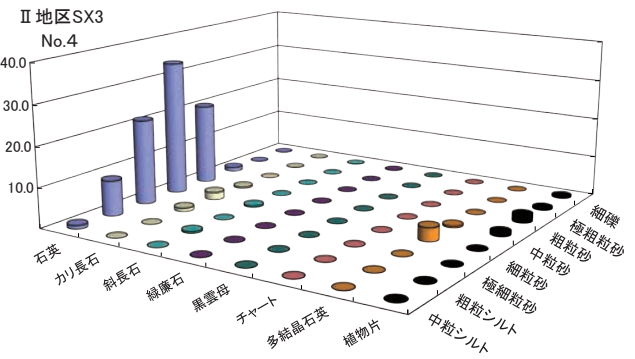
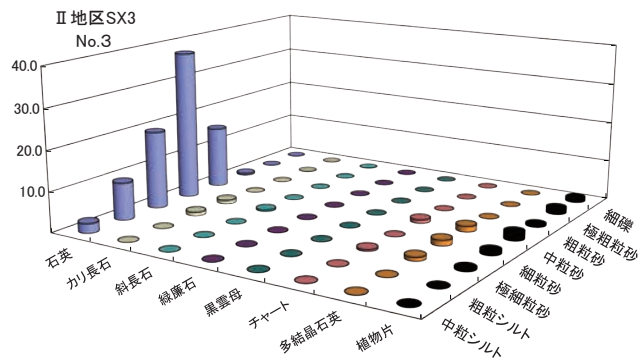
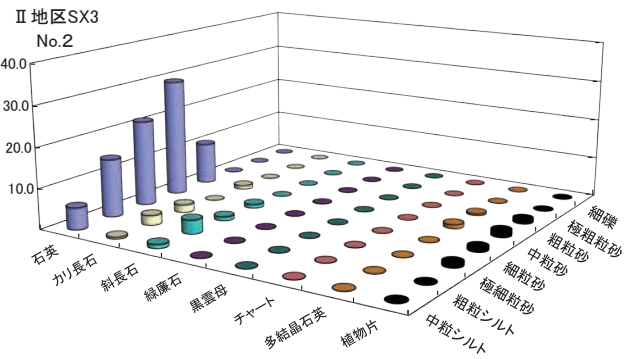
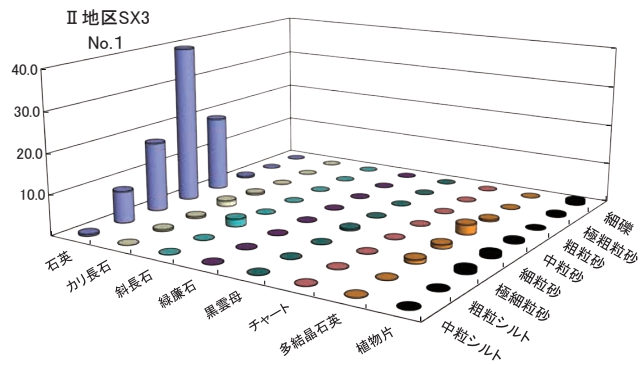
遺構	試料名	砂粒区分	砂粒の種類構成													合計			
			鉱物片					岩石片				その他							
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	緑帘石	黒雲母	炭酸塩鉱物	不透明鉱物	チャート	石灰岩	多結晶石英	珪長岩	粘土塊		植物片	植物珪酸体	
水場遺構 II地区SX3	1	細礫															2	2	
		極粗粒砂																1	1
		粗粒砂	1									1							2
		中粒砂	38	1								5				1			45
		細粒砂	79	3								2				2			87
		極細粒砂	35	1	4							2				2			44
		粗粒シルト	16	1													1		18
		中粒シルト	1																1
		基質																	
	孔隙																		62
	2	細礫																	0
		極粗粒砂																	0
		粗粒砂										1				2			3
		中粒砂	21	2								2				3			28
		細粒砂	59		2											2			63
		極細粒砂	43	4	2											2			51
		粗粒シルト	29	5	7														41
		中粒シルト	11	1	2														14
基質																			1320
孔隙																		48	
3	細礫																2	2	
	極粗粒砂																3	3	
	粗粒砂	1														1		2	
	中粒砂	31								2	3	1			4			41	
	細粒砂	75	2	1							3				2			83	
	極細粒砂	39	2							1	2				1			45	
	粗粒シルト	19																19	
	中粒シルト	5																5	
	基質																		862
孔隙																		59	
4	細礫																1	1	
	極粗粒砂																1	1	
	粗粒砂	2													4			6	
	中粒砂	41	1								1				2			45	
	細粒砂	68	4	1	1						7							81	
	極細粒砂	43	2															45	
	粗粒シルト	18		1														19	
	中粒シルト	2																2	
	基質																		956
孔隙																		58	

第39表 土壤薄片観察結果(3)

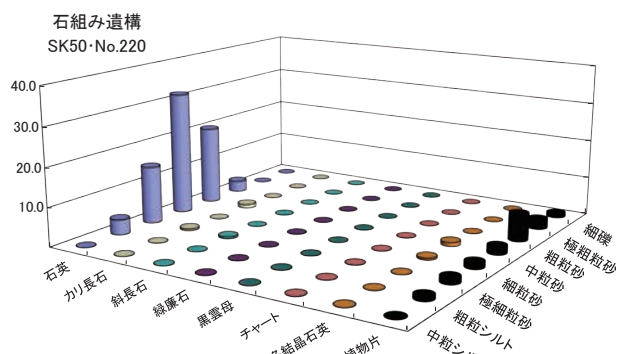
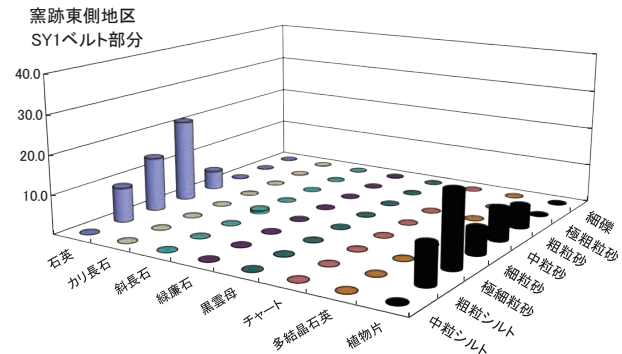
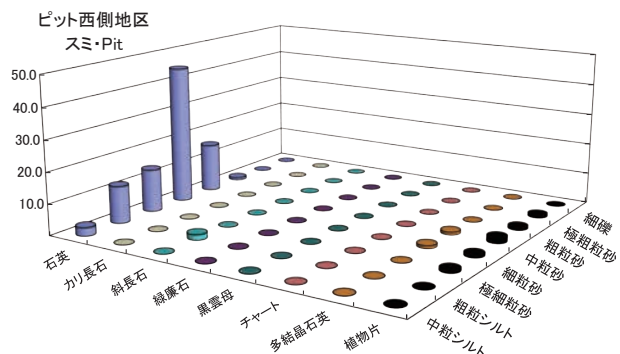
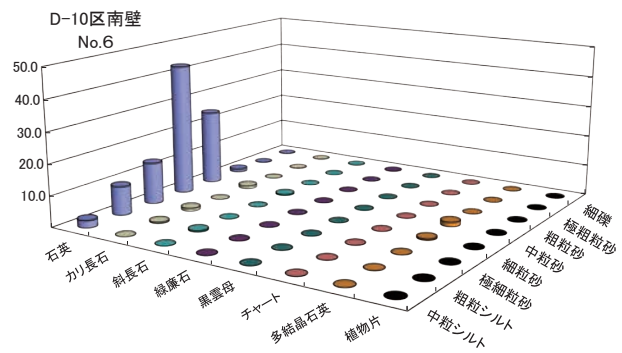
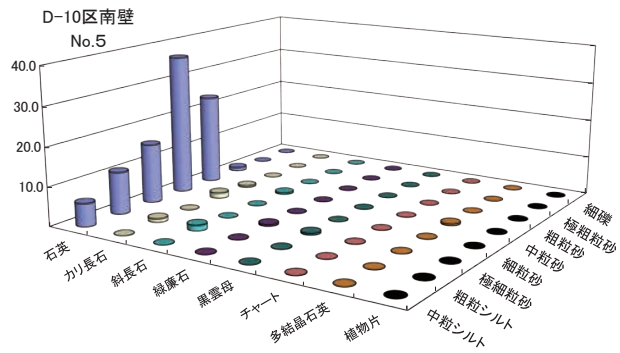
遺構	試料名	砂粒区分	砂粒の種類構成													合計			
			鉱物片					岩石片				その他							
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	緑帘石	黒雲母	炭酸塩鉱物	不透明鉱物	チャート	石灰岩	多結晶石英	珪長岩	粘土塊		植物片	植物珪酸体	
ベント(西側地区)	S・M・Pit	細礫																0	
		極粗粒砂																1	1
		粗粒砂	1															1	2
		中粒砂	17									1						2	20
		細粒砂	48									1						1	50
		極細粒砂	15															1	16
		粗粒シルト	13		2														15
		中粒シルト	3																3
		基質																	
孔隙																		118	
窯跡(東側地区)	SY1ベント部分	細礫																0	
		極粗粒砂																	0
		粗粒砂																7	7
		中粒砂	6									1				10			17
		細粒砂	26		1											8			35
		極細粒砂	17													23			40
		粗粒シルト	11															12	23
		中粒シルト																	0
		基質																	
孔隙																		66	
石組遺構	SK50・No.220	細礫															2	2	
		極粗粒砂										3				1		5	9
		粗粒砂	6									1						14	21
		中粒砂	41	2								2						4	50
		細粒砂	64									1						2	71
		極細粒砂	30	1	1													3	35
		粗粒シルト	8															2	12
		中粒シルト																	0
		基質																	
孔隙																		75	

第39表 土壤薄片観察結果(2)

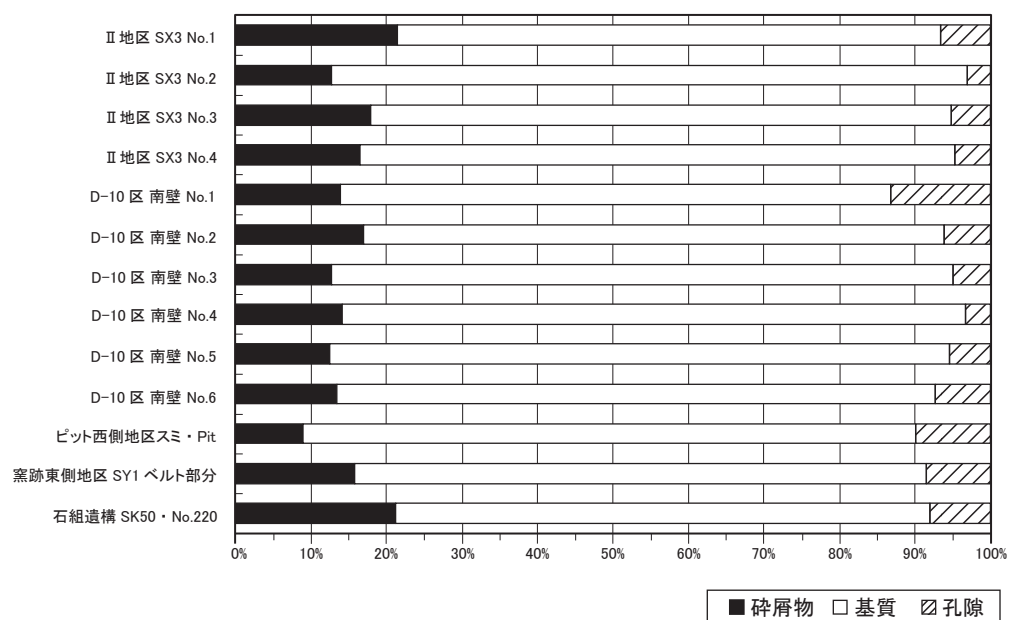
遺構	試料名	砂粒区分	砂粒の種類構成													合計			
			鉱物片					岩石片				その他							
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	緑帘石	黒雲母	炭酸塩鉱物	不透明鉱物	チャート	石灰岩	多結晶石英	珪長岩	粘土塊		植物片	植物珪酸体	
埋没谷内黒色層 D10区南壁	1	細礫																0	
		極粗粒砂																	0
		粗粒砂	4																6
		中粒砂	47											1	1				51
		細粒砂	71		1											3			75
		極細粒砂	45															2	47
		粗粒シルト	17															1	18
		中粒シルト	3																3
		基質																	
	孔隙																		191
	2	細礫																	0
		極粗粒砂																	0
		粗粒砂	3											1					4
		中粒砂	40													5		2	47
		細粒砂	84	3	1											6		1	95
		極細粒砂	36																36
		粗粒シルト	13	1														1	15
		中粒シルト	3																3
基質																			903
孔隙																		72	
3	細礫																	0	
	極粗粒砂																	0	
	粗粒砂	1														3		4	
	中粒砂	43													3		1	47	
	細粒砂	77													5		1	83	
	極細粒砂	35	1	1														37	
	粗粒シルト	22	1	2														25	
	中粒シルト	4																4	
	基質																		1291
孔隙																		77	
4	細礫																	0	
	極粗粒砂																	0	
	粗粒砂	7																7	
	中粒砂	57													3			60	
	細粒砂	67		1											1			69	
	極細粒砂	36		2														38	
	粗粒シルト	19		1														20	
	中粒シルト	6																6	
	基質																		1157
孔隙																		47	
5	細礫																	0	
	極粗粒砂																	0	
	粗粒砂	2																2	
	中粒砂	47	1	1												1		50	
	細粒砂	73	3															76	
	極細粒砂	31												1	1			33	
	粗粒シルト	22	2	3														27	
	中粒シルト	12																12	
	基質																		1298
孔隙					</														



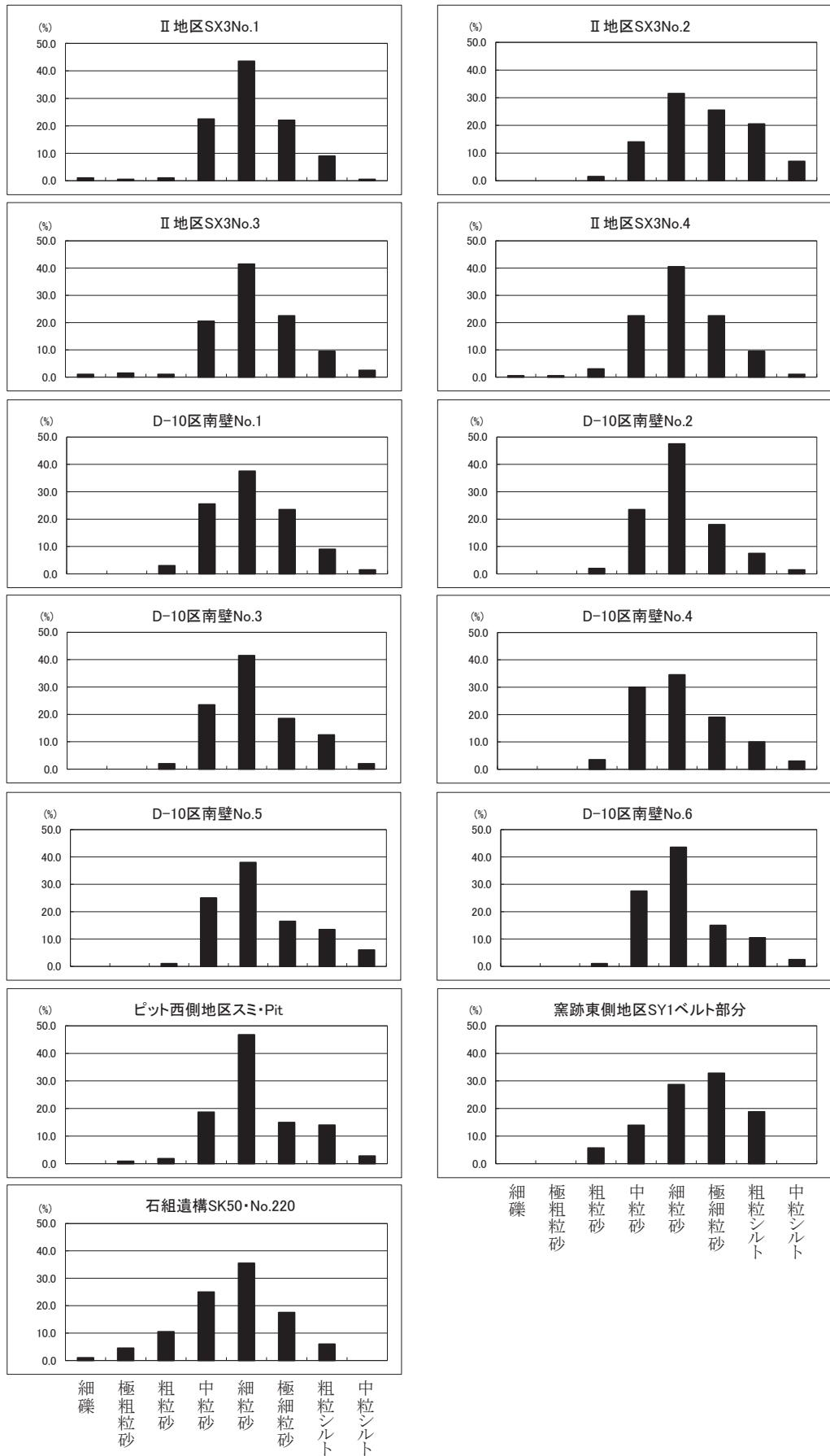
第 106 図 土壤試料の各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 (1)



第 107 図 土壤試料の各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2)



第 108 図 土壤試料の碎屑物・基質・孔隙の割合



第 109 図 土壤試料中の砂の粒径組成

における色調の変化であり、漸移的な変化となっている。褐色部と赤褐色部における相違点としては、赤褐色部の水酸化鉄の一部において赤味が強くなっており、直交ポーラー下において偏光を示す程度に結晶性が増しているという点が認められる。水酸化鉄は、普通270～325℃程度の焼成を受けると脱水し、赤鉄鉱へ変化することが知られている(吉木,1959)。赤褐色部において水酸化鉄の赤味が強くなった現象は、この赤鉄鉱化による可能性も考えられる。その場合、土壌は270～325℃程度以上の焼成を受けたと推定することができる。

(10) 熱残留磁気分析

1) パイロット試料の段階交流消磁結果

パイロット試料を用いた段階交流消磁の結果を第110図に示す。4個のパイロット試料は9mTまでの交流磁場で消磁できる、かなり大きな粘性磁化成分(磁気ノイズと考えられる)を持っていた。この結果に基づいて、残りすべての試料を9～25mTのいずれかの大きさの交流磁場で消磁し、残留磁化を測定した。帯磁率および交流消磁前後の残留磁化の強度および方向、さらにそれらの平均値を第40表にまとめた。

第40表 焼土試料の交流磁場消磁前後の残留磁化と帯磁率の測定結果

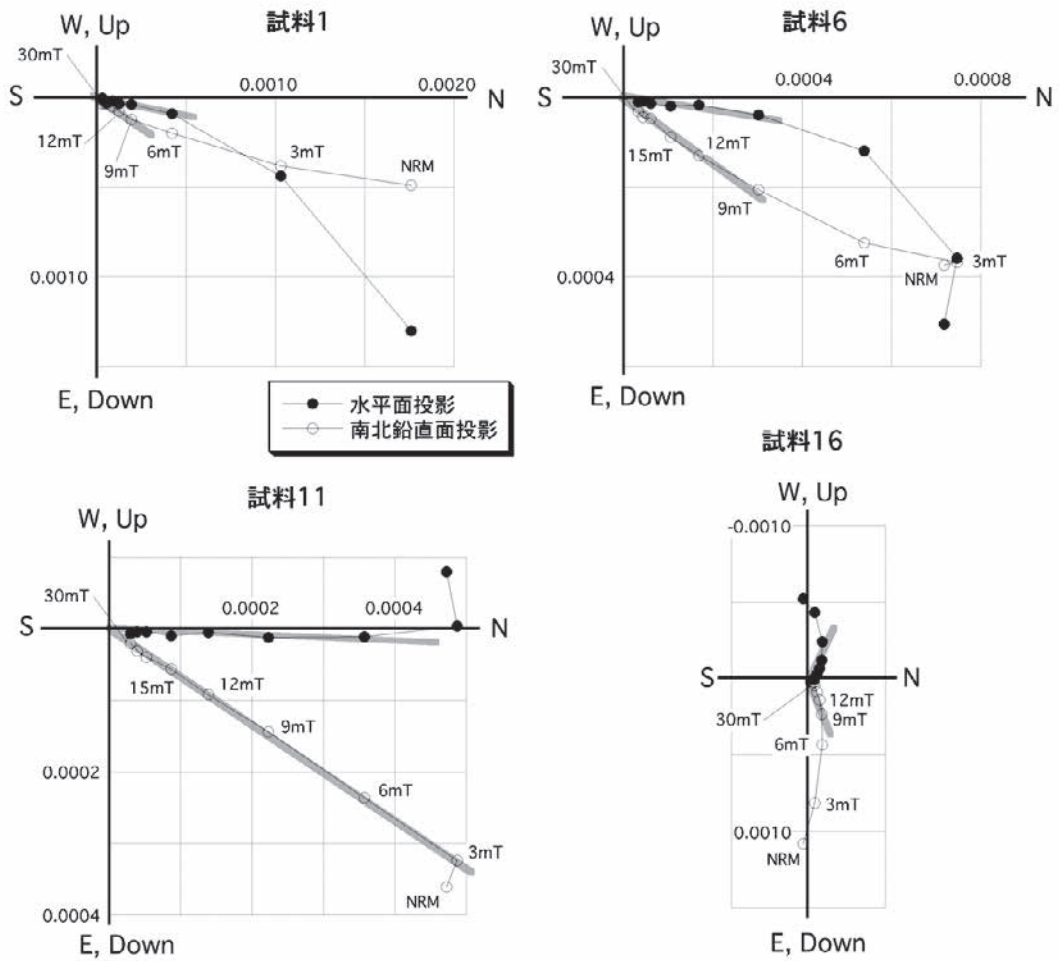
試料	帯磁率 (10 ⁻⁸ SI)	自然残留磁化			交流消磁(9mT)後残留磁化			レベル(mT)
		強度(m Amm)	偏角(°)	伏角(°)	強度(m Amm)	偏角(°)	伏角(°)	
1	77	0.002242	38.5	12.6	0.000232	12.7	31.7	9
2	63	0.002610	-4.4	78.6	0.000712	17.2	73.2	9
3	61	0.000518	14.9	2.3	0.000226	6.8	32.3	9
4	62	0.000772	2.9	38.5	0.000308	8.2	35.9	9
5	65	0.001889	-65.8	34.6	0.000142	-16	47.5	15
6	72	0.000954	37.1	23.0	0.000367	9.2	34.0	9
7	65	0.001045	13.6	-35.2	0.000306	7.6	30.6	9
8	59	0.000763	-12.4	42.0	0.000308	3.4	35.6	9
9	51	0.000558	-1.4	51.9	0.000258	2.4	36.2	9
10	59	0.000611	46	-16.7	0.000259	10.5	25.4	9
11	46	0.000600	-7.6	37.0	0.000266	5.1	32.7	9
12	53	0.001878	-20.9	26.6	0.000596	-20.1	29.8	9
13	52	0.000283	17.5	24.9	0.000106	11.5	33.3	9
14	52	0.001264	107	51.1	0.000295	108.4	54.2	9
15	55	0.000412	50.1	24.3	0.000101	9.5	35.4	9
16	55	0.001196	-91.8	64.1	0.000046	8.7	31.5	25
17	53	0.000616	-76.8	36.4	0.000093	3.5	33.7	12
18	58	0.000368	0.2	42.8	0.000162	6.3	32.5	9
19	48	0.000382	-25.5	62.6	0.000133	6.7	33.0	9
20	57	0.000351	-12	53.2	0.000141	5.3	36.3	9
平均	58.2	0.000966			0.000253	7.4	33.2	
						k = 472.7	α 95 = 1.7	

現在 □のデータを除外
 近畿地方の偏角(-7°)、伏角(48.5°)と沖縄の偏角(-4.6°)、伏角(39.1°)の差は
 沖縄が偏角は2.4°大きく、伏角は9.4°小さい。
 これを用いて、上記平均方向を近畿地方に換算すると、偏角は5.0°、伏角は42.6°となる。
 下線部データと近畿地方の標準曲線とを比較し、考古地磁気年代を決定する。

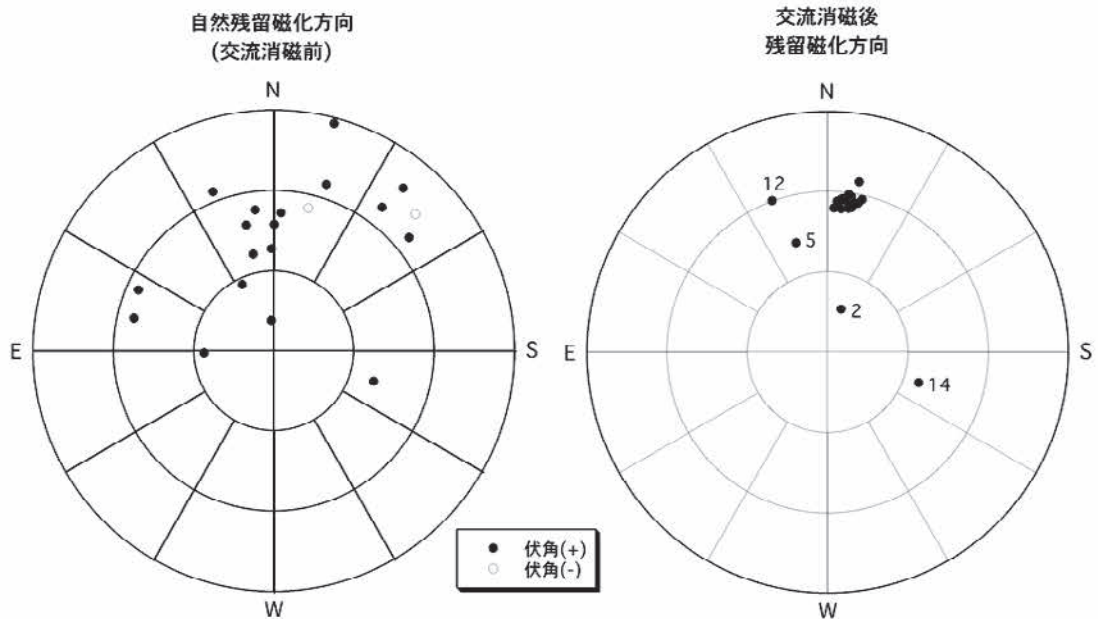
2) 考古地磁気年代決定

第111図で分かるように、土壌試料の残留磁化方向は交流消磁後に飛躍的に集中度を増す。このことは、交流消磁によって二次的な磁気ノイズである粘性残留磁化が効率よく取り除けたことを示している。交流消磁後にも全体的な傾向からはずれる試料(2、5、12、14)があるので、これらを除いた平均の残留磁化方向を用いて考古地磁気年代を決定した。

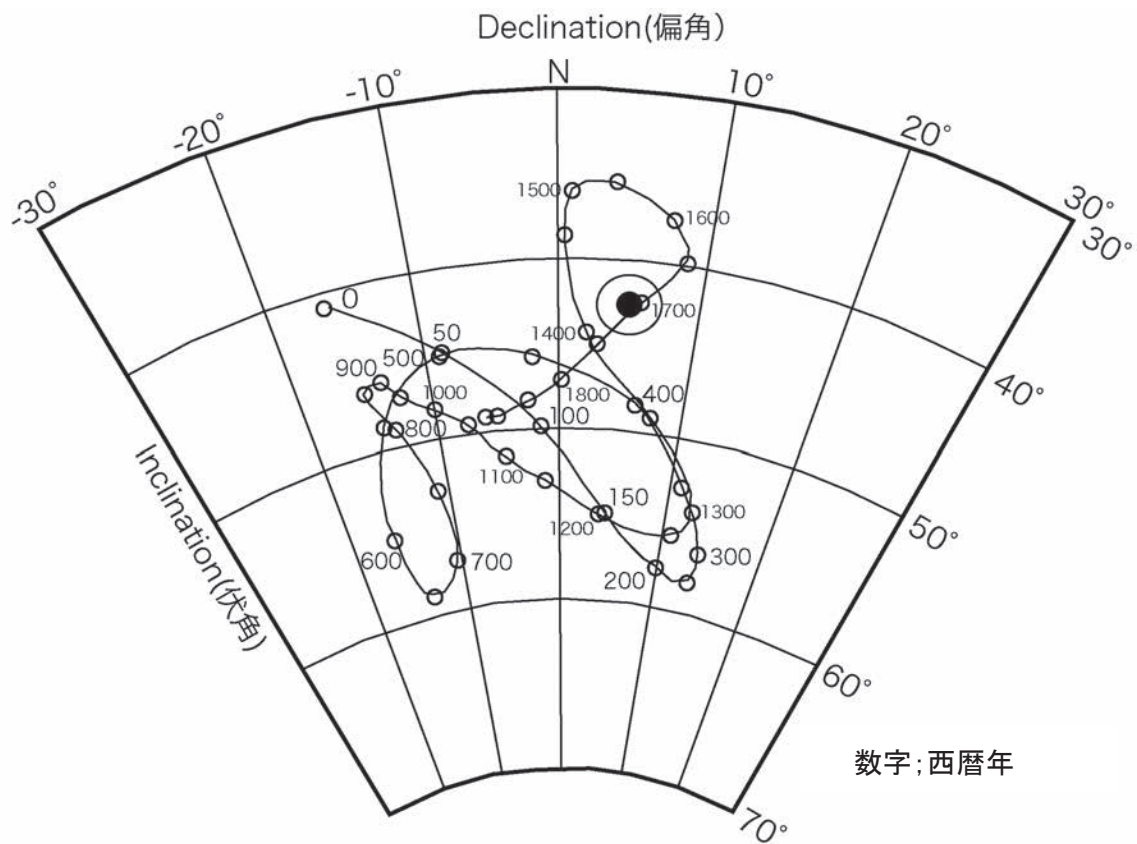
計16試料の消磁後の平均残留磁化方向は、偏角=7.4°、伏角=33.2°(信頼度パラメーター=472.7:大きいほどデータの精度が高い、フィッシャーのα₉₅=1.7°:小さいほど精度が高い)であった。この沖縄県での平均方向を近畿地方の値に換算した(偏角では-2.4°、伏角では+9.4°)。その結果、平均方向は偏角=5.0°、伏角=42.6°となる(第40表)。これらと近畿地方における考古地磁気標準曲線(Hirooka, 1971;1983)との比較を行った。その結果を第112図に示す。



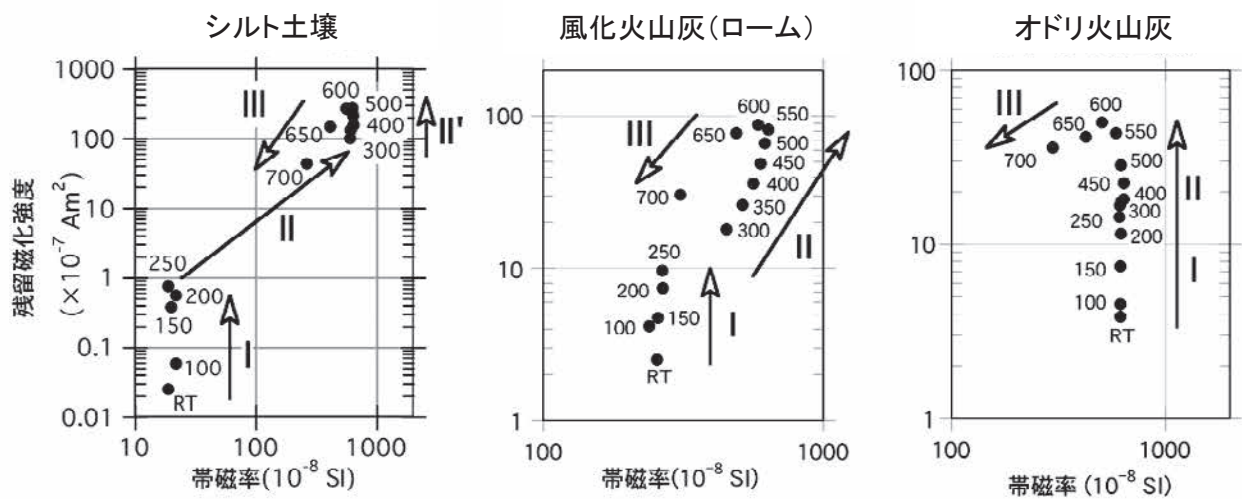
第110図 パイロット試料(1、6、11、16)の段階交流磁場消磁の結果(直交プロット)



第111図 焼土試料の交流磁場消磁前後の残留磁化方向



第112図 計16焼土試料の交流磁場消磁後の平均残留磁化方向(補正後:●)と近畿地方における標準古地磁気曲線(Hirooka,1971;1983)との比較



第113図 加熱実験による各種土壌の帯磁率および残留磁化強度の変化(森永,1999)

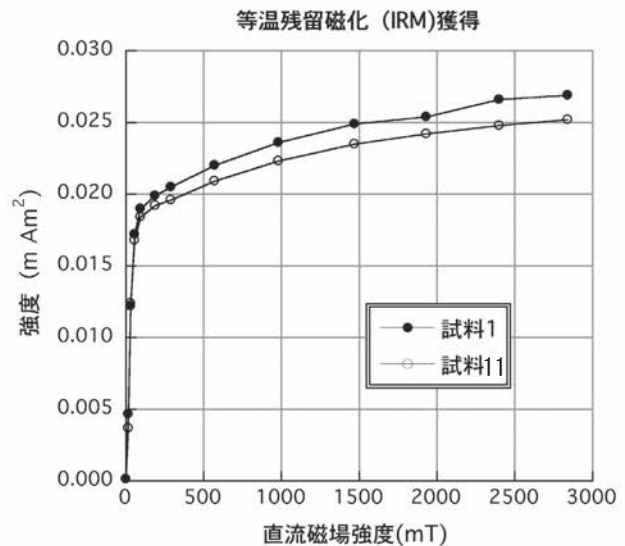
標準曲線と焼土の平均方向の誤差円 (α_{95} によって決まる)との重なりから年代を決定すると、焼土の最終の被熱年代として西暦1,700年頃が得られる。

3) 被熱温度の推定

第113図に、各種土壌を実験室内で加熱・冷却した後に測定した帯磁率と残留磁化強度を示す。加熱時間は試料内部に十分熱が届くように30分間で、低温側から50℃おきに最大700℃まで徐々に加熱温度を上げながら測定した結果である(森永, 1999)。250℃～300℃でシルト質土壌や風化火山灰で帯磁率および残留磁化強度が増加する(図中のⅡの初期過程)が、これは水酸化鉄ゲーサイト(αFeOOH)が酸化鉄ヘマタイト($\alpha\text{Fe}_2\text{O}_3$)を経てマグネタイト(Fe_3O_4)に変化した結果と考えられている。その後、どの試料も、図中のⅠの過程と同様に600℃までの間に熱残留磁化を獲得し、徐々に残留磁化強度を増加していく。さらに、600℃を超えた辺りから、逆に帯磁率や残留磁化強度が減少している(図中のⅢの過程)。これは低温側で生成したマグネタイトがより酸化的なヘマタイトに変化していくことで説明できる。つまり、土壌試料中にヘマタイトが増える過程は600℃以上の加熱によって起こると考えられる。

第114図に、検討焼土試料中の磁性鉱物を調べるために行った、パイロット試料1と11の等温残留磁化(IRM)獲得実験の結果を示す。横軸はIRMを着磁した直流磁場強度(mT)で、縦軸はIRM強度(m Am^2)である。図中のIRM獲得曲線は緩やかに上昇し、最高の直流磁場でもIRM強度が飽和していないことが分かる。このことは土壌試料中の大部分の磁性鉱物がヘマタイトであることに対応している。

第113図で分かるように、被熱によるヘマタイトの生成は600℃以上の温度で起こるので、検討焼土は少なくとも600℃かそれ以上の温度で被熱したと推定できる。



第114図 パイロット試料(1, 11)の等温残留磁化(IRM)獲得曲線

4. 考察

(1) 水場遺構の年代と内外の環境

1) 年代について

放射性炭素年代測定の試料として抽出したヤブニッケイの葉は、水場遺構覆土層の中でも下部に相当する層位中に狭在していたものである。また、ヤブニッケイは、暖温帯常緑広葉樹林を構成する常緑高木であり、当該期の遺跡周辺にも生育していたことが推定される。したがって、試料とした葉の破片は、遺構埋積の比較的初期の段階に周囲から遺構内に混入した可能性があり、その放射性炭素年代は、遺構の埋積初期段階の時期を示唆していると考えられる。測定された年代は、校正された暦年では17世紀後半から現代まで至る年代であった。この結果から、水場遺構の年代としては、古くとも17世紀以降の近世の年代観が推定される。

2) 遺構内外の環境

土壌薄片観察により、いずれの層位の覆土も包含される砂粒の組成に大きな変化は認められず、また同じ調査区内の埋設谷内黒色層などと同様の組成であったことから、例えば客土のような人為的な埋め戻しの層位はなく、基本的にはいずれの層位も同様の由来おそらく周囲の土壌からの流れ込みによるものであると考えられる。したがって、その中で微化石の産状や土壌理化学性などの変化が認められたことは、遺構内での環境変化を示唆すると考えて良い。

珪藻化石の産状からは、水場遺構内の環境の推移が窺える。No.4、3からは、流水不定性で好酸性・付着性

の*Pinnularia subgibba* var. *undulata*が優占したことで特徴付けられた。本種は、電解質成分の少ない貧栄養の水域に成育する種である(Krammer, 1992)ことから、これらの試料が堆積する頃は、遺構内には水が存在していたと考えられる。したがって、No. 4採取層位の砂質シルト層およびNo. 3採取層位のシルト層は、水場遺構として機能していた時の堆積層であると考えられる。その上位のNo. 2採取層位のシルト層が堆積する頃になると、陸生珪藻が増加することから、遺構内の乾燥化が示唆される。ただし、上位のNo. 1採取層位のように陸生珪藻が優占するほどではないことから、No. 2採取層位のシルト層は、乾燥化の途上にある堆積層であった可能性がある。No. 1採取層位の砂質シルト層では、陸生珪藻の割合が約70%と優占した。現生の陸生珪藻の分布調査によれば、陸生珪藻の割合が全体の70%以上であれば、その試料の堆積した場所は常に空気に曝された好気的環境であることが推定できるとされている(伊藤・堀内, 1991)。このことから、No. 1採取層位の砂質シルト層は、遺構内が完全に乾燥した状態での堆積層であったと考えられる。すなわち、No. 1採取層位の砂質シルト層堆積時には、水場としての機能はなかったことが推定される。

なお、No. 2採取層位では有機炭素量、腐植含量、全リン酸量が他の層位に比べてやや高い値が得られたが、これは上述した遺構内の環境変遷に従えば、滞水した状態から乾燥化する過程で遺構内の植生が繁茂したことなどが推定される。また、No. 4採取層位では上位の試料に比べて粘土含量が少なく、また Al_2O_3 も少なかったことは、水場という環境の中で粘土やシルトなどの細粒碎屑物は遺構内に溜まりにくかったことを示しているのかも知れない。

脂肪酸分析では、No. 2にコプロスタノールが多産した。コプロスタノールは、動物が食物を消化する際に大腸菌などの作用で生成されるもので、糞便等に特徴的に含まれる。また、コレステロールは、動物に特徴的な脂質の一種である。これらの動物性ステロールは、糞便に由来する可能性がある一方で、土壤微生物の影響により、土壤中に含まれる場合もある(筒木・近藤, 1997, 1998)。堆積物中の脂質の含量が検出器の感度を下回るほど少ない場合、検出される種類が極端に少なくなるため、割合で表すと特定の種類が誇張されることがある。No. 2のステアリン酸が100%なのはこの理由による。さらに、寄生虫卵分析では、回虫卵、鞭虫卵、マンソン裂頭条虫卵が検出されたが、いずれも含有量は1ccあたり100個体未満であった。寄生虫卵は、糞便などの堆積物で多産する調査事例が報告されているが、ある程度の人口密度を持つ集落では通常の土壌からもわずかに検出されることが知られている(例えば金原ほか, 1995a, bなど)。また、寄生虫卵の分解に対する抵抗性は花粉化石と同程度とされており(黒崎ほか, 1993)、花粉化石の産状を考慮すると、元々取り込まれる寄生虫卵が少なかったことが窺える。これらのことから、遺構内で検出された動物性ステロールや寄生虫卵は汚染の範囲内と想定され、糞便が流入するような環境ではなかったと考えられる。

なお、No. 3、4では、菌類由来のエルゴステロールや植物由来のカンペステロール、スティグマステロールが検出される。堆積物中には葉などの植物遺体がみられることから、これらは土壤中に含まれる植物遺体や植物を腐朽させる菌類に由来すると思われる。

水場遺構の周辺環境については、花粉化石および植物珪酸体の産状から推定することができる。花粉化石の保存状態・産出状況は良好であり、周辺の植生を反映する種類をみると、マツ属が多産し、ミカン科も多く認められる。多産するマツ属のうち、亜属まで同定できたものは全て複維管束亜属であった。日本に生育する複維管束亜属には、アカマツ・クロマツ・リュウキュウマツの3種類がある。このうち、アカマツとクロマツは、沖縄には自生せず、リュウキュウマツは沖縄特産で、広く生育している。これらのことから、今回の試料もリュウキュウマツの可能性が高い。リュウキュウマツは海岸から山地にかけて分布し、二次林の代表的要素である。ミカン科も沖縄には多く生育しており、周囲の森林の構成要素であったと推測される。その他にも常緑広葉樹林の構成要素であるヤマモモ属、コナラ属アカガシ亜属、イスノキ属、アカメガシワ属等や、海岸植生を反映するソテツ属等が検出されることから、豊富な樹種構成から成る森林や二次林が周囲や集水域に認められたと推測される。

草本植生では、イネ科を中心にカヤツリグサ科、アカザ科、キンポウゲ属、ヨモギ属、タンポポ亜科等が認められる。いずれも開けた明るい場所を好む種を含む分類群であることから、遺構周辺の草地に生育していたものに由来すると思われる。また、植物珪酸体では、わずかながらもイネ属が検出された。この点を考慮すれば、水場遺構周辺あるいは遺構内に何らかの形で稲作に関連したイネ属の植物体が存在した可能性がある。さらに、タケ亜科やススキ属、イチゴツナギ亜科などのイネ科植物が周辺で生育していた可能性がある。

(2) 埋没谷内黒色層形成時の環境

埋没谷内黒色層のNo. 1、2、3、5、6は、無化石であったことから珪藻の生態的特徴に基づいて谷内の堆積環境を検討することは困難である。石灰岩台地上の腐植質土壌の珪藻分析は、普天間飛行場基地内の北東側に位置した野嵩タマタ原遺跡や上原同原遺跡でも実施されているが、今回と同様にほとんど産出しなかった(パリノ・サーヴェイ株式会社, 2006)。また、マージについてもキャンプ瑞慶覧遺跡で実施されているが、無化石であった。化石が産出しなかった理由は、谷が長期間水没する環境ではなく、珪藻の生育には不適當であったことと、珪藻が生育したとしても湿潤亜熱帯雨林気候の下では過酷な脱珪酸作用のために微細な珪酸質からなる珪藻化石は容易に溶解してしまったと考えられる。

同様に花粉化石もほとんどあるいは全く検出されない。花粉化石・シダ類孢子の産出状況が悪い場合、元々取り込まれる花粉量が少なかった、あるいは取り込まれた花粉が消失した、という2つの可能性があげられる。一般的に花粉やシダ類孢子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている(中村, 1967; 徳永・山内, 1971; 三宅・中越, 1998など)。おそらく、好氣的環境下にあり、堆積後の経年変化により花粉やシダ類孢子が分解・消失したことが想定される。

植物珪酸体の産状からは、No. 6～3の層位では生育していたイネ科植物の特定に至らないが、No. 2の層位ではタケ亜科やススキ属、No. 1の層位ではタケ亜科、ススキ属、イチゴツナギ亜科の生育がうかがえる。

なお、現地調査所見から、本地点では耕作の可能性が指摘されている。No. 2から下位での植物珪酸体の産状からは、耕作のあった可能性を積極的に支持することは難しい。ただし、No. 1ではイネ属の機動細胞珪酸体が見られ、この層位が稲作に関連する層であった可能性はある。また、No. 3～No. 1では有機炭素量および腐植含量が下位に比べて多い傾向が得られており、このことも耕作に関連する可能性はある。しかし、全リン酸量や可給態リン酸量は下位の試料に多い傾向があり、耕作のあった層位は現時点では判然としない。

(3) 各種遺構の年代・用途・機能について

1) ピット

覆土中から抽出された炭化材の放射性炭素年代からは、較正された暦年で10世紀初頭から11世紀前半頃までの年代が得られている。現時点では、炭化材とピットとの関係に不明な点が多いことから、この年代をそのままピットの年代とはできないが、今後の周辺遺構における参考資料になると言える。

珪藻、花粉、植物珪酸体の各微化石の産状は不良であり、微化石の産状からは、ピットの性格・用途推定に関する情報は得られなかった。ピットの珪藻分析はキャンプ瑞慶覧遺跡で実施されているほか、野嵩タマタ原遺跡でも実施されているが、今回と同様に無化石であった(パリノ・サーヴェイ株式会社, 2006)。無化石の理由は、これまでの報告で述べられているように、脱珪酸作用のために溶解してしまったと考えられる。

なお、土壌の理化学性や元素組成および薄片観察で認められた砂粒組成やその粒径組成などは、埋没谷内黒色層に近似することから、ピットの覆土は、周囲の土壌に由来し、特定の成分の付加した痕跡は認められない。

2) 窯跡

a) 年代について

覆土中から抽出された炭化材の放射性炭素年代からは、較正された暦年で17世紀後半から現代までに至る年代が示された。また、炭化材の樹種である複雑管束亜属は、沖縄本島ではリュウキュウマツのみが分布していることから、今回の試料もリュウキュウマツの可能性が高い。リュウキュウマツは、河畔・海岸などの林縁部や伐採跡の二次林に生育し、木材は比較的強度・保存性が高いが、シロアリには弱い。また、松脂を多く含み、高い火力を得られることから、窯業等の燃料材として利用されることがある。今回の結果から、本遺跡でも窯の燃料材として利用されたことが推定される。したがって、上述した炭化材の年代は、窯の操業年代を示唆している可能性があると考えられる。

一方、窯跡壁面の焼土から得られた考古地磁気年代は、焼土の最終被熱年代として西暦1700年頃の年代が推定された。この結果と上述した燃料材の可能性が高いとされた炭化材からの年代も考慮すれば、窯跡の操業年代としては18世紀頃の年代を推定することができる。

b) 周辺環境について

珪藻化石の産状では、*Amphora montana*、*Luticola mutica*、*Hantzschia amphioxys*等の耐乾性の高い陸生珪藻A群が優占したことで特徴付けられた。これらの内、後者の2種は、土壤表面に生育する土壤珪藻としても一般的なもの(Patrick, 1977、伊藤・堀内, 1991)である。また、前者の*Amphora montana*は、コケに付着して生育することが一般的な種である(伊藤・堀内, 1991)。よって、窯跡に使用された土壤は、コケが生育するような湿り気のある環境で堆積したものが使用されたと考えられる。

一方、植物珪酸体の産状からは、ススキ属の植物体が燃やされた後の灰の存在が示唆される。この灰が燃料材に由来するものであれば、調査区周辺に生育するススキ属が燃料材のひとつとして利用されることが考えられる。また、土壤理化学性における有機炭素量・腐植含量およびリン酸含量・可給態リン酸量の多いことと元素組成におけるCaOとP₂O₅の割合が高いことなどは、燃料材として使用された植物体に由来する可能性がある。なお、花粉分析残渣中には、炭化あるいは分解の影響を受けた微細な植物片が多量に含まれていた。

c) 焼土の被熱について

窯跡壁面の焼土は、薄片観察により270～325℃程度以上の温度が推定され、熱残留磁気からは600℃以上の温度が推定された。両者の結果に矛盾はなく、すなわち最低でも600℃以上の高温を受けたことが示唆される。

3) 炉跡 (I 地区E-8)

焼土とされた試料は、薄片観察により270～325℃程度以上の温度による被熱が推定された。上述した窯跡焼土の例なども考慮すれば、この温度以上の高温を受けた可能性もあると考えられる。

4) 石組遺構

石組遺構から出土した炭化材は、放射性炭素年代測定により、較正された暦年で17世紀後半から現代までに至る年代が示された。この年代は、前述した水場遺構出土の葉の年代や燃料材の可能性のある窯跡出土の炭化材の年代とほぼ同様である。これらのことから、石組遺構もこれらの遺構とほぼ同時期に機能していた可能性があると考えられる。なお、年代測定試料とした炭化材は、針葉樹のマキ属であった。マキ属は、針葉樹としては重硬・緻密で強度・耐水性が高い材質を有し、シロアリにも強いことから、沖縄県内では建築部材として利用される。今回の試料は、炭化していることから、何らかの理由で火を受けていることが推定される。今後、樹種同定結果や出土状況も含めてマキ属の利用状況を検討する必要がある。

珪藻化石の産状では、*Luticola mutica*が優占し、*Hantzschia amphioxys*等を伴う陸生珪藻A群が優占したことで特徴付けられた。これらの2種は、前述したように土壤珪藻として一般的なものであ

2. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉碎による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。今回の試料のように比較的粗粒の砂粒を含み、低温焼成と考えられる土器の分析では、前者の方が、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。前者の方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。一方、蛍光X線分析は、胎土中の砂粒だけではなく、素地を作っている粘土も含めた特性を表しており、また、機器分析による数値データで表されることから、客観性、再現性がよいということがある。したがって、ここでは薄片観察法および蛍光X線分析を併用して胎土分析を行う。さらに本報告では、胎土の微小な形状について電子顕微鏡を用いた観察を行い、その特徴の有無を確認する。以下に各分析の手順を述べる。

(1) 薄片作製観察

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

データの呈示は、松田ほか(1999)が示した仕様に従う。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

(2) 蛍光X線分析

波長分散型蛍光X線装置を用いたガラスビード法による定量分析を行う。

a) 測定元素

測定元素はSiO₂、TiO₂、Al₂O₃、Fe₂O₃、MnO、MgO、CaO、Na₂O、K₂O、P₂O₅の10元素およびLOIである。

b) 装置

理学電機工業社製RIX1000(FP法のグループ定量プログラム)

c) 試料調製

試料を振動ミル(平工製作所製TI100; 10ml容タングステンカーバイト容器)で微粉碎し、105℃で4時間乾燥させた。この微粉碎試料についてガラスビードを以下の条件で作成した。

溶融装置; 自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビードサンプラー(3491A1)

溶剤及び希釈率; 融剤(ホウ酸リチウム)5.000g: 試料0.500g

剥離剤; LiI(溶融中1回投入)

溶融温度; 1200℃ 約7分

d) 測定条件

X線管; Cr(50Kv-50mA)

スペクトル; 全元素K α

分光結晶; LiF, PET, TAP, Ge

検出器; F-PC, SC

計数時間; PeaK40sec, Back20sec

(3) 電子顕微鏡観察

電子顕微鏡は、日本電子株式会社製のJCM-5700を使用した。電子顕微鏡観察にあたっては、試料よ

り小片を採取し、破断面を作成した。破断面は、できるだけ広い面積を観察できるように作成した。破断面の蒸着は行っていない。写真撮影では、なるべく特徴ある場所を選んで撮影した。

3. 結果

(1) 薄片作製鑑定

結果を第42表、第115図～第122図に示す。砂粒の種類構成をみると、互いに共通した種類とその量比を有する試料が認められ、複数のグループに分けることができる。ここでは以下に示すA～E類までの5種類の分類を見だした。

A類: 鉍物片は、石英が多く、少量の斜長石を伴い、少量または微量の緑廉石と微量の白雲母や黒雲母を含む。岩石片では多結晶石英が多く、黒雲母千枚岩やホルンフェルスおよび粘板岩の変成岩類も比較的多く含まれ、少量の脈石英を伴う。粘板岩は白雲母含有の珪質粘板岩であり、脈石英は千枚岩や粘板岩起源と考えられる。試料によってはチャートや頁岩、砂岩の堆積岩類も微量または少量含まれ、緑色岩も微量含まれる。これに分類される試料は、今回の試料の中で最も多く、試料番号2～5、12～17の10点である。

B類: 鉍物片は石英と斜長石が同量程度に多く、他に微量の斜方輝石、単斜輝石、角閃石、不透明鉍物が含まれる。斜長石は、清澄な結晶であり、火山岩あるいは火砕岩由来と考えられる。岩石片は多結晶石英のほかに流紋岩・デイサイト、安山岩および脈石英が少量含まれ、微量のチャートや砂岩、ホルンフェルスなども含まれる。これに分類される試料は、試料番号1の1点のみである。

C類: 鉍物片は石英が非常に多く、他には微量の斜長石、緑廉石、不透明鉍物を含むのみである。岩石片は多結晶石英が多く、他には少量の脈石英を伴うのみである。これに分類される試料は、試料番号11の1点のみである。

D類: 鉍物片は全体的に少量であるが、その中では石英が比較的多く、他には微量の斜長石、緑廉石、黒雲母などが含まれる。岩石片は多結晶石英や脈石英などが微量含まれるのみであるが、碎屑片として少量の火山ガラスと多量の火山ガラス質粘土塊を含む。火山ガラスは平板状を呈するいわゆるバブル型であり、火山ガラス質粘土塊は多量のバブル型火山ガラスを包含している。多量のバブル型火山ガラスの中には褐色を呈するものも少量含まれている。これに分類される試料は、試料番号18、19の2点である。

E類: 砂粒自体が非常に少ないことが特徴である。鉍物片は石英や斜長石が認められ、岩石片はチャートなどの堆積岩類が含まれる。これに分類される試料は、今回の試料ではA類に次いで多く、試料番号6～10、20、21の7点である。

碎屑物・基質・孔隙の割合で、碎屑物の量比に着目すると、15～20%前後の値を示す試料と10%前後の試料、および5%未満という試料とに3分できる。ここでは順にⅠ、Ⅱ、Ⅲ類とする。この分類は、上述した砂粒の種類構成による分類とほぼ整合しており、Ⅰ類の試料はA類とB類およびC類の試料に相当し、Ⅱ類はD類、Ⅲ類はE類に相当する。

砂粒全体の粒径組成では、試料によってモードとなる粒径が異なっている。ここでは、粒径組成の粗い順に以下の1～6類までを設定することができた。

1類: 粗粒砂をモードとし、それに次いで中粒砂、細粒砂も同程度に高い割合を示す。試料番号12がこれに分類される。

2類: 粗粒砂をモードとするが、極細粒砂または粗粒シルトに第二のピークが認められる。試料番号5、14、18、19の4点がこれに分類される。

3類: 中粒砂をモードとし、それに次いで粗粒砂も同程度に多く、さらに粗粒シルトに第二のピークが認められる。試料番号13がこれに分類される。

4類: 中粒砂をモードとする山形のヒストグラムを示す。試料番号1～4、11、15の6点がこれに分

第42表 胎土薄片観察結果(1)

試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成																				合計										
		鉱物片										岩石片											その他									
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩	黒雲母千枚岩		ホルンフェルス	粘板岩	脈石英	緑色岩	変質岩	珪化岩	火山ガラス	火山ガラス質粘土塊	粘土塊	海綿骨針
1	細礫																															0
	極粗粒砂	1		1																				2								4
	粗粒砂	6		12	1																	1		1	1							22
	中粒砂	19		16	4	1	1							2	1	5							3		1						53	
	細粒砂	17		9		3										2	1														34	
	極細粒砂	3		3	1																										8	
	粗粒シルト	2		1																											3	
	中粒シルト																															0
	基質																															514
	孔隙																															45
2	細礫																														3	
	極粗粒砂	1																														1
	粗粒砂	5							1							4				3	1	3	3								21	
	中粒砂	3		2				2	1							10				3	1	6	6		1						35	
	細粒砂	12														2							2								19	
	極細粒砂	6		3																											9	
	粗粒シルト	5																													6	
	中粒シルト	3																													3	
基質																															544	
孔隙																															19	
3	細礫																														0	
	極粗粒砂																															3
	粗粒砂	5		1					2							3					5	1	1	4	2	1					26	
	中粒砂	5		2					1							10					5	1	3	5		1					33	
	細粒砂	10		8												6					1	1	3								30	
	極細粒砂	14														1															16	
	粗粒シルト	7																													8	
	中粒シルト	1																													1	
基質																															565	
孔隙																															16	
4	細礫																														0	
	極粗粒砂	1																														8
	粗粒砂	9																														22
	中粒砂	11		1																												50
	細粒砂	13		1	2																											34
	極細粒砂	11		4																												16
	粗粒シルト	18		5																												29
中粒シルト	6																														6	
基質																																729
孔隙																																11
5	細礫																														0	
	極粗粒砂																															8
	粗粒砂	5																														47
	中粒砂	5		4																												32
	細粒砂	4		1																												10
	極細粒砂	8		1																												12
	粗粒シルト	21		2																												36
中粒シルト	5																														5	
基質																																640
孔隙																																21

第42表 胎土薄片観察結果(2)

試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成																				合計												
		鉱物片										岩石片											その他											
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩	黒雲母千枚岩		ホルンフェルス	粘板岩	脈石英	緑色岩	変質岩	珪化岩	火山ガラス	火山ガラス質粘土塊	粘土塊	海綿骨針	植物珪酸体	
6	細礫																																	0
	極粗粒砂																																	0
	粗粒砂																																	0
	中粒砂																																	0
	細粒砂																																	0
	極細粒砂	1		1																													4	6
	粗粒シルト	4		2																													4	10
	中粒シルト																																	0
	基質																											665						
	孔隙																											98						
7	細礫																																0	
	極粗粒砂																																	0
	粗粒砂																																	0
	中粒砂																																	0
	細粒砂	3															1																4	
	極細粒砂	10		1							1																						12	
	粗粒シルト	5		2																													7	
	中粒シルト	1																																1
	基質																											563						
	孔隙																											56						
8	細礫																																0	
	極粗粒砂																																	0
	粗粒砂																																	0
	中粒砂																																	0
	細粒砂																																	0
	極細粒砂	3		1							1																							5
	粗粒シルト	4		2																														6
	中粒シルト																																	0
	基質																											520						
	孔隙																											116						
9	細礫																																0	
	極粗粒砂																																	0
	粗粒砂																																	0
	中粒砂																																	0
	細粒砂	3									1													2										7
	極細粒砂	11		1							2	4																						18
	粗粒シルト	7									1																							8
	中粒シルト	1																																1
	基質																											624						
	孔隙																											127						
10	細礫																																0	
	極粗粒砂																																	0
	粗粒砂																																	0
	中粒砂																1																	1
	細粒砂																																	1
	極細粒砂	4		2																								1						8
	粗粒シルト	2		1																														4
	中粒シルト																																	0
	基質																											532						
	孔隙																											59						

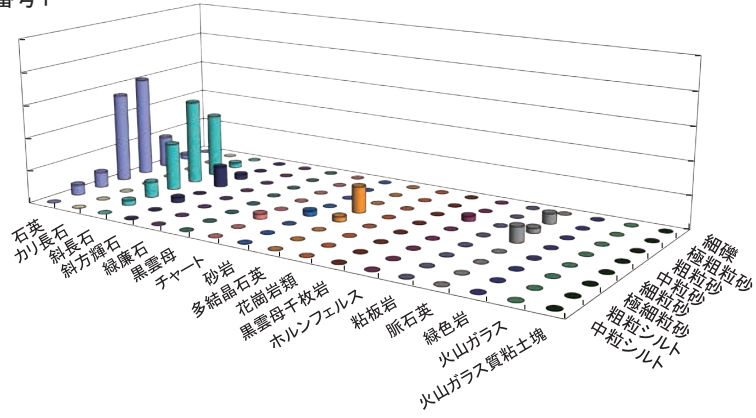
第42表 胎土薄片観察結果(3)

試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成																				合計										
		鉱物片										岩石片											その他									
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩	黒雲母千枚岩		ホルンフェルス	粘板岩	脈石英	緑色岩	変質岩	珪化岩	火山ガラス	火山ガラス質粘土塊	粘土塊	海綿骨針
11	細礫																															0
	極粗粒砂	2														3							2								7	
	粗粒砂	13														12							7								32	
	中粒砂	65	1							1						17							3								87	
	細粒砂	46	2							1						10															59	
	極細粒砂	8																													8	
	粗粒シルト	4	1				1																								6	
	中粒シルト	1																													1	
基質																															689	
孔隙																															41	
12	細礫																														0	
	極粗粒砂	1													1			3				1									6	
	粗粒砂	8		1											12			10	4	10	3									48		
	中粒砂	7	2	1					3						13			6	2	11			1							46		
	細粒砂	16		4					3	1					4			5		7										40		
	極細粒砂	8		4														1												13		
	粗粒シルト	8		1			2																							11		
	中粒シルト	3																												3		
基質																														690		
孔隙																														28		
13	細礫																													0		
	極粗粒砂															1			1			1	2			1				6		
	粗粒砂	5													5		1	5	7	3			2						28			
	中粒砂	4	1	2					1						7		8	1	1	2	2	1		1					31			
	細粒砂	1	1	2							1				4					2									11			
	極細粒砂	7		5			2	2																					16			
	粗粒シルト	12		4			8																						24			
	中粒シルト	1		1																									2			
基質																													574			
孔隙																													11			
14	細礫																												0			
	極粗粒砂															1						4				1			6			
	粗粒砂	3		1											2	1	3		4	2	18	2	1					37				
	中粒砂	4		3					1						1		4	1	1	1	13							29				
	細粒砂	5		2											5		4		2		4							17				
	極細粒砂	3		3		1	1									1												9				
	粗粒シルト	12		6			3																					21				
	中粒シルト	6																										6				
基質																													555			
孔隙																													10			
15	細礫																												0			
	極粗粒砂																				1								1			
	粗粒砂	2														6			1		8							17				
	中粒砂	6	1	3				1	1						21			2	4	18	1							58				
	細粒砂	10		4					1						7			2	1	14								39				
	極細粒砂	6		2												3						2						13				
	粗粒シルト	2		1							1																	4				
	中粒シルト																											0				
基質																													647			
孔隙																													18			

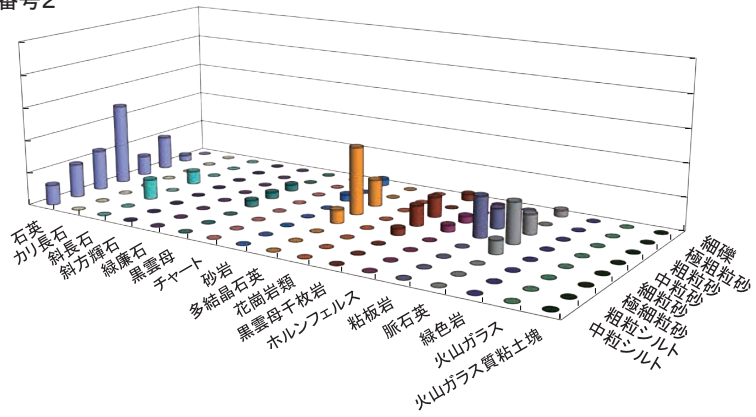
第42表 胎土薄片観察結果(4)

試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成																							合計										
		鉱物片									岩石片										その他														
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩	黒雲母千枚岩	ホルンフェルス	粘板岩	脈石英		綠色岩	変質岩	珪化岩	火山ガラス	火山ガラス質粘土塊	粘土塊	海綿骨針	植物珪酸体		
16	細礫																																	0	
	極粗粒砂																				1	1	2											4	
	粗粒砂	5						1	1				1				4				2	1	11	2	1								29		
	中粒砂	3						1	1							8				1	5	16	2										37		
	細粒砂	7	1	3			2	3	1	1						7				2		9	3										39		
	極細粒砂	10		2			1									5							1										19		
	粗粒シルト	5		1																													6		
	中粒シルト	1																															1		
	基質																																	728	
孔隙																																	11		
17	細礫																																0		
	極粗粒砂												1			4							2										7		
	粗粒砂	3										2			9				5	5	7	6				1							38		
	中粒砂	13	7					1				4			17			1	2	4	4	1											54		
	細粒砂	24	7				2	2	1			1			15						6		1										59		
	極細粒砂	16	3				3	1							3																		26		
	粗粒シルト	11	1				3																										15		
	中粒シルト	1																															1		
	基質																																	780	
孔隙																																	17		
18	細礫																																4		
	極粗粒砂																																	13	
	粗粒砂	2						3							2																		27		
	中粒砂	3													2													1	11				17		
	細粒砂	1										1																	1	1			4		
	極細粒砂	9					2								1																		14		
	粗粒シルト	7	1				4																										12		
	中粒シルト																																0		
	基質																																	642	
孔隙																																	18		
19	細礫																						1										1		
	極粗粒砂																							1										8	
	粗粒砂															2	1																	20	
	中粒砂	3	1					2							2																			12	
	細粒砂	2																																6	
	極細粒砂	3																																7	
	粗粒シルト	9	1																															11	
	中粒シルト	4																																4	
	基質																																		723
孔隙																																		58	
20	細礫																																	0	
	極粗粒砂																																		0
	粗粒砂																																		0
	中粒砂																																		0
	細粒砂																																		1
	極細粒砂	6																																8	
	粗粒シルト	10																																	12
	中粒シルト	6																																	6
	基質																																		574
孔隙																																		95	
21	細礫																																	0	
	極粗粒砂																																		1
	粗粒砂																																		0
	中粒砂																																		0
	細粒砂																																		1
	極細粒砂	1																																	3
	粗粒シルト	2																																	2
	中粒シルト																																		0
	基質																																		426
孔隙																																		129	

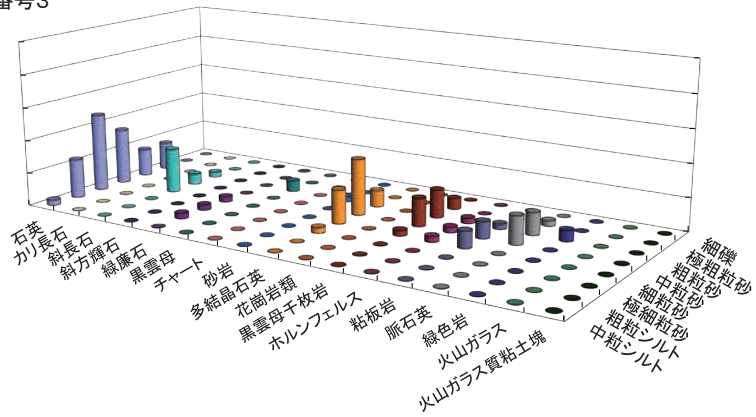
試料番号1



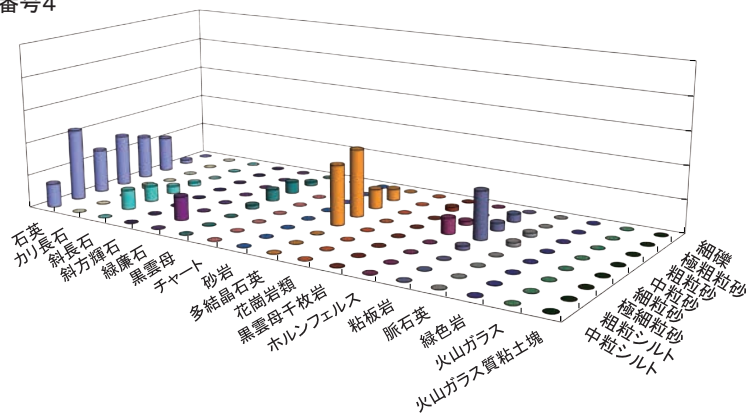
試料番号2



試料番号3

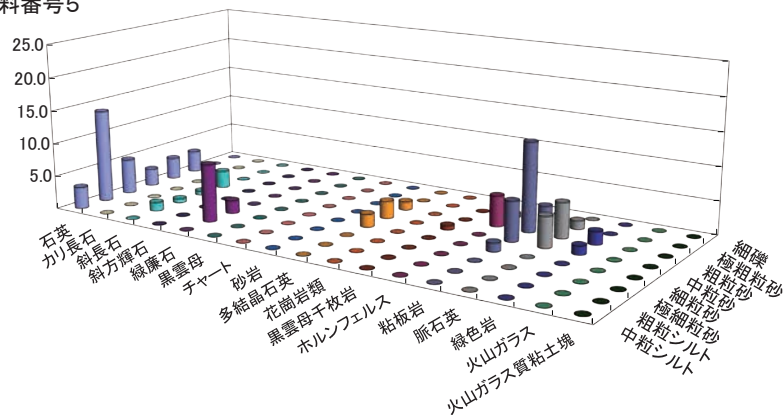


試料番号4

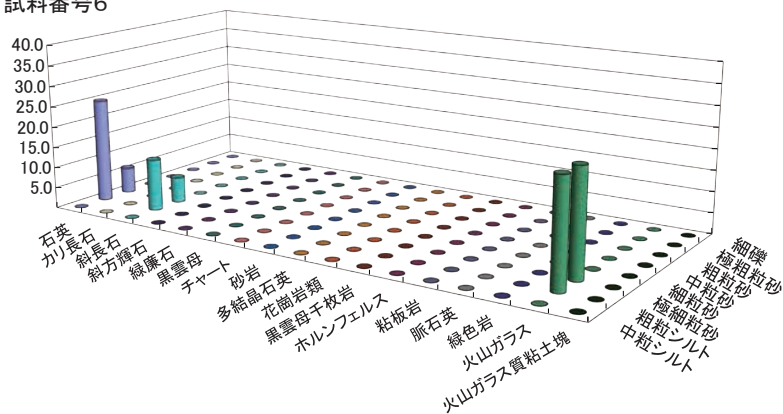


第 115 図 胎土の各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 (%) (1)

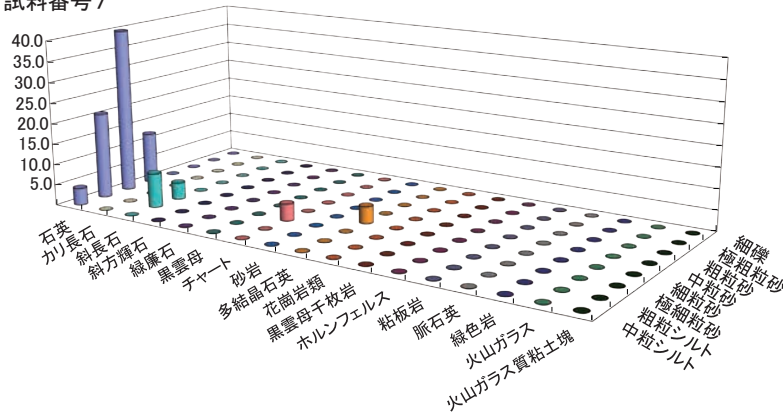
試料番号5



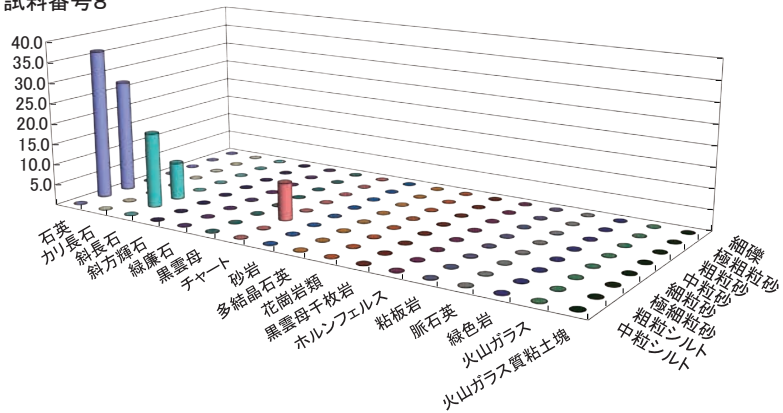
試料番号6



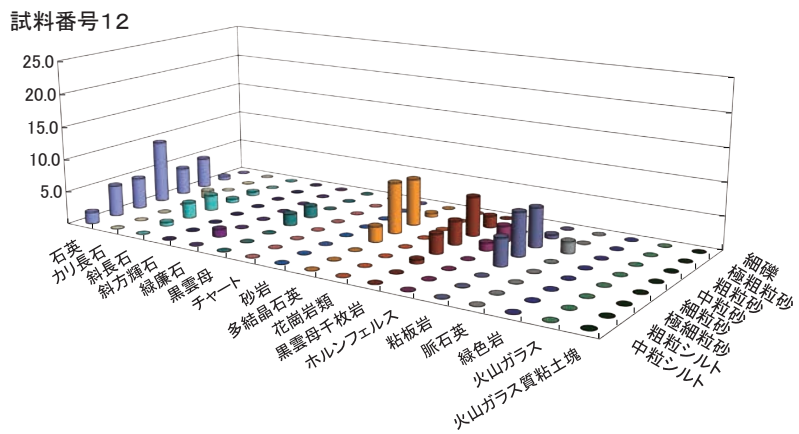
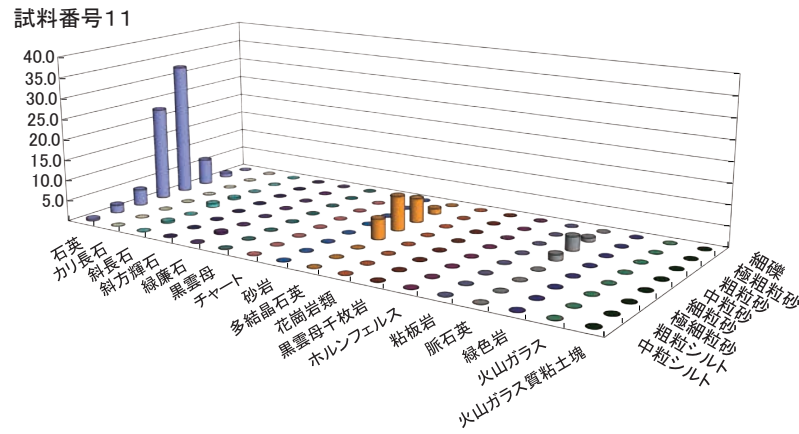
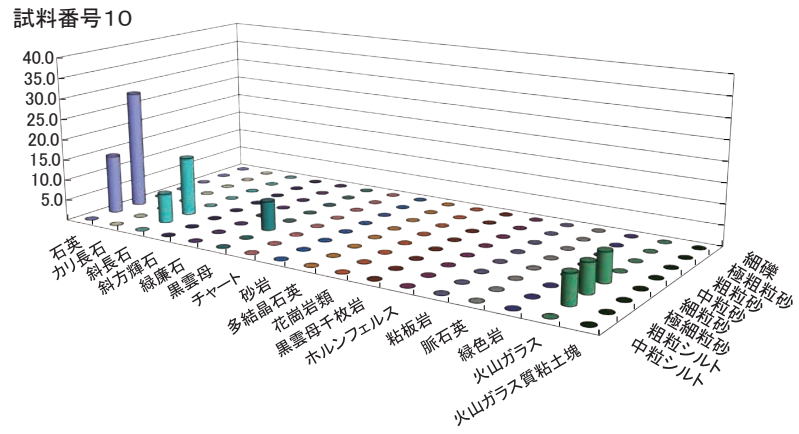
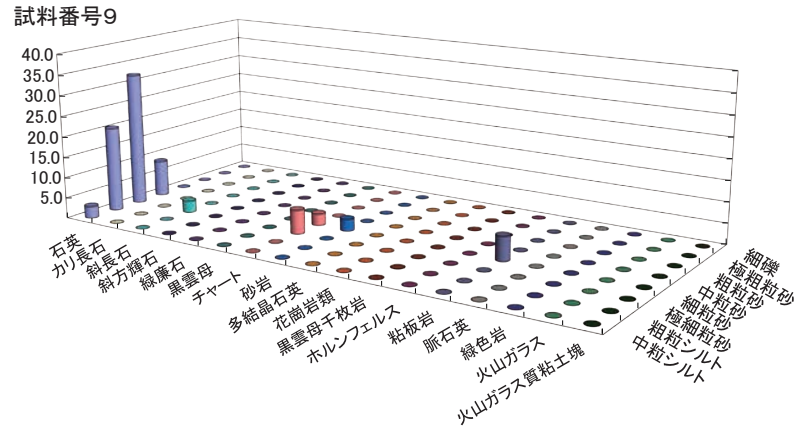
試料番号7



試料番号8

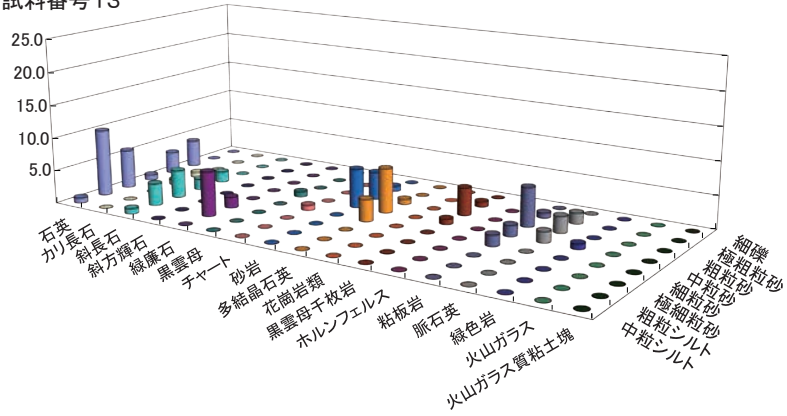


第 116 図 胎土の各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 (%) (2)

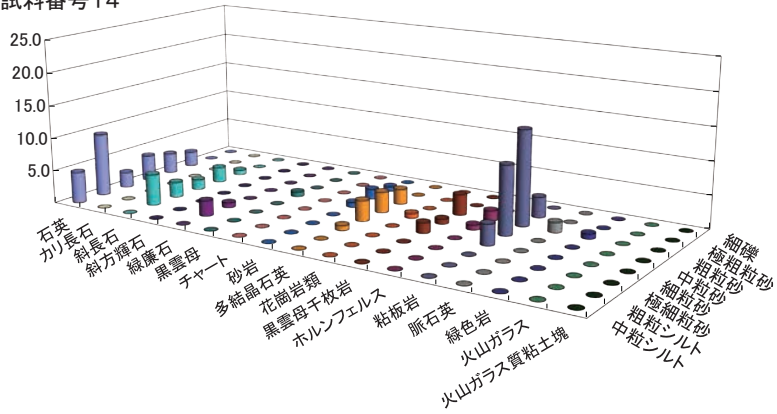


第 117 図 胎土の各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 (%) (3)

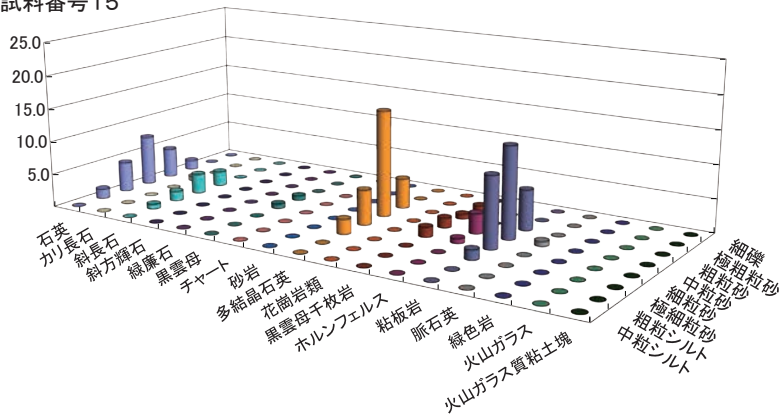
試料番号13



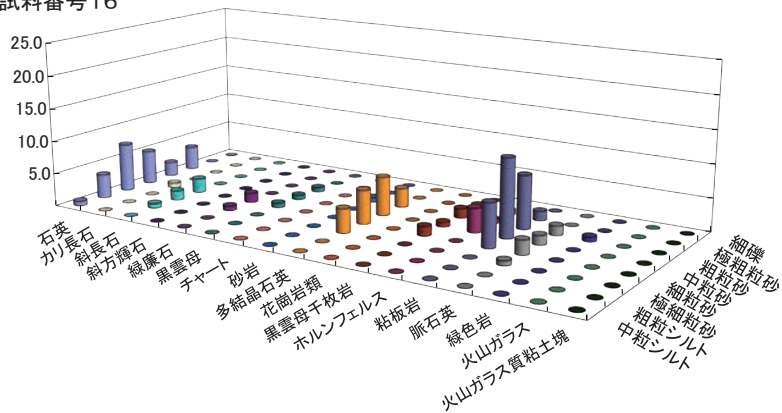
試料番号14



試料番号15

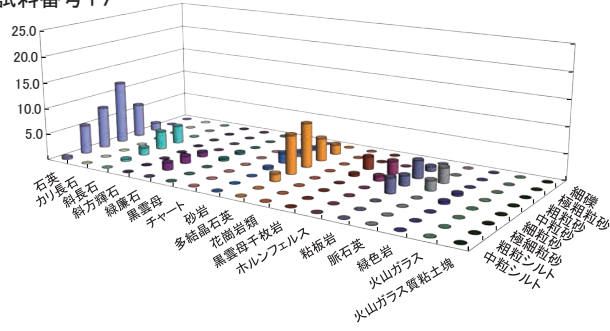


試料番号16

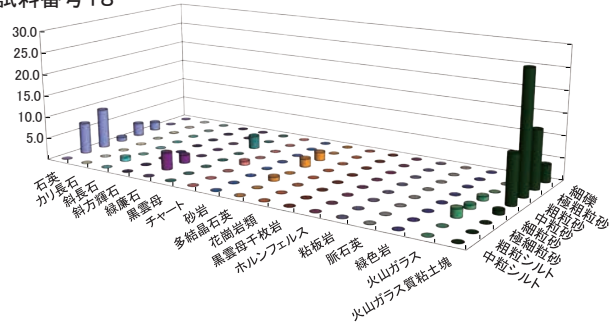


第 118 図 胎土の各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 (%) (4)

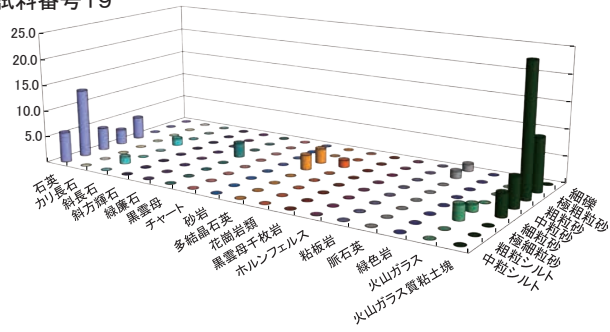
試料番号17



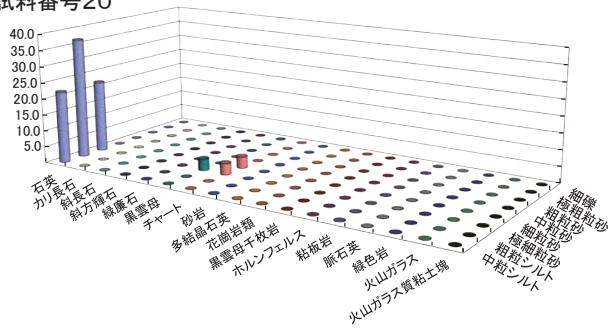
試料番号18



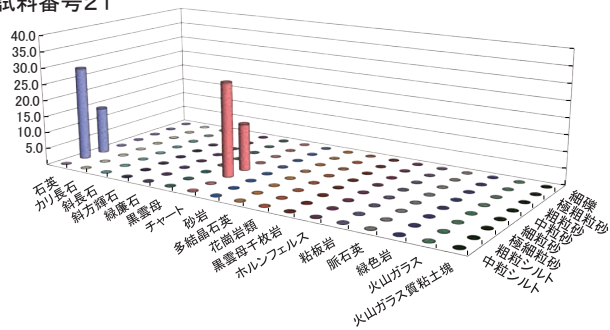
試料番号19



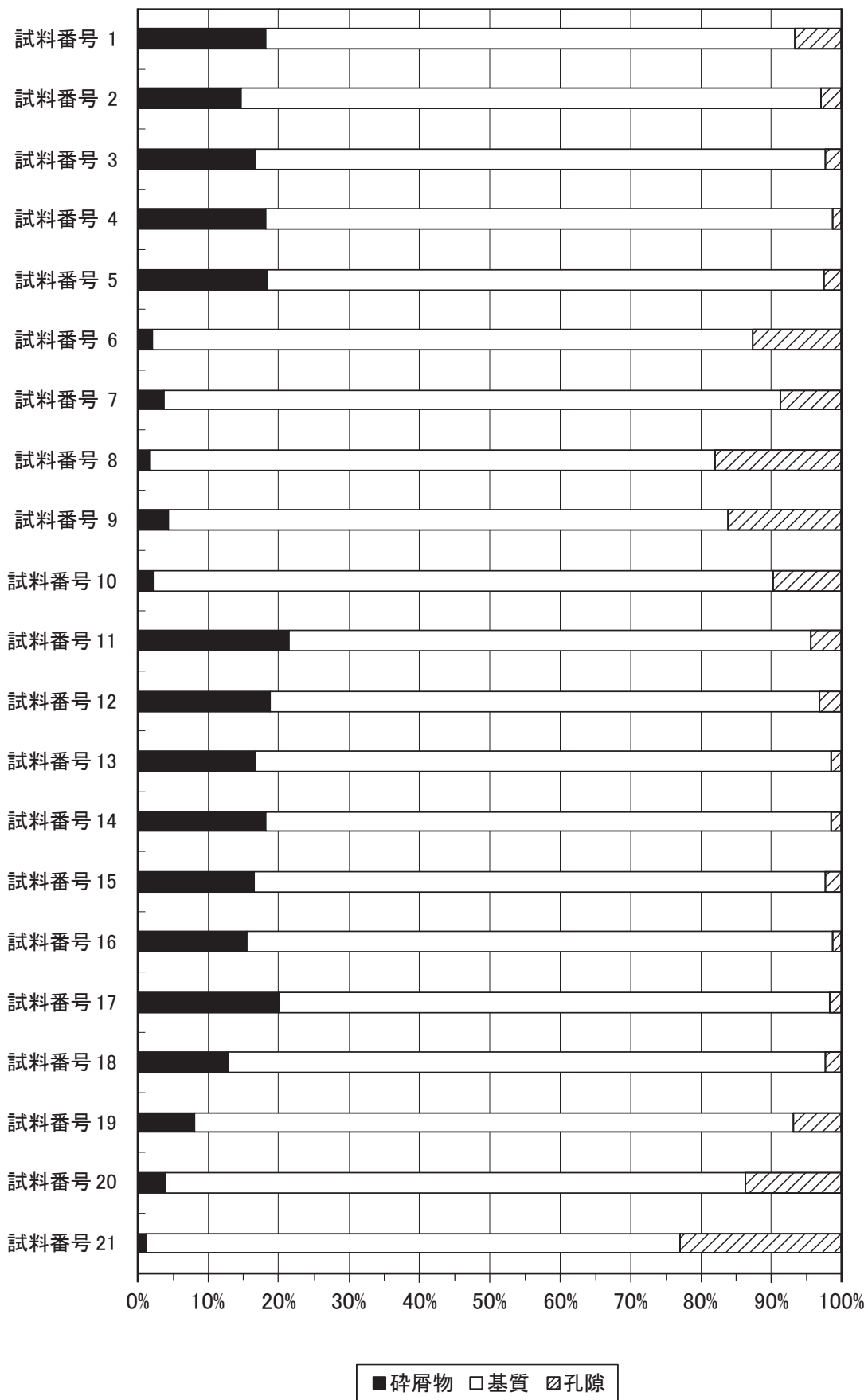
試料番号20



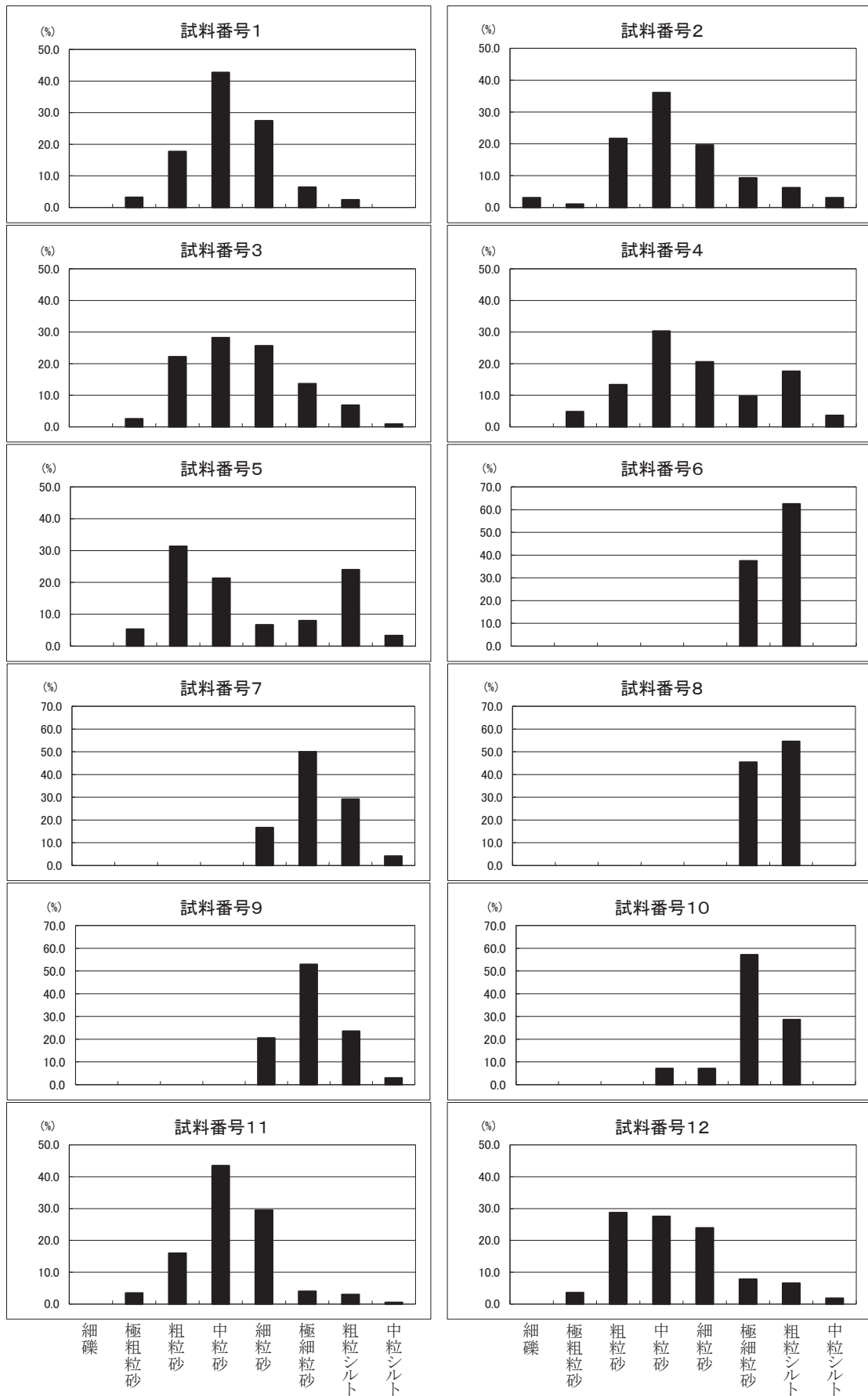
試料番号21



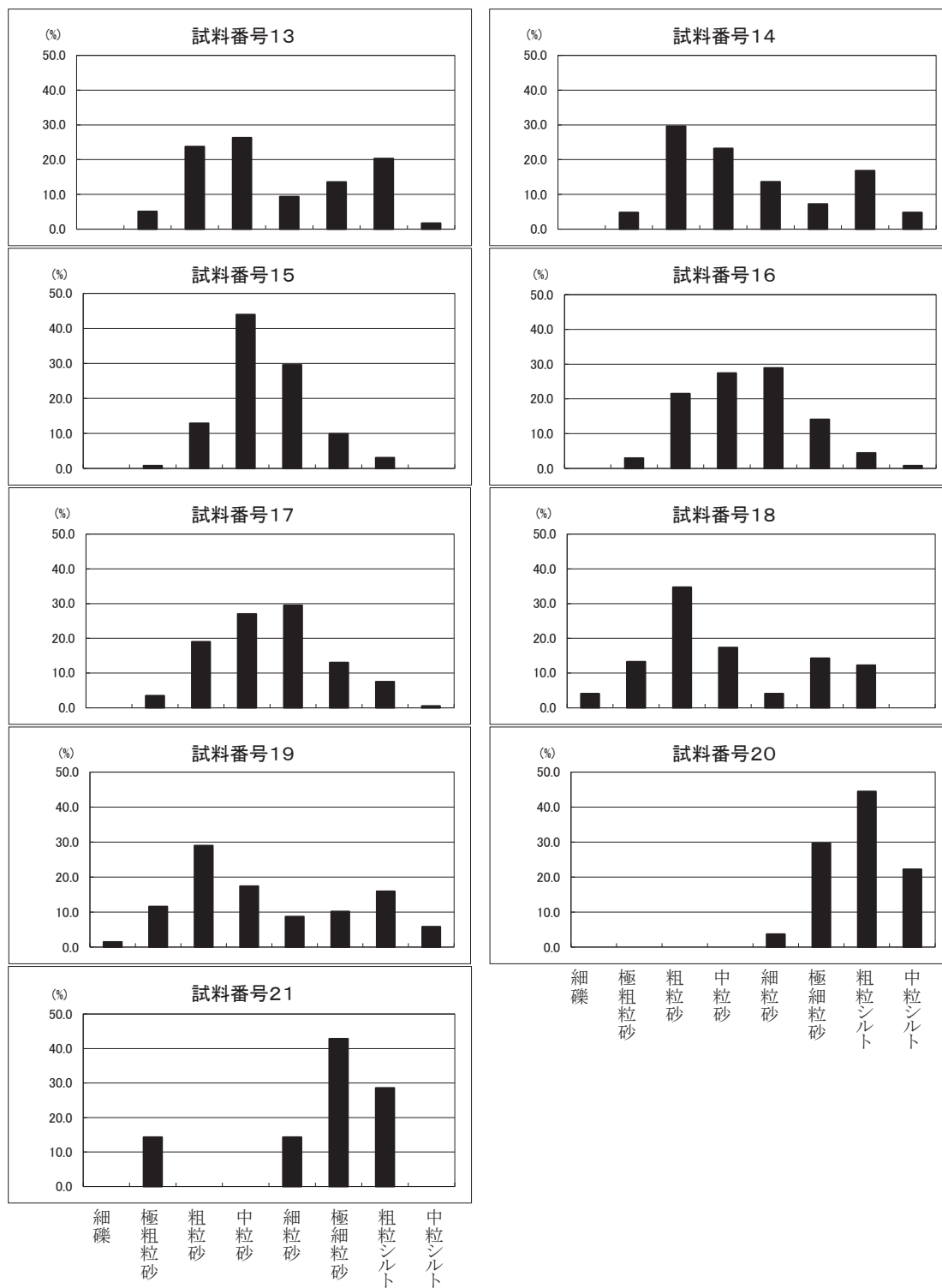
第 119 図 胎土の各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(%) (5)



第 120 図 胎土の碎屑物・基質・孔隙の割合



第 121 図 胎土中の砂の粒径組成 (1)



第 122 図 胎土中の砂の粒径組成 (2)

類される。

5類:細粒砂をモードとする山形のヒストグラムを示す。試料番号15、16の2点がこれに分類される。

6類:極細粒砂または粗粒シルトをモードとする。上述したE類およびIII類の試料と一致する。

以上述べた、薄片観察による胎土分類結果を一覧として、第41表に併記する。

(2) 蛍光X線分析

結果を第43表に示す。ここでは試料間の組成を比較する方法として、以下に示す元素を選択し、それらの値を縦軸・横軸とした散布図を作成した(第123図)。

第43表 胎土蛍光X線分析結果(1)

試料番号	主要元素											合計 (%)
	SiO ₂ (%)	TiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	MnO (%)	MgO (%)	CaO (%)	Na ₂ O (%)	K ₂ O (%)	P ₂ O ₅ (%)	Ig.loss (%)	
2	51.54	1.28	20.53	10.30	0.07	0.83	1.59	0.82	1.44	2.39	9.21	100.00
4	58.11	1.05	18.69	7.83	0.15	0.63	1.86	0.71	1.59	2.04	7.34	100.00
6	30.61	0.70	33.29	6.32	0.10	0.18	1.65	0.36	0.81	8.73	17.25	100.00
8	34.97	0.81	32.42	7.97	0.03	0.40	1.19	0.18	1.28	3.91	16.84	100.00
11	69.68	0.87	11.90	5.99	0.09	1.06	1.58	0.61	0.85	0.78	6.59	100.00
13	57.60	1.05	17.66	7.96	0.04	0.78	2.60	1.51	1.14	3.33	6.33	100.00
17	59.46	0.88	14.86	6.40	0.08	1.07	3.08	1.01	1.42	4.52	7.22	100.00
19	52.01	1.22	20.18	7.45	0.05	1.36	2.26	0.76	1.66	2.76	10.29	100.00
20	41.01	0.79	27.04	7.37	0.02	0.48	1.27	0.25	1.01	5.08	15.68	100.00
21	34.13	0.80	31.46	8.43	0.01	0.47	1.44	0.17	0.83	5.16	17.10	100.00

a) 化学組成中で最も主要な元素(SiO₂, Al₂O₃)

b) 粘土の母材を考える上で長石類(主にカリ長石、斜長石)の種類構成は重要である。このことから、指標として長石類の主要元素であるCaO、Na₂O、K₂Oの3者を選択し、長石全体におけるアルカリ長石およびカリ長石の割合を定性的に見る。実際には、長石類全体におけるアルカリ長石の割合(Na₂O+K₂O)/(CaO+Na₂O+K₂O)を横軸とし、アルカリ長石におけるカリ長石の割合K₂O/(Na₂O+K₂O)を縦軸とする。

c) 輝石類や黒雲母、角閃石など有色鉱物における主要な元素。この場合、指標としてこれらの有色鉱物の主要な元素のうち、TiO₂、Fe₂O₃、MgOを選択し、Fe₂O₃を分母としたTiO₂、MgOの割合を見る。

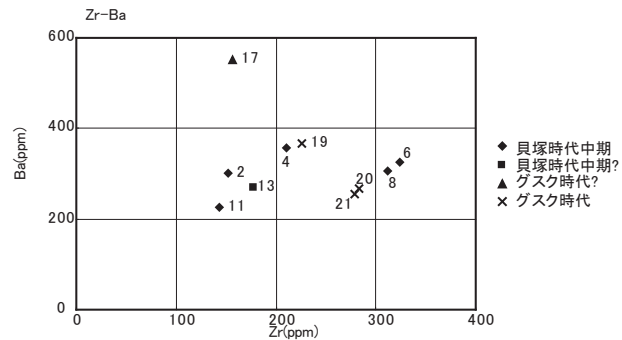
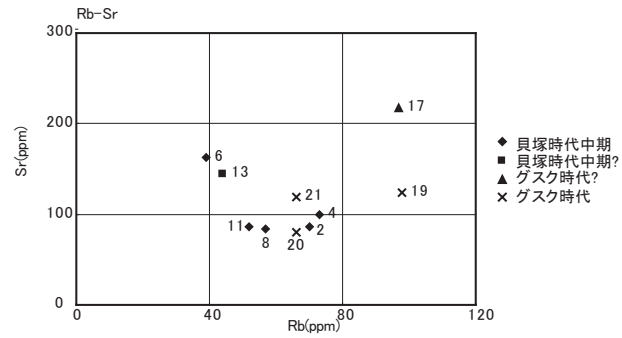
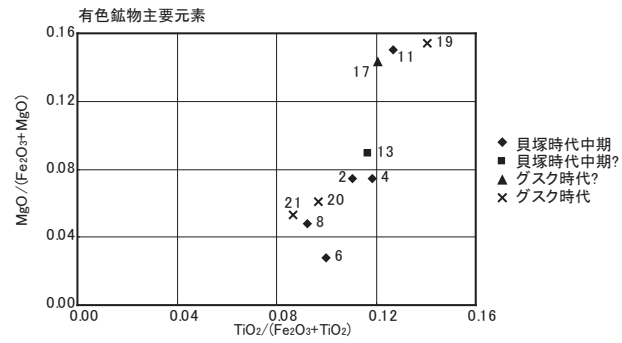
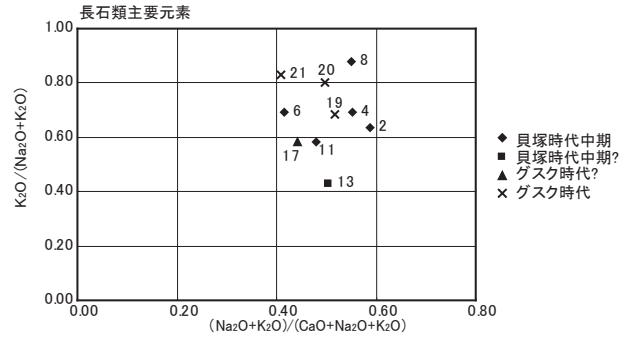
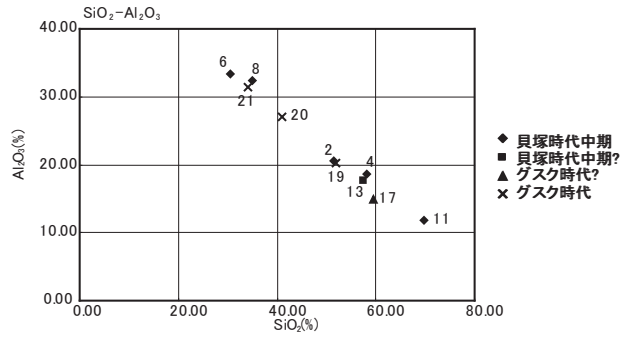
d) 各微量元素を選択する。組み合わせは、Rb-SrとZr-Baとする。

また、これらの散布図では、時代観ごとにそれぞれ異なる記号で示した。

作成した5つの散布図のうち、SiO₂-Al₂O₃散布図では、薄片観察による砂粒の種類構成の分類がよく反映されており、E類の試料番号6、8、20、21のグループがAl₂O₃の値が最も高く、SiO₂の値が最も低い。次いでA類の試料番号2、4、13、17とD類の試料番号19のグループがAl₂O₃の値が高く、SiO₂の値が低い。そしてC類の試料番号11がAl₂O₃の値が最も低く、SiO₂の値が最も高い。これらのグループは、他の散布図も合わせてみるとさらに細分される可能性がある。上述したE類のグループ4点では、有色鉱物主要元素散布図とRb-Sr散布図により、試料番号6が他の3点とはやや距離のあることが認められる。また、A類とD類のグループでは、有色鉱物主要元素散布図とRb-Sr散布図により、D類の試料番号19がA類の試料とは明瞭に区別され、さらにA類の試料の中でも、試料番号17は長石主要元素散布図以下の4図において他のA類の試料とは明瞭に区別され、試料番号13も長石類主

第43表 胎土蛍光X線分析結果(2)

試料番号	微量元素				
	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)	Ba (ppm)
2	70	86	34	152	301
4	73	99	30	211	357
6	39	163	24	324	325
8	57	84	19	312	307
11	52	86	25	143	227
13	44	144	30	177	270
17	97	218	24	156	551
19	98	124	29	226	368
20	66	80	25	283	268
21	66	119	64	279	255



第123図 胎土化学組成散布図

要元素散布図とRb-Sr散布図により、試料番号2および4とは距離のあることが認められる。

(3) 電子顕微鏡観察

各試料の電子顕微鏡像を図版97～106に示す。各試料ともに倍率は30倍から3000倍まで8段階の像を呈示する。いずれの試料も、土器破断面中の孔隙や細かな凹凸が表現されているが、特に明瞭な構造的特徴は捉えられない。ただし、貝塚時代中期の土器に比べてグスク時代の土器の方が、孔隙や凹凸の密度が細かく、より明瞭な傾向が窺える。

なお、薄片観察で認められた分類に対応するような特徴は特に認められないが、試料番号17には雲母片と考えられる板状の結晶が1000倍以上の像で観察され、試料番号19には火山ガラスと考えられる板状の碎屑物が200倍や500倍の像で観察される。

4. 考察

(1) 胎土の地域性

胎土中の砂粒における鉱物片および岩石片の種類構成は、胎土の材料となった砂や粘土などの堆積物が採取された場所の地質学的背景を示唆していると考えられる。今回の分析では、21点の試料の胎土から5種類の鉱物・岩石組成が得られたことから、それぞれ異なる地質学的背景を有する5つの地域で作られた土器が混在していると考えられる。以下に、鉱物・岩石組成の各分類の地質学的背景と沖縄島の地質との関係について述べる。なお、沖縄島の地質については、主に木崎編(1985)および日本の地質「九州地方」編集委員会(1992)などの記載を参照した。

A類は、変成岩類を比較的多く含むことが特徴である。沖縄本島では、中生代白亜紀から新生代古第三紀にかけて形成された名護層と呼ばれる、主に頁岩と千枚岩および緑色岩からなる地質が北部から中部の北西岸沿いに広く分布している。その南限は嘉手納付近であり、今回の調査区である瑞慶覧付近までは分布は認められていない。単純に考えれば、A類の胎土を有する土器は、名護層分布域すなわち嘉手納以北の地域からの搬入ということになる。しかし、瑞慶覧付近の地質記載では、隣接する桑江とその周辺域に国頭層と呼ばれる第四紀更新世の礫層が広く分布し、その礫種は下位の地層の地質すなわち名護層を反映して千枚岩や珪質岩などからなるとされている(氏家・兼子, 2006)。今回の分析結果を見る限りにおいては、貝塚時代中期もグスク時代も土器胎土の主体はA類であることを考慮すると、A類の変成岩類の由来は直接名護層に由来するのではなく、国頭層の礫に由来する可能性があると考えられる。その場合、A類の胎土を有する土器は、瑞慶覧付近の堆積物を材料として製作されたと考えることができる。

B類から推定される地質学的背景は、両輝石や角閃石を斑晶として包有する流紋岩やデイサイトおよび安山岩などの火山岩が主に分布する地域である。また、千枚岩も粘板岩も緑色岩も認められなかったことから、上述した名護層の分布域や国頭層の分布域に由来する可能性は低い。したがって、少なくとも瑞慶覧付近で製作された可能性は低く、搬入品である可能性が高い。さらに、沖縄本島においても火山岩が広く分布する地域はなく、本部半島や北部西岸に極めて限定的に分布する岩脈がある程度である。沖縄本島の周辺で見れば、粟国島、久米島、渡名喜島などに火山岩類が分布するが、いずれにしても現時点では、B類の地域性を特定することはできない。

C類については、認められた岩石片が多結晶石英と脈石英のみであることから、その背景となる地質は不明である。

D類の特徴は火山ガラス質粘土塊を多量に含むことである。火山ガラス質粘土塊は、バブル型火山ガラスの塊であることから、おそらく、九州に分布する巨大カルデラから噴出した広域テフラの降下堆積層に由来すると考えられる。このような堆積物は、琉球列島では例えば徳之島において始良Tn火山灰(AT:町田・新井, 1976)の厚い堆積層が認められている(成尾・桑水流, 2002)が、これまでのところ

沖縄本島では認められた例はない。したがって、D類の胎土の地域性も現時点では不明ではあるが、沖縄本島以外の可能性もあると考えられる。

E類は、砂粒自体が非常に少ないために、種類構成が不明瞭であり、したがって、その地域性も現時点では推定できない。ただし、E類とされた試料の中に、試料番号9では微量ながらも堆積岩類と粘板岩が認められていることから、A類と同様すなわち瑞慶覧周辺の地域性を有する可能性があると考えられる。

(2) 胎土と土器の時期との関連性について

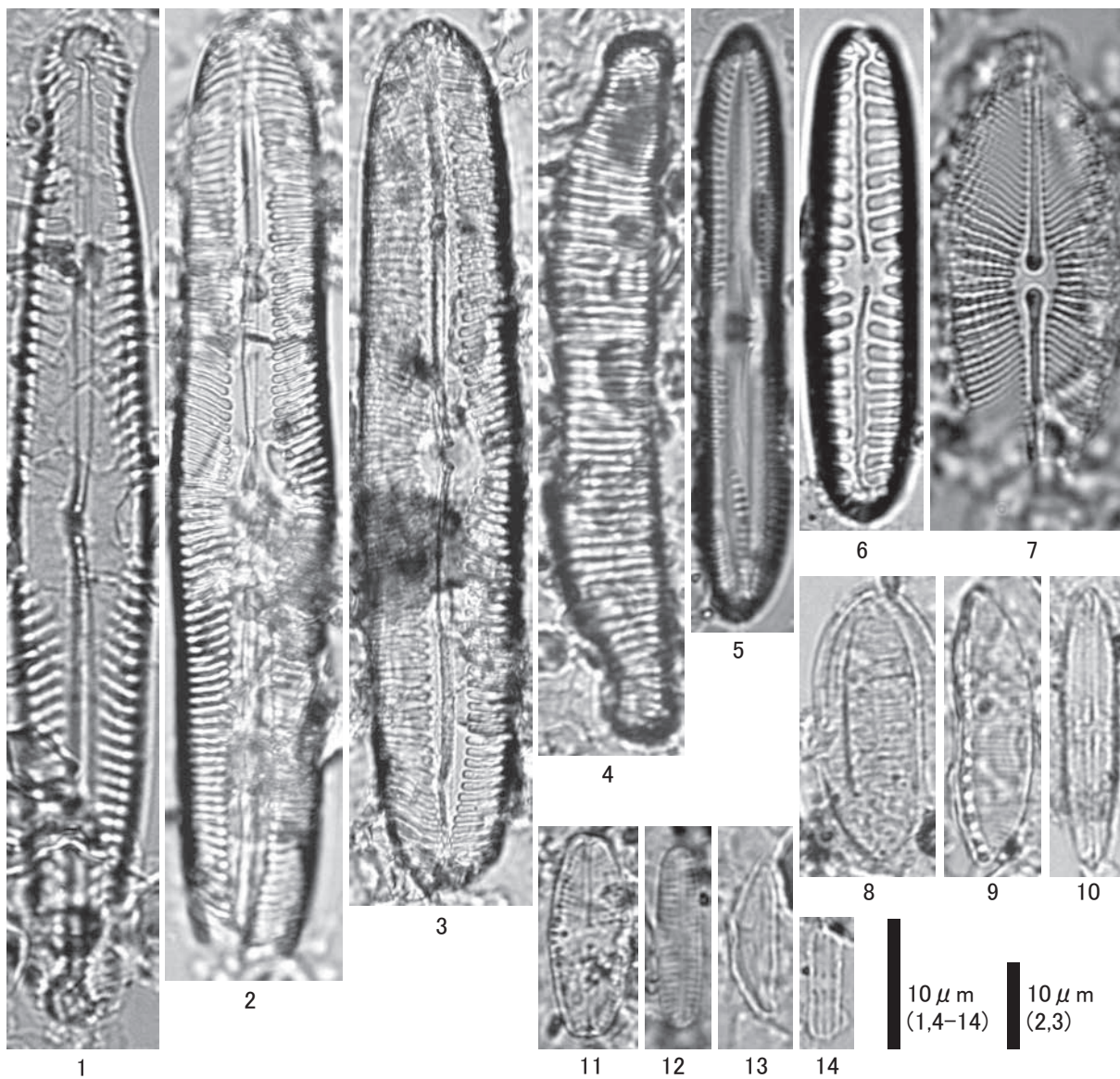
胎土の特性のうち、鉱物・岩石組成は、主体となるA類とE類が貝塚時代中期の土器とグスク時代の土器の両者に共通して多く認められることから、時期との対応関係は不明瞭である。B～D類は、いずれか一方の時期にしか認められていないが、試料数が少ないことから、その時期特有の胎土か否かは判断することはできない。碎屑物の量比についても、鉱物・岩石組成とほぼ同様の分類結果であるから、事情は同じである。

一方、粒径組成では、E類と6類は一致するものの、A類については、貝塚時代中期の土器の多くが4類であるのに対して、貝塚時代中期?とされた土器は1～3類にばらつき、グスク時代?とされた土器3点のうち、4類は1点のみで2点は5類であった。これらの結果から、土器の時期による胎土の違いは、砂粒の粒径組成に現れている可能性がある。今後の分析事例を蓄積することにより、検証することが可能であると考えられる。

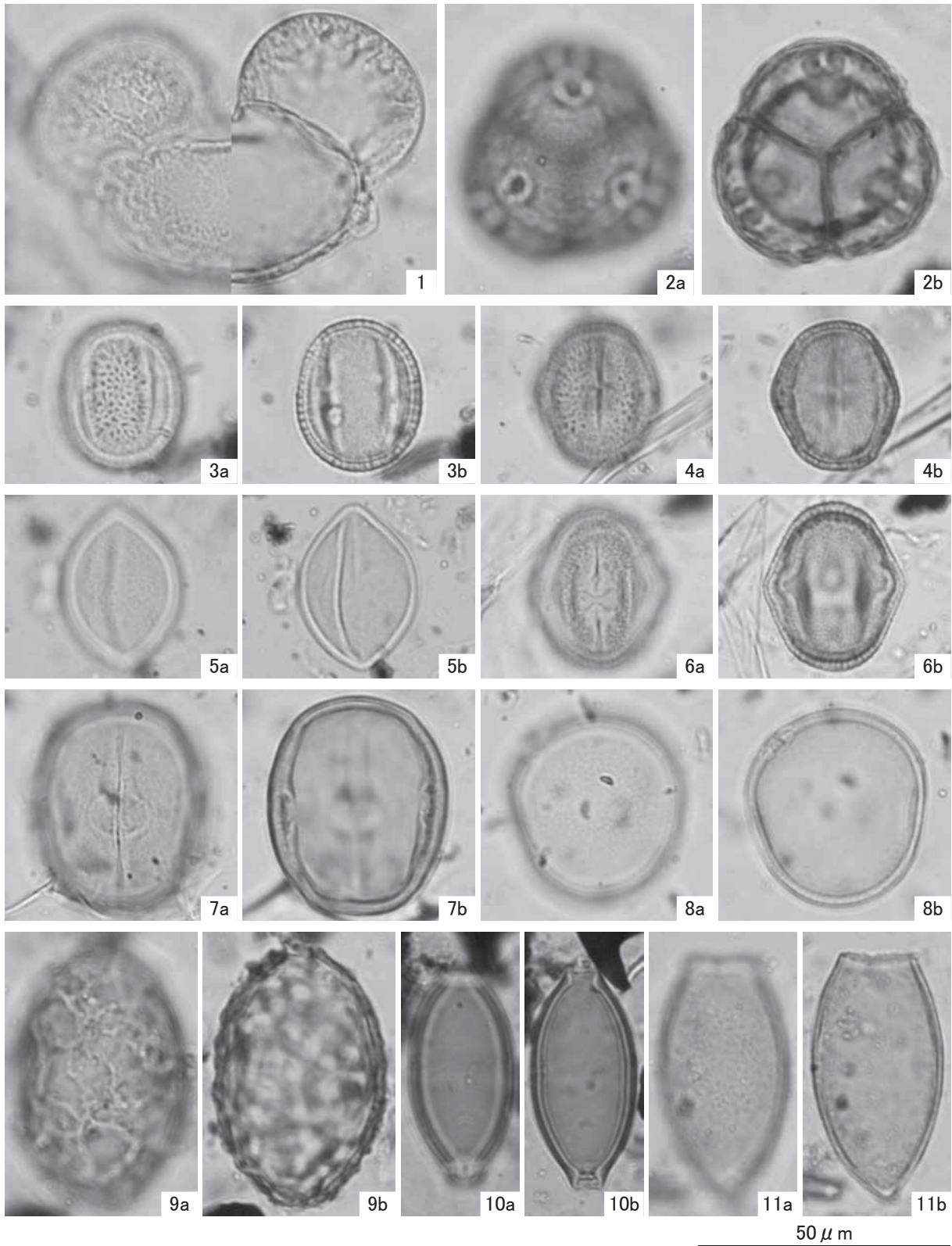
<引用文献>

- 安藤 一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.
- 原口 和夫・三友 清史・小林 弘, 1998, 埼玉の藻類 珪藻類. 埼玉県植物誌, 埼玉県教育委員会, 527-600.
- Hirooka, K., 1971, Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in south-west Japan, *Mem. Fac. Sci. Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral.*, 38, 167-207.
- Hirooka, K., 1983, Results from Japan, in *Geomagnetism of Baked Clays and Recent Sediments*, eds. Creer, K. M. et al., 150-157, Elsevier, Amsterdam.
- Hustedt, F., 1937-1939, *Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra*. Archiv für Hydrobiologie, Supplement, 15:131-177, 15:187-295, 15:393-506, 15:638-790, 16:1-155, 16:274-394.
- 伊藤 良永・堀内 誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, 23-45.
- 金原 正明・金原 正子・中村 亮仁, 1995a, 大宮坊跡(厠跡)における自然科学的分析. 史跡石動山環境整備事業報告Ⅱ, 石川県鹿島町教育委員会, 51-70.
- 金原 正明・金原 正子・中村 亮仁, 1995b, 川合遺跡八反田地区SE402・SE405における寄生虫卵・植物遺体分析, 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第63集 川合遺跡 八反田地区Ⅱ 本文編, 静岡県埋蔵文化財調査研究所, 341-354.
- 木崎 甲子郎編著, 1985, 琉球弧の地質誌. 沖縄タイムス社, 278p.
- 小林 弘・出井 雅彦・真山 茂樹・南雲 保・長田 啓五, 2006, 小林弘珪藻図鑑. 第1巻, 俣内田老鶴圃, 531p.
- 近藤 鍊三, 2004, 植物ケイ酸体研究. ペドロジスト, 48, 46-64.
- 小杉 正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- Krammer, K., 1992, *PINNULARIA. eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26*. J. CRAMER, 353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1986, *Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae*. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/1*. Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988, *Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae*. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/2*. Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991a, *Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae*. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/3*. Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991b, *Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnanthaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula(Lineolatae) und Gomphonema*. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/4*. Gustav Fischer Verlag, 248p.

- 黒崎 直・松井 章・金原 正明・金原 正子, 1993, 糞便堆積物の分析 —特に寄生虫卵分析について—. 日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集, 114-115. Lowe, R. L., 1974, *Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms*. 334p.
- In Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 町田 洋・新井 房夫, 1976, 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—. 科学, 46, 339-347.
- Maenaka, K., 1990, Archeomagnetic secular variation in Southwest Japan, *Rock Mag. Paleogeophys.*, 17, 21-25.
- 松田 順一郎・三輪 若葉・別所 秀高, 1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—. 日本文化財科学会第16回大会発表要旨集, 120-121.
- 三宅 尚・中越 信和, 1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態. 植生史研究, 6, 15-30.
- 森永 速男, 1999, 第1部文化財探査の技術 第4章磁性解析. 足立和成他編 文化財探査の手法とその実際. 真陽社, 83-98.
- Morinaga, H., Inokuchi, H., Yamashita, H., Ono, A., and Inada, T., 1999, Magnetic detection of heated soils at paleolithic sites in Japan, *Geoarchaeology*, 14, 377-399.
- 中村 純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.
- 成尾 英仁・桑水流 淳二. 2002, 伊仙町小島(徳之島)のAT火山灰層保存要望書について. 鹿児島県地学会誌, No. 85, 19-26.
- 日本の地質「九州地方」編集委員会, 1992, 日本の地質9 九州地方, 共立出版, 371p.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2006, [5]自然科学分析調査の成果. 基地内埋蔵文化財調査報告書II, 宜野湾市文化財調査報告書38, 沖縄県宜野湾市教育委員会, 44-90.
- Patrick, R., 1977, Ecology of freshwater diatoms and diatom communities. The biology of diatoms., Botanical Monographs, 13, 284-332, Blackwell Scientific Publication, London.
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990, *The diatoms. Biology & morphology of the genera*. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- 坂井 良輔・小林 正史・藤田 邦雄, 1996, 灯明皿の脂質分析. 富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第7集 梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編) 第二分冊, 財団法人 富山県文化振興財団, 24-37.
- Shibuya, H., 1980, Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means of archaeomagnetism, 大阪大学基礎工学部修士論文, 54p.
- 徳永 重元・山内 輝子, 1971, 花粉・胞子. 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.
- 筒木 潔・近藤錬三, 1997, 泥炭地植物のフェノール性化合物, 脂肪酸, ステロール組成. 日本土壌肥科学雑誌, 68, 37-44
- 筒木 潔・近藤錬三, 1998, 泥炭地の乾燥化と植生変化に伴う泥炭の脂質組成の変化. 日本土壌肥科学雑誌, 69, 12-20.
- 氏家 宏・兼子 尚知, 2006, 那覇及び沖縄市南部地域の地質. 地域地質研究報告(5万分の1図幅), 産総研地質調査総合センター, 48p.
- Vos, P.C. & H. de Wolf, 1993, Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects. *Hydrobiologica*, 269/270, 285-296.
- 渡辺 仁治・浅井 一視・大塚 泰介・辻 彰洋・伯耆 晶子, 2005, 淡水珪藻生態図鑑. 内田老鶴圃, 666p.
- 柳沢 幸夫, 2000, II-1-3-2-(5)計数・同定. 化石の研究法—採集から最新の解析法まで—, 化石研究会, 共立出版株式会社, 49-50.
- 吉木 文平, 1959, 鉱物工学. 技報堂, 710p.



- 1 . *Pinnularia subgibba* var. *undulata* Krammer (水場遺構Ⅱ地区SX3;3)
- 2 . *Pinnularia neomajor* Krammer (水場遺構Ⅱ地区SX3;2)
- 3 . *Pinnularia viridis* (Nitz.)Ehrenberg (水場遺構Ⅱ地区SX3;2)
- 4 . *Eunotia praerupta* var. *bidens* (Ehren.)Grunow (水場遺構Ⅱ地区SX3;2)
- 5 . *Pinnularia schroederii* (Hust.)Krammer (水場遺構Ⅱ地区SX3;1)
- 6 . *Pinnularia borealis* Ehrenberg (窯跡東側地区;SY1ベルト部分)
- 7 . *Cosmioneis pusilla* (W.Smith) Mann&Stickle (水場遺構Ⅱ地区SX3;1)
- 8 . *Tryblionella debilis* Arnott (窯跡東側地区;SY1ベルト部分)
- 9 . *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (水場遺構Ⅱ地区SX3;1)
- 10 . *Neidium alpinum* Hustedt (窯跡東側地区;SY1ベルト部分)
- 11 . *Luticola mutica* (Kuetz.)D.G.Mann (水場遺構Ⅱ地区SX3;1)
- 12 . *Sellaphora seminulum* (Grun.)D.G.Mann (水場遺構Ⅱ地区SX3;2)
- 13 . *Amphora montana* Krasske (水場遺構Ⅱ地区SX3;1)
- 14 . *Diadesmis contenta* (Grun.ex Van Heurck)D.G.Mann (水場遺構Ⅱ地区SX3;1)



1. マツ属(水場遺構Ⅱ地区SX3;1)

3. ミカン科(水場遺構Ⅱ地区SX3;1)

5. ソテツ属(水場遺構Ⅱ地区SX3;2)

7. センダン属(水場遺構Ⅱ地区SX3;1)

9. 回虫卵(水場遺構Ⅱ地区SX3;4)

11. マンソン裂頭条虫卵(水場遺構Ⅱ地区SX3;3)

2. クチナシ属(水場遺構Ⅱ地区SX3;2)

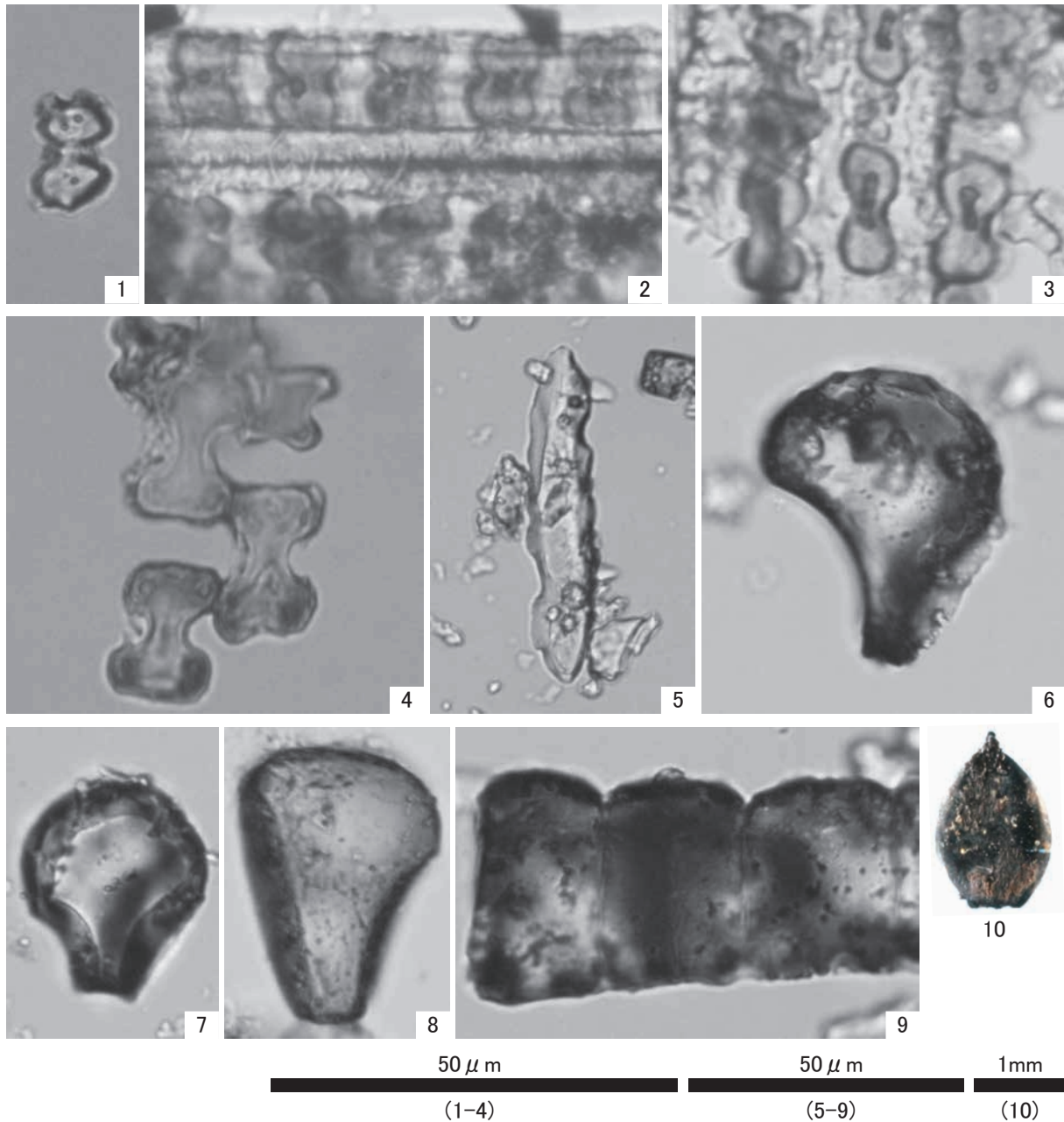
4. ミカン科(水場遺構Ⅱ地区SX3;1)

6. ウコギ科(水場遺構Ⅱ地区SX3;2)

8. イネ科(水場遺構Ⅱ地区SX3;1)

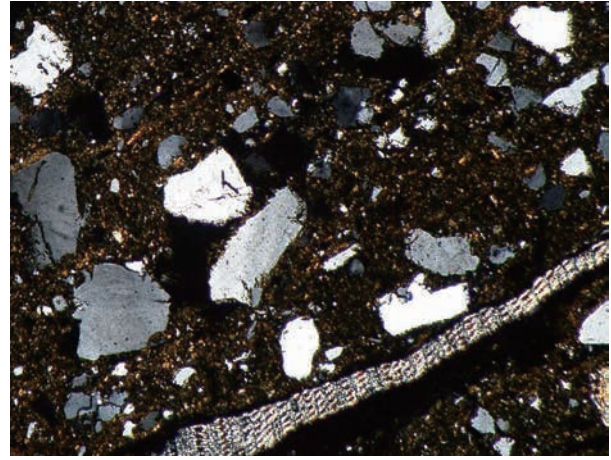
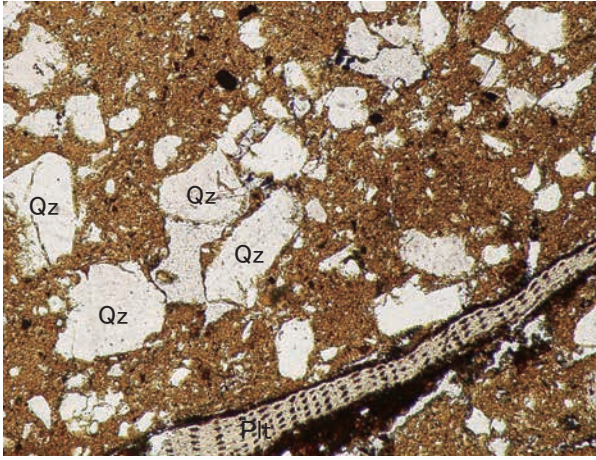
10. 鞭虫卵(水場遺構Ⅱ地区SX3;3)

図版90 花粉化石・寄生虫卵

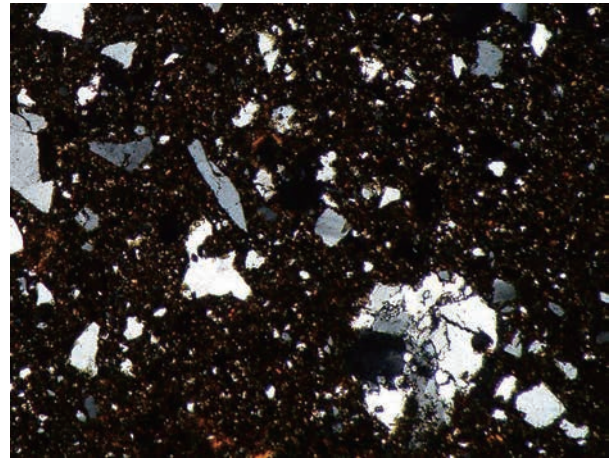
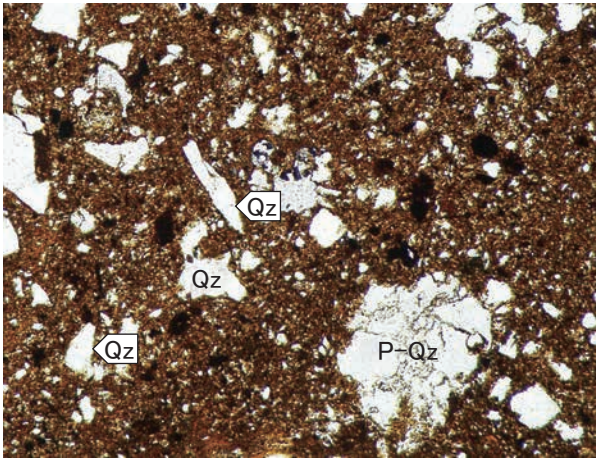


1. イネ属短細胞珪酸体(水場遺構Ⅱ地区SX3;4)
2. イネ属短細胞列(窯跡東側地区;SY1ベルト部分)
3. ススキ属短細胞列(窯跡東側地区;SY1ベルト部分)
4. ススキ属短細胞列(石組遺構;SK50・No220)
5. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(埋没谷内黒色層D-10区南壁;1)
6. イネ属機動細胞珪酸体(水場遺構Ⅱ地区SX3;1)
7. イネ属機動細胞珪酸体(埋没谷内黒色層D-10区南壁;1)
8. ウシクサ属機動細胞珪酸体(窯跡東側地区;SY1ベルト部分)
9. ウシクサ属機動細胞列(石組遺構;SK50・No220)
10. イヌタデ近似種 果実(石組遺構;SK50・No220)

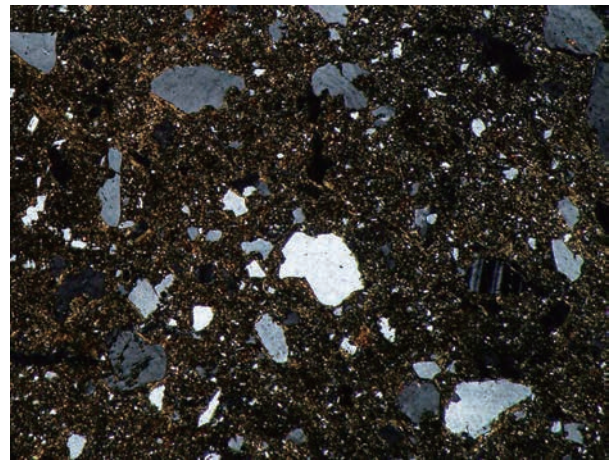
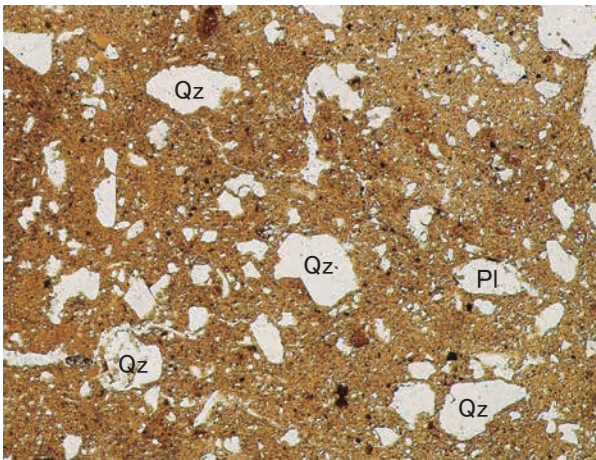
図版91 植物珪酸体・種実遺体



1.水場遺構Ⅱ地区SX3;4



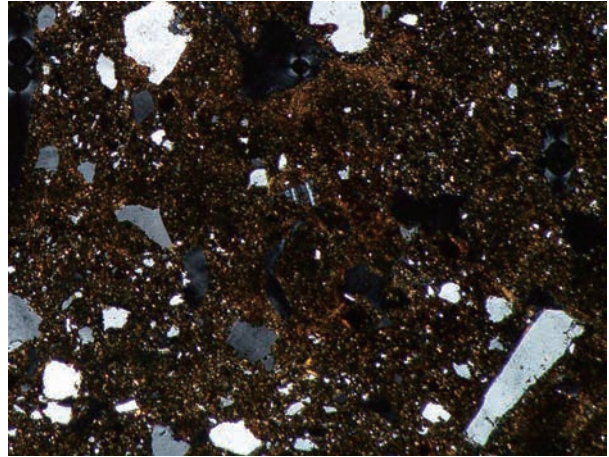
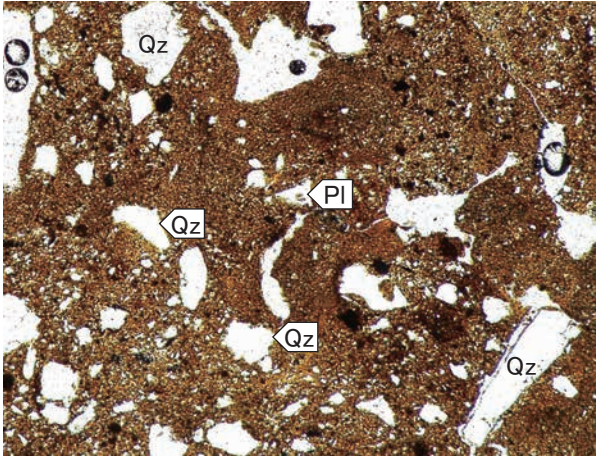
2.埋没谷内黒色層D-10区南壁;1



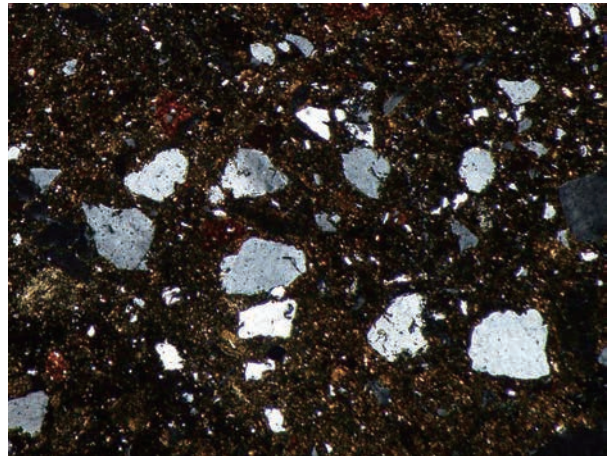
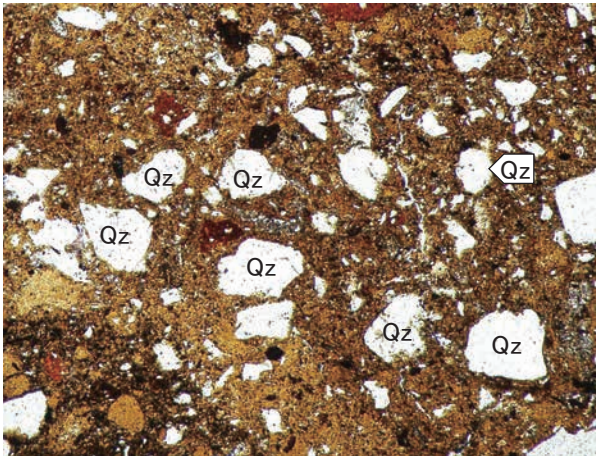
3.埋没谷内黒色層D-10区南壁;4

0.5mm

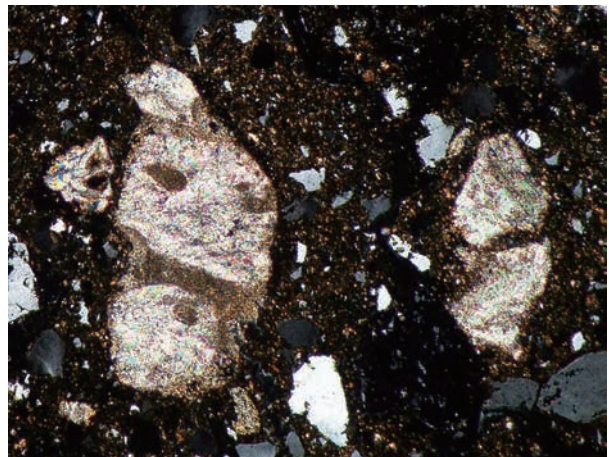
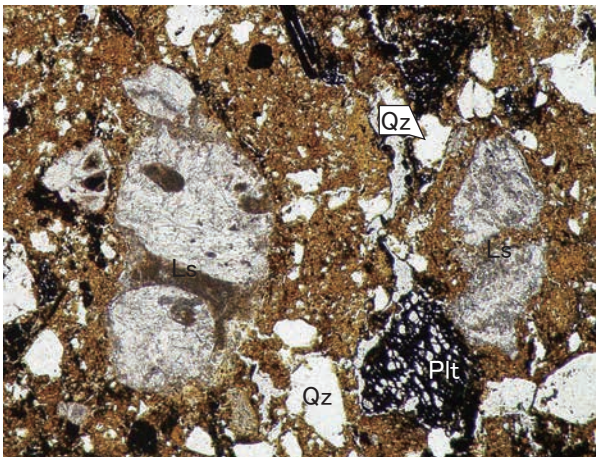
Qz:石英. Pl:斜長石. P-Qz:多結晶石英. Plt:植物片.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



4.ピット(西側地区);スミ・Pit



5.窯跡東側地区;SY1ベルト部分

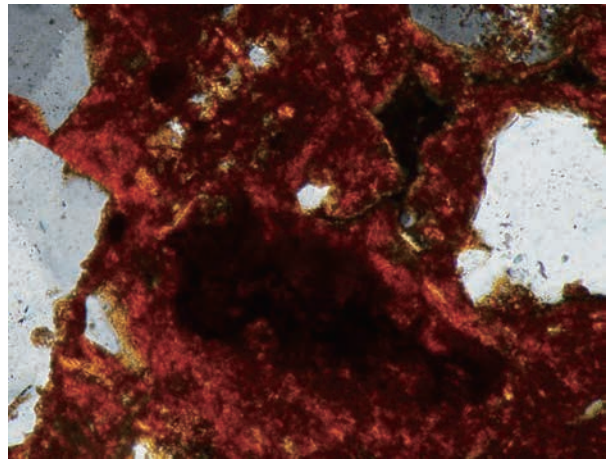
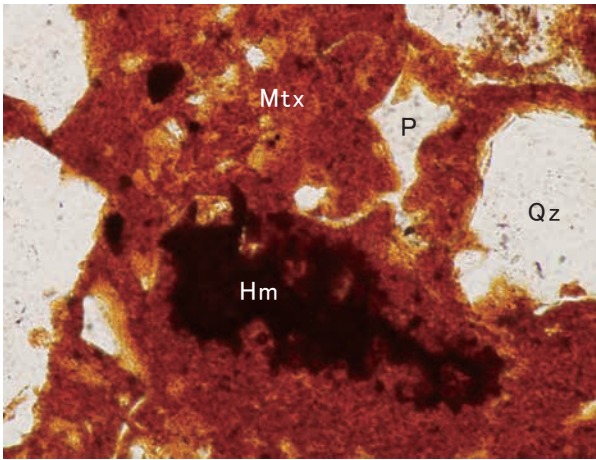


6.石組遺構;SK50・No220

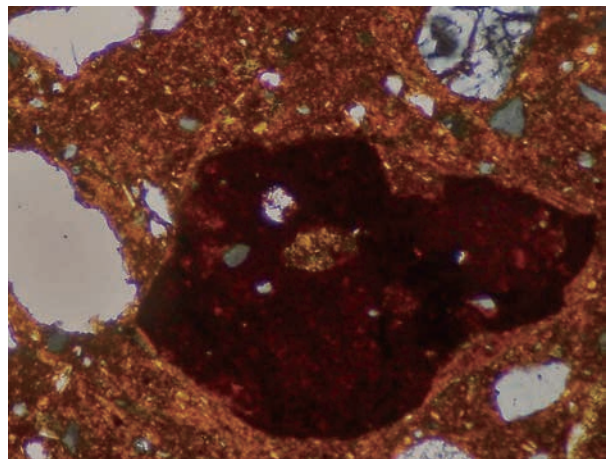
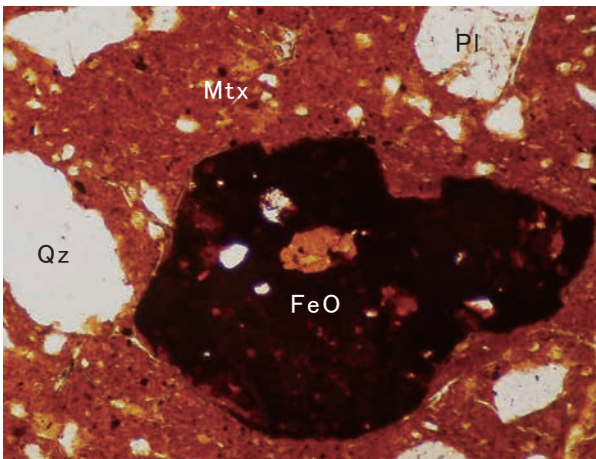
0.5mm

Qz:石英. Pl:斜長石. Ls:石灰岩. Plt:植物片.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



1.窯跡東側地区;SY1壁面



2.炉跡 I 地区E-8;SL2・No.1

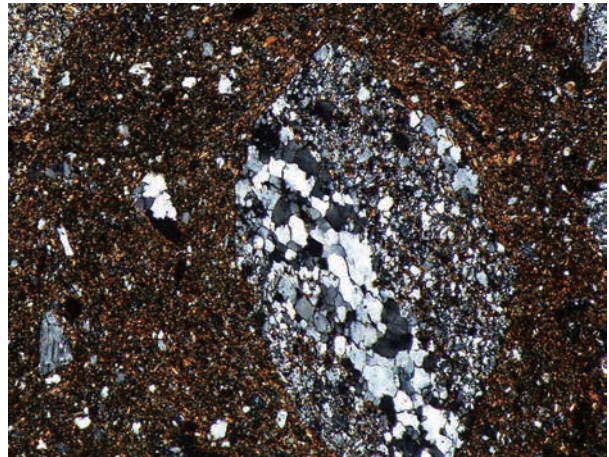
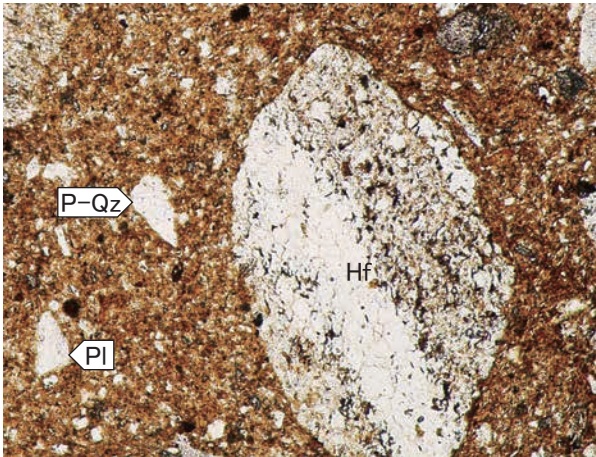


Qz:石英. Pl:斜長石. Hm:赤鉄鉱. P:孔隙.

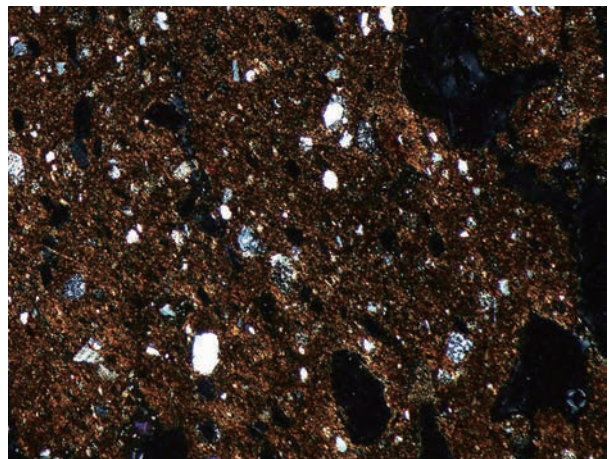
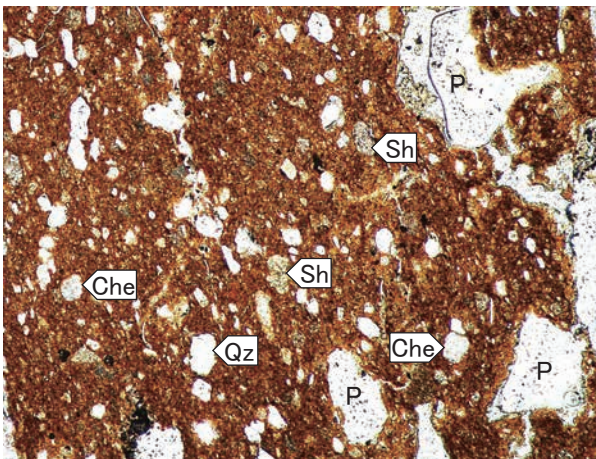
FeO:酸化鉄結核. Mtx:基質.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

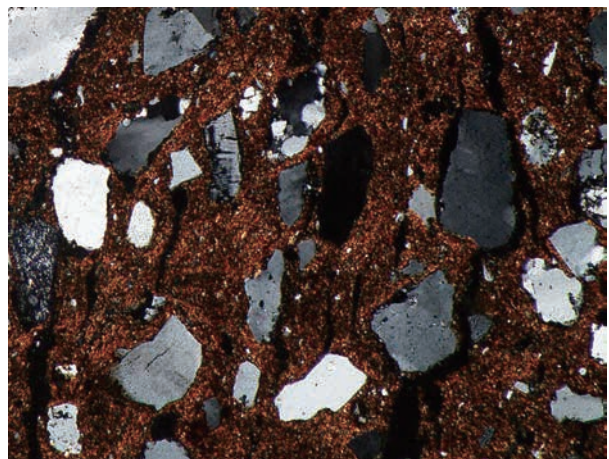
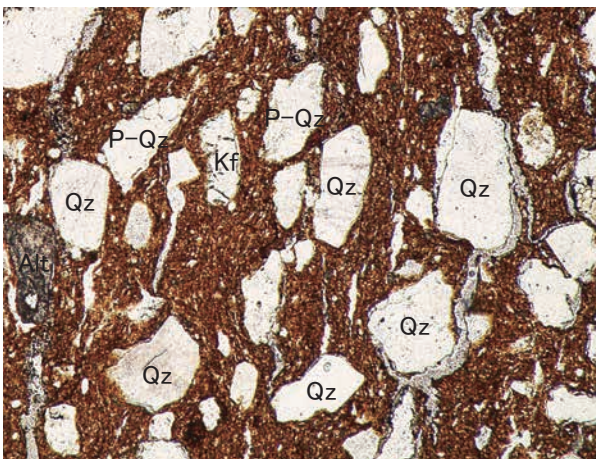
図版94 焼土薄片



1. 試料番号5(SI-1 貝塚時代中期)



2. 試料番号9(SI-1 貝塚時代中期)



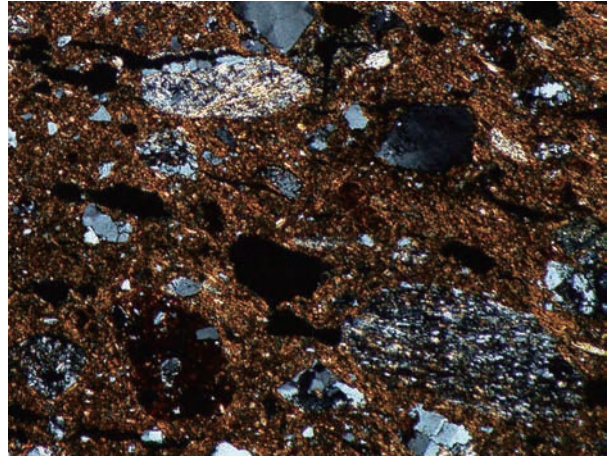
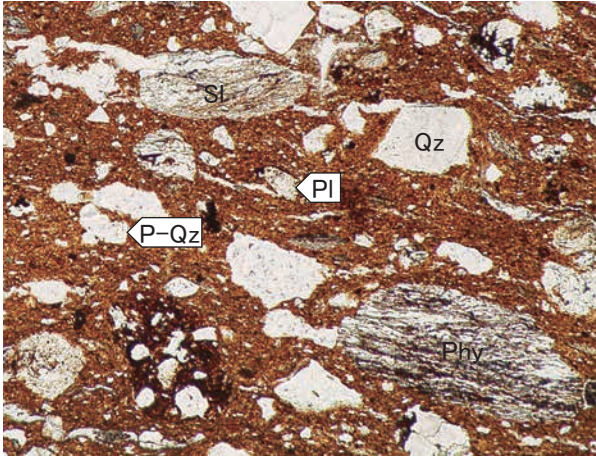
3. 試料番号11(SI-1 貝塚時代中期)

0.5mm

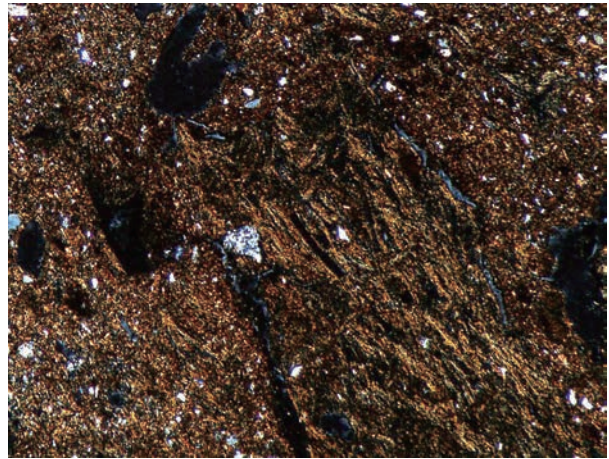
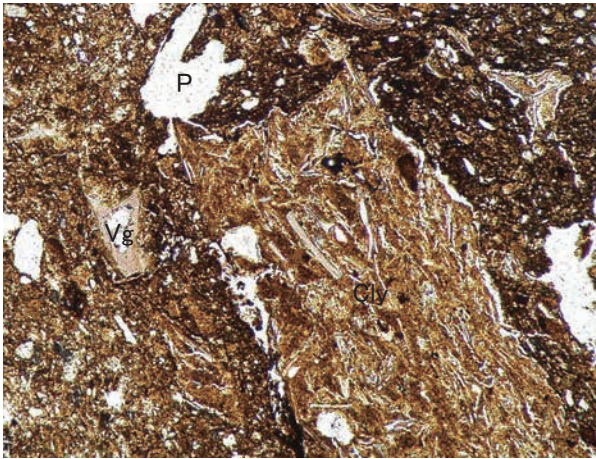
Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Che:チャート. Sh:頁岩. P-Qz:多結晶石英.

Hf:ホルンフェルス. Alt:変質岩. P:孔隙.

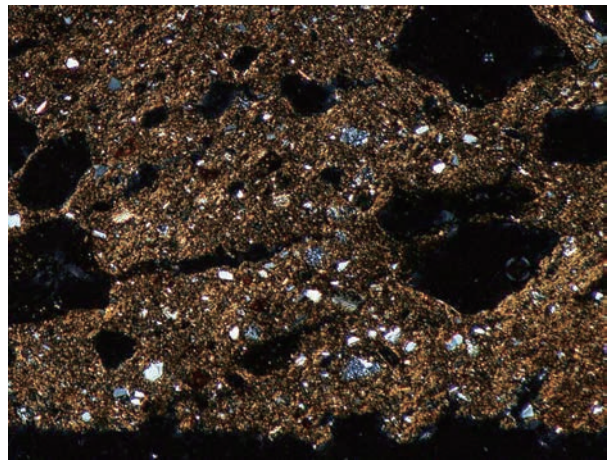
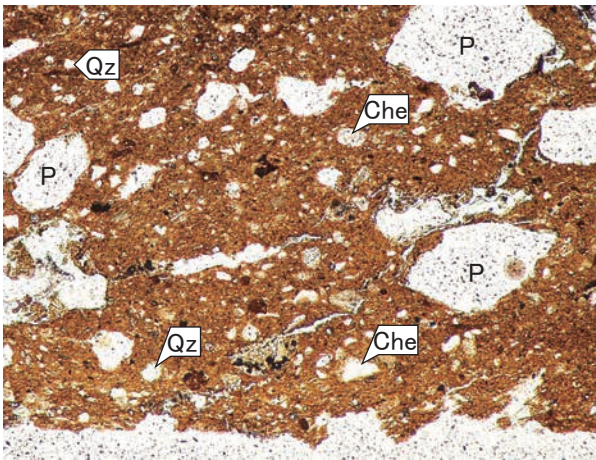
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



4.試料番号12(I 区SK19 貝塚時代中期?)



5.試料番号18(I 区SK19 グスク時代)



6.試料番号20(I 区SK19 グスク時代)

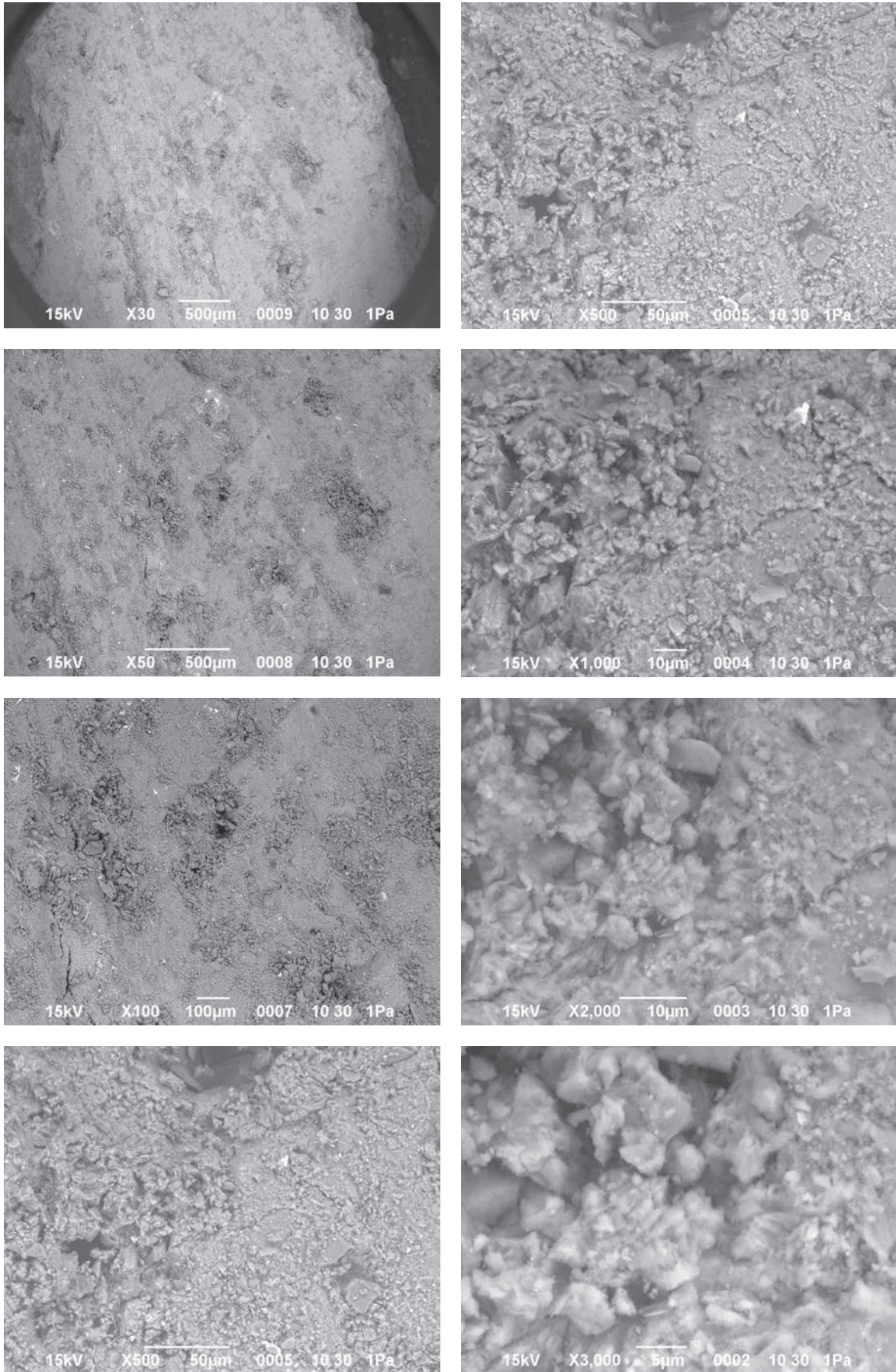
0.5mm

Qz:石英. Pl:斜長石. Che:チャート. P-Qz:多結晶石英. Phv:黒雲母千枚岩. Sl:粘板岩.

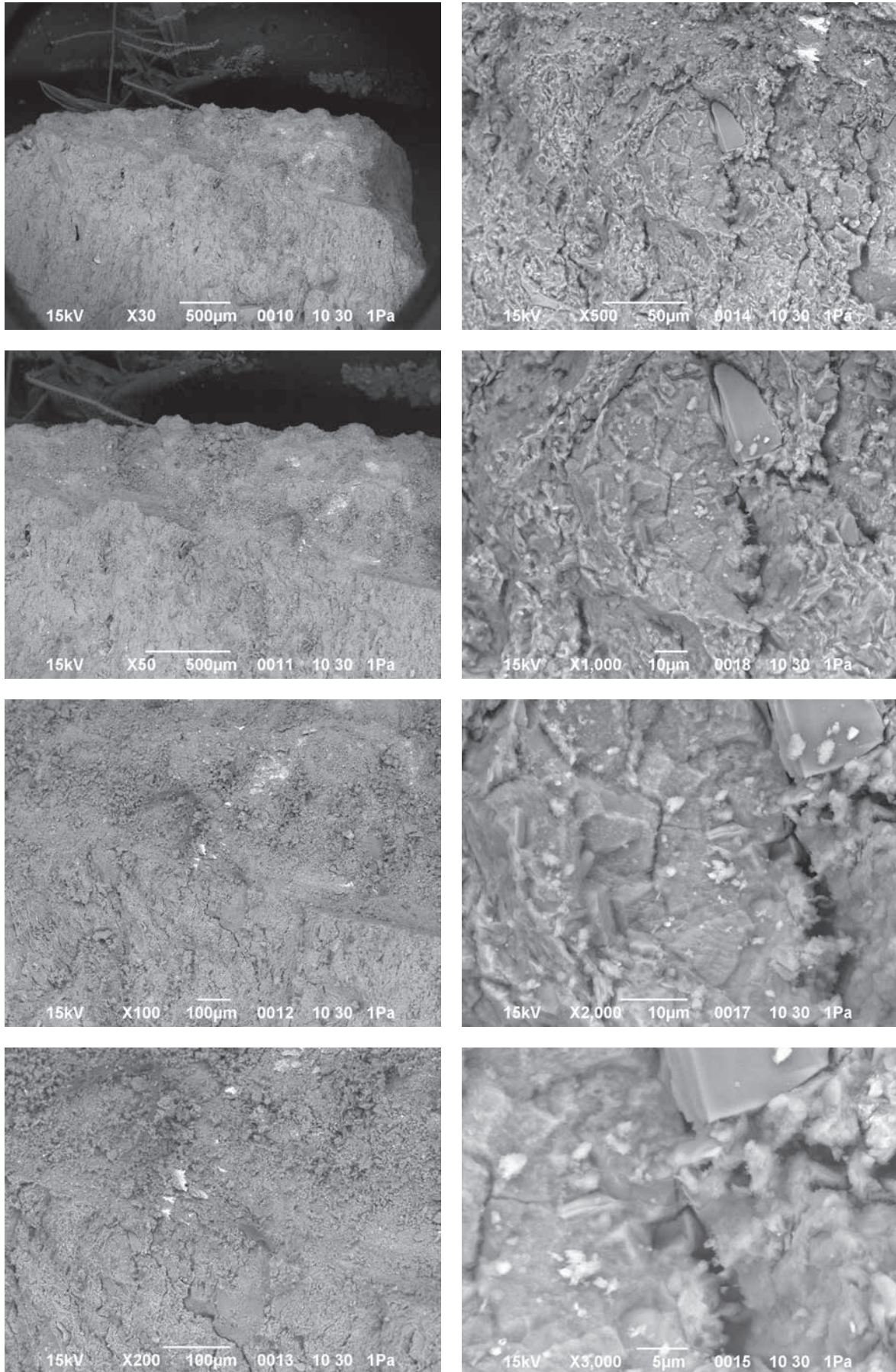
Vg:火山ガラス. Cly:火山ガラス質粘土塊. P:孔隙.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

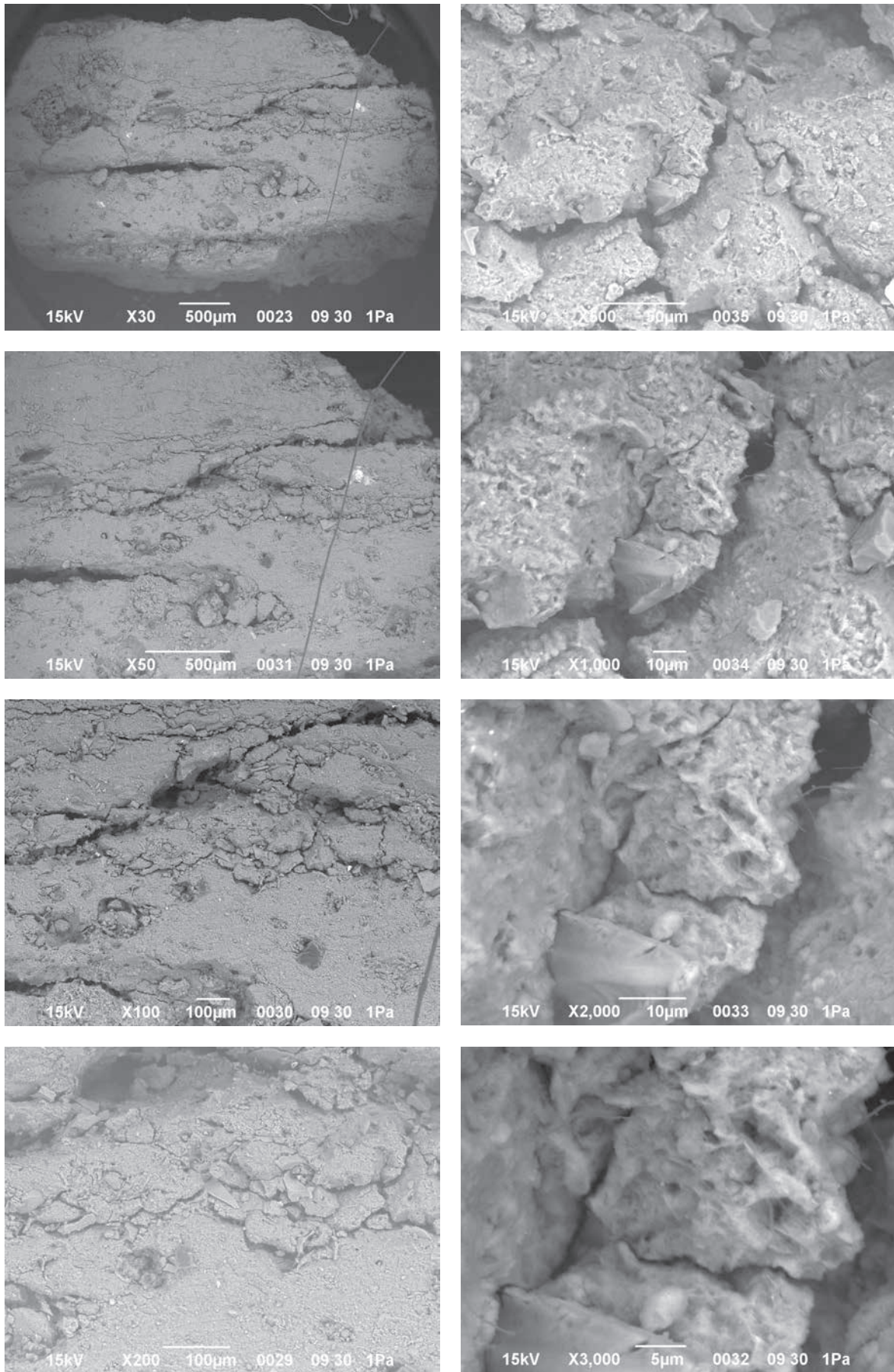
図版96 胎土薄片(2)



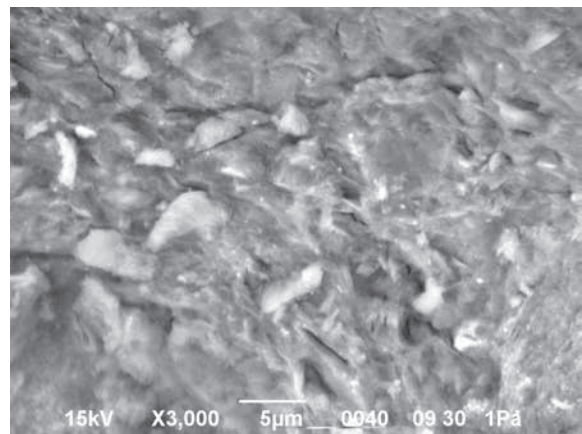
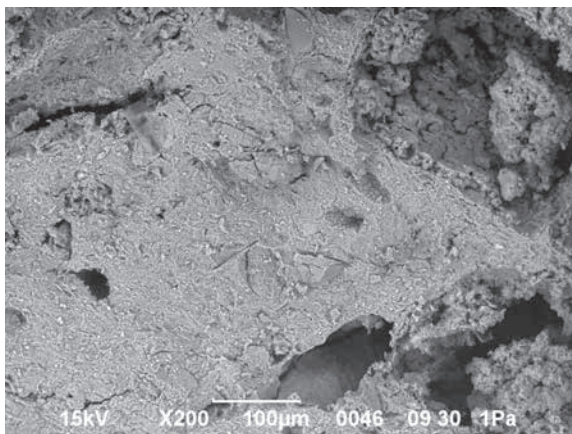
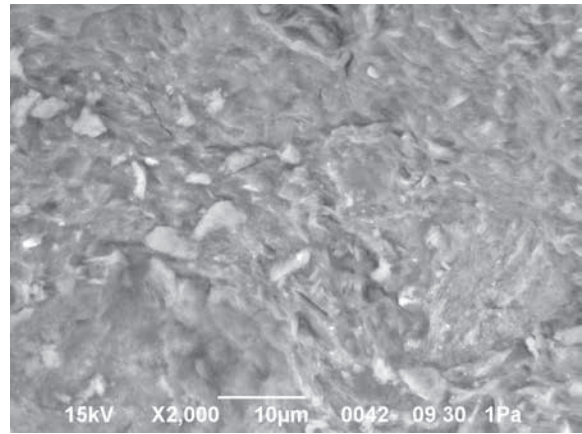
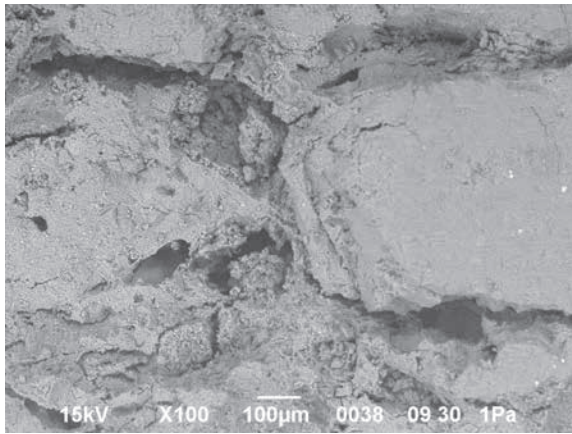
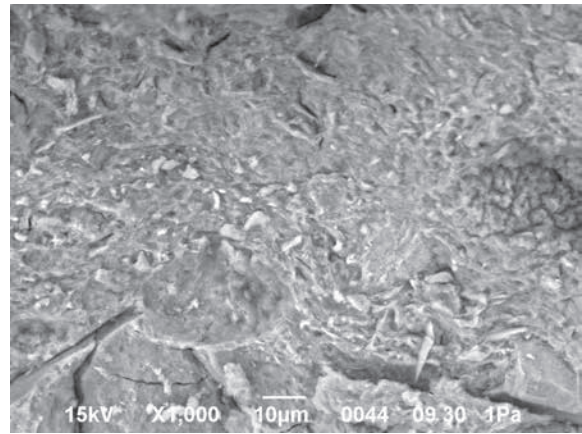
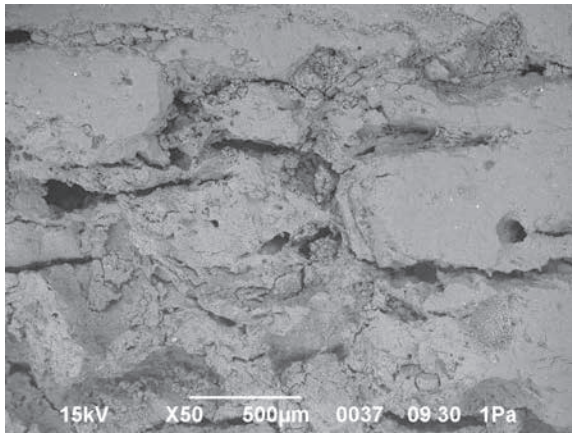
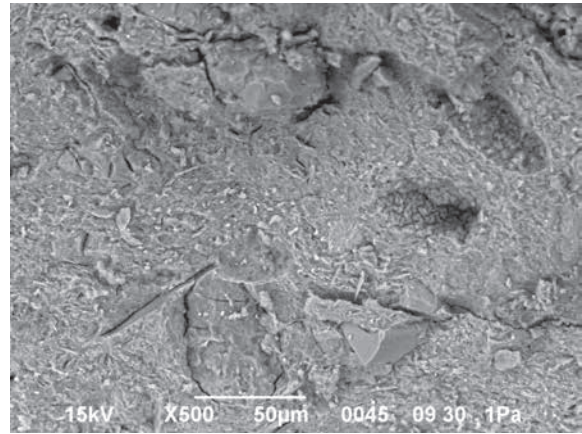
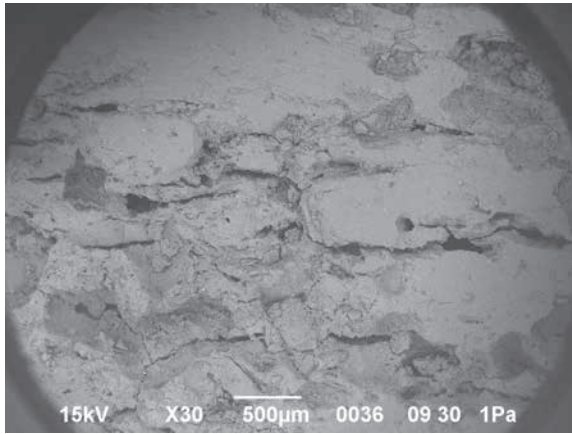
図版 97 胎土電子顕微鏡写真(1) 試料番号 2 SI-1 区 貝塚時代中期



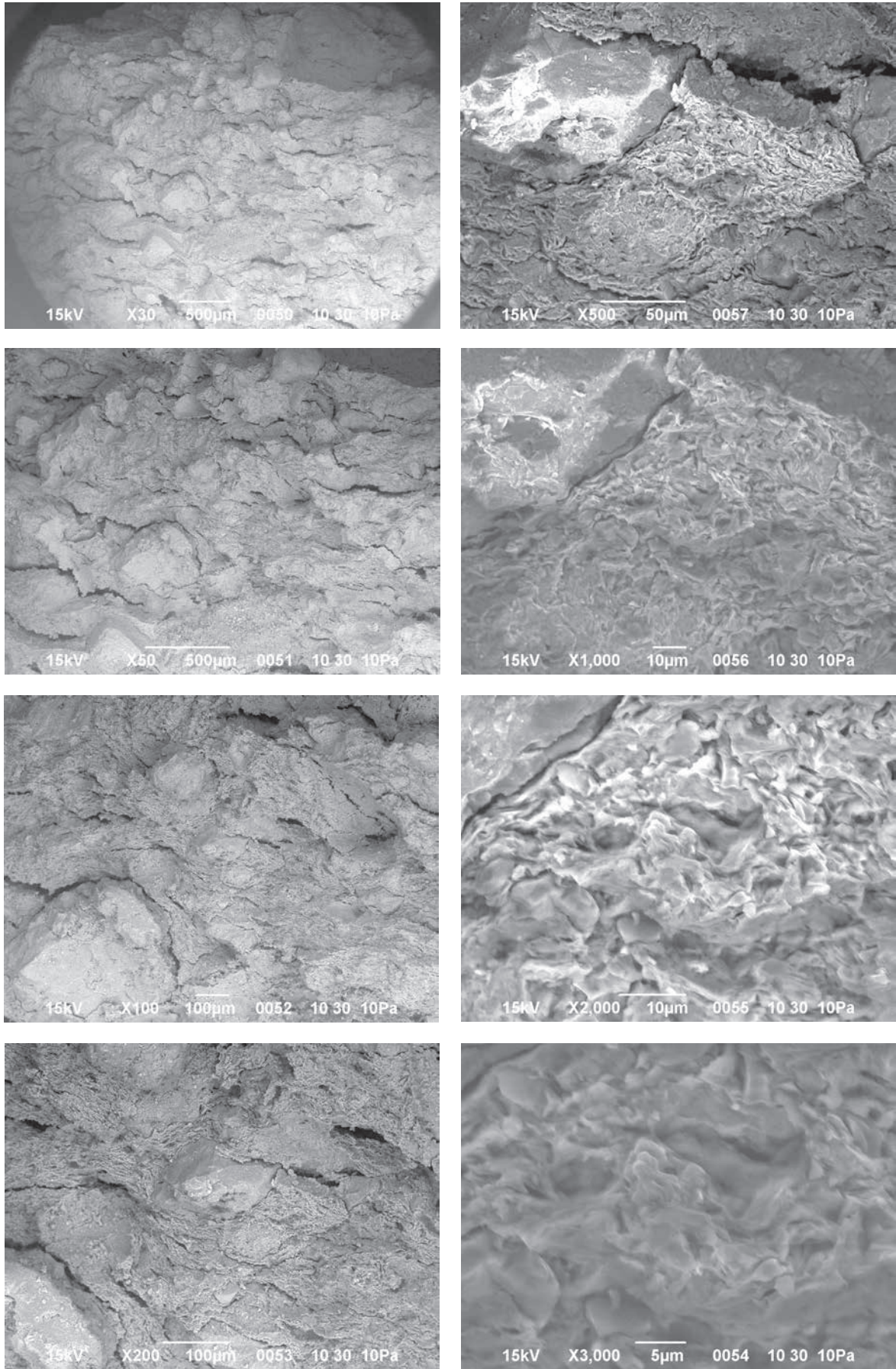
図版 98 胎土電子顕微鏡写真(2) 試料番号 4 SI-1 区 貝塚時代中期



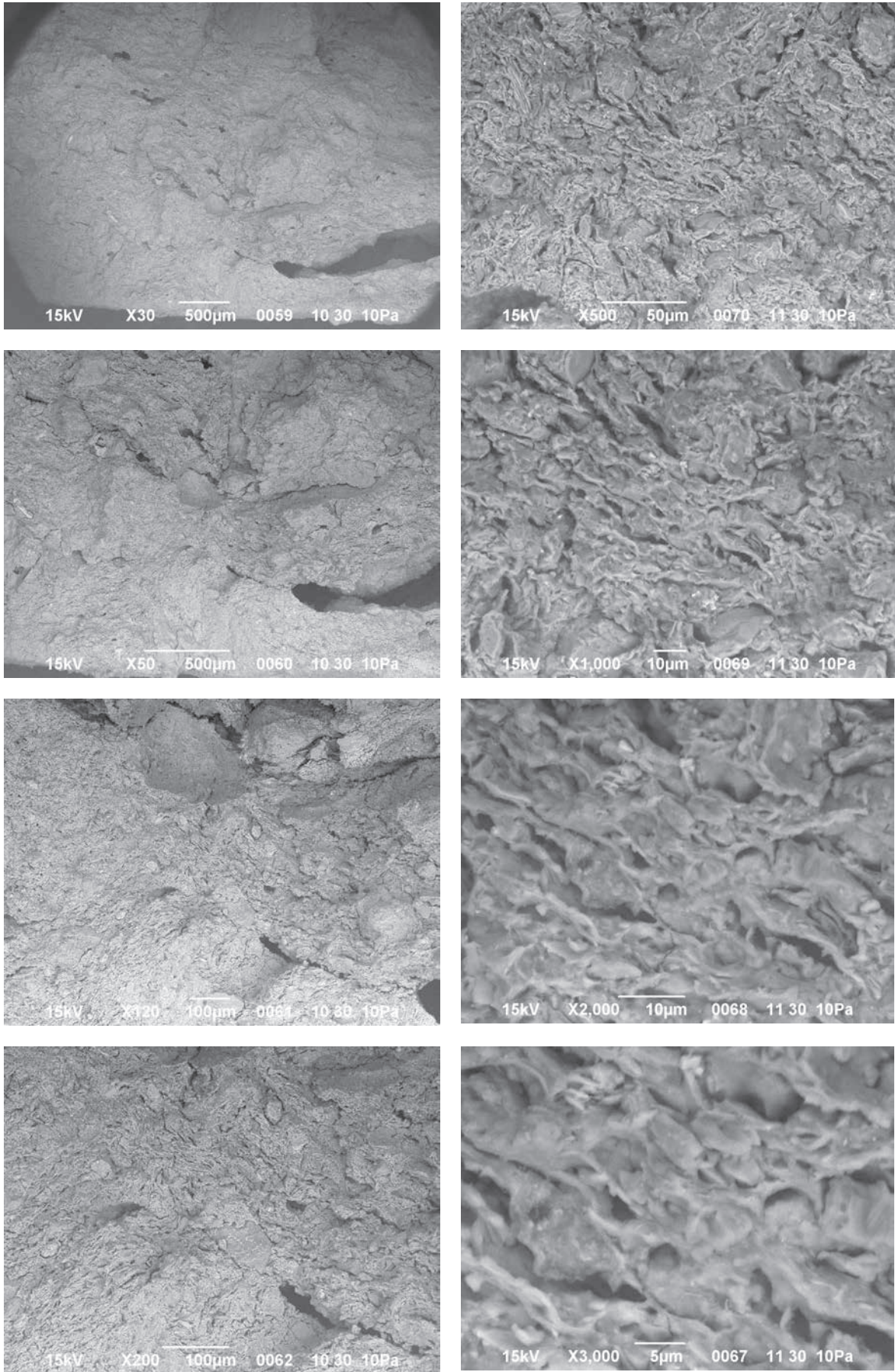
図版 99 胎土電子顕微鏡写真(3) 試料番号 6 SI-1 区 貝塚時代中期



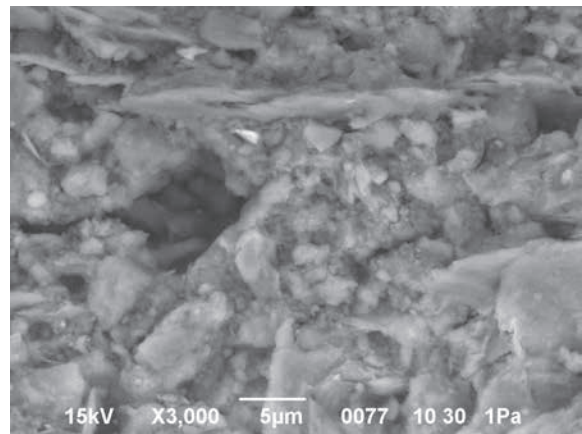
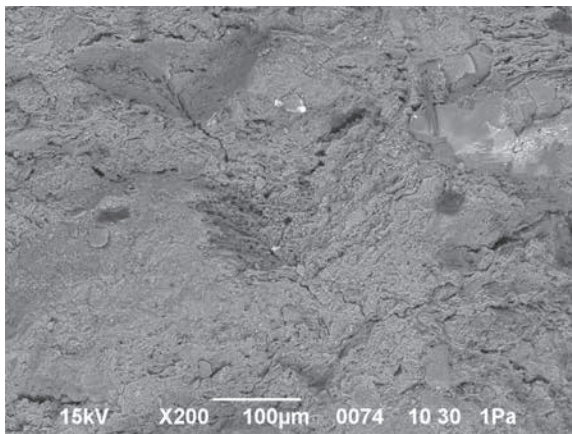
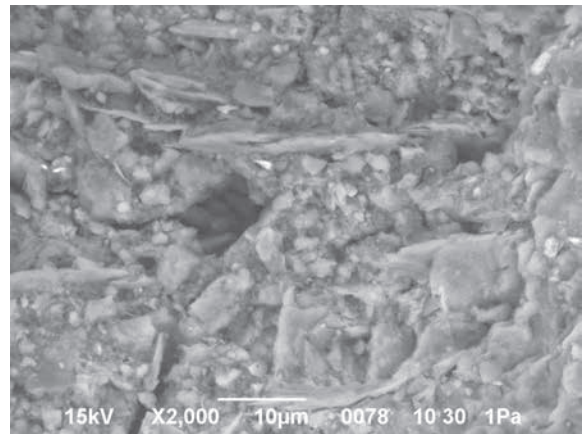
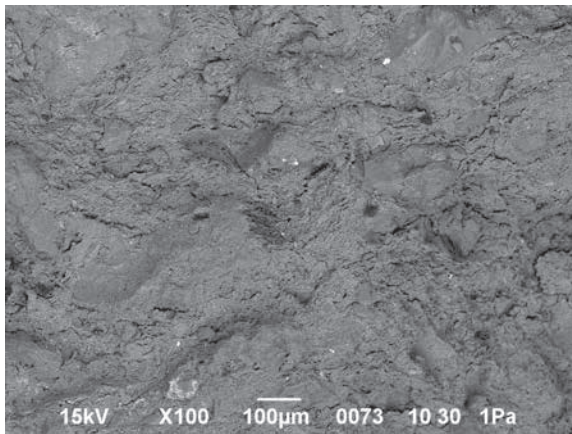
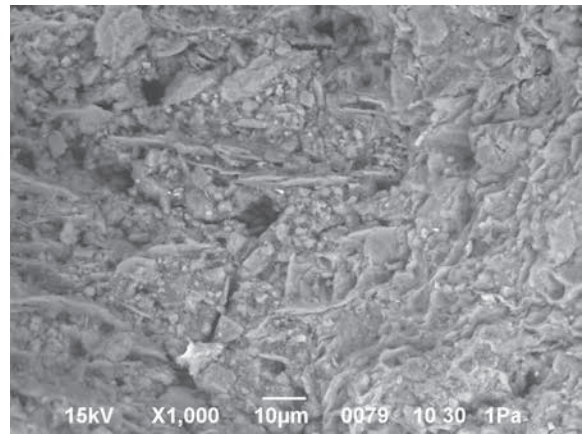
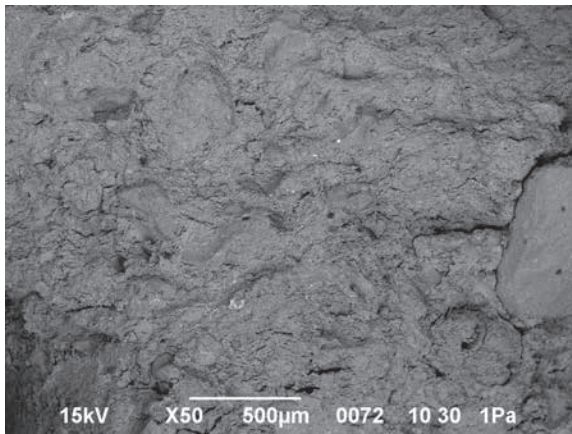
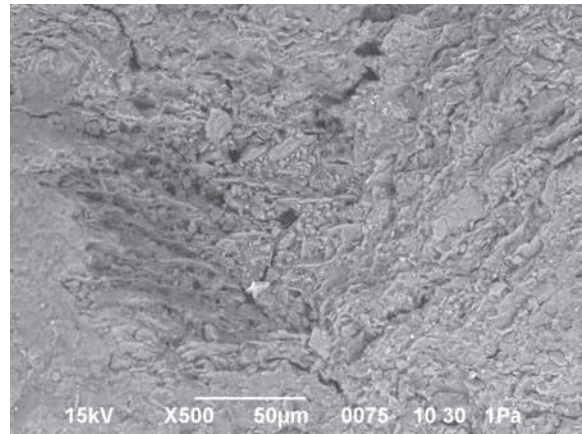
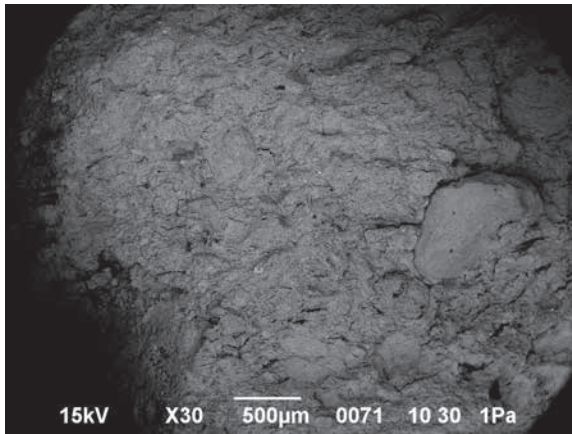
図版 100 胎土電子顕微鏡写真(4) 試料番号 8 SI-1 区 貝塚時代中期



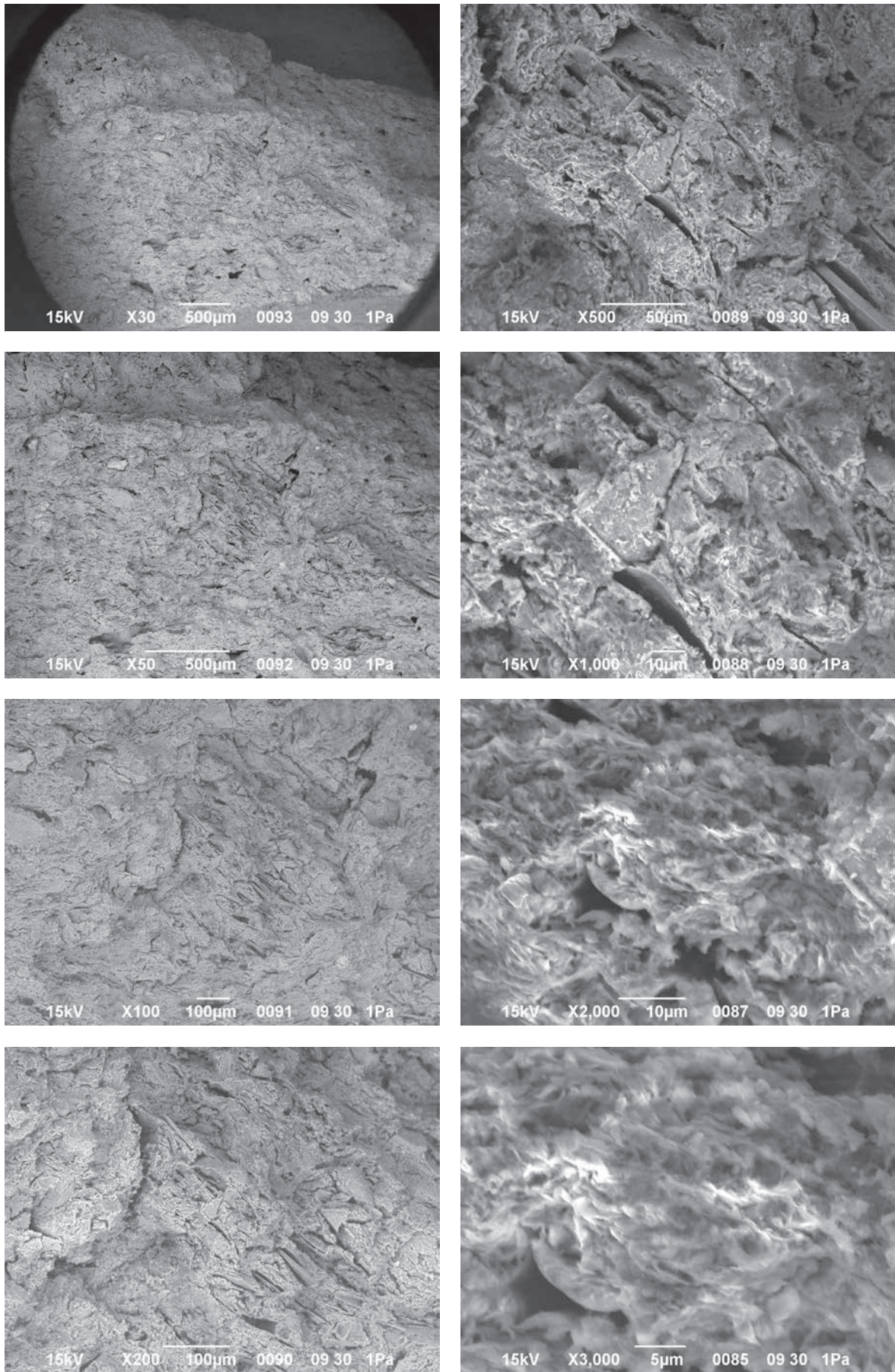
图版 101 胎土電子顕微鏡写真(5) 試料番号 11 SI-1 区 貝塚時代中期



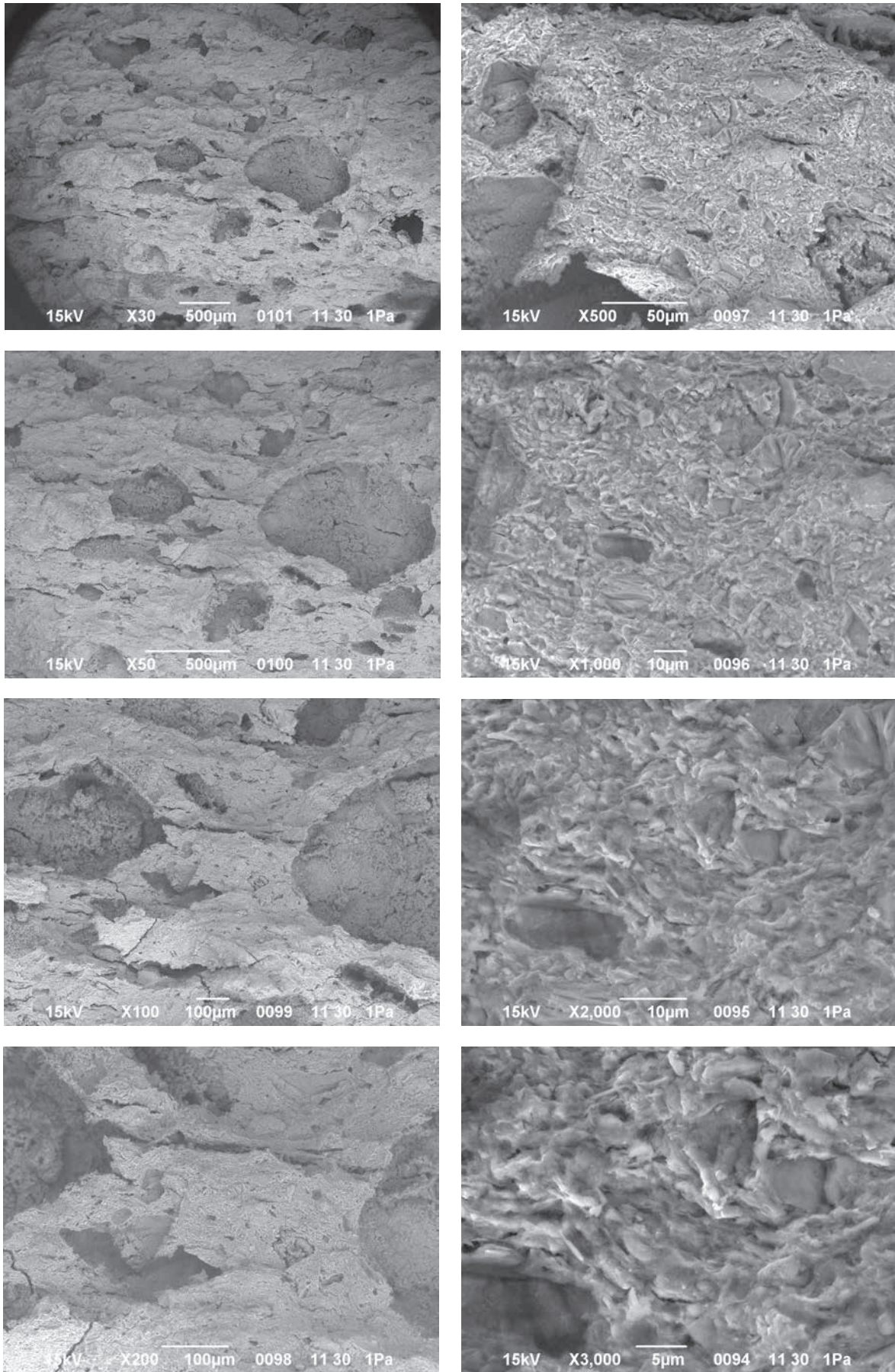
図版 102 胎土電子顕微鏡写真(6) 試料番号 13 I区 SK19 貝塚時代中期?



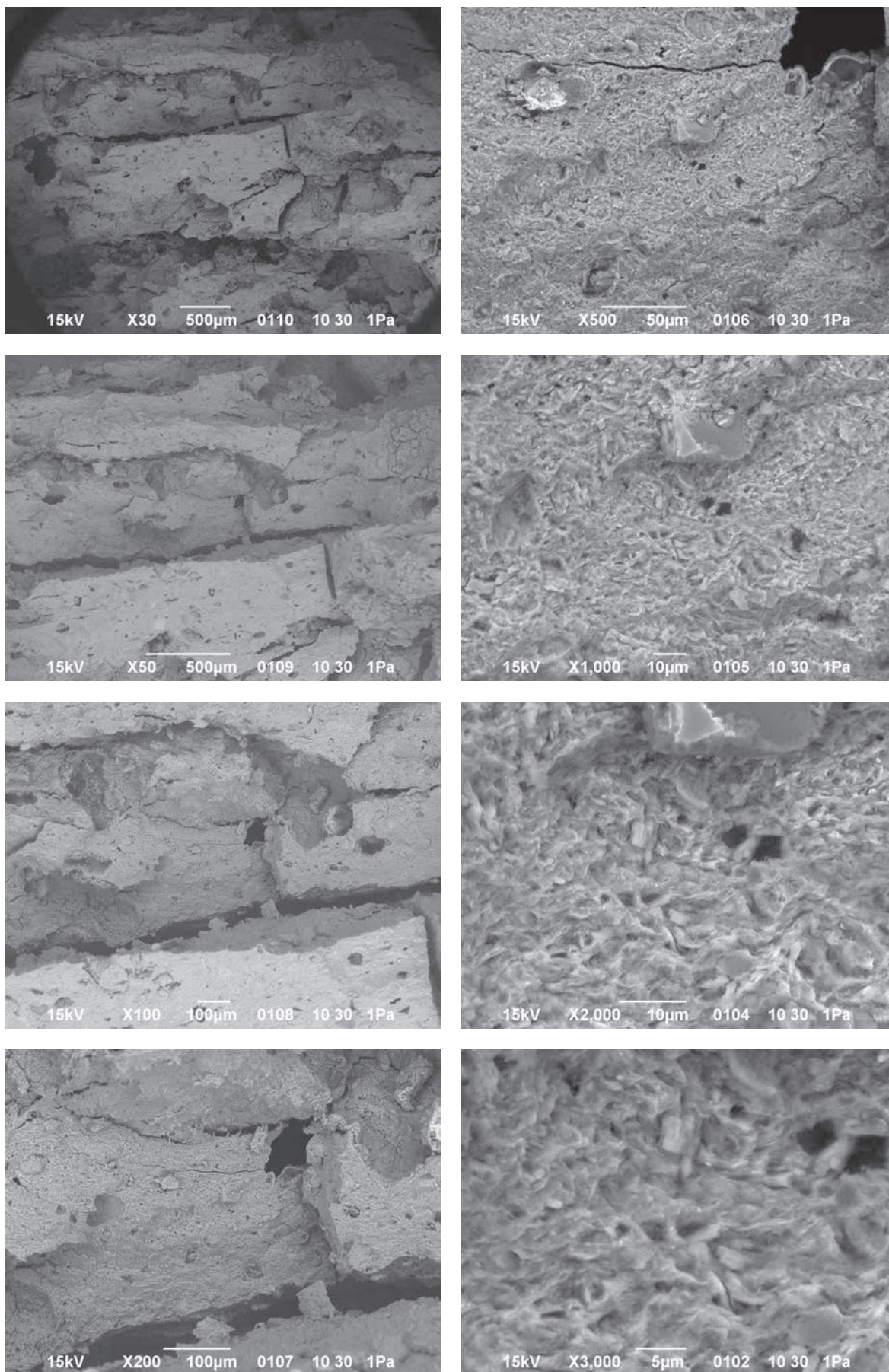
図版 103 胎土電子顕微鏡写真(7) 試料番号 17 I 区 SK19 グスク時代?



図版 104 胎土電子顕微鏡写真(8) 試料番号 19 I区 SK19 グスク時代



図版 105 胎土電子顕微鏡写真(9) 試料番号 20 I区 SK19 グスク時代



図版 106 胎土電子顕微鏡写真(10) 試料番号 21 I 区 SK19 グスク時代

第6章 総括

平成20年度に実施した普天間古集落遺跡の発掘調査は米海軍病院建設に伴うものである。その成果については前章までにまとめたが、本章では当該遺跡の立地や各時代の遺構・遺物について再整理を行い、総括とする。

遺跡の立地

普天間古集落遺跡は標高50～90mの段丘上に位置し、基盤層の大半は琉球石灰岩層から成る。この琉球石灰岩の段丘縁には洞穴と湧泉が点在している。本遺跡は標高約55mの段丘上に展開している。

時代を遡ると、まず縄文時代の後期から晩期にかけて生活空間が形成され、その後11～12世紀頃のグスク時代に生活空間が形成されるようになる。当該遺跡では埋没谷内黒色層が確認されており、かつて遺跡一部には谷状の地形があったことが想定されている。この埋没谷内黒色層が堆積した時期については不明であるが、当該層における植物珪酸体分析ではイネ属の機動細胞珪酸体がわずかに見られ、この層位が稲作に関連する層であった可能性が報告されていることから、グスク時代以後の農耕に関連する堆積層の可能性もある。12世紀以後は人々の生活の痕跡は一旦途絶えるが、近世～近代には普天間古集落の形成とともに、集落の一部は耕作地として利用され、沖縄戦以後は米軍基地へ接收されていった。

縄文時代

縄文時代の遺構は、竪穴状の遺構や、土坑、ピットがⅠ・Ⅱ地区において検出されている。

竪穴状の遺構は楕円形状に掘り込まれた遺構で、Ⅰ地区・Ⅱ地区から1基ずつ確認されている。Ⅰ地区のSK19は平面形4.7m×4.5mの不整な楕円形状のプランを呈しており、縄文時代晩期の宇佐浜式～仲原式土器が出土する。Ⅱ地区のSI1平面形が4.2m×2.5mの楕円形を呈し、内部及び外部にピットを配している。中心部からは仲原式土器が多く出土している。

土坑は深さ1m以上と、深く掘り込まれ落ち込む形状の土坑であり、中には深さが2m以上掘り込まれるものも確認されている。Ⅰ地区からは3基、Ⅱ地区からは1基確認されている。これらの土坑からは縄文時代後期～晩期の土器片や石器が出土している。この土坑の性格について、竪穴状の遺構が検出された場所からは離れた位置に点在して検出される状況からも、落とし穴としての性格も考えられるが詳細は不明である。

遺物は土器・石器が出土している。土器は縄文時代後期～晩期の点刻線文系土器、肥厚口縁系土器、有段・外耳付土器が出土している。縄文時代晩期の宇佐浜式、仲原式土器が主体的となる。石器の種類は石鏃、石斧、叩き石、磨石、石皿などである。また、近世～近代の遺構や包含層であるⅡ層、表土層からも土器や磨製石斧などが出土しており、Ⅱ地区のⅡ層からは緑色岩製の石鏃が出土している。

今回、竪穴状の遺構(Ⅰ地区SK19及びⅡ地区SI1)出土土器の胎土分析を実施している。分析の結果、土器胎土に含まれる鉱物・岩石組成からA～E類に分類でき、分析試料の主体はA類(鉱物片は、石英が多く、少量の斜長石を伴い、少量または微量の緑廉石と微量の白雲母や黒雲母を含む。)が占めており、このA類は鉱物組成からは普天間付近の堆積物を材料として製作されたものと報告されている。この分析結果からは、当該遺跡における縄文時代晩期の土器は、遺跡周辺の砂・粘土を材料として採取し、製作されたものと想定される。なお、Ⅰ地区SK19の分析試料15～21にグスク時代とされた土器があるが、これらは縄文時代晩期のものとして考えられることを明記しておく。

グスク時代

グスク時代の遺構は、Ⅰ地区D-7～E-8グリッド及びⅡ地区C-11、D-11、F-9グリッドから検出したピット群があり、Ⅰ地区では掘立柱建物が3棟確認されている。時期は後述する出土遺物から11～12世紀ごろと考えられる。掘立柱建物1・2は4本柱の建物で、規模は長軸1.9m～短軸1.0mである。掘立柱建物3は6本柱の建物で、長軸3.8m、短軸2.4mの規模で長軸は北東-南西方向である。

検出されたグスク時代のピットは暗褐色砂質シルトが特徴的な埋土で平面形が円形・楕円形や不定形のもの確認されており、柱痕があり掘方が方形状となるものから、柱痕がないもの、掘方が楕円形となるものなど様々なバリエーションが認められる。

遺物はグスク土器、滑石混入土器、中国産白磁、カムイヤキなどが出土している。遺構内からの出土は少なくグスク土器の胴部片が数点出土するのみで、出土遺物の多くがグスク時代の包含層であるⅢ層からの出土で、近世～近代の遺構や包含層のⅡ層からも出土している。

グスク土器は、滑石製石鍋模倣土器を主体とし、滑石混入土器もみられる。中国産白磁は、年代の指標となる玉縁口縁白磁碗（11～12世紀代）が主体となっている。カムイヤキは壺が出土している。

また、ピットの埋土中から抽出された炭化材の放射性炭素年代からは、較正された暦年で10世紀初頭から11世紀前半頃までの年代が得られている。出土遺物の内容からは若干年代が古く出ているが、当該遺構の年代観を考える上では、今後参考になるものといえる。

近世～近代

近世～近代の遺構は、ピット、土坑、方形石組遺構、井戸、石敷遺構、溝跡、道跡、炉跡、窯跡等様々な遺構が検出されている。当該時期の遺構が最も多く、本遺跡における主体をなしている。

ピットは平面形が円形・楕円形や不定形のもの確認されており、柱痕が確認されるもの、柱痕がないもの、掘方が楕円形となるものなど様々なバリエーションが認められる。中には屋敷跡に関するピットもあると考えられるが、明確な建物プランを確認できたものは少ない。

建物跡についてはⅡ地区にて2棟確認された。建物4は4本柱の建物と考えられ、中心に約30cm×35cmの石灰岩柱を添えるものである。規模は1間×1間（3.4m×3.4m）で方形を呈する。建物5は石灰岩の石柱からなる4本柱の建物と考えられる。規模は1間×1間（4.3m×4.3m）で、方形を呈し、前者より規模が大きい。どのような施設かについては今後の課題である。

土坑は掘方が方形状を呈するもの、半円状を呈するもの、段を持つもの等が確認された。これらは様々な用途が推測できるが、柱の抜け跡と考えられるもの、何らかの作業に使用するための水を溜める溜池跡、廃棄土坑等々が考えられる。このうち、溜池跡と考えられる遺構は、Ⅰ地区のSK20（D8・区画2）、Ⅱ地区のSK71（D9・区画10）及び方形遺構1（E10・区画13）と、Ⅱ地区のSK3（C10・区画11）がある。SK20、71、方形遺構1はサントウ技法と呼ばれる溜池で、地山を方形状に掘り込み、海浜のサンゴ砂利と樹液を混ぜ固めて造った樹状の遺構である。セメントが普及する以前の技法とされる。

方形石組遺構は複数確認された。共通の構築方法がみられ、まず地山を方形に掘り込んだ後、約30～80cm大の石灰岩の切石を四方に配置して壁とする。床面は、約10cm～15cmの礫を敷き、その上にモルタル（又はセメント）を施して平坦に仕上げている。壁面の切石の表面にもモルタル（又はセメント）を塗布している。SK50内の埋土中の珪藻分析により、一時的に水の流れがあった可能性が指摘されていることより、方形石組遺構は当初、溜池として使用した後にごみを捨てる廃棄穴として使用されたものと考えられる。

井戸は6基確認された。約20～30cm大の石灰岩を岩盤直上より積み上げている。岩盤からさらに不透水層であるクチャ層まで掘り込んでいる。積み方は相方積みで、10～20cm大の石灰岩を裏込め石として密に使用している。方形石組遺構と近接する位置で見つかっていることから、セット関係があるものと考えられる。

石敷遺構はⅡ地区で確認され、Ⅱ層の上にマーヅとⅡ層の土を混ぜた土で整地し、その上に平らな石灰岩を敷詰めている。石敷に接して約1 m×2 mの方形石組遺構も見つかった。石敷遺構は何らかの作業場であった可能性が考えられる。

溝跡は、屋敷の区画と考えられるものと、排水として使用されたと考えられるものが確認された。排水等の使用が考えられる溝は、溝内に土坑が掘り込まれているものや、拳大～頭大の石灰岩の礫を詰めているものも確認された。

道跡は、Ⅰ・Ⅱ地区にまたがって2本検出された（Ⅰ・Ⅱ地区道1、Ⅱ地区道2）。道1は幅が約3.3mあり、北西－南東方向に延びる。また、^{わだち}轍と考えられる溝状跡も検出されている。南北縁には排水溝と考えられる溝を設けている。北西側は遺構の深度が浅くなっており、雨水等は北西から南東へと流れていたと考えられる。道2は幅が約5.5～8.8m、北西－南東方向に延び、道1に並行している。轍と考えられる細い溝状跡があり、北縁に排水溝がある。2本の道跡は、昭和20年に撮影された航空写真（図版107）にみえる道と方向等が一致する。

炉跡は2つ確認された。平面形は円形を呈し、半裁すると壁面は火熱を受けて赤みを帯び、硬化している。床面には炭が堆積している。何に使用した炉跡かは判然としない。

窯跡は1基確認された。SY1（H7・区画7）の燃焼部は円形、灰原部分は方形状を呈する。SY1の自然科学分析からは興味深い結果が出ている。埋土中から抽出された炭化材の樹種はリュウキュウマツの可能性が指摘されている。リュウキュウマツは、当時の普天間周辺にも生息していたことが考えられ、松脂を多く含み、高い火力を得られるとされることより、本遺跡でも窯の燃料材として利用されていたことが推測される。また、埋土中から抽出された炭化材の放射性炭素年代及び壁面の焼土から得られた考古地磁気年代から、窯跡の操業年代として18世紀頃の年代が示されている。機能としては、製糖に係る遺構の可能性を考えている。

確認された各遺構の分布状況をみると、区画によって遺構が多く集中する箇所と遺構が少ない箇所があった。また、井戸や方形石組遺構は、ある程度の空間がみられる所で検出されており、屋敷跡に関係すると考えられるピットが多く検出された所では少ないという傾向が伺えた。このように区画ごとで遺構の分布状況に違いがみられたことより、区画によって土地の利用形態が異なっていた可能性が考えられる。すなわち、屋敷跡に関係すると考えられるピットが確認された区画2、8、11は人々の生活空間、その他の区画は、耕作地を含む作業場であったことが考えられる。戦前の写真（図版107）を検証すると、遺構が多く確認された範囲は集落地、遺構が少なかった範囲は耕作地となっており、遺構の出方とほぼ一致する。

各遺構の年代については、水場遺構SX3（Ⅱ地区・区画11）、方形石組遺構SK50（Ⅰ地区・区画1）は放射性炭素年代の結果、それぞれ較正された暦年で17世紀後半から現代までに至る年代が示されている。先述した窯跡SY1（Ⅰ地区・区画7）についても同様の年代が得られていることより、これらの遺構はほぼ同時期に機能していたことが指摘されている。すなわち、当該時期における遺構の年代観として捉えることができる。

遺物については、沖縄産陶器を中心に、本土産陶磁器、中国産陶磁器、金属製品、瓦等が出土しており、近代の遺物が主体である。陶磁器の中で最も多くみられた沖縄産は碗、皿、鉢、播鉢、瓶、急須、鍋、壺、甕、火炉等の多種多様な製品があり、本土産陶磁器は瀬戸・美濃産、肥前産、薩摩産などの製品が得られている。それぞれ揃いの製品が多く、バリエーションが少ないという特徴が伺える。その他、特徴的な事項としては、沖縄産では那覇市湧田古窯跡を中心に焼成されたことが考えられる資料で、首里城跡御内原北地区で17世紀前半に位置づけられるゴミ穴（シーリ遺構）からまとまって出土した初期沖縄産無釉陶器として分類される製品がほとんどみられないことが挙げられる。本遺跡で出土した沖縄産無釉陶器の多くは17世紀以降に焼成されたと考えられる製品である。また、

本土産陶磁器では、18世紀第2四半期頃から出現し、18世紀後半以降流行するとされる肥前産の蛇の目
凹型高台皿がみられる他、19世紀代と考えられる薩摩産の小碗等がみられる。中国産陶磁器では、18
世紀後半～19世紀と考えられる徳化窯製品が主体を占める。

以上の事項より、遺物は古いもので17世紀後半頃のものからみられ、主体は18世紀以降と考えられ
る。このことは、遺構埋土の放射性炭素年代測定結果と矛盾しない。

まとめ

以上、平成20年度調査における成果を時代別に整理した。今回の調査によって、縄文時代、グスク
時代、近世～近代の遺構及び遺物が確認された。前者2時期の存続時期は短く、各時期とも断絶して
いると考えられる。時代は下って近世～近代になると、近世後期頃に地割状の区画が設定され、当初
は農地として利用されていたが、近代にかけて普天間地域の発展に伴い、普天満宮側から居住域が拡
大してきた様相がうかがえた。

<引用・参考文献>

- うるま市教育委員会2014『平敷屋トウバル遺跡－ホワイトビーチ地区燃料施設建設工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
－』うるま市文化財調査報告書第22集 うるま市教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)－』沖縄県立埋蔵文化財セン
ター調査報告書第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター2011『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)－』沖縄県立埋蔵文化財セ
ンター調査報告書第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター2011『鏡水箕隅原A遺跡－那覇西道路建設に伴う発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター
調査報告書第57集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター2010『首里城跡－御原北地区発掘調査報告書(I)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第
54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター2007『渡地村跡－臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財セン
ター調査報告書第46集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター2006『西長浜原遺跡－範囲確認調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第39集 沖
縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター2006『新城下原第二遺跡－キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告書－』沖縄県立埋
蔵文化財センター調査報告書第35集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県教育委員会1999『喜友名貝塚・喜友名グスク－宜野湾北中城線(伊佐～普天間)道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書
(I)－』沖縄県文化財調査報告書第134集 沖縄県教育委員会
- 沖縄市教育委員会1997『室川貝塚－沖縄市総合庁舎建設に伴う崖下地区記録保存発掘調査の報告書－』沖縄市文化財調査報告書
第20集 沖縄市教育委員会
- 宜野湾市教育委員会2011『普天間フィール－丘陵古墓群－平成22年度 キャンプ瑞慶覧内米海軍病院移設予定地区発掘調査報告
書－』宜野湾市文化財調査報告書第48集 宜野湾市教育委員会
- 宜野湾市教育委員会2006『基地内埋蔵文化財調査報告書II 基地内遺跡ほか発掘調査事業－普天間飛行場基地内－野嵩タマタ原
遺跡範囲確認調査・上原同原遺跡範囲確認調査・遺跡発掘事前総合調査』宜野湾市文化財調査報告書第38集 宜野湾市教育委
員会
- 宜野湾市教育委員会2012『ぎのわんの地名－内陸部編－』市民民俗芸能調査報告書 宜野湾市教育委員会
- 読谷村教育委員会2003『ウガンヒラー北方遺跡』読谷村教育委員会
- うるま市教育委員会2012『楚南村跡ほか－嘉手納地区(18～23)運動施設移設工事に係る文化財発掘調査－』うるま市教育委員会
- 北谷町教育委員会2012『小堀原遺跡－桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業(平成17～20年度)－』北谷町文化財調査
報告書第34集 北谷町教育委員会
- 上江洲均1973『沖縄の民具』考古民俗叢書12 慶友社
- 沖縄タイムス社1983『沖縄大百科事典 上巻』
- 九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』九州近世陶磁学会
- 早坂優子2000『日本・中国の文様事典』視覚デザイン研究所編



(宜野湾市教育委員会文化課提供)

図版107 昭和20年撮影航空写真調査箇所重ね図

第44表 遺物出土状況a

種 類	出土地	I 地 区														道 1	合 計
		縄 文 遺 構	グ ス ク	包 含 層 ・ Ⅲ 層	区 画 1	区 画 2	区 画 3	区 画 4	区 画 5	区 画 6	区 画 7	区 画 8	区 画 9	包 含 層 ・ Ⅱ 層			
中国産	青磁			1	1	1			1	1		1	4		10		
	白磁			2	7	7	6	19	1	2	4	1	21	2	72		
	染付			2	5	15	4	60	5	14	10	7	6	74	3	205	
	青磁染付							2							2		
	色絵				1			1		1	1	1		4	9		
	瑠璃釉					2	1	2						1	1	7	
	褐釉磁器							1						5	6		
	褐釉染付														0		
	紫砂							1							1		
褐釉陶器					1		3		1					5			
タイ産褐釉陶器				1										1			
本土産	青磁											1		1	2		
	白磁														0		
	染付				2	4		7	2	3	4	2	2	14	40		
	色絵				1										1		
	陶器				1	10	3	16	2		1	1	1	6	41		
	近代陶器				3	21	2	17			2	1		26	4	76	
	磁器														0		
	近現代磁器				64	320	123	964	109	80	99	39	45	788	78	2709	
沖縄産施釉陶器				253	317	77	1354	67	242	263	151	182	1472	116	4494		
沖縄産無釉陶器				141	306	94	2004	78	277	232	108	67	1567	119	4993		
カムイヤキ			6	2	3		9				1	1	14		36		
陶質土器				37	64	3	159	3	46	49	54	25	185	7	632		
瓦質土器							3						1		4		
土器	194	4	114		17		5	2	1	1	2		18		358		
産地不明			6	7	10	2	38	4	11	4	4	3	19	5	113		
石器	2		4		2	2	5	1	1		1	1	1		20		
石製品	2		11	3	5	3	24	1	3	7		2	15	2	78		
石製品?	4					1	1		1						7		
土製品							1								1		
骨製品							1								1		
木製品						1	1								2		
貝製品													1		1		
円盤状製品				9	5	5	28	2	5	4	2	3	13	1	77		
煙管					1		6	1	1	3	1		5	1	19		
銭貨					7	4	3	1		1	1		24		41		
青銅製品				1	1		7	2	4	2	1	2	3	1	24		
鉄製品				3	99	5	35		7	16	4		8	3	180		
明朝系瓦				335	1449	130	397	62	113	89	118	171	1436	30	4330		
不明瓦															0		
煉瓦				4	5	1	3			2			3		18		
位牌										1					1		
ガラス製品				5	45	15	55	10	5	10	11		13	3	172		
プラスチック製品					1		4	1	1				1		8		
パイプ								1							1		
軍票							1								1		
川原石?							1								1		
石材			3	1	8	1	15		5	2	1	1	19	1	57		
巻貝			3	17	17	1	35	4	233	10	4	5	237	3	569		
二枚貝			11	17	24	5	50	3	8	2	4	2	31	3	160		
脊椎動物遺体			4	27	1130	5	40	3	21	10	184	2	113	4	1543		
人骨					17								1		18		
合 計	202	4	167	948	3914	494	5378	365	1087	830	705	522	6143	388	21147		

第44表 遺物出土状況b

種 類	出土地	Ⅱ 地 区														表土・攪乱	Ⅰ・Ⅱ地区 合計 (表土・攪乱を 除く)	
		縄 文 遺 構	グ ス ク	包 含 層 ・ Ⅲ 層	区 画 10	区 画 11	区 画 12	区 画 13	区 画 14	区 画 15	区 画 16	区 画 17	包 含 層 ・ Ⅱ 層	道 1	道 2			合 計
中国産	青磁			1	1	1						5		1	9	12	19	
	白磁			4	11	3		3		1		2	22	1	6	53	24	125
	染付			2	12	16		12	1	9	5	5	76	12	16	166	181	371
	青磁染付															0	1	2
	色絵					1		3		1	1	2	11	2		21	22	30
	瑠璃釉			1		1		1		1						4	0	11
	褐釉磁器				1											1	1	7
	褐釉染付								1							1	0	1
	紫砂												1			1	0	2
褐釉陶器			1		1				1	1		3		4	11	28	16	
タイ産褐釉陶器															0	2	1	
本土産	青磁					1									1	3	3	
	白磁														0	1	0	
	染付				2	2		7		2		1	23	2	3	42	61	82
	色絵											1				1	1	2
	陶器					1				1			11	1		14	36	55
	近代陶器				3	10		3	1	2	1	2	12	2	1	37	107	113
	磁器												1			1	0	1
近現代磁器				101	150		59	5	44	5	28	520	35	65	1012	2993	3721	
沖縄産施釉陶器				208	176		158	21	132	113	208	903	294	152	2365	3280	6859	
沖縄産無釉陶器				217	596		106	10	83	58	107	591	377	154	2299	5045	7292	
カムイヤキ			2		2		2		1	1		16		10	34	19	70	
陶質土器				22	16		6		24	9	6	38	146	8	275	392	907	
瓦質土器										1			2		3	4	7	
土器	440	1	224	1	1	3	33		10	1	1	10	1	6	732	57	1090	
産地不明			1	9	12		2	2	5	1	4	39	10	21	106	66	219	
石器	1		2		1		1		1			2	6	2	2	18	7	38
石製品	1				4	1	1					4	5	4	1	21	33	99
石製品?															0		7	
土製品				1	1										2	2	3	
骨製品															0	1	1	
木製品				2	4				7			8			21	3	23	
貝製品															0	1	1	
円盤状製品				1	6		1		8	3	3	18	13	5	58	95	135	
煙管				1	2		1			1		5		1	11	14	30	
銭貨				1	2		2				1	3			9	31	50	
青銅製品				1			5		5	1	1	1		3	17	13	41	
鉄製品				6	9		6		8		1	5	2	2	39	71	219	
明朝系瓦				131	373		2867	4	29	3	42	929	82	210	4670	4164	9000	
不明瓦													1		1		1	
煉瓦				8								3			11	29	29	
位牌															0		1	
ガラス製品				2	3		1		2		1	12	4	7	32	94	204	
プラスチック製品														1	1	6	9	
パイプ															0		1	
軍票															0		1	
川原石?															0		1	
石材			14	1	2		2		1	2	1	6		3	32	65	89	
巻貝				9	4		20		3	1	5	22	58	9	131	399	700	
二枚貝				5	2		5		3		4	26	10	10	65	158	225	
脊椎動物遺体			2	10	153		43		92		26	69	8	2	405	541	1948	
人骨												1	1		2		20	
合 計	442	1	254	767	1556	4	3350	45	476	208	457	3402	1070	703	12735	18063	33882	

報告書抄録

ふりがな	きゃんぷずけらんないびょういんちくにかかるぶんかざいはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書 1							
副書名	普天間古集落遺跡							
巻次	—							
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第74集							
編著者名	知念隆博、金城貴子、具志堅清大							
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 TEL 098-835-8752							
発行年月日	平成27(2015)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° / ' / ''	° / ' / ''			
ふてんま こしゅうらく いせき 普天間古集落遺跡	おきなわけん ぎのわんし 沖縄県宜野湾 あざ ふてんま 市字普天間	472051	—	26° 17' 37"	127° 46' 26"	2008.07.22～ 2009.03.31	12,500m ²	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
普天間古集落遺跡	集落	縄文時代		土坑		土器、石器		
		グスク時代		掘立柱建物、土坑		土器、カムイヤキ、白磁		
		近世～近代		溝、石組遺構、道、井戸		中国産陶磁器、沖縄産無釉陶器、沖縄産施釉陶器、本土産陶磁器、石製品		
要約	米軍の病院建設に伴う記録保存調査である。調査の結果、縄文時代、グスク時代及び近世～近代の3時期の遺構、遺物を確認した。縄文時代の遺構は堅穴状の遺構や深く掘り込まれた土坑がある。グスク時代は掘立柱建物を確認した。近世～近代の遺構は最も多く、溝で区画された中に井戸、石組遺構などが配置され、屋敷跡として確認できた。							




沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第74集

キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書1

— 普天間古集落遺跡 —

発行日 平成 27 (2015) 年3月 31 日
発 行 沖縄県立埋蔵文化財センター
編 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7
TEL 098 (835) 8751・8752

印 刷 株式会社近代美術
〒901-1111 沖縄県南風原町字兼城 206
TEL 098 (889) 4113



© 沖縄県立埋蔵文化財センター 2015 Printed in Japan
許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる

